







宇津保物語

下

昭和三年八月十日印刷  
昭和三年八月十三日發行

有朋堂文庫  
字津保物語下卷  
(非賣品)

編輯者

塚本哲三

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地

印刷者

三浦捷一

東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷所

有朋堂印刷所

東京市神田區錦町三丁目九番地

發行所

有朋堂書店

東京市神田區錦町一丁目十九番地

不許複製

宇津保物語 下 目錄

藏	開	(上)	.....	一
藏	開	(中)	.....	二二
藏	開	(下)	.....	一七五
國	讓	(上)	.....	二五一
國	讓	(中)	.....	三三五
國	讓	(下)	.....	四四五
樓の上		(上)	.....	五九三
樓の上		(下)	.....	六七九

目  
錄

# 宇津保物語

## 藏開(上)

● 仲忠、三條京極の舊宅を修理す。寶成の奇特。仲忠、二條大宮の院を賜はる。

(語話)

(一) 仲忠

(二) 檢非違使の別當になれば華麗な服装をする譯にゆかぬとてそれは兼ねずの意歟、但「田鶴村島」には檢非違使をかねたる事見えたり

(考異)

(二) 衛門督、左衛門督

### 梗

### 概

● 仲忠、三條京極の舊宅を修理す。寶成の奇特。仲忠、二條大宮の院を賜はる。● 女一宮懐胎。仁壽殿女御退出。産屋の準備。● 女一宮、大宮を産む。仲忠母子琴を彈く。産湯。● 産養、あて宮より女一宮に消息。七夜、盛宴。● 贈物を方々に頒つ。兼雅夫婦の物語。● 九日の産養。方々よりの贈物。管絃。● 産屋の事に集りし人々退散。贈物。産屋の物を帝に奉る。内侍のすけ、仲忠夫婦の前にて當代の男女を評す。● 正頼參内、産養の有様を奏す。● 祐澄、あて宮を訪ふ。産養の噂。● 祐澄父母に對面。仲忠の追薦。● 大宮五十日の産養。彈正宮、大宮と物語。仲忠夫婦の物語。正頼夫婦の物語。● 正頼大將を辭す。● 仲忠兼右大將に任ぜらる。參内。女官等の評判。俊蔭の家集を進覽すべき勅を受く。● 仲忠東宮に參る。東宮、あて宮と仲忠の噂。● 近衛府の屬僚の祝宴。

藤中納言は、衛門督なれど、装束清らにせずとて、非違の別當はかけず、さてあり經給ふほどに、少かりし世のことなれど、京極など覺えければ、昔より親の傳



(語譯)

(一)この邸内のものとも見えず

(三)銅線なるべし

(四)俊隆

(五)伊が家は

(考異)

(二)うち寄りてしてナ

(六)一枚の書も見えず一枚もよみ見えず

はり住み給ひける所にこそありけれ、わが親の御時に無くなりたるを、我つくらせて、母北の方に奉らむと思して、霜月ばかりに、睦まじき人すこし御供にておはして見給へば、この程は野中のやうにて、人の家も見えず。さる所に、昔の寢殿一つ、めぐりはあらはにて、塗籠のかぎり見ゆ。又西北の隅に大きにいかめしき藏あり。中納言、御前したる人の馬に乗りて、めぐりて見給へば、この藏は、この地の程にも見えず。供なる人に、「この地の内か。見よ」と宣ふ。めぐりて見て、供人「此の内なり」と申す。近く寄りて見給へば、藏のめぐりに、人の屍數知らずあり。恐ろしと見つよ、なほうち寄りて見給へば、世になくいかめしき錠かけたり。その錠の上をば、かねを捻りかけて封したり。その封の結び目に、故治部卿の主の御名、文字彫りつけたり。中納言見給ひて、驚きて、これは文庫ならむ。昔累代の博士の家なりけるを、一枚の書も見えず、その道ならぬ琴などに、世の中にも散り、此處にも残りたるものを、これ開けさせむ、と思すほど

(四) 役差をいふ

(六) 俊藤が娘に琴を教へし時の事

(考異)

(一) はとりほど

(二) 斯くは「は」ナシ

(三) 御隨身の「の」ナシ

(五) え待ちつけ—え待ち得

(七) 病なくなり「病」ナシ

(八) ものもものは

に、河原のほとりより、年九十ばかりにて、雪を戴きたるやうなる嫗翁、這ひに這ひ来て、老人「まづ此處去らせ給へく」と泣く。「何ぞ斯くは申す」とて御隨身の間へば、老人「なほまづ此處去らせ給へ。多くの人取り殺しつる藏なり。まづ御覽ぜよ、こよらの人の屍を。去らせ給ひなむ時、ある様は申さむ」と言へば、怪しがりて、うち去りて立ち給ひたり。さて、これらが申すやう、老人「此の村は、いみじく榮えて侍りし所なり。今年二十年あまり、三十年にはまだ足らぬ程になむ、斯く減びて侍る。その故は、昔、一人子を唐土にわたし給へりし人の、御殿になむありし。その子をお待ちつけ給はで亡せ給ひて後に、その子歸りいたしましたりし。さてこの殿を、いと清らに造りて、住み給ひし程に、御女一人なむもち給へりし。その女の小さいまますがりし時より、世に聞えぬ音聲樂の聲なむ絶えざりし。その音聲樂を聴く人は、みな肝心榮えて、病あるものは病なくなり、老いたるものも若くなりしかば、京の中の人、めぐりて承りし。その女、嫁時になり給ひし

〔語釋〕

(七)此邊に人の住まぬ様になりしは如何なる故ぞ

〔考異〕

(一)世にありとも一ナシ

(二)見え侍りて一見え侍らて

(三)所に百歳に一所になむ百歳に

(四)百歳一百年

(五)姿顔一姿の

(六)悲しきに一悲しさに

かば、御門を閉して、人通はさでありしに、天皇親王、宮殿ばらの、御よばひの御使は、明けたてば立ちめぐりてあれど、言もえ告げでぞ侍りし。然ありし程に母かくれ給ひ、其の後父かくれ給ひにしかば、かの御女は世にありとも聞え給はずなりにき。然りしかば、この殿は、河原人里人入りみだりて、毀ちあてて、一二年に斯くなり侍りにき。屋どもは萬の者ども取りしが、事も無かめりしに、この藏ばかりは「物ども侍らむ」とてまかり寄る者はやがて倒れて、多くの人死に侍りぬ。夜は、人にも見え侍りて、馬に乗りて來つよ、弓弦打をしつよ、夜めぐりする様になむ侍る。かく恐ろしき所に、百歳になり侍るまでこの嬭翁の見奉り侍るに、わが國に見え給はぬ姿顔おはする、玉の男の見え給へるは、いみじう悲しきに、疾く告げ申さむとて、惑ひまうで來つれど、えまうで來あへず、惑ひ侍るなり」と申す。

中納言、仲思いとよく申したり。このめぐりに住ますなりにけむは、いかである

(七)



〔語釋〕

(一)「まつりごと」とは「まがごと」の誤歟

(二)前の如く開けんと試みる者あるかと

(四)屍體

(八)仲忠

〔考異〕

(三)如する―如くする

(五)四五日―四日五日

(六)ありて―あれば

(七)被し―しナシ

ぞ」と問はせ給へば、老人「この藏を開けむく」とし侍りつよ、「人のあしくするを、我はなど開けざらむ」と、かつ倒れ伏せるを見つよ、年月を經し侍りし程に、みな死に侍りにき。然せし人の家には、時のまつりごとおこりつよ、にはかにほろび給ひにき」と申せば、仲忠「いと恐ろしきことかな。又開くる人やあると見侍れ」とて御衣一襲ぬぎ給ひて、一つづつ賜ひつ。仲忠「この地のうちに見ゆる屋のわたりに侍りて、この藏へ、また然の如するやあると見侍れ。さてその藏のめぐりにうたてあるもの、野邊に拂ひ棄てさせてさふらへ」とてかへり給ひぬれば、(四) 嫗翁、老の世に、見知らぬ、芳しくうるはしき綾、かいねりの御衣どもを得て、怖惑ふこと限なし。すなはち、物詣したる人見付けて、價も限らず買ひ取りつ。かくて其の價のものを、己が孫のあたりの者にくれて、藏のめぐりを拂ひ淨めさせてさふらへば、(五) 四五日ばかりありて殿の家司來て、(六) 幄うつ。暫しあれば、大徳たち、(七) 陰陽師など來て、(八) 祓し讀經するほどに、中納言、御前いと多くて、藏あけ



(語釋)

(一)陰陽師などに祭文をよましむる也

(二)仲忠が齋舎の内に宿する也

(六)「あせしは」あせむるのこもせ録

(考異)

(三)先祖—先代

(四)開くべき—わるべき

(五)と見む—ナレ

さすべき人などひき率ておはして、事の由申させ、御誦經をせさせ給ひて、鍵な  
ければ、開くべきたばかりをしつよ、<sup>(二)</sup>藏を開けさせ給ふに、更に開かず。其處に、  
二三日多くの人をひき率て、夜は車にて<sup>(三)</sup>幄のうちに居給ひつよ、開けさせ給ふ  
に、更に開くべうもあらず。片手を脱き折りなど、<sup>(二)</sup>多くの人し煩ふ。

三日といふ晝つかた、御装束などし給ひて、心のうちに申し給ふやう、仲忠承

れば、この藏先祖の御領なりけり。御封を見れば、御名あり。この世に、仲忠を

はなちては、御後なし。母侍れど、これ女なり。この藏、先祖の御靈開かせ給へ

と禱り給ふ。されど開かず。人の申す様、「天下に如何にいふとも、この錠は開く

べきにもあらず。壁を毀ちて開け侍らむ」と申せば、仲忠「如何なれば得開けぬぞ

と見む。怪しきわざかな」とうち笑ひて、藏にのほりて見給へば、いといかめし

き錠なり。引きくつろがして見給へば、開きぬ。これは、けに先祖の御靈の我を

待ち給ふなりけり、と思して、人を召して開けさせて見給へば、内に今一重あせ

(六)

(語釋)

(四) 俊藤女

(七) 俊藤

(考異)

(一) 机どもに一机にふさに

(二) 積み一つとみ

(三) 残しおき一さしおき

(五) 御文一御ナレ

(六) 子うむ一たらむ

して錠あり。その戸には、「文殿」と印さしたり。然ればよと思して、また錠開け給へば、たと開きに開きぬ。見給へば、書どもうるはしき帙篋どもに包みて、唐組の紐して結び、机どもに積みてあり。その中に、沈の長櫃の辛櫃十ばかり重ね置きたり。奥の方に、よき程の柱ばかりにて赤く圓きもの、積み置きたり。たゞ口もとに、目録を書きたる書を取り給ひて、ありつる様に錠さして、多くの殿の人残しおきて歸り給ひぬ。

(三)

三條におはして、北の方に、ありつるやう申し給ひて、この御文の目録を見給へば、いとみじくあり難き寶物多かり。書どもは更にも言はず、唐土にだに、人の見知らざりける、みな書きわたしたり。醫師書、陰陽師書、人相する書、孕み子うむ人のこと言ひたる、いとかしこくて多かり。母北の方、俊藤女、あなゆよしや。昔人は、ことさら己をば惑はさむとこそ思しけれ」中納言、仲忠「いと賢くものし給ひける人なりければ、思す様こそありけめ。これらを其處に持ち給ひてば、如何にかはせ

〔語釋〕

(一)「たらしは」對なるべし

(四) 仲思の妻

(七) 天皇が御讓位後の御住居として定められたる御殿

(八) 後院にとて造れる家をいふ

(一〇) 倭藤

〔考異〕

(一)「さるべきに」さしつべき

(三)「一ツーナシ

(五)「なむーナシ

(大)要ある一用ある

(九)この家―この家は

させ給はまし。今までは在りなましやは」など宣ひて、すなはち國々の受領など

のさるべきにたい一つづつ預け、しつべき人々にみな宣ひ預けつよつくらせ給ふ。

まづ築土、二三百人の夫どもして、その年のうちに築きつ。藏の辛櫃一つに香ありといへるを、取り出でさせ給ひて、母北の方にも一の宮にも奉り給へば、この

御族の香どもは、世の常ならずなむ。書どもも、要あるは取り出でて見給ふ。この

殿造れば、そのめぐりに、「かく世にさかえ給ふ君住み給ひし」とて、皆家造り

て來りぬ。かの出で來りし嫗翁は、政所に召して、布、衣などいと多く賜ふ。

〔畫詞〕 ことは京極殿。藏あけたる所。

かゝる事を、内裏きこしめして、後院にとて年頃造らせ給ふ、大宮の大路よりは

東、二條大路よりは北に、ひろく面白き院あり、それを中納言召して賜ふとて宣

ふ、朱雀「この家、かく廣き所なるを、まだ私の家なども無かなり。これを文所

にして、かの始祖の、ことに隠されたらむ手など習はれむに、よかんべかなる。

藏

(語釋)

(一) 女一宮

(四) 女一宮に與へむ

(八) 産經の記せる所に隨ひて

(九) 女一の傍を離れず

●女一宮懐胎、仁壽殿女御退出、産所の準備

(考異)

(二) 人近く「人」ナシ

(三) あへなむ「あいなし

(五) 今「ナシ

(六) 然りぬべき「さるべき

(七) 思はして「おぼして

かの御子ともろともに、琴など弾きつよきかせ給へ。人近く聞かざらむはあへなむ」とて賜ふ。(二)「その南にこれよりは小き所あり。それは一の御子に、今ものせむ」と宣ひて賜へば、中納言舞踏して賜はり給ひて、まかで給ひぬ。(四)帝女御の君に聞え給ふ、朱雀「今、女御子たちは、然りぬべき所つくらせて、相次ぎつよものせむ」など聞え給ふ。(五)(六)

かくてかへる年の正月ばかりより、一の宮孕み給ひぬ。中納言、かの藏なる、産經などいふ書ども取り出でて、トひ給ひて、女御子にてもこそあれと思ほして、産るゝ子、かたちよく、心よくなるといへるものをば参り、然らぬものも、それに随ひてし給ふ。参り物は、刀俎をさへ御前にて、手づからといふばかりにて、我なほ添ひ賄ひて参り給ふ。かくてその年は、立ち去りもし給はず、かつは文どもを見つよ、夜晝學問をし給ふ。(九)

かよる程に、子うみ給ふべき期近くなりぬれば、女御の君、上に聞え給ふ、仁壽殿「一

(一) 語譯  
(二) 産婦をば

(三) 仲思

(四) 女一宮

(五) 仲忠と

(七) 朱雀の第二女

(九) 仁壽殿の生家なる正頼の家は

(一〇) あやかかるべき人として其方も萬更でもあ  
るまじ

(考異)

(一) 侍りなむ一侍らむ

(六) 長くしナシ

(八) 上―君

の宮、御子産み給ふべきほど近くなりぬるを、まかで侍りなむ」上、朱雀「何時ばかりにか」女御の君、仁壽殿「十月ばかりの程になむ」上、朱雀「然るべき事にこそあなれ。さる人をば、かねてより勞りなどこそすれ。如何ならむ」女御、仁壽殿「何か(三)かの朝臣、まかり歩きもせで、この頃は侍るなるを、誰もくよに疎には」上、朱雀「この御子を久しく見ぬかな。如何生ひなりにたらむ。かの人と著き並び(四)たらむには、世に似けなうは見えざりしを」御いらへ、仁壽殿「人はいかど見奉るらむ。まことなるにや。御髪も、御覽せしよりは長く、うちぎに多くあまり侍る。大方も見るかひなくは物し給はず」上、朱雀「さて二の御子は」女御、朱雀「上に似たまひて、それもことに劣り給はず、ふくらかに氣近きこと添ひてなむ」上、朱雀「なほ所からにや。女子生し立てらるゝ所なれば、この御子たちも、外には似ずかし。さらば平かにてを。思ふ様にて、御子をあまた平かにて持給へる肖物は、其處にも怪しうはあらじかし」と宣へばまかで給ひぬ。(一〇)



(語釋)

(一) 仲忠

(二) 女一を

(五) 「えうし」にて璧きをかちたる如くの意なるべし「やうし」とかける本もあり

(八) 俊隆女

(九) 「は」衍なるべし

(考異)

(三) 給ひて一給ふに

① 女一宮大宮を産む、仲忠母子等を産く、産湯

(四) うしろめたがりうしろめたげに

(六) 如して一如くて

(七) 奉りつ一奉る

かくて中納言殿の出で給ひたる間に、女御の君中の大殿にわたり給ひて見奉り

給ひて、仁壽殿いたくぞ面痩せ給ひにける。上の然ばかりうしろめたがり聞え給ふ

ものを」とて見奉り給ふに、おもしろく盛なる櫻の朝露に濡れあえたる色あひ

にて、御髪はようしかけたる如して隙なくゆりかよりて、玉ひかる様に見え給ふ。

御衣は、赤らかなる唐綾のうちきの御衣、一かさね奉りて、御脇息におしかよ

りておはす。斯くて産屋の設、白き綾、御調度ども、銀にしかへして、殿にま

うけ給ふ。

二月ばかりかねて、うまれ給はむ日まで、不斷の修法萬の神佛にいのり申させ給

ふほどに、十月になりて、中の十日ばかりに、宮氣色ありて惱み給ふ。御座所、

東宮の宮たちの産れ給ひし所を、あるべき様にしつらはれて、わたし奉りつ。

内侍のかんのおとど、御車五つばかりして参り給へり。中納言はおろし奉りて、

宮のおはします御帳の内へ入れ奉り給ふ。大宮もわたり給へり。それは御局し

(詔釋)

(一) 俊隆女と

(二) 仁壽殿と俊隆女と兩人にて

(三) 兼雅

(四) 正頼

(五) 仲忠

(六) 巨勢氏曰、「女御の君居隠し給へば歟、仁壽殿が女一宮を掩ひかくすなるべし

(九) 「に宮」は「宮に」なるべし

(考異)

(七) に居隠れーはひかくれ

(八) 仲忠ー仲忠は

て別におはします。女御の君は、仁壽殿、何か。相撲の節の夜、いと睦しくなりにしかば」とて同じ御帳の内におはしまして、たゞ二所にかよりもて仕うまつり給ふ。ことに痛くあらねど、なほ心もとなく惱み給ふ。右大將殿も参り給ひておはします。あるじのおとど君たちは、簀子に弓引きつよさふらひ給ふ。御格子の内の廂には、宮の御はらから、男宮たちおはします。御帳の前に、弓引きつよ中納言さふらひ給ふ。内裏より御使、ゆきかへりあり。藤壺よりも御使あり。殿のうち方の上達部は、入らずもあらむと思して、町異なれば、中門を鎖しておはしますふ。

かよる程に、寅の時ばかりに生れ給うて、聲高に泣き給ふ。中納言驚きて、御帳のかたびらをかき揚げて、仲忠「何ぞやく」と聞え給へば、かんのおとど、俊隆女あなさがなや。現なり」とて女御の君に居隠れ給へば、仲忠「今夜は目も見え侍らず」といふものから、女御の君に宮かより奉りて、さわぎ給ふを見れば、白き綾

(語釋)

(一) 髪(かみ)の毛(け)を耳(みみ)にはさむ也(なり)かひなくしき機(はた)也(なり)

(二) 後(のち)産(う)む

(三) 御(ご)時(とき)よく即(すなは)ち機(はた)會(あ)はる意(い)味(あじ)なきとよきよくとかける本(もと)もあり

(四) 仲(な)思(おも)が

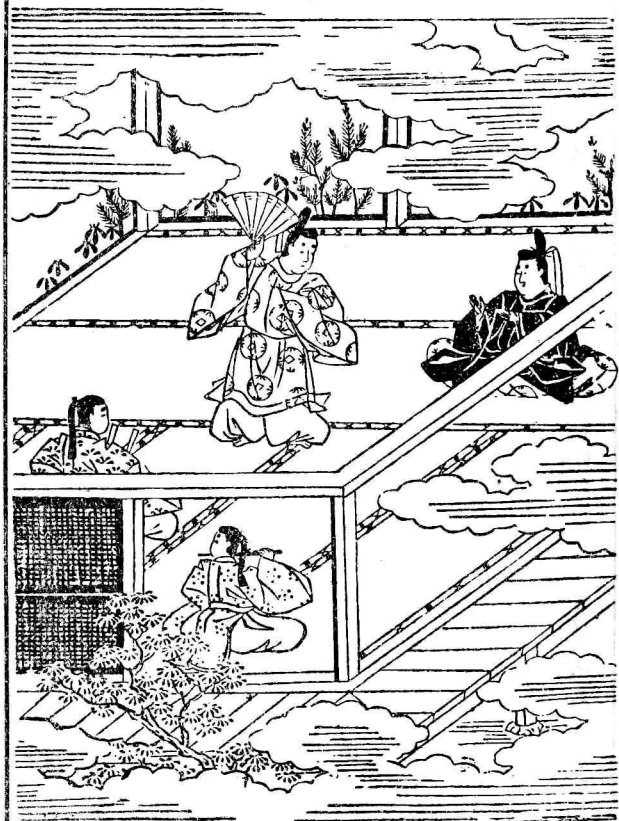
(五) 「老(ら)鶴(つる)」と傍(たづ)書(か)せる本(もと)あり、如何(いか)に一本(いっぴん)かひなく

の御衣(ごえ)を奉(たてまつ)りて、耳(みみ)はさみをして、惑(まど)ひおはす。いと宿徳(しゆくとく)に、ものくしきものから、氣(け)高(たか)くこめきて、御髮(ごだて)ゆりかけたり。わが親(おや)も、いづれとなくめでたし。同じ白(しろ)き御衣(ごえ)著(き)給(たま)へり。中納言(ちゆうなごん)、なほ物はた籠(こも)れりける處(ところ)かなと見(み)給(たま)ふに、後(のち)のものもいと平(たひら)かになりぬ。中納言(ちゆうなごん)、仲思(なほおも)何ぞ」と問(ま)ひ給(たま)へば、かんのおとど、  
 藤女(ふじのむすめ)「夜目(よめ)にも著(しる)くぞ」と聞(き)え給(たま)へば中納言(ちゆうなごん)、萬歳樂(まんざいらく)をれかへりく舞(ま)ひ給(たま)ふ。三(さん)の親王(みこ)いたく笑(わら)ひ給(たま)ひて、親王(みこ)たちその樂(がく)を高麗笛(こまがらふエ)に吹(ふ)き給(たま)ふ。主(あるじ)のおとど、  
 正頼(ただたか)「など斯(か)くは」と聞(き)え給(たま)へば、三(さん)の親王(みこ)、忠康(ちゆうかう)中納言(ちゆうなごん)のこめ舞(ま)ひ給(たま)ふなめり」  
 右大將(うだいじやう)、兼雅(かねみや)「たど今のすきは、あぢきなくぞ侍(はべ)る」主(あるじ)のおとど、御(ご)ときよくうち笑(わら)ひ給(たま)へば一度(いっぴ)にほよと笑(わら)ふ。いと心地(こころち)よけなり。主(あるじ)のおとど參(まゐ)り給(たま)へば、笑(わら)ひ  
 てつい居(ゐ)ぬ。おとど、正頼(ただたか)「萬歳樂(まんざいらく)は、果(は)たしてこそ。半(なかば)にては惡(あし)からむ」と宣(のたま)へば  
 又(また)立ちて、無(な)き手(て)を出(い)だして舞(ま)ひ果(は)てつ。  
 おとど、おひづるの紋(もん)の織物(おりもの)の直衣(なほし)をかづけ給(たま)へば、かづきて舞(ま)ひ立(た)てる程(ほど)に、

(五)

藏

開(上)



(語釋)

(一) 誤あるべし

(二) 仲忠を戯に誇りていふなるべし

(四) 其赤兒を下され

(五) 仲忠が赤兒を

(六) 頸がよくすわりそうな程にて

(考異)

(三) 物いちじるき夜一くのうちしきよる一物いはしき夜に

かんのおとど、生れ給ひつる君の御臍緒切り給はむとて、俊隆女「たど人はさふらへ。人のするわざどもこそはせめ。このもの、見苦しのかたつぶりや」と宣へば、ついで、仲忠「何を召すぞ」おとど、俊隆女「下なるもの一つ」と宣へば、指貫を脱ぎ奉り給へば、「否や。今一種を」と宣へば、白きあはせのはかま一かさを脱ぎて奉りて、「あな命長や」とて御衣掛のもとに立寄りて見給へば、御たち笑ふ。仲忠も、「物いちじるき夜もや」と宣へば孫王の君、「けに、立ち走りやすくせさせ給ふめり」と聞ゆる程に、かんのおとど生れ給へる君を、いと清く拭ひて、御臍緒切りて、このはかまに押しくともて、かき抱き給ふ。中納言、御帳のもとに寄りてつい居て、仲忠「まづ賜へや」と聞え給ふ。かんのおとど、俊隆女「あなさがなや。いかでか外には」と宣へば、かたびらを引きかづきて、土居のもとにて抱き取りたれば、いと大きに、頸も居ぬべき程にて、玉光りかどやく様にて、いみじく美しけなり。いと大きなものかな、斯かればこそ、久しく惱みつるにやあらむ。



(釋釋)  
(二)琴の名

(三)いぬは此赤兎の名なれどこゝにていふは稍突然の嫌あり

(四)仲忠が入用なりといふ故

(五)兼雅が

(七)我が琴の手法を誰に傳へんかと憂ひ居たりしに後の事は知らずとにかく今此兒あれば安心なり

(八)「など」として「なるべし

(考異)

(一)斯くも一かうも一かくや

(六)持たせて一とちせて

と思ひて、懐ふせこころにさし入れつ。右のおとど、正頼ただより「いでく」とて寄りおはすれば、

仲忠ただよ「只今は更にく」とて見せ奉り給はず。おとど、正頼ただよ「今斯くも將」とて笑

ひ給ふ。中納言ちゅうなごん、仲忠ただよ「かのりうかくは、賜はりて、いぬの守にし侍らむ」かんの

おとど、うち笑ひて、俊隆女しゅんりゅう「いつしかとも將はた。さてもかやうの折せりには、いふ様かあ

る」と宣へば、仲忠ただよ「大方おほかたのことは如何侍らむ。この琴こぞの族やうある所ところ聲こゑする所ところには、

天人てんにんのかけりて聞き給ふなれば、添へむとて聞ゆるなり」かんのおとど、内侍ないしの

すけして、大將たいしやうのおとどに、俊隆女しゅんりゅう「かの己みづかが琴こぞ、此處こゝに要ませらるめり。取らせむ」

と聞え給へれば、いそぎて、三條殿さんじょうどのにわたり給ひて、持たせておはしたり。三の

宮みやとり給ひて、中納言ちゅうなごんにさし遣り給へれば、唐からの縫物ぬいものの袋ふくろに入れたり。兒ちごを懐

に入れながら、琴こぞを取出で給ひて、仲忠ただよ「年頃としころ、この手を如何いかにし侍らむと思ひ給へ

歎なみきつるを、後は知らねど」などて「はうしやう」といふ手を、花はなやかに弾ひく。

聲こゑいとほこりに賑にぎはよしきものから、又またあはれに凄すこし。萬よろづの物の音ね多く、琴きんの

〔語釋〕

(一) そりやはじまつたの意

(二) 御産がありしならん

(四) 今まで油断して居しは

(八) 仲忠

(二〇) よろ仕りませぬ

〔考異〕

(三) 所ぞかし—ものから

(五) まひろげて—まろび

(六) これかれ—たれかれ

(七) 築土のこの方—へのとの方

(九) 今曲—つ—今—つ—今—つ

調べあはせたる聲、むかひて聞くよりも、遠くひときたり。おほん方々、上達部、御

子たち、「そぞやく。事なりにたるべし。かよる事はありなむと思ふ所ぞかし。

(二)

(三)

(三)

我等がしどけなきぞかし」とて、あるは御履もはきあへ給はず、あるは御衣も著

あへ給はで、手惑ひをしつゝ走りあつまりて、御前にあたりたる東の簀子に、植

ゑたる如おはしまさふ。涼の中納言は、うち休み給へる寝耳に聞きて、驚きなが

ら、冠もうちそばめてさし入れ、指貫直衣などをひきさけて、まひろけて出で來

たり。これかれ見給ひて、いみじう笑ひ給ふ。源中納言、涼物語をだにせざんな

(六)

(五)

り。あなかまや」と手うちかきて、石だたみのもとにて、直衣指貫着てのほりぬ。

御方の御隨身どもは御門のもとに居り。こと供人は近くも寄らず、築土のこの方

に立てり。中納言、然るべき曲を音高くひくに、風いと聲あらく吹き、空の氣色

(八)

(七)

さわがしけなれば、例のもの手觸れにくきぞかし、煩はし、と思ひて弾きやみて、

かんのおとどに申し給ふ、仲忠「今曲一つ仕うまつらむとすれど、騒がしければ、得

(九)

(一〇)

〔語釋〕

(五) 女一宮

(六) 産をせぬよりも

〔考異〕

(一) ちと一ナシ

(二) いらへ一君一又ナシ

(三) 曲一つ一た一つ

(四) 思ひに沈みたるも一  
思ひあちぶれたる人も

(七) 給ひつれば一給へれ  
ば

(八) 御佩刀に一にナシ

なむ。これに御手一つあそばして、鬼にきかせ給へ」と聞え給へば、俊藤女「いとほ

したなげにぞあめる」いらへ、仲忠、仲忠が爲には、これに勝る折なむ侍るまじき」

と聞え給へば、かんのおとど御床より下り給ひて琴を取り給ひて、曲一つ弾き給

ふ。その音、更にいふ限なし。中納言の御手は、おもしろく、ゆよしきまで、雲

風のけしき色ことなるを、この御手は、病あるもの、思に沈みたるも、これを聞

けばみな忘れて、おもしろく頼もしく、齡榮ゆる心地す。かよれば宮は、御琴を

聞召しつれば、たどにおはしつるよりも爽かに、わざをしつるとも思されず、苦し

きことも無くて起き居給へり。中納言の君、仲忠、悪しかめり。なほ臥させ給ひて

聞召せ」と申し給へば、宮、「たど今は苦しうもあらず。この御琴を聞きつれば、

苦しかりつるも皆やみぬ」とて居給へり。女御君、かんのおとど、「風ひき給ひて

む」とてさわぎ、臥せ奉り給ひつ。琴は弾きはて給ひつれば、袋に入れて、宮

の御枕がみ、御佩刀に添へて置きつ。かよる程に、明けはてぬれば、御格子ども

〔語釋〕

(三) 仲忠に昇進の沙汰などもあるべき筈なれど缺官なき故行ふを得ず

(四) 勅使饗應の作法

(五) 無沙汰はせぬ積なりしを

〔考異〕

(一) し給へども一宣へども

(二) 中將の君一「の君」ナシ

(大) 程にはなさじ一程にはなたじ

みな揚げわたし、御几帳たてつゝあるに、あるじの大殿、宮の御はらからの宮たち、くづれて皆下り給へば、みな人も下りぬ。おとど、宮たち、殿の君たち、竝み立ちて拜し給ふ。中納言の君に斯くし給へども、<sup>(二)</sup>「あなかしこ」とも聞えで、なほ兒抱きて居給へり。

かよる程に、内裏より頭の中將の君して、御消息あり。

朱雀珍らしき人の、平かにあなるも、ありがたき事の様々ものせらるゝなるをなむ、<sup>(三)</sup>限なく聞召す。例あるよろこびなどもせさすべきを、たゞ今その缺など

えあらで。

などあり。穢らひたれば、<sup>(四)</sup>例の作法なし。中納言下りて拜し給ひ、御返しそうせ

させ給ひつゝ。又内裏より藏人式部丞を御使にて、右大將のかんのおとどの許に

御文賜へり。

朱雀おほつかなき程にはなさじとものせしを、心にもあらで久しくなりにける

(五)

(六)

(語釋)  
(三) 俊隆女が付添ひ居る  
事故女一宮も苦痛を忘る  
るなちんと

(考異)

(一) 覺えしかばこそ  
「こそ」ナシ

(二) なされーそされ

(四) つくましく思ひ一つ  
つましう

を、いとあはれに珍らしかりし對面に、はつかなりし物の音も忘れがたく覺え  
しかばこそ、時々もまるられよとて、公になどは。されど、よくこそせいし  
なされたためれ。こよに、いかでと思ひし事を、様々に其處にあなるを、いと  
羨ましく、そのわたりの事をも如何にと思ふに、さやうにて物せらるよなれ  
ば、惱ましきことも忘れぬらむ、と頼もしくなむ。いかで、ありきかやすく  
て疾くもがなとぞ、内裏わたりにはた參られざめれば。

と宣へり。かんのおとど見給ひて、御返し、

俊隆女かしこまりて承りぬ。此處にさふらふことは、仲忠の朝臣の、又なき事  
に思ひ給ひて侍るめりしかばなむ。何の数なるべき身には侍らねど、雜役を  
ももろともに、と思ひ給へてなむ。様々にと仰せごと侍るは、何事にかは。  
齡ぐらべするがほにや。参り侍らぬことは、かよる里住にもうひくしき心  
地し侍れば、つよましく思ひ給へられてなむ、いとかしこき仰せごとをぞ、

返すく聞えさせ侍る。

ときこえ給ふ。御使に祿なし。忌ませ給へばなるべし。

(一)産の穢を忌む也

(四)速達

(考異)

(二)なるべしなり

(三)給ふトナ

(五)なりナ

(六)生絹の白き生絹の白がさね白き

(七)若宮一若君

(八)裳一かさね一裳ひもかさねて

(九)緑の一白きあやの

ときこえ給ふ。御使に祿なし。忌ませ給へばなるべし。  
 かよる程に、御乳まるるべき時なりぬ。御薬は、父の中納言の懐にてくよめ奉  
 り給ふ。御乳付、左衛門佐殿の北の方、御几帳のもとにさふらひ給へば、女御の  
 君、かき抱きて、御衣させ奉り給ひ、襦袢につよみて御乳まるり給ふ。御乳母ど  
 も召しあつめたり。一人は民部大輔の女、いま二人は五位ばかりの人の女ども  
 なり。  
 (五) 御湯殿すべき時もなりぬれば、その儀式、みな生絹の白き綾をつかはれたり。御  
 湯殿は東宮の若宮の御迎へ湯に参り給ひし内侍のすけ、白きあやの生絹に、單襲  
 のうちき上に著て、あやの湯巻、御槽の底にも敷き、御湯はかんのおとど、白き  
 あやのうちき一かさね、同じき裳一かさね、結び込め給へり。中納言白きあやの  
 うちき一かさね緑の青指貫著て、湯ひき給ふ。殿の君たち、弓引きつよおはす。

(語釋)  
(三)かじばと

(四)二ヶ月も浴せしめたる後の児の様に奇麗也

(六)私さへ居れば仔細なし

(八)此兒は女故男子は遠慮あるべし

(考異)

(一)如して—ごとくして

(二)中納言の—中納言には

(五)おはすれ—おはすめれ

(七)ま—まさす

(九)何か—何かは

かくて女御の君かき抱きて、さし出で給へれば、かんのおとど抱きて内侍のすけにわたし給ふ。いまは、御湯あむし奉る。かんのおとど、裳の上につい居給ひて、御迎湯参り給ふ。御髪御裳に少したらぬ程にて、瑩しかけたる如して、白き御衣に隙なくゆり掛けられたり。よれたる下うち疊なはれたる、いとめでたし。御髪つき、姿、いふ限にあらず。たど今二十餘に見え給ふ。中納言の親とも見えで年二つばかりのはらからに見ゆ。すけのおもと、「こゝより、昔より君たらに仕まつりつるに、程大きに、かにといふものゆめばかり付き給はぬこそなけれ。二月あむし奉りたる様にこそおはすれ」中納言、仲忠、見たまへ離たねば、然もあらむ」すけ、すけさふらひてましかば。いと畏がりけり。親にはおはしますとも。立たせ給へや。女におはしますめれ」と聞ゆれば、仲忠、何かそは、そのわたりをもよくつくろひ給へ、と聞えむとぞや」と宣ふ。さて、御湯殿はてぬれば、女御の君、抱かまほしうおほせど、父おとど添ひ居給へれば、かんのおとどいだき給ひて、

〔語釋〕

(二) 女一宮に

(三) 此種を男の兒を又は

〔考異〕

(一) おぼえぬーおぼえ給はぬ

(四) うたてーうたても

(五) いらへもし給はずー物も宣はず

四産養、あて宮より女一宮に消息、七夜、盛衰、

御几帳きちやうさよせて入り給たまひて、宮みやの御方かたにふせ奉たてまつり給たまひつ。中納言御帳ちゅうなごんみやちやうの内うちへ入り給たまへば、かんのおとど、俊隆女しゅんりゆうめあなさがな。現あらはなるに」と宣のたまへば、仲思なほ何か。かゝる宮仕みやづかへつかうまつる人には、内外うちとせをこそゆるし給たまはぬ」とてつよみ聞きこえ給たまはねば、女御にようごの君外きみぞにるざり出いで給たまひぬ。中納言、仲思なほ「久ひさしいも寝侍ねむらひらねば、みだり心地ちいとあしう侍はべる。罪つみゆるし給たまへ」とて宮みやの御傍かたはらにうち臥ふし給たまひぬ。かんのおとど、俊隆女しゅんりゆうめ「うたて物ものおほえぬ様さまし給たまふめり。さて忍しのびてさふらひ給たまへ」とて出いで給たまひぬれば、中納言、御衾みすまひき居ゐて聞きこゆる様やう、仲思なほ「かよるものまたもがな。いと疾せきく、此度こたみは、仲忠なかつたけが様やうにてを」と聞きこゆれば、うたて言いふものかな。いと恐おそろしきわざにこそありけれ、と思おぼしていらへもし給たまはず。  
 (五) かくて皆みな、御前ごぜんごとに物参ものまゐりなどして、夜よさり御湯殿例みやゆどのれいのごとしつ。御帳みやちやうの西にしの方かたなる母屋もやに御座装みやまゐひて大宮おほみや、子持こもちの宮みやの御みはらからの女宮にようみやたちおはしまさふ。西にしの廊むらに御座装みやまゐひて、かんのおとどの御局みやつねしたるにぞ、右大將うだいしやうの君きみはやがてもの



〔考異〕

(一)十具ばかりにて碁代の錢百貫—十具ばかり碁代百貫

(二)碁—擔

(三)同じく—同じ

(四)もと—「もと」の

(五)碁—擔

(六)給ひて—つゝ

し給ふ。かんのおとどの御許には、おとな十人、わらは四人、下仕四人あり。北の方御參物は、あるじの方よりして參らせ給ふ。

かくて御産養の三日の夜は、右大將殿し給ふ。銀の衝重十二、おなじものうち

しきもの、花文繚羅かさねたる、銀の透箱六つに、御衣御襦袢うちしき人れた

り。屯食十具ばかりにて、碁代の錢百貫なむありける。籠り給へる人々、夜一夜

あそび碁打ちなどし給ふ。又四の宮の御方よりも、いとをかしうし給へり。五日

の夜、あるじの大將、同じくいかめしうし給へり。おとど御子たちも、様々にい

かめしうし給へり。碁うち物かづきなどし給ふ。

かくて六日になりぬ。女御、麝香ども、多く具し集めさせ給ひて、えび、丁子、

鐵臼に入れて搗かせ給ふ。ねりぎぬに綿入れて、袋に縫はせ給ひて、一袋づつ入

れて、間ごとに、御簾に添へてかけさせ給ひて、大いなる銀の狛犬四つに、同

じ火取するて、香のあはせ薰物たえず焼きて、御帳の隅々にするたり。廂のわた

(語釋)

(一)たきしめたれば

(二)女一宮の食ひ殘し

(三)女一が

(四)誤あるべし

りには、大いなる火取に、よき程に埋みて、よき沈、あはせ薫物、多くくべて、籠掩ひつよ、數多すゑわたしたり。御帳のかたびら、壁代などは、よき器どもに入れてしめたれば、その大殿のあたりは、餘所にもいと芳し。まして内には、更にも言はず。しるしばかりうちほのめく晝の香などは、ことにもあらず。大宮は、北の大殿にわたり給ひぬ。こよの御座所は女御の君ぞ、時々うちやすみ給ふ。大人、わらはは、みな例の装束したり。中納言は、例ものし給ふ。東の廂に儀式して、御手水ものの賄ひなどしすゑたれど、母屋の御簾より、頭もさし出で給はで、宮の御おろしをのみ參る。晝間の人なき折には、這入りつよ宮の御傍にうち休み、これかれおはすれば、御帳の外のおし居におしかよりて、居眠し給へり。夜は、弓弦はしり打ちつよ寢ず。簀子には睦ましき君たち居並み給へり。七日になりて、女御の君聞え給ふ、仁賢「夕さは、御湯殿すべし。起き給へ。御髪かき解かむ」と聞え給へば、起き給へり。白き御衣の張りたるに、あかきかう

(三)

(四)



(一)「ふざりいでて」歟

(二)はじめて産婦の髪をとくには心得あるものぞ

(三)「などとて」なるべし

(五)あて宮

(考異)

(四)給へれどー給ひつれど

(六)書きてーかきつけて

(七)すむゝゐる

(八)飛びけるーすみける

ちたる奉りて、「御床の端の方にるざり入りて、東向におはす。女御の君かんの

おとどかい分けつと梳り奉り給ふ。(二)いとおほく、美しけにて、八尺ばかりあり。

その御賄ひは、内侍のすけと御乳母と仕うまつる。「かよる時のはじめ参らする

は、する様の侍るものを」女御の君、「何か。然らずとも、心もとなからぬ御髪なれ

ば」かんのおとど、「髪は、多く長き、あまた有るべしや。筋、ありさまこそ難けれ。

これは有り難くぞ」などてかい分けつと見奉り給ふ。つやよかにめでたし。こ

とに損はれ給はず、少し青み給へれど、いとあてに氣高く、さすがに匂ひやかに

おはします。

かよる程に、藤壺よりとて、物二斗入るばかりの蓑二つ、衝重沈の折櫃十二に物

入れて、蘇枋のたかつきにするて、銀の雉子二つ、腹に龍腦籠めて、雉子の皮を

きせて、大きな松の造り枝につけて、腹にかく書きて押したり、

あて宮むらとりの鶴のこほりにすむ雉子の松の枝にぞけふは飛びける

〔語釋〕

(二)まづ第一に御祝を申上げたと思ひしに

(四)此處誤あるべし

〔考異〕

(一)な見せそと一な見せそなど

(三)様に一やうにて

(五)いともしナシ

とて御文あり。東宮の亮の君持て参り給ひて、宮の御前に参らせ給ふ。淺緑の色紙一かさねに包みて、五葉につけたり。宮あけさせ給ひて、み給ひて、うち笑ひ給ふ。中納言、仲馬なにごとにか侍らむ。見侍らばや「女一人にな見せそとあれ(二)」とて見せ給はねば、仲馬わが君は、思しへだてたるこそ」とて、手をさし入れて取りつ。見れば、かく書き給へり。

あて宮いともく、思ふやうに珍らしかりけることは、まづと思ふ給へしを、

しばしは物おほえぬ様に侍りしかば、もし如何見苦しき、恥かくさでを御覽

ぜよと思ふ給へてなむ、今までになり侍りにける。いでやく、いとち有り

難きことの、取り集め侍りけるをりしもこそあれ、近く侍らで、え承らず

なりしこそ、世になく思ひ給へらるれ。昔ながら侍らましかば、かく思ひ給

へましや、と思ふ給ふるにつけても、心憂くこそ。

もろ共に巢馴れしものを己がよよにかよれるつると餘所に聞くかな

返すくもねたくこそ。わが君、かよる事ありぬべからむ折、いと難きまろが爲に必ずく。

(語釋)

(二)女一

(三)もほるにてし歎、「え」は「え聞えず」の略

(四)誤あるべし

(考異)

(一)習はせしならせ

とかき給へり。君見給ひて、うち笑ひて、仲思、久しく見給へざりつる程に、かしこくも書き習はせ給ひにけるかな。この御返は仲忠聞えむ。まだ、御手震ひて、え書かせ給はじ。さらぬ時だに侍るものを」とて、ほよ笑みつよ見るに、あはれに昔思ひ出でられて悲しければ、ゆよしくて置きつ。さて、赤き薄様一かさねに、

仲思御文賜はるべき人は、まだ目もおどろにてえ、なほ聞えさせよとて侍れば

なむ。思ほす様にと宣はせたるは、所せき様におほされけむ。誰も恨み聞えつべしや。まこと御爲にと宣はせたるは、何事か、すよむる功德こそ侍るめれ。あぢなき御いりなりや。

おなじ巢にうつれる鶴のもろ共にたち居む世をば君のみぞ見むと聞えさせよとなむ。

とて、裏うらにひきかへして、

わたくしには、いでや、今は限かぎりといふなればなほこそ。

千歳ちとせをば今いまやとおもふ松まつなれば昔むかしもそひて忘わすられぬかな

(語釋)  
(二)「見給はまほしう」  
歟

(四)隱香歟

(考異)  
(一)こそナレ

(三)中納言—中納言は

と書かきて、同じおな一ひかさねに包つみて、おもしろき紅葉もみぢにつく。宮みや、女に「見みばや」と  
宣のたまへば、仲忠ちゆうちゆう「さぞ見給みたまへほしう侍はべらむ」とて出いださせつれば、召めし寄よせて、はた得え  
見給みたまはず。女御にようごの君きみいと清きよなる女の装束きうそくをとり出いださせ給たまひて、三みやの宮請みやさうじ奉たてまつ  
り給たまひて、仁尊にそん「これ、かゝる所ところよりは、たゞに物ものせざなり」とて、仁尊にそん「この御使つかひ  
に、ものし給たまへ」とて奉たてまつり給たまへば、持もて出いで給たまひてかづけ給たまふ。亮すけの君きみ、おり  
て拜はいして参まゐり給たまひぬ。中納言ちゆうなごん、奉たてまつれ給たまへる物ものどもを取り寄よせて見給みたまへば、喪かめに、  
練ねりたるうちあや、一ひつにはねりぎぬ、いとよき、口くちもとまで疊たみ入れ、折櫃せりびつど  
もには、一ひつには銀しろかねの鯉こひ、同じおなき鯛たひ、一ひ折櫃せりびつ、沈せんの鯉かつつくりて入れ、一ひつには、  
沈せん蘇枋すほうをよくく切りて一ひ折櫃せりびつ、あはせ薰物たきもの三さんくさ、麝香げかうのふかう、黄金こがねのつほ

(語釋)

(一)あかしら

(二)仲思の心

(四)女一

(八)一方によりてありの意歎

(考異)

(一)あかきぬすこしーあかむたいすこしーあかむひすこし

(五)同じきー「き」ナシ

(六)白き練ー白きはうれ

(七)うるはしくーうるはしき

の大きやかなるに入れて、一折櫃、海松とかき付けて、あかきぬすこし、白きぬ

を、縫目はなくて、續飯などして、海松のやうにして、一折櫃、白き物を入れた

り。今一つには、えび、丁子を、鏗突のけづりもののやうにて入れたり。委しく

見つゝ、煩はしく、御心入りて、斯くし給ひつらむ、殿には、さりけも無かりつ

るものを、など思ほす。内侍のかんのおとど見給ふ。夜さりつ方になりぬれば、

大宮に御湯殿まるる。宮も御湯殿し給ふ。

かよる程に、涼の中納言殿より御産養あり。子持の宮の御前に、銀の衝重十

に、同じき御器すゑて、敷物の打敷、いと清らなり。衝重どもの内には、みな物

あり。一つには、綾を練りて、一つには花文綴、羅、一つには色々の織物、一

つには白き綴、一つには練貫、一つにはねり繰りたるいとすどしき絲、物うる

はしく入れたり。かさ高く入れて、おもき物をすゑたれば、押されてかたにあり。

女御の君の御前には、沈の折敷、同じきたかつきにすゑて九つ。打敷、もの毎に



(語釋)  
(二) 忠雅

(四) 連澄

(七) 此處誤脱あらんか

(考異)

(一) 十具一ひとくだり

(三) さま一ノナシ

(五) 皆一ナシ

(六) 清らにして一清らにて

いと清らなり。沈の御衣箱、黄金の置口したる六つに、かづけもの、女の装十具(二)、白きうちぎ十かさね、はかま十くだり、蒔繪の御衣櫃にいれて、物五斗ばかり入るばかりの、紫檀の櫃五つに、碁代、彈碁代、かさ高く入れたり。すみ物どもうち具し給へり。又左の大殿よりもさまなく、碁代すみもの、御前の物、いと清らにし給へり。式部卿の宮、民部卿の殿よりも、さまなくしつゝ奉り給へり。かくて、中のおとどの南の廂あけわたして、御座ども敷きわたしたり。あるじのおとどの君出で給ひて、左衛門佐して、右大將、式部卿の宮の御方に申し奉り給ふ、正頼「今夜、いとさうくしく侍るべき。いとちかく畏くとも、渡りおはしましなむや。翁、此處ならば、舞ひて御覽せさせむ」と聞え給へれば、「いみじき見物侍るべかなり」とて皆おはしましぬれば、それより下はえ籠りおはせて、皆おはして並み居給へり。この御前よりの事ども、みな源中納言殿し給へり。いと清らにして参りわたり給ふ。御酒しひ、物などまるりて、中務の宮、ひとねたれ(七)

〔語釋〕

(一)「御夜戸出姿」歟、前の仲忠の琴をきかんとて惑ひ出て來りし時の事を言ふなるべし

(三)握りしめて

(四)實忠

(五)あて宮

(六)末詳

〔考異〕  
(二)みよ—みに—みこ

物はき給へり。式部卿の宮には、草鞋の片足をなむ。それを、例のやうにはあら  
 でうちひがみて兵部卿の宮、「源中納言のみよとて姿こそしどけなかりし。今宵  
 は舞の師どもには見えじ」中納言、涼如何なる折にか侍りけむ、良中將の朝臣は、  
 下のはかまを著て、皆かいわぐみて走らるめりし。それも其の道の人とて、裸  
 鶴脛にても騒がれじや」正頼「正頼が男どもは、例よりも装束うるはしくして、笏  
 とりくびりてぞ、練り出でにたりし」民部卿の宮、「あはれ、宰相の朝臣世に交  
 (三)らはましかば、如何なる猿樂をして一日かあらまし」あるじのおとど、正頼「宮に  
 さふらふ者いかに思ふらむ。正頼をぞ恨むらむかし。先つ頃、まかでむと物せし  
 をまかでさせねば、いみじう怨すらむかし」左のおとど、忠雅「けに然思すらむ。  
 母かたとひあれば、忠雅らが言ふことは、所謂うしのはしるぞかし」と宣へば、  
 (六)一度にほよと笑ふ。

斯うて、御あそびし給ふ。琵琶、式部卿の宮、箏の琴、左のおとど、中務の宮に

(語釋)

(四)木深くか

(六)仲忠に比敵すべしとの噂なりしかど

(七)「缺ず飲み給ふ」にてさくられたる盃を一つも辭せず飲むとの意歟

(考異)

(一)指貫に「に」ナシ

(二)襲ね着てーかさねて

(三)いみじくーいみじう

(五)とどめてーとめて

(八)とてーさて

(九)聞え給ふー宜ふ

(一〇)宿ー岩

(一一)松はー松の

倭琴 兵部卿の宮笙のふえ、中納言横笛、權中納言大篳篥とあはせて遊ばす。藤中

納言、仲忠「ひがみたる様なり」とて土器とりてまかでむとて、紫苑色の織物の指(二)

貫におなじ薄色の直衣、唐綾のかいねり襲ね著て出で給ふ。この頃例よりもかた

ち盛なり。下がさねの尻いと長くはらひ引きて、土器とりて出で給ふ。兵部卿の

宮、「あな珍らしや。いみじくもこふかく籠られたりつるかな」とて目をとどめて、

皆まもり給ふ。さらに難なき帝の御聲なり。源中納言なすらひたりと言ひしかど、

今はいとこよなし。中納言、式部卿の宮に御土器まゐり給ふ。宮、けちずのみた

ふとて、斯く聞え給ふ。

(八) (九)

式部ひめ松はいつも生ふなる宿なればかけ涼しけに見ゆるたびかな(二〇)

中納言

仲思いさやまた蔭は知られずひめ松は年へてながき色をとぞ思ふ(二二)

中務の宮

木高くてすどしき蔭にみやびとのまとるするまで生ひよ姫松

兵部卿の宮

心ゆくこよちこそすれ一葉なるまつの世々のみどひやられて

左のおとど

思雅一葉よりおひならひつと姫松は枝をばさらで千代はすぎなん

藤大納言

忠俊岩の上に今より根ざすいその松たよはうきみにありとたのまむ

右のおとど

正頼年ふればかしらの雪はつもれども小松のかけも待ち出てしがな

右大將

兼雅昔生ひの松にしならふものならばまだみどりこの頼もしきかな

民部卿

(考異)  
(一)さらでーまさで

(二)うきみにーうきみを  
ーうききそ

(三)たのまむーだに見む

〔語釋〕

〔四〕誤あるべし

〔六〕青海波の前につけて舞よ曲

〔考異〕

〔一〕見てしがー見てまし  
〔二〕來ぬらむー來つらむ

〔三〕下にー下も

〔五〕いづらそのこなむー  
いづらのこなむーいづつ  
あのこなむ

實正わかみどり二葉にみゆる姫松の嵐ふきたつ世をも見てしが  
(二)

平中納言、

正明末のよの遠くもあるかな千歳ふる松の二葉に見ゆるこよひは

源中納言、

涼ひめ松をはやしと生ほすこの宿にいく度ちよを數へ來ぬらむ  
(三)

權中納言、

仲澄みどり子のおほかる中に二葉よりよろづ世見ゆるやどのひめ松

これより下にあれど書かず。

かよる程に式部卿の宮、「事はじめとこそ言ふなれ。いづらそのこなむ」あるじの

おとど、「侍りかし」とて、輪臺を、景色ばかり立ちて舞ひ給へば、御前のつかさ

づかさのあそび人ども、男ども、樂奏しつよ、琴ども弾きたてつよ、一度にうつ物

の音にあはせて、その樂をする程に、三の宮、黒らかなるかいねり一襲はなだ

(語釋)

(三)備馬樂「吾家」の句、「わいへんはとばり帳をもかけたれば大君來ませ聖にせむ御看は何上げむ云々」

(四)三の宮が式部卿中務宮の次に著座せる也

(五)段あるべし

(考異)

(一)見たまひて一式部卿の宮

(二)の人か一ナシ

の綺の指貫、同じ直衣、蘇枋がさねの下襲奉りて、土器とりて、中務の宮に参り給ふ。御様、長そびやかに、氣高きものから、いと匂ひやかなるもてなし、いと心憎し。御年二十三。例ありとて、闕ず、三たびばかり参り給ふ。これを見たまひて右のおとど、いとめでたし、誰の人が聲にせむと思す。左のおとど、忠雅「御看に何よけむ」と、箏の琴にいとおもしろくかい弾き給ふ。式部卿の宮、われも思ほす事なれば、いとをかしと思して、うちほと笑みて見給ふ。中務の宮、御土器とりて舞ひ給へり。右のおとどに参り給ふ。御子は、をち宮たちの御座の下につき給ひぬ。かくて御土器くだる程に、右のおとど、正賴「腰かどまりたる翁をのみ、かなでさせ給ひて、たどにてやは止み給ひなむする」と宣へば、源中納言立ちて舞ひ給ふ。上下かくおもしろし。かよる程に、四の宮、あからかなる綾搔練一かさね、青鈍のさしぬき、おなじ直衣、唐綾のやなぎがさね奉りて、土器とりて、兵部卿の宮に参り給ふ。これは、いと大きやかに、ふくらかに肥え給へるが、色

〔語釋〕

(一)誤あるべし

(三)東宮の弟

(四)季明

(五)實正

(六)清正

(八)東宮の弟

〔考異〕

(一)聞召しとり聞召しつとり

(七)ものをしものしナシ

白く、ものくしくおはす。これも聞召しとり給ひて、舞し給ひつよ、源中納言に賜ふ。取り給ひて三の宮に又参り給ふ。宮はつどきて著き給ふ。これは内にぞおはする。年二十二。左のおとど、忠雅「この順の舞は、知りたらむに隨ひて、此處ならぬをもあさまじ、たゞ一手あそばさせむ」と宣へば、御太郎の大納言立ちて、萬歳樂を舞ひ給ふ。樂おもしろくす。右のおとど、正頼「萬歳樂は、人のさして心なりける。わいても、鶴の命、老も見えじ」と宣ふ。六の宮、紅の搔練のいと濃き一かさね、櫻色の同じ直衣、指貫、えび染の下がさね奉りて、土器取りて、左のおとどに参り給ふを見れば、いと小くひぢよかに、ふくらかに、愛敬づき給へり。御年二十。左のおほ殿にぞおはする。例の闕ずに参り給ひて、大納言に賜ふ。又それ更に参り給ふ。これも舞ひ給ひぬ。藤宰相、「この君も舞ひ給ふものを」とて猿樂する人にて龜舞をす。上下一度にほとと笑ふ。人の御目ども醒めて、いと興ありと思ほす。八の宮は、淺黄のなほし、指貫、いまやう色の御衣、櫻がさね

(語釋)

(一)孔雀の服疑したる舞手也下の鶴も同じ

(三)正積

(考異)

(一)舞ひ給ふし給ふ

奉りて、左のおとどに土器参り給ふを見れば、いとあてにきびはにて、何心もなき顔し給ふ。御年十七。左のおとどに、「闕す多くもな聞食しそ」とて氣色ばかりまゐり給ふ。とり給ひて、あざれ舞しつる宰相に賜ふ。賜はりて又舞ひあへる程に右大將の君、兼雅兼雅は、これならぬ手をば知らぬ」とて、鳥の舞を氣色ばかり舞ひ給ふ程に、右近の幄より孔雀をいだす。左近の幄よりは鶴を出だして、その樂を上下ゆすりてすれば、鳥もをれかへりて舞ふにはやさされて、このおとどその舞をし出で給ふほどに、女御の君の後にうまれ給ひし十の御子、四つばかりにて、御髪ふりわけにて、白く美しけに肥えて、御衣は濃き綾のうちき、あはせの袴たすきがけにて、葡萄染の綺の直衣著て、土器とりて出で給ふ。祖父おとど、兄宮たち、「誰にぞく」と問ひ給ふに、十宮「あらず」とて右大將の御座におはして奉り給へば、つゐる給ひてかき抱きて、膝にする奉り給ひて、土器を見給へば女御の君の御手にて、



(語釋)

(二)仁壽殿をいふなるべし「うち」衍歟

(三)「えたべし」なるべし

(四)誤あるべし

(五)「書きつくる御硯の」なるべし

(考異)

(一)例より一例のより

仁壽殿一夜だに久してふなるあしたづのまに／＼見ゆる千歳なになり

と例よりもめでたく書き給へり。大將いと珍らしく、今年二十年あまりといふに、

この御手を見るかな、いみじうかしこくもなりけるかな、と見給ひ、あはれに昔

思ほゆれば涙も落ちぬべけれど、かしこく見入れて、懐にさし入れ給へば、十宮「い

な。これに御酒入れてまるれとこそ、うち上は宣ひつれ」とて肌をさがし給へば、

兼雅「かく墨つきて汚けなるはつたえじ。これこそ白けれ」とて、御卓なる様器を

とりかへて、彼は隠し給へば、人々、「例ならず、など收められぬる」とさわぎ笑

ふ。若宮様器に、人々御つきいれさせ給ふ。兼雅「多しや」ときこえ給へど、十宮「い

なく」とてこぼさでまゐり給ふ。とり給ひて、宮を抱きながら、人々にはまる

り給ふ。かくて、順の和歌、行政の中將の書きつく、御硯の近きを、さらぬ様に

て、筆をとり給ひて、おほん菓物の下なる濱木綿に、かく書き給ふ。

あな珍らしや。

あな珍らしや。

(語釋)

(三)仲忠をいふ歟

(九)産婦が産を用ふるな  
る人し

(一〇)不登

(考異)

(一)萬代は一萬代に

(二)ことを一ことは

(四)とくーとて

(五)給ふ所に一給へるに

(六)一日のーつるの

(七)おもかりーおもしろ  
かり

(八)まことやーまとや

(一)たターナシ

萬代はまにくみえむあしたづも古にしことを忘れやはする

とて奉り給へば、宮入り給ひぬ。左のおとど、季明かく老學問みなせらるゝ中

に、などか衛門督の、いとまめやかにとくをさめられけむ。かうだにみだれ給ふ

所に、あふこそまだしからめ」右のおとど、正類何ぞは、一日の役いとおもかり

き。さてもぞまことや」中務の宮、「なかつかさの宮、」なかつかさのみ座のいたくだりたる。今夜は

召し上げよや」父おとど、兼雅「早まかり著け」と宣ふ。簀子に殿上人の座に居給

へり。式部卿の宮、「いまは、御簾のうちより、流の御土器賜はらばや。かの蒜く

さき御肴こそ、いと給べまほしけれ」左のおとど、忠雅「たどまさ、かねすみ物し

給ふらむ。たどさし入れ給へや」中務の宮、「おとどの宣はねども、心にもあらず」

兵部卿宮、さばかり高かりし御聲をなど思ひつよ、これかれ宣ふ。

ほのくくとあけ離るゝ程に、良中將下りて、陵王ををれかへり、無き手を舞ふ。

そこの人、驚くこと限なし。「これはまだ世に無かりつる手かな。如何にしつる

(語釋)  
(六)朝臣等唐舞しつもの  
意歟

(考異)  
(一)ぞや、やしナシ

(二)中納言かづけ物—中  
納言あなじかづけ物

(三)とく—とて

(四)人こそ—人々歟

(五)より上—以上

(七)二つを—をしナシ

ことぞや。宮あこ君の御賀の舞は、これを傳へたるにこそありけれ。何處よりい

かでならむと思ひしは」とて騒ぐ程に、殿の君だち、かづけ物とりつよ出で給へ

り。中納言、宮たち、一度に取りかづけ給ふ。そのかづけ物どもは、女の装束、

ちごの衣、襦袢添へてなり。源氏の中納言、かづけ物とく取りて、舞する中將に、

砂の上に下りてかづけ給ふ様、いとなまめきてめでたし。つかさぐの幄の人

こそ、「そこら興ありつる事よりも、これこそめでたけれ」など言ふ。かくてみな

人、三位中將より上には、白きうちき一襲、あはせのはかま一具、さらぬ四位、

五位には、白きうちき一襲、六位には單襲、しらはり、下仕には腰差上下のもい

とをかしくてあり。

上の御遊は歇みて、つかさぐのあそら、からがくしつよ孔雀、鶴を舞はせて御

覽せさす。御簾のうちにもみな立騒ぎ見給ふ。内より黄金を、柑子ばかり丸かし

て、小き銀の魚二つを出だし給へれば、式部卿の宮とりて賜ふ。孔雀は黄金の

(七)

〔語釋〕

〔三〕鵜馬樂「酒給」のはじめの句

〔四〕女一宮

〔五〕「ひとところ」は「日頃」の誤なるべし

〔六〕誤あるべし

〔考異〕

〔一〕魚を―魚ども

〔二〕例ならず酔ひ給ひて―酔ひのごと酔ひて

柑子かんじをくひ、鵜つるどもは魚いさなをくひて、舞ふこと限かぎなし。孔雀くわんぐわうに、縁ゆかりの御衣みぎ、うちき、  
 鶴つるには白しろきあやの、兒こごのおほん單ひたひた襲うわぎ一ひとくだりかづけ給ふ。かくて皆人みなびと、例れいなら  
 ず酔よひ給ひて、脚あしをさかさまに、倒たふれよろほひつよ、御方々みかた々におはしまさふ。お  
 のおの、御子ごこども、御供ごともの人、雲くものごと付つきて入り給ふ。あるじのおとどの御後みしろ  
 に、いみじく多く立たちて入り給ふ。右大將うだいしやうよろほひて入り給へば、中納言ちうなごんしどろ  
 もどろに酔よひて、西にしの御方みかたにおほん送おくして、仲思ちゆうし「酒さけをたうべてたべ酔よひて」とい  
 と面白おもしろき聲こゑにうたひて、入いりおはすれば、女御君宮おんなごみみやうかき抱いだきて御局みよこに入り給ひぬ。  
 中納言ちうなごん入りおはして、宮みやの、鳥とりの舞見まじみ給ふとて、御帳みちやうの柱はしらをおさへて立たち給へるを、  
 仲思ちゆうし「あな見苦みくるし。何なぞのやぶれ子持こもちか物ものは見る」とて引ひきする奉たてまつりて、仲思ちゆうし「ひ  
 とところは、きたない物ものをだに引ひき解とかざりつる。今いまだに」とて一ひとところところに臥ふし  
 給ひぬ。かんのおとども、大將たいしやうのたこもり給へるとぶらはむとて、御局みよこへおは  
 しぬ。宮みやの御乳母みめのと内侍ないしのすけとぞ、御装束みづかとりかづけなどしてさふらふ。



(語釋)  
(四) 忠俊歎

(考異)

(一) 内にはめのと一内にはろんのめのとども

(二) やうなりーやうに

⑤ 贈物を方々に願つ。兼  
雅夫婦の物語。

(三) 取うてー取りて

(五) のうまるーのぞま  
るーのみまる

畫詞

御帳ちやううちの内(二)には、めのと、御ごたちなどふさにさふらふ。こよは南みなみ面おもて。

皆みなながら著つき並なみ給たまへり。宮みやたち、御土器かほらけとりて出いでで給たまへり。人々ひとびと舞まひし給たまふ。

客人まらさきたち同おなじうちきの上うへに著きつゝ、御烏帽子みけぼしし給たまひて、御子みこ二ところ、左右さゆうの

大臣おな同おなじやうなり。納言なごんまでは同おなじ姿すがたにてかうぶりし給たまへり。御前ごぜんに、つかさ

づかさの幄あけはりども打うちわたし、左右近衛さうこんゑのつかさの樂所がくせどももあり。卓つくども立

てわたして、御物おものふさにまゐり、籠物こものなど多おほく置おきたり。鳥とりども舞まひす。

かくて女御にようぎの君きみ、よべこよかしこの御前まへの物ものども取とうでさせて御覽らんする中に、左

の大殿おほざの、沈せんの衝重ついがさね十二、銀しろかねの坏つぎどもは、皆みなかんのおとどの御方かたに、權大納言ごんたいなごん殿どの

の浅香せんかうの衝重ついがさね、おほん毬まりなど同おなじ數かずなるは、北きたのおとどに、源中納言げんちゆうなごんの銀しろかねの衝

重がさね、蘇枋すばうの長櫃ながびつにすゑたる内うちの物ものども皆具みなぐして、藤壺ふぢつばに奉たてまつれ給たまふ。醉ゑひたれど

よくし給たまふ。中納言ちゆうなごん聞き臥ふし給たまへり。女御にようぎの君御文書みみかき給たまふ。

仁壽にじゆ昨日きのうも聞きえむとせしを、怪あやしく醉ゑひて、のうまるめりしかば、後のちにとてな

(五)

〔語釋〕

(一)あて宮の贈物をいふ

(二)女一宮にあやかりて又とく皇子を生み給ふ様にとて之を奉ると也

(五)仁壽殿の手

〔考異〕

(三)とて一とぞ

(四)思ひ一思ふ

む。いと煩わづらはしけなりしわざを、一所ひきざこいかでし給たまひけむとなむ。さてはあえものにし給たまひて、かやうなる事ことまた疾はやくをとてなむ。見みよけならぬも、數多あまたあるは憎にくからぬものと、今宵こよひこそ見給たまへつれ。

とて奉たてまつれ給たまふ。藤壺見給たまひて、あて宮「これこそ煩わづらはしけなりけれ」とて御返かへし

あて宮きのふおも昨日思はずなりしかば、うしろめたくやとて。いでや、なほこそ聞きこえちあ

なれ。うちにも有りあがたく珍めづらしくし給たまふことの様々さまさまに侍はべりけるに、離はなれ侍はべり

て、承うけたまはるにこそ、生いけるかひなく思おもひ給たまへ歎なげかるれ。さてこれは、思おもほえ

ず月つきさかりなる心地こころちしてなむ。憎にくからずみ給たまへりけむ、何いづれなりけむ。

と白しろき薄うす様やう一いっかさねに、いとめでたく書かき給たまへり。三みやの宮みやとり給たまひて、患あはれ「よの

御手てや。その御手てをこそ、よしと、世人よびも思おもひためれど、これはたこよななめり。

かよる折をりならでは心こころと得見えみずなりにしはや。人ひとに宣のたまはすと見みましかばつらくもあ

らまし」女御にようごの君、仁壽にじゆ「かよる習ならひのあるまじきことなればにこそありけめ」宮みや、

(語釋)

(一)「ちや」歎

(二)「をぞ」は「こそ」歎

(三)聲にせんと申込まる人々の言に随ひ給へ

(四)「たち」は「まろ」の誤なるべし

(七)「人も」は「まも」歎

(考異)

(五)なりなむとすやーなりなましものを  
(六)をかしと聞きーをか  
しと打聞き

忠康「さてや、この宮の東宮におはせしをぞ、特につらくおはすれ。まろを幸なく生みて、物を思はせ給ふ」女御の君うち笑ひ給ひて、仁豐「怪しの御かごとや。心弱くなおはしそ。一所おはすればこそ、物思さるらむ。これかれ聞え給ふことを、物しておはせよや」宮、忠康「たちはかくて歇みなむとする。思ひ慰むばかりの人もえあらじや。よくせすば法師にもなりなむとすや」とて御文は取りて立ち給ひぬ。女御、仁豐「この御文や。昨日は彼方へしもとり給ひ、今日は宮の取りかしくし給へるもからしや。むつかし」とうちむつかり給ふ聲、愛敬づきたり。

右大將ちかくて、をかしと聞き給ひて、北の方に、兼雅「この宮こそ、女御に似ておはするか」いらへ、俊隆女「人も見知らねどよくおはすとのみぞ聞ゆる」おとど、兼雅「宮はたよくおはすべし。中納言いとあはれに思ひ聞えたり。見所なからむ人さ思ふべき人にあらず」北の方、俊隆女「御息所も、然ばかりおはしますめりし。帝のいみじく時めかし給ひて、此の頃も、「とく参り給ひね」とのみこそは、度々あ



- (一) (語釋) 其方を帝が如何に見給ふならん
- (二) 此れほど多く美人を集めたりし兼雅が今は其方のみ持ち居る上
- (三) 誤あるべし
- (四) 仲忠が他人に越えて昇進する事むづかしかるべしの意歎
- (五) 仲忠夫婦を
- (六) 「女はちか」なる
- (七) 「考異」
- (八) かく一人に—かくよ一人に—なかに一人に—かにかくに一人に
- (九) 九日の産養。方々よりの贈物。管絃。
- (一〇) 見給ふらめ—見給はめ
- (一一) いま—しうとかいよめれど—いまだにしちかいふを—いまだにかしちかいふせ
- (一二) ちとターナシ

る御文を見れば、あめれ」おとど、兼雅「其處をこそ如何に見給ふらむ。よき人多く持たりしもののかく一人につきにたるよ、かよる妻もたりけるものわれといひけるとこそは見給ふらめ。(三) いま—しうとかいよめれど、例の衣うち著て見え奉り給へ。中納言の面伏なり」北の方、俊隆女けに、子ながら恥かしや」おとど、兼雅「同じ時の殿上人のさながらあるにも、わがあれば、えぞ越えつべうはあらじ。その座に上達部にてありつるも、あはれ、はや十の宮して奉りつる土器も、賜ばむ」とて杖がみにうち置きて、二所臥し給へり。

かくて女御の君、乳母を召して、仁壽「日暮れにけり。おこし奉りてものまるれ」と宣へば参りて、乳母「御臺さふらひたり」と聞ゆれば中納言、仲忠「何ぞの女ばらは物まるる。花盛を待つぞよきもの」とて起き給はず。乳母「然」など聞ゆれば女御の君、仁壽「酔ひぬる人こそあやしけれ。人の怠るをだに然ばかりいふものを」など宣ふ。その日暮れぬ。

〔語釋〕

〔二〕「人の」は「日の」歟

〔三〕女一

〔四〕正頼

〔五〕權中納言忠澄

〔六〕「綱なからひを」なるべし

〔考異〕

〔一〕起き出給ひーナレ

夜もあけぬればつとめて、中納言、仲思「これ昨日か今日か」と宣へば、人々いみじう笑ふ。驚きて起き出給ひ、仲思「怪しくもありけるかな」とて物急ぎてまゐらす。かくてその日は九日なり。仲思「かねて仕うまつる人の延びぬべきに、その日ばかり、わざとにはあらで、たゞ御肴ばかりの設して、内外のこれかれの御料など設けよ。この殿にもたゞ氣色ばかり」と宣へりければ、「物宣はぬ人のかく宣ふ」とて、よくはあらねど設けたり。夜さりつ方、かんのおとどの御髪梳りて、かいねりの御衣、御こうちぎなど奉りてわたり給へり。女御の君も、さておはしましたり。宮も起きておはします。東面の廂に御座敷きて、御褥どもうち置きたり。簀子にも御座敷きたり。母屋の隅に添へて、御几帳をぞ立てわたしたりける。中納言の君、北のおとどに、「わたらせ給ひなむや」と聞え給へりければ、おとどおはしたり。宮たち例のごとおはす。殿の君たち、中納言よりはじめて、皆おはす。右のおとど三條殿に、正頼「おはしまさせむや。今はかよる御ならひを」とて君

〔考異〕  
（一）折敷六ツツフー折敷  
御前ごととに六ツツフ

だちして、かの御消息聞え給へれば、大將殿おはしたり。正頼「かしこく」とて内  
に入れ奉りつ。

かよる程に、中納言のまうけさせ給へりける御前の物ども、みな参りぬ。宮の御  
前には、白瑠璃の衝重六つ、下には銀のつき、上には瑠璃の坏などするゑて参り  
たり。内のものども、透きて見ゆめり。女御の君かんのおとどには、沈の折敷六  
つづつ、男宮たちには、浅香の折敷六つづつまゐれり。簀子に中納言ものし給ふ。  
その御前には、蘇枋の卓二つ、上達部には二つ、たゞ人には一つまゐれり。これは  
他人なし。殿の君たちの限なり。あるじのおとど、正頼「何方のぞ。中納言宣へや。  
誰をしるべにてか、正頼も侍らむ」中納言はさふらひてければ、あるじのおとど  
の、「仰ごとにて請じ入れ給へ」と父おとどに申し給へば、兼雅「早まかり入れ」と  
宣ふ。あるじのおとど、正頼「忠澄の朝臣も今宵は猶まかり入れ」と宣へば二所な  
がら入りて居給ひぬ。

(諸釋)  
(一) 梨壺

(二) 魚を火にあぶりて乾したるもの  
(四) 「ことや」は「まことや」の誤なるべし

(考異)  
(三) 唐のーかうの

かよる程に、内裏の後の宮より例の銀の衝重十二、同じおほん坏どもして、上に唐綾のおほひしたり。折櫃、すみもの、いと清らにて多かり。中納言の御もとに御消息して奉り給へり。又東宮にさふらひ給ふ中納言の妹のもとよりも、物一斗ばかり入るかねの甕二つに、一つには蜜、一つには千歳汁入れて、黄ばみたる色紙おほひて、荷ひて、二尺ばかりの銀の鯉二つ、生きたるやうに造りなしたる、紅葉の造り枝に付れたり。紺瑠璃の大きやかなる餌袋三つに、銀の錢一餌袋、黒方を、ひほしのやうにしなして一餌袋、沈を小鳥のやうに造りなして一餌袋。鳥の毛をはぎあつめて、あをき薄様一かさねづつおほひて結びたり。おほん文は、唐の紫の薄様一かさねに包みて、紫苑の造り枝につけたり。中納言見給へば、

梨壺おぼつか 覺おぼつか 束たば なきまめでなりにけるをなむ。久しう見え給はぬを、あやしく思ひつるに、たゞ昨日きのう なむ理ことわり なるやうにてと承りし。ことやこの鳥は、

(四)

藏

開(上)



五三

〔語釋〕

(一) 麗景殿、忠雅の長女

(四) 茨

〔考異〕  
(二) 二斗入る―二斗ばかり入る

(三) して―そへて

(五) 給ひつる―給へる

紫ののべのゆかりを君により草の原をももとめつるかな

とく承らましかば、大鳥もありなましものを。

と聞え給へり。大將のおとど、兼雅「何處よりぞや。いと艶なる文かな」中納言、

仲忠「梨壺よりなり」父おとど、兼雅「いで、かれ見むや」と宣ひて、見給ひて、兼雅「如

何におよすけて宣ひたりや」など宣ふほどに、左の大殿の大君、東宮にさふらひ

給ふが許より、物二斗入るばかりの銀の桶二つ、同じ柄杓して、白き御粥一桶、

銀の鹽八つに、御粥のあはせ、魚の四種、精進の四種、大きな沈の折櫃に

さし入れて、黄金の土器の大きな、小さい、銀の箸あまた添へて奉り給へり。

これも、中納言に御消息あり。みな御前に取りすゑたり。おとどたち、興じ給ひ

て、先この粥すよりてむ」とて、添へたる坏どもによそひて、皆まゐる。かくて、

梨壺の御かへり聞え給ふ。

仲忠承りぬ。久しう參らで思ひ給ひつるになむ。昨日きこしめしきとは、誰か

(五)

(一) 風俗歌「大鳥のはねに白き霜降り誰か然言ふ千鳥ぞ然言ふ云々」

(三) 物を持来りし使には

(七) 諸澄祐澄

(考異)

(二) 鷗―かもよ

(四) 御返事しつと奉り給ひつ―御かへりしつと奉り給ひぬ

(五) 北面―北向

(六) 西面に向きて―西面母屋にむきて

(八) いとく―いと

は然りし。大鳥の上(二)にや侍りけむ。まめやかには、この御方(三)あたりに聞召さずなりにけるこそ、疎々しけれ。

野(四)べにすむ村とりよりも一つがひ水なる鷗(五)めづらしきかな

とて、皆物(六)かづきをしたる者(七)に祿(八)など給(九)びつよ、御消息(一〇)ありしには御返事(一一)しつ

つ奉り給ひつ。

斯(一)うて、今夜は、唐綾(二)のさしぬき、直衣(三)赤らかなる綾(四)のうちき一襲(五)宮(六)たちにも

こと人も著(七)たまへり。南(八)の方に寄りて、北面(九)に宮(一〇)たち、西面(一一)に向きておとどたち、

母屋(一)の隅(二)の外(三)に、南東(四)にうちそばみて中納言(五)どのの御(六)たち、御帳(七)の内(八)にはやんご

となき上臈(九)の御許人(一〇)などさふらふ。御簾(一一)の外(一二)には、左大辨(一三)宰相(一四)中將(一五)をはじめ奉

り、あるじの君(一)だち。この程(二)は大人(三)をば召(四)しつかひ給(五)はねば、童(六)のみなり。大人(七)

召(八)し出(九)づれど、いとく参(一〇)りがたくす。中納言(一一)、仲(一二)也(一三)例(一四)より見奉(一五)らぬ人もおは

します」など宣(一)へば、臺盤所(二)より参(三)る。おとな四人、童(四)四人、大人(五)は赤色(六)の唐衣(七)、

〔考具〕

(一)襦どもなりーナン

(二)硯の箱の蓋にー硯箱の蓋にー硯の蓋に

(三)「したまひ給ひつらめ」  
按「したまひつらめ」歟、  
「したまひ給ふらめ」とか  
きたるもあり

(四)心ばへー」ばへーナン

(五)ごとくにーどもに

(六)の具ーナン

綾あやのすり裳も、綾あやかいねりのうちき著きたり。かたち清きよけにらうくしき人様ひとさまどもなり。五位ごゐばかりの女むすめどもなり。わらはも、赤あか色の五重いつへがさぬ襲うへの上うへのきぬ、線れんのうへのはかま、綾あやかいねりの袖あそび、三重みつへがさぬ襲うへのはかま著きたり。髪かみ長たけにあまり、姿すがたをかしけなり。

かくて御汁物しるも、御酒みきたびく参まゐりぬ。中納言ちゅうなごんの君きみ、「紙かみもがな」と宣のたまへば、黄きばみたる色紙しきしひ一卷ひとまき、白しろき色紙しきしひ一卷ひとまき、硯すずりの箱はこの蓋ふたに入れて出いだされたり。かの梨壺なしつぼの御餌みえ袋ぶくろども、召めしよせてあけて見給みたまふ。主あるじのおとど、正頼せいり「いと珍めづらしうし給たまへる物ものどもかな」と宣のたまふ。右大将うだいしやうのおとど、兼雅かねみや「あはれ如何いかにして侍はべらむ。母宮ははみやこそはしたまひ給たまひつらめ。いと物清ものきよらに心こころばへおはせし人ひとぞかし」と見給みたまふ。斯かくて、黄きばみたる一ひとかさねに黄金こがねの錢ぜに一包ひとつみつよみ、白しろき色紙しきしひに銀しろかねの錢ぜに一包ひとつみつよみ、白しろき色紙しきしひをば外ぎにうるはしく出いださせ給たまひ、黄きばみたるをばおとどたちの御前みづかみごとに参まゐり給たまひつ。碁雙ごすわう六むの具ぐ参まゐりたり。あるじのおとど、正頼せいり「魚鳥いそどり、こよには更さらに無な



(語釋)

(二)未詳

(三)只の據に對して東據といふものあるか

(六)「こゝのだけ」歟

(八)「給へば」は「給ひ」歟

(一〇)女一宮

(考異)

(一)基據

(四)あづまだーあづまどーあづまごと

(五)こゝのーたゞの

(七)ゆうそうーいふそう

(九)御里人ー御前

(一一)はたーは

し」と宣へば、御簾の内にさし入れ給ひつ。かくて内外暮うち給ひて、御土器た

びくになりて、あぶらよき程にさし給ひつ。あづまだなど、童、大人うつ。こ

このごは、ゆうそう多くうち取りたりけるが、ひほし一つづつぞ、女房たちは賜は

りける。中納言の君、宮たちは、皆うち入れつ。

かよる程に、夜いたく更けぬ。中納言の君装束かれたる御琴三つ、ふえ三つ、とり

出でさせ給ひつ。御笛も、一つ聲に調べ給ひて、琴に手一つづつ弾き給ふ。その

音更にいふべきにもあらず。かく弾き試みて、わが御琴は、仲忠「これ内わたりに」

とてさし入れ給へば、「琵琶は忍びて宮わたりに、箏の琴は御里人に」と言ひつよ入

るれば君たち取りて参れば、女御の君、仁壽「あなうたてや。如何なるべき事にか」

かんのおとど、俊隆女「さ聞ゆるごとは侍らぬものを」とて箏の琴をいとおもしろく

弾き給ふ。しばし弾かせ奉り給ひて女御の君は、かの御琴をいとをかしくかき合

せ給ふ。宮おこし奉り給へば、琵琶かきあはせ給ふ。いと面白し。琵琶はたな

(四) 辨釋  
(一) 仲忠自身

(二) 思澄

(四) 仲忠

(五) 俊隆女

(考異)

(三) しばく—しばし

(六) 然あちざらむ—然せざらむ

ほ上手なりと聞召して、しばし弾かせ奉りて、横笛はみづから、笙の笛は彈正の宮、箏策は權中納言にさし奉り給ふ。中納言、笛をいと音高く吹き立てたり。他はしばく合はせて吹かず。かたぐの君たち、「これには聞えぬ笛の音かな。左衛門督にやあらむ。聞かばや。三條の北の方のわざをせさすらむ。さても、人々もあそび給ふかな」など宣ふ中に、良中將まどひ出で源中納言に、行政「いざ給へ、これに。此處にいとみじき物の音どもかな」とて奏えたる狩衣など著ていまして、東の對の隅と御格子との間に入り立ち給ひぬ。琴笛ども吹きあはせ給ひて、いみじくあそび給ふ。かくれ給ひて源中納言、遠いみじき横笛の音かな。箏のことは北の方のにやあらむ。いまだ聞えぬ聲す。この主、何心ありてせぬわざわさなくし出で給ふらむ」中將、行政「如何は然あちざらむ。物の上手は、手の至らぬばかりの愛侍らじ。琴はかよる御中にて、留まるべければにこそ侍るめれ。かくし給はずば、内裏の聞召さむにもいと物の榮なからむ」とて聞きさわぐ程に、

(語釋)  
(三)取次を通辭と戯れて  
ちよ也

(四)「ぬ」衍なるべし

(五)酒をくれぬ故

(考異)

(一)などーなどか

(二)寝てを「を」ナシ

(六)賜はねばーたばねば

(七)さかのーさるの

(八)などかーなにか

あそびし止みぬ。

右大將いと快く酔ひ給ひて、兼雅(二)など今宵は、宮も出で給はぬ。さうぐし」と

宣へば、宰相の君といふして、女二(二)たど今寐てを(四)など聞えさせ給へれば、兼雅唐

土よりは近かんめれば通辭なくとも承りぬなむ。この朝臣どもの痴者や、遊び

はべるとて、制して賜はねば、まだこそ給べ酔はね。いかで御簾のうちの御土器

賜はらむ」と聞え給へば宮の君がいらへ、「参り侍らむかし」大將、兼雅さかの供

養は否や」など宣ふ程に、大きな土器をとりて、中納言あるじのおとどに参り

給ふとて、

仲思みや濱の洲崎におりて鶴のこによる波たちぬきしを見せばや

おとど、

正頼もろともに洲崎の鶴しおいたらばのどけき岸もなどかなからむ

とて右大將に参り給ふ。とり給ひて、

(八)

(語釋)

(二)帥の宮

(三)女一宮

(考異)

(一)立ち出てぞ一立ち居  
てぞ

兼雅立ち出てぞ千歳も見えむ瀉の洲にかひこの見ゆる鶴は幾世ぞ

彈正の宮に奉り給ふ程に、父おとど、兼雅中納言召してきたれ」といと高く言

ふ。四の宮、「いと羨まし」と宣へば、仲忠申さるよことの侍らば」と宣ふ。父お

とどうち笑ひ給ひて、兼雅「これは望む所なり。猶希有なりや」とて今一度まるり

給ひぬ。さて宮に参り給へば、宮、

女一かへりてぞ千世も見るべきかひの中にこもれる鶴は幾世經べきぞ

四の宮、

帥宮東路のかひのうちなる鶴なれやゆき歸りつと千世を見るべき

六の宮、

はるかにも思ほゆるかな行きかへり千歳みるべき鶴の雛鳥

八の宮、

みづの色はいくたびすむと川の洲にかへれる鶴の行く末は見む

權中納言

思澤洲にすめば底にも千歳ある鶴の流れてゆけど盡きずもあるかな

左大辨

諸澄まことにや千歳を経るとながき世をおきつよ霜の鶴の世は見む

宰相中將

水底の騷がぬ洲にぞ鶴のこのみづなる色に千世もすむらむ

かくて源中納言の奉り給へりしかづけ物どものいまだ使はれぬを、女御の君取

り出で給ひて、御簾のもとなる人々に一くだりづつ持たせて、うちそよめかせ給

へば、中納言内にやをら手をさし入れて取りつよ、まづ主のおとどよりはじめ奉

りて、つぎくかづけ奉り給ふ。左大辨宰相中將までは女のよそひ、それよ

り下は白張一かさね、はかま一くだりづつ。宮あこ君今はかうぶりし給ひて六位

なれば、白張一かさねかづけ給ふ。

(考異)

(一)色にちむーそこに千世も見てしが

(二)どものーどもーなど

(三)グフーナレ

(舊釋) (二)「しりふた」は「わらふた」の誤歟

(三)女一宮

(考異)

(一)四十二—四十三

(四)ならひて—ならひては

(五)と思ひ—とも思ひ

④産屋の事によりて集りし人々退散。贈物、産屋の物を帝に奉る。内侍のすけ仲忠夫婦の前にて當代の男女を評す。

【畫詞】こよは中のおとどの東面。宮たち四所なほしすがたにて参り給へり。

これは右のおとど、かたちいとあてに物々しく清らにて、愛敬づき給へり。御年五十四。されど、いと若く見え給ふ。右大將、色あひもてなし、中納言に似給へり。けぢかく、にほひやかに、清らなり。年四十二。權中納言いと清けなり。

「この鯉は生きたる様なるものかな。ほとく庖丁望まむとぞ思へる」と宣ふ。

御産養のものあり。粥桶の蓋には、生絹の絲の赤みたるしりふたといふもの

の様にしなして覆ひたり。これは北面。臺盤所。後の宮より奉り給へりつる

衝重、竝べすゑたり。こよは北のおとど。女御の君、内侍のかんのおとど、御

たちの中に物ども賜ふ。

かくて又の日の晝つ方になりて、御乳付かへり給ふ。贈物いと清らにし給ふ。内

侍のかんのとのもかへり給ひなどして、女御の君、宮などに聞え給ふ、仁壽「かく

侍りならひて、如何につれぐに思さむ。しばし斯くてもと思ひ給ふれど、旅住

(四)

(五)

〔語釋〕  
（一）やがて又退出して來給へ

（二）「大將殿の御門へ」  
なるべし

くるしう侍ればなむ」大宮、「見たてまつらではえ侍らじ。今又疾くも」とて、右のおとどより、うるはしき絹百疋、御たちの中に出ださせ給ふ。かくてわたり給ふ。御前大將殿、中納言殿とりあはせて、四位五位いと多かり。大將殿門へ行き著きたれば、御車どもはこの殿の御門にあり。近さは一町あまりばかりあり。中納言も御送し給ふ。かくてわたり給ひぬる後、あるじのおとど、いみじう名高き乗馬二つ、鷹二つ、大將殿に奉れ給ふ。御消息、

正頼これは、御供にさふらはせむとしつるを、急がせてわたり給ひにければなむ。

又北のおとどより、蒔繪の御衣櫃五かけ、蘇枋の臺、枋さして、きぬ二かけ、唐綾の絢房かけ、えび一つ、丁子一つ入れて、大宮の御文、かんのおとどの御許に、大宮近くものし給ひつるほどにだに、聞えまほしかりつるを、騷がしくのみありつればなむ。いと嬉しく、残り少く思ほえつるを、ゆく先長くなる心地して、

〔語釋〕

(五) 仲忠が送りゆきて  
まだ歸らぬ中に此の使が  
來たる也

〔考異〕  
(一) 留守の―するの

(二) なむ―ナン

(三) ども―ナン

(四) せまほしくを―「を」  
ナン

物の音のいともく、哀なるをなむ、蓬萊といふなる所は近かりけると思ふ。  
さてこれは留守の人々に賜へとてなむ。  
(二)

などあり。宮の御方よりは、後の宮よりありし衝重のうちの物入れながら、蒔繪

の置口の衣篋に、夏冬の御装束二よそひづつ、夜の二かさね、同じ御髪ぐしの箱四つ、

一つには沈しん、一つには黄金こがね、一つには瑠璃るりの壺つぼ、四つにあはせ薰物たきもの入れて、今

一つには黄金こがねのつほに薬くすりども入れて、麝香せがかう一臍ひこせづつ入る、黄金こがねのつほ十するゑて、

濟よらなる包つみどもにつよみて、宮みやの御消息せうそくにて、陸奥紙むらつのくにがみに女御にようごかき給ふ。

女一みづから聞えむとすれど、手振てふらはれてなむ。日頃ひごろはいと頼たのもしく覺おぼえつる

を、今いまよりはいとつれぐになむ。物覺ものさざえず、苦くるしかりし心地こころち、すなはちや

め給たまひてし物の音ねの、いと忘れ難がたさに、慕したひもせまほしくをとなむ。これは

犬いぬの尿しに濡ぬれ給たまひぬめるを、脱ぬぎかへ給たまへとてなむ。  
(四)

とあり。中納言ちゆうなごんまだものし給たまふほどにあり。北きたの方かたの、女御にようごの御文見給みみたまふを中納言ちゆうなごん  
(五)



(語釋)

(一)「見給へね」なるべし

(二)先日わが見し藤壺の文は

(六)后宮と仁壽殿との中は

(一〇)仁壽殿

(一一)東宮が

(考藝)

(三)見給へりしは—見給へりしかば

(四)悉く—悉くも

(五)か—よな

(七)こそは—「は」ナシ

(八)か—ト—ナシ

(九)事々しく—事

(一一)何心に—何心と—何心も

も、仲忠「まだこそ見給はね」とて見給ふ。仲忠「これもいとよき御手にこそ」父お

とど、兼雅「昔より名取り給ひつる上手にて、藤壺の物せしに劣らざるらむ」中納

言、仲忠「一日見給へりしは、これに勝りてこそ侍りしか」など宣ふ。奉り給へ

る物ども、御前に竝めすゑ御馬どもひかせて見給ひて、おとど、兼雅「煩はしく、疎

からむ人の様にもはた、後の宮よりも 悉くせさせ給へりけるかな。御息所の御

中は、よろしくもあらぬを、そこによりてせさせ給へるにこそはあらめ」中納言、

仲忠「仲忠が許になむ御消息聞え給へることなどあまた侍りき」おとど、兼雅「いと

煩はしう、人々の事々しくし給へるこそいとほしけれ」中納言、仲忠「いとかめ

しきこと、多くし給へりつるかな。彼處にも、立たむ月ばかりにはかゝる事は侍

るべかなるを、訪はではえ侍らじ。そが中にも、梨壺のいとあはれにて訪はせ給

へりしこそ、いかでなりけむと見給へりしが」おとど、兼雅「そがいと哀なりしを

ぞ見しや。其處をばよしとも宣はじを、宮何心に思ひてし出し給へりけむ。宮

〔語釋〕  
 (一)引張つて歸る人、兼  
 雅をいふ

(三)留守の人々に賜へと  
 ありし返事也

(考異)  
 (一)と—ちま

の御心いかでかはありけむ」中納言、仲思「時々参り侍る。更にさる御氣色もなく、御心うつくしくなむ、御前に召して宣はする」おとど、兼雅「猶人はさふらふや。如何に思すらん、つよましかりつるを、よべこそいと哀に覺えしか」と宣ふ。北の方大宮の御返きこえ給ふ。

俊隆女かしこまりて承りぬ。しばしもさふらはむと思ひ給へるを、むづかしきひ

きさけ人の急ぎ侍りつればなん。いとあはれなる人も、見奉らではおほつ

かなか侍るべければ、いとむづかしきまでなむ、参り來べき。さてこれは、

留守のぞむ人おほく侍るべかめる。まことや「山ちかく」と宣はせたるは鹿

の音にや侍りつらむ。

と聞えさせ給ふ。女御の君の御返も、かやうになむ。御使どもなんどに、かつけ

物、祿など賜ひて御返聞え給ひつ。中納言、「今彼處にもさふらはむ」などとて

かへり給ひぬ。

(一)「語釋」  
大將殿の「衍文な  
るべし、この女御は仁壽  
殿なり

(五)河内の交野は當時の  
御嶺地なり

(七)鯉のやうにこしらへ  
たる煮鯉

(者異)

(二)「供御を」を「ナシ

(三)聞えずー聞えずも

(四)給ひてー給へ

(六)かひひつ

大將殿の女御の君、梨壺より奉れ給ひし黄金の甕に、供御を入れかへて、それ  
に添へたりし鯉、小鳥、ひほし、餌袋に入れながら、藤壺より奉れ給へりし雉子  
そへて、内裏に奉れ給ふとて、志ありて仕うまつる鞆負の乳母といふが許に  
御文つかはす。

仁壽日頃物さわがしくて聞えずなりにければ、などかそれよりも訪ひ給はぬ。さて

これは、子持の御残り物なり。いとさむき頃なめるを、風もやらひ給へとてな

む。この雉子などは、上にまゐらせ給ひて、交野にも御覽じくらべさせ給へ。

とて、乳母のもとには、沈のたかつき五つ、銀のつほの小きに、黒方入れ、蜜入

れたる黄金のかひ五つばかり、沈のかつほ造りにしたる一包、青き色紙どもにつ

つみて、五葉につけて奉り給へれば、乳母たち、臺盤所にさふらふ折にて、見

れば、こと命婦たち、「何處よりあるぞ。興ある物どもかな」と言ひさわぐ。乳母、

「仁壽殿の女御の君の女一の宮の御産屋の残り物とて賜へるぞや」とて引き開け

〔語釋〕

(一)「おもとたちは」歎

(二)賜はせての意歎

〔考異〕

(三)「様々に」いと様々に

(四)なむ一ナレ

つよ見て、乳母うぶいとをかしくしたりける物ものどもかな。理ことわりぞや、内侍ないしのかんの君きみの御産屋うぶやの物もの、いかでかは斯かからざらむいなど言いひあへり。靱負ひきひの乳母うぶ、「おとどたちは、この乾物からものを一さきりづつうち割り給たまへ」とて、「他物こゝものは風薬かぜぐすりにせむ」とて取りつ。

かくて奉たてまつれ給たまへるもの、御文ふみなどもて参まゐりて御覽ごらんぜさすれば上御覽うへごらんじて、朱雀すゑわさと麗うるはしくしたりける物ものどもかな。靱負ひきひが語かたりつらむは何事なにごとぞ」と宣のたまふ。靱負ひきひ「このかつほづくりをたばはせて切り侍はべりてこれかれにたばはせつ」と申まうす。朱雀すゑ「様さまにをかしくしたりける物ものどもかな」と宣のたまひて、餌袋えいぶくろは后きさきの宮みやに、朱雀すゑ「女によ一の宮みやの残り物のことてもおし給たまへるなり」とて奉たてまつれ給たまひつ。餌雉子えいぢいなどは、この頃御子ころご産うみ給たまへる、時ときの更衣かういの御許ごきに奉たてまつり給たまへり。朱雀すゑ「御文ふみはわれ書かかむ」と宣のたまひて、朱雀すゑ「これより聞きえむとしつる程ほどになむ、靱負ひきひがもとに宣のたまへるを、今いまは参まゐり給たまひねかし。世よの中なかのはかなくのみ覺おぼゆるを、御子みこたちをしばく見みぬなむ。

〔語釋〕  
（一）女一宮

〔考異〕  
（二）つちにぞーつちき心  
に

（三）これをこそーこれこ  
そ

參り給はむ時は、御子たち、女御子、ゐて參り給へ。かの子持も、久しくな  
りにけりや。おとなしくなりたらむこそいぶかしけれ。まことや交野の鳥の  
つらにぞなざるよか。されど、これをこそ。  
（三）  
とて、

朱雀餘所ながらなかよどみする淀川にありけるこひをひとつ見るかな  
なほ疾くを。

と宣へり。乳母のは、

乳母かしこまりて承りぬ。みづからも參りて聞えさせむと思ふ給へつるを、御  
あえ物のゆよしき程に、すぐし侍るとてなむ。賜はせつる風藥なむまうけま  
ほしく侍りき。御消息、斯くなむと奏し侍りつれば、御時よく御覽じて、御  
文侍り。他事は、みづから聞えさせむ。

と聞えたり。女御の君見給ひて、仁壽「内裏よりかくなむ宣はせたる」とて一の宮

〔語釋〕

(一)女一を參内せしめん

(三)仲忠との婚姻は

(四)頂戴す

〔考異〕

(二)こゝろよくこゝちよく

(五)宮の人若く一宮の御人なるに若く

(六)生みに一生み給へるに

(七)なりにてあり

に奉り給ふ。中納言見給ひて、仲忠けにいかで參らせ奉らむ。こゝろよく直に給ひなば參り給へかし」宮、「女宮、あな恥かし。さらぬ時だにつれ、とまもり給ふものを、今はいかでか見え奉らむ」きみ、仲忠、過やはし給ひつる。御心とありしことかは。あなあぢきな御物恥や。仲忠をも、參る時は、御前に召して、さぞ御覽するや。いかに思召すにかあらむ、うちほとゝろませ給ふ時多けれど、つれなくもてなしてぞ候ふや」など聞え給ふ。

御座所も、奥なる所も、照りかどやきて見ゆる。御調度など更なり。御産屋どもはみな人おろす。御帳のかたびら、御衣どもも、よきは内侍のすけ、さらぬ物ども、一つづつおろす。この内侍のすけは院の太后の宮の人、若くより、かくよき人の御子生みに仕うまつり給ふ人なり。年は六十餘ばかりなり。中納言は、内裏にもをさく、參り給はず、ありきもし給はず、宮と犬宮とを抱きうつくしみて、居給へり。内侍のすけ、御前に居て、内侍、今の程は、何とも見奉り給ふまじき

(語釋)

(一)あて宮出生の時

(二)正頼

(三)女一宮出生の時

(六)あて宮女一の様な美人にしてくれよ

(七)兒は湯のつかはせ様によりて美しくも醜くもなるといふ蓋のありしなるべし

(考異)

(一)はてむーはててむ

(五)婚しかりなむー婚しかなり

(八)遣りてーちてて

ものを、うまれ給ひしすなはちより、御懐離ち奉り給はず、御尿にそほちお

はします。萬のこと、居立ちてし奉り給ふを見奉り給へれば、嬭もいとあは

れに悲しくなむ見奉る。御湯殿は嬭仕うまつりはてむ。こよら斯かる所の宮

仕侍りつれど、御迎湯参り、その行事をこそ仕れ。たど藤壺の御局になむ、

大殿の「あまた出で來ぬる中に、これはいとかなしく」など宣はせしかば、御湯

殿参り侍りし。この宮の御時には、御迎へ湯をなむ参り侍りし」と聞ゆ。中納言

仲思「いと嬉しかりなむ。なほ然し出で給へ。女子は、見るかひなくおひ出で給ふ

はくち惜しかるべし。湯浴しがらとかいふなるものを、し出で給へらば慶びもか

しこまりも聞えむ。あまた人には見せじとなむ思ふ」と宣ふ程に、父君に尿多に

しかけつ。宮に、仲思「これ抱き給へ」とてさし奉り給へば、女二「あなむつかし」と

て押し遣りて、うちそむき給ひぬ。君、仲思「頼もしけなの人の親や」とて内侍の

すけにさし取らせて拭はせ給ふ。宮女二「いかに香臭からむ。あなむつかしや」

(註釋)

(一)此兒もあて宮の如く帝に仕へて寵を専らにすべき美人になるべし

(二)此樓な赤兒がやがて成人して、あて宮をいふ

(四)東宮

(六)あて宮の髪的美しさを形容する也

(七)懐胎の御様子と見え

(考異)

(三)今はいとみじやー今はいみじー今いといみじや

(五)竝ばせー竝び

とてむつかり給ふ。内侍のすけ、「この御子よ。藤壺の御方の兒顔に似奉り給へるかな。かれは少し小くぞおはせし。これはいと大きなりや。姫おのづから思ふやう、上仕うまつり給ふべき人などは、又も出で來給ひぬべかめり。かよりし人こそは、おひ出で給ひて、萬の人まどひはてさせ給ひしか。今はいとみじや。  
 (二)

御年加はり給ふまゝに、あてに上藤しさのみまさりて、突きもし奉らば亡せもしつべきおほん顔つきにて、花を織りたるごとぞなりまさり給ふ。宮のつい竝ばせ給へば花のかたはらの常磐木のやうに見え給ふこそ。先つ頃参りて侍りしかば、更に御宮仕のやうにもあらで、たどの人の御中らひの様にぞおはしますや。宮おはしまして、何事にかありけむ、聞え給へりしかば、うちむつかりおはしまして、御髪を繰り出でて、御座のまゝにうち添へさせ給へりしを、見奉りしかば、瑩しかけたる如して、筋も見えず、隙もなく、同じやうに見え給ひしかば、萬のこ  
 (六)と忘れて齡延ばはる心地こそし侍りしか。さるはこの頃、御氣色にやあらむ、例の  
 (七)



〔語釋〕

(一) 女一の

(二) 藤壺の常に美しく見ゆるは傍なる東宮に比較する故一層見まさりするなるべしとの意歟

(四) 仲忠

(五) 仲忠が女一の前居る故女一が見劣りする也

(六) 「殿下」は「天下」に「えうち」は「えかち」にて藤壺に對しては流石の仲忠も之を壓倒する譯にはゆくまじの意なるべし

(七) 「うたれ」は「かたれ」歟

(八) 俊隆女

(一一) 女一

(二四) 「など」とて「なるべし」

〔考異〕

(三) 見まさりにて一見まさりしに

(九) 一一に

(二〇) 二一に

(二二) むれーめる歟

(二三) むれーめる歟

やうにも思おもしたらざめり」中納言、仲忠「長ながさは、この御髪ごしと如何いかに」すけ、「然しかばか

りにやおはしますらむ」宮みや、女「われは人ひとか。かの君きみはいとみじきものを。金きん

の漆うるしのやうにこそあれ。同じ所おなじところにありし時とき、常つねにくらべて見みしかば、かの御髪ごしは、

色いろと筋すぢとは殊ことなりしものを」すけ、「宮斯みやかくばかりこそはおはしますさめ。廻おんがつく

りごと聞きえさするにやは。なほ見奉みたまつり給たまへかし。それを、かの御方かたの、いと恐おそ

ろしくおはしますは、ついまさり給たまへれば、見まみさりにこそはおはすれ。又おと

どの君きみの恐おそろしくおはしますは、宮みやの御前まへにおはすれば、宮みやの氣劣けおとらせ給たまふこそ。

藤壺ふぢつぼの方はしも、殿下でんかのおとどえうち奉たまつらせ給たまはじ」おとど、仲忠かたじけな「忝たじけなくはい

かでかうたれ給たまはむ」すけ、「否いなや。まことはいとぞいみじきや。たゞ今いまの人は、三

條殿でうぎのの北きたの方かた一、藤壺ふぢつぼ二、宮二みやににぞおはすめれ。男をとこは御前ごぜんぞ一におはしますめれ」

中納言ちうなごん、仲忠かたじけな「まばゆくも宣のたまふかな。そこにあらば、心地こころちすぎぬべけれ」と宣のたまへば、

すけ、「さては思おもほえずかし、傍かたはらほとりも」などて、「罷まかり立たちなむ。今いましばしもさ

(語釋)

(一) などとて「なるべし

(二) 俊隆女

(三) 「中納言もの」も「行なるべし

(五) あて宮を見たればよもや唯にては濟まされまじ

(七) あて宮をいふ

(九) 正頼

(考異)

(四) うたていと一御前そ

(大) ちかむ一ちかむかし

(八) 取りもて去にもしたる一取りもいかにもしたる

ふらはど、又聞え過しもし侍る」などて、犬宮かき抱きて入りぬ。中納言、宮に、

仲忠「いみじうも物言ふものかな。別いても、里人を譽むるぞ空目なる。藤壺の御

方まかで給はど必ず見せ給へ。内侍のすけの言ひつること、まことかと思くらべ

奉らむ」宮、女「まことぞ。いとよく物言ふかな。かの君は、見るまよによくな

りまさり、我は日々怪しくぞなるや。昔だにこよなかりけり」中納言も、仲忠「い

みじき御かたはにもあるかな。見なしにやあらむ、うたていと恐ろしけにおはす

とは見奉らぬを、さなることは必ず見せ奉らせ給へ」宮、女「いでそこたどに

はあらじ。事引き出でて騒がれば、聞きにくからむ」君、仲忠「よしと見奉ると

も、今は何ごとにか。昔だに、ひき出でずなりにしことを。上達部の御女の、ゆ

るし給はぬことを強ひて取りもて去にもしたる人をば公は何の罪にかあて給ふ。

又殿も、仲忠をころし給はではやみ給はずこそあらましか。それも、琴一聲かい

弾きて聞かせ奉らましかば、憎みもはて給はざらまし。然りし時だに、過たす

〔語釋〕

(一) 女一をいふ

(二) 自分が人らしき女ならぬ故

(四) あて宮

(五) 女一宮をいふ

(八) あて宮殿

(九) 仁壽殿

(一〇) 女一が仁壽殿に

(一一) 仁壽殿の

〔考異〕

(三) こそは「は」にナシ

(六) には「に」にナシ

(七) 宮こそ一宮にこそ

(一) 給へりけるかなー  
給へりけりな

なりにしものを。いとよく然りぬべき折もありしかば、帝の御女も賜はらずやあ

りける」宮、女「それは、わが人にもあらねば、御子の數にも思さで、たゞに棄つ

とこそは思ししけめ。昔は鬼にもこそは賜ひけれ。たゞ人なれど、この君は、親の

さばかり思ひかしづき給ひしを、天下に思ふとも何業かせまし」仲思、そはかしづ

き女をこそ、かよる事し給ひけりな。さらば唯棄てられ給へるなり。さても志

浅きにはあらざなり。なすらひ給ふべきわが身にもあなりや。まことに、恐ろ

しきものは、彈正の宮こそおはすめれ。物も宜はず、御妻もなく、年月を経給

ふに、何心を思すらむ。よし、見給へよ。これぞ事は引き出で給はむ」女「この

東の對におはします、東宮の若宮たちこそ、恐ろしきものは世にまめれ。如何や

うに生ひ出で給はむとすらむ。今ゆくさきの君がねにやはあらぬ」仲思「まことに、

女御の君を、騒がしかりし曉に見奉りしはや。いとよく似奉り給へりける

かな。内侍のすけのよそへ残し奉りつるこそをかしかれ。その御容貌は、けに氣

〔歸釋〕

(三)「源中納言」は「右」の  
顯なるべし

〔正頼參内、鹿養の有様  
を奏す。〕

〔考異〕

(一)いとと然はあらねど  
―いときはあらねど  
(二)中にも恐ろしの一  
中の見にくものぬし恐ろ  
しの  
(四)事も一事にも  
(五)なむ―いと

高く優れたること、いとと然はあらねど、見まほしう抱かまほしけなることは又無  
 かめるを、さればこそ内裏の上は、籠り臥しがちにはおはしますめれ」宮、女「さ  
 ばかりの心地は、何處にかものし給はぬ。源中納言の今こそは藤壺にもことに劣  
 らぬぞかし。内裏の上こそ中にも似るものなくものし給ふれ」仲忠「恐ろしの事や。  
 な宜ひそ。心地騒がし」など御物語しつと、御張のうちに籠り臥し給へり。  
 源中納言のおとど内裏に参り給ひて、御前にさふらひ給ふ。うへ、朱雀「久しく参  
 られざりつるかな」おとど、正頼「侍る所に觸穢のさぶらひつれば。尙かの後は勞  
 りどころの侍りしかば」うへ、朱雀「然りけむ。その程の事どもは如何ありけむ。  
 此頃、上の男どもは、其處の興ありしことを、様々いふめる。涼の朝臣と行政と  
 を笑ふなるは如何なることぞ」おとど、正頼「何でふ事も侍らざりき。右大將の朝  
 臣の内侍のかみなど、琴彈き侍りし程なむ、興侍りしや。いと有難かりける事ぞ  
 や」うへ、朱雀「その琴はいづれぞ」おとど、正頼「内侍のかみの昔より彈き侍りけ

(語釋)

(一) 犬宮

(二) 生れたりと聞きて

(四) 誤あらんか

(五) 誤あらんか

(九) 誤あらんか

(一〇) 大宮に

(考異)

(三) 舞をなむし侍りし  
舞をむ侍りにし

(六) あだなけれ—あなた  
けれ

(七) けるは如何にせしぞ  
—ける如何にせし

(八) あと—ナ

る、りうかくとなむ承りし。それはなむ、かの兒になむ取らせ侍りにける」うへ、朱雀「いといみじき物得たりける女子にもあるかな」と宣ふ。正頼「然に侍るなり」正頼「さてかの朝臣は、如何思ひたる。らうたしとは思ひたらむや」おとど、正頼「知らず。いかに思ひて侍るにか侍らむ。然聞きて侍りしすなはち、舞をなむし侍りし。日頃は、夜晝懷離たでなむ侍るなる」うへ、笑はせ給ひて、朱雀「思ふ様なりかし。何かはしらむかの親族は。女子も、よろしきは悪からぬものぞかし。さりけもなき人の子をもるらむこそあだなけれ。いかでこれに慶もせさせしがな。さて、九日に當りける夜になむ遊ばれけるは、如何にせしぞ」。おとど、正頼「琴ども三つ、一つ聲にしらべて、一つづつなむ弾き侍りし。さうがの家」のうちに、琵琶は女一の宮、賜はせし御琴倭琴は、侍るところに嵯峨の院より賜はせためりしきりかぜといひ侍る、さて、女方に入れて侍りし笛どもは、これかれに賜ひて、自らは横笛をなむ吹き侍りし」うへ、朱雀「いみじかりけることかな。

(語釋)

(一) 誤脱あるべし

(二) 誤あらんか

(五) 祐澄

(六) 女一宮の身上を記する也

(七) 仲忠

(考異)

(三) をぞーをナシ

(四) と宜ふーなど宜ふ

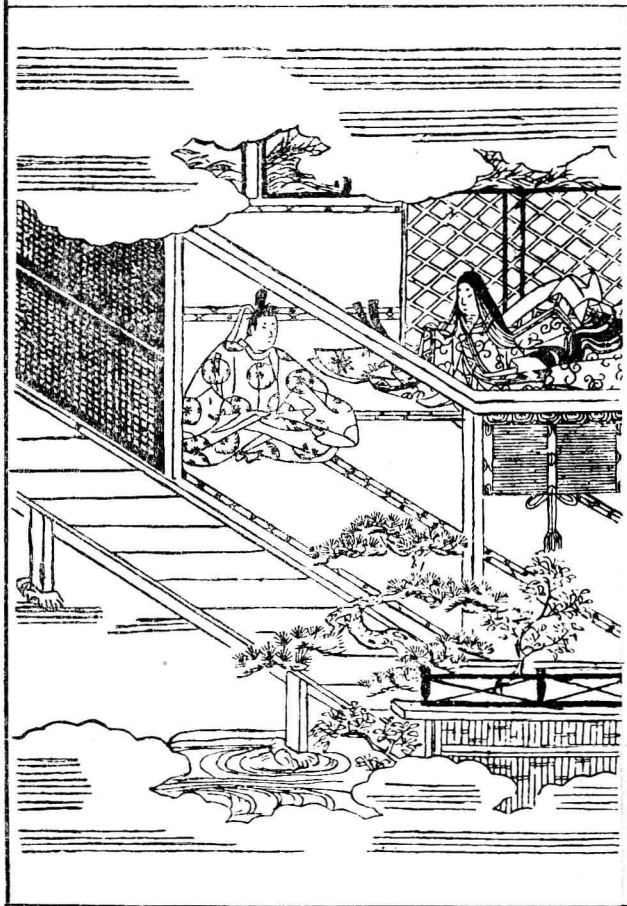
(八) オミ給ふれーナシ

祐澄あて官を訪ふ。産養の禮。

心こころに入れてせぬわざく無くしけるは、この子こを嬉うれしと思ふにこそはあなれ。手傳へむとや思ふらむ」おとど、正頼まさより然さ申し侍りき。この手てを如何いかにせむと思ひ侍りつるに」と申し侍りき」うへ、朱雀すざくかぎりなかりき。したり顔かほに然さぞ言ふめる。興けいあること。出いで來くべき御家みいへなども、思おもふやうならば、その家いへは、かうぶりも得つべき所ところぞや。倭琴わごん、琵琶びわは誰たれか弾ひきし。箏そうの笛ふえなどは誰たれか吹ふきし」など委くはしく問とはせ給ふ。正頼まさより笙さうは彈正だんじやうの宮みやなむ。琴ことどもは誰たれにか侍りけむ。一つひつにあそびて、ことことに違たがはず侍りつるなりき」朱雀すざく「さやうのものをぞ、子持こもちの臥ふしながら琵琶びわひきたる」とて笑わらはせ給ふ。朱雀すざく仁壽殿にじうでん、倭琴わごんは名高なだかきぞかし。すべていと(三)いみじかりける夜よかな。これを聞きたらましかば」と宜のたまふ。おとどまかで給ひぬ。(四)  
宰相さいしやう中將ちゆうじやう藤壺ふじうらにまうで給ひて、有ありし御物語ものがたりし給ふ。君きみあて宮みや中なか々々いとよしや。世よに心こころにくく思おもひたる人ひとにつき給ひて、一所ひつかり心こころやすくすみ給ふれ。己おのれこそ、かよるおほたかりに出いだし放はなたれて、かにかくにまがくしき事ことを聞き見

藏

開(上)



七九

(語釋)

(一) 誤あるべし

(三) 誤あるべし

(四) 誤あるべし

(五) 昔戀想したりし多くの男の中に

(六) 仲忠

(七) 誤あるべし

(考異)

(二) と思されーとは思され

(八) 見給へむーナン

給へば、ことに花やかにも見え給はず、むづかしきまよに、目も見合せ奉らず、むづかれば、心よからずと思されためり。いと心よくなけれ。里にありし昔のみ戀しくて、「あらしものを、何せむに、かく出だし立てられてあらむ」と思へば、心憂く、悲しきことも多くなむ」宰相の君、祐道「あやしき御心にこそあれ。宮は、御心才も猶こことにはあひおはします。御み遊びなども、誰にかは、し劣り給へる。宮仕し給ふ人は、敵多かるこそはよけれ。羨やましきこそは、悪しうはすれ。昔の人の中に、あはれと思ほすやありし。左衛門督なりけむかし。それにぞ、下筋なれど、返事などし給ふなりし」さて宮「それは、手のよかりしかば、見むとてにぞ」宰相、祐道「今やは御覽せぬ。いとかしこくなりにて侍るめるを」君、さて宮「さて見しかば宮に聞えたりしかば、かしこも、かれぞかはり奉りて返事かきし」宰相、祐道「いでその返事し給ふ文給へ。見給へむ。論なう私ごと侍りけむかし。物聞えし人々の中には、誰をかは心とどめては思ほし



〔語釋〕

〔二〕兼雅

〔三〕俊蔭女の外の女にわき目をふるべき人にあらず

〔五〕仲忠が

〔六〕見給へむは「見給はむ」歎

〔考異〕  
〔一〕思ふも一思ふこと

〔四〕給はじやは「は」ナ

し」君、あて宮、さ思ふべき人こそなけれ。誰をかは。源宰相こそ、今に恨み言ふなれ。まことに思ひけりとは聞け。さてはまことの心ありける人し無ければ、然思ふもなし」祐造「右大將殿は、さ宣ひてこそは、ものし給はずなりにしか」君、あて宮「然らずとも、それはあからめし給ふべき人ならばこそ」祐造「いで祐澄を制し給はじやは。左衛門督なども、いたく澁りしを、制し宣ひなどして、おとどのし給へるぞかし。今は思ひなぐさみ給ふべかめり。此頃はいと警策なりや。ねびもてゆくまよに、光をぞ放つべき」君、あて宮「久しく此のわたりに見え給はず。こよには、月の宴し給ひし時に、消息言はせ給へりし」祐造「いで、今さへ御消息あぢきなかり。なほ人の歎きは生すらむかし。彈正宮も思し倦じにたるにや、これもおはせとのみあめれど、斯くてのみ見え給ふは」あて宮「今一つ、人には聞えて心地にはいみじく悲しと思ふこともありや」宰相「祐造「何事か。もし祐澄が、氣色見給へりし事か」あて宮「いで、いかでか見給へむ。人の知るべきにあらずや」

(語釋)

(一) 仲澄

(二) 仲澄はあて宮の御かげにて死にたる人なり

(四) 「女御」 衍文なるべし

(五) 「見え給ふや」 歎

(七) 兄弟多けれども

(八) 「心」は「ころ」の誤歟

(九) 仲澄の死を告げ來れり

(考異)

(三) 御徳にぞー御徳にー御徳にこそ

(六) 聞ゆなー聞ゆる

(一〇) 見まほしうーみさをに

祐澄「いで、されどいとよく知りて侍り。然ば聞えむかし。侍從の上に侍らずや

つねに然見給へき。御徳にぞそこなひ給ひてし人ぞかし」女御さみ、あて宮「つねに

夢にぞ見給ふや」と宣ふまよに泣き給ふ。宰相の君も泣き給ひて、祐澄「つねに聞

えむと思ひ給へれど、事の序もなく、常に人騒がしかりつれば、聞えざりつひこ

そ。如何なりし折に如何に聞えそめしぞ」君、あて宮「いでや、いみじく恥ぢ隠し給

ひしを、人に聞ゆなと亡きかけにてもこそ見給へ」祐澄「祐澄をば、數多あれども、

そが中に親子の契なしたりしかば、然も思さじ」あて宮「何かは、知り給へれば。ま

だ少かりし時、箏の琴ならばしよ心なむ、怪しく思はぬ様なる氣色なむ見えし。さ

て、年頃泣きうらみ給ひしかど、見知らぬやうにて歌みにしを、参りて後にも、か

かる文をなむ奉りし」とて取出でて見せ奉り給ひて、あて宮「これを持て來て、

すなはちなむ、然は言ひに來たりし。これを心一つに思ふなむいみじう悲しき」

とて泣き給ふ。宰相、祐澄「心の、いと見まほしう、かしこかりしかば、身を徒ら

〔語釋〕

(一) 誤あらんか

(二) あて宮の如き女を得たしと

(三) 仲澄

(四) 「など」としてなるべし

(五) 女一宮への贈物なども私に仰せ付けて下さればよかりしに

(六) 誤あるべし、一本こそしなし

(七) 東宮

(八) 陸奥は古より金を出せり

〔考異〕

(八) いかで—いかた—にかに

(二〇) 足らざりければ—足らざりしかば

になして、言も出ださずなりにけるにこそ。祐澄しかことのおふてうのおほえぬわ

ざわざはしてまし。あるはまだ宮に参り給はざりしその年の秋の頃(二)、さやうなら

む人もがな、とは思ひ侍りし」と宣へば、君うら笑ひ給ひて、あて宮(三)なき人の御様

にこそ。かの君は、物を思ひしけにやあらむ、見苦しきことなむ見え給ふ」と宣

へば、祐澄「あはれの事や」(四)などて、祐澄常にもとぶらはむとすれど、流石にも

騒がしくてのみなむ。大方をばさるものにて、思しかけむことなどは、などか宣

はぬ。かの宮に侍りし物ども、いかでかは、などか斯うなども宣はせざりし」(五)

あて宮「それは、かねてより「さやうのこと、思はむにこそさせむ」と宮の宣ひしか

ば任せ奉りてなむ」宰相の君、祐澄「金などのいと多く侍りしを、いかでせさせ

給ひけむ」あて宮「それをなむ、し煩はせ給ふ。上に奏せさせ給ひ、上にさふらふ陸

奥國の守などに召しつとなむ。さても足らざりければ、下には他物入れさせぬと

なむ聞きし。人や見けむ」祐澄「中納言こそ取り寄せつよいとくはしく見給ひけれ」

① 祐澄父母に對面、仲澄の追薦。

〔語釋〕

(一) 誤あるべし、「たのため」とも又「たのため」

(二) 仲忠

(三) 東宮をも

(四) 仲忠をいふ

(五) 仲忠を

(六) 「外にまかり通ふ所なく侍りしか」歟

(七) 俊隆女は一人子なれど仲忠をあの方に立派に養ひ立てたり

君、あて宮「恥かしの事や」と宣ふ。宰相の君まかで給ひぬ。

畫詞

こよは藤壺。

かくて北のおとどにまうで給ひて、祐澄事の序に藤壺にまうで侍りしかば、しか

じかの事を宣ひしはや」大宮かの産屋の折のことを思ひたるなより。天下にいふ

とも、たゞ人は限あるものを。あねにはたのめとおほえなむとおほえさふらひて、

かたち心するわざに心つくものなれば、左衛門督をぞ、ねたくなど思ふらむ。さ

て、宮をも心に入れ奉らぬなるべし。あれにはまた目ざましき人にはたあり」宰相、

祐澄「男に侍る祐澄だに、憎くも侍らざりし人なり。故侍従は、これを妻子のやう

にてこそ、これにまかり通ふ所ならず侍りしか。男だちだに然る心ありし人を、

この事侍らで夜晝さふらはせ給ふなること侍るらむ、と思ふこそいと不便なれ」

大宮、「うたて近き所に聞えもこそあれ」宰相、祐澄空言を申し侍らばこそは侍ら

め。「よくも知りて侍るかな」とこそ聞召さめ。人は一人なれど、かやうにこそ子

(七)

(語釋)  
(一) 仲澄

(二) 行くべき處へ行かれぬ様に

(三) 誤あるべし

(四) 女一宮、仲忠の妻

(五) 詔澄

は養ひ立て給へ。此のわたりこそ、豚の侍らむやうに、物の用にすべきものなく、  
稀々よろしかりしは、はかなくてまかり隠れにしかば。まめやかには、故侍従の藤  
壺の御夢に思の罪に、途ならぬやうに見え侍る」など申し給ふ。おとど、正頼「何  
事をかは然思ひけむ。我等をつらしと思ふこともあらば、官爵のことは限あれ  
ば」御いらへ、詔澄「男は女につけてのみこそは」正頼「此の中には誰かは」詔澄「中  
のおとどの宮たちの中にこそは」大宮、心を得給ひて、然ば然なりけりと思ほし  
て、いみじう泣き給ふ。おとど、正頼「など然る氣色見給ひしや」宮、大宮「否や。  
然もあらずや。なほ然るらむ。かよる氣色ぞやみ給ふ。すべて、よくもあれ悪し  
くもあれ、男女にてぞあるべかりける。中の大殿にて、夜晝ありて、憎けな  
き人々のあまたものし給ひしかば、さやうなるにやありけむ」おとど、正頼「一の  
宮なりけむ。それぞ人に思はれぬべき様し給へる」宰相の君、をかしと思へど、  
かたはらいたければ申し給はず。この君、一の宮をいかでと思しける。今は二の

(一) 語釋  
(二) 仲澄

(二) 「なむど」は「など」歟

(三) 「ある人」は「あてこそ」歟

(六) 仁壽殿  
(八) 正頼

(考異)

(四) 中らひに—中らひなるに

(五) こと—ナシ

(七) 斯う—か

白犬宮五十日の産養。彌正宮大宮と物語。仲忠夫婦の物語。正頼夫婦の物語。

宮をいかでかと思せど、聞え寄るべくもあらねば、心一つに思す。さて、祐澄「こ

の人の爲めに、なほ誦經などせさせ給へ。その誦經の文には、「なほ思ひの罪免ら

かし給へ」と右大辨季英の朝臣に仰せごと賜ひて、願文書きてせさせ給へ」と聞

えて立ち給ひぬ。おとど、正頼「この朝臣、そよめきたりけるは。いとまめなりと

見るものを、なむどたはことは多くしつる」宮、大罵「ある人をぞ、年頃けしきあ

りて聞えけるや。それを今はと思ひて、言葉散らすなめり」おとど、正頼「うたて、

疎からぬ中らひに、かよる事どものありけること」と宣ふ。かくて待従の君の爲

に四十九日の内に、布七匹づつ誦經にせさせ給ふ。

畫詞 ことよは北の大殿。

かくて犬宮の御五十日は、女御の君し給ふべきと、内裏に聞召して、これより忍び

て奉らむと思して、頭中將實頼に、朱雀「斯う—思す事なむある。かの右の

大臣の家にはあらぬ所にて、そのこと物せよ。その具の物どもは、納殿

(語釋)

(一) 實賴の父季明

(二) 實賴に贈る

(三) 實賴が注文して

(八) かざりにつけたる造り枝

(考異)

(四) ことなりければことなりそれ

(五) 無くては一ならで

(六) 同じき一同じ

(七) 敷物一ナレ

にあらむ物どもを、用に隨ひてものせよとおほせ給へば、大政大臣の曹司にて、

銀の鍛冶、鑄物師など召して、急ぎさせ給ふ。「仰せごとにて、かよる事し給ふ

なり」とて、所々より、檜割箆手をつくして奉り給ふ。さもしつべき人々には

「かよる事なむある」と言ひて、せぬ所なく、この事急がす。

かくて其の口になりぬ、女御の君、大宮の御方に、仁齋、犬に餅くはすべき日にな

む侍りける。如何にすべきわざにか」と聞え給へり。大宮、「人に知らせでするや

うに、いと多かることなりければ、こよにのみなむ。わいてもろく無くてはせ

ぬ事になむ」女御の君、仁齋、いかでかは。いと多くさふらひたり。其方にやは參

るべき」と聞え給へれば、大宮、今其處にを」とて、大宮、今日だにわたりて見む」

とておはしましたり。頭中將、御前どもの物など參らせ給ひぬ。犬宮の御前に

は、銀の折敷、同じきたかつきにするて十二、御器どもは、わたり三寸の沈を、

轆轤に挽けるなり。餅四折敷、からもの四折敷、くだもの四折敷、敷物心葉、い

と清らなり、又、御前どもの料に、浅香の折敷十二づつしたり。檜割籠五十荷、皆沈、蘇枋、紫檀などなり。臺枋なども同じ物、袋しき物のくより緒などもいと清らなり。いり物は、皆まるり物、かたへはかさね割籠一かけ、御前に参るばかりしたり。たどの割籠五十荷そへて参れり。御前の折敷どもは、大宮、一の宮、女御の君の御前に参る。重ね割籠、中とりて、宮、中納言などには参る。内侍のすけ、大輔の乳母よりはじめて、御たちまでなり。檜割籠三十荷、たどの五十荷そへて、内侍のかんの殿に、女御の君御消息して、

仁壽日頃聞えざりつる程に、かよる日までもなむ。それより。

など書きて、

仁壽これは、

いかくときよわたれども今日をこそ餅くふひとわきて知りぬれ

とて奉り給ふ。藤壺に同じ數に奉り給ふ。かくて餅参るべき時なれば、その



(考異)

(一)からくしてーからう  
じて

(二)すくよかになりー  
「に」ナシ

(三)とーナレ

時になりぬれば「疾くく」とあれば、兒君いと出だし立て難くし給ふ。からくして御湯殿などして、綾の御衣一かさね著せ奉りて大輔の乳母といふ抱きて参りたり。女御の君かき抱きて見せ奉り給ふ。大宮見給へば、いと大きにて、頸もすくよかになり、白ききぬに柑子をつよめる様に見えて、いと白く美しげなり。(三)

大宮「これを今まで見せ給はざりける。かゝる人いと多く見つる中に、これはまだ見ぬ様なり。かよらぬだに、さてもありぬべくなるを、いとをかしかめり」女御の君、「いざ、見にくし」として隠さるれば宮、大宮「されど、親たちにも勝り奉りぬべかめり」として餅参り給ふ御折敷見給へば、洲濱に、高き松の下に、鶴二つ立てり。一つは箸一つはじくひたり。松の下に、黄金の匕して、帝の御手してかよせ給へり、

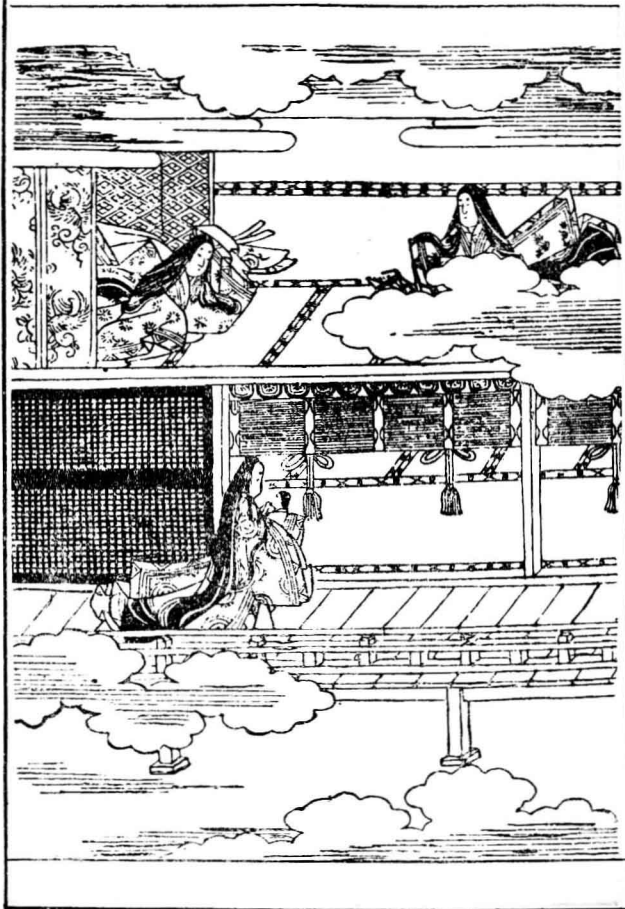
朱雀みどりごは松の餅をくひそめて千代々々とのみ今はいはなむとあるを大宮見給ひて、白き薄様に書きておしつけ給ふ。

(考異)  
 (一)ちとらでーちとして

大宮我をりて松のもちひをくはすれば千歳もつきておいよとぞ思ふ  
 女御の君に、大宮「かよる事ありけりや」とて奉り給へば、書きておしつけ給ふ。  
 仁壽おいのよに千代をのみ知れみとり兒のまつ餅をいとどくふらむ  
 とて一の宮に奉り給へば、物も宣はず。これかれ、「いかでか」など宣へば、  
 女一くひそむる今日や千代をもならむ松の餅に心うつりて  
 とかき給へれば女御の君、折敷ながら中納言の御許にさし出で給へば、取りて見  
 るやうにて、

仲思千歳ふるまつ餅はくひつめり今はみかさのおとらでもがな  
 とかき給ふを、彈正の宮、「見む」と聞え給へば、仲思「いとかしこき御手はべれば、  
 え見給はじ」とてさし入れつ。宮、忠康「許されざらむ人のやうに」とて御簾の内  
 にはひ入りて見給ひて、忠康「暇なしや。」

忠康ひめ松も鶴もならびて見ゆるにはいつかはみるのあらむとすらむ



と書き給ふ。大輔の乳母、ほとりに押し付く。

大輔みどりごの千代てふことは人ごとにならびて誰にと思ふものかはとあるを人々見給ひて、「乳母ごとわりや」とて笑ひ給ふ。

かよる程に、内侍のかみの殿より御返あり。御使は、白きうちき、はかまかづきたり。御文見給へば、

俊藤女これよりも聞えむと思ひ給へるを、日頃はえ聞えさせぬことの侍りてなむ。さても聞召しつけたるをなむ。

聲かへずいかといふ兒をいかでかはけふのなごりと人の聞きけむいと耳敏なりや。

と聞え給へり。かくてもちひ五十日物など参りて、これかれ物聞食して、犬宮は、乳母いだき奉りて入りぬ。

大宮彈正の宮に、大宮などか、彼方にも時々わたり給はぬ。數多おはすれど、か

〔語釋〕  
(一)五十日の當日を

(二)五十日を小兒の泣聲の「いか」にかけたり

〔考異〕  
(三)五十日物一まるり物

〔語釋〕  
(一) 忠康をいふ

(二) 「などか」 歎

(三) 君を聲にとり奉りたく思ひ居るやうなるに

(四) 忠康の了簡

(五) 母の仁壽殿にいふ也

(七) あて宮

(一〇) 仲忠

〔考異〕

(六) なくかうーなくは

(八) 人を一人をば

(九) 志ある一志しぬる

たじけなければ、一所をばことにこそは思ひ聞えしか。いと疎々しくこそ思したれ」三の宮、忠康年頃は、身の數ならぬを思ひ給へつよみてなむ」大宮、「などは旅住のやうにては、これもかれも、さてあらせ奉らまほしけに思はれたるを。見給ひつべきも、いとよう聞ゆるや」三の宮、忠康昔より數にも侍らぬ身なれば、誰かは然思ひ侍らむ」大宮、「などかは然思さるよ」女御の君、「いざや、この御心にぞ見給へわびぬる。藤壺の里におはせし時、はかなきことを聞え給ひけるに、いらへ給はざりき、とてそれを倦じて、法師のあらむ様にてのみ、歎きわたり給ひて、ある時は「きんちが拙く、我を人氣なくかう生み出だしたる」とさへぞ宣ふや」大宮、「更に承らざりし。かの人を、兵部卿の宮も然宣ひき。さてはあるまじきことなり、と三條の大將さ宣ふと聞きき。源宰相こそ、志あるやうにきよ侍りしか。更にこそ知らざりけれ」御いらへ、忠康多くも聞召し残したりけるかな。いとみじき事ども多く侍りしものを。まづは彼處ぞ」とて中納言を見やり

(語釋)

(四)あて宮の事を

(一)東宮

(考異)

(一)給へちめー給ひつちめ

(二)三の宮ー彈正の宮

(三)とはーとこそは

(五)多かなればー多かなれば

(六)とかくーとくーも

(七)同じーをかしき

(八)交通はしー文あるはかへし通はし

(九)ものは「は」ナン

(一〇)給へりしー給へる

給ひて、忠康「こよにこそ、同じ所にて、よくは知り給へらめ。然宜ひけることも  
 や、思しあはする事も侍らむかし」と宣へば、宮をかしとおほす。中納言苦しとお  
 ほす。三の宮、忠康「さればこそは、なほ昔より數ならずとは」大宮、「など、はかば  
 かしく斯くなどは宣はずなりにし。然らましかば、ともかくも聞えてましもの  
 を。宮仕にとて出だし立てたれど、思ふやうにもあらず、後やすく頼み聞えし人  
 さへ許さず、心憂きことどもの多かなれば、常に思ひなげくと聞き侍れば、いとう  
 たてくなむ。なほ心安くてあらずべかりけるものを、と思ふ給へつるに」三の宮、  
 忠康「いとあるまじきことかな。何かとかく思ふ給へざりき。たゞ答し給はざりし  
 をのみなむ。今に心憂くなむ。同じやうに交通はしなどし給へりし人も、まめや  
 かなる心あるものは無かめれど、こよには、志をだに昔ながらにとてなむ。年頃  
 は何にか思ほし志して参らせ奉り給へりしかひありて、宮はたこと御心の無  
 かめれば、いとよかめり。さいつ頃召ありしかば、内裏に参り侍りしついでに、

(二)

(三)

(四)

(五)

(六)

(七)

(八)

(九)

(一〇)

(語釋)

(一)あて宮

(二)東宮が

(四)今宮の産は何時ぞろぞ

(考異)

(三)にぞーにナシ

(五)にかはーぞ

(六)なしやーなかりき

かの御局にまうでたりしにも、いと思ふ様にておはすめりき。多くの人の惑ふめりし御身を、一所見奉り給へば、然らではかひなからむかし。かの君も、今はよづき給ひにければ、まうでたりしにも、いと氣近くものなど宜ひき。早う斯うにてこそはおはすべかりけれ、となむ思ひ給へりし。御容貌もこよなくなりまさり給ひにけり。さは言へど、やんごとなき人につき奉り給ひて、こよなくもてなされ給ひにけり、とぞ見奉りし」大宮、「何かそれは、常に物を思ふなれば、むかしの様にだにえあらじや。いと久しく見侍らずや。去年の秋あからさまにまかだせて侍りしかば、「あなすりて籠めするたり」などいと憎けに宣ひしかば、煩はしさに參らせてき。常にまかでむと宣はすれど、まかださせねば、いみじく恨むるや。この晦ばかりにぞ、然せむと思ひ給ふる」女御の君、「源中納言のはまた何時ばかりにかは」大宮、「いさ、この頃とぞありしかど、まだ然りけもなしや。それこそいとようなりにたれ。髪などもいとよう生ひためれ、さるは、苦しげな

(語釋)

- (一)今宮をこそ忠康に奉らんと思ひ居しに不意に涼に與ふべき勅命ありしかば本意を遂げざりき
- (二)「家の處分」にて財産處分の様なりといふ意歟
- (四)大宮
- (五)大宮
- (七)多くの子を見たる目
- (九)我女一と夫婦にならざりしならば今も彈正宮の權を心持て居るならん
- (一〇)女一ならでは我があて宮に對する戀を忘れさせるものはあるまじ
- (考異)
- (三)御物語一御物語など
- (六)宣ひつる一宣へる
- (八)とか一とかや一とや
- (一〇)失はせ給ひつるこそ一失はさせ給へるこそ

る程なめれど。それをこそ、昔は然も聞えむと思ひしか。思はぬ様なることの出

で來にしかば」三の宮、忠康「それも、え然も侍らざらまし。いへのさうぶのやうに

こそ」など暮るよまで御物語し給ひて、大宮もわたり給ひぬ。女御の君も御方々

へおはしぬ。宮、もののはじめなり、とて例のごと取り散らせ給はず。

かくて中納言、内に這ひ入りて、犬宮かき抱きて、仲忠「犬をば、宮はいかど宣ひ

つる。おほくの御目に恥かしくこそ」宮、女「見せざりけりなどこそ」仲忠「見

くしとやありつらむ」女「親どもには勝りぬべしとか」君、仲忠「仲忠、宮とある

は、さもや見し。さては怪しうはあるまじきものなより」宮、女「よしとこそは

思ひけれ」君、仲忠「内侍のすけの言ひしかばこそ。さればこそ聞かせつべしとは

聞えしか。彈正の宮の御物語、承りつるこそ、然ることぞと思ひ給へつれば、

哀なれ。こよにさふらはざらましかば、かく思う給へてぞ侍らまし。その御心を失

はせ給ひつるこそ、吾が君はいと嬉しくおほえ給へ。他人はかく思ひ消たせざら

はせ給ひつるこそ、吾が君はいと嬉しくおほえ給へ。他人はかく思ひ消たせざら

はせ給ひつるこそ、吾が君はいと嬉しくおほえ給へ。他人はかく思ひ消たせざら

はせ給ひつるこそ、吾が君はいと嬉しくおほえ給へ。他人はかく思ひ消たせざら

はせ給ひつるこそ、吾が君はいと嬉しくおほえ給へ。他人はかく思ひ消たせざら



(一) 暗釋

(二) ちて宮

(三) 此處誤あるべし

(五) ちて宮を見たる人は  
氣狂の様にたるが常故

(考異)

(一) 初は―ものを

(四) ちらむ―侍らむ

(六) いまそがり―いまそ  
がり

(七) 何とかは―と―ナシ

(八) ちちたくともまほこ  
そは―こといたくともか  
れをこそは

まし。初はじめは、いとこそ佗わびしかりしか、こよにまうで來こし夜よまでは。見み奉たてまつりしか  
 ば忘わすれ侍はべりにき。今いまはた犬いぬなど侍はべれば、然さ思おもひ侍はべりけむとこそ。たゞ御心ごころのつら  
 からむにこそ、彼かれにまさりても。たゞかの御方かたに御志ごころざしなく思おもはれたるなむ、恥はぢ  
 かしくいとほしくは、さて侍はべりても何なにの効かひかあらむ。源宰相げんさいしやうなどのあはれにて物もの  
 し給たまふめるも、たゞ今いまは取り分わきたる事こともななめり。疎いとからぬ御中ごなかにこそ、かく  
 おはしたるもよけれ。物思ものおもし知しらざりけむ昔むかしこそ然さりけめ、今いまは世よの中なかもの思おもし  
 知しりたれば、折せりあらむ時ときは、とかく聞きこえ給たまひつよもななくさめ給たまひけむ。餘所人よそびとにと  
 ても何なにのかひかは。さてまかで給たまふべかなるを、この聞きこえしこと必ずかなら「宮、女に「言い  
 ひしやうに、見みたる人の物狂ものぐるほしきやうなれば、其處そこにも然さやと思おもふにぞ」君きみ、  
 仲思なほ「何か、今いまは天女てんによいまそがりとも、何なにとかは見み給たまへむ。たゞ斯かかる中なからひに侍はべ  
 るを、さる志こころざしもありしに、覺束おぼつかなからじ、とてこそ。もし初はじめはちちたくとも、  
 なほこそは。そのかみは、御前まへを他人たにびと取り奉たてまつらば同じ事ことぞや」宮、女に「怪あやしの

(語釋)

(一) 来て宮

(五) 出家したるをいふ

(七) 来て宮こそその様に  
てありしが

(八) 正頼

(九) ト者などのいふ也

(一) 骨折りて表文を作  
りくれよ

(二) 未詳、誤脱あらん  
か

(考異)

(二) 所々に一人と

(三) 歌かるれ一なかれし

勳正頼大將を辭す。

(四) 然は一さも、

(六) はぬし一ナシ

(一〇) 申せども納められ  
ぬ一申すを納められず

(二三) このしき一こしき

人がはりや。かの君は、我だに、同じ所(三)にありならひて、所々(四)になりしかば、いと戀(五)しくて、常(六)に歎(七)かるれ。え然(八)はあらぬものから、仲頼(九)などが様(一〇)にあるは、見苦(一一)しくこそは(一二)ぬし、仲忠(一三)いとゆよしき事(一四)。よし見給(一五)へ、必ず(一六)など聞(一七)えて大殿(一八)ごもりぬ。

宮(一九)に、おとどの聞(二〇)え給(二一)ふ、正頼(二二)犬(二三)は如何(二四)ありつる」大宮(二五)いみじく生(二六)ひ出(二七)でぬべき者(二八)にこそあめれ。宮(二九)のぞかやうにありしかど、これはいと氣色(三〇)殊(三一)にこそ見(三二)えつるや」おとど、正頼(三三)父主(三四)の、今(三五)からいと心(三六)にくよもてなすめるは、如何(三七)におほし立てむとすらむ。世(三八)の中にありにしがな」と宣(三九)ふ。

かくておとど、年(四〇)も老(四一)いぬ、慎(四二)むべき様(四三)にも言(四四)ふを、と思(四五)して、大將(四六)辭(四七)し給(四八)ふ御表(四九)、一度(五〇)は奉(五一)らせ給(五二)ひてしかど、返(五三)されたれば、又(五四)奉(五五)らせ給(五六)ふ。此度(五七)も留(五八)められず。右大辨(五九)季英(六〇)を召(六一)して、正頼(六二)かうく公(六三)に申(六四)せども、納(六五)められぬ。實(六六)に思(六七)して留(六八)めらるべく、御心(六九)とどめられよ。このしきは、留(七〇)められれば、論(七一)なうこの

(二二)(二三)

〔語釋〕

(一) 仲忠に大將を譲りた  
き趣を含めて辭表を作り  
てくれ

(四) 「宣へば」は「宣ひ  
て」歟

(五) 仲忠

〔考異〕  
(二) てを―てよ

(三) 綴り―つくり

わたりにぞあらむ。そのこと藤中納言の朝臣にもがな、と思ふを、その心を思ひ  
て、かの朝臣に譲りけなる氣色とらせてを」と宣へば、すなはち御前にて綴り、  
書きて奉る。見給ひて、正頼「思ふやうなり」と宣へば、此度はとどまりなむ、  
とて奉らせ給ひぬ。

かよる程に、内裏より中納言の君の御許に、大將かけ給ふべき御消息あり。おと  
ど、宮に、仲忠「かうくの事なむ、仰せられたりつる。設の物などせさせ給へ」  
と申し給ふ。かよる程に、内裏より御辛櫃一よろひに、唐綾やまと綾、織物、一  
つにはきぬ入れて、「これ、かの日の設のものにし給へ」とて宮の御許に奉り給  
へり。又源中納言の北の方の御もとより、あか色の織物の唐衣、から裳、すり裳、  
縁のほそなが、三重がさねのはかま添へたる、女のおよそひ五くだり、置口の衣箱  
にたよみ入れて奉れ給へり。こよかしこより、皆かやうにし奉り給へり。こ  
こにもまうけ給ふ。花紋縁など皆具せられたり。

御仲忠兼右大將に任ぜらる、参内、女官等の評判、俊隆の家集を漁覽すべき勅を受く。

(語釋)

(一) 右大將兼左大將に轉じ仲忠兼右大將となる

(二) 正頼

(四) 今宮に

(五) 相手のなき意歎

(考異)

(三) 唐衣濃き—唐衣それも濃き

かくてその日になりて右は左にうつり給ひ、中納言の君右大將かけ給ひつ。御よろこびとて、御装束、蘇枋がさね、繚のうへのはかまなど、あり難きうつしに入れ染めて、装束きて出で給ふまよに、宮をかみ奉り給ひ、北のおとどなどによろこび申し給ひて、右のおとどの御方にまかで給ふ。御供には四位八人、五位十餘人、六位三十人ばかり、御隨身ども、御前すべき人然らぬも多かり。方々の御前をわたりておはすれば、「あなめでたや」など言ひさわぐ。源中納言殿の方を見やり給へば、青色の簾に綺の端さして、懸けわたしたり。勾欄におしかよりて、簀子に童八人ばかり、青色に蘇枋がさね、繚のうへのはかま、濃きあこめ著て竝み居たり。御簾の内に、四間五間にあか色の唐衣、濃きうちきども著たる人居竝みたり。大將立ち留まりて、仲忠君はおはすや「童へ申す、「今朝内裏へ参らせ給ひぬ」おとど、仲忠「御方に聞えさせ給へ。よろこび申しになむ。此度はかたきなき心地するを、かつは聞えさする」とて、遣水のほとりよりおはし過ぐれば、う

〔語釋〕

(一) 風俗の謠ひ物なるべし

(二) 兼雅也、右は「左」の誤なるとべし

(三) 「心」は「こと」の四聲

(四) 方々の女に關係せし仲忠を

(五) 「の」衍文なるべし

〔考異〕

(七) たり一た

(八) 東宮にせず

(九) 仁壽殿は猶時マ仲の妃たちに帝の寵を争はると缺點あり

なるども扇あふぎをたよきて、「名取川なとりがはに鮎釣あゆつるおとどの」と謠うたひあへり。大將見みやりて、

仲忠ちゆうちゆう「さ宜のたまふとも、え知らずや」とておはしぬ。右のおほ殿とのによるこび申まうさせ給たまひ

て、それより車くるままはさせ給たまひて、内侍ないしのかんの殿とのにまうで給たまひぬ。それより内裏うち

へ参まゐり給たまひぬ。

かくて陣入ぢんいり給たまふより人々ひとびとめづらしがる。女御にようご、更衣かういの御局つばねの前まへわたり給たまへば、

人々ひとびと、「いと珍めづらしく参まゐり給たまへるかな。久ひさしく見みざりつる程ほどに、めでたくもなり勝まさ

り給たまふかな。猶なほ女一にようの宮みやこそいと心憎こころにくけれ。そこと心人こころに知しらせざりつれども、

物言ものいひ觸ふれぬなかりしものを、あからめもせさせで持も給たまへるよ。仁壽殿にじうでんの女御にようごの、

思おもふやうにめでたき人ひとなり。宮仕みやづかへは、同じおなき帝みかどと聞きこゆれど、上うへにかぎりなく時ときめ

かされ奉たてまつりたり、女むすめは、かく世よに類たぐひなき人ひとに、一ひとつなく思おもはせたり。めでたし。

男御子おとごたちは、いと美うつくしげに、容貌かたちよく、人ひとに譽ほめられつよ、あまた持もたり。たゞ

后きさきにするゑ、坊はうにするすといふばかりにこそはあめれ」又他人またひとのいふ、「されど、こ

(論釋)

(一)あて宮

(二)東宮になるべき皇子は有ちたり

(三)承香殿、嵯峨院の女四宮

(四)あて宮をいふ

(五)嵯峨院等

(六)季明の女、陽陽殿

(七)「藏人どもして上に」なるべし

(八)朱雀の心

(九)仲思が女一を何と思ひ居るならん

(考異)

(八)此方にを「を」をナシ

れは時々人まうのほりなです。東宮のこそいみじかなれ。又二つ人あるものとも

知り給はで、年頃になりぬ。などか、坊がねは持たり、いみじきものなめりかし。

院の御方は、夜晝音をぞ泣き給ふなる。昨日今日、兒みどりごと聞きつる人によ

りて、わががよる恥を見つること。さりとして院にあらむとすれば、過もして寄せ

られぬやうに、上たちも思すべし。交らへば心肝安からぬこと」とこそは歎き給

ふなれ」誰々も皆然にこそは。おほき大殿の君はた、大聲をはなちて、夜晝拜み

のろひ泣きのよしり給ふれ。慰め聞ゆれども聞き入れ給はずとや」など局々言ひ

さわぎ給ふ。

大將の君、藏人ども上によるこび奏させ給ふ。上朱雀「斯く、よろこびは正しくな

りにけるを、なほ此方にを」と仰せらるれば舞踏し給ひて、上りてさふらひ給ふ。

上とばかり物も宣はで御覽するやう、わが女を、いと怪しうはあらじとてこそ取

らせしか、いとこよなくもなり勝りにけるかな、如何に見給ふらむ、など思ほし

(拾遺)

(二) 仲忠とは室男の關係なるをいふ

(四) 「世間のこと知られ侍らぬ」などなるべし

(六) 傍の意歟

(七) 「りさう」は「家集」を音便に「かさう」といへるより誤れるにて俊隆の事ならんと春海翁の説なり

(考異)

(一) 久しくは「は」ナシ

(三) がたうてーがたくて

(五) ものども其處に—ものどもなし藤英がため殊に輕しやことなるもなればそこに

入りて、とばかり思ひしみ給ひて、朱雀(一)などかいと久しくは。先づ頃節會などあ

りしに、參られやすると思ひしに、然もあらざりしかば、いとさうふしくなむあ

りし。人よりは睦しかるべき心地するを、疎(二)き上達部などよりは。されば、物せ

られむこそよからめ」大將かしこまりて、仲忠(三)日々(四)に參り來べく侍るを、月頃(五)仲

忠が先祖に侍る人のし置きて侍りける書どもなどの、いと侍りがたき所に、棄て

たるやうにて侍りけるを、さすが人のえ取り失はで侍りけるを、いと見捨てがた

うて、取り出でて侍る、累代の書の抄物といふ物見給ふとてなむ。文書といふもの

見給へつきぬれば、世間のこと侍らぬものなりければ、籠り侍りぬる」上、朱雀「よ

き事にこそはあなれ。學問など心に入れてものせらるゝは、公の爲にもいと頼

もしき事なり。高麗人も來年は來べき程なるを、博士の男どもとても、昔の如く賢

きものども殊に少ければ、藤英が(六)かたへ殊に輕しや。其處(七)にありつぎては、りさ

うの朝臣をこそは頼もしきことには。それをはなちては、賢しと思ふ者どもぞあ

〔語釋〕

(二)「それをば然るものにて」なるべし

(四)俊隆の父

(七)なくりーなり

(八)文書に―ふみの序に

〔考異〕

(一)無き書なく侍りけり―なき書などは侍らざりけり

(三)朝臣―朝臣の

(五)そのーナレ

(六)俊隆―俊隆の朝臣

らぬと思ふに、さる文書、文などをさへ尋ね出でられたらむ、いとかしこき事。  
 萬の書どもなど、具して皆ありや」仲忠「みな具して、無き書なく侍りけり。俊隆  
 の朝臣の、手かき侍りける人なりける盛に有識に侍りける、それが皆、書き讀み  
 て侍りける、またく細にして侍るあり。それをぞ然るものにて、いとみじき物  
 をなむ見給へつけたる」上、朱雀「如何なるものぞ」大將、仲忠「家の古集のやうなる  
 物に侍り。俊隆の朝臣唐土に渡りける日より、父の朝臣の日記せし一つ。詩、和  
 歌しるせし一つ。その亡せ侍りける日まで、日づけしなどして置きて侍りけるを、  
 俊隆歸りまうでける日まで、作れることも、その人の日記などなむ、その中に侍  
 りし。それを見給ふるなむ、いみじう悲しう侍る」など奏し給ふ。上、朱雀「など  
 か今まで物せられざりつる。有識どもの、いみじき悲びをなしてし置きたる物、  
 けに如何ならむ。なほ朝臣は、ありがたきもの領せむと成れる人にこそあれ。疾  
 く見るべき物なより」大將、仲忠「見給へしすなはち奏すべく侍るを、かの文書にい  
 (七)

(八)



〔語釋〕  
〔一〕唐土一本「もたらう」に作る、「もたらう」は「渡唐」の誤歟

〔四〕近衛府の官人などを遷離する筈なるべければ

〔考異〕

〔二〕つゝみて―つゝしみて

〔三〕崇なきし―崇なきまじ

〔五〕時―時に

ひて侍るやうは、「唐土のあひだの記は、俊蔭の朝臣のまうで来るまでは、他人見るべからず。その間、靈添ひてまもる」と申したり。俊蔭の朝臣の遺言に、「この書は、俊蔭後侍らず。文書のこととは、はかなき女子知るべきにあらず。二三代の間にも後出でまうで來ば、そが爲なり。その間、靈よりて守らむ」となむ申して侍る。それにつゝみて今まで奏せ侍りつる」上、朱雀賢かりし人なれば、朝臣を後に得べしと知りたるにこそは」大將、仲崇にその文書をおきて侍りける所年頃は、あたりにまかり寄る人は皆死に侍りける。その藏開かせ侍りしかば、ほとりに侍りしもの、「いとおどろくしき事せさすめり。多くの人々徒らになりぬ」と怖ぢ侍りし」上、朱雀朝臣の讀みて聞かせむには、その靈ども、よも崇なきまじ。今日はつかさのものども勞ることあらむを、今日過して、しめやかならむ時、その家の集どもも、詩の抄物どもも持たせて物せられよ」と宣ふ。承りて立ちたまひて、後の宮に參り給ふ。

仲忠東宮に參る。東宮  
あて宮と仲忠の聲。

〔語釋〕

(一)仲忠は前にも近衛の  
中將なりしをいふ。

(三)此仲忠の詞誤脱あら  
んか。

(四)引歌未詳

(六)「ばへ」の「へ」衍又歟

〔考異〕

(二)今もーそも

(五)君よりそとみくれば  
大方こそー君よりそもみ  
みにもおぼえんこそ

それより東宮に參り給ひて、まづ上によるこび申させ給へば、藤壺になむおはし  
ましけるを、出で給ふとて、藤壺にまうで給ひて、孫王の君して御消息など申さ  
せ給ふ、仲忠「久しくさふらはざりつるを、今日はよろこびになむ。わいても聞召  
し古りたらむに、珍らしけなくや」と聞え給ふ。孫王の君、御前に聞ゆれば、宮、  
東宮「そや、右大將の御消息あめりや」とて告げおどろかし奉り給へば、君、あて宮、年  
頃ちかきまもりに聞き侍りつるを、今もかけ離れ給はざるを、喜び聞えさせむ。  
珍らしくなむと承るを、今日の御心地のやうに」と言はせ給ふ。大將、仲忠「今  
日のやうに思されば、いとおほかるべき日になど聞え給ふよとて忘れはて給ひた  
らむなと」孫王の君、「誰がならばしの」といふ。いらへ、仲忠「君よりそとみよ  
には、大方こそともかくもあらめ。私心をあらむものを、などか思し棄てたる」  
孫王の君、「それも今はなぞ」大將、仲忠「むかし思しなすか、萬忘れずながらこそ。  
いかにぞ宮の御心ばへ」孫王「昔ながら、今はまして立ちまさりもし給はでぞ、む  
(六)

〔語釋〕

(一)あて宮が

(四)仲忠の舊情を思出してか時々むやみに怒りて我を憎むは、あて宮にいふ也

(五)「給ふはや」なるべし

(六)容貌舉動などは我非常に仲忠に劣りたれども

〔考異〕

(一)それを「」をナシ

(三)給ふ日も一給ひひる

廣

開(上)

つかられおはしますめる。よからぬ事の様々に聞ゆるまよに、御心もゆかで、「まかでて心をだにやらむ」と聞え給へど、ゆるし奉り給はねば、夜書ぞむつかりおはします」仲忠「このよからぬ事の筋には、梨壺のも安からざらむかし。これを思ふこそ、かたはらいたけれ」孫王「いで、それをのみぞ。いさよかなる御事は、聞え給はず、思し隔てたる御氣色なくて、時々まうのほらせ給ふ日もわたらせ給ふ時あるまでは、憂きことのみに」君、仲忠「まことにや、ことばは聞えぬばかり給はる」孫王の君「何しに侍らむ。まづ御後見はこならぬこともとこそ」仲忠「いで自らのよろこびよりも、先これを申さむ」孫王「あひなうすかせ給ひて、そがよろこびをせさせ給ふらむよ」など立ちながら宣ふを、宮御簾の内に立ち給ひて見給ひつよ、東宮「いと警策にもなり勝りにける人かな。如何にあらむとて、斯くあるらむ。いとかよるをも親などはゆよしと見るらむかし。この昔の心おほし出でたる時が、取りも敢へず、たどむつかりにむつかりて憎み給ふてや。かたち、する

(語釋)

(一) 東宮ともある者は女一人を守るものにはあらざれども

(三) 他の女を寵すること  
はなし

(四) 仲忠、梨壺と仲忠とは兄妹也

(五) どの妃たちをも前々の様に寵愛ありてこそ

(七) 正類

(八) 大宮なるべし

(考異)

(二) ゆく先―ゆく末

(六) こそは―は―ナレ

わざこそ、こよなからめ、志(こころざし)はならぶ人(ひと)あらじ、とぞ思ふや。かやうにてある

人は、一人(ひとり)につきてはあらざなれど、其處(そこ)に人(ひと)をならべては見せ奉らじとこそ、

今もゆく先も思へ。参り給ひて後(のち)はことに然る事(こと)もなし。梨壺(なしつば)ばかりこそ、心も

おいらかに、見る目(め)もきたなけなきうちに、親(おや)なども心(こころ)ある人(ひと)なり。この朝臣(あそん)の

聞くやなど思ひて、時々(ときどき)まうのほらせ、渡りて見(み)などもすれ。それも、然(さ)なせそ、

と思さば、さも偽(いつはり)じかし」君(きみ)、あて寫(あや)いと怪(あや)しきこと。誰(たれ)も、早(はや)うおはしけむ様に

ておはせばこそ、さふらひよからめ。さらではいと聞きにくよなむ」宮(みや)、東宮(とうみや)、さ

覺(おぼ)えざらむ事(こと)をば如何(いかん)せむ。そこばかり、もの思(おも)はせ給ふ人(ひと)こそなけれ。里(さと)にも

のし給ひし時も、夜晝(よるひる)こそは思(おも)ひしか。やむごとなき事(こと)ありて、まかで給(たま)ひても、

長居(ながる)をのみし給へば、いかどは思(おも)ふ。すべてまかでなし給ひそ」君(きみ)、あて寫(あや)いとわ

りなき事(こと)。いかでか小(ちひ)き人々(ひとびと)を見奉(みたまつ)らでは」宮(みや)、東宮(とうみや)、それは、呼(よ)びにやりて見

給へ。此處(こゝ)にも見(み)む。おほいまうち君(きみ)などは、こゝにて逢(あ)ひ給ふめり。今(いま)一所(いほ)は、

(七)

(八)

(語釋)

(一)「あるとし給へれば」  
歟

近衛府の鷹の親宴。

(考異)

(二)「上中下」中「ナレ

(三)「まかて給ひける」上  
達部などは立ち給ひける

文して萬のこと聞え給へ。里住し給ふ時は、つれくいにいと便なくて、物も食は  
れずなむ」など更に許さじとぞ思し給へる。

畫詞

こよは藤壺。

かくて大將殿は、梨壺にまうで給ひて、物など聞え給ひてまかて給ふまよに、御  
つかさの人待ちうけ奉りて、おし立てて遊びて、殿におはす。殿には、あるべ  
き様に御座所しつらはれたり。例の中のおとどの南の廂に、幄ども打ちわたし  
たり。中將少將參らぬ人なし。いといかめしくし給ひて、夜一夜あそぶ。さる  
物の上手のあるじとなれば、いかで難なく聞かれ奉らむとて、遊ぶこと限なし。  
曉がたに皆、少將よりはじめて、上達部、物かづき給ふ。上達部は、例はかよ  
るわざなきを、はじめの度なれば、  
上中下、別の祿など賜ひわたして、明くるま  
で遊びてなむまかて給ひける。

(三)



# 藏開(中)

## 梗

● 仲忠祖先の遺文を遊覽す。東宮以下列席。俊隆が入唐の日記。帝の東宮に對する教訓。仲忠帶を賜はる。○ 仲忠退出。仁壽殿女御に帝の仰を傳ふ。恩賜の帶を正頼に示す。正頼帶の來歴を語る。◎ 今宮男子を産む。仲忠母の許に招かる。◎ 仲忠父と語る。梨壺懐胎の事を告ぐ。父の妻妾を一所に集めん事を乞ふ。涼に産養の物を贈る。◎ 仲忠、女三宮の邸へ父の使にゆく。女官に菓實を投げつけらる。◎ 復命。菓物の中の文。兼雅の述懐。女三宮等を迎ふべき準備。◎ 涼の家の子産養。

## 概

● 仲忠祖先の遺文を遊覽す。東宮以下列席。俊隆が入唐の日記。帝の東宮に對する教訓。仲忠帶を賜はる。

〔語釋〕

(一) 仲忠

〔考異〕

(二) 見ゆれば―見ゆるは

かくて一二日ありて、大將殿内裏の仰せられし文ども持たせて参り給ひて、其の由奏せさせ給ふ。帝、朱雀、此の朝臣に見ゆるこそ恥かしけれ。警策に心憎くて、見るに神さびたる翁にて見ゆれば、女一の御子の面伏なりや」と宣ひて、うち假粧じ給ひて、晝の御座におはしまして、召し入れて、朱雀「いづら」と宣へば、沈の文箱一よろひ、淺香の小辛櫃一よろひ、蘇枋の覆したる一よろひ持て参れり。

〔考異〕

(一) 切りて―もしきりて

(二) 厚さ一ツつありナシ

(三) 手づから點し―みづから

(四) 讀ませ―讀ませせ

(五) 七八枚―七八枚のふみ

明けさせて文箱を御覽すれば、文箱には、唐錦を二つに切りて瑩じたる、厚さ二寸ばかりにつくれる一箱づつあり。俊蔭の主の集、其の手にてまな文に書けり。今一つには、俊蔭の主の父式部大輔の集、草にかけり。朱雀手づから點し、讀みて聞かせよ」と宣へば、文机の上にて讀む。例の花の宴などの講師の聲よりは、少しみそかに讀ませ給ふ。七八枚讀みて、やがて一度は訓に、一度は聲に讀ませ給ひて、面白しと聞召すをば誦せさせ給ふ。何事し給ふにも聲いと面白き人の誦したれば、いと面白く悲しければ、聞召す帝も御しほたれ給ふ。大將も涙を流しつと仕うまつり給ふ。悲しき所をばうち泣かせ給ひ、興ある所をば興じ給ひ、可笑しきをば打笑はせ給ひつと、こと御心なく聞召しくらす。上達部、殿上人等は、大將の、仰にて御文講せさせ給ふとて、参り集ひ給へり。されど、人に聞かせじとて、高くも讀まず、御前には人も参らせ給はず。誦せさせ給ふばかりをぞ僅かに聞きける。



〔語釋〕

(二) 女一宮に

(三) 「西の御方」歟

(六) 君と隔りて寝る夜はせめて衣とでも語らひて慰むべしといふ意歟

〔考異〕

(一) しめやかなれば夜一なりとまた

(四) ちいぢかにもといふこと侍るなり一ちいぢといふこと侍るなり一ちいぢにもといふてはべなり一をいかにといふこと侍るなり一ちいぢといふこと侍るなり

(五) わびても一わいても

(七) 置口の一置口かりの

(八) 下袴一下袴を

かくて仕うまつり暮らす。上、朱雀(一)此の頃は夜長にしめやかなれば、夜聞かむ。なまかでそ」と宣へば、夕暮(二)に殿上に出で給ひて、宮(三)に御文奉れ給ふ。

仲思まかで侍りなむとすれど、御書聞召し(四)さして、夜仕うまつれと仰せらるれば

なむ。夜寒を如何(五)にとなむ。南(六)の御方おはしまさせ給ひて、諸共(七)にを。犬召

して御前(八)にさふらはせ給へ。まかで侍るまでは、御帳の内出(九)でさせ給ふな。

おいらかにもといふこと侍るなり。誠(一〇)や宿直物賜はせよ。わびても、衣(一一)だに

と語らひて。なめし。中務の君讀み聞え給へ。

とて奉り給へば、あか色の織物(一二)も、たどの綾(一三)も縮入れて、白き綾(一四)のうちき重ねて、

六尺ばかりの貂(一五)の裘(一六)、あやの裏つけて、綿(一七)入れたる、御包(一八)に包ませ給ひ、置口(一九)

の御衣箱(二〇)三よろひに、いと赤(二一)らかなる綾(二二)、かいねりのうちき一重(二三)、同じ綾(二四)のうち

き重ねて、三重(二五)がさねの夜の御袴(二六)、織物(二七)の直衣指貫(二八)、かいねりがさねの下袴(二九)入れ

て、包(三〇)に包みたり。色香擣目(三一)、世(三二)になくめでたし。はなちの箱(三三)、泪坏(三四)の具など奉

れ給ふ。御返は中務の君、

斯くなど聞えさせつれば、御宿直物奉らせ給ふ。夜寒は、何ともまだ思し知らずとなむ。犬宮は然おはします、と聞えさせよ、となむ。

とて奉れ給へば、大將見給ひて、「あぢきな宣旨書や」と獨言ちて宿直装束しかへて、召あれば参り給ひぬ。

(三) 帝の御膳部のおさがりを戴かせよ

夜さりのおもの参る。朱雀「靱負やある」と召し出でて、朱雀「此の朝臣勞れや。里

(四) 「五宮の」なるべし

にてうしろめたく思ふらむ。此處にておろしを物せよ」とておろさせ給ふ。朱雀「こ

れを彼を」など御覽じつどけさせ給ふ。后腹の宮にさふらひ給ひけるに、酒殿

(考異)  
(二) 里にてーさぞ

に御酒召して、朱雀「書は酒こそはやせ。近衛は酒はなれては何業かせむ」と宣ひ

(五) くしはーくしそ

て賜ふ。五宮に、朱雀「くしは」など宣へば、五宮「檜割籠侍り」上、朱雀「さらば強ひ

よや。去ぬる年の十五夜に、そこち強ひためり。此處にても」と宣ひて御覽じて、「斯ばかりに」とて賜へば、兎も角も聞えで、賜ふ限り飲みたる、いと良きほ

(一) 辭釋

(二) 以下朱雀の心

(四) 我が手前をかねて實は愛せねども愛する振をするのか知らぬと

(七) 私の琴が俊隆の様に上手なればよからんに

(八) 「言ひ」なるべし

(九) 夜警の武士のいふ也

(一) 考異

(一) 呑み果てて一呑みて

(三) 人にこそありけれ一人にぞありける

(五) 女御参り一女御更衣發り

(六) 沈みにしぞかし一沈みつく大臣にもえならずなりにしぞかし

どなり。酒などうち呑み果てて、文に對ひたる火影、顔ありさま、いとめでたし。

上、見る目よりも近まさりする人にこそありけれ、一の宮まことに志ありてや

思ふらむ、又我が心を思ひたるにやあらむと思す。斯くて書讀ませて聞召す

女御参り給へり。其の夜は承香殿の御宿直なり。夜更け行く儘に、文讀む聲誦す

る聲も、いと哀に面白し。上は琴の琴かき合せつよ、誦せさせ給ひつよ、聞召す。

朱雀「あはれ、此の朝臣の、昔琴を習はしたらましかば、如何によからまし。此

の事によりて、身も沈みにしぞかし。大臣にもなりなましものを」大將、仲忠「い

とあぢきなう侍る人にこそ」上、朱雀「あなにく、もどきしにこそ」大將、仲忠「其

の朝臣のやうならましかば。かれはいといみじう侍りけるものを」上、朱雀「空言

かな。彼の朝臣には、音もこよなく勝りたりと聞きたる人も言へ、聞きしに然こ

そあれ」と宣ふ程に、「丑の前」と申せば、朱雀「夜更けにけり。暫し打休みて、つ

とめてこそ」と宣ひて入らせ給ひぬ。

〔語釋〕

(一) 仲忠

(二) 「牛の様にては」歎

〔考異〕

(三) 何なり—何なる—なりけり

(四) と—とて

大將の君は殿上に臥し給へり。此の君さふらひ給ふとて、殿上人いと多かり。寢入らで身じろき臥し給へれば頭中將、實賴昔は寐きたなくおはせし殿の、などかうしの様にてはさふらひ給ひにたるぞや」と宣へば、仲忠「そへに」といらへて臥し給へり。

つとめてになりて、上、起きさせ給ひて、殿上の方にみそかにおはしまして垣間見をし給へば、大將殿、人の見ぬかたとて、奥に向きて文書き給ふ。

仲忠昨夜ばなどか御返は宣はせざりけむ。覺束なくなむ。宿直物賜はせたりしにつけても、

から衣たちならしてしもよしきの袖こほりつる今宵何なり

いかでうちはへて、とこそ思ひ給へつれ。今日もや宣旨書は、いみじうこそ思ほしおとしたれ。

と白き色紙に書きて、咲きたる梅の花につけて、主殿司に、仲忠宿直所に男ども

〔語釋〕

(一) 祓澄

(三) 仲忠が女一宮を

(四) 仲忠が

(九) 人に見らるるかと思ひて白筆では書かざりき

〔考異〕

(二) とてーといひて

(五) 青きーあかき

(六) 擇びてーてーナレ

(七) 御返とてー御返事と

(八) 思ひ給ふゆりー思ふ

めり

あらむ。取らせよ」とて賜へば、宰相の中將の君の御子、宮はたと言ひて八つばかりにて殿上にあり、それ、宮はた「まろをつかひ給へ」とて、奪ひ取れば、仲忠「など斯くは宣ふ」と宣へば宮はた、「宮の御もとなれば」と言ふ。大將、仲忠「其をばなど」と宣ふ。宮はた「父君の思ひ奉れ給へばまろも」とて取りて、殿上口に立てる侍の人に取らせつ。上は、疎には思はぬなめり、つとめて文やるは、と見給ひて、やをら入らせ給ひて、例の御座所におはしまして、暫しありて召せば、裝束して参り給ひぬ。五の宮も御前にさふらひ給ふ。

さて御書仕うまつる程に宮はた、青き色紙に書きて、吳竹につけたる文を捧げてきて、宮はた「宮の御返」とて持て騒ぐを大將殿、仲忠「暫し今」と言へば上、朱筆持て來や」とて取らせ給へば大將殿いとかたはらいたく、苦しと思ひ給ふゆり。上御覽すれば、

女一昨夜は散らされもやするとてなむ。思ひおしたりとかありし。其のわたり

〔語釋〕

(一)朱雀の心

(三)「あ」を「文」に作る、これによれば「こ」は衍文歟

(七)私の所へ参りて

〔考異〕

(二)御手に似て―御手の

(四)たゞに―だに

(五)ざなり―ざんなり

(六)ざなれば―ざんなれば

(八)にかあらむ―にかはあらむ

にては、

消えずのみ見ゆる思ひもあるものを何か袂の凍りしもせむ

誠や装束どもも物せさす、昨日のが見苦しかりしかば。これも殊更にぞあな

る。

といとをかしげに書き給へり。女御の君の御手に似てあてに若くは見のれど、お

となしくも後見おこするかな、と思して、押し巻きて投げ遣はしつ。大將賜はり

て見て、仲忠何事にか侍らむ」とて懐に入れつ。上、東宮に、五の宮を御使に

て、朱雀昨日よりいと有り難き書をなむ、右大將に讀ませて聞き侍る。わたりて

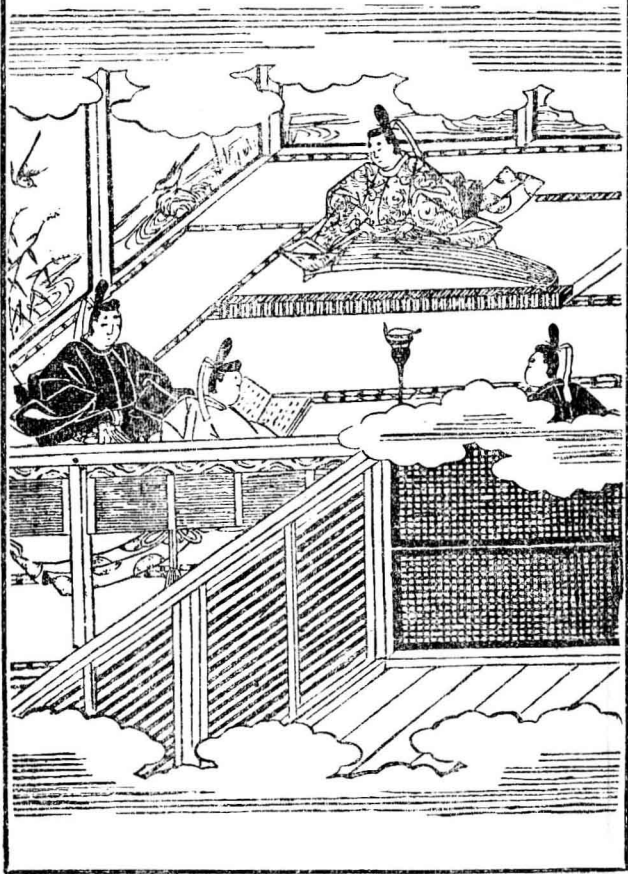
聞き給へ」と聞え給ふ。五の宮打笑ひ給ひて、五宮「えのほり給はじ。更にたどにお

はせざなり。吾が所に籠りおはして、上にも物し給はざなれば、男ども侍る所に

まうで來つよ、此の月頃御前にさふらはぬ事。すべておほん顔なむ見奉らぬ」と

なむ嘆き侘び申す」上、何處に物せらるよにかあらむ」五宮藤壺ならでは何

(八)



(講釋)

(一) 嵯峨院第四の皇女承香殿

(二) 仲忠の妹梨盞

(三) 承香殿は嵯峨の愛子なり

(四) 嵯峨の皇女なるべし祐澄の北方

(五) 祐澄は前々より仲忠の妻たる女一の宮に心を寄せ居る故女三に冷淡なる也

(六) 夫を持たぬが上からん

(七) 「大將は」は「こは」の隠歟

(浮異)

(一) 給はざなり給はざるなり

(二) 孕み給ひてにんして

(三) などいといと

處にかは。他人を知り給はどこそあらめ」朱雀「御子を如何にし奉らむ」宮、五宮「そ

れは、今年いまだ對面し給はざなり。すべて、誰も見奉ること難く、如何なら

む隙にか侍りつらむ、この御妹こそ、時々見奉りて、孕み給ひて侍るなり」

朱雀「あたらし人、色の心ものし給ふこそあなれ。世の中は、いと能く保ち給ふべ

しとこそ見れ。文にも「酒を好み内を好む」とこそ記せるものを。四の宮如何に

思すらむ」五宮如何に聞召すらむ。其が中にも院の御愛子なり。など言痛くのみ

あらむ」朱雀「女三の宮もいと哀にて物せらるなり。祐澄の朝臣も如何しなさむ

とものすらむ。すべて女御子たちは、たゞに物せられむこそよからめ。身に良か

らぬ宮たち多く持たるや」と宣ふ程に、東宮の御使歸り來りて、「唯今まうのほる、

となむ仰せられつる」と奏す。巳四刻ばかりになりぬ。

畫詞

大將は殿上にも調じするたり。宿直所に、宮よりも臺盤所よりも、參れり。御前より立ち給ひて、宿直所に下りて居給へり。來り物ども調じする



(語釋)  
(二)東宮といふ

(考異)  
(一)大將を召せど暫し  
大將目をしばし

たり。御装束は蘇枋がさね、縁の上のはかまなどにて、いと清らにかうばし  
くて奉れ給へり。四位、五位數多參れり。装束解きひろけて臥し給へり。

午の時ばかりに東宮いみじく清らに装束き給ひて、まうのほり給へり。御褥など  
參りて、御前におはします。大將を召せど暫し休むとて、まうのほり給はず。御

装束しかへて參り給へり。物の色うつくしさ類なく、匂深くて、例の御書仕う  
まつる。聞召しくらして、暗くなりて、まだ御殿油まゐらぬ程に、大將下り給

ひて、藏人して奏せさせ給ふ、仲忠「まかで侍りて、つとめて參らむは、如何侍ら  
む」と奏せさせ給ふ。上、朱雀「暮れ難く明けやすきうちに、夜なむいと興ある。參

でられずやよからむ。また客人の物し給ふを」と宣ふ。大將いたく歎きて、宮に  
御文奉れ給ふ。

仲忠今朝は喜びてなむ。すなはちと思ふ給へれど、「まかでなむ」と侍りつれど、  
許させ給はねば。其のわたりにとか侍りつるは、あな古めかしや。

(語釋)

(三)「心にもあらで世世にながらへば」の歌は三條院の御次也時代可考

(考異)

(一)昔のみきりにしものを一昔へはきえにしものを一昔へとききりにしものを

(二)左右に奉りたりさちらにたてたりさちらに奉る

(四)とも一とてとも一とて

昔のみきりにしものを程もなき戀にぞそではいろ燃えぬべき  
昨日は今日こそ侘しきものは。誠や、きたなきものは賜はり侍りぬ。犬は如何。聞えたりし様にや。

とて、昨日の御装束どもは奉れ給ひつ。暗き程になりて御返なし。

上よりしきりに召せば、物など参りてまゐり給ひぬ。上、朱筆書は、夜なむいと

興ある。今宵は此處に聞き給へ」と東宮に聞え給ふ程に、雪少し高くなり、御殿

油まゐりて、短き燈臺左右に奉りたり。上の御前に琴の御琴、東宮の御前に箏

の御琴、五の宮琵琶、御前ごとにうち置きて、大將は書讀み給ふ。上あからさま

に入らせ給へる程に、大將書の點直すとてある筆を、東宮取らせ給ひて、御懐

紙にかく書きて、藤壺に奉り給ふ。

東宮今宵は書聞けとのたまへば、心にもあらでなむ。ながらふともいふなるもの

を、

(三)

(四)

(語釋)

(一)宮はたは

(三)「すとて」は「すなり」歟、一本「するなり」として

(四)あて宮

(五)「何ならむ」歟

(七)東宮の心

(八)誤あるべし

(九)あて宮の事をあきらめては居れど

(一一)東宮が

(考異)

(一)佐しさいはかなさ

(六)にては「は」ナシ

(一〇)騒げば一騒がれて

(一一)多くすべきを一すべきに

白雪しらゆきのふればはかなき世よの中なかを獨ひとりあかさむことことの侘ちやしさ

あらむ世よの限かぎりだにこそ。

とて宮みやはたに取とらせ給たまふ。これは藤壺ふぢつばをおやにし奉まうりて、東宮とうぐうの殿でん上じやうもすとて、

持もて参まゐりて奉まうれば君きみ、白しろき紙かみに、

あて宮みやうきことことのまだ白雪しらゆきの下消したぎえてふれどとまらぬ世よの中なかはなぞ

憂うれからぬはとこそ。何なにかならむ、思おもひ給たまへられず。

とて宮みやはたに、あて宮みや上うへ、大將たいしやうなどの御前おんまへにては、な奉まうりそ」と宣のたまふ。参まゐりて、宮みや

の御後おんうしろにさふらふ程ほどに、御書おんふみよ讀よむさかりに、上うへあからめし給たまへる間まに、宮取みやとりて

見給みたまひて、世よの中なかを心憂こころうれしとも思おもひたるかな、心こころに身みを任まかせば、人ひとの心こころごとごとによ

りて、ななどうち涙なみだぐみ給たまひて見給みたまへるを、大將たいしやう見合みあわせ給たまひて思おもひやみにしかど心こころ

地ちうち騒さわげば、鎖しづむとすれどひが讀よるを多くすべきを、點てん一つも讀よみ誤あつたぬを、怪あや

しと思おもして、打うちほと笑わらみ給たまふを、大將たいしやう見奉みまうりて笑わらひぬ。上うへもえ念ねんじ給たまはで笑わらは

〔語釋〕

(三) 解しがたし

(四) 誤あるべし

(五) 侵陸

(六) 「手こそ」は「こそそ」歟

〔考異〕

(一) 面白し聲うちしづめて面白くあり聲うちしづめて面白しうちしづめて

(二) 雲居をうがちて一雲居にとほりて

せ給ひぬ。大將いとほしと思ひて、かい直して、いと面白く讀みなす。其の聲いと面白し。聲うちしづめて、いと高く面白く誦する聲、鈴を振りたる様にて、雲居をうがちて、面白きこと限なし。御前なる御琴ども搔き合せ給ひて、朱雀、書の祿に何よかりなむ」と宣へば、五の宮「又はいかでか。此の度にはまかりならばや」上、朱雀「いと難からむ。文才には何かは」とて御時よく笑はせ給ふ。朱雀「さて、是はしばし斯くて、此の冊子を讀まむ」と宣ひて、今一箱のをはじめて讀ませ給ふ。これはいと讀みてあり、あはれに面白さも優れり。上、「文才はなほ此の朝臣のは優れりけり。怪しく此の族の手こそ優るなるかな」と宣ひて、夜一夜面白き句ある所を誦せさせ給ひて、御琴どもに合せさせ給ふ。曉方に、いと面白き所あり。大將に誦せさせ給ひ我も誦し給ふ。五の宮に、朱雀「誦せよ」と宣へば、ともかくも宣はで、打出でて誦し給ふ聲いと面白し。東宮誦し給はず。かくて、曉方になりぬ。東宮に、朱雀「なほ明日ばかりは此方にを。いと御心つき

〔語釋〕

(一) 祐澄は其方の姉を愛するか

(二) 女三の宮祐澄の妻

(三) 女三が

(四) 父は何れの宮を得たしといふぞ

(六) 父が彼處の外に思ふ所なしといふ故仁壽殿へ行きてみればといふ事歎

(八) 「よし」は「さかし」歎

〔考異〕

(五) とか「か」ナシ

(七) そこ…かは―そこのをおきていづれかはわか―そこのをこえていづれかは

ぬべきもの侍り。それ見せ奉らむ」とて御几帳たてておはしませ給ふ。上は

入らせ給ひぬ。五の宮は、臺盤所に入り給ひて、藏人たちの中に御殿籠りぬ。大

將は、侍に出で給へば、宮はたともに往ぬ。大將臥し給ひて、宮はたを懷に臥

させ給ひて、語らふ、仲忠「姉君は、大きになり給へりや」宮はた、「大きにもなり

給はず。小さくもおはせず」と言へば、仲忠「御髪は長しや」宮はた「いと長けなり」

大將、仲忠「父君は、うつくしうし給ふや」宮はた「いさ知らず。弟宮をこそ、夜晝抱

き給へ」仲忠「いで弟宮は、幾らほど大きにおはする」宮はた、「今ぞ立つめる。い

とをかしけなり」と言ふ。大將、「など父君は、宮をば思ひ奉り給ぬぞ」宮はた「いさ、

南の方に出で居て、餘所人に見なし奉りつる、とて泣きなどこそし給へ」大將、

仲忠「何れの宮をとか宜ふ」宮はた、「そこをおきていづれかはと言へば、内裏の上

の御許にまうづれば、いと清らにて常に見え給ふぞかし」大將、仲忠「などて其をば

思ひ奉るぞ。見奉らむとや」と言へば、「よし」と言ふ。仲忠「さて御文は取り入る

思ひ奉るぞ。見奉らむとや」と言へば、「よし」と言ふ。仲忠「さて御文は取り入る

(一) 語釋  
(二) あて宮に

(四) 「なきこと」は「なきくそ」歎

(五) 仲忠

(七) 女一宮

(八) 仲忠が

(考異)

(一) 女に—女房に

(三) 給ひつる—給へる

(六) よかなる—よかんなる

(九) よべは—「は」ナシ

るか」宮はた、「然ぞかし」大將いみじう笑ひて、仲忠「我も得させむに物な思ひそ。さて藤壺に参らば、仲忠なむ然聞ゆる」とて、「日頃さふらへど、暇の侍らねば、え参り侍らぬ」と申し給へ」など言ふに、つとめてになりぬ。

宮はた起くれば、頭かいつくろひ、装束せさせて遣りつ。藤壺に参りたれば、御たち、「あな芳しや。此の君は、女の懐にぞ寝給ひける」宮はた「然かし。右大將のおとどの御懐にぞ寝たりつる」御たち、「女にこそは」と言ふ。上に申し給ひつること聞ゆれば、君、あて宮「さふらひ給ふと承れば、頼もしき心地なむ。御暇の頃は、然いふ様あなり」と言はせ給へば大將、仲忠いとけやけくも、よからぬことなきこと」など聞え給ふ。藤壺「此の君は何處なるぞ」と問ひ給へば、「殿上に」と言ふ。藤壺、孫王の君に、あて宮「彼の言ひしことは、今の間にぞよかなる」と宣ふ程に、

宮の御文あり。見給へば、

女よべは思はぬ様に有りしかば、夜もすがらなむ。何事をか然までは。

(考異)

(一)つちからぬ！つちが  
ちむ

(二)な思しそ暫しと一な  
ほちほぞらにはと

(三)御返は一御返りごと

(四)ゆくしくーむみじく

(五)なくもーなくと

(六)いかでーちきて

とて、  
ふるかひの何かなからむあわ雪も積れば山とならぬものかは

女二つらからぬをのみこそ。然らぬ事をばな思しそ。暫しとあればなむ。  
(二)  
(三)  
對面に  
たいめん  
たいめ

とあり。御返は、

仲忠山となる雪ぞゆよく思ほゆるたえて越路のものところ聞け  
(三)  
(四)

其れをこそ思う給へあるまじけれ。

と聞え給ふ。

かよる程に雪高く降りぬ。大將の君、宮の御許にかく聞え奉り給ふ。

仲忠夜の間は如何。御返も給はせざりしかば、覺束なくもなむ。更に散らし侍り  
(五)

ぬものを。

かくばかり見ねば戀しき君をいかで知らで昔をわが過しけむ  
(六)

(語釋)

(六) 涼、藤英、忠澄、「中納言」は「楯中納言」なるべし

(考異)

(一) 思しや知らむと一思し知るちむと一思しや出るちむと

(二) 犬こそ一犬こそこそ

(三) 御返一御返事

(四) には一は

(五) 思して一おもはして

(七) 此の一ナシ

(八) 夜に「夜」ナシ

(九) 得ぞ「ぞ」ナシ

(一〇) おがりし一おがりし

と聞えさするも思しや知らむ、と思う給ふるこそ。かつは犬こそいと戀しう侍れ。我が君、御懐に抱かせ給へ。今朝の雪こそいと寒けなれ。(三)

と聞えて御返見て御前には参らむ、昨日の様にもぞ持て騒ぐ、と思して、暫し参り給はず。(四)

殿上には、源中納言、右大辨、中納言、他人もいと多かり。右のおほい殿の君たち、數多ものし給ふ。源中納言、大將の君に申し給ふ様、涼などか君は、昔より

いかばかりかは契り聞ゆる、此の御書を承らむとて、妻子の懐を捨てて、斯く寒き夜に、ふるふくうちはへさふらふ効なく、一文字をだに聞かせ給はぬ。(八)

少し高くだにやは仕うまつり給はぬ」大將、仲思「仰せごとあれば、高くは得ぞ。そが中に、苦しう侍れば、聲も出でず」中納言、涼さて、いかで昨夜は、一度は

雲をうがちて、空にはあがりし。此の主こそは、我が世の末の博士とは思ひつれ。(一〇)

それすら、酒を参りて、惑ふまで、讀みのよしらせ給ひしかども、腸の斷えしか



(四) 語釋

(五) 未詳

(七) 未詳

(一) 奉り給へり」衍歟

(考異)

(一) 立ちやすき御腹いたやすき御耳

(二) よろしからめーよろしくは

(三) 給ふとー給へと

(四) 出で來まじき事どもなりー出づまじき事なり

(六) げにばうぞくのーけんかしぞくの

(八) もものーいを

(九) 同じきーき」ナシ

(一〇) むすび袋ーすき袋

(一一) 地黃煎ーざかうせん

ば、御聲おんこゑの限かぎりをこそ聞き侍りしか。文字もじ一つも覺おぼえぬは、すべて君きみは、涼すずしをぞまどはし給ふ。琴きん彈ひき給ひては、はだか鶴脛つるまにて走はらせ給ひて、殿てん上じやうまで笑わらはせ奉り給ふ。大將たいしやう、仲思ちゆうし立ちやすき御腹おはらにこそあれ。今いまも聞き給ふまではえ仕つかうまつらじや」中納言ちゆうなごん、涼すずしなほ物の底そこにな讀よみ入れ給ふぞよろしからめ」大將たいしやう、仲思ちゆうし「石の辛櫃からびつに入るとぞかし」右大辨うだいべん、藤英とうえい、壁かべの中に納まめさせ給ふとにやあらむ」大將たいしやう、仲思ちゆうし「さては、主ぬしぞ埋うづもれ給はむ」中將ちゆうじやう、行政ぎやうせい、明王めいわうの御世みよに出いで來くまじき事ことどもなり。此この御書おんがみ祕ひせらるよよし、行政ぎやうせいこそ承うけたまりつけたれ。理ことわりなり。けにばうぞくの身みこそあぢきなけれ。誰たれか聞き知りたらむ」など言まふ程ほどに、藤壺ふぢうはより、大おほきやかなるしふたいの程ほどなる瑠璃るりの甕またひにおもの一盛ひと盛り、同おなじき平坏ひらつきに生物なまもの、凹坏くぼつきに干物からもの盛もりて、同おなじき瓶かめの大きおほなるに御酒おほみき入れて、銀しろかねのむすび袋ぶくろに、信濃梨しなののなし、干聚ほしなつめなど入れて、銀しろかねの銚子てうしに、地黃煎ぢわうせん一調子てうし入れて、奉り給へり。炭取すみどりに小野そのの炭すみ入れて奉り給へり。集あつまりて興きやうじて、皆みな取りすゑて參まゐる程ほどに、大おほなる銀しろかねの提子ひきしに、

(調務)

(一)取手

(三)誤あらん歎

(四)「こもち」は「こもち」歎

〔考異〕

(二)羹—あつちもの

(五)こもちしちらむ—こもちもあらぬ

(六)なかりしいと—なかりしかど

若菜わか菜の羹あつちもの一鍋ひつねべ。蓋ふたには黒方くろほうを大おほなる土器かはらけの様ようにつくりくほめて、覆おほひたり。  
取所とりどころには、女おんなの一人ひとり若菜わか菜摘つみたる形かたをつくり、それに、孫王そわうの君きみの手てしてかく書かきたり、

孫王君きみが爲ため春日かすがの野邊のべの雪間ゆきまわけ今日けふの若菜わか菜をひとり摘つみつる

羹あつちものをば、かくなむ仕つかうまつりなりにたる。聞召きこしめしつべしや。

(二)

と書きつけて、小ちひさき黄金こがねのなりひさごを奉たごまつり、雉子きしの脚かじ、おり物ものに高く盛りて

添そへ奉たごまつり給たまへり。集あつまりて笑わらひのよしれば、上うへ、朱雀しゆせきなど、此こゝの朝臣あそんの、今日けふ

(三)

は遅おそく出いで來きて、かく言いふは」とて例れいの所ところよりのぞかせ給たまへば、臺だざん燈たんに物ものすゑて

取とりなしつとまるる。御酒みきなどまるる程ほどに、例れいの宮みやはた、陸奥紙むらつのこがみのいと清きよらなる

に、雪降ゆきふりかよりたる枝えだに文ふみを付つけたる持もて來きて、宮みやはた「宮みやの御文おんふみ」と捧たごけてひろめ

かす。源中納言げんちゆうなごん、速はやこちしあらむ御文おんふみを斯かうして、悪あしかめりや「大將たいしやう、仲愚ちゆうぐ」今け

(四)(五)

日はいとよしや。昨日きのふ御前みまへにて斯かくしたりしこそ淵瀬ふちせもなかりし。いとらうがは

(六)

(一) 詔釋  
(二) 仁壽殿の

(三) 朱雀の推量

(四) 殿上の間にては

(考異)  
(一) 後より―後に

しう」とて取りて見給ふ。後うしろより上うへも御覽ごらんすれば、

女おほつか一覺束おぼつかなしとかあるは、御前ごまへにとのみ聞きけば、上うへもこそ見給みへとてなむ。思おもひ

出いでむとや。

かぎりなくありし昔むかしの見みえしかば今いまも我われにはあらじとぞ思おもふ

とてぞ聞きえにくきや。からうじて物思ものひ知られたりけるかな。問まひ給たまへ人ひと

は、あなた(三)の御懷みごころにのみぞあなる。

とあるをいとよう見給みひて、度々たびたび文造ぶんぞうりなどするは、いと葦あしがしろにはあらぬなめり、

いかで今暫いまはしすゑて、せむ様見やうみむ、と思おもして御心ごこころ地ちおちる給たまひぬ。還かへりおはして、

つれなくて居給ゐへり。

上うへには、酒飲さけのみのよしりて、彼かの鍋なべの蓋ふたの返事かへりごこは、物取ものり食くふ翁おきなの形かたを、食物おものを

丸(四)かして造つくりすゑて、それにかく書かき給たまふ、

仲忠しゅうたへの雪間ゆきまかきわけ袖そでひぢて摘つめる若菜わかなをひとり食くへとや

(語釋)

(三) 食器を取集めてよこしたる故にいふ

(考異)

(一) あつもの―あついもの

(二) 此の―ナレ

(四) 雜役に―さにも、を

(五) 「などとて」なるべし

(六) 薰衣香―くまかう

あつもの時は未だ過ぎ侍らざりけり。  
(二)

とて奉れ給ふ。物など食ひ果てて大將、此の奉れ給へる物どもを、さながら取り

集めて返し奉り給ふとて、孫王の君の御許に、仲思「これをいと全く返し奉るは、

明日にもいと疾く賜はらむとて。器物侍らずば、求めさせ給はむほど遅くや、と

てなむ」と宣へり。孫王の君などいみじく笑ひ給ふ。孫王空言人にて、今さへも

そらごとし給へるかな」とて、孫王「いとよき御厨子所の雜仕なりけり。わきても

土器をぞ一つ失ひたりける。衣の袖解かれぬべう」と聞えたれば集まりて笑ふ。

大將、仲思「いまふるを雜役に奉らむ」などとて、酔ひて臥し給へり。上より、遅し

とて召せば、仲思「涼の朝臣、酒を強ひて給ひ侍りつるに、前後も知らでなむ」と

空酔をし、空言をして参り給はず。帝、休むならむと思して、暫し召さず。

かくて巳の時うち下りての程に、青鈍の繚のはかま柳がさねなどいと清らにて、

今日のうつしは、麝香たきもの、薰衣香、物ごとにし盡したり。さてまうのほり

(六)

(考異)  
(一)今日は一よへの

(二)ばかりよりは一ばかりには

(三)つくりて一ツマリて

(四)日ごとに一ひとに

(五)心してを一心せよ

給へば、今日は俊蔭の主の集を讀ませ給ふ。讀みくらして暗うなりぬ。上、朱雀いと日高うはじめつ。更にな立ちそ」と宣ひて、御殿油いと疾くまるりて、讀ませ給ふ。亥の時ばかりよりは、これは暫時止めさせ給ひて、小辛櫃開けさせて御覽すれば、唐の色紙を、中よりおし折りて、大の冊子につくりて、厚さ三寸ばかりにて、一つには例の女の手、二行に一歌書き、一つには草行同じこと、一つには片假名、一つは葦手。先づ例の手を讀ませさせ給ふ。めでたきこと限なし。

四所さし向ひて、日ごとに讀ませて聞召す。今宵は後の宮まうのほり給へり。此方の御たちいと多かり。斯かる事ありとて、御簾のもとに旨の宮おはせば、上は、大將に御目くはせて、密に讀ませさせ給ふ。後の宮、「御たちにご聞かせ給はざらめ、講師は心してを」と宣へば、え讀まで、爪くひもてさふらふ。上、朱雀いと悪き朝臣なりけり。かくな憶せられそ。唯言ふに隨ひて讀め。これは誰もく讀みつべけれど、さらに他人の讀むまじき由のあれば、まづ讀まするぞ」と宣へ

〔語釋〕

(一)字音のまゝによむ也

(二)后宮が聞きて解する也

〔考異〕

(二)聲にも「ザン」聲にも

(四)所々所

(五)所々所

(六)今宵と一今宵も

(七)京に歸りまうぞ来て女の一京の女の

(八)彼には「は」ナレ

ば、すこし高く讀む。所々は聲にも讀む。後の宮、いみじう憎み給ふ。されどいとよく聞召す。他人はえ聞き知らず。聞召し知りたる限は、上も東宮も、泣き給ふ。(三三)したる様は、唯有りつることを、物語の様に書きしるしつよ、其の折の歌どもを付けたり。おもしろき所々も悲しき所々も有り。(四)

かくて、曉方になりて、上、朱雀かよる理なり。(五)此の母御子は昔名高かりける姫、手かき、歌よみなりけり。院の御妹、女御腹なりけり。然りける人の、さる折々にし置きたりける事なれば、かくいみじきなり。是は、女一の宮には見せたりや」大將、仲島見給へつけし所にて、外題ばかりをなむ。さては今宵となむ、開きては見給ふ」上、朱雀彼處にて講ぜらるべきものなり」とて、朱雀「これは暫し」とて、朱雀「今一つを」とて御覽すれば、これは俊蔭が京より筑紫へ出で立ち、唐土へ渡りたりける間よりはじめて、京に歸りまうで来て女の上を言ひそめて、言ひつよ折々に歌あり。これが面白く悲しきことは彼には優れり。其の卷にしも取

(八)

(論釋)

(二年の暮の儀式)

(四)こゝに仲忠が居れどもこれは後々の後見もせさすべき人なれば帽るべきに非ず

(七)籠姫

(考異)

(一)などーナン

(三)ちとーナン

(五)ゆく先ー御ゆく先

(六)おはしてーおはし給ひて

りあたりて、開召して、朱雀「これは内侍のかみの見るべき事どもにこそあめれ。

見たりや」と宣ふ。大將、仲忠「さも侍らず。これは見せ侍らむ」と取り換ふ

れば、朱雀「なほ見はてよ」とて御覽するに、面白く悲しきこと限なし。又こと

に取り換ふる巻は、蓮華の花園にて、天人かけり給ひし時、讀み集めたること

ども、其のよし記せるなり。上めで給ふこと限なし。朱雀「夜明けぬべし。長き

夜をしも盡すべくもなき事どもなめり。今は、これ等は唯に見む。集ども、日記

どもなどをなむ、讀ませて聞くべき。それは、佛名すぐしてせむ。此の朝臣、い

と苦しと思ひためり」と仰せられて、東宮に聞え給ふ。朱雀「其の事となければ、

對面することいと難し。かよる序に、聞えむと思ふことどもあり。此の朝臣こそ

あめれ、それはゆく先の御後見すべき人なめれば。月頃聞けば、上にも物し給はず。

と言ふなるを、御上におはして例の作法に、政事あらせてこそさふらはせ給はめ。

思す人あらば、夜はまうのほらせ、晝は上局賜ひなどしてこそ。例に違ひて聞ゆ

〔解釋〕

- (一) 嵯峨院が
- (二) 承香殿は
- (三) 榮を様にと承香殿に
- (四) 中し
- (五) 中し
- (六) 中し
- (七) 中し
- (八) 中し
- (九) 中し
- (一〇) 中し
- (一一) 中し
- (一二) 中し
- (一三) 中し
- (一四) 中し
- (一五) 中し

れば。其が中に承香殿の宮のいたく歎かるゝ様に聞ゆるは、などかはいと然しも。

院の聞召す所もあり、御年高くなりぬれば、御世今いくばくもあらじを。其が中

にも、院のいとらうたくし給ふ宮なり。天下に、心になはずとも、少し心とど

めてこそ」と聞え給へば、東宮それは、さ思ひ給ふることなり。先つ頃も、「わた

り給へ」と聞え、彼處にもまうでて侍りしかども、聞ゆるにも随ひ給はず、いと

荒々しき御氣色のあれば、月頃かしこまりて、物も聞えず侍り」上、朱雀「それも

宣ふ様有りと聞くや」宮、東宮「まかり侍るめるものを、宜しからず思すなり。そ

れはじめ、「彼處になむ今宵出で給ふべき」と聞えしを、さてなむ絶えたるを、如

何なるにか侍らむ、よからず思して、此の人彼處に侍るとて、御氣色悪しければ、

勘事ゆるさるゝまでなむ。志をば失ひ侍らねば、ついでには自ら聞召してむ」

上、朱雀「後はやらへものにもなし給ふとも、院のおはします世に、かよると聞召

すなむ、いといとほしきやうなることどもを思したるにあらむ、上も宮も、御髪

(二四)

(二五)

(二六)



〔語釋〕

(四)自分が産をしに下りたる時よりも

〔考異〕  
(一)世を知り―世保ち

(二)わきても―わいても

(三)これ朝拜―これつゝ  
たちに朝拜

おろしてむとし給ふなり。世(一)を知り給ふべきこと(二)近くなりぬるを、平かに、謗(三)られなくて知り給へ。人の國(四)にも、最愛の妻持たるにぞ謗取りたるめる。然言はるる人持たまへれば、戒め聞ゆるなり。わきても、此處には良き女のかぎり集へたれど、え褒められずなりぬるや」宮、東宮「彼處にこそ侍るめれ。言葉も惜まざるのしることは、外には得侍らじ」と聞え給ふ程に、明けはなれぬ。上、世の中に名高くて傳はりくる御帶あまたある中に、良しと思すを取り出でさせ給ひて、大將に、朱雀「これ朝拜などあらむ折、物せられよ」とて賜ふ。大將舞踏し給ふ。

(三)

明けぬれば、まかで給ひなむとす。上、朱雀「佛名すぐして、必ず今二三日物せられよ。年のはじめには、得讀むまじき文なめるを。仁壽殿は、今年(四)は參るまじきにやあらむ。自らの上に彼様の時よりも、いと久しかめるは、もし其處にのどめさせて物せらるよか。まめやかには、唆して參らせられよ。昔は斯くもあらざりしかど、末の世には、女の侮るにこそ」と宣へば、大將かしこまりて承り給

〔語釋〕

(一)あて宮への傳言をたのみあきて

(二)御懷胎の噂

(四)あて宮入内以來東宮の妃妾たちは皆生がひなしと恐しむ中で

〔考異〕

(三)例ならぬ…思う給へる―例のやうなる世にめてたき事なりとも何かは

(五)いらへ…

ふ。此の御書どもは、皆封つけさせて、御厨子に納められぬ。東宮かへり給へり。殿上人、學士など率き居て、大將も藤壺まで御送し給ふ。孫王の君に御消息申し置き給ひて、梨壺に詣で給ふ。宮は藤壺に入り臥し給ひぬ。

(二)

大將の君、梨壺に對面し給へり。仲忠「日頃さふらひ侍りつれど、聞えざりつるかな」梨壺「何時も上にとのみ承りつれば、これよりも得聞えざりつる」大將、仲忠「いとつらく思し隔てたりけること。先に参りたりしかど、なか宣はざりけむ」梨壺「何事ぞや。聞えぬこと無きものを」大將、仲忠「ある様おはしけるものを。こればかりは、殿の御爲にも、仲忠等が爲にも、面目なることなむ侍らぬ。例ならぬ御様のこと承りて、めでたき事になむ思う給へる。かく皆人の不用になりぬと言ひ騒ぐ世に、如何に。さばれ、かよる聞えのあるのみなむ、嬉しきこと侍るべき」いらへ、梨壺「怪しの間はず語りや。よきこと、さふらひつきて何かはとてこそ」大將、仲忠「何時ばかりよりかは」君、梨壺「相撲の節の頃、暑氣にやなど思

(五)

(四)

(三)

(語釋)

(一)兼雅

(五)五の宮が

(七)昭陽殿一人の爲に

(八)昭陽殿

(九)四宮

(考異)

(二)ちちへーちて

(三)こそはーはーナン

(四)給ひつらむー給ふら

(六)あくめーあてめ

(一〇)いらへーちて

(一一)まうーまた

ひし程ほどよりにやあらむ」大將たいしやう、仲忠ちゆうちゆういと久ひさしくなりにけるを、殿どのには聞召きこめしたら

むや」(三)からへ、梨壺りこいかでか。聞きえばこそはあらめ。時ときのなく恥はづかしければ、此

處こなる人(三)にだに、數多あまたには知しらせぬものを。いかでか聞きき給たまひつらむ」大將たいしやう、

仲忠ちゆうちゆう「一夜いよ、五の宮の奏そうし給たまひしをなむ」君きみ、梨壺りこ五の宮の御心ごこころぞいと怪あやしきや。

かく徒いたづらにてありとにやあらむ。「我われはしも憎にくまじ」など宣のたまひしを、此この頃ころ音ねもし

給たまはぬは、斯かう聞きき給たまひてなりけり」大將たいしやう、仲忠ちゆうちゆう世よの中なかのあだ人ひととなり騒さわがれ給

ひて、世よをば蔑ないがしろに思おもひて、御前ごまへにもつよむことなく、萬よろづのことを奏そうし給たまふや。

なほ能よく心こころつよしみてさふらひ給へ。あくめのみ有あり」と宣のたまへば、梨壺りこ「一所ひとこによ

り奉たてまつりて、胸むねのみなむつづれ侍はべる。大(六)殿おほいどのの君きみ一所ひとこのみこそ、數多あまたの人ひとの名なは立た

て給たまふめれ」大將たいしやう、仲忠ちゆうちゆう院(九)の御方ごかたはまうのほり給たまはずとか」いらへ、梨壺りこ「此(七)の春はる

いみじき御ごいさかひありて、御衣ごひ引き破やられ、萬よろづの所ところ搔かき損そなはれ給たまひて後のちは、ま

うのほらせ奉たてまつり給たまはざなり。されど、斯かくてのみは世よにも。昔むかし、時ときにおはせし

うのほらせ奉たてまつり給たまはざなり。されど、斯かくてのみは世よにも。昔むかし、時ときにおはせし

〔語釋〕

(一)梨壺が東宮に

(二)仲忠

(四)女一宮

○仲忠退出、仁壽殿女御に帝の仰を傳ふ。恩賜の帯を正賴に示す。正賴帯の來歴を語る。今宮男子を産む。仲忠の母に招かる。

〔考異〕

(二)なる一ナレ

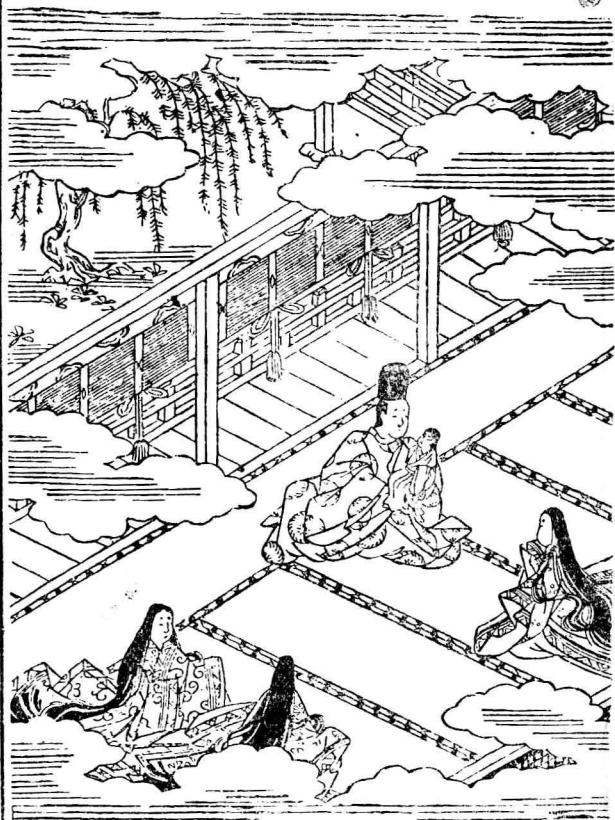
(五)こなど一こそ

人なれば、宮に對面賜はる時も、「哀と思へ聞ゆれど、心憂ければ」などぞ宣ふなる「大將、仲忠」やんごとなき所もや、引き破られ給ひつらむ。さてはまして如何ならむ」とて、仲忠「今一二日過ぐして參らむ」とてまかで給ひぬ。

畫詞

此處は梨壺。

かくて大將の君まかで給ひて、一(四)の宮の御方へ參りて見給へば、晝の御座所にも、御帳のうちにも、宮おはしまさず。怪しと思ひて、中務の君に、仲忠「いづくにぞ」と宣へば、中務「西の御方に、御ゆるする參る」と聞ゆれば、あさましと思ひて、仲忠「などか。まかで待るとは聞召しつらむを、今日しもおほろけに、久しくすまされぬ御髮の様に。すまし乾さむ程、命短からむ人は、え對面賜はらじかし。さて犬は」と宣ふ。仲忠「それも彼方に」と聞ゆ。仲忠「大輔呼び給へ」とて召したれば、犬宮抱きて出で來たり。おとど、抱き取りて見給へば、こなど丸かしたる様に肥えて見知り顔に物語す。いとうつくしと思ひ、宮の御許に御文奉り給ふ。



〔語釋〕

(一)髪を神にかけて「天の原ふみとゞるかし鳴る神の思ふ中をばさくものかは」の歌によりてよめるか

(四)仁壽殿をも女一宮をも

〔考異〕

(二)中だにも一なににか

(三)來べき一ぬべき一さふらふべき

(五)させ給ひ一ナシ

(六)給ひしかば一給ひしが

仲思<sup>ちから</sup>辛うじてまかで侍りつるを、渡らせ給はぬこそ。おほぞらのたきあるものを、今日の御ゆするこそ。

中だにもさくとはきかぬあふことを今日あらはるとかみは何ぞも  
(二)(三)  
そなたにや参り來べき。  
(三)

と聞え給へり。されど御返も聞え給はねば、むつかりて、犬宮抱きて晝の御座に臥し給ひぬ。太輔に、仲思此の子は人にや見せつる」と宣へば、太輔さも侍らず。誰もく、西の御方にわたりおはしまして、「見奉らせ給はむと有りしかど、御帳の内にかく抱き奉りてなむ。唯東宮の若君たちなむ、おとどの君に抱かれ奉り給ひておはしまして、隠し奉りしかど、内裏の上をも、此方の上をも、打ちかなぐり奉り給ひつよ、「宮の兒見せよ」と宣ひしかば、上なむ、打たれ侘びさせ給ひて、見せ奉り給ひしかば、うつくしみて、抱き持ちておはせし」おとど、仲思いと物狂ほしき事どもかな。斯ばかりの程のことは、昨日今日の様に、いと能く覺

(語釋)

(一)此漢にして居るものを

(六)擲、癖

(考異)

(二)たどして―たどつて―たがひて―たえかいて

(三)句はして―て―ナン

(四)もとど―もととの

(五)斯う―かく

(七)つき給ひなむ―つきなむず

ゆるものを。男君たちにかよるわざをこそ。若君はいとよく隠し給へ。斯くしておはせむをば、何わざをかし給ふべき」太輔、「御髪にかよりて、二所ながら泣きののしり給ひしかば、いかでかは」と聞ゆれば、仲思「すべておろかなる業こそは」と物しと思したり。

宮つとめてより暮るよまで御髪すまます。御床高くして、お許人たどして参る。すまし果てて、高き御厨子の上に御褥敷きて、乾し給ふ。女御の君の御前にあたりて、廂に横様に立てたる御厨子なり。母屋の御簾を上げて、御帳立てたり。宮の御前には、御火桶すゑて、火おこして、薰物どもくべて焼き匂はして、御髪あぶりのごひ集まりて仕うまつる。仲思「此方にわたり給ひて乾させ給へ」とおとど聞え給へば女御の君、仁壽「斯う宜ふなるを、彼方にて乾し給へかし」宮、女「何か、今乾しはてて」と宜ふ。右近の乳母がいふ、「乾し果てさせ給ひてこそ。渡らせ給へらば、唯大殿籠りなば、御髪にたわつき給ひなむ。御産屋の其の日の中にだに、

(語釋)

(四) 我が宮たちを生みたる時はそれを捨て置きて直に内裏へ歸りたれば

(六) 犬宮をば

(七) 急ぎて内裏へ歸らんとも思はず

(考異)

(一) 戸ましー戸ををし

(二) 疾くーとう

(三) 見ると宣へるー見るときこゆるとのことぞいかにかして宣へる

(五) 知りー見

入り臥し給ひし御心は、御髪ばかりには避り給ひなむや」宮、女「何事を。物な言ひそ」と宣ふほどに大將の君、直衣著て、中の戸おしあけて、女御の御前につ  
 いる給ふ程に、右の大殿もおはしたり。宮あらはなれば、御屏風取り出でて立つ  
 れば、仲思「何か、いとよかめるものを。さて疾く乾させ給へ。彼方にも、御厨子  
 は多く侍るものを」などとして女御の君に聞え給ふ、仲思「今朝仰せごと侍りつるを、  
 疾く聞えさせむと思ふ給へつれど、みだり心地のいと怪しく侍りつれば、ためら  
 ひ侍るとてなむ。上しかくなむ宣はせつるは、然ば仲忠が乳母させ奉るとな  
 む仰せ給へる」女御の君、仁壽「さこそ言へ、見ると聞ゆる所、如何に斯くは宣へ  
 る。此の犬を見て、えあるまじけれ。宮たちをば知り奉らで、やがて参りぬれば、  
 ともかくも知らぬを、これは初より見、口入れなどし侍りつれば、えふり捨てては。  
 其が中に、物の榮ありて見よけにもしなさぬ宮仕なれば、急がしくも思はず」父  
 おとど、正頼「などか然は思ほす。正頼が子どもの中には、其處のみこそ幸はお



(語釋)「ものを」歟

(五)東宮

(考異)  
(一)立てーナン

(二)走りうち舞れてー走り所々にうち舞れて

(三)知りー讀り

はすれ。此の宮たちを、そこばく、瑕かたはなく生し立て奉り、様々に言ふかひなからず、出で走りうち群れておはしますを見奉れば、女子もち奉りたる心地こそすれ」仁賢「また此の犬こそをかくて見奉り給は、天下の後の位も何かはせむ。來し方行く末も、また類ものし給ふべき人かは。物思し知らずもありけるかな」大將「打笑ひて、仲思「かたはらいたくも仰せらるよかな。それ等を、ものの榮なく思さるよにこそ。彼方には、犬にくはれたるだに見捨てられたるところは、常に勘當せらるなれ。天下知り給ふべきこと近くなりたる様に仰せられつるものかな」おとど、正頼「朱雀院修理しはてつめれば、然もあらむ」大將、仲思「日頃は、宮も上になむおはしつる。月頃見奉らざりつる程に、いと清らになり給へる」おとど、正頼「我國の王には餘り給へる人なり」大將、仲思「いと辛き役をなむ。東宮はいと氣高く、心憎くて、つと守り給ふ、五の宮はいと物はなやかにて、何事を見付けむと思したる御氣色にて見給ふ。御書を、とざまかうざまに讀ませ給ふを、

〔語釋〕  
 (一) 藤原實賴

(三) 「山籠りにしかば」  
 なるべし。一本「山籠り  
 給しにかば」

(四) 父千藤が。此處は忠  
 こその卷の事を語る也

(五) 朱雀院御即位の際

〔考異〕

(一) 然は侍れど、ナシ

(六) 御返―御返事

仕うまつりつるは、いとこそ難う侍りつれ。然は侍れど、  
 重物をこそ賜はりて侍る「おとど、正類「何にかあらむ」仲忠「御帶なり」おとど、  
 正類「いで見給はむ」と宣ふ。取りに遣はしたれば、螺鈿の帶の箱に、袋に入れて、  
 御包に包みて持て参れり。おとど、引き出で見給へば、貞信公の石の帶、いとかしこきなり。  
 驚き給ひて、正類「これはまた世に無き物なり。これを賜はり給ふばかりに、  
 仕うまつり感ぜしめ給へるこそ、いと恐ろしけれ。これは、小野宮の大臣の御帶なり。  
 是によりてなむ、多くの事ありし。それによりてなむ、眞言院の律師山籠りにしかば、  
 小野に籠り居給ひて、「今ははた領すべき人も侍らず」とて院に奉り給ひしを、  
 内裏の御位に居給ひし時わたし奉り給ひてしなり。かしこき御寶になむせさせ給  
 へる。數多さふらひつらめども、これが様にはえあらじ」と宣ふ。大將、仲忠「こ  
 れは、藤壺の御徳に賜はりて侍り。宮の御文奉り給へりける御返を御覽じて、何  
 事か聞え侍けりむ、いみじく思ほし入りたる御氣色を、怪しと見奉りしほどに、

(語釋)  
(三)今宮

(考異)  
(一)賜ひつるなり賜へるなり

(二)しくはししうはししうち

(四)とてーと

(五)男子なりをとことちよ

御書仕うまつりたがへて、上の笑はせ給ひしかば、かしこさに、誦せさせ給ひし句をなむ、わななくく、物も覺えず誦じあけて侍りける。それに「祿何よからむ」など仰せられて賜ひつるなり。しくは、仕うまつりては、重き祿賜はるものなりけり」おとど、正頼「それを例にしたらむ人は、如何あるべからむ」と宣ふ。

女御君、我が御前、宮たちの御前どもの御臺どもを參らせ給ふ。大將は、まだ物も參らざりけり。おとど取りはやし給ひて、御酒など少しまるるほどに、源中納言の北の方、子産み給ふとて、いたく煩らひ給ふとて騒ぐ。おとど、正頼「内侍のすけ、彼處にもものせよ。心知らひたる人なくて悪しからむ」と宣へば、「早く晝召ありつれば參り給ひぬ」と聞ゆ。おとど、正頼「立ちながら訪はむ」とておはしぬ。大將の君、訪はまほしう思へど、苦しうて物し給はず。かゝる程に産み給ひてけり。男子なり。

女御の君、「御髪は乾給ひぬや。はやわたり給へ」とて奥へ入り給へば、大將、御

(一) 稱釋

(二) 抵抗

(四) 詰澄

(五) 仲澄

(考異)

(一) 押し開けて一ひきあけて

(二) なるにきのけうきたる一なるきのけつきたる一なるきいけつきたる

屏風びやうぶ押し開けて見給へば、宮みやは濃きうちきの御衣ぎに、あからかなるにきのけうきたる織物おりものの細長ほそなが引きかさね奉りて、白しろき御衣ぎ引きかけて、御髪ぎしは少すこし濕りて、四尺しゆせきの御厨子みづしより多く打ち延へて、瑩えいしかけたると見ゆ。小ちひさき御臺みだいして、御湯漬みゆづけくだもの参りたり。大將たいしやう、仲思ちんしあな見苦みぐるしの御すまひや。彼方うなたにて乾ほし給へ。一人ひひとりはいと侍りはべにくし」とてかき抱いだき下して、率ひらて奉り給ひて、やがて御帳みちやうの中なかに入り臥し給ひぬ。仲思ちんしなどか、御文みふみ奉れ給へど此處こゝにても彼處かしこにても御返かへりは賜たまはらぬ」とて日頃ひごろの有ありつる御物語ものがたりきこえ給ふ。宮みやはたの言いひし事ことどもなど聞え給へば、女に内裏うちにならひて、此處こゝなる時ときも彼方あなたに常つねにあめれば、見みもすらむかし。顔かほも心こゝろもをかしきものと見つるを、憎にくくも物ものを見ける」大將たいしやう、仲思ちんし「さて父主ちちぬしは」宮みや、女に「それは然さも見えぬものを」大將たいしやう、仲思ちんし「あなかま。御伯父おやぢたちは、皆みな然さる心こゝろなきものなり。一人ひとりは徒いたづらにもなされぬめりき。誰たれにかあらむ、さばかり物ものを思おもふめりしはや」宮みやうち笑わらひ給ひて、女に「怪あやしき濡衣ぬれぎぬなりや。異筋ことすぢにこそ見ゆめりし

〔語釋〕

(一) 明日又御髪を洗ひ直さねばならぬ

(二) 誤あるべし、一本「よもこそは」とも

(四) 物音をさする也

(五) 誤あるべし、一本「なあらむ」を「なからむ」とも

〔考異〕  
(三) 晝一ナレ

か「いらへ、仲忠」上の御妹の君ならむやは。こと宮たちはいと小さくこそおはし  
 けめ」などとして大殿籠りぬれば、右近の乳母うちむつかる。右近さればこそ聞え  
 させつれ。明日も御のするは参りぬべかめり。さがなく御殿籠りぬれば、おほろ  
 けに参りにくき御髪を」と聞ゆれば女御の君、仁賢「あなかまや。夜晝御前に侍は  
 れければ、打休まむとこそは。何かは、御髪のわたりも何も、人の見奉り給は  
 むに、よもこそともかくもし給はむ。更に」と宣ふ。又の日晝になるまで出で給  
 はず。御物参りて、御臺など鳴らせど、聞き入れ給はず。し煩ひて、中務の君、「御  
 臺参る」と聞ゆれば、仲忠「いと眠たく苦し。小き盤に少し分けていませ」と宣へば、  
 中の盤に御分け、別に少し分けて、しもの御あはせなど持て参れり。先づ宮に少  
 し召させて、御おろし少し参りて、大殿籠りぬ。又の晝つ方まで出で給はず。  
 内侍のかんの殿より御文あり、

俊藤女などか久しく。かねて宣ひしことを、さらむ時と思ひまうけたる事なるら  
 (五)

〔語釋〕

(一)「こそい」は「こそは」なるべし

(二)涼にあくる料なり

① 仲忠父と語る。梨壺徳胎の事を告ぐ。父の妻妾を一所に集めんことを乞ふ。涼に産養の物を贈る。

(五) 沈金ぼりにしたる也

(七) 兼雅

〔考異〕

(三) 出だしー引出だし

(四) にもーもーナシ

(六) 水をー水の

(八) 見給ふー見え給ふ

む、今日(二)こそいとなむ思ふ。ものし給ひて見給へ。

とあり。おとど、仲忠「誠(三)や然ることありかし。あな苦しや。いかでまうでむ」と

て、仲忠「唯今(四)参りて。さらなれば聞えさせぬ」とて奉り給ひぬ。仲忠「さてもあら

じ。また外様へ」など聞えて出で給ひぬ。

三條殿(五)にまうで給へれば、産養(六)のことどもいと清らにて、子持(七)の前のものどもな

ど皆具して、あしこに出だしたらむにももどかしからずせられたり。洲濱(八)のわき、

水の側(九)に鶴立てり。其の鶴のもとに、葦手(一〇)にて、黄金(一一)の毛にて打ちたり、

こよひより流るゝ水をおのが世(一二)にいくたび澄むと見まし鶴の子

とあり。萬の物具して、取り出でて見せ奉り給ひ、物などまゐる。父おとどいた

う興じて見給ふ。大將、仲忠「日頃内裏(一三)にさふらひ侍りて、夜晝御書仕(一四)うまつり侍

りて、一日なむまかで侍りし。やがてさふらはむとせしかど、あくる日までさふ

らひて、みだり心地のいと悪しく侍りしかば、其のなごりにや侍らむ、昨日今日

(一) 從來昔に聞きし御帶なり

(二) 詰澄

(五) 皆仲忠に賜はると評判す

(七) 橘千葵

(八) 父に奉るべし

(考異)

(三) いるまで一いつまで

(四) これを一ナシ

(六) こそは一は一ナシ

(九) 唐土一たう

(一〇) まじう一まじく

起きあがられ侍らざりつるを、御消息の侍りつればなむ。さるは御覽ぜさすべき物も侍り、聞えさすべき事も多く侍る」父おとど、兼雅「何書か仕うまつられつる」いらへ、（九）故思「故治部卿の主の御集などの侍りけるを、何かは文書などをさへ秘し侍らむとて、御覽ぜむとありしかば、持て参りて侍りしを、やがて仕うまつれ」と仰せられしかばなむ。さて、斯かる物をなむ賜ひて侍る」とて帶を見せ奉り給ふ。（一〇）兼雅「これは、然聞く御帶なり。いと忝く賜はせためるは、一日頭中將の世の人の言ふ様なむ。帝のやんごとなくし給ふ物は、皆其處に賜はりぬ。御女の中になしくし給ふも、弄びもののいろまで、これをと思したるは皆なむ、と言ふ」と有りしは、然も言ひつべき事にこそはありけれ」大將、仲忠「故右のおとど（七）の御帶となむ。これは御前にさふらひ侍りなむ、よき御帶侍らざるを。仲忠は、故治部卿の主の唐土より持て渡り給へりける、未だ革もつけで石にて侍る、これも劣るまじう侍るを、調ぜさせてさし侍らむ」父おとど、兼雅「何か、忝く御

〔語釋〕

(一) 梨壺が東宮の御顔をだに見る事なきに懐胎する筈はなし

(三) 東宮

(四) 密夫などを設けたるか

(五) 誤脱あるべし

〔考異〕

(一) ことなりことや

志こころざし あらむものを。なほ節會せつごなどにさして御覽ごらんせさせ給へ。此處こゝには然らずとも

大將たいしやう、仲思ちゆうし然らば、彼の侍るを調てうぜさせて奉らむ、いとかしこき角つのどもなど侍り

けりや。さる物どもを籠こめ置かれて、ほとく怪あやしきことも「おとど、兼雅かねみや更さらに

言いはぬことなり」大將たいしやう、仲思ちゆうしいと珍めづらしきことの侍るは、聞召きこしめしたらむや」御い

らへ、兼雅かねみや「何事なにごとにかあらむ」大將たいしやう、仲思ちゆうし「さだすぎたる事ことになむ。梨壺なしつぼの御事ごじなり」

おとど、兼雅かねみや「御顔かほをだに見奉らで、年頃としころになりぬるを、何なでふさることか」大將たいしやう、

「それが怪あやしさに、一日ひつひまで侍りしまよに、やがてまうでて侍りしに、問とひ

聞きえしかば、「何かは、良よきこと聞きつきて」となむ宣のたまひし」父ちちおとど大きおほきに驚おどろき

給たまひて、兼雅かねみや「何時いつからある事ことにかあらむ。宮みやは知ろしめしてや。もし異様ことざうなるわ

ざしたるか」大將たいしやう、仲思ちゆうし「いとまがくしき事こと。如何いかゞは知ろしめさざらむ。人ひとより

は時々ときときまうのほり給たまふなるものを。七月しちがつばかりよりと聞き侍りし」父ちちおとど、

兼雅かねみや「いと興けう有ることかな。昔むかし頼たのみ有る程ほどにさかり有りて、今いま然さあらししかば、猶なほ

(五)



(語釋)

(一)朱雀が東宮を内裏に

(二)斯かる筈ある人をつ  
まらぬ我等まで懸想せし  
事よ

(三)あて宮の懐胎せられ  
し由

(四)あて宮一人の爲に

(五)女四宮

(六)「仲忠にも」歎

(七)嵯峨院の女三宮、兼  
雅の思ひもの、梨壺の母

忘れ奉るにてこそ。かくのよしる世の中に、ともあれかくもあれ、然あんなるに、  
怪しく思ひの外なること」大將、仲忠、内裏にさふらひし頃、宮も上にかよる御氣

色御覽せむとにやありけむ、留め奉り給ひて、二日ばかりおはしますめりきかし。

ありしよりもいと警策になりまさり給ひにためり。國知り給ふべきことも近けに

なむ」おとど、兼雅、藤壺いみじき人なめりかし。唯今の后にこそは。坊がねを、

一人にもあらず、二人まで、玉を磨きて持給へる。かう幸人を、然ともなき我

等まで、言ひ煩はしとかな」大將、仲忠、またも梨壺の様になむ。それは後よりと

なむ承る」父おとど、兼雅、あたら明王がねの、多くの人歎かせ給ふにぞあめる。

人一人によりて、父母同胞と具して思ひ歎くは、幾許の人の歎きぞは。そが

中にも、階の御方いかに思すらむ」大將、仲忠、内裏にもいとかしこく歎かせ給ふ

めり。其の事によりては、あぢきなく、殿にも仲忠等も、いと苦しき仰せごととな

む。なほ彼の宮とぶらひ聞えさせ給へ。それによりても、いとほしく思されたり

〔語釋〕

(一) 俊隆女の住居として  
あてがひたる處に

(三) 其儘女三宮の物にして  
仕舞ひては悪かちんが

(五) 梨壺をいふ

〔考異〕

(一) まさじものをおはし  
まさぬとき—まさずとき

(四) 恨みみては—かざり  
ては

き。けに院の御世、幾許もおはしませじものを、おはしませぬとき、さなど聞か  
せ奉り給へ。それは、彼處にまうでさせ給はむ、何の著きことも侍らじ。此處は  
斯く廣く侍るめり。唯仲忠侍るべしとて、つくらせ給へる所におはしませ給へ  
かし」兼雖、いかで、此處は此の御料に奉りたる所に、人の物し給はむこと、本意  
たがひたる様に。年頃いみじう悲しかりし志、又人なくて心安くてあらむをだ  
にこそ」仲忠「それは、御心寄せさせ給はどこそは。かく聞ゆるにつけて、などが、  
やがて奉り給はどこそあらめ、廣き心に、時々かよはせ給はむに、何でふことか  
あらむ。昔若くおはしましけむ世に、憚なかりけむことにつけて、仲忠等が物  
の心も知らぬを恨みみては、如何ばかりかは悲しび給ひし」と聞ゆるまよに涙は  
雨の如くにこぼる。父おとど、母北の方もいみじう泣き給ふ。仲忠「況や、年頃ま  
で物し給ひける人の、宮仕し給はむ御女など持ち給ひて、今かくておはするは、何  
心か思すらむ。なほ誰々も、此の事許し給へ」と申し給ふ。北の方、俊隆女「何か、此

〔語釋〕  
(一)假令我が兼雅に棄てられても

〔二〕何時何日に引取るべしと

(六)仲思に

〔考異〕  
(三)御文―御文を

(四)持て―もちて

(五)まかなひて―まかなひつゝ

(七)見せ給へば取りて見給ふ―見せ給ふ見れば

處には、年頃かくて物し給ふに御志は見つるを、今は忘れ給ふとも、思ふべく

もあらず。まして其處にかく聞え給はむことは、よき事になむ」と聞え給へばお

とどゞ兼雅「此處には知らず。二所の御中に、宜しかるべく定め給へ」大將、仲思「其

の口ばかり御迎せむと、御文書きて賜へ。持て参りて、委しく聞えむ」おとどゞ、

兼雅「なほまうでて申されよかし。此處には何事をかは」大將、仲思「いと便なき」と

と。いかでか御文なくては」とて硯紙など、取りまかなひて奉り給へば、兼雅「何

事をか書くべき」とて、久しく思ひつゝ書き給ふ。兼雅「いさや、斯様にぞ。物覺え

ずや」とて見せ給へば取りて見給ふ。

兼雅年頃は聞えさする事も侍らず。いかでなりにけるにかと思ひ給ふる、怪しく

くなむ。如何なるにか侍りつらむ、昔の様にもあらず、まかり歩きもせず、

物憂くなりたるは、無得になりもて侍るにや侍りつらむ。老いほれたるよ

だに思ひ定めぬ。されば其のわたりにもえ参らず。そが中にも、これかれ物

(語釋)

(二)俊薩女は萬更知らぬ  
中々もたければ

(考異)

(一)恥かしさに一恥かし  
きた

(三)思ひ一思う

(四)いとほしくいとを  
かしく

(五)思ひ一思う

(六)せさせ一参り

せらるゝ所なれば、憎しと見給はむ所もあらむが恥かしさに、さし別きても  
え聞えず。御覽ぜざりし人にも侍らぬを、此のいとむつかしけなる所に渡り  
おはしましなむや。さ侍りぬべくば、其の日ばかり御迎に参り來む。さても  
怪しくこそ。

餘所ながらおほくの年も隔てけりころもうらみし時はいつぞも

それをさへなむ。ことごとくには、此の朝臣聞えさせ承れよとなむ。

などあり。大將、仲思「いとよく侍るめり」とておし卷きて取りて、仲思「今日はえ

参り侍らぬ。明日参らむ。此の事、とかく思ひ給ふるも、いとほしく思ひ給ふる

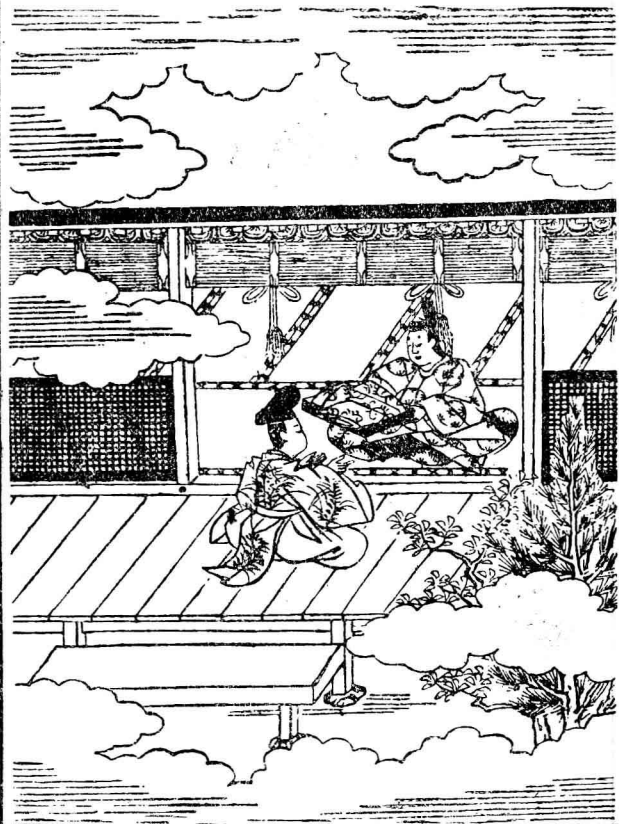
事の侍りしかな」とて日暮れぬれば、彼の源中納言殿に、家司の中に心有るを召

して、奉れ給ふ。御消息あれば、彼の暮にと宣ひし人にとてなと申せよ、とぞ有

りける。大將、歸り給ひぬ。

其の夜は梳髪せさせ湯殿などせさせ給ふ程に、中納言殿の御消息聞ゆ、

(六)



(語釋)

(三)「右近の乳母」なる

べし

(四)女三宮の邸

(五)女三宮

(七)女三宮、梨壺の母

(八)他の幾難の妾

●仲忠、女三宮の邸へ父の使にゆく。女官に萬寶を投げつけらる。

(考異)

(一)くひくみ

(二)今日は一はナシ

(六)他對住みける―他

對どもにすみしは一つ腹

にうめりし子ときめきた

りし人對一つを二人にて

すむ

(九)年頃―日ごろの

くひこそまうくと言ふなれ。かねてこそはとなむ。名取川とも聞えさすめり。

(二)とあり。御使どもには様々の祿あり。かくて大殿籠りて、仲忠「今日は恥かしき所

にまからむする」とて、よき直衣装束取り出でて、御薰物どもせさせ給ふ。宮た

ちの走り給へるを見給ひて、「丹後の乳母のむつかるめりし御髪は、損なはれざめ

るは、怪しくもかこちしかな」など宣ふ。

一條殿は二町なり。御門は二つ立てり。おとど、宮、それに隨ひて、西東の對、

渡殿、皆あり。寢殿は、東の對かけて、宮すみ給ふ。他對どもに住めるは、御子

一人産めると、いたく時めかし給へる人々、對一つづつにぞ住みける。池面白く、

木立興あり。然は言へやうく毀れもて行く。これを梨壺の君に、父おとどの奉

り給ひけるなれば、宮ぞ主にて住み給ふ。こと人々は、上達部、御子たちの御女な

れど、親も物し給はず、唯おとどにかより給へりしかば、今斯かりとて、年頃家

なむ無ければ、え散れ給はぬなりけり。召人めきたりし人々あるは、次々に隨ひ

〔語釋〕  
(一) 盜人とは役隆女をい

(二) 未詳

(三) 兼雅の妾たち也

(四) 役隆女

(五) 兼雅が

〔考異〕

(六) 御座禪など敷きて—  
御座などまかりて

てまかでにけり。かよるに大將、東の一二の對、南のおとどの前より、丹後掾に御文持たせて、宮の御方に參り給ふほどに、方々立ち竝みて見つよ、人々の言ふ様、「わが君を佗びさせ奉る盜人の族は、あたの戲に戯れて、とはうの誦經文捧け持ちて、惑ひ來るぞ」と集りて、或は手をすりて立ち居拜む。或は禹のまがまがしき事言はぬなし。主どもは、「あなかまや。かくめでたき子持たらむ人をば、いかどは疎(五)にはし給はむ。すべて、宿世の盡きたればにこそあらめ」とて打泣き給ふもあり、見めで給ふもあり。かく言ひ騒ぐも知らで、いと靜かに歩みて、御供に人いと多くて、寢殿の御階のもとに立ち給へれば、よき童四人ばかり、大人十人ばかりありて、「右大將の君こそおはしたれ」と宮に聞ゆれば、女三「あな覺えず。なでふ路惑ひぞ」と言はせ給へれば、仲忠「大殿の御使にて、とり申すべきこと侍りて」と申させ給へば、南の廂に御座禪など敷きて、よき童出で來て、「此方に入らせ給へ」とあれば、入り給ひぬ。大將、仲忠「屢々と思ひ給ふれど、騒がし

(語釋)

(一) 兼准の傳言をいふ也

(四) 春舞曰、妻めかしきの意也

(考異)

(二) ばかりに―ばかりと

(三) 給へる―給ひつる

(五) こそ―ナシ

く侍りつよなむ。今日は「此の御文、人して奉れば、おほめかせもぞし給ふ。し  
 るく御覽すばかりに、持たせて參れ」と侍りつればなむ」とて參らせ給ふ。宮、  
 女三「けにかよる御使なくば、え思ひ出づまじくこそは」とて見給ひて、女三「あな  
 怪しや。まことにて書き給へるにやあらむ」と宣へば大將、仲思「いとゆよしき事  
 になむ。なでふ空心にてかは。人々あまた物し給ふを、昔の事はたえ侍らじ。さ  
 し別きては心よからぬ事こそ侍れ。なほ渡りおはしませ」となむ。彼處には人も  
 侍らず、唯仲忠等が母一人、めかいたる女にて、宿守には」と聞え給ふ。女三「其の  
 めかいたらむ一所こそは、さわやかならむ數多よりも、いと恥かしうこそは。さ  
 ても時々見奉りし時も、ひがことせられしを、如何なる事になむ」大將、仲思「さ  
 も侍らず。年頃此の御前をば、常に歎き聞えさせ給ふ。それを思ほしおこして、  
 聞えさせ給ふなり」宮、女三「世の中は斯くてありぬべし。唯院の「面伏なるもの  
 は、死なぬこそ心憂けれ」と宣はすなるを聞くこそいみじう悲しうは」とて泣き



(語釋)

(一)俊隆女の如き甲分なき北の方の現在居る處へ行くてもなしとは思へども兎にも角にも御詞に従ふべしといふ意歟

(三)御返事を乞へば

(六)兼雅

(考異)

(二)今あらむとあらむ

(四)飲ませなどすー飲ます

(五)いと一折敷

(七)やらぬはてぬがたき

給ひて、女三「何かは、心強う聞えても、何のたけきことかは。思ひ出でたりとだ

に、院（一）に聞召さるばかりにこそ。悪しくもあれ善くもあれ、然もと人に見え聞え

にし人忘られたるばかりは、いみじき事なむなかりける。賢き人のもてたらひた

る今あらむをば、何にかはと思へど、唯言ひなされむをこそは（二）と宣へば大將、

仲忠（三）「いとも嬉しく、参り來たる効有りて、かく仰せらるゝ事。今二十五日ばかり

に御迎（三）に参り來む」と聞え給ひて、御返申し給へば、女三「何か、斯うなむ物し給

ひつると宣へ」とあれば、仲忠「いかでか、空参したりともこそ。唯しるしばかり

にても」など聞え給ふ程に、御供の人々は、宮の家司ども、政所に呼び入れて、

みな様々に酒飲（四）ませなどす。大將には、よき菓物、乾物などいと清らにして、御

湯漬、御酒などまるる。まかなひには、おとどの召使ひ給ひし人の、よき若人な

りし、なほ衰へやらぬ、右近と言ふなむ、出で來て仕うまつりける。大將、仲忠「こ

れや、彼處（七）に忘れず、あり難き人と物し給ふならむ」宮、女三「いでや、此處には、

〔語釋〕

(一)古今の「見る人もな  
くてちりにし奥山の紅葉  
は夜の錦なりけり」を言  
ひ替へたる歎

〔考異〕

(二)待ち取るこそ―待ち  
取るなるこそ

よきも悪しきも、さ思ひ出でらるゝ者あらじや」大將、仲思「今ほこよにも忘れ聞  
えじ」とて土器さし給ふ。宮、女三「いと珍らしく見え給へる」とて御几帳のもとに  
寄り給ひて、土器度々すよめ給ふ。大將、仲思「御返なくば、えまかり歸らじ。此  
處にこそさふらふべかめれ」と聞え給へば、女三「あな煩はし」とて、

女三珍らしきは、現心にもあらじと思へど、うたてある御使にてなむ。いで  
や、

恨みけむほどは知られで唐衣袖ぬれわたる年ぞ經にける

と書きて、折りて挿されたりし紅葉の、枯れ困じたるに付けて出だされたり。大  
將、仲思「なくてちりにし故郷の」と言ひて立ち給へば、南のおとどより、柑子を  
一つ投けて、大將を打つ人あり。仲思「待ち取るこそ」とて取りつ。さて出で給へ  
ば、東の一二の對より、橘と大いなる栗と投げ出だしたり。大將「取り給へば、一  
の對より、年三十ばかりなる人の、いとあてやかに愛敬づきたる聲にて、「誰にか

(四) 復命。莫實の中の文。

(一) 浮れ人こそし歎、一本「うかれそと」

(二) 復命。莫實の中の文。衆雅の述懐。女三宮等を迎ふべき準備。

(考異)

(二) しるしーしるく

(三) 宣ひつるー宣へる

(四) はやさてーをとて

(五) し侍りつーして侍りつ

(六) 一子ーひとり子

は」と言ふ。大將、仲思、うかれうどこそしるしなれ」とて出で給ひぬ。

畫詞

これは一條殿。

(三)

かくて三條殿に歸り給ひて、宮の御文奉りて、宣ひつる様かうくなど申し給へば、おとど、兼雅、哀にも宣ふなるかな。昔の様に侍らむだに、御面伏にこそあれ。今はまして何のかひも有らじはや。さて宮は毀れなどやしたる。如何様にか住み給へる」仲思、奥は見給はず。あらはなる限は、異なることも侍らず。政所の家司の男どもなど、あまた侍り。下人などあまた侍りて、御倉開けて、物を納めおろしなどし侍りつ。おはします所も、目やすくしつらはれて、童、おとな數多侍りつ」父おとど、兼雅、彼は財の王ぞや。そのかみ一子にて、その祖父の財を、さながら領じたり。よき庄いと多く持たまへる人ぞ。よき調度、こまかなる寶物は、彼處にこそあらめ」と宣ふ。大將、仲思、不便なる所にまうでて、かしこく打たれ侍りつるかな。かよる礫どもして、方々にぞ打たせ給へるに、困じてなむ侍

(語釋)

(二)かく多くの寵姫たちを指きて今まで我一人を守り居けるよと

(考異)

(一)怪しく怪しう

る」とて取り出でて奉り給へば、兼雅怪しくもありけるかな」とて栗を見給へば、中を割りて、實を取りて、檜皮色の色紙に、かく書きて入れたたり、

ゆくとても跡をとどめし路なれどふみすぐる世を見るが悲しき

とあり。物も宜はで、橘を見給へば、それも實を取りて、黄ばみたる色紙に、書きて入れたたり。

いにしへの忘れがたさに住みなれし宿をばえこそ離れざりけれ

柑子を見給へば、赤ばみたる色紙に、書きて入れたたり、

結びおきて我がたらちねは別れにきいかにせよとて忘れ果てしぞ

とあるを見給ひて、涙雨の如くに降らし給ふ。北の方、あはれ様々に、かく憎か

らず思ひける人々をおきて、(三)斯くありける、と見給ふも悲しければ、うち泣き給

ふ。大將の若益なき物ども、取り出でけるかな、はしたなし、と思ひ給へり。お

とど久しく思ひみそみ給ひて、兼雅此の柑子投げ出だしつらむ所は、故式部卿の

(語釋)

(一)以下中の君との關係を語る也

(二)俊藤女の方にのみ居る様になりしかば

(考異)

(一)あだくしくは言はるれどーあさくしうは言はるなれど

(四)思ひ給よちむー思ふちむ

(五)の御子…語らひ取りしーナン

(六)更衣のいますがりー更衣などいませり

(七)御娘…生ひ出でしにやあらむーひめみこの服なり梅壺の御息所といひしいみじかりし色好なりしを語らひたりしぞ

宮の中の君なり。父宮の召して宣ひし様、「我なむ世に久しくあるまじき。此處に

らうたしと思ふものなむある。あだくしくは言はるれど、然りとともと思ひてな

む」とて賜びたりし人なり。十三にて見そめて幾許もなく、宮かくれ給ひにき。

その後、程もなくてぞ、此處には來にしかば、けに如何に思ひ給ふらむ。栗出だ

しけむは、仲頼の少將の妹なり。いとよく、人の妻にてもありぬべかりし人ぞ。

遊は少將にも優りたり。すべてせぬ業なく、勞ありし人なり。容貌も氣近く、愛

敬づきてぞありし。橘の所は、千蔭のおとどの御妹の御子腹なり。梅壺の御息

所とぞ言ひし。いみじき色好なりしを、語らひ取りしなり。それが年は、我にこ

よなく兄にぞおはせし。其の西わたりには、もとの更衣のいますがり。その更

衣は、宰相中將の御娘なりしが、琵琶なむ上手におはせし。それに兒の一人出

でまうでたりしが、如何に生ひ出でしにやあらむ。又もありや。算へ盡すべくも

あらず。この中の君の返り事はせむ」と宣へば、仲思皆こそせさせ給はめ。取り

(語釋)  
(一)柑子のなり口を

(二)口もとまで

(異考)  
(三)わすれはてーわすれ  
ずて

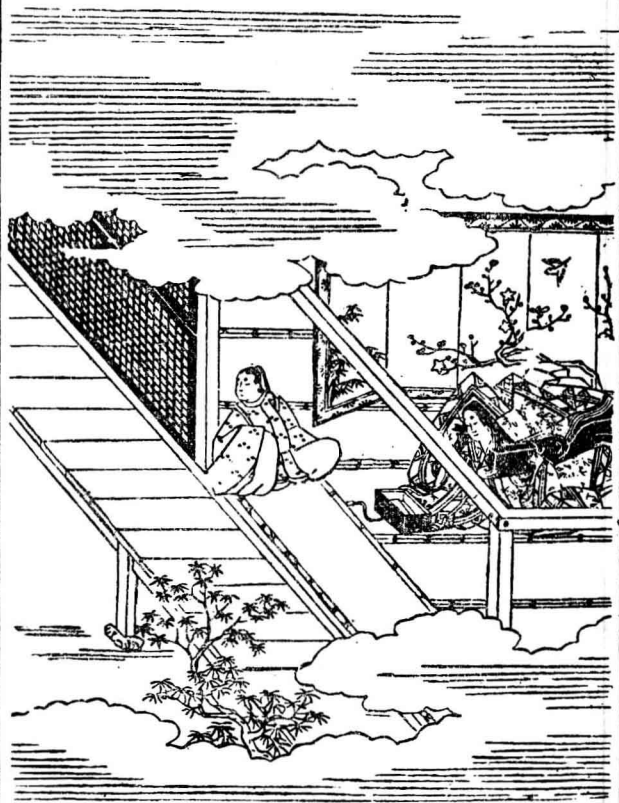
侍りしものを、御覽ごらんせさせぬ様にこそ」おとど、兼雅かねみや納殿なつどのにあらむ、大柑子おおいじの中に、大きおほに疵きずなからむ、三つ取りて持て來」とて、臍へそのもとを、壺つぼに雕えんりおはす。兼雅「何なにを入れむ」と宣のたまへば、小やかなるかつらの箱はこを取り出でて、北きたの方かた奉り給へり。開あけて見給へば金かねあり。それを移うつしつよ入れ給ふ。はたまで一壺つぼい入れて、蓋ふた合あせて、黄わうばみたる薄うす様一かさねに包つみたり。一つには、かう書かきて入れ給ふ、兼雅契ちぎりおきし昔むかしの人もわすれはて君きみをば訪せはぬ我われかあらぬかと書かきて入れたり。栗くりの所ところには、

兼雅宿やどをいでてあとも枕まくらも定めねば文ふみやるかたもそこはかとなし  
今一つには、

兼雅出いで入りし宿やどをかたみと眺ながめつよすむを哀あはれときかぬ日ひぞなき  
とて入れつよ、印しるしつけて、兼雅「これは南みなみのおとどに、これは、それは」と言いひつ  
つ、兼雅「さらばこれ物ものせさせ給へ」とて奉り給へば大將たいしやう、上うへに使つかひ給ふ童わらわの、御み

藏

開(中)



供ともに小舎人こさなりにてありしを召めして、仲忠ちゆうちゆう「これ其處そこ々々くに」と宣のたまひて、仲忠ちゆうちゆう「さし置き  
てまうで來きね」とて賜たまふ。

かくて、仲忠ちゆうちゆう「除目侍ぢよくばへかなるを、參まゐらせ給たまはむとやする」おとど、兼雅かねのり「何なにしにかは參まゐ  
らむ。出いでてありけば、其處そこにも面伏おもてふせにて、人ひとの人ひととも見みたらねば、生いきたるか  
ひも無なきに」大將たしやう、仲忠ちゆうちゆう「闕けちの侍ばへらざらむには、いかでかは」父ちちおとど、兼雅かねのり「などか  
は其その闕けちの無なからむ。此この頃ころこそ、かく金釘かねくぎの樣やうに固かたまりためれ、其處そこを御子ごこにし  
て、中納言ちゆうなごんになさるとて舉あげられし闕けちには、親おやとてある己おのれをこそなされましか。

(一) 己が官位の昇ろぬを  
かこつ也

(二) 我身の衰へたるを形  
容していふ

仁壽殿にじゆうでんを思おもして、其その親おやをひき越こしてなされたるは、然さるべきことかは。自おのづから右みぎ  
のおとど參まゐり給たまひて、心こころに任まかせてし給たまひてむ。殊ことなること無なくば交まじるひせじとて、  
新嘗會じんじやうゑにも參まゐらじとせしかど、久ひさしう參まゐらで、帝みかどの御顔みかほもゆかしうもどあるとて、  
參まゐりて見みれば、右みぎのおとど我われはと思おもひ顔がほにて、孫うまごの御子みこたちは、玉たまをすぐりて竝なら  
び居ゐ、子こどもは雲くもるのごとつきて、土つちをくひて跪ひざまづきあへり。いでや、御子みこたちを

(三) 正頼

(四) 此度の除目も



(語釋)

(一)あて宮をいふなるべし

(二)梨壺

(四)仲忠を子として持てるは幸福ならずや

(五)官位をいふ

(八)人の尊敬するものをけなすはよからぬ人のする事なり

(一一)くばつき給へりやの意

(考異)

(三)外のこととは吐き給ふ一物も宜はてあらしくかくあくごくをば宜し

(六)女子「子」ナシ

(七)如何様なる事もいづるやうも

(九)ものを「を」を「ナシ

(一〇)言へば「いと」へば

(一一)宜ふる一宜ふな

思へば、宿世心憂く、いかなる人くほつきたる女子もたらむとぞ見ゆるや。又今

一つ(一)のくほありて、蜂巢(二)の如く産みひろぐめり。天の下の御子たちは、此のくほ

どもに産みはてられ給ふめり。此の度も、男子をこそ産まめ。此の十二月(三)に同じ

ことの様なるわざしたんなる者は、女の童のかじけたるをこそ産まめ。幸(四)のなき

者は、如何(五)はある」北の方(六)俊監女(七)などか外のことは宜はぬ人の、まがくしう斯

く悪毒(八)は吐き給ふ。昔思(九)ひ出でて、心地(一〇)のむづかしきか。彼處(一一)を子にて持給へる

は、などかはある。まだ腰(一二)かどまり給はざめれば、人と等(一三)しくなり給ふ世もあり

なむ。女子たちしはづし給ふとも、男子(一四)の筋(一五)にも如何様(一六)なる事もありなむはや。

いとうたて、世(一七)の人の思(一八)ひ付きたるものをも、怪(一九)しからぬものこそたはやすく言

ふなれ。さやうなる人は、ことにしも言(二〇)はざるものを、立ちかへり言(二一)へばおい

らかにも宜(二二)ふるかな」おとど、兼雅(二三)「さて、其處(二四)はつき給へりや」とてひきまさぐり

給へば、俊監女(二五)「うたて戯(二六)れ給へる」とてうちむづかりて、後(二七)向(二八)き給へる御髪(二九)の、瑩(三〇)

〔語釋〕  
 (一) 俊隆女以外の女を捨てたるをいふ

(二) 女三宮

(三) 「よめるには」まめに」の誤なるべし

(四) ちて宮の許に

〔考異〕  
 (五) 人若し一人

しかけたる如くして、九尺ばかりあるを、繰り出で給へれば、一御座ひろごりていとめでたし。兼雅「この御後手のひろごりかよるに見つきてこそは、我は聖になりたれ。よき人を家に多くする、つかふ人のよきを集めて、宮をば盗みもて来て、さるものにてする奉りて、人の妻などの許にも到らぬ隈なくありきて、皆憎まれてこそありしか。今様の人は、怪しうよめるこそあれ、まろは、かしこき天が下の帝の御女を持たりとも、其のおとうとの御たち、其のあたりの人の妻は、女御まで残してましや。罪の浅きにやあらむ」と宣へば大將、仲忠「いとうたてある事。獨り侍りし時、いかでと思ひ給へし人をだに、よきを侍りしかど、然もあらずなりにしものを」おとど、兼雅「それこそ、いと我が如くなけれ。今もなどか然せざらむ。まかで物せられむ時、空酔をして、唯入りに入るべきぞかし。人若し騒がば、いたく酔ひにけりや。此處は何所ぞ。中の大殿にはあらずや」と唯酔ひに酔ふばかりぞかし」北の方、俊隆女「いと悪しき事多くし給ひけるかな。若き人は、親

〔語釋〕

- (一) 仲忠が行を亂さば
- (二) 「いとふ女しあらむかし」なるべし、一本あふふしあらじかし」
- (三) みて宮と今宮とは早速取るがよし
- (四) 給へる」なるべし
- (六) 實正
- (八) 實正の父李明
- (九) 藤英
- (一〇) 辭表
- (一一) 李明より
- (考異)
- (五) ざめれば—ざめるを
- (七) あめるを—あなるを
- (考異)
- (一一) 氣色—よし

かく宣ふとも、其處は早う立ち給ひね。な聞き給ひそ」おとど、兼雅「男は、身をかへりひこ、頼み人の思はむことを知りなば、良き妻は得てむや。文通はして聽されむ時と言はむには、何わざをかせむ。隙を見てふと入りぬればこそ。まして彼處の亂れてありかむは、をう女しあらじかし。此の宮と、源中納言の妻とは、早うこそ」など宣ふ。大將、仲忠「いと怪しきこと。さらば、彼の日御車どもなど設けさせてさふらはむ。絲毛なむ、彼の宮に内裏よりつくらせて奉り給へり。まだ乗り給はざめれば、民部卿の御方になむ、新しき絲毛の車造りてあめるを、先つ頃より、太政大臣惱み給ふとて、彼の殿のうちへて物せらるれば、御物忌などにあらばなむ、消息を物せむ」父おとど、兼雅「如何様にか煩らひ給ふらむ。とぶらひ奉るべくこそありけれ」大將、仲忠「右大辨の昨日申されしは、御表二度は奉れ給ひつる。一日召ありしかば参りたりしに、作らせ給ひしは、病重くなりたる氣色などの様になむ作らせ給ふ」と申すは、重く煩らひ給ふにやあらむ。え彼處に侍らずば、源中

〔語釋〕

(一)車が

(二)仲忠が己れがよい子にならんとて

(三)「紀伊守に」の「に」衍文なるべし

(四)「紀伊守に」の「に」衍文なるべし

〔考異〕

(一)かしーナ

●涼の家の産後

納言の御方にあまた侍り。すべて幾つばかりかは「おとど、兼雅いさや十ばかりこそよからめ」大將、仲忠「御前のことなど、かねて仰せられよかし。彼處にも宣はむ。御座所しつらはせ給ふこと行はせ給へ」おとど、兼雅「調度など、清らなりし所を、よきも無がめりや」と宣ふ。大將歸り給ひぬ。おとど、兼雅「をかしき事かな。おのれしうごく」宿徳に言はれむとて、漫なる其處の御敵ひき出でむと言ふかな。さ言ふ様こそあらめと思へば、否とも言はぬぞかし」と宣へど、下心には、悪しとも思さどりけり。

畫詞

こよは三條殿。

かくて源中納言殿の産屋の、七日の夜になりぬれば、紀伊守に響應の事どもを、男がた、女がた、御座所しつらふこと仕うまつる。御簾には、淺黄にして、緑の綺を端にはさしたり。南の廂に、めぐりて懸けたる壁代には、白き綾を擣ち登じたり。疊には唐の綿をこもに、紫の裏付けて、唐の錦の端さし、白きあやを席に

(考異)

(一) 箸は：色どれりーは  
ひは銀をうちは黒う色ど  
れり

(二) ちはしつーおはして

(三) 松風ー秋風

(四) 野分ーわきて

(五) 直衣ーナシ

したり。褥しごは 上席うはむらは例れいのごと。簀子すのこにも斯かくしたり。淺香せんかうの卓つくま、銀しろかねの櫛やうき、黄金ごうごんの土器かはらけ、火桶ひきびには、沈びんを檜皮色ひだいろに色いろどりて、内うちには黄金ごうごんの塗物ぬりものをしたり。箸はしは銀しろかねを丸まるくし色いろどれり。おこし炭すみは、鳥とりの卵たまご。かくて殿きんの君みだち皆みなおはしつ。上達部かんだちのは上うへに、君さんだちは簀子すのこにおはす。他人たにびとはまだおはせず。中納言ちゆうなごんの君きみ、大將たいしやうにか  
く聞きこえ給たまふ、

涼すず松風まつかぜをはらめる君きみもえてしがなうまれたる子このあえ物ものにせむ  
(三)

いかでく。

と聞きこえ給たまへり。大將たいしやう、仲思なかし「かく宣のたまはぬ先さきにまうでむと思おもひつるものを」とて、斯かく  
返事かへりごとに、

仲思なかし秋風あきかぜをあゆとやされる君きみが子こは千歳ちとせをまつ(四)の野分のわかとぞきく

唯今ただいま参まゐりつるものを、あえものと宣のたまへば物憂ものうくこそ。

とて奉たてまつり給たまひて、仲思なかし「彼處かしこはさすがに人目ひとめ多く、恥はづかしき所ところぞ」とて直衣なほし装束さうそく束清たづきよ  
(五)

らにして物し給ふ。中納言喜びて、下りて迎へて入り給ひぬ。前には、物の師嵜うちて、かたにあり。近衛つかさの者ども、皆あり。尉四人、散樂四人、松明ともしたり。

藏 開(下)

梗

概

① 涼の家の産養の梗き、② 仲忠夫婦に内侍のすけの噂、忠俊夫婦仲違の噂、③ 兼雅仲忠、女三宮以下を三條に迎ふ、④ 正頼あて宮の迎に參内す、東宮あて宮の退出を許さず、⑤ 除目、忠澄、近澄等昇進、東宮あて宮を扣留す、⑥ 仲忠、節料の米炭等を仲頼の妹に贈る、⑦ 兼雅、式部御宮の中君に衣食の料を贈る、⑧ 仲忠、兼雅と物語、家交換の約束、宮あこ祐澄等の噂、⑨ 大宮、七の君の夫と仲違せるを戒む、⑩ 新年の拜賀、仲忠、梨壺を訪ふ、正頼以下位階昇進、⑪ 犬宮の百箇日の産養、仲忠、東宮の御子たちに玩物を奉る、⑫ 仲忠、約東の家を兼雅に引渡す、⑬ 兼雅、中君を三條の東の家に迎ふ、中君を俊藤女に托す、⑭ 兼雅、女三宮を訪ふ、⑮ 一條に種れる兼雅の妾たちそれ、⑯ 分散す、⑰ 兼雅、女三宮を訪ふ、⑱ 一條に種ふ、⑲ 梨壺退出、兼雅、仲忠迎に參る。

- 涼の家の産養の梗き、
- (一) 正明、忠俊、清正
- (二) 仲忠、涼

かよる程に平中納言、藤大納言、藤宰相などおはしたり。物まゐり、御土器たびたびになりて、みな人あそび給ひ、詩ども講じのよし。かよれど右大將、源中納言は、あそびもし給はず、つとむかひて物語をし給ふ。中納言、源人の心ばかりくちをしき物こそなけれ。涼は此處にかくて侍らむと思はざりき。藤壺を宮に奉

(三釋)

(四)今宮と婚せしむべき由

(七)婚盟して見て相手の今宮が憎き女ならば一夜で御免蒙るべし

(二二)東宮よりも度々今宮を召されしかば

(考異)

(一)申さましーせまし

(二)さわざしが「が」ナシ

(三)本意をこそ遂げめーうこそ待るめれ

(五)聞えしーきうし

(六)さふらはむーさふらはせむ

(八)一夜ー一夜々々

(九)二夜ー二夜々々

(二〇)かくては侍らましやーかうては侍らましやは

(二一)よりてこそおとどはいたくーよりておとどは心いたく

(二二)けれーけり

り給ひし時、思ひしやうは、如何様にせむ、法師にやなりなまし、死にやしなまし、滋野の帥のやうに訴をや申さまし、となむ思ひさわぎしが、又とりかへし思ひし様は、いづれも物狂ほし、本意をこそ遂げめ、と思ひて、年頃つれなくまかりありきしに、かよる事聞えしかば、いと妬く、何でふこともさふらはむ、憎くば一夜まからむ、らうたくば二夜はまからむ、我をばたどなる田舎人と思ひて、かくし給ふ、となむ思ひし。さる程にかよる事有りしかば、思ふごと二夜はまかりにき。内裏に召しよ夜は、更に參らじ、やがて歇みなむと思ひて、更くる夜までは侍りしかど、然せむ事のいと哀にうたてかりしかばなむ、え侍らで參りにし。さてだに侍りつきにしかば、斯く今まで、今宵も此處にて君だちに對面する。京人の勞あるなりせば、かくては侍らましや」大將、仲思、それは仰せられたることなれど、其處によりてこそ、おとどはいたく思し煩らひけれ。宮もたびく仰せらるよめりしかば、かよる宜旨ありと申し給ふめりしかど、強て召し取りてこそ。

(一)申さましーせまし  
 (二)さわざしが「が」ナシ  
 (三)本意をこそ遂げめーうこそ待るめれ  
 (五)聞えしーきうし  
 (六)さふらはむーさふらはせむ  
 (八)一夜ー一夜々々  
 (九)二夜ー二夜々々  
 (二〇)かくては侍らましやーかうては侍らましやは  
 (二一)よりてこそおとどはいたくーよりておとどは心いたく  
 (二二)けれーけり



(語釋)

(一) 涼は今宮に不足なり  
しならんが他人は涼の今  
宮の聖になりしを道理と  
思へり

(二) あて宮

(三) 今宮

(五) あて宮

(七) 評判を聞くの意歟

(一) 「わちはか」なるべ  
し

(考異)

(四) かゝるゝかゝりける

(六) 御様―「御ナシ

(八) さだきくは然もや―

さたききはさりや

(九) いちへ―いさま

(一〇) 誰ぞ―誰にか

されば、御心地(一)にこそ飽かず思されけめ、人は理とぞ思ふや。さてもかの君は、容

貌によりてこそ、誰もく思ひしか。(二)この君も、おとり給はざるは、小くより

大殿も宮も思ほしかしづきたりけるを、かゝる事(三)のありければ、いとほしがりて

こそはありけれ。同じ人の御子の、彼は先づ生ひ出で、これは後に生ひ出で給へ

るにこそあれ。かたちは劣り給はざるを、何か思す(四)」中納言 涼然だにあれば

こそ斯くても侍れ。今は何方かまからむ。天下にいふとも、かの君の御様なる人

は有りなむや。容貌のみやは萬の事をこそはさだきくは然もや(五)」大將 仲忠「さて

も有る様を宣へ」涼「かの君の御様は、まろぞよく見取りたるかな。髪(七)(八)うるはしく、

色白く、目鼻こそは付きためれ」大將 仲忠「然のみやは。さて心は無しや」いらへ(九)

涼「それは知らず」大將 仲忠「いかでか今宵はある」とてわらひ給ふ。仲忠「まこと

に、こよに見しやうなる童のありしは、誰ぞ」中納言 涼「いさ數多あれば知らず。

いづれそが中に、承香殿の女御の御許なりしこそあれ」大將 仲忠「もし、このわれ(一〇)

(一)「こんごも」は童の名

(二)「なととて」なるべし

(考異)  
 (二)まかりし時扇を鳴らして—まかりしかば扇をたぐきて

(四)し給はず—せず

(五)琴は—「は」ナン

(六)有りける—ある

らか、中將なりし時、灌佛の童に出だされたりしは「いらへ、(三)それぞかし。

れこそとぞ言ひし」大將、仲忠「われらが、一日こよにまかりし時、扇を鳴らして「夕

さり來」といひしかば、いと馴れたりしと見しは、然なりけり」いらへ、(三)童は藤

壺のあこきこそあれ。外にはたと今なし。あこきは、兵衛の君の弟にや」仲忠「あ

こきは、木工の君の弟や。さいつ頃内裏に侍りしにも、あこきをぞ語らひて侍り

し」などて遊もし給はず。(四)

大將、仲忠「などて君は、琴は弾き給はで、人をば呼びもて来て、すどろ物語の役は」

いらへ、(五)年頃思ひつる事を言はむ人もなかりつる。今日今宵思ひ出づるまよに

聞ゆるぞかし。琴は聞く人もあらじ」仲忠「くち惜しくとも、弾きにこそ弾き給は

め。聞きには聞くを」中納言、(六)「さや。其處のやうに人に知らるばかりはいか

か。さて書などをこそ、自ら習はどや。よろづの遊はを學ばじ」大將、仲忠「子ばか

りかなしき物やは有りける。君は思ひ給ふや」いらへ、(六)「いまだ穢ければ見す」

(語釋)

(一) 生れ落つると早速

(二) 黽勉

(三) 黽勉

(四) 異なるべし

(考異)

(一) まろら「ら」ナレ

(五) まこと「きや」まこ

ともややういはしてきや

「まことやとやいはして

きや

大將、仲忠「いふかひなき事する君かな。まろらが子は、すなはちより懐にこそ入

れ居たれ」中納言、源「それ女ならば。我等が子は親に優るなし。男は、我に劣ら

むには何にかはせむ。女ならば、琴をも習はし、をかしき物をも取らせて、花やか

なる交らひもやするところと思はめ。まろが許に、女のくらくこそ侍れ」大將、仲忠、賜

へ。それ益無かなり。まろが子に取らせむ」いらへ。源「まろが子の妻になし給へ。

さながら取らせむ」大將、仲忠「いとまがくしき事するうち出でなむ。さても我等

ぞ童の心地しつるに、皆子を設けつるよ。まことや用意はしてきや」いらへ、

源「晦の夜こそは。まことは方々ものし給へば、内へも入らず」大將、仲忠「源氏と

いふ所、痴れたる事する。我は、人の御親とも知らず、おはするに、たゞ入りに入

り臥しにき」中納言、源「帝の御女えたれば、誰かは御前には入り臥すらむ。何か

は、さは祓へられて、鬼も神も、急ぎては逐ひやるべき」大將、仲忠「我をのこは、

實法にはあらぬものぞ」いらへ、源「妻を思はぬか。思はざらむ時、今まであらむ

〔語釋〕

(一) 仲頼

(三) 未詳、誤あらんか

(九) 正頼

〔考異〕

(二) 頼られ―頼り

(四) など調じて―などし

(五) 花の―の―ナシ

(六) 頭の―良の―つらサ

みの

(七) 御遊―御みあそび

(八) はしく―はしう

や。棄ててまし」大將、仲忠あはれ吹上にて、我らがあやしき事を、せぬわざ

わざをせしやは。我らはかく上達部のはじめにて有り、かの少將もかくてあらば、

いま頭などにもなりなむ。そのかみ上臈にもあり、御覺もありし人の、哀にて山

に籠られたる。久しくえこそ訪らはね。訪らひ給ふや」中納言、涼、涼は、時々と

ぶらひ侍り。さいつ頃、綿の衣ども縫はせて、かいさう餅など調じておくり給へ

りき」大將、仲忠「年かへりて、花の盛にいざ給へ。頭の中將などして、文など作ら

む。昔の古き所うしなはぬこそ、生きたる効はあれ。殿上の今はいとさうくし

きに、御遊の折などいとさうくしや。世の中のはかなきに、今は思ふやうは、人

の聞かまほしくし給ふ物の音を、手を惜みて、今日も死なば、何のかひかは。萬

のするわざ、年老いぬれば、みな劣り忘れなむ。おり立ちてあそびて、帝にも親

にも、聞かせ奉らむとす」中納言、涼「いといみじき事有るべき世の中にも有るか

な。まろにも聞かせ給へ」大將、仲忠「君にもせよかし」といふ程に御消息大殿より

(九)

〔語釋〕

(二)「人」とは「人々」歟

〔考異〕

(一)御返り―御返事

(三)君の―中納言君の

あり。

正頼まうで來むずるを、みだり脚の氣あがりて、東西知らずなむ。そこに男ども侍らむ。御身のかはりには雜役もせさせ給へ。

とあり。御返り、

涼かしこまりて承りぬ。渡りおはしまさねば、人いとさうぐしけに。

など聞え給ふ。色紙をひき違へつよ、碁代おほく包みて、御前ごとに参れり。大

將、仲忠君の財は、みな今宵うち取りてむ」とて碁うち給へば、中納言、涼「まけ給

ひぬ」とて打ち給はず居給へば、むすび袋に入れて出だしたり。一度にいと多く

おし立てて打ち入れつ。大將餌袋に一餌袋おきつよみて、二包持給へり。負けた

る人、集まりて乞へば、仲忠「またこそ、負けたらむ時つかはめ」とて取らせず。こ

れらは黄金の錢なり。

かくて御酒度々になりぬ。ことに高き人々おはせねば、ある限の君たちは、脚を

(一) 魚巻  
 (二) 藁蕨などにて魚を巻きたるもの

(考異)  
 (一) 火を「を」をナシ  
 (二) 紀伊守一頑松  
 (四) 荒巻一つさけとを一枝につけたり一荒巻を一枝につけたりさくけを一枝につけたり  
 (五) 雉子十捧二つを一枝につけたり一雉子と鯉十捧三つを一枝につけたり  
 (六) 一捧に一枝に

亂りてたはぶれ遊をし給ふ程に、夜半ばかりになりぬ。大將立ちて、東の簀子に立ちて、柱に倚り立ちて見給へば、御簾を二尺ばかり捲きあけて、おとな四十人ばかり、赤色、青色の唐衣、綾の摺裳、さまざまかさね著て、並み居て、今宵の歌、詠み書き、あるはとありかよると言ひあへり。童十餘人ばかり、青色の五重がさね、繚のうへのはかま、綾かいねりの袖、三重がさねのはかま、前ごとに白き錢をおきて賜びつ。簀子には間ごとに燈籠かけたり。蘇枋の大いなる櫃に、銀の箸そへて、火をおこしつよ、所々にするゑたり。東の渡殿には、すみ物など、棚にかきするゑたり。

(三) 紀伊守、國のつかさたちのらうどもひき率て物奉る。荒巻一つ、しばしあれば、

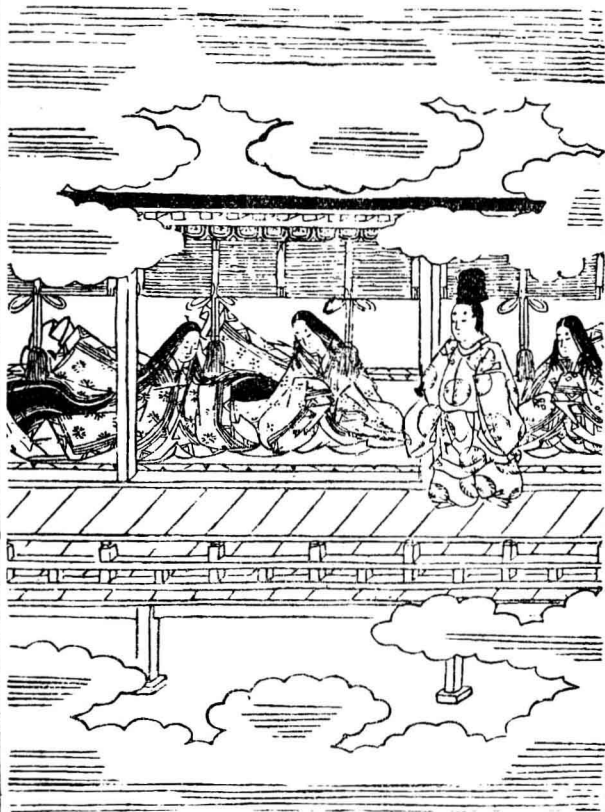
さけとを一枝につけたり。鯉十捧二つを一枝につけたり。雉子十捧、二つを一枝につけたり。

鳩一捧、二つを一捧にしたたり。銀の餌袋二つ、蜜と千歳汁と入れたり。

東の渡殿に、持てつらねて並み立てり。又紀伊守の北の方の御もとより衝重三

藏

開(下)



一八三

(一) 誦釋

(二) 正頼忠雅

(考異)

(一) いみじく〜といひ  
トウ

(三) しうへーしう

(四) めるをーめるは

(五) 参りにけむやー参り  
きなむや

(六) かのーナレ

つ。こしたかつき四つ、口結ひたる壺四つ奉り給へり。それは御前の簀子に竝め  
すゑたり。あけて見れば、鯉、壺焼の鮑、海松、甘海苔など見ゆ。

大將の君俄にさし出で給へり。人々おどろけば、仲忠「我と君とは、いみじく契り  
たる中ぞ。かたみに内許さむとぞ言ひたる」とて入り給へば、母屋の御簾の前に、

かたぐの御産養の物ども参りすゑたり。大殿、左大臣、種松など奉りたる

物どもなり。中に、種松が、二なし。母屋の御簾のうちにぞ、産屋装束したるし

うへどもいと多く居たる。大將、仲忠「今は斯くおとなしくなり給ひて、子かき抱

き給ふらむこそ。あな恥かしや」大殿の北の方、奥の方にて、大宮「そこは見なら

ひ給ふらむを」大將、仲忠「物恥すと聞かれたるを、何かこのごろのなのらば、

兵衛つかさよりは参りにけむや」北の方、大宮「かのしほちよりこそおひけれ」大

將、仲忠「近き衛ならでは、などてかは。よき所に参り來けるかな」とて衝重なる

菓物を見給へば、銀の皿の四寸ばかりなるに、それより高く盛りつとあり。かよ



る程に、内より土器出ださせ給ふとて、

年を経てふたよびあらむかよる日のかはらけ幾世君にさよまし

とあれば大將、

仲思うまれいづる世々の土器まつ程にまた一たびの兒を見せなむ

とて又仲思御聲しつるはさののわたりにや」とあれば、「酒飲まざらむ人咎めむと

ぞ」口々に宣ふほどに、南の方に、宮はたが言ふやう、宮はた大將殿こそ、この父君の

物盗みし侍る。この御物みな取る」とのよしれば大將、仲思盗する親ははやうこ

そ打てや」といらへ給へば、内より土器度々強ひ給ふ。

仲思盃のめぐりあひつゝ萬世をかぞへて君に幾世知らせむ

などて内にさし入れ給ふ。内には君たち竝み居て、と言ひかく言ひ、強ひらるれ

ば、仲思いと煩はしき所にも」とて立ち給ひなむとすれば、式部卿の宮の御方、

世に名だたる琵琶源中納言の持給へるを、いさよかかき鳴らしてさし出で給ふ。

(語釋)

(四) 祐澄

(六) 「などとて」なるべし

(考異)

(一) ふたよび一ひとたび

(二) また一まづ

(三) しつるはさののわたりにやーしつかさののわたりつかさにや

(五) 親ははやうこそ打てやー親とはよくぞうつや

(七) 名だたる一名だかき

(八) いさよかーナシ

(語釈)  
(二)はかまの腰に

(考異)  
(一)かきつけつる—かきける

大將たいしやう ともかくも言いはで、かき鳴ならし給たまひて、仲忠なかつちゆう「これは、この名なだたる物ものなりけりな」とて一日うなるども諍うたひし歌うたを、いとおもしろき音ねにかい彈ひきて、仲忠なかつちゆう「いづらや。この折せりにこそ、かの扇拍子あふぎばやうしは」とて少せこしかい彈ひきて立ち給たまへば、兵衛ひやうゑの君きみといふ人ひと、路みちにふたがり居ゐて、兵衛ひやうゑかよる所ところに入りおはしまして、まさに歸かへらせ給たまひなむや」とてひき留とどむれば、仲忠なかつちゆうあな煩わづらはしや。群猿ぐんざるの心地こころちこそすれ」いらへ、兵衛ひやうゑ「御舍人ごせにんどもぞかし」大將たいしやう、仲忠なかつちゆう「うたてある隨身ずゐじんにこそは」と宣のたまふ程ほどに、内うちより綾あやかいねりのいと黒くろらかなる一ひとかさね、薄色うすいろの織物おりもののほそなが一ひとかさね、三重みへかさねのはかま一ひとくだり、えも言いはず清きよらにてさし出いで給たまへれば、中將ちゆうじやうの君きみといふ人ひと、取とりてかづけ奉たてまつりつ。大將たいしやう、御たちごたちの歌うたかきつけつる硯すゑりのもとに立ち寄よりて、筆ふでをとりて、懷紙ふしころがみにかく書かきて、腰こしに結むすひ付つく、

(二)

仲忠なかつちゆう「千歳經ちとせへむよはひをこよにいくかへりきてもこそみむ鶴つらの毛衣けころもかくて高欄かうらんのもとにこれこそのおしかよりて居ゐたる所ところに出いで給たまひて、仲忠なかつちゆう「一日は

(語釋)  
(一)もちひたる衣を與へて

(二)「山ぶしも野ふしもかくて試みつ今は舍人が闊ぞゆかしき」  
(三)種大納言忠俊こそ上臈なれど

(五)正頼の子ども三人

(六)仲澄

(七)近澄

(考異)  
(四)するに―する所に

知らぬ人なればこそ。今よりだに知る人にを」とてすべし取らせて、其方の御階よりおりて、みそかに出で給へば、中納言見つけて、南の階より、跣足にて下りおはして、追ひ付きて、(二)「何ぞ君の、内に入りて、舍人の閨の法師のやうにては逃げ給ふぞ」とて引きもて来て、(三)「うとき所に知らぬ人のやうに。上臈もことにおはせず、大納言殿こそ。それも疎からぬ御中なれば、起き臥し昔語も、ゆく先の契もせむとするに、(四)てうぶくまろが様にては」大將、仲思をいたす心や有るとて。まことは、これこそに物は言はむとてまかり入りたりつれば、召し入れて懲ぜられつるに困じて、まかり逃げつるぞや」とて、これかれつくしとりやかへしまとに居竝み給へり。

おとどの上達部三所、大將、中納言殿と物語し給ふほどに、(六)故侍従の御弟の大夫なりしは、内藏頭にて、藏人にぞものしたまふ。(七)故侍従には容貌も心もまさりたる、類なき色好にぞありける。土器とりて出で給へり。大將、仲思「此の君見奉

(語釋)

(一)「などとて」なるべし

(二)仲頼

(三)「得る」は「得給」なるべし

(四)「棄つる」の下「と」あるべし

(五)「中納言は酔ひにたるか」なるべし

(考異)

(六)ぬよりて—よづいて

(七)とロヤ—とてロヤに

(八)碁に—攤に

(九)はたまろさりさくるを—まろさりさくるを

れば、別わかいても萬よろづの事こと忘わするゝにぞ」などて、仲忠ちゆうちゆう内裏うちに、「御佛名おつみやうなむ過すして參まゐれ」と仰おほせられしを、え參まゐり侍はべらぬかな。折せりあらば、その由よし、「いたはる所ところ侍はべりてなむ、え參まゐらざめる」と奏そうし給たまへ」とて、仲忠ちゆうちゆう水尾みづのの行人ぎんじんの、かやうの折せりをかしかりしはや」中納言ちゆうなごん、涼すず「この藤壺ふじつぼすこしの罪つみは得えるらむやは。昔むかしより、人佗ひとわびさせむとなり給たまへる御身みかな。涼すずらは面おもてやはある。身みを棄すつる棄すてぬとにこそあめれ」大將たいしやう、仲忠ちゆうちゆうは酔よひにたるか。など斯かくは言いふ」いらへ、涼すず「酔よはぬ時ときも言いぐさなれば、みな人見ひとみ馴なれにたらむ。吾わがが君きみも、言賢ことさかしうや」大將たいしやう、仲忠ちゆうちゆう「そよ。さかしら言いふおろかにと言いへばぞかし」平中納言へいぢゆうなごん、正明せいめいとほくてるよりて思おもふぞよ」と言いへば、「さてはえこそ」と口々くちくいふを、御同胞おんどうぱたち、内うちにも外そとにも、いと聞きにくしと思おもへり。宰相さいしやう中將ちゆうしやう、祐澄すけあきら「今夜こんやは祐澄すけあきらははしたなき目をこそ見給みたまへれ。碁ごに負まけせまりて、はたまろさりさくるをとて碁代ごてを借かりつれば、のよしりつるに、佗わびにてなむ侍はべりつる。この碁代ごてといふ物もの、すこし盜ぬすませて侍はべればこそ。いと多く斯か

(語釋)  
(四)「賜はらむ」 歟

(五)兼雅

(考異)  
(一)いみじき一みじかき

(二)見せざらむ一みをさ  
らむ

(三)など一と

(六)立ちたるか一立ちた  
る御事か

うて侍れ」とて多くつよみて持ち給へり。仲思「かれは心高き人ぞや。怪しうこそ  
 は。いみじき契なれしたるものを」(二)「祐澄」如何なる御契をか」大將「見せざらむと  
 こそは」いらへ、祐澄「羨ましくも侍る事かな」など言ふほどに、曉(三)になりぬ。土  
 器たちかへり参る。内よりかづけ物、君たち取りつどきて出で給へり。中納言取り  
 つどきかづけ給ふ。織物、あか色の唐衣、綾かいねりの綾、摺裳、三重がさねの  
 はかま、兒の衣(四)襦袢そへたり。上人には織物のほそなが、あはせのはかまなど様  
 様なり。かよる程に西の方、中納言の伯母君の御許より、雑物のうちぎ一かさね、  
 唐綾のかいねり、あはせのはかまなど、上達部殿上人などにも出だし給へり。  
 立ち給はむとする程に、大將、仲思「まことや、聞えむとしつる事は、明日御車賜  
 へけむ」中納言、遠「なにの御料にぞ」仲思「女三の宮、三條に迎へ奉る料なり」(四)  
 人々いみじく悦びおどろき給ふ。遠「我が世に、痛はしくかたはらいたかりつり事  
 の、目やすき事かな。是はいかでぞ。」(五)殿の御心と思し立ちたるか。御催しか」大

〔語釋〕  
(一) 兼雅が言ひ出したれば也

(二) 「わ」は「につ」の誤にて「奉り侍らむにつきても」なるべし

(三) 假令退出するにして

(四) 不益もや一不用にもや一ふえうにや

(五) 不益もや一不用にもや一ふえうにや

(六) 志せし一志の

(七) えも一「も」ナレ

(八) 給へる一ナレ

(九) つくく一つくく

(一〇) 以下これこそその心

(一一) 「つて」は「御手」なるべし

將、仲忠、他人の知るべき事ならばこそ。然せむとあれば、「いとよく侍るなり」

と人々あつまりて悦び給ひて、速車奉り侍らむ。わきても、藤壺の明日まかで

させむとあめれば、それが入るべき様になむ。大將、仲忠、それはまかり出で給は

じ。然るものなりとも、曉がたにぞ辛うじて。それも不益もやことには無き。晝

つ方に奉れて、その御用にもあたりなむ。「いとよかなり」とこれかれも宣ふ程

に、紀伊守、客人の上達部にと志せしものあれど、えも出だしやらで皆歸り給

ひぬ。これこそ、かのかづけ給へる物を持ちて思ふやう、こればかり賜はむとに

やあらむとて、つくく見るに、腰の方に文結ひ付けられたり。見れば、

仲忠人しれずわたりそめにし名取川なほ見まほしやつけよ何處と

内裏わたりこそ忘れがたけれ。これは寒けなる居すまひなり。

とあるを見てこの文をいと嬉しと思ふ。かくのよしるつてもちたる人も無きもの

を、内裏わたりの人、いかでか見むとこそすれ、これ一行にても持ちたる人は心

〔語釋〕

〔一〕方々へ遣はず也

〔五〕私が此方にのみ長居するは此方にて大事にさるゝ故ならんと仲忠に思はるゝが恥かし

〔六〕犬宮

〔七〕片輪な感でもあるか

〔考異〕

〔二〕すみ物もーすみ物に

〔三〕日 は「は」チシ

〔四〕こそ思へーこそは思へ

にくくせしものを、と思ひて隠しつ。織物のほそながを引きへぎて、兵衛の君に取らせ、中將の君に一重取らせて、残はとりて入りぬ。

かくて昨夜の御前の物ども引く。すみ物も添へて、荒卷十枝と、魚鳥と二つたか

つき一つづつ、大殿、大將殿、藤壺の女御の君の御もとへ、奉れ給ふ。

内侍のすけ、歸りなむとて、ナリ犬宮の御湯殿に參らむ、と大殿に聞えてしを、か

くて侍ればものしと思すらむ。おほろけならで悲しくし給へば、いかに日頃は、

御湯殿をうしろめたく思すらむ」中納言殿の北の方、今宮「こよにも心知らひたる

人もなければ、御口入れ給へとこそ思へ」すけ、「時々かよひて參り來む。さばかり

ある御心に、御方いとよく勞はらせ給へばならむ、と思さむいと恥かしく侍り」

北の方、今宮「けに然ぞあらむ」など宣ふ。大殿の北の方、大宮「この兒のいかどあ

る、いぶかしさに、先つ頃おとどの内裏に物し給ひしころ、見に物したりしかど、

更に見せ給はず。何しかは、かたはやつきたる」ナリ「あなまがくし。たど父お

(語釋)

(一)大殿の北方なるべし

(五)仲忠

(六)女一宮

(考異)

(一)もはすめれ—もはすれ

(三)あるも—あなるも

(四)宣ふ—宣ひし

とど、今少し小くして氣近きこそおはすめれ。日に二度三度はありし御文に「人に  
 見せ奉り給ふな」とのみありしかばこそ侍りけめ。藤壺の御方よりも、生ひま  
 さり給ひなむかし」大殿「いでや、容貌あるも、言ひ騒げばあまりに聞きにくしや」  
 など宣ふ。内侍のすけに、御衣櫃に女の装束一くだり、夜の装束一くだり、絹三  
 十匹、綿など入れて取らせ給ふ。

畫詞

こよは源中納言殿。

かくて大將殿は、畫の御座所に、犬宮いだきて臥し給へり。宮もかたはらに御殿  
 籠り給へり。源中納言殿より奉り給へる物どもは、絲を薬にて、白き組を荒卷  
 にて、きぬ一匹を魚にて、それを五葉の造り枝につけつと十枝、鯛鯉は、生きては  
 たらく様にて、同じ造り枝につけたり。雉子の腹には、黒方を丸かし入れ、骸を  
 ば銀にて造れり。鳩は黄金、その腹には黄金入れたり。小鳥には、黒方を丸か  
 したり。折櫃は銀、鯉は沈、壺焼の鮑は黒方、海松、青海苔は絲、甘海苔は綿



(一)「書」  
(二)「かり物」歌

(二)「おづけてしかばし歌」

(三)「宣へる」なるべし

を染めてしたり。壺には綾、衝重にはすはうの物入れたり。洲濱を見給へに中納言殿の御手にて、

涼ゆく水のすむかけきみにかふるまで汀の鶴は生ひも立たなむとあり。

**書詞**

こよは源中納言殿。臺盤所におもと人たち居て物食ふ。基代もみなあ

り。みな分けつよ。

かくて源中納言殿より大將殿に、昨夜のから物錢いま一餌袋、白き添へて、

涼いと行く先長く思しまうくめる物を、などか忘れさせ給ひにける。心きたな

き上達部も侍るものを。

と中納言の御消息にて有り。御返り、

仲忠人にかきあづけてかは色こそかはれ、いかど。

となむ宣へり。

(三)

話(四)仲夫婚に内侍のすけ  
忠の噂、忠俊夫婚仲達の  
噂。

(語釋)  
(一)涼方にて仰せられし  
かど

(二)忠俊

(三)七の君

(四)忠澄

(五)七の君もやがて御産  
あるべし

かくて内侍のすけ、いと清らに装束きて御前に参り給ひて、ナリ「犬宮のいと戀し  
くはおはしつれば、今日明日は」と侍りつれど、急ぎて参りつるなり」おとど、  
仲思「いと嬉しかなり。日頃うしろめたかりつる。御方々はなどておはしつるぞ。  
あまた御聲せしは、幾所にか」ナリ「大將北の方の御子にし奉れ給へば、いたく惱  
み給ひしかばおはしぬ。式部卿の宮の御方は、御子をいと安く生み給へばあえ物  
にとて。大納言殿の北の方は、いづれとも元よりいみじき思ひはらからにて、心  
細き心などきこえ給へば、かねて渡らせ給ひにける。如何なるか侍らむ、大納言  
殿御中逢にて、日頃は夜毎におはして、簀子になむ居明かし給ふめる。御格子は  
とくおろしてさしめぐり、人物きこゆればいみじうさいなみ給へば、一所なむ。  
一夜はいとほしがりて、中納言の君對面し給へりしかば、それも逐ひ出でられて  
なむ。今日は北の大殿に渡り給ひぬらむ。さるは、それもかやうの事ありけにお  
はすめり。宜なりけり、例はいたう空めいたる人のいとまめに見え給ひしは」

〔誤解〕  
(一)今宮をいふ「殿のは」なるべし

(二)今宮との

(三)などとてしなるべし

(四)宮に」なるべし

(五)れ」衍文なるべし

仲忠「此の君の御容貌は如何おはする」すけ、「内裏の御方の様にいとをかしけになむ」大將、仲忠「見奉らざらむ人は知りがたくぞ」すけ、「何か、氣色はいとよくぞ」仲忠「さて源中納言殿は」すけ、「それは、宮の御様の人の若く濟らにおはすること。御方々と濟らにおはします」宮はおどろき給ひて、女「何事ぞ。あれ、聞きにくしや」大將殿、仲忠「夢見給へるか。人の物や言ひつる」とて、「中納言と君との御中は如何なるぞ。兒まろがやうに抱くや」すけ、「御中はいとめでたく思ひ聞え給へり。いたう煩らひ給ひし時は、泣くく手惑をぞし給ひし。兒は、見には見給ふ。おそろしとて抱き給はず」おとど、仲忠「また見ずなど宣ひしかば、いぶかしきにや」などと内侍のすけ、犬宮いだきて入りぬ。おとど、宮は、仲忠「起き居給ひて、昨夜の所よりある物ども見給へ。これらとり置かせ給へれ。かよる物の用あるとき、俄にすれば煩はしき」と聞え給ふ。おき給ひて、昨夜のかづけ物ども見給ふ。おとど、仲忠「みな人かよる事すれ。いとあやしく、物の具など有り

(語釋)

(一)仁壽殿

(二)俊薩女

(五)「まうでこ」なるべし

(六)明るき中に

(七)女三宮

自兼雅仲忠、女三宮以下を三條に迎ふ

(考異)

(二二)「つらー一すくー」ナダ

(四)三十人ー二十人

がたく清りにする所にこそあれ。このうちき添ひたるは、お前に奉らむ。唐衣

添ひたるは、内裏の御方の参らせ給はむ御料に奉れ給へ」宮、女二かたへは三

條に奉れむ」おとど、仲忠「あな見苦しや。片隅に籠り居たる、生女の著るべき

物かは」など宣ひて、その日はおはしまし暮らして、又の日、仲忠「三條にまかり

てすべき事侍り」とて、うへの衣装束清らにして薰物どもして出で給ひぬ。

三條殿にまうで給ひて、南の大殿を見給へば、いと清らにしつらはれたり。しば

しあれば、殿ばらより御車ども奉れ給へり。源中納言殿より、あたらしき黄金

作に男ども二十餘人、装束一つらにて、擇り立てて奉り給へり。絲毛には、さ

ぶらひの下藤の男どもに、うへのきぬなど著せて、三十人ばかりつけたりの御前

四位十人、五位二十人、六位三十人。大將は、仲忠馬に鞍おきて、男どもかへる

べきやうにゐてまうで、三條殿に」と言ひおき給ひて、父おとど一つ御車にて、

御前二人ばかりして、あかく物し給ひぬ。西の御門よりおり給ひて、右大將は宮

〔語釋〕

(一) 陶碗歌

(二) ひめ節

(六) こめの歌、一本二三  
「三」

〔考異〕

(三) ナみありーナしをり

(四) 堅い鹽ー堅盛

(五) 櫛のー梨子地の

(七) ヤはー「は」ナン

の御前へ、左大將は忍びて中の君の御方に参りて見給へば、うち破れたる屏風一  
 雙ばかり、夏のかたびらの煤けたる几帳、一つ二つ立てて、君は綾かいねりの所  
 所破れたる單がさね、すよけたる白衣著て、火桶のすよけたるに、火わづかにお  
 こしたるに、臺一つたてて、白き、たうわんに御物、ひめめきて少し盛りて、す  
 みおり薑、漬けたる蕪、堅い鹽ばかりして、夜さりの御物にもあらず、旦の物に  
 もあらず程にまゐりたり。御前には、古びたる蒔繪の櫛の箱同じやうなる硯の箱  
 すゑて、櫛の箱蓋をとり除けて、一日の柑子の壺の残をとり出でて、乳母かけて  
 見なです。その女孫など、童にて有り。下仕、一人ばかりなむ有りける。おと  
 ど見廻らして、とばかり物も宣はず、たゞ泣きにごこの御衣の袖のしとどになり  
 ぬまで泣き給ふ。御前なる硯を引きよせて、懐紙に、かく書きて、うち置きて立  
 ち給ひぬれば、中の君、「我斯くていみじき様を見えぬるは、さもあらばあれ、他  
 世にやは經たる。かくなしたるにこそはあめれ。これをかくすと見えぬるは、い  
 (七)

(四釋)

(二) わかれし人は「歎

四) 兼雅

(考異)

(一) 恥見る—恥を見る

(三) 見えねば—見えねど

(五) ちとどは：御たち二十餘人—左大將ありかりて南のちとどの方へおはしぬれば御たち二十餘人

みじく悲しき事。わが幸なく恥見るべき宿世の有りければ、幾多の年月こそあれ、かよる年月を見る事」と伏しまろび泣き給ふ。乳母の孫のわらは、「御硯にかかる物こそ侍れ」と取りて奉る。見給へば、

兼雅ともかくもいふべき方も思ほえず見るに涙の降るにまどひて

君、これが返事をだにいかで言はむと思して、かく書き給ふ、

中君ながめつる雲居をのみぞ恨みつるわかれの人は目にも見えねば

と書きて、いかで遣らむと思せど、出で走るべき姿したる人もなければ、おし揉

みて手に握りて、寢殿にむかひたる柱のもとに立ちて見給へば、おとどは下り給

ひて、東の一の對の方へおはしぬ。なほ其處に立ち居給へり。

かくておとどは、宮の御方に参り給ひぬれば、御たち二十餘人ばかり、装束清ら

にして、わらは四人、青色にあをし重ねて著たり。おはする所のさま、昔に劣ら

ず。御褥敷きて、御簾の前に居給へり。宮は昔の御かたちに劣り給はず、綾かい

(語釋)

(一)「こきうすき」は「ころもき」なるべし

(四)女四宮

(孝異)

(二)いと斯くてもいとよくかくても

(三)苦しうー苦しう

(五)嵯峨院にては

ねりのこきうすき織物のほそながなど奉りて、御火桶清らにておはす。角櫃に

火などおこしたり。御臺一よろひ、かねの御器などして、例のやうにて物まるれ

り。おとど、兼雅「年頃はあさましく公にも棄てられ奉りたるやうにて。昔

は、ゆくさきも人なみくにや、と思ふ給へて、かよる宮仕もさる方なりしを、

今は限のやうなる身に侍れば、さふらはむも御面伏なるやうなれば、かよる身に

あえぬべき者の許に籠り侍るを、然てのみやは行くさきも短くなりぬる心地し侍

ればなむ。蠶の苦屋のやうなる所に、時々通ひおはしましなむや」と聞え給へり。

宮、さらに、年頃見ざりつるとも思したらで、いとおいらかに、女三世の中はい

と斯くてもありぬべしや。たど苦しう覺ゆるは、東宮の御方なり。身は心と世の

中に住みはふれて、「帝、後の御面を伏すること」と宜ふなれば、と参らで年を経

るなむ、悲しき。昔はしばくこそものせしかど、今は参り給へぬをなむ、彼處

にはうしろめたう宣ふ」おとど、兼雅「春宮の御方は、中納言かくて侍れば、いと

〔語釋〕  
 (一)「あととの御前に」なるべし

(二)「立ち給へり」なるべし

(三)「などとて」なるべし

(四)仲頼

〔考異〕  
 (五)山籠しける人―山籠の知るべき人

(六)有りしをかくて―ありしかはかうて

よく仕うまつりなむ。御上をぞかしこまり思ふ給へる」御いらへ、女三「今は、ともかくもしなし捨てられなむ儘にを、となむ、一日中納言にものせし」と宣ふほどに、おとど御前に、昔のやうにて御臺まるれり。

(二) 多くの御物語し給ふほどに右大將は少將の妹の方におはして、箕子のもとに立ち給ひて、仲頼妹「あな覺えず所たがへか」と聞え給へば、仲思「人々もとのめ給ひしか

ば、それ聞えむとてなむ」いらへ、仲頼妹「かよる人のしるべきと宣ひしかば、いと

よくぞ思ひ知りにき」などと簾のもとに几帳立て、褥さし出でて、赤色の火桶、繪

をかしくかきたるに、火おこして出だしたり。大將、仲思「今すこし近く寄せ給

へ。山籠の君を、昔はいみじう語らひ聞えしかば、さりととも聞召すやうも有りけ

む」いらへ、仲頼妹「山籠しける人やはと」大將、仲思「何か、いとよく承はりたり

や。一日も、聞えさすべかりけれど、斯くておはすらむともえ知り給はで有り

しを、かくておはせ給ひし由聞えしかばなむ。かく承らましかば。山の君の哀

(六)



(語釋)

(一)「かほりに」歟

(二)「えは」こそ「歟」

(三)兼雅と仲頼の代

(四)仲頼等

(五)忠俊の娘、仲頼の妻

(六)「さき」にものし給へりしには「歟」一本「さき」にものし給へりしは「又一本」さきにし給へりしに

(七)誤あるべし

(八)出家したしと

(九)「なりしは」歟

(一〇)男子か女子か

(一一)仲頼が

(一二)山へ

(考異)

(八)泣かるー泣く

におほえ給へば、かばかりに聞えまほしくなむ」いらへ、仲頼妹、常に聞ゆめりしか

ば、餘所にえ承りなどしたれど、疎々しく思されし筋にや、と思ひ給ふるなむ」

大將、仲忠、それは、親二所おはすとなむ、殿の御かはり、かの君の御かはりに、

人数に侍らすとも相思ほせ。さても、いかでかは、かの君たち世に經給はぬに、斯

くては。この宮内御殿のは何處にぞ。いかでか」いらへ、仲頼妹、親の御許にこそは。

さきにもしの給へりしには、みになむ、吹上のかへさを思ひ出でて、いみじくな

む泣かるなりし。かの人、「同じやうなる様になりなむ」などあめれど、親の許さ

ねば、心は同じやうにてなむ」大將、仲忠、幼き人など物しけなりしかば、何にぞ。

いくつばかりにて、何處にか」いらへ、仲頼女、一人十餘ばかりにて、男二人、一

つ二つが弟にてなむ。女は母君の御許に、男は、物ならはさむとて、山へむかへ

侍りき。兄なるは、何事も親には勝りぬべかめり。弟はえせで騒がれ侍るなり」

大將、仲忠、あそびの具も、いとかしこくて持給へりし。持てのほり給ひにしか」い

〔語釋〕

(一) 後に山へ取りよせたり

らへ、仲頼妹「子どもに物習はさむとて、後になむ。女にえ習はさぬは、少し外の方  
にさし出でて、物の音など調べおきて、彼處よりも深く入りなむとて、常に言ひ  
おこせ侍りつる」大將、仲忠「あはれ、さる所に、何心を思ひて幼き子どもと居給  
ふらむ。

〔考異〕

(二) 妹を—今は

仲忠「むつまじき疎きと妹をふりすてて山邊にひとりいかで住むらむ  
と宣へば、妹の君いみじく泣きて、  
仲頼妹「頼みしも見えしもさらに忘れでひとりは里もすみ憂かりけり

(三) いかで—人の

と聞ゆれば大將、仲忠「今日は宮の御方の三條へわたり給ふとてなむ、物せられつ  
る。仲忠侍る所も今いと廣くなりぬべし。今そこに御迎せむ。しばしなほ斯くて  
おはせよ。な思し疎みそ」とて立ちて、宮の御方へおはしぬ。

(四) せむや—せよや

おとど、兼雅「此處にや」と宣ひて、兼雅「右近や。昔思ほえてまかなひせむや。湯漬  
せよ」など宣へば、同じやうなるかねの坏にして、湯漬して、あはせいと清けに



〔語釋〕  
（一）合子、漆塗りの食器

て外にまるる。おほん酒などまるる程に日くれて、御車御前など参りたり。政所より炭多く出だして、所々に火おこさせて、車添などすゑて、餅、乾物など取り出で、酒樽に入れてすゑてまがりして、湧しつゝ飲ます。御前どもに、菓物乾物などして酒飲ます。

かくて先づ、うなる、下仕等人給へ乗る。御車寄せて、奉りて、引出づれば中の君「さば斯くするなりけり。我如何様にあらむとすらむ。この文をだに見せずなりぬる事」と泣くく持ちて思ひ立ち給へり。おとど、御車出だしてしばし有りて、立ち寄り給ひて、兼雅「今日は便のやうなり。今ことさらにを」とて歸り給ふ

（三）序の様で面白からず

（三）この文投け出だし給へれば御供の人取りて御車に奉りぬ。大將は御馬に乗りて、御さきに仕うまつり給ふ。世の中の人、右大將は、繼母の宮むかへ奉りて、御前していますべかなり」とて車ひき立てて見る。御續松ともしわたして、はやる馬に乗り、をりまはしておはする御様を、車どもより面をさし出でつゝ見

(語釋)

(一) 俊隆女

(二) 正賴

(四) 忠澄

(五) 東宮

②正賴あて宮の迎に参内す。東宮あて宮の退出を許さず。

(考異)

(三)たうきりーとうきりーのたうきり

る。由ある檳榔毛の車の簾をいと高くあけて、落ちぬばかりこぼれ出でて見るあり。大將うち寄りて、仲忠「何見給ふ。まるより外にあらじかし」と宣へば、「かかるあたには有りければ」大將、仲忠「のちおひといふなればぞ」とておはしぬ。かくて三條殿におはして、南の大殿に御車寄せつ。みな下り給ひぬ。今宵のまうけ人々にあづけられたれば、皆まゐりたり。父大殿は、やがてこゝに御殿籠る。大將、仲忠「今なむまかづる。明日もさふらはむ」と北の方に聞え給ひて歸り給ひぬ。

右の大殿は、藤壺の御迎し給はむとて、やがてその車にことなど加へて、絲毛三つ、黄金作たうきり、うなる車、下仕車、あはせて二十ばかり、御前の人、國なるのみこそ残れ、京なるは四位五位無きなし。おとど、正賴「暇ゆるされざなるを、参りてまかでさせむ」と宣ひて出立ち給へば、御子ども、中納言をはなちては、皆御供にまうで給ふ。縫殿の陣に御車ひき立て、まうで給ふ。宮は晝よりさ

(語釋)

(一)あて宮を

(二)あて宮に

(三)照陽殿

(五)去なれぬべきかなに  
歎、一本ぬられぬべきか  
なし

(六)女四宮

(七)百本の鞭を用意して

(八)東宮

(考異)

(四)日もへだたりつる一  
もへざりつる

る氣色御覽じて、東宮怪しく心地のあしきかな」ととてとらへて臥し給ひぬるまよ

に起き出で給はず。おとど参り給へれど宮入り臥し給へればえのほり給はで、下

に立ち給へれば、君たちはさながら土に立ち給へり。おとど、これかれして君に

消息申し給へど、え聞え次がぬほどに、大殿の君の御方に言ふやう、「こよらの年

月日もへだたりつる人の、今宵かく、辛うじて牽て去なれぬるかな。如何に腐り

亂れたらむ。さるは這ひ出でむぞかし。その様の聞えぞすめる」と言ふ。又院の

御方の下仕、わらはなど、「今宵はよき日なるべし。縫殿の陣の方に、俄に物まき

たる車ども、北に立てりつ。今宵ぞ持て出でらるべかめる。もよずはへして、よ

く打たばや」など言ひあへり。おとど爪弾をして、正頼女子もちたらむ人は、よ

き犬を食なりけり。中にらうたしと思ひしものをしも、出だし立てて、かよる耳

を聞くこと。なほ犬鳥にもくれて、籠めすゑたらましものを」と言ひ立ち給へる

を、宮はいとよく聞召す。

(八)

〔語釋〕  
〔一〕孫王の君が

〔三〕正頼に

〔五〕汝は東宮亮なれば

〔七〕正頼が

〔八〕あて宮

〔考異〕

〔一〕踏ませ―出でさせ  
〔四〕翁かく夜のほどに―  
おふなく夜のはどろに

〔六〕こそとて―ともかく

これかれ「夜更けぬ」と消息申せど、「え聞えず」とのみ申す。孫王の君を呼び寄せて、正頼「御後の方より忍びてまうでて申せ。度々まかださせずとのみあれば、思ほえず敵など持ち給へれば、うしろめたさに、御迎に」など申し給へ」と宣へば、孫王「聞えむ」とて御後の方よりやをらすべり入るを、宮御殿籠り起くるやうにて、いとあらく走り踏ませ給へば、御脇息に倒れかよりて、腰を突きつ。御屏風、御几帳もこほくと倒れぬ。孫王の君、いと久しくためらひて、斯うくと聞ゆれば、正頼「翁かく夜のほどに参りて、たどにやは。顯澄啓せよ、宮の亮なれば。藏人ならずとも」と宣へど、顯澄「何か。御氣色よろしからぬにこそ」とて申し給はねば、むつかり給ふを、宮きこしめして、女君をつと搔き寄せて宣ふやう、東宮「其處は、我をいかに言ひくたしてか、親同胞ひき連れさせて、我をば責めさする。萬のこと、我に知らせてこそ、参りもまかでもせられぬ。我に知らせて、親はらから一つ心にて、我をや責めさせむする。そこを放ち遣りては、我はあるべくも

〔語釋〕

(二) 懐胎五ヶ月の腹

(四) 仲忠をいふ歎

(五) あて言が

〔考異〕

(一) となめりーとの事なめり

(三) 宣ひきこえねばー宣ふうつらむは

あらず。斯く強ひてまかり出でさするは、また參らせじとなめり。斯くながら、  
 我もそこも死なむ」と宣ひて、つと抱きて臥し給へば、五月ばかりの腹、いみじ  
 うはたらきて、たゞ惑ひに惑ひ給ひ、いみじう泣き給ふ。宮いと憎しと思せど、  
 腹の騒ぐにいみじと思して、うちゆるして、東宮「宣ひきこえねばいましむるぞ」  
 と宣ふ。東宮「我は、そこによりては、せぬ業々をこそしつべけれ。かく心を隔て  
 て、心強くあしきは、仲忠の朝臣のするぞ。これに逢はずなりにたるをぞ、いと  
 悔しと思ひいますめる。人のいとかなしくする一子、帝の二つなくいたはり給ふ  
 聲、我が國に面もたけたる人、徒らになして、天の下の人かなしませ給ふらむに、  
 そこは容貌よかめれど、心こそえ良からざりけれ」と宣へば、水の戰して、汗に  
 しとどに濡れて、屈まり伏し給へれば、流石にをかしと思して、東宮「今より、我  
 に知らせぬ心な遣はれそよ。まかでらるべき事あめれば、今しばしこそあれ。強  
 ひて斯くすればいと憎きぞかし」と宣へば、夜半過るまで立ち給ひて、曉にぞお



〔語釋〕

(一)近道、一本「うまのかみ」

(七)あて宮に

〔考異〕

(二)賜はり給ひて一賜はりて

(三)ほど一ほどに

(四)宣ひしかば一のありしかば

(五)恥かしく侍りしか一恥かしかりしか

(六)有るを一あり

とどは歸り給ひける。

つとめて、内藏頭の君を御使にて、おとどの御文あり。

正頼昨夜は、路の程うしろめたさに、御迎に参り來たりしかど、御暇を賜はり給

はざりければ、曉になむまかで候ひつる。御暇賜はり給ひて、消息は宣へ。

車どもなど調へさするも煩はしきを。いでや、子ども二十人にかよりて持て

侍れど、そこをば懐といふばかりに生し立て奉りしかば、いつしかも人々

しくなり、面たどしき目をも見給へむとこそ思ひ奉りしか。消息申しつが

ぬほど、うち休らひつよ聞き侍りしかば、ある所々に、忌しくいみじき事

ども宣ひしかば、いと心憂くなむ。自らはさるものにて、若きものども、人

人にも聞きしこそいと恥かしく侍りしか。けに、暫しまかで給ひて、人の目

どももやすめ奉り給へ。

と有るを、老人とりて御前に奉れば、宮、東宮「持て來や」とて御覽じて、いと

藏

開(下)

(語釋)  
(二)東宮

(考異)  
(一)内藏頭→うまのかみ

(除目) 忠澄、近澄等昇  
造。東宮あて宮を仰留す。

とほしとは思せど、まかで給へとあるをいと憎しと思して、おし揉みて投げやり給ひて、東宮人々の物すらむことは、こよには得知らず。面伏なりと思さば、見給ふまじくこそはとなむ」と言はせ給へば、内藏頭、いとはしたなくいとほしと思して、まかで給ひて斯うくと申し給へば、これかれ、いとほしがり騒ぎ給ふ。大宮、「事も有り顔に、おふなく子どもひき連れて、何かよからぬ文書をして、かよることもいだし給ふ。そこはとまれ、若き人々の行く末の爲こそあぢきなけれ」と宣ふ。右大將殿聞き給ひて、仲思「さればこそ聞えしか、えまかで給はじと。おほろけに御心軽くおはしますにもあらぬに、いとほしき事かな」と宣ふ。かくて、今日は司召なれば、左右のおとど右大將など、一日定められて、夜召す。東宮は、その夕さり藤壺もろともに上り給ひて、例の如しつらはせておはします。つとめて、司召はててのよしする。いと多く召したり。左衛門督に忠澄の中納言、右近少將には近澄の内藏頭かけて、左衛門尉にあこ君なり給へれど、宮に

(二)宮に

(語釋)  
(一)東宮

(二)「右大殿も」なるべし  
正頼なり

(三)正頼があて宮の迎に  
ゆきし時の事

(四)眞からの懸言でもな  
き故

(五)仲忠が

(八)あて宮が

(九)正頼、仲忠

(考異)  
(六)寄せず寄せて

(七)給へれば給ひつれ  
ば

⑨仲忠、節料の未炭等を  
仲頼の妹に贈る。

はよろこびも申させ給はず。宮の上におはしませば、人々、殿上人などよろこび

て、左大將も参り給へり。うたてある事は宣ひつれど、まめなる御心にしあらね

ば、召して物宣ひなどす。東宮「さいつ頃、いと間近かりしかど、ことごとくなかり

し程にて、ことごとくにさやうなる事あるべきやうにはあべかりしを、今年は不用な

めりな」正頼「大將のこの頃仕うまつるべく侍りつるを、さる事侍りてなむ。年か

へりてぞ仕うまつるべく侍る」とてまかで給ひぬ。藤壺を下へおろし給はで、い

と近く御局し給ひて、兵衛の君、孫王の君、あこきばかりして、また人召し寄せ

ず。東宮「人の用あらば、この人をつかひ給へ」とてすゑ奉り給へれば、御氣色の

いと恐ろしかりつるに怖ぢまどひて、物も聞えでさふらひ給ふ。

畫詞

こよは司召。よろこびの人のいと多かり。殿上にもさふらふ。こよは東

かくて、晦にもなりぬれば、こよかしこに節料いと多く奉る。そが中に種松はお

〔語釋〕

(一) 仲忠

(二) ことと 衍文なるべし

(三) 仲頼の許より來る品と

(五) かしられてし歟

(八) 未詳、誤あらんか

(九) 絹系の粗なるもの

〔考異〕

(四) 書き一ナシ

(六) 二十綱を一はみを

(七) 積みて一くみて

とど、右大將殿の粥うだいしやうざの かつの料れう、すべて調てうじて奉たてまつる。おとどには炭すみ三十荷か、米よね三十石、右大將殿うだいしやうざのには炭すみ十荷か、米よね十石たてまつ奉たてまつれたり。大將、三條殿に米よね一石と、炭すみ二荷か奉たてまつり給たまふ。又同じ數かずに、米よねも炭すみも、御み厩まやの草刈くさかり、馬うま人びとの召よしておほせて、小ちひさき童わらは一人、大おほきなる法師ほうし雜ぜふし仕しもとめさせ給たまひて、一條いちじょう殿どのに、少せう將しやうの妹いもうめにつかはす。

仲忠一日はことごとくおちにと思おもひ給たまひしかど、日の暮くれにしかばなむ。なほ聞きえしやうに、何いづかた方かたにもくむつまじき筋すぢにを。さてこの炭すみは、水尾みづのせに見みくらべ給たまへとてなむ。

と書かきてぢうしつのすくよかなるに包つみて、「山やまより」とて少將せうしやうの手てにいとよく書かき似にせて、近ちかく使つかひ給たまふ上童うへわらはそへて、仲忠ちゆうちゆう、栗くり出いしと處ところにおしへ入れて、歸かへりまうで來きね」とて遣つかはしければ、到いたりて、「水尾みづのせより」とて入いれたれば、見みるに、炭すみ二十すははた籠かごをいと細こまかに積つみて、とのこすを貫つらき立たてて、錢ぜに二十貫くわん一籠ひとこに入いれて、物覆ものおほひして結むすひたり。米よねは、しけいと俵たはらに編あみて、絹きぬ五十疋ひゃくい入いれて三俵たはら、今いま一つには、い

(語釋)  
(二)仲忠をいふ

(五)「倒きてば茶集まりてしなるべし、同邸内の他の妾たちが也

(考異)  
(一)賜へるかな一賜ひつるかな

(三)うまのたとひ一うまたとひ一むさのたとひ

(四)黒かるらむ一黒からむ

みじくうるはしき綿二十屯入れたり。見給ひて、仲頼妹「いと物覺えず、づしやかなる節料も賜へるかな。これを如何にせむ」と宣へば、乳母など、「これもおとどの御徳にてこそあめれ。知らぬ人、御よばひ人ならばこそは、取り入れ給はずもあらめ。はや御返聞え給へ」と言へば、御使を呼び入れて、物食はせ、酒飲ませなどして、大いなる童には白きうちき一つ、小きには單衣一つづつ賜ひて、懐に入れさせて御返し、

仲頼妹 承りぬ。一日は、けに理にも聞えさせずなりにけるかな。山の代と宣はずれば、うまのたとひの侍らむ心地して、いともく嬉しくなむ。さては、これは炭焼をさへせさせ給ひければ、いかに御手黒かるらむとなむ思ひ遣られける。

と聞えつ。取りひろけて、御たち喜ぶ。仲頼妹「あなかまや。かの君の御物と聞きていき集まりてうけび呪ひぞせむ」とて母君の御許、水尾の料など取り置き、宮内

卿きやうの殿どのにも奉たてまつれなどし給たまふ。水尾みづのせには、大將殿たいしやうどの、御文添ふみそへて、子こどもの衣かひなど調てうじて奉たてまつり給たまふ。

〔語釋〕

(一)大將殿の御文みづのせなるべし

(四)大宮

(五)兼雅

(六)食事なども倭陸女の方かたにてのみ食し

〔兼雅、式部卿宮の中君に衣食の料を贈る。〕

〔考異〕

(二)錦にしきにし

(三)錦にしきをしきりに

(七)出し給たまひしし出したまりし

(八)などかかーなどかか

〔畫詞〕

こよは少將いろうじの妹いもうとの御方かた。御ごたち四人、わらは、下仕しもつかへ一人づつ、女房二

人にんばかりあり。君、三十餘よばかりにて、愛敬あいぎやうづき、匂にほひやかなり。前まへにことども置おきて、住すまひよけなり。

かくて種松たねまつは、左大將殿さだまさにも、きぬ綿わたなど大きおほなる櫃ひつにつみて錦にしきなど、世よになき錦にしきを奉たてまつれり。宮みやの御方かたにも、御莊ごさう々々より、節料せつれう多く奉たてまつれり。

おとどなほ北きたの方かたの御許ごきよにのみ夜晝よるひるおはする、物ものなどはたど此處こゝに、あなたには時々晝間ときどひるまなどにまうで給たまふ。北きたの方に、一日いちにち中の君きみの有りしやう語かたり給たまひて、投な

け出いだし給たまひし文見ふみみせ奉たまれば、北きたの方かたいみじく泣なき給たまひて、倭陸女やまとめあはれ、親おやにおくれ奉たまりて、心細こころおほき住居すまうするはいみじきものを。若わかくて親おやにはおくれ奉たまりてけり、

そこには年頃としごろ思おもひ聞きえ給たまふとみえず。けに何心なにこころ地ちし給たまはむ。ななどか、さ哀あはれに親おやの

(語釋)

(二)「さしたりつるにや」なるべし

(四)「炭米を」歟

(五)「誤あらんか

(六)「遣りて」は「やがて」なるべし

(七)「賢殿の魚」なるべし

(考異)

(一)「斯くは」からしくは

(三)「忘れたりつる」忘れたりし

(八)「御文は」は「ナシ

聞えおき給ひけむものを斯くは」おとど、兼雅「いさや、其處を見つて奉りしに、

胸心もつづれて、萬のこと覺えざりしかば、然しさりつるにや。この中納言の言

ひ出でて、斯して、忘れたりつる見苦しき者どもも思ひ出でさするにこそは。如

何に、訪らひにやらむ。食物などこそいとあはれなりしか」など宜ふほどに、「右

大將殿より」とて、この炭きを奉り給へればおとど、兼雅「氣色ある物かな。持て

來」とて御前に召して、あけさせて見給へば、少將の妹の賜へりし、おなじ様な

り。きぬなどはまつべしやと委しく御覽するに、いと美しけなる白きぬどもな

り。北の方、俊隆女「これを遣りて宜ひつる所には物し給へ」と聞え給へば、おとど、

兼雅「よき事なり」とて、車のはづしたる、破れたる下簾などかけて入れさせ給ふ。

納殿、贄殿、魚、鳥、菓物など、よきを擇らせて、炭、油など長櫃に積ませ給ひ

て、御文は、

兼雅「一日は見給へしに目もくれて、物覺えざりしかばなむえ聞えざりしと思せ。

(語釋)

(一)米を穀にかけたるか

(二)拾遺集「夏衣薄きながらぞ酒まらるゝひとへなるしも身に近ければ」

(五)此處語あちんか

④仲忠兼雅と物語。家交換の約束、宮あち祐澄等の略。

(考異)

(三)せられしかどーせられしかば

(四)されどーされども

それも今は、

あまぐもは見ゆとも今は何かせむ見えぬこの世の人はとふとも

さてこのこめは、夏衣(二)にや。「ひとへなるしも」とかいふなれば、今よりだに。

とて奉り給へれば君物(三)どもよりも、一日の文を見てなど思(三)して御返し、

中君一日は、おほえぬ便(四)なりしをなむ、めづらしき心地せられしかど、この世の

外の心(四)になむ。されど、

まつ人は多くの月日見えねどもいづれの暮か雲を見ざらむ

とあり。かの包みし金は、百兩に足らでぞありける。唐人の來たる頃にて、要す

る物せむとしければ、かゝる物どもあれば、ありしやうに入れて持給へり。衣な

ど人々に著せ給ふと聞きて、里に出で居し人々、空言しつゝ出で來たり。物いと

おほく取りひろけて、賑はしければ、ことかたぐの人は、いみじく羨みのよし

る。



〔語釋〕

(一) 仲忠

(二) 仲忠の庇護にて

(三) 近江守は其方の家來なれば彼の家を我が二條院の東なる家と交換する様に言ひつけてくれの意なるべし

(五) 近江守になりたるは過分の出世なり

(七) 「そも」なるべし

(八) 近江が兄を越えて出世しそなり

(九) 誰を妻にして居る

(二〇) 妻ありしかど

〔考異〕

(四) あなれ！あんなれ

(六) ことに御には

かくて、晦つぼみの日、三條殿さんじょうどのに、「大將殿だいしやうどのに聞ゆべき事あり」とありければ、まうで給へ

り。おとど、兼雅かねみや申まうすべき事ありてなむ。此度御勞こたみいたはりにてなりぬる近江守の家な

む、こよに切なる用あるを、其處そこにつかひ給ふ人たまひひとにこそあなれ。用もちぜらるよ二條の

院いんの東ひがしなる、ことに領するにをともものせられよ」大將、仲忠ちゆうちゆういと易やすきことなり。

さらずも、奉り侍りなむ。いとよく叶かなひ侍る人ひとなれば、此度は、右大臣みぎのちじんものしと

思おもしたりつれど、強しひて申まうしなし侍りぬるなり。さても、身みには過すぎ侍りきや。

かの家三條いへさんじょうの院いんのもとなる所ところになむ。ことに狭せまけれど、いとをかしけに造りて侍

る。宮みやあこにと思おもひて侍る妻めかけの料りょうに侍るなるを、宮みやあこはおよすけたる心こころばへな

れば、みも不益ふえきになむ」おとど、兼雅かねみや「さりとも代かはりなくては如何いかに。宮みやあこは、など

かさも得えさせ給たまはずなりぬらむ」大將、仲忠ちゆうちゆう「まづかうぶりをとにや侍らむ」おと

ど、兼雅かねみや「藏人くらうじんの少將せうしやうの、弟あにまさりになり勝まさられぬべかめるかな。たど今いまの上人うへびとは、

これ一人ひとりなめりかし。心こころもよけなり。誰たれをか持もたる」大將、仲忠ちゆうちゆう「侍りしかど、今いま

(人語釋)

(一) 非分の望をもち居る故

(二) 近道がいふ故

(三) 親が

(四) 誤あるべし

(五) 歎かると歎

(六) 「誰をかは」にて誰を思ひ居るかの意なるべし

(七) 照あるべし

(九) 仲澄の例もある事故

(一〇) 女二宮

(一一) 御器盃上しの御家柄で

(考異)

(八) べければ一もかりければ

は侍らて、宮あこと二人、親のもとになむ。少將はあるまじき心ばへなれば、親

など制し給ふなれば、「さて仲忠侍らずや」とものすれば、「それは不意に賜へばこ

そあれ、きむちは、如何なる道、何によりて」となむ、切に責め給ふなれど、思ひ

やまでなむ。心地もしらぬべき者なめりとなむ歎かる」おとど、兼雅「侍従は誰よ

りかは。もし宮か」仲忠「知らず。氣色見給へむとてもものせしかど、異筋こそとな

む。夜晝あそび、物思へりしかば、かく世の短かかるべければにや、とこそ見給へ

りしか」おとど、兼雅「例なる事なれば、けに嘆かれぬべくこそは。何れをかは」大

將、仲忠「二の宮こそは御裳著給ひてこそは。いまだ小さくなむ」おとど、兼雅「御

容貌などはいかど物し給ふらむ」大將、仲忠「かしこきは、われか人かとのみある

は、まさり給へるにこそ」北の方、俊隆女「いでや、宮はいとめでたくおはするもの

を。さるかたち族にて、御子たちにさへおはすれば、色あひ御髮筋などはいか

かは。又然るは見ね。髪のかよりばこそあき給へらずなりにしかば、いかでか參

〔語釋〕

(一) 女一宮

(二) 俊隆女に比すべきものはなし

(三) 女二は

(四) こそ宣ふーこそと宣

(五) 女二宮はあて宮に似

(六) と「衍文なるべし

(八) などとて「なるべし

(九) 「あこは」なるべし

(一〇) 祐澄

(一一) 女二宮を得たき由を公然女御にも仲思にも語る

(一二) 嵯峨院皇女、祐澄の妻

(一四) 誤あるべし

〔考異〕

(七) 大將一ナシ  
(一) 宰相中將一宰相の中將

りて見奉らむ」おとど、兼雅「髪よく容貌よくある人は見しや」仲思「この中に、こ

こにおはする宮と、中の君と、御髪はありがたかりし。こよの御様なるはされど

無し。かやうにもものし給ふ」北の方、俊隆女「あなむくつけや。容貌は年こそ。そが

うちに、梳るものともせで、うち捨てたるに、かれは、女御の夜晝撫でつくるひ

奉り給へば、いといみじや」大將、仲思「御様になむ常に似たりと聞ゆれば、かれ

とはいとよきものを。藤壺のこそ。宣ふこの宮は、かの御様にてをかしけなると

なむ承る」兼雅「年老いぬるばかりの寶は無かりけり。昔なりせば、この人たち

如何に見まほしからましと」大將、仲思「こまがへらせ給へかし」おとど、兼雅「い

まその駒や」などと、「宮のあとには誰をか」大將、仲思「宰相中將の三の宮にと思

ひて侍る女をとなむ。かの君はた、さる御心も無かなれば」おとど、兼雅「それも

用なかなりや」大將、仲思「かの宰相こそ、この宮を、あらはれて、女御にも自ら

にも物せらるなれ」おとど、兼雅「わか君をば如何にせむとにかあらむ。おとどみ

〔語釋〕

(一) 祇澄を誘ふ也  
(二) 又女二をも奪ひ取る  
かも知れぬ  
(三) 「など」とて「なるべし」

(四) 大宮  
(五) 思俊  
(六) 七の君

(七) 懷胎の折に

① 大宮、七の君の夫と申  
違せるを戒む。

(八) 思俊

(九) 思雅

(一〇) 夫と申違ひしたる  
はどういふ譯ぞ

(一一) 夫の許へ歸られよ

(一二) 三つなる女の兒也

(一三) 種松が「なるべし」

(一四) 「はも宮の御方に  
も歎

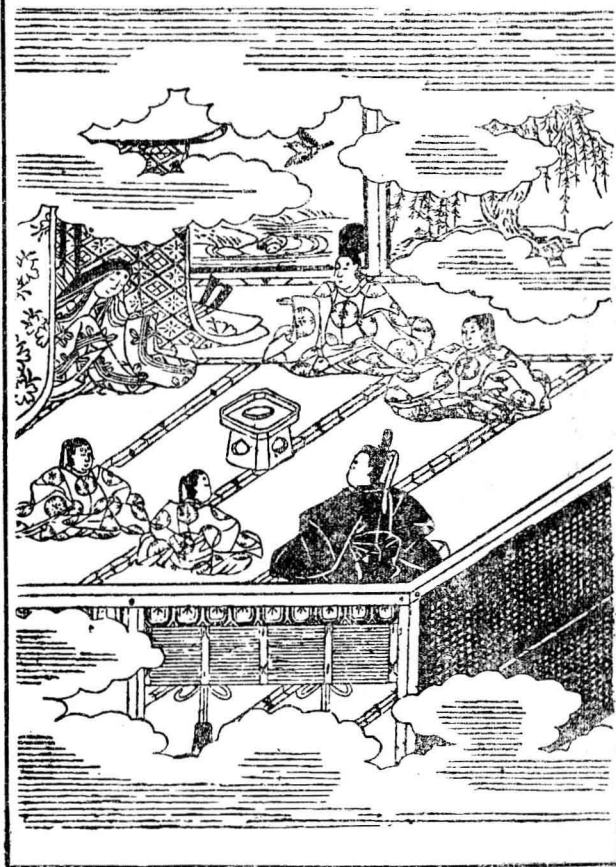
〔考異〕

(一一) をさなき子―をさ  
なご

こふさいなりや。あなかしこ、いとおふけなき人ぞや。わか君をば、わが一條に  
ありし前よりこそ、取りもて來しか。又取らずや」大將、仲忠「さらばかの家のこ  
とは、又宣ひて、申さむに隨ひて」などて歸り給ひぬ。  
(二) (三) (四) (五) (六) (七) (八) (九) (一〇) (一一) (一二) (一三) (一四) (一五)

〔畫詞〕 こととは三條殿。

かくて右大臣殿には、大殿の御方に、大納言殿の北の方わたりておはす。大宮、「か  
かる折にかく離れ居給へれば、かしこは便なくおほすらむ。父おとども怪しから  
ぬ様に聞き給ふらむ。何事によりたる御中ぞ」と宣へば、七君「何にかは。今は人  
と思はであなづれば、見え侍らじとて」大宮、「をさなき子どもあり、又たどに物  
せられざめり。便なきこと。年のはじめに一人はいかでか。今宵はや渡り給ひ  
ね」と聞え給へど、いらへも聞え給はず。御子は五つなる男三つなる女、はらみ  
給へり。女君はいとをかしければ、父君いとかなしうし給ふ。殿には人々の奉り  
たる物いと多かり。種松ぞ奉りたる米五石、炭五荷、女御の君の御かたと宮  
(一) (二) (三) (四) (五) (六) (七) (八) (九) (一〇) (一一) (一二) (一三) (一四) (一五)



①新年の拜賀。仲忠、梨蓋を訪ふ。正頼以下位階升進。

(語釋)

(一) 繁雅

(三) 忠俊

(考異)  
(一) 竝み立ち給ひて一みな立ちて

の御方に奉り給ふ。

かくて年かへりて朔日の日になりて、殿君たちよりはじめて、十所あまり一所、北のおとどの東面に竝み立ち給ひて、宮おとど拜み奉り給ふ。しばしあれば宮たち四所、いと清らに装束き給ひて、女御の御前に参り給ふ。右大將うちつぎて参りて拜み奉り給ふ。宮たち、大將殿も参り給ひぬ。あを色に蘇枋がさね著たるわらはべ、御裾まゐり物まゐりなどす。御酒参らむとする程に、十の宮に御土器もたせ奉りて、書きて出だし給へり。

正頼けふのごと我思ふ人とまとゐしていくよの春を共にまち出むとて大將に奉り給ふ。大將、宮をかき抱きて、土器を見てかく聞ゆ、繁雅まとゐして今日まつことはかはらじを春の來ざらむ年はありともと聞えて、土器度々になりぬ。

かくてみな内裏に参り給ひぬ、何方にもく、上達部参り給はぬなきに、

(三) 藤大納

〔語釋〕

(三)誤あるべし

(四)誤あるべし

(五)「御前に」なるべし

(六)正類

〔考異〕  
(一)五所―四所

(二)こそは―「は」ナシ

言殿は、北の方籠りて御装束えし給はねば、参り給はで、子どもうつくしみて居給へり。かくて上達部は、右近の陣に居きぬ。女御の御腹の御子たち五所。右大將は御前に参り給ふ。例の御局どもの前をわたり給へば、後の宮の人々いふ、「かの仁壽殿の腹の御子たちを見よや。有心にこそあれ。女御子のうち連れたるにこそはあめれ。有所に、などこの名だたる容貌のみこ、大將に氣取られたる」また他人のいふ、「近衛づかさ大將を、上にこそはあめれ」など口々に言ひ騒げど、見ぬやうにてわたらせ給ふ。一宮三品、帥の宮四品、今一所は無品、二所は色ゆるされ給へり。十の御子は未し。や蘇枋がさねの繚のうへのはかま著給へり。宮たちは御所にさふらひ給ふ。

(五)大將は藤壺にまうで給ひて、孫王の君に、「参り來たるよし聞え給へ」と申し給へば、孫王「日頃は上の御局になむ。一夜おとどの物し給へりしに、御氣色いとあしくて、その夜さりて出で給ひて、御局の人も寄せ給はず。さればえ聞えじ」と

(語釋)

(一) 梨壺の居られそうな時分なれば

(二) 東宮

(三) 調ならんか

(四) 女四宮

(六) 御身の懐胎の事を東宮は何と仰せらるる

(考異)

(五) 何とにかーなどか

聞ゆれば、仲思<sup>ちんし</sup>人は無しや」孫王<sup>ひやうま</sup>「たど一二人なむ。兵衛<sup>ひやうゑ</sup>あこぎになむ」大將<sup>たいしやう</sup>、仲思<sup>ちんし</sup>

「よし然らば」とて歸り給ひぬ。わたり給ふとおほえたる程なれば、梨壺<sup>なしつよ</sup>にまうで

給ひて、對面<sup>たいめん</sup>し給へり。君<sup>きみ</sup>、梨壺<sup>なしつよ</sup>一日、人の宮<sup>みや</sup>は殿<sup>どの</sup>になど言ひしは如何なる事ぞ。

宮<sup>みや</sup>は聞召<sup>きこしめ</sup>して、「上の、己<sup>おのれの</sup>を宣ひしに驚きてこそ、よきやうにそこに給へるならむ」  
(三)

となむ」大將<sup>たいしやう</sup>、仲思<sup>ちんし</sup>「内裏<sup>うち</sup>にも然ぞ宣ふなるや。内裏<sup>うち</sup>にも、とまれ然ておはずか」  
(三)

らへ、梨壺<sup>なしつよ</sup>「いとみさをなりや。内々<sup>うちうち</sup>のこと知らねども」大將<sup>たいしやう</sup>、仲思<sup>ちんし</sup>「さも聞えねど、

さてのみはいかでかはとて、えこそ」君<sup>きみ</sup>、梨壺<sup>なしつよ</sup>「一夜召したり。まう上りたりしに、  
(四)

院<sup>いん</sup>の御方<sup>かた</sup>をぞ、いかでかはと思ひきこゆれど、恐ろしく宣ひしのみ覺えて、えこそ

聞えね」など宣ひし」仲思<sup>ちんし</sup>「藤壺<sup>ふでつば</sup>は何とにかあらむ」梨壺<sup>なしつよ</sup>「たど御簾<sup>す</sup>の前に局して苦

しけにてぞ。乳母<sup>めのど</sup>たちなどは、「如何なるにかあらむ。こととあからめをこそし給

はね。如何なるべき御中<sup>なか</sup>にかあらむ」とぞ嘆くなりし」大將<sup>たいしやう</sup>、仲思<sup>ちんし</sup>「あぢきななの嘆

や。時めく人は然こそは。たどの人も、思ふ時には、片時外<sup>かたときほか</sup>にとやは覺ゆる。御  
(六)



〔註釋〕  
(一)東宮が御寵愛なき事  
はあちじ

(二)同じく懐胎せり

(三)はやうと歎

●犬宮の百箇日の産養、  
仲忠、東宮の世子たちに  
玩物を奉る。

上をばいかど宣ふ。おとどに申しよかば、「宮は然など宣はすらむや。如何なることぞ」などなむいぶかしがり聞え給ふなりかし。君をとまかくも、いかど思召さぬ事は「梨壺」一日も「藤壺」もかやうにぞあめる。年頃さもあらざりしことを「などぞ宣ひし」など宣ひてまかで給ひぬ。

畫詞

こよは梨壺。

かくて七日になりて、人々加階し給ふ。右おとど正二位、左大將殿從二位、左衛門佐四位、宮あこかうぶり得給ふ。女叙位一階こえて内侍のかみ三位の加階し給ふ。かくて賭弓に、左大將参り給はず。右負け給ひぬ。内宴はきこしめさず。

二十五日に出で来る乙子は、犬宮の御百日にあたりけり。此度は内侍のかんの殿し給ふ。やがて子日がてら参り給ふ。やうは右大將は、東宮の若宮に、をかしき弄び物、まゐり物調せさせ給ひ、雛の絲毛、黄金造の車、いろくに調じて人乗せ、黄金の黄牛かけて、割籠ども、銀、黄金てうじて、入れ物いとをかしくて、

駒こまに人乗ひとのりせなどしてまうけ給たまへり。

斯かくてその日ひになりて、内侍ないしのかんの殿どの、車くるま六つして参まゐり給たまへり。御前まへの物ものど

も、犬宮いぬみやの御前まへには、沈げんの折せ敷しき十二、かねの坏つぎども。御前まへどもに様々さまざまにしたり。

檜割ひわりご籠ご百。かくて右大臣みぎおとぎは、昨夜よべつかさめしの夜よなれば、左大臣ひだりのおとぎも参まゐり給たまひぬ。

宮みやの女御にむいの御前まへの物ものども参まゐり。男宮おとこみやたちの御前まへにも、例れいの御衝重ついがきね、割わりご籠ご、大宮おほみや

にも御前まへの物ものして参まゐり。檜割ひわりご籠ごにすゑて奉たてまつり給たまへり。女御にむいの君きみの御方かたの人々ひと々

おなじかず、東宮とうぐうの若宮わかみやたちの人々ひと々のも、檜割ひわりご籠ご五つに、さての御方々かた々にもみな

奉たてまつり給たまふ。藤壺ふぢつばに檜割ひわりご籠ご十たどの十奉さそだてまつり給たまふとて、女御にむいの君きみの御文ふみ、

仁壽にじゆあたらしき年としは、すなはちと思おもう給たまへしを、怪あやしく、このわたりの御文ふみは見

給たまはぬやうに承うけたまはりしかばつよましかりつるほどに、犬いぬのかよるわざする

程ほどになりなりにけるを、斯かくなむとも聞きえてやはとてなむ。

(三) 犬いぬのかよるわざする

(語釋)  
(一) 正頼邸

(二) うちの女御にむいの御ご

(考異)  
(三) 犬いぬの—犬いぬこそ—犬いぬ宮みやの

萬世のゆくへも知らで思ひいづる小松にけふぞ子日しらする

と青き色紙にかきて、小松につけて奉り給ふ。藤壺は、踏歌の夜よりは下におは  
しませば、御消息も聞え、君だちも参り給ふ。檜割籠どもは殿上に出だし給ひて、  
御返、

あて宮げに覺束なきまで、日頃は御里の御文も見給へざりきや。對面にそ聞えさ  
すべき。この頃はいかでかと思ひ給へつるになむ。さてこれは、

萬世の子日しるらむ姫松につくべきことの 我もあるかな

まかで侍らむと思ひ給ふれど、心にもあらずのみなむ。

と聞え給へり。

かくて犬宮に、餅まるり給ふとて、女御の君、折敷の洲濱を見給へば、例の鶴二  
羽、しかよろひて有り。松生ひたり。左大將殿の御手にてかき給へり、  
兼雅百日がは今日としらせつ乙子をぞかぞへて千代となせよ姫松

とあり。女御、「いとよき物の師にこそは」とて、

仁壽生ひてさは百日がはにや(二)なり(一)にける子日を千代とかぞふべき松

内侍のかみ、

俊隆女かぞへつる今日をけふ知る姫松は千世てふことは習はざらめや

一の宮、

女二姫松はねのびを多くかぞへつとあまたの世をも過すべきかな

とてうへのおとど、折敷ながら、外にさし出だし給へれば右大將、

仲思姫松は おとねのかぎり 數へつと 千年の春は みつと 知らなむ

とてさし入るれば、他人は見給はず。おとど宮たち、宰相の中將、良中將、藏人

の少將、宮あこの太夫、みな讀み給へれど書かず。

右大將は、東のおとどの南の方にまゐり給ひて、宮たちの御前に沈の折敷、瑠璃

の御坏の小さして、物まゐり給ふを、車二つづつ、銀、黄金の馬、さまぐいろ

(評釋)

(一)此の歌が丁度よき手本なり

(二)「うへのは」「かんの」なるべし

(四)仲思

(考異)  
(三)もとトローナレ

〔語釋〕  
〔一〕東宮第一の皇子あて宮服

〔三〕お餘りを大宮に食せしめんとして

〔考異〕  
〔二〕程—ナシ

〔四〕わざを—わざをも—わざも

いろ取りたてて、仲思「宮たち出でさせ給へ」と聞え給ふ。はじめの宮は若宮と聞ゆ。御年五つ。程大きに、御色あひ、御髪の筋、母君に似給へれど、これは宮の御様にて、氣高くおはす。御髪背中ばかりなど、海松をつくりつけたる様なり。綾かいねり一かさね、あはせのはかま、織物の直衣著給へり。弟の宮は四つ。御髪肩わたりにて、兄宮のやうなり。それも同じごと装束き給へり。大將、二所ながら御膝にする奉り給ひて聞え給ふ。仲思「彼處に侍りつる子に餅くはせ侍るを、まづ聞食させて、おろしをとてなむ。若宮、「わが見に出でたりしかば、宮のかくして見せ給はざりし」二の宮、「見せ給はざりしかば、いみじう泣きしかばこそ見せ給ひしか。抱きしかば、うち落して騒がれき」大將、仲思「さて如何御覽せし。憎けにや侍りし」宮、「いな、いと美しかりき。こなたに率て來などせさせしかば、のしりて留めき。たゞ今抱きておはせよ」と宣へば、仲思「たゞ今は、穢けにむづかしう、なめけなるわざをし侍れば、今大きになりなむ時に、召してらうたうし

(語釋)

(二)「かんの」なるべし

(三)「かんの」なるべし

(四)「うちの女御の君」歟

(五)「かんの」なるべし

(考異)  
(一)「ちとちとく」

て使はせ給へ」宮、「いと嬉しかりなむ。あそぶ人無くていとあし」と宣ふ。大將  
手づから賄して、宮たちに物くよめつゝ参り給ひて、車どもを、仲忠「雖に子日せ  
させ給へとて率て参りつる」とて奉り給へば、宮たちも喜びてもてあそび給ふ。  
かくて常にをかしき弄び物は奉り給ひけり。

畫詞

こよは東の大殿。

かくて大將は中の大殿にわたり給ひぬ。うへのおとどは、賭弓の料にまうけられ  
たりしかづけ物ども、取りに遣はして、宮たち三所にはうちき、はかま添へたる  
女のおよそひ、宰相の中將、良中將には、例の装束、藏人の少將、太夫の君には緞  
物のほそなが、あはせのはかまなどかづけ給ふ。かくてみなかへり給ひぬ。

畫詞

(三)

うへのおとど南面に御座よそひて、御供の人々など其處にさふらふ。

畫詞

(四)

御みづからは、宮の女御の君に御物語きこえ給ふ。こよは百日の所、うへのお

とど、

曉にわたり給ひぬ。犬宮は願いとよく居て、おきかへりなどし給ふ。人

(語釋)

(一)兼澄

(二)この任命はむづかしかりしを

(三)道具類

●仲忠約束の家を兼雅に引渡す。

(考異)

(四)家ゆへぬしばかり所のかき―家ゆえぬしばかりの所のかき―家の邊のしばかり所のかき

(五)入る―入らる

歳

開(下)

見ては、たゞ笑ひに笑ひ、うつくし。大將内裏に参り給ふ。

司召には、宮あこ侍従に、兵部の大輔は左衛門佐になり給ひぬ。さては人々、わ

たくしの御勞あり。右大將は、昔山よりおり給ひし馬添、一人は伊豫介、いと

難かりけるを、勞りなし給ふ。その時は、大學の允、所の衆にて有りし。

かゝる程に、月たちて、二月になりぬ。右大將、三條殿にかの宣ひし家の券奉

り給へり。おとどに申し給ふ、仲忠仰せられし家奉り侍る。仰せ賜はりなば、

かくばかりの家は造り侍りぬべし。これは、かく小くくち惜しき所なれど、これ

をと仰せらるればなむ。やがて内の具ぐして奉り侍るめり。目錄」とてその文

奉り給ふ。見給へば扇子、辛櫃、几帳、屏風よりはじめて、人の家の具あり。藏

に物おきたり。この家ゆへぬしばかり所のかき、いと全くあたらしく造りて、檜

皮の大殿、いとをかしげに造りて、たゞ這ひ入るばかりにしつらひたり。おとど、

兼雅「この代の家は如何ものする。然るべくば春ものせむ」大將、仲忠「更に賜はら

(語釋)  
 (一)「ばかり」衍文なるべし

兼雅、中君を三條の東の家に迎ふ。中君を俊隆女に托す。

(二)兼雅が

(五)「物し給ふをもえ尋ねきこえざりつる歎

(七)「身は」は「こゝろは」の誤なるべし

(考異)

(三)「這入りまゐり

(四)「來たりしかども聞えず」來たりしかども聞えず「來たりしかども聞えず」

(六)「かの三條の」かの件  
 の三條の

じと申し侍り。「いかばかりの拙きものと御覽ぜられたれば、斯う仰せらるらむ」となむばかり畏まり侍る」と申し給ひてかへり給ひぬ。

二月五日ばかりに、中の君の御許に、車三つばかり、著給ふべき御衣、御衣箱に入れて、御車に入れて、むつまじき人五六人ばかりして、忍びて一條殿に、夜更

けておはして、中の君の御方に這ひ入り給へば、人々装束して、御たち四人、わらは、下位など二人、君も白き衣などあまた著給ひて、御殿油などもしたり。

おとどきこえ給ふ、兼雅「さきに來たりしかど、えも聞えずなりにき。志はさら  
 に怠らねど、あやしく、童なりし時哀なりし人の、己だに知らで隠れにしを見つ

けて、それを哀と見つゝ年頃侍りつる程に、かくて物宣ふをもえ聞えざりつる。よし、それはしめやかに聞えむ。かの三條の東の外に向ひたる家小きあり。そこに

わたり給ひて、いと心易くてものし給へ。身は、かくおほぞうなる所の、心を心にまかせ給はぬなれば、御迎にとてなむ」と宣へば、中君「俄にてはいかど」と宣



(語釋)  
(一)「しるうて」歟

へばおとど、兼「」なでふ物あらばこそあらめ。いさよかならむ調度などは、こよに乳母をとどめ給ひて。今日よき日なり」と宣へば、中君「さらば」とて御車寄せさせ給ひて、載せ奉り給ひて、人給には、ある御たちなど載せたまひて、御包など入れて、いと忍びて、西の御門より出でて、かの殿に入りて見給へば、御座所あたらしく、清けなる屏風、几帳など立てたり。取りつかひ給ふべき調度、なき無し。おとど、さてその夜は、其處にとどまり給ひて、御まうけいと清らにしたり。おとど、つとめて、殿のうちを見給へば、しらたて被したる辛櫃二よろひ、錠さして、鍵結ひつかけたり。さしあけ見給へば、かうの辛櫃どもなり。あるには、御衣ども様々にし入れ、あるにはよき衣、綿、おの／＼かみなどあり。御衣掛に被して、御衾など懸けたり。さらぬ物ども、つき、辛櫃など多かり。外には四尺の御厨子三よろひ、三尺の一よろひ、被したり。それにも錠鍵あり。あけて見給へば、男女の御調度二よろひ、被して、硯の具などあり。大いなる厨子、二よ

〔語釋〕

(一)「はづしてあり」歟

(二)「はづしてあり」歟

(三)「おももの具」なるべし

(四)中君

(五)「織物のほそなが」歟

(六)誤あるべし

(七)中君に

〔考異〕

(一)一つには燈臺一つには調度燈臺

ろひ、一つにはから物、いとようし置きたり。一つには燈臺の具などあり。聖代(一)は白くてあたらし。寢殿(二)の北に、あたらしき長屋あり。隔(三)ことのうちあまたして、贄殿(四)、酢、酒つくり、漬物、炭、木、油などおきたり。藏一つ、それには、錢、米、よからぬ衣(五)どもなどおきて、錠(六)さして、鍵(七)はづしにあり御厨子所、おほともの具いとよくしおきてたり。

おとど見廻りておはし給へれば、君、昨夜おとどの包(八)ませておはしたる綾、かいねり、織物、ほそながなど著給ひて、年四十(九)に一つ二つ足らぬほどなれど、いとあてはかに兒めきて、らうたけなる顔して、髪長に二尺ばかり餘り給へり。いとわか見え給ふ。おとど、兼雅、留(一〇)まりにし人のもとに、「其處なるむづかしき物どもは、乳母のやどりに残さず取らせて、そこへをよく掃き清めて、夜さりわたりね」と言ひ遣はせよ」と宣ふ。昨夜より三日の家あるじの近江守、今日は御臺かねの御つきして、おとど、家の券奉りたる目錄そへて奉り給ふ。兼雅「これは(一一)

(語釋)  
(一)「我は「わかき」の誤歟

(二)「北の方の御かたち容體をるべし、一本「北のかたちきやうだい」北の方に御方のちやうだい

確ならむ物に入れておき給へ。これをさへはかなくしなし給ふな。こよには常にも得まうで來じ。近ければ、時々あからさまにこそまうで來む。今は我人にもおはせず、親もものし給はず、有りつる様にてあらむとな思ほしそ。彼處にある子の母、いと心よく有りがたき人なり。それは思ほし疎まず、語らひて物し給へ」とてわたり給ひぬ。

畫詞 こよは中の君の御殿。

かくて北の方の御許におはして見給へば、装束清らにして、頭梳りて居給へれば、たゞ今掣取もしつべき女のやうにて、いとめでたし。住居、しつらひいふ方なく、くらき所にも北の方御かたちやうだい、照りかどやきて見ゆ。香のかうばしき事は更にも言はず。御たちもかく容貌あるは三十人ばかり出で入りすれど、なほ二十人ばかり絶えずあり。童、しもづかへも數多あり。この殿は一町なれど、年頃かい廣けつよ、心に入れておほくの大殿造り重ねたり。北の方におとどの聞え給

(一) 兩釋)

(一) 中の君

(二) 「め」 斬文なるべし

(四) 中君をわがものと思ひて

(五) これより自分の過去の事をいふ也

(六) 父母が

(考異)

(三) 有りし物ともなく一ありしものともなくとく一なりしものともなくと

ふ、兼雄「年頃いとほしと思ひつる人々すませて侍るなり。取りすゑたるこの人いとはかなき人なり。父宮の、多くの財、よき莊どもなど持給へめりしかど、年頃口入れざりしほどに、有りし物ともなく、みな失なひてけり。有りし人もたつきなくなりければ、皆出でて去にけり。斯う哀なる人になむ。其處にも、ことに思す人もなかめるを、私の人にしても、見え聞えずとも、思しやりて心しらひ給へ」北の方、俊蔭女若き人の、親物し給はず、御口入るゝ人もなくては、いかでかは。さてもよくこそ。さしもあらで有りぬべかりける人も、世を過ぐらむやうも知らで、親とてありし人も、呪ふ様に、「悪しかるべくば、よかれと思ふとも惑ひなむ。よかるべくば、恐ろしき物の中に棄てたりともあへなむ。たゞ神佛にまかせ奉る」とゆよしく言はれて有りし程に、うち續きて亡くなりしかばこそ、あさましかりしか。まして、御子たちの御子と言はむ人は何事をかは」と聞え給へば、兼雄「けに然ぞあらむ。女子を數多持たらぬこそ安けれ」など宣ひて、兼雄「今日はかよる日

(語釋)

(一) 嵯峨院の女三宮

(二) 女一宮

(兼雅) 女三宮を訪ふ

(三) 女三宮

(四) 俊隆女

(六) 俊隆女の方に

(考異)

(五) 見出でて見つけて

になしてむ。宮とぶらひ奉りてまうで來なむ」とて宮の御方に參り給ふ。

**詠詞**

こよは左大將殿。御方に一の宮通はし奉らむとおほして、寢殿の南

遠く離りて、池山近き所、月見給ふべくとて、高くいかめしき家造られたり。

西の對、廊あり。御たち十人ばかり。童べなどあり。

宮は、いとらうくじう、氣高く、ものくしき顔して居給へり。おとど宮に、

兼雅「年頃おほつかなくて侍りつるを、近くておはしませする時だに、しばく參

り來まほしけれど、この侍る人は、彼もまだ小く、己もまだ世の中も知らざりし

時より侍りて有りし程に、子なむ有りけるを知らせて、いさよかなる事に倦じて

隠れにしを、年頃はえ求めいでざりしに、辛うじて有りがたく見出でて侍りしかば

なむ、あからさまにとてまうでにしまよに、やがてまかり留りにしかば、如何に

怪しく思されけむ。さて、この年頃まかり避る所もなく、宮仕も有りしやうにも

仕うまつらで、籠り侍るにならひたるに、例ならずならはぬ様に思はれ侍れば、又

(語釋)

(一) 仲忠は私の子ども  
しからぬ男なれば

(三) 女一宮一人を守り居  
るのも

(四) 親たる私が年がひも  
なく

(五) 兼雅は俊隆女が有名  
なる美人故一人を守る事  
になりしならん

(号異)

(二) 侍れど一侍るなれど

如何なる隠れなどかせむとて、いと心深く、有りがたき心ゆるひも侍らず。息子の仲忠の朝臣此處に侍れば、親になむし給ふ。それが見思はむ事もつよましく。おのづから御覽すらむ、あやしく兼雅が子にはあらぬものなれば、わかく侍れど、いとまめに、一所につき奉りて侍るめるも、をさなく此處彼處にまかりありかむを見むが恥かしさになむ。今も昔のやうに侍りぬべけれど、え」など聞え給へば宮、女三「何か、中納言も、昔は其處の御有様にもおとらず聞えしかど、この宮の名だたり給へる人なれば、いとまめになられたるにこそ。こよにこの内侍ののみ、世の中にまぎれなきものし給ふなれば、一人になりたるにこそ。他人のえしづめざりしぞや」など御物語おほくして歸り給ひぬ。

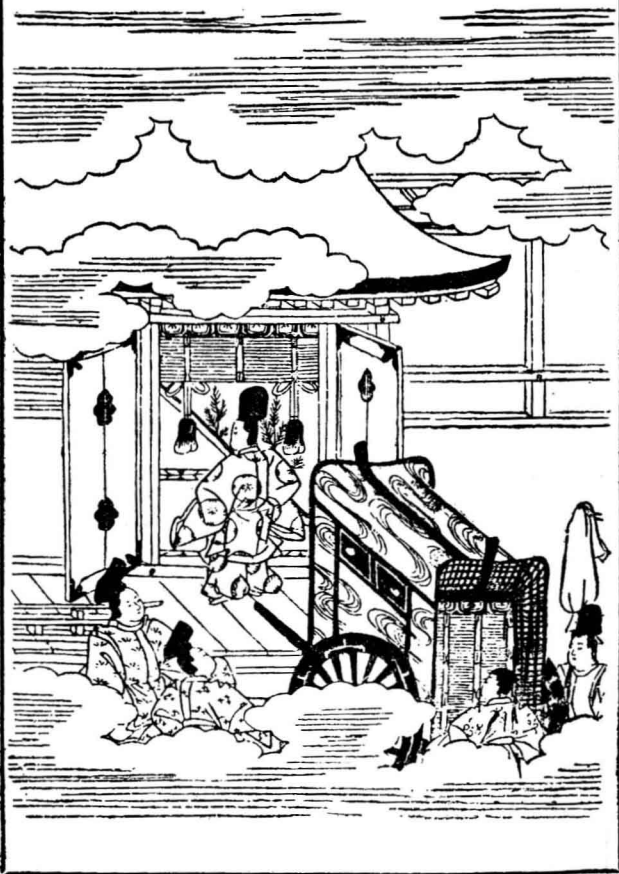
畫詞

こよは三條殿、宮の御方。

かくて一條殿には、夜更けて、おとどは車ながらさし寄せて、下り給ひしかば、かたぐいの人えしり給はざりしを斯く物はこび、家清めなどするにおどろきて、

藏

開(下)



二三九

留一條に隠れる幾雅の妾たちそれ、分散す。

(語釋)

- (一)同居の女たち
- (二)以下女たちの心
- (三)女三言と同居して居てさへ
- (四)誤あるべし
- (五)え、衍文なるべし
- (七)兼雅の仕方を見ん
- (八)思こそが
- (九)誤あるべし、「右のおとと」の御おととと「歎」とと
- (二〇)此妹を別屋に引取りたり
- (二一)梅壺
- (二二)わが生みたる嵯峨院の皇女
- (考異)
- (六)もとどに—もとどを

方々(一)の思(二)はしける、かくて集まりて有りつる方に、宮にもかくてこそはと思ひつればこそ、さてだに漫(三)なりつる住居を、宮をば家にむかへ奉らむと思ひしを、はじめの家に迎へつるは、我等をばえうち棄ておきて、斯くてな在りそとにこそ、と思ひて嘆くほどに、眞言院の律師は、家など買ひて、「わたり給ひね」と伯母おとどに聞え給ひしかど、し出でむ様を見むとて、しばし物し給へるに、かく聞きて、御車して、夜自らいまして、自ら迎へて、率てわたり給ひぬ。北の對におはするは、妹なり。

右おとど大殿のあなたの一ツ御腹の妹、はらからなれど、異腹にて疎かりる

けを、妹むつびして、忍びて迎へとりて通ひ給ひしなり。後の宮の御匣殿、異御腹の妹なれど、いとらうたくしてかへりみ給ふを、かく聞召して、御匣殿「さればこそ、窃にわたり給ひねとはものせしか」とて別納にわたし奉りつ。更衣は、宰相の中將のわたくしの殿に御女むかへ奉り給ひて、西の一の對におはするは、

相の中將のわたくしの殿に御女むかへ奉り給ひて、西の一の對におはするは、

西の一の對におはするは、

西の一の對におはするは、

西の一の對におはするは、

西の一の對におはするは、

西の一の對におはするは、

西の一の對におはするは、

西の一の對におはするは、

西の一の對におはするは、



〔語釋〕  
〔二〕兼雅の心

兼雅仲忠、一條の空屋  
敷を訪ふ。

〔考異〕  
〔一〕まづ北の—中の

宰相ばかりの人の女、わかくて奉りたるなりけり。それは兄などのありければ、迎へつ。少將の妹は、大將殿二條の院のかごやかなる家に、しばしとてする給へれば、人もなし。たゞ宮の家司どもあつまりて、妻子ひき率て、或は下屋に、曹司しつゝあり。

かゝる程に花盛興あるに、おとど、大將に、兼雅「一條の人氣も無かなるを、如何住みなしたると行きて見む。いざ給へ」とてもろ共におはして、まづ北のおとどに入りて見給へば、居給ひし所にかの君の御手にて、

中君いもせ川すますなりぬる宿ゆるゑに涙をもなほ流しつるかな

とあるを哀と見給ひて、西の對の更衣の御方を見給へば、居給ひし所の柱に、

梅齋近かりし雲のおりて見るべきに風ふく塵とまどふ身はなぞ

とあり。けに院にさふらひしを率てまかでにしぞかし、あないとほし、と見給ひて、同じ一の對を見給へば、

(語釋)

(一)誤あるべし

宰相上故郷におほくの年を待ちわびてわたり川にもとはじとやする  
とあればまして、哀何方へならむ、いかでこれが返事せむ、と思す。東の二の對  
に入りて見給へば、その對の前に、さまぐの對にあたる柱に、

來ぬ人を待ちわたりつる我なくてまがきの竹よ誰をはらはむ

と有るをいとあはれと見給ふ。ふるものと言ひし所とおほして、一の對に入りて  
見給へば、居給ひし柱よせに、

來つゝ見しやどにぞ影もたのまれし我だに知らぬ方へのゆくかな

とざればみ書きたり。おとど、兼雅「この人何方ならむ。母宮の御許にはたあらざ

(考異)

(二)ざればみ草に

めり」と宣へば、大將、仲忠、仲忠なむ二條の院にわたし奉りて侍り。いま、彼處

(三)人とて一人

廣うなりぬべかなれば、そこにかの物したまふが、遊する人なくて、さうぐしく  
し給へば、迎へ侍り」と申し給ふ。おとど、兼雅「恥かしく若くよかりし人とて、よ

からぬこともあらむものを」大將、仲忠「いと目やすくて、らうある人にこそ物し

(語釋)  
(一)「見給ふに」歟

給ひけれ。とかくあるべき事は、皆物して侍り」おとど、兼雅「あないとほしや」と宣ふ。

かくておとど、廻りて見給ひて、昔はかたぐに、我もくと清らをつくして住みしものを、今日はい掃ひて人もなし、花は色々に咲き亂れたり、さすがに見給ふに哀に思さるれば、うち泣きて、

兼雅「花だにもむかしの色はかはらぬをまつときよにし人ぞ散りぬると宣へば大將、仲思「これにも」とて、

仲思「年を経てまつをもちらす宿なれば春なる梅の嘆かるよかな」と申し給へば、兼雅「あな思ひぐまなや」と宣ひて、御修理すべきことなど宣ひて、かへり給ひぬ。

畫詞 ことは一條殿。

かくて北の方に、おとど、兼雅「年頃一條のいぶかしかりしかど人々の苦しげにて

(語釋)

(一)俊隆女の方比のみ

(二)女三宮へ兼雅が奉らぬ意と見えたり、此處脱文あるべし

(三)大官など

(四)兼雅が

あらむと、いとほしかりつれば物せざりし。人も無しと聞きてまかりたりければ、いとこそ哀なりつれ。廣き家に、屋どもおほかるに、人はみな住みあまりてこそ侍りしか、人音もせず、おろし籠めて、草木ばかりぞ有りつる。方々に書きつけたること」など聞え給へば、北の方、昔の京極を思して、かく書きつけて見せ奉り給ふ、

俊隆女待つとは尾上の瀬ぞながれにし君すみよしにかどありけむ

とて見せ奉り給へば、兼雅身をつみてのみはたと宣ふ。おとどは、たどことよ

にのみ物し給ふ。物などは奉れ給はねど、かくておはしませば、わが御方のもの

の、御莊々々より持てつみて奉り、御はらからの宮たちよりも、かく旅におは

するなりとて、とぶらひ聞え給へば、これもその御徳にぞあるべき。中の君は、

贈物何もく、少しづつ物わけ奉り給ふ。夜はおはすべくもあらず。時々宵の

間などになむ。

●梨壺 湯出、兼雅 仲忠 迎に参る

(附録)

(一) 壺 匣 枕 居に侍するをいふ歟

(二) 東宮

(三) 其方も行くに及ばず

かよる程に、梨壺まで給ひなむと聞え給へり。右大將ものし給へるにおとど、兼雅「宮のまかでむとあめるは。如何なるべきことにか。かよる人は帳臺の宿直などしてこそは。許されむとすらむやは」大將、仲忠「いかど然侍らむ。先つ頃たびたびまうのほり給ひけるものを。宮、「藤壺もかやうにてぞ」などこそ宜ひけれ」おとど、兼雅「いさや、うたて聞ゆる世なれば、人もやうたて言ひなさむとてぞや、車どもなどして迎に遣らむかし」とて御車とよのへさせ給ふ。兼雅「一條はたと今恐ろしけなめり。此處にてこそは、ともかくも」とて、宮の御方の西おもて、西の對かけて、一條殿の御調度ども運はせ給ひしつらはせ給ひて、御車十二、御前こよかしこ取り合せて、數知らず多くて、御迎に宮の御方の御たち二十人ばかり参る。右大將、仲忠「かの御迎に参り侍る。おはしまさむとする」と聞え給へば、おとど、兼雅「何しにかは、そこにも。内裏の聞召すにもことなる様にもこそ」大將、仲忠「いかど参らざらむ。女は、さるべき人の追従するにつけてこそ、やんご

(語釋)

(二)めほくあれは「めいほくあり」なるべし

(三)東宮

(四)「つれば」なるべし

(六)梨壺は

(考異)

(一)ちとヤーナレ

(五)こそは「は」ナシ

となくも。なほおはしませ。人の見る所も、宮のきこしめす所も侍り」と聞え給へば、おとど、兼雅「右のおとどの引き連れて参り給ひて、騒がれ給ふこそ」大將、仲忠「惜まれ給へばめほくあれ。まかですとて無期の勘事にもあづがれ、それによりて親兄弟の勘ぜられむこそいとやさしかるべけれ」と、澁り給ふを強ひてそのかし立て給ひて参り給ひて、御局におはすと聞召して、宮、「まかでぬべかなり」とてわたり給へり。二大將物し給へば宮は、東宮「こよにぞまかでらるべかりけれ。かの左大將、いと珍らしうこそ。今年對面せざりつるかな」おとど、兼雅「甚だかしこきことに侍り。今は身を捨ててこもり侍りつれ、久しう内裏にも参らず侍るを、今宵、この女の童、まかでむと申して侍りつれば、かく無徳に侍れば、従ふ下人も侍らねば、車につきてまかでさせむとて」宮、うち笑はせ給ひて、東宮「いとありがたき車添つかふべき人にこそは。無徳なるにはあらで、有り難きにこそ。さても斯く疎からぬ近き衛は、昔も今もえあらじを。いと有り難きことなりや。」

(六)

(語釋)

(一)あて宮

(二)腰胎の事

(三)東宮が我子と認めて下さりさへすれば

(考異)

(四)然とだにしるとだに

(五)御物―御湯

こには、この頃ならずともまかでられなむ。又此處にもものする人も、暇乞ふをと思へど、この頃は神事のころなれば、けにいかでかはとてなむ」など宜ふほどに、夜更けぬとて急ぎてまかで給ひぬ。

かくて南の大殿にまかで給ひぬ。御まうけ、殿の政所より、いと清らにて参れり。おとど梨壺と物語きこえ給ふ。兼雅「この夢のやうなることは、宮はまめやかに思したりや。前々も、世人もよからぬ事言はるれば、これをなむ、夜晝思とするを、今宵ほのめかし給へるは、如何に思したるぞ」きみ、梨壺「知ろしめしよは如何は。とかく思ほすらむことは知らず。まかでむと申させたりしかば、まうのほりて侍りし」おとど、兼雅「世の人のすることを如何は」君、梨壺「さやうになむ」おとど、兼雅「さらばいと嬉しかなり。後はとまれかくまれ、然とだに宜はど、恥かくれぬべし」など御物話し給ひて、やがて其處にとまり給ひぬ。

(五)

つとめて、御物まるとしておはする程に、宮より御文あり、

(語釋)  
(一)早く安産せよ

(考異)  
(二)心―心地

(三)給ひて―給ひ

(四)来しかを―てしかを

東宮昨夜は、怪しく急がれしかば、ことごとくものせずなどなむ。さりぬべき昔も有りしを、人々に恨みらると、今しも哀にて、まかでられにしをなむ。今宵は、

近くても見ぬ間もおほくありしかどなど春の夜をあかしかねつる  
空言人になりぬべしや。さらば、思ふやうに平かにてを早う。

とて、うすき紫の色紙にかきて、梅の花につけて奉れ給へるを、おとど取りて見給ひて、（二）兼雅「今ぞ心落ち居ぬる。この御文は、櫛の箱の底によくをさめおき給へれ」とて御使に酒賜びて、物かづけ給ひて、いみじくいたはらせ給ひて、御返、（三）梨壺昨夜は、夜更けぬと人々いそがれしかば、心あわたどしくてなむ。空言人とか、こればかりなむ。まことに、

出で入ると餘所には見つと雲居にておほくの日をも過し来しかな  
何か、さふらひ侍りても。（四）



(考異)  
(二) 寢殿に―寢殿へ

ときこえ給ふ。左大將、檜割籠など調じて奉れ給へり。おとどは寢殿にわたり給ひぬ。

畫詞

此處は梨壺まかで給ふ。こよは梨壺、おとども御物語し給ふ。大將殿の奉り給へる檜割籠、御前にあり。御たち、取りわたし食ふ。檜皮の屋ども多かり。



國讓(上)

梗

概

① 正頼の家に同居せし人々の別居。太政大臣季明病篤し。正頼と實忠とを招く。遺言。薨去。② あて宮退出。涼の接待。③ 仲忠の訪問。彈正宮の訪問。大宮近澄の身上を仁壽殿女御に唄く。④ 及び殿内を見る。涼堀川の邸に移る。⑤ 季明の葬送。⑥ あて宮文を實忠に贈る。實忠の返事。⑦ 實正兄に昔あて宮を見し時の事を語る。東宮より昭陽殿へ御文。昭陽殿の狂喜。⑧ あて宮の使復命。東宮よりあて宮へ御文。御返事。⑨ あて宮わが寮殿に歸らんとす。實忠の噂。仲忠の噂。忠澄等兄弟交代にあて宮の爲に宿直せんとす。あて宮歸る。⑩ あて宮の假御殿の有様。仲忠約束の手本をあて宮に奉る。あて宮東宮と文贈答。あて宮の髪を結ぶ前にて侍女たち實忠の噂をす。孫王の君兵衛木工等の容貌性質。⑪ 女一宮、女二宮、女三宮を伴ひてあて宮を訪ふ。仲忠母子の琴の噂。髪の長さを較ぶ。孫王の君姉妹、上野宮の噂をす。⑫ あて宮女一宮等奏樂。仲忠、女一宮の迎に來りて立聽く。女一宮歸らず。仲忠再び迎に來る。なほ歸らず。仲忠あて宮の方に宿す。⑬ 梨壺皇子を産みたりとの報知によりて仲忠夫婦歸る。あて宮、藏人に梨壺の様子を聞く。⑭ 梨壺腹の皇子の産養。兼雅皇子を酷愛す。梨壺の母女三宮の勢やうやく盛なり。⑮ 仁壽殿女御、女一宮に女二宮の保護を托して内裏に歸る。⑯ あて宮の安産及びあて宮腹の皇子立太子の祈禱。⑰ 忠雅

●正頼の家は同居せし人の別居。

(一)正頼郎

(三)今明日中にも女御后になり給ふべきあて宮が

(考異)

(二)給ふべかなり給ふべかめり給ひぬべかなり

(四)げにーナン

(五)さらばーさて

(六)六の君、五の君

(七)七君

正頼兼雅仲忠等昇進。人々の御禮廻り。●實忠、あて宮の許に禮廻りに来る。あて宮實忠に山を出でて舊妻と同様せんことを勸む。

右の大殿には、御聲の殿ばら、宮ばら、御子どもも、上達部に物し給ふは、ひろき殿おもしろく清りに造りて、萬の調度、寶おきつよ、「殿のゆるし給はねば、えわたり給はで、狭き住居をする事」とむつかり給ふ。右大將は、仲忠「藤壺まかで給ふべかなり。今日明日、女御后がねなどの、對に住み給はむには、いかでか上にはのほり侍るべき。西の對しつらひて、其處にわたり給へ」と聞え給ふ。おとど聞召して、正頼「けに年頃もむつかり給ふなるを、今は、さらば、殿々にわたり給へかし」と宣ふときこしめして、殿ばら、宮ばら喜び給ふ。源中納言殿も限りなくよろこび給ひて、まづ出で給ひなむとすれど、藤壺待ちつけ奉らむとおほす程に左の大殿、式部卿の宮よりはじめ奉りて、移ひ給ひぬ。大納言殿は、まだ出で給はず。西北の町なり。宮たちは、北の方のおほん親につきて、みな出で



(語釋)

(三)大臣上

(四)

(考異)

(一)町を一町は一この町を

(二)へればさて移り給ふ一ナシ

給ひぬ。男君たちも、御妻につきてみなわたり給ひぬ。

右大將は、家あれどまだ造らで、西の對にわたりて、住み給ひぬ。さて人々のあ

がれ給ひし後は、右大將殿のわたりて住み給ひし町を、女御の君に奉り給へれ

ば、さて移り給ふ。今まで、殿ばら、宮ばら住み給へりし町をば、藤壺に奉り給

ひ、いま一町をば、あなたの北の方に奉らせ給ふ。御子どももおほく外へわた

り給ふやうなれど、たゞ此の殿のめぐりに、あるは向に、あるは傍に、遠しと

て、一町、二町を離りつゝ住み給へば、同じやうに、御門の隣といふばかりにな

む。

かよる程に、大納言殿、北の方、まだ對面し給はねば、移ろひもえし給はず、佗

びおはず。忠臣あやしうはかなき事にて、この月頃怨じ給ひてかよる事」となけ

き給ひつゝ、御文たびく奉り給へど、御返なし。たち返り聞え給ふ。

忠臣彼處に待ちわたりなむとするを、人の忌むといふなるを、たゞあからさまに

(語釋)  
(二)女二官

わたり給ひて歸り給ひねかし。かく年月隔てて怨じ給ふべき事とも思えぬを、人の空言いふにつけてやは。明日よき日なるを、必ず。

と聞え給へれば大宮、「けにいと見苦しきことなり。早わたり給へ。いかでか一所は物し給はむ。かう事なきやうに見え給ふこそ」など聞え給へば、御返に、七畝いざ、さらば渡らむ。ゆよしけなる人かな」とぞ聞え給ひける。さてそれもわたり給ひぬ。かなたには女御の君、大宮の住み給ひし北のおとどには、女君たちひき率て、西の二の對かけて住み給ふ。大將殿の御方は、東の二の對、廊かけてすみ給ふ。西の一の對には彈正の宮すみ給ふ。東の一の對の北面、よくしつらひて、少將の妹むかへてすませ給ふ。藤壺のえ給へる町は、左の大殿住み給へるを、外へわたり給はむとて、御簾かけ、壁代、御帳、御座など、いと清けにしつらひ給へり。式部卿の宮の御方も、御簾などかけ替へ給へり。對どもには然もせず。

(考異)  
(一)ことなりことなり

かよる程に、藤壺、「たと今出で給はむ」と宮に聞え給へれば、東宮「梨壺も、その程は過してこそまかでつれ。などか其處にしもかねて急ぎ給ふ」と聞え給ふ。

壺詞

こよは藤壺。

①太政大臣季明病篤し、正頼と實忠とを招く。遺言、薨去。

(一)季明

(二)藤原殿

(四)親ある時さへ

(五)實忠

(七)實正、實頼

(考異)

(三)がたしーがたう

(六)交らはずー交るはず

かくて太政大臣は、御年高くなり給ひにければ、そこはかとなく悩み給ひて、心細くおほす事どもありければ、季明「君たちみな、公に仕うまつり、不益なるもなし。我うち棄てて亡くなるとも、右の大殿のものし給へば、顧み思ひてむ。たどうしろめたきものは宮の君、實忠思ふに、冥路も往きがたし。ある世にだに、女子は、よろづの事むつかしくやさしきものなり。宰相の朝臣、おほやけに仕うまつりぬべく、容貌、心、人には劣らざりしかば、わが家繼ぐべきはこれかところを思ひしか。あさましく、幸なくて、物にあやまれる様に、心魂もなくなりはてて、世に出で交らはずなりぬる事」をなむ萬に思ほえて、民部卿の君、中將の君などに聞え給ふ、季明「日頃経るまよに、心地のえあるまじくのみ思ゆるを、いかで右の大殿に對面

たいめん



(語釋)

(一) 實忠に

(三) たると告げに」なる  
へし

(四) 實忠の閣屋

(考異)

(二) 如何なるにかー如何  
なる事にか

(五) 思ひー思ふ

せむ。然さなむと申まうし奉たまへ給へ。さては宰相(一)に、わが非常ひじょうの時ときにも逢あひ見みで歎なげみぬべきか、いかに思おもひたるぞ、世よの中なかにかなしきものは親おやをこそ言いへ、そが上うへも知しらず、さてもありぬべかりし身みをも捨すててあるは如何いかなるにかあらむ、哀あはれになりはてぬべき人ひとかな、斯かう心地こころちなむ弱よわくなりたること、告つげにやり給へ。今いま一度(三)だに見みるまじきか」と宣のたまへば、君きみたちいみじう泣なき給ひて、右みぎの大おほ殿どのには民部卿みんぶきやうの君きみ、小野そののには中將ちゆうじやうまうで給ひて、有ありつる様やうをくはしく聞きえ給へば、宰相さいしやうとばかり物ものも宣(四)はで、いと久ひさしく忍しのびためらひて、實忠じつしゆう「惱なやみ給ふとは、承うけたまはりて久ひさしくなりぬるを、いかで参まゐり來こむとは思おもひ給ふれど、世よの中なかにまだ侍はべりけると、人ひとの見みむも、有あり様さまなども其そのの人ひとにも侍はべらず。人々ひとびとの見み給はむことなど思おもひ給へつよなむ。かく重おもく惱なやませ給ふなるを、いかでか参まゐらざらむ」とて夜よにかくれて出いで立たち給ふ。

民部卿みんぶきやうは右みぎの大おほ殿どのにかうくなど申まうし給へば、参まゐり給へり。太政大臣たいていだいじん、御脇けうそく息そくに

〔語釋〕

(一)父の居る處の屏風の  
後に

(二)照陽殿

(三)「女御」は「女子」なる  
べし

押しかよりおはしまして、内に請じ入れ給へり。御物語など聞え給ふに、中將の君、實相「宰相の朝臣参り侍り給ふ」と申し給ふ。おとど、季明「此方に呼べ」と宣ふ。宰相「右のおとどさふらひ給へば、更に出で給はず。度々召せども参り給はず、おとどおはします御屏風の後方に、忍びてさふらひ給ふ。宮の君参りて、おとどにつき奉り給ひて物し給ふ。右のおとどに聞え給ふ。季明「月日の経るまよに病のまされば、なほえ侍るまじきにこそあめれ。何か、人の惜むべき程にもあらず、又命の惜かるべきにもあらず。七十にあまりて、公にも仕うまつりぬれば、理。たど思ひ侍ることは、子二人が上をなむ思ひ侍る。實頼も、まだかう下臈に侍れば、うしろめたけれど、殿の物し給へば、さりともと頼み聞えたり。女御の上は、人に聞えおくべきにもあらず。たど宰相をなむ思ひ侍るに、冥路も安くもまかるまじく、萬の所の關となる心地し侍るを、心もて身を徒らになしつる人にこそはと見侍れど、なほこれなむあたらしく、うしろめたう見侍る。折あらば、これ願み

〔語釋〕

(一) 實忠が

(二) 實忠

(三) 實忠は正頼邸に住み居し故

(四) あて宮

(五) 實忠が懸想せしを

(六) 勅命は背かれぬものなれば

〔考異〕

(七) 思ひ一思ふ

させ給へ。世中思ひ捨て侍れど、これ徒らになし給ふな」と泣く／＼聞え給ふ。右のおとど、正頼、いともの／＼珍らしくこよに参り給ふなるを、などか御前にはさふらひ給はぬ。年頃、昔よりいかで志ふかとは、此の君をこそ思ひ聞えしか。又侍る所に物し給ひしかば、哀にむつまじきものに思ひ聞えしかども、あやしう年頃山里に籠りものし給ふらむは、世中に倦じたまふ事やあらむ。なでふ御心ありてか、など思ひ給ふるを。されど、年頃これかれものし給ふこと侍るとき、早くより思ふ給へ。志し侍りしものを、雑役などにも使ひ給へ、など御息聞えたりしに、御返り見給ひしかば、思ほす心あるやうになむ見給へし。それは、此の宮にさふらふものはまだ里にさふらひし時なむ、物など宣ひけるを、さらに知り給へざりける。そが中にも、宣旨侍りて「源中納言に賜へ」と仰せられしかば、背かぬものなれば、然思ひ給へしを、宮より重く勘當せられしかば、参らせ侍りしなり。これにこそなむ、人々おほく恨ども侍りける。宰相の君におき奉りては、

(語釋)

- (一) 季明の御頼なくとも
- (二) わが子どもよりも
- (三) 遺産處分の證書
- (四) 其の次なる邸に
- (五) 次の詞へつゞく
- (六) 袖君也

(考異)

- (一) 委しくー委しう
- (二) 思ひー思う
- (三) 己ー我
- (四) さし次ぎたるにーさしつぎたるは
- (五) 莊一莊々
- (六) 國々なる一國々にあなるに
- (七) し給ひたるーしたまひおいたる

正頼まさよりに委くはしく言いふ人侍ひとざむらいらましかば、何かなに、ともかくも思おもひ給たまへまし。仰おほせごとな(三)くとも、昔むかしの(二)ことをさら(一)に忘わすれ侍ざむらいらず。いはむや、更さらにかく仰おほせらるれば、よ(三)か(三)らぬ男おとこどもよりもいかで、となむ思おもひ給たまふる(四)など聞きえ給たまふ。おとど、いとかし(三)こくおほんしほたれ給たまひて、季明きみなどか實忠さねたけの朝臣あそんの、辛からうじて物ものしたなるを、此方こなたには物ものせぬ。すべて、己おのれには逢あひ見みじ、と思おもふ心こころやある(五)と宣のたまへど参まゐり給たまはねば、右みぎのおとど、いといとほしと思おもはす。さておとど、民部卿みんぶきやうに筆取ふでとりらせ給たまひて、御處分おのころの文ふみかよせ給たまふ。季明きみ「大おほきなる殿どの三つあるを、この住すみ給たまふをば、宮みやの君きみに、いま一つさし次つぎたるに、大おほきなる莊しやうどもの國々くになる、昔むかしより中なかに寶たからにし給たまひたる細こまかなる物ものそへて、源げん宰相さいしやうに、いま一つの殿どのに、女おんなのつかひ給たまふべき調度てうど加くはへて」と宣のたまふ。季明きみ「これは宰相さいしやうの朝臣あそんの忘わすれにし人ひとの女子おんな一人ひとりあらむ、今は大おほきになりたらむ。あさましう心こころあやまりしたる様やうにて、よろしく聞きえし女子おんなをも、徒いたづらになしつめるを、それそれに取とらす」と宣のたまひて、中將ちゆうじやうの君きみなどには、所々あちこちに領あやうじ

(附釋)

(三)實忠の母

(六)後妻を迎へずして

(七)實忠の妻

(九)眞砂君

(考異)

(一)得給ふそれは一先給ひければ

(二)御覽一御名一御判

(四)思う一思ひ

(五)思う一思ひ

(八)ものしにし一ものせし

(一〇)めり一めりき

(一一)ま一まへは

給ふ所あまたあり、何もく、民部卿など、みな同じごとく得給ふ。それは、この二所皆え給ひて、斯く書かせ奉り給ひて、御名押し給ふ。右の大殿にも御覽せさせ奉り給ふ。さて、よろづの御物語聞えさせ給ひて泣きたまふ。源宰相もいみじう泣きたまふ。御前には、いまだ出で給はず。

さて、右のおとどまかで給ひぬ、宰相、おとどの御前に参り給ふ。おとど萬の御物語し給ふ、季明「世の中といふもの、事につけて、とある事かゝる事あれど、知らぬやうにて經ればこそあれ、はかなき女の上などにつけて、身を徒らになしつる事」など宣へば、宰相、實忠「何か、さやうなる事にも侍らず。殿の上かくれ給ひにし後、世の中心憂く思う給へしかば、すべて世に侍らじと思ひ給へしなり」おとど、季明「それは、我もいみじく悲しと思ひしかばこそ、また人をも擾ませで、年頃一人はありつれ。そもく、かの子ども持たりし人は、何方かものしにし。男子は、はかなくて失ひつめり。女子さへ如何にしなしてし。年頃は、たゞ行人

(語釋)

(三)實忠の舊妻は

(五)元は三條に居たりしに

(六)言ひしらがよ敷

(七)祐澄

(九)仲忠

(考異)

(一)いと一けにナシ

(二)にも一をも

(四)御昔人「御」ナシ

(八)箱られこもり

(二〇)其處にこそそこ

か

(一一)ありける心地一ありけるころの心地

よりのいと哀(一)にてあり經めれば、子といふもの無かめり。如何にせよと思ふぞ。など宣(二)ふ。宰相、實忠、知り侍らず。かの侍りし所にも今は物せずとなむ承る。世の中心憂しと思ひ給へしかば、たづね侍らず」おとど、季明「いと怪しかなり。はや求めさせよ。すべて、現心もなき人にこそあめれ。まづは、我かく世の果に、年頃ありて逢ひたるにも、ことに悲しとも思ひたらざるをや。いとかなしき人にもあるかな」と宣へば、涙を雨の如くこぼす。御前なる人、涙を落さぬなし。民部卿、實正「此處の御昔人は、志賀の山本、比叡の辻のわたりに、いとをかしき山里侍り、其處にこそ、年頃物せらるよなれ。三條にものせられけるに、これかれ好(三)きごと言ひちがふ宰相の中將など、消息絶えずありければ、それに思ひ倦じて籠(四)られたるとなむ承りし」宰相、右大將殿の中將なりし時、もろ共に往きたりし所は、然ば其處にこそ、若き人の聲せしは、わが女にやありけむ、あやしく、人は住むものから、音せぬ所、とは思ひしぞかし、あさましく物覺えずありける心地(五)



〔語釋〕

(一) 我(わが)が如(ごと)き位(ゐ)に上(あ)るこ  
とは出来(こ)まじとの意(い)歟(や)

(三) 袖君(そでぎみ)を季明(きめい)の子分(こぶん)  
にして

(六) 實正(じつせい)

(八) 東宮(とうきゅう)

〔考異〕

(一) 在所(しよじよ)―在所(しよじよ)を

(四) あなり―あり

(五) その―この

(七) こそは―は―ナレ

かな、如何(いか)にを(を)かしくも怪(あや)しくも思(おも)ひけむ、など思(おも)ほすに、哀(あは)れしく覺(おぼ)ゆるこ  
と限(かぎ)なし。おとど、季明(きめい)はや、その人(ひと)の在所(しよじよ)たづねよ。その女子(をんな)を(を)だに、徒(いた)りに  
なし果(は)つな。朝臣(あそん)はた、不益(ふえき)の人(ひと)なめれば、たゞ今(いま)のごとわか位(くらゐ)は(は)え有(あ)るまじかめ  
り。わが子(こ)になして、宮仕(みやづかへ)をも、よろしからむ事(こと)もせさせよ、とてなむ、些(いさ)なる  
物(もの)どもも物(もの)する」など多(おほ)くの御物語(ものがたり)などし給(たま)ふ。

かくて、宮(みや)の君(きみ)に聞(き)え給(たま)ふ、季明(きめい)此(こ)の家(いへ)に、開(あ)けつかはぬ納殿(なせめどの)五(ご)つあなり。その  
二(ふた)つの屋々(やゝ)には、やんごとなき物(もの)どもあらむ。三(さん)つの屋々(やゝ)には、人(ひと)のなくてえあ  
らぬ物(もの)ども、品々(しなづか)置(お)かせたり。莊々(しやうじやう)あまたある中(なか)に、遠江(さへたふみ)丹波(たには)の國(くに)尾張(おはり)信  
濃(しな)飛驒(ひだ)なるは、こと勝(すぐ)れたなるを渡(わた)せしぞかし。これ(こ)をだにな失(う)しな給(たま)ひそ。  
この東宮(とうきゅう)に侍(はべ)る君(きみ)の少(すこ)し情(なさけ)なくぞ。民部卿(みんぶせい)心(こころ)廣(ひろ)くうしろ安(やす)き人(ひと)なり。それぞ、御  
口入(くちい)れ奉(たてまつ)りてむ。われを忘(わす)れざらむ人(ひと)は、こよをこそはとぶらひ申(まう)さめ」など宣  
ふ。宮(みや)の君(きみ)の聞(き)え給(たま)ふ。昭陽(おのうか)自(みづか)ら御覽(らん)しけむ。

(六)

(七)

(八)



(語釋)  
(一) 給へつと歎

き。この藤壺といふもの参りてなむ。己ならぬやんごとなき人の御爲も、斯くの  
みなむ。世中に經侍る年頃の世の、人のとありかよりと承るごことには、殿の御事  
を思ふ給へつる、胸つぶれておそろしく侍りつれ。かよる事宜はすなる、いみじ  
く悲しきこと。え免れおはしませぬものならば、もろ共に率ておはしましたね。萬  
のたからを賜ひても、おはしまさざらむ世には、いかでか侍らむ。萬のものも女  
領ずれば片時に無くなる物にこそ侍るなれ」と泣きまどひ給ふ。おとど、季明何  
かそは。いとよく物し給ひなむ。今は、ことなる事なくば、な参り給ひそ。わが  
ありつる折、牛車供の人具して参りものし給ひつる時だに、覺束なかりつるもの  
を、人笑はれにて出入し給ふ、いと見苦しかならむ」など聞え給ふ。  
かくて萬のあるべき事、後の御世の事など書かせ給ひて、御位かへし奉れ給ひ、御  
髪おろし給ひてかくれ給ひぬ。二月晦、太政大臣の御とぶらひに、左右の大將、  
一つ御腹の右の大殿の君たち、日々に参り給ふ。

●あて宮退出、涼の接待

〔語釋〕

(一) 季明の同母弟

(三) 忌引

(五) 女四宮

(六) 照陽殿

(七) 日頃他の妃妾たちを顧みぬはあて宮あればなりけりと

(九) 照陽殿

〔考異〕

(二) おはすれば―おはせれば

(四) 給ひつらむ―給へらむ

(八) 御心持給へるにぞ―心持給へるこそ

かくて右の大<sup>みぎ</sup>大臣殿は、一<sup>ひ</sup>つ御腹<sup>みはら</sup>の弟<sup>おとこ</sup>におはすれば、殿<sup>どの</sup>の君<sup>きみ</sup>たち、おととも御暇<sup>いさま</sup>に  
 なり給<sup>たま</sup>ひぬれば、藤壺<sup>ふじつば</sup>も、夜<sup>よ</sup>さりまかで給<sup>たま</sup>ひなむとす。宮<sup>みや</sup>も此度<sup>こたみ</sup>はえとどめ給<sup>たま</sup>は  
 で、その日は入<sup>い</sup>り臥<sup>ふ</sup>し給<sup>たま</sup>へり。御物語<sup>ものがたり</sup>し給<sup>たま</sup>ふ。東宮<sup>とうみや</sup>斯<sup>か</sup>うてあり習<sup>なら</sup>ひて、物言<sup>ものい</sup>ひ觸<sup>ふ</sup>  
 るよ人<sup>ひと</sup>なくてあらむ。梨壺<sup>なしつば</sup>さへまかで給<sup>たま</sup>ひつらむこそ」君<sup>きみ</sup>、あて寫<sup>み</sup>院<sup>ゐん</sup>の御方<sup>かた</sup>、左<sup>ひだり</sup>  
 おとどのなど物<sup>もの</sup>し給<sup>たま</sup>ふめり。そがうち式部卿宮<sup>しきぶきやうのみや</sup>のも、今日明日<sup>けふあす</sup>ものし給<sup>たま</sup>ひぬべ  
 かめり」宮<sup>みや</sup>、東宮<sup>とうみや</sup>「そこにもものし給<sup>たま</sup>はざらむ程<sup>ほど</sup>に人<sup>ひと</sup>に物言<sup>ものい</sup>はじとぞ思<sup>おも</sup>ふ。そこにす  
 るなりけり、とていとど言<sup>い</sup>はんものを。院<sup>ゐん</sup>のは、いとかたじけなく哀<sup>あはれ</sup>にも思<sup>おも</sup>ひ聞<sup>き</sup>ゆ  
 れど、恐<sup>おそ</sup>ろしく荒々<sup>からう</sup>しき御心持<sup>ごころもち</sup>給<sup>たま</sup>へるにぞ。女<sup>に</sup>は、何心<sup>なにこころ</sup>なく物思<sup>ものおも</sup>ひ知<sup>し</sup>らぬ様<sup>やう</sup>なる  
 こそ。かつは、そこを惡<sup>にく</sup>み給<sup>たま</sup>ふこそ、然<sup>さ</sup>らでも有<sup>あ</sup>りぬべき事<sup>こと</sup>なれ。さてはこのさ  
 がな者<sup>もの</sup>こそ、今<sup>いま</sup>はいとらうたけれ。心<sup>こころ</sup>を人<sup>ひと</sup>に見<sup>み</sup>ゆべくもあらず、見<sup>み</sup>る目<sup>め</sup>もことな  
 る事<sup>こと</sup>なし。子<sup>こ</sup>なども今<sup>いま</sup>はいかでか。同胞<sup>ほんぱう</sup>ども、數多<sup>あまた</sup>あめれども、いとよくもあら  
 ざめり。親<sup>おや</sup>のものせられつる時<sup>とき</sup>こそ、さてもありつれ、いかに心細<sup>こころほそ</sup>く佗<sup>わび</sup>しからむ。

(語釋)

(一)父季明

(三)「みき」は「よし」歟

(五)あて宮の兄弟

(六)仲忠が梨壺と

(七)あて宮の入内と共に

(考異)

(二)嘆くと聞きしものを  
一嘆きしと聞えつれば

(四)とこそ一ナシ

(八)言ひに「に」ナシ

(九)つけて一かこつけて

(一〇)身ならば敬知らず  
も一身ならば敬知らず  
とも

いかに訪らひてむ。故太政大臣の、いといたう嘆くと聞きしものを、我だに心止

めて思はずば、惑ひぬべき」君、あて宮實忠の朝臣の爲には、聞きにくき事言ふと

て、もとより消息も聞え給はざりき。里にまかでよ、人はうたて言なすとも、實

忠の朝臣とふらひに遣はさむとこそ」宮、東宮それならぬこそ。疎からぬ中らひ

なる中にも、此の人々どもは、妹の爲に疎なるや。さるは、おなじ親にこそあめ

れ。右の大將の同じ腹にもあらず中もよろしかるまじきが、兄妹哀に思ひためれ

ば、誰々にも心見えてあらまほしくこそ」君、あて宮「あまた侍らねばいかでか。昔

里に侍りし時、はかなき言いふ者あまた侍りしを、すなはち皆忘れぬめりしに、實

忠の朝臣今に忘れず、宮仕をもせず侍るなれば、あるが中に、心長かりけるよろ

こび、言ひに遣はさむとなり」宮、東宮心長さは嬉しや。さらばこよには頼もし

かなり。そこには、此の事今は思し遣るにつけて、退出をのみせらるれば、苦し

くこそ。とてもかうても、諸共に見るべき身ならば、數知らずもあらせまほしき

を、然はたあるまじければ、いと苦しくなむ」とて例の御車むかへ人参り給へれど、ゆるし給はず。宮、東宮例の、まかで給ひてば、とみに参られで、待たせ給はむとや」君、あて宮何か、いかなるにか侍らむ。此度はあやしく心細くのみ侍れば、え参るまじきをや」とて、

(考異)

(一)身し—身も

(二)まつにも何か—まつも何かは

あて宮草の葉に露のわが身し消えざらばまつにも何かかよらざるべき宮、東宮「あなゆとしや」とて、

東宮 露のよもまつにかよれば貫きとめて風にも消えぬ玉とこそなれと宣ひて、夜更くるまでまかで給はず。

(三)待ちわび—待ちわびらひ

大殿、君たち、前に戀り給ひて、ものも宣はず、待ちわび奉り給ひ、たちかへりつよ御消息申させ給ふ。君、あて宮まかでて思ふやうに侍らば、かく承ればしづ

(四)そのこくなむ—をこくなむ

心も侍らじ、いと疾く此度は。たど知らぬをのこよなむ」宮、東宮 散る花も夢にみゆなる春の夜を君外にてはいかに寐よとぞ

(語釋)

(四) 父正頼

(五) 喪服をきて

(七) 其方を薄情なりと思はん

(九) 願登

(考異)

(一) わかれて―わがまは

(二) 夜半過ぎて―夜半うち過ぎて

(三) 物宣ひ―物し給ふ

(六) 夜の間は―夜の間

(八) 辛うじて出て給ひぬ―辛くして起き給ひて

わりなくこそ」君、

あて宮花だにも同じ春にてはかなきをわかれて外に行くをこそ思へ

と宣ひて、夜半過ぎて曉までまかで給はねば、おとど、忍びて御局におはす。君

だちは曹司々々に立寄りつと物宣ひ、わらは大人は、装束き立ちて待ち奉れど出

で給はねば、君、あて宮、さらばまかで侍りなむ。大殿、参りて侍る、心もとなくて侍

らむ。今幾日、色のものなどして、立たむ月の程には、夜の間は忍びて参り侍ら

む」と聞え給へば、宮、東宮いと嬉しかなり。人の参るやうにて、出し車にて、夜

夜必ず、さらば相思はれざりけりとなむ」とて辛うじて出で給ひぬ。

おとどおはしぬれば、まかで給ふ。御車二十、大人四十人ばかり、わらは、下仕

八人、ひすまし二人。おとど上達部三所は御車にて、兵部大輔の君よりはじめて、

皆御馬にて、世の中に目あきたる人の限は四位も五位も、無きなし。六位はもの

とも見えず。御車、御前乗りつときて、源中納言殿の住み給ひし、西の一の對の、

〔語釋〕

(一) 講澄

(二) 話澄

(三) 思澄

(四) 「四位五位よきにかかりて歌

(七) 涼の妻今宮

(八) 人に妬まれ居る其方故

〔考異〕

(五) 思ひ給ふ―思ふ

(六) 女御君…おはします―女御君たち待ち奉り給ふ

(九) まかてたる―まかて給ひたる

南の階に御車よせて、左大辨の君、宰相中將の君と御几帳さして、おとど、左衛

門督の君、御車の簾ひきあけて、おろし奉り給ふ。こと君たちは、みな御車のも

とに立ち給へり。御車には、四位五位にだにかよりて寄せたり。思ひ給ふさま、親

同胞の御前なれど、めでたき事物に似ず。御装束、御かたち、物の香など、限な

くめでたし。御車には兵衛の君、孫王の君などござふらひける。昨夜より、大宮、

女御君、る立ちて待ち奉りておはします。源中納言殿の北の方は、この御方に入

れすゑ奉り給ひて、かはりて出でむと思して、まだ物し給ふ。

おとど、上達部も、南の廂に、こと君たちは簀子におはするほどに、明くなりに

たり。おとど、正頼自らしもまうで有りぬべけれど、怪しく人に許され給はね

ば、路のほど腹汚き人もやと思ひて、まうでたりつるに、遅く出で給ひつる。いと

心もとなくなむ「藤壺、あて宮、みな人まかでたる頃しも」とて暇を賜はざりつれば、

辛くして、とかく聞えてなむ」おとど、正頼前に催し申して騒がれければ、煩はし

〔語釋〕  
(一) 懐胎の子は男か女か  
鑒定せん

(二) 矢張男子なるべし

〔考異〕  
(三) いと心もとなうて—  
一所は上にもとて

(四) まじくこそは—まじ  
くてこそは

さに、物も申さでこそは待ち奉りつれ」と宣へば大宮、「あさましう久しく、一昨  
年の秋参り給ひにしまよに、對面せざりつる。かよる事なくては、えこそ出で給  
はざめれ。何ぞと見む。かき出で給へれ」とあれば、わらひ給ひて、あて宮、見苦し  
と聞え給ふ。女御、仁齋、まかで給ふによりてこそは。内裏にも昔は、後々にこそ。  
まかづるを喜にも「大宮、「いで、なほいぶかしや」とて御衣をかきあけて見奉  
りて、大宮「此度も同じもの」にこそは」と聞え給へば君、あて宮「いづら、この幼き人々  
は。まづそれをこそ、いつしかと」大宮、「渡りはじめ給ふ所なれば、三日までと  
て。若宮はいと大人しくなり給ひたり。今一所は、すどろなる聲をうち出だし給  
へば、いと心もとなうて」君、あて宮「然言はせ奉るまじくこそは。心もとなくはい  
かでか」と宣ふ。明くなりゆくまよに見給へば、此の大殿の造り様、しつらひ、さ  
らに言ふべくもあらず。やがて出で給へるまよに、御座ばかりをぞ敷きかへて、夢  
ばかり取りおとし給ふ物なし。たゞ御みづからぞわたり給へりき。

〔語釋〕

(一)「おはしまさせ給へ」なるべし

(二)誤あるべし

(三)吹上の建物なれば

〔考異〕

(四)よくこそはこのすぢあたり給はずめれーよくこそこのすぢあたり給ふめれーよくこそこのすぢあたり給はず

(五)の君一殿

(六)などーなんど

(七)枝一花

源中納言殿は、沈ちんの小辛櫃こからひつのをかしけなるに、錠ぢやう、鍵かぎ、とり具ぐして奉り給ふ。遠とほこれ、よき隙ひまなれば奉りてむ。こよに待てつかひ持る物ものどもなり。まかり渡わたるべき所ところにも侍はべるなれば、何かはとて。たゞ預あづからせ給へ」とて、遠とほきて、こよにおはしませ給へ。寢殿しんでんはいと悪わるかめり。これは、もとのをば取り違ちがへて、かの吹上ふきあひといひける所ところのを、取りに遣りて奉るなめれば、いと住すみよし。この西にしなる屋やどもなんども、彼處かしこのなれば、對たいの様やうになむ。そが中うちにも、とかく善よかるべきにせさせたる所ところなめり」と聞え給へば大宮おほみや、女御にみよの君、「けに、いかでか。これが様やうなる所ところはいづくにもあらじ。いとものよくこそは、このすぢあたり給はずめれ」と宣のたまふほどに、源中納言げんぢゆうなごんの君は、遠とほやがて三日(四)の参り物仕ものつかうまつりてまかでむ」と宣のたまひて、東ひしがしの對たいを行事所ぎやうじじこにて、家司けいしども、紀伊守きののかみなどして、御饗おほんあはれ仕つかうまつる。男をとこにも女をんなにも、おはします限かぎり、御折敷おをしき九つ、下藤げらふには六つ四つなどづつする渡わたしたり。かよる程ほどに、紫むらさきの色紙いろししにかきて櫻さくらの枝えだにつけたる御文おみふみ、宮みやより、御使つかひ藏人くらうしなり。

(七)



(語釋)

(一) 仲忠の手に似て居る

(二) 漢字をも假名をも

(三) 其手本は昔かきたるなればとて

(五) 催促せよ

(六) 仲忠をばむる也

(考異)

(四) 召すなれど一召すなめれど

あけて見給へば、

東宮たゞ今の程は如何となむ。かくてはえ有るまじかりけり。何せむにまかで

させて、妬うこそ。

吹く風に花はのどかに見ゆれどもしづ心なきわが身何ぞも

前々いかでありけむとこそ。

とあり。おとど、正頼「この御手こそ久しく見ね」とて見給ひて、正頼「いと善くな

りにけり」とてさし入れ給へば、女御の君、仁賢「かしこけれど、この御手こそ右

大將の御手におほえ給へれ」藤壺、あて宣「たゞその書きて奉られたる本をこそは、

男手も女手もならひ給ふめれ。それ昔のぞとて、今の召すなれど、まだ奉られざめ

りしかば、それおどろかせなぞ宣はせし」女御の君、仁賢「御文かよむとてなり

と聞きしは、然にやあらむ」おとど、正頼「萬のこと、人には勝らむとなれる人に

こそ」とて、宮の御使に饜し、物かづけ給ふ。御返、

あて宮今の程は旅にて、しづかなるにとなむ。

とて、

あて宮花よりもしづかならぬは君やさは風もふきあへぬ心なるらむ

と思ふ給へるこそ。

とて奉り給ひつ。

かくて三日過してかへり給はむとて、女御の君おはず。男は、はじめのはおはし代りつよ、珍しがり聞え給ふ。かくて夕つかた、直衣姿にて、いとめでたくて参り給へり。簀子に御座敷きわたしたり。あこ君、簾のもとに御几帳たてて、御襦

さし出でたれば、中納言、遠昔の人にたがはずなど聞ゆ。見ればいとあてになまめきたる人の、右大將のさまも同じ様にもてなしたる人の、彼はこよなうなりにたるなれど、これもいと花やかに髪つき色きはなどいとめでたし。あこ君して、遠かく承らましかば、さる心もすべう侍りけるを、曹司に侍りしかば、身の程にと

②涼の訪問。彈正宮の訪問、大宮、近澄の身上を仁壽殿女御に嘆く。

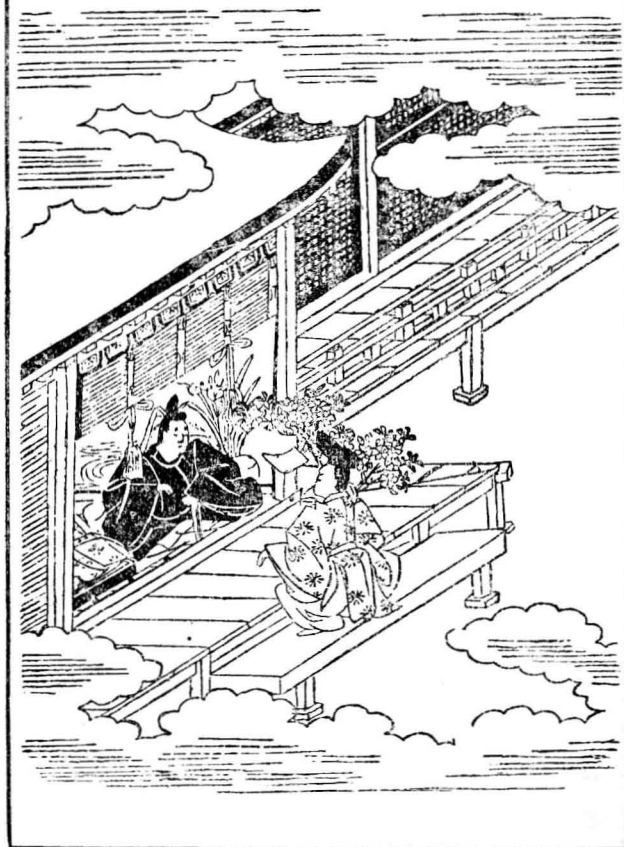
〔語釋〕

(一)「夕つかた」の下「源中納言」あるべし

(三)仲忠は

〔考異〕

(二)「さまも」も「ナシ



(語釋)

(一)「きく」は「磨き」歟

(二)「さすれど」なるべし

(三)御無沙汰なりとて御  
咎めもあるべきかと懼り  
思ふ

(四)「い」は「いぢ」な  
るべし

(七)あて宮をいふ

(八)東宮へ

(九)あて宮へ

(考異)

(五)とうーたふ

(六)とうーたふ

て、葎のやどにて侍りつるを、俄にわたりおはしましたれば、思ふ様にはあれど

むつかしけになむある」と聞え給へば藤壺、あて宮、千年を重ねてきよ給ふと、これ

よりはいかでか」と宣ふ。御聲もいとほのかにて聞ゆれば、遂(二)申しつがぬにしも、

この度ばかりは心し侍りなまし」とて、遂(三)参り侍るときは、かならず御消息聞え

さすなど、人も聞えつがねば、聞えさせずとて宣はせやすらむと、つよましくなむ」  
(三)

御いて、あて宮、交らひするは、とう給ふべきことのとう給はぬこそ、あやしき事に。  
(四)

君の宣はざらむには、志ありとも、あこきなどはいかでか」中納言、遂(五)常にこそ

聞えさすと思ほゆれ。御返は今日のみこそなむ」と聞え給ふ程に、彈正宮おは

しませば、立ち給ひぬ。宮は御簾のうちに入り給ひぬ。女御の君に、忠康(六)などか

彼方には。十の親王も、こよにもとめ奉り給ふめり」と聞え給へば、仁尊(七)「こよに、

いと珍らしき人に對面賜へるはや。彼方になほ、暫しおはしませ」と聞え給ふ。

彈正宮、忠康、ゆに珍らしうこそは。宮に参る時は、すぐろなるやうなれば、御  
(八)

(九)

〔語釋〕

(二) 引歌未考

(四) 思康

(六) 誤あらんか

(七) 仁壽殿方の内々へも

入れざりしが

(八) 妻を定めて

(一一) 近澄が

(一二) 我慢出来ずば如何なる非常手段をもせんと

思へども

〔考異〕

(一) もえぞ聞えずーをもとし聞えず

(三) 宿守にーやどりもりにーやどりとり

(五) 子にて持たるーこそ

(九) 其處にもーそこには

(一〇) あのれ何せむに俗

びぬーあのれせむなうー

あのれがせむなり

消息もえぞ聞えず。例の覺束なうこそあらめと思へば、これよりもしばく聞え

給はず。先つ頃も、参らせ給へりと承りしかど、え聞えさせず。我をまつちの

とかや云ふ様になむ」と聞え給ふほどに、夜さりの御物御前ごとに参る。御折敷

など取りかへてまるる。かくて彈正宮は、思康今つねに参り來む。うしろめた

きこと侍れば、宿守に」とて立ち給ひぬ。

大宮、「この犬の餅まるりし日、この宮の怪しきことを宣ひしはまことか」と聞え

給へば、あて宮「知らずや。何事にかは」大宮、「世の中に苦しがるべきものは、若き

人の好いたる、子にて持たる、うたてき事なりや。見苦しういみじきものを見る

こそ、いと命長くなりなまほしけれ。この近澄といふ人の、童よりあやしく好き

に見えしかば、そへ物になりぬべし、とて、彼處にもゆるし給ばでありしもの、

人さだめてありしかば、目やすしと見しを、如何しけむ、其處にもあらで、たど

彼方にのみありて、おのれ何せむに佞びぬ。そのいふ様は、「心ひとつにえたへず

〔語釋〕

- (一)誤あるべし
- (二)我が願を成就せしめ給へと祈るに非ず
- (三)近邊が
- (四)女二宮が
- (五)女二宮が
- (六)仲忠を
- (七)他人も帝の聖にならば我もならぬ筈なしと

〔考異〕

- (一)などこそなどーなどとこそ
- (二)給ふ藤壺一給へば藤壺
- (三)のちとぞいふいのちながらなれしかばかくてやかならむとぞいふ
- (四)こそはーはーナシ

ば、如何にもくと思へども、親のさきに命なき人あらはなれば、かく申すに、その如くなし給へとはあらず。佛神にも、この事な思はせ給ひそ、と申させむなどこそ」など言ひつよ。常に喜び樂しむを見るこそ、いと世に經まほしけれ」と

聞え給ふ。藤壺あて宮何事をいかに思すぞ。すどろなる事、あるまじき、思ひ初むるも、よからぬわざにこそ」と宣へば、大宮「知らずや。その言ふこと、いと恐ろしや。この中らひにこそは、あめれ」女御の君、仁壽「いづれぞ。一の宮をこそ、人よりはことに思ひ聞え給ふべかめれ」宮、大宮「あなうたてや。いかでか。そは、若宮にこそあべかめれ。まだ西の對におはせし時、かいまみをなむしたりしかば、一の宮と御碁うち給ひしを見奉りしまよに、いとちながうなれしかば、かくてやむるならむとぞいふ」女御の君、仁壽「一の宮も、昨日今日侍従なりし人につきてこそはあるなるに、上もこよなう思ひ聞え給ふめりし。かよるわざ、帝のしおき給ふめりしかば、外にだに斯くてこそは、我も、とこそは思ふらめ」宮、大宮「あ

(一三)

(二二)

(二〇)

(九)

(七)

(六)

(五)

(四)

(三)

(二)

(三)

〔語釋〕

(一)近道と仲忠を一つ口に言ふべきに非ず

(二)此處の詞解しがたき處多し誤脱あるべし

〔考異〕

(三)みかど…をばみかどをももけふことなからむをばみかども今日ことなからむをばみかどをもとかうとならむをば

(四)てし…てら

(五)なるにかゝるなる故に

(六)近く…近くは

(七)のこりなり…このなりこちなり…又のちなりこちのちなり

(八)のみならざんめるに…のはならざめるに…のならざらぬるに

(九)よからざるれど…よからざるとよからざるれよからざるなど

(一〇)皆ならひはててや…皆ならひはつや…皆ならひはてや

(一一)そが中にも…ナシ

(一二)ものを…ものぞや

なめざましや。一口にてもはた。人は位かは。有様するわざなどこそ。かくしらは、みかどをも、とるかどなるらむをばなにかは。あやしく、見聞けば、物し給ふ人にこそ物し給ふめれ。てしにもゆるされたるやうによき人もあしき人も、いかでこの人に物を言ひわたらひにしがなと思はれ給へつるは如何なるにか。上達部、君たち、近く親にものし給ふめれど、同じことをもろ共に申しなるよにのこりなり。かしこのみならざんめるに、若き人の昨日今日出で立つに、なさるよ事、さらぬは心よからざるれど、見る顔かたちに、わけて皆なびき従ひてこそ。かく有り難き人の、皆ならひはててや。うたていかでかはすらむ」藤壺もて言、かしこくものし給ふなれば、然聞え給ふにこそ。はかなきことを、心一つに思ひて、はかなくなる時は、いと幼しや。よう心し給へと聞ゆるやう有り。いづれとにあらねど、そが中にも如何なる人にもなり給ひぬべかめるものを」と聞え給へば女御の君、仁賢「こよにも思ふ様有りや。衣更してば参りなむとするを、この宮たちを

なめざましや。一口にてもはた。人は位かは。有様するわざなどこそ。かくしらは、みかどをも、とるかどなるらむをばなにかは。あやしく、見聞けば、物し給ふ人にこそ物し給ふめれ。てしにもゆるされたるやうによき人もあしき人も、いかでこの人に物を言ひわたらひにしがなと思はれ給へつるは如何なるにか。上達部、君たち、近く親にものし給ふめれど、同じことをもろ共に申しなるよにのこりなり。かしこのみならざんめるに、若き人の昨日今日出で立つに、なさるよ事、さらぬは心よからざるれど、見る顔かたちに、わけて皆なびき従ひてこそ。かく有り難き人の、皆ならひはててや。うたていかでかはすらむ」藤壺もて言、かしこくものし給ふなれば、然聞え給ふにこそ。はかなきことを、心一つに思ひて、はかなくなる時は、いと幼しや。よう心し給へと聞ゆるやう有り。いづれとにあらねど、そが中にも如何なる人にもなり給ひぬべかめるものを」と聞え給へば女御の君、仁賢「こよにも思ふ様有りや。衣更してば参りなむとするを、この宮たちを

(體程)

(一)手許にゑきては留守の間が氣がかりにて

(考異)

(二)そらめきーうちみーうちみ

(三)如ー如く

(四)参りてー参るとて

(五)ことをおのれはーことををればーことををれば

(六)ゆるさずーずーナレ

こそ内裏に率て奉らむとすれど、まうのほりたらむ間のうしろめたく、一の宮の御許にと思へど、人の心も知らず、大將もそらめき給ふべければ、めのみさまなる心もやとて、御方にとこそは思ひ給へつれ。かたはなれたる馬の如あるべかなれば、如何はすべからむを、所々参りて、いと憎けなる事をし給ふなれば、思ひこそ煩ひぬれ。又あやしき事も有りや。みこふさいの人も、ことやうなることを、おのれはゆるさず、例のわざせむとぞあなるや」大宮うち笑ひ給ひて、大宮若きものの狂ふをだに思ふところに、なほ一の宮の御方にあづけ奉り給へ。その大將は帝の聞召さむにもよからずと思さじ。そが中に、宮にこよなう勝り給はどこそ」女御の君、仁壽「いさや。人の心を知らねば、恐ろしうこそ。内裏にと思ふがうしろめたきは、この宮たど如何にや如何にと宣ふなり。御文も常にあれば、あな恐ろしや。後の宮のようし給はぬところになむ」と宣ふ程に、夜更けぬれば、みな御殿籠りぬ。あくつとめて、宮より御文あり。



(語釋)  
(二)あて宮へ

(考異)  
(一)何なり―何を

東宮きやうのふ昨日きのうたちかへりてと思おもひ給たまへしかど、しづかならずと有ありしかば、心こころあわただしくやとて。今宵こよひは、

ありとのみ見みゆる寐ね覺ざめのわびしきにひとりある頃ころの夢いめや何なになり

なほ一人ひとりはえこそ。夕暮ゆふぐれなどは、いと使たよりなき心地こころちして、大空おほからをのみなむ。

と聞きえ給たまへり。御使つかひ、兵衛ひやうゑの君きみの兄せうせ、藏人くらうじんの内許うちゆるされたる、御前ごぜんに参まゐり、藏人くらうじんこ

よひはたど一ひたひ所御遊あまびし給たまひつよ、御殿籠ごどのこもらずなりぬ」と聞きゆれば、あて宮あてみや庚申かんじしにこ

そはありつらめ」御返、

あて宮あてみやさればこそは聞きえさせしか。

程ほどもなく忘わすれにけりな夢いめにても思おもはましかばありと見みましや

あな心こころみじかや。

と聞きえ給たまひて、「祿ろくはうるさし。後のちには」と宣のたまへば、笑わらひて参まゐりぬ。

かゝる程ほどに一ひとの宮みやより御文ごふみあり、

(三)

(語釋)

(二)里に御下りの今でさ

(脚目にもかゝれぬ故

(三)古今集「レブヤレブ

レブのをだまきくりかへ

し昔を今になすもよしも

がな

(四)其方へ参りて犬宮を

先づ見たしと

(考異)

(一)なかかは「は」ナシ

(五)して「て」ナシ

①仲忠あて宮を訪ふ。皇子に讀書を授け奉るべき約束。

女いと珍らしうまかで給へるを、いつしかとこそ待ち聞えつれ。などかはそれ

よりも宣はざらむ。いかで對面も疾くもがな。こよにてさへ覺束なきまよに、

「昔を今に」とのみなむ。こよには立寄り給ひけもなきを、其方に参り來む。宣

はむまよに。

と聞え給へり。

あて宮承りぬ。まかで侍りてはすなはち、珍らしき人をもまづとこそ思ひ給ふ

れど、こよにこれかれ物し給へりけるに、聞えさせ承るとなむ。わたらせ

給はむとか。いかでか。御まもりは恐ろしかめれど、今其方にを。

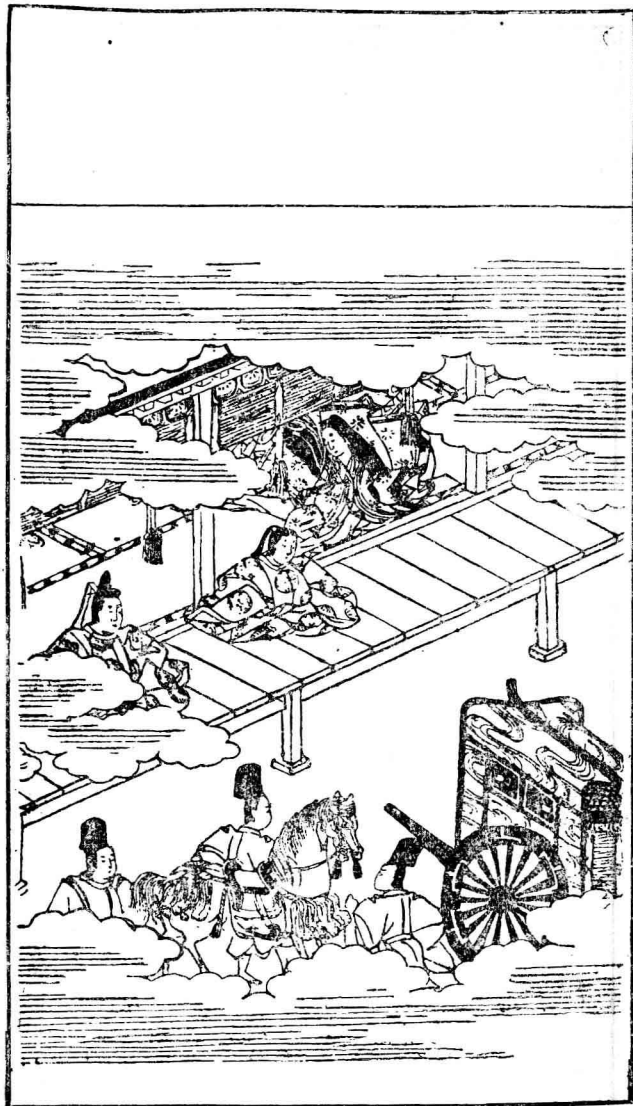
と聞え給ふ。

かくて藤壺、あて宮に参りて、犬宮ふとかき抱き奉らむ」大宮、「こよにえ見ざ

りしを、餅食はせに物してこそ。それにだに、疾に出だし立てられざりき」女御

の君、仁壽「この頃は、いとをかしくなりたり。起きかへり、暫し這ひなどして、

(五)



(語釋)

(三)疎き人にかこそは見せぬ事もあらんが

(四)我には

(五)女一宮

(七)正頼

(九)涼をいふなるべし

(一)うるさく思召す程  
塵發上すべし

(一三)誤ならんか

(一五)あて宮腹の皇子たち

(考異)

(一)守ちへてぞあるなる  
まもちへてぞある

(二)藤壺のいらへーかれをいかてとく

(六)たちざんめりーたち  
ずとなむ

(八)ものは「もの」ナシ

(一〇)給ひつるー給へる

(一二)なむとーなど

(一四)こそは「は」ナシ

人見てはたど笑ひに笑ひて、白くをかしければ、前に伏せて、常に守らへてぞあ

なる「藤壺のいらへ、あて宮」疎き人にこそは。そが中にも、こよにも何か宮は隠し給

はむ」女御の君、仁賢「宮は誰にもかくし給はず。何事も思したらざんめり」藤壺、

あて宮「さておとどには」仁賢、いであなうたてや。女にだに隠さるよものは」など宣

ふ程に、右大將夕つ方、直衣姿にてまうで給へり。例の簀子に裾参り給へり。居

給へるを見れば、見え給ひつる人にいとこよなし。藤壺なほこれはこよなくもは

た、と見給ふ。大將、仲思「さいつ頃も参りて侍りしかども上にのみなむ。御局の

人も参らせ給はず、と承りしかば、覺束なくてなむ。斯くておはしませば、今

はむつかしがらせ給ふまでなむ」と聞え給ふに、孫玉の君していらへさせ給ふ、

あて宮「承りぬ。時々訪はせ給ふをなむ、人心地は」大將、仲思「いとやすき事」にこ

そは。常に参り來ば、如何なる人の御心にか」なんと聞え給ふ程に、若宮たち二

所ながら、乳母たちなどして、大殿の御方よりおはしたり。かの大將の奉り給

〔附釋〕

(一) 仲忠

(二) 此皇子たちをいよ

(四) 自分が居る間に

(五) 手本

〔考異〕

(三) 給よー給ひつ

ひつる馬車ども、持ておはして見せ奉り給ふ。若宮は、いとおとなしく、紐つ  
いさしなどしておはす。母宮、いとめづらしう哀と見奉り給ひて、あて宮「心地こそ  
頭かしら白くなりたる様なれ、かく大きになり給ひたれば。御手習などはし給ふや。  
何なにわざかし給ひつる」と問ひ聞え給へば若宮、一宮「何なにわざも、せさする人もなけ  
れば、大將たいしやう、かしこ書習ふみならはさむと宣のたまひしかば」母宮、あて宮「いと嬉うれしき事ことかな。か  
の御弟子でしになり給ひて、萬よろづのわざし給へ」なんと聞え給へば、大將たいしやううち笑みて、  
仲忠「おとなしう、目めに見すく人の御親おやにならせ給ひて。さても、宮みやには、いかで  
仕つかうまつらむと思おもう給ふるを、今いまはいとよう、物遊ものあそばしなどし給ふべかめるを、  
さる仰おほせごとも無なければ」と聞え給へば、仁鸞たれ誰かは、こよには知らで籠こもり侍はべ  
ば、おほぞうなるやうなれば、こよにかくて侍る程ほどに、いかで習ならはし奉たまらむ」  
大將たいしやう、仲忠「いとやすき事ことなり。御書おんがを仕つかうまつらむ。その日ひと仰おほせごことを」藤  
壺つば、あて宮「手てなどもまだ習ならひ給はざるを本もとをこそまづものせさせ給はめ。まこと  
(五)

(語釋)

(一)東宮も仲忠に手本をかきてと頼みあるを

(三)犬宮

(四)からもりの物語は竹取物語とならびたる古き物語なりしと見ゆ。その物語の主人公なるべし

(五)などとしてなるべし

(六)涼の奉りたる

(考異)

(二)使がら書かむものぞ一使がらか見む

(七)つなぎて一つなぎつ

(六)あて宮等涼の贈物及殿内を見る。涼堀川の邸に移る。

や、宮みやにも「書かきてと聞きえ給たまひける、そどのかし聞きえ奉たまれよ、使つかひがら書かかむもの

ぞ」と宣のたまひしを、賜たまはりて奉たまらばや」大將たいしやう、仲忠ちゆうちゆう「いと怪あやしく、異こと様なる物ものをぞ

召めすや。はやく書かきてさふらひたれど、つよましようてえ參まゐらせ侍はべらず」と聞きえ給たまへ

ば、あて宮みや「早はやう奉たまり給たまへとぞ。この頃ころは待またせ給たまふとなむ」大將たいしやう、仲忠ちゆうちゆう「さらば、

とまれかうまれ、今いま參まゐらせ侍はべらむ。若宮わかみやの御料れうには、たゞ今いまも侍はべりなむかし」と聞き

え給たまふ。藤壺ふたば、あて宮みや「今いまさるべからむ時に聞きえ侍はべらむ。その日ひも取とらせ給たまへ。さて、

かの人ひとに見みせ給たまはざんなる人ひとはこよにいつしか。疾せくとこそ思おもへ」大將たいしやう、仲忠ちゆうちゆう「い

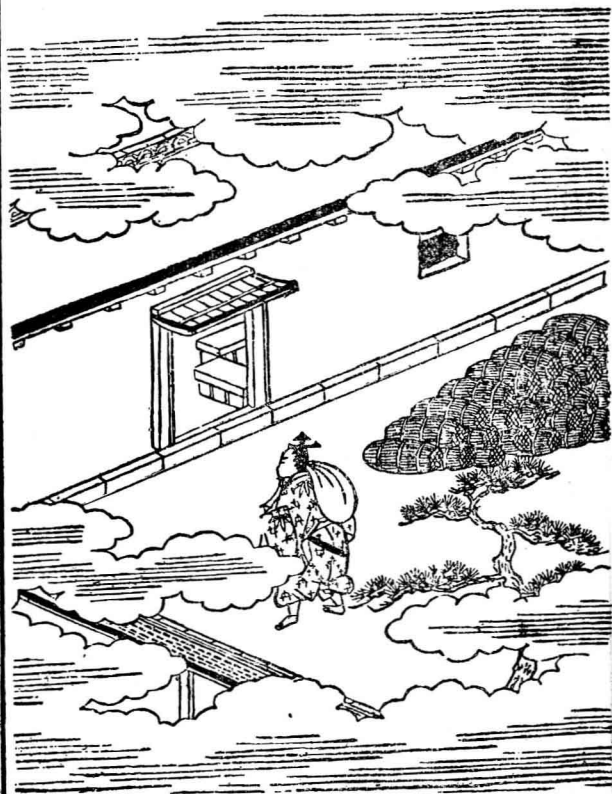
さや、まだきよりいと見憎みにくけなめれば、からもりがしたりけむ様やうにてぞよけなる

や」などて、仲忠ちゆうちゆう「さらば静しづかに、かのからもりを率あて參まゐらせむ」とてかへり給たまひぬ。

かくてその日暮ひくれつ。つとめて今日けふよき日ひなれば、かの小辛こからひつ櫃つをあけて見み給たまへば、

銀しろかねに塗ぬりものしたる鍵かぎども多おほくさしつなぎていと多おほかなる中に、見み給たまへば、源中げんちゆう

納言なごんの御手てにてあり、



(語釋)  
 (二)「見つけ給ひて」衍文  
 歟

(三)大宮も仁壽殿も

(四)「笥には甌具しつゝ」  
 歟

(考異)  
 (一)「と一ナレ」

涼君がためと思ひしやどの鍵を見てあけくれなげく心をも知れ

と有り。見つけ給ひて、北の方見給ひて、うたてありと思して、かくし給ひつ。北

の方、今宮殿の中など、今日御覽ぜよ」と宣へば、宮も此の君も今日出でさせ給

はむずればとおほして、立てたるかうの辛櫃ども、いみじう清らなる十ばかりあ

り。あけて見給へば、萬のたから物、きぬ、綾など様々にあり。又、さまざまな

る物に入れつゝ、さらぬ物もいと多かり。外には、三尺の沈の御厨子、淺香の四

尺の御厨子二よろひ、萬の男女のつかひ給ふべき調度ども、ありがたき清らにて、

數を盡してあり。すべてよろずの調度などあり。六尺ばかりの金銅の蒔繪の厨子

四つ、それに銀の御器調じ、よろづの調度銀にてしすゑたり。今かたへには、

さまざまの物どもいと多かり。このおとどの西に七間の檜皮葺にてあり。左右の

渡殿あり。御厨子所には、その西の屋をしたり。そこには銀の碗二十ばかり、

ちひさきなどおなじ。けにはこしきくしつゝ、その具ども、いとめでたうてあり。

(四)



(語釋)

(三)涼の上京當時より奉  
ちんと言ひ居たりとの意  
歟

(四)今宮の生める男子

(七)女子も生るべきもの  
を

(考異)

(一)いとーナシ

(二)給ひつるー給へる

(五)とするーとやとやナ  
る

(六)いちへーいさや

(八)給ひなむー給はむ

(九)になくーよく

北きたの外げに倉くらどもあり。その倉くらには使つかふべき物ものどもいと多おほかり。その倉くらの前まへに十一間けん

の檜皮屋ひはだやあり。それは納殿なまどのにて、米よねよろづの物ものを納なまめたり。かよれば藤壺ふぢつば、あて宮みや思おも

ほえず富とみをもせさせ給たまひつるかな。あなう君きみよ、あひなだのみして居眠いねぶりし給たまはむ

に」北きたの方かた、今宮いまみやなどか、さも眠ねむらまほしうなむ。この三條さんじょうといふ所ところは、まだ京みやこにも

上のぼらざりける時とき、設まうけたりけるとかや。此このあめる物ものの具ぐぞ、すなはちよりいふめ

る。されば、あひなだのめにもあらじや」と聞きえ給たまへば、あて宮みや「まことや、などその珍めづ

し人びとは。それもや、何なにならば隠かくし給たまはむとする」いらへ 今宮いまみや思おもふ様やうならずとて憎にくむ

めれば、こよにも「見苦みぐるし。女をんな兒ごならましかば、若宮わかみやに奉まもらましもの」とぞ言いふや」

と聞きえ給たまふ。藤壺ふぢつば、あて宮みや「あちきな。後のちにさるも有ありなむものを」など聞きえ給たまふ。

日暮くれぬれば、曉あかつき源中納言殿げんぢゆうなごんごのわたり給たまひなむとす。御車くるま二十にじゅうばかり、御前ごぜんい

とになく設まうけられたり。いと装よそほしうてぞわたり給たまひぬ。この殿どのは、堀河ほりかはよりは

東ひんがし三條さんじょうの大路おほぢよりは、北二町きたに、吹上ふきあはのつほ造つくりみがきて、よろづの調度てうどはかた

〔語釋〕

(一)我が御殿へ歸らんとて

(二)「などとして」なるべし

(三)季明邸

(四)季明の遺骸を葬りて

●季明の葬送

(五)昭陽殿

●あて宮文を實忠に贈る。實忠の返事。

〔考異〕

(六)かくてりやうのーナ

(七)薄らかなる一紙のナ  
くよかなる

山に積みたる様にておはす。

かくて三日過ぎぬ。女御の君、大宮、わたり給ひなむとて、大宮、仁壽「かくて徒然

とは。彼處にしばしわたり給へ。年頃の物語も聞えむ」と宣へば、あて宮「いま」な

どてわたり給ひぬ。藤つほ、源宰相とふらはむと思す。

かくておほき大殿には、二月二十七日の程に、とかくし奉りて、殿にみな集り

給ひて、土殿して、男君たちはおはし、宮の君は、御局しておはす。

藤壺はおほいとこの御方にわたり給ひぬ。此西の對には、人々おほくさふらふ。

かくてりやうの鈍色の紙薄らかなる一かさねに書き給ふ、

あて宮年ごろ、覺束なきまでに、なかはそれよりも。時々は、いと哀に思ほし忘

れぬやうになむと人の物すれば、思はずに心長くもと承りつる程に、いと

もく哀になしき御思を、いかにくとなむ。いと怪しう御宮仕を怠り

給ふべかめる様なるをだに、いといとほしと思ひ給へるものを。

木隠れてすむときよつる山川になど藤波の袖にたつらむ

世の中のはかなきにつけても、よろづ思う給へらるよ。

(語釋)  
(一)これはた也

(二)實忠が

(三)の「衍文なるべし

(考異)  
(四)なりやーなるか

相に定かに奉れ」とて賜へば、よろこびて持て参る。かの御方の人は、皆見知りたり。殿にうちはへものし給ひて、兵衛の君かたらひ給ひし時は、これを使にてぞ、御文通はし給へる。

藏人、かの君の近く使ひ給ひしさふらひの人に、これはた、「これ、さだかに参らせよ、となむ仰せられつる」とて取らすれば、侍「いみじう思し嘆くに、この御文を御覽せば、すこし思し慰めてむ」と喜びて物も聞えで奉れば、實忠「何處よりぞ」侍「知らず。参らせよとて人の申しつる」と申す。ひき開けて見給ふ。かの御手なれば、見はてで、泣きに泣き給ふ。民部卿の、實正「藤壺のなりや。賜へ。見給へむ」い

〔語釋〕

〔二〕あて宮が密夫の許へ  
音信せりとなり

〔五〕祐澄

〔六〕あて宮が

〔七〕などとしてなるべし

〔八〕よろこび「衍文なる  
べし

〔九〕侍るにしも「歌

〔考異〕

〔一〕聞き給ひて―見給ひ  
て

〔三〕斯う―斯く

〔四〕して―て「ナシ

〔一〇〕侍るべければ―侍  
りければ

らへ、實忠「まだ見給へずや、目も見え侍らねば。親と聞ゆるものは、おはしまさぬ世にも、御徳嬉しきものなりけり。こよらの年頃、身を徒らになして侍りつれど、音もし給はざりつるものを」とていみじう泣き給ふを、宮の君聞き給ひて、昭陽殿「然言へどもはた、密夫こそとぶらはれためりかし。斯う忍人まうけ給ふめる人をも、二なく思し騒ぐ」と宣ふを民部卿聞き給ひて、實正「いみじう。これ聞き給へ」とてつきじろひて、爪弾をしておはさうず。宰相、實忠「まだ小野に侍りし時、宰相中將ものし給ひたりき。哀にあなること」など、時々宣ふとなむ告げし」などて御かへり書き給ふ、

實忠いと多く珍らしきは、限なくよろこび、かくいみじきよろこびの侍りしにも、今日なむすこし年頃の心地思ひ給へ慰むやうに。さても、

なみだ川袂にふちのなかりせば沈むも知らであらむとやせし

身をすてて思う給へ嘆きつるものを、かゝる折の侍るべければ、身の爲には

（一〇）

（六）

（四）

（五）

（七）

（九）

（八）

(語釋)  
(一)實忠が

(二)實忠が黄金を入れて  
賜りたる箱を兵衛が返し  
たる事前に見えたり

(三)「來たる」なるべし

いみじき事のあらむのみこそ、と思ひ給ふるも且は心憂くこそ。たまさかに、  
里におはしますなるを、今忌過ぎ侍りなば参り來て、今日のかしこまりも、  
喜も聞えさせむ。例の様になもてなさせ給ひそ。今はたゞ狹しといふなる  
路一つを。

などいと濃き鈍色の紙に書いて、いとおもしろき八重山吹につけたり。この御使  
に何わざをせむ、と思しめぐらして、兵衛の君のかへしたりし箱の、外にありけ  
る、金入りながら取りに遣はして、鈍色の紙につよみて、その紙に、  
實忠この箱は君に譲らむわが身にはけふとふ人にますらのぞ無き  
ながき心。

と書きて、實忠「この御使は誰ぞ」と問はせ給へば、「童名これこそと召しよが今は  
宮の藏人に侍るなむ参り來たり」君、實忠「むかし睦じかりし人、思して賜へるに  
こそありけれ。こよに忍びてたち寄れといへ」と宣へば、簀子も無き、蔀にかと

(語釋)

(一) 季明の死したるを云ふ

(三) 御頼申すべき人もあれば

(考異)  
(二) 思う―思ひ

(四) いくよ―よ―ナシ

(五) いかでか無慙の人は―いぢへかばかりの物は

① 實正兄に背あて宮を見し時の事を語る。東宮より開陽殿へ御文。開陽殿の狂真。

れる所なりければ、そこに物越にて宜ふ、實思いと珍らしく嬉しき御使に、も

のせられたなれど、かく人にも見えで籠り侍れば、對面せず。忍びて、妹の君

して申させ給へ、御文には、物もおほえねば、ことごとくにも聞えず。今必ずまる

り侍らむ。制し給ひし人もおはせねば、今は山林にも深く入りなむと思ふ給ふる

を、聞えおくべき人の上など侍るを、昔のやうにはな思しそとなむ聞えつる」と

申し給へ」と泣くく宣ひて、實思「これは、たどならぬ折ならましかば衣をも脱

ぐべきを、年頃行ひ出でたる佛舍利なり。いくよなるまでこそは、山籠りは」とて

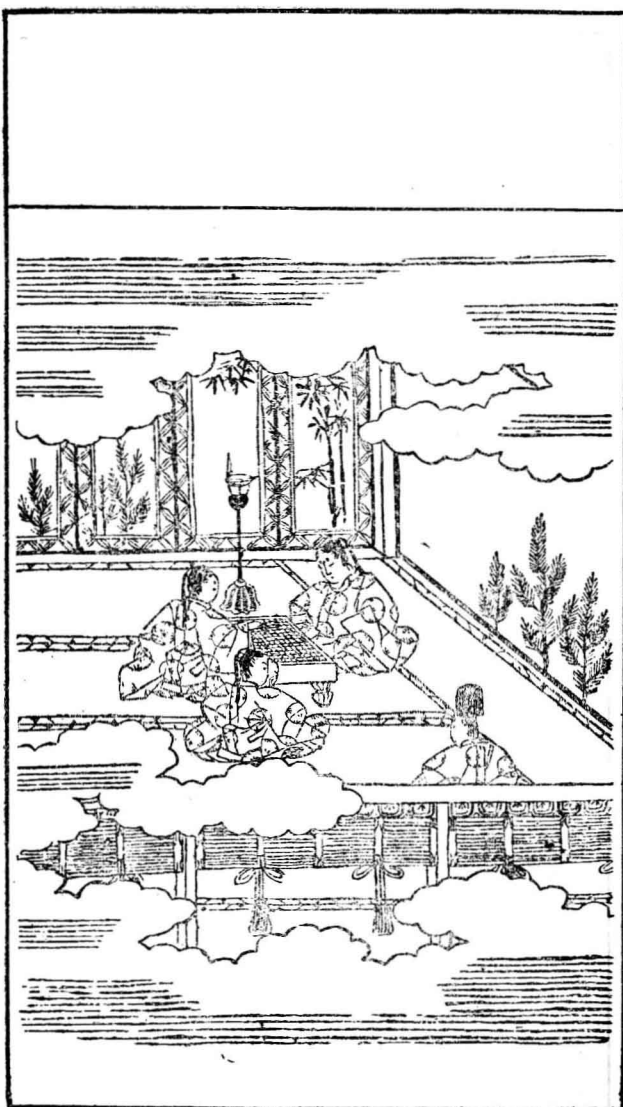
賜へば、これはたいかでか、無慙の人は、賜はりて失ひ侍りなむ。いと恐ろしき事

と聞ゆれば、實思「よに侍らざらむかたみにし給へ」とて取らせて入り給ひて、御

齋参りすゑたれど聞食さず、いみじう泣き居給へり。

民部卿、實正「昔いかなる契をなし給へる人なれば、この御爲にかよる御心あらむ。

音にのみ聞く人をば、斯くしも思はぬものを。物越にても、物聞えなどやし給ひし」



(一) 語釋  
 (一) 入れたりし」歟

(二) 女一宮とあて宮と

(考異)

(三) 然がりし」塞がり  
 し

(四) いさまやうらへ

(五) あて宮を其様に無類  
 の美人と見しは最なり

(六) 我が妻にし居る三の  
 君は

(七) こそは」はしナシ

實忠「なほ然るにこそ侍るめれ。かの殿に侍りし時、兵衛の君に、御聲をだに聞かせよと責めしかば、中の大殿の東の簾と格子との間になむ入りたりし。格子の穴あり。あけて見しかば、母屋の御簾をあけて、火を前にともして、この大將の君のえたまへる御子と、碁なむ打ち給ひし。さては琴弾きなどなむ。それを見しまよに察がりし胸なむ、まださながら」民部卿、實正「さて如何有りし。いづれか優りて見え給ひし」(四)「いさまや、かの御子をば委しくも見奉らず。思ふ人をのみ。更に又よに類有るべうは見えざりし人なり」實正「けに斯く名だたる人は然りけむかし。こよに持給へる人は、擇り屑にこそ侍らめ。それも人よりはよろしかめるを、などかは然見給はざらむ。よくもおし開けて入り給はずなりにし。斯くばかり思はむ人をば、然てこそはおはせめ、かくて歎きおはするよりは」宰相、實忠「人のゆるさぬ人に、さてしもあらませば、今は爲なまし。見ざらましかば、なほ世の中に交らひ侍りなまし」民部卿、實正「かう幸のものし給ふべき人なれば、然しも給は



(語釋)  
(一) 昭陽殿

(二) 「思ひしを」なるべし

(考釋)  
(三) とぞとて

すなりにたるぞ」など宣ふ程に、東宮より宮の進を御使にて御文あり。喜びて見給ひて、聲をはなちて、昭陽殿わが親の今々とし給ひしまで、「我はきんちを思ふにぞ、冥路もえ往くまじき、宮仕に出だして、人數にもあらず、かよる折にだに哀とも宣はねば、おほろけに憎しとおほすにあらざめり。かよるを見棄つること、如何様に惑はむすらむ」と泣くくかくれ給ひにし。吾が君、今日の御文を見せ奉らずなりにし。かくぞ宣へる。天翔りても見給へ」と泣きのよしり給ふ。民部卿、備五如何様なる御文ぞ。賜へ。見給はむ」と聞え給へば、さし出で給へり。見給へば、

東宮いと哀にかなしき事は、聞きしすなはちと思ひし。忌むなど人のいふ日過さむとてなむ。いかに程經るまよに心細くとぞ。何か然しもとぞ。(二)

頼みけむ人はなくとも我だにも世に經ばいたく嘆かざらなむ(三)

あやしく、睦ましかるべき人に疎く思はれ給ふめれば、昔、人のし給へれば

(勅釋)

(一)季明

(二)あて當に對して不平ありともの寃歎

(三)我々兄弟が宮の君を擧げずと

(八)亡き父に

(老異)

(三)思ひ給へずとも一思ふべからむに思はす一思ふ

(四)貴き女…それこそや一かるきめはふるめぞや一みそかをとこぞともそれかぞや

(五)世に人は一よるべは

(六)少し一うち

(七)とぞ一とや

こそ、見譲りても。今よりはなほかの人の心ゆかず思ひ給へずとも心をさめて物し給へ。さて平かに世にあれと思ほせ。(二)

と書き給へり。これかれ見給ひて、「あないとほしや、おのく願みずと思したるにこそあめれ」宰相、實思「いでや、心肝をまどはして思ふ人は、宮もになうおほすなる、實き女ぞかしこき女なれ、みそかごとどもそれこそや」など宜ふ。「いかでかよしとしも思はむは、これは今よりは、世に人はとふらひこそは」などさよめき給ふ。宮の君に御文かとせ給ふ。(四)

昭陽殿長まりて承りぬ。あさましういみじき目を見給へて、思ひ給へなけきつるに、いと嬉しき仰せごとを承りてなむ、少し慰み給へる。いでや、昔の人の夜晝思ひ給へなけきし身を、如何様にとぞ。(六)

見し世にぞかくも言はまし嘆きつよしでの山路をいかで越ゆらむ今日の御文を見せ侍らましものを、とぞ思ひ給へ侍る。人の爲によからずと(八)

〔語釋〕

(一)これこそ

(三)兵衛よりかへされたる儘に仕舞ひ置きて終に兵衛の弟にやりたる事上

(四)給ひつちむゝなるべし

(七)銀線を結びあはせてつくりたる籠の如きものか

●あて宮の使復命。東宮よりあて宮に御文、御返事。

〔考異〕

(二)宣ひつる事など一宣へる事を

(五)いかなーナレ

(六)銀のむすび物どもを一銀黄金のむすび物などを

宣のたまはせたるは、身みの人数ひびかずに侍はべらねば、親同胞おやはらからの思おもひあなずり侍はべるまよに、幼せうな

き心こころは思おもひむつかり侍はべりしなり。今いまは何なににつけても願かへりみさせ給たまはずば、親おやの

面おもてをも、君きみの御面おもてをもふせ侍はべるべき身みにこそは。

とて奉たてまつれ給たまひつ。

〔畫詞〕 ことはおほき大殿。

かくて藤壺ふぢつぼの御使つかひは、歸かへり参まゐりて御返奉かへりたまらせて、人ひとも無なき折せりなりければ、侍はべりつ

るやう、宣のたまひつる事ことなど委くはしく申まうして、有ありつる箱見はこみせ奉たてまつれば、あけて見給みたまふ。

書かきつけたるものを御覽らんじて、あて宣のたまひ「これは見みつや」とて賜たまふ。箱はこには黄金こがね一箱ひとこあり。

君きみ、あて宣のたまひ「心深こころふかきことはた、又はまたあらじかし。これを置おきて、この族うぢに遂つひに取と

らせ給たまへる。御身おのみに添そへてや持もち給たまへらむ」と宣のたまへば、これこそ「いな。外ほかよりなむ

持もてまうで來きつる」と申まうす。

東宮とうぐうは銀しろかねのむすび物ものどもを毀こぼたせ給たまひて、ほかなる竹原たかはらにして、下したには銀しろかねほ

(語釋)

(一) 照陽殿(文をやりしかば此通り返事し來れり)と返事の文を添へてよこしたる也

(二) 御方のみ(歎、女四宮をいふ)

(四) 經院が

(五) 女四宮を呼ばんと思ふ

(六) 「心ありともや思へば」にて實は義理にせまりてする事なるを女四に心ありての事と思はるゝがつらしとの意なるべし

(考異)

(三) 方のみ一方をむ

(七) よごととに露の—よとに愛のみ

そき緒をむすび、餌袋の様にして、黒方を土にて、沈の筍、つくらせ給ひ、隙もなく植ゑさせ給ひて、節ことに水銀の露すゑさせ給ひて、藤壺に奉らせ給ふ。

東宮きのふ一昨日は、物忌にてなむ。かの訪らはむとものせられし人の許に遣りたりしかば、斯くなむ。ことに心地ありけもなき人も、斯うこそは思ひけれ。これにつけても、院の方のみにとほしく、ゆくさき少けに見え給ふを、

かくてありとのみ聞召すらむを、この頃物せむと思ふ。心ありともや思へば、つよましようてなむ。宣はむにおきて。これは小き人々に持たせ給へとてなむ。さても、

あけゆくときぬき定めぬしのよめに老のよまでもわびしかりしか君には如何。ことには夜晝忘ると時なく、まかで給ひにし後は、まだ寐をなむ寐ぬ。

もろ共にふしのみあかしくれ竹のよごことに露のおきてゆくらむ

(語釋)

(一)あて宮が

(五)女四を召す事は

(七)あて宮の留守中故召されたるならんと女四が思召すとも

(八)嵯峨院が

(考異)

(二)ましーナシ

(三)かゝりなり

(四)さも思すべきーさも

ちほえちはずべき

(六)事はー事も

(九)このーこれは

(一〇)しのもめぞーしのもの

(一一)なむーなむ明暮

ゆく末すゑまだ遠とほき心地こころちのするしそ。

とて、例れいの藏人くらうじんして奉たまれ給たまふ。まだ大臣殿ちじんどのの御方かたにぞおはしましける。これかれ

見給みたまひて、「をかしき筈たかうなかな」とて土つちおし丸まるがしつよ、筈たかうな一筋ひとすぢづつ取り給たまふ。

御返ごへんは、

あて宮うけたまは 承うけたまはりぬ。賜たまはらせたる人ひとの御文ごぶんは、けに(四)さも思おぼすべき事ことに(五)こそは。宣のたま

はせたる事ことは、いとよう侍はべり。さふらはぬ程ほどに(六)と思おぼさるとも、御覽ごらんじ直なほす折をり

も侍はべりなむ。このわたりには、承うけたまはりぬ。いみじうおもほし嘆なげくとあれば、い

いとほしくなむ。はやう聞きえ給たまへ。さてこの、

きぬぐの濡ぬれて別わかれしし(七)のよめぞあくる夜よご(八)に思おもひ出でらるよ

露つゆは、これにはそれをのみなむ、

くれ竹たけのふしにはあらでかよる身みの露つゆ路ぢのよのみも嘆なげかるよかな

とて藏人くらうじんに、あて宮うけたまはかたみにだに」とて、單ひとへの御衣ごえに、小袿こうちきかさねて賜たまふ。

●あて宮袋が殿殿へ歸らんとす。實忠の噂。仲忠の噂。忠澄等兄弟交代にあて宮の爲に宮直せんとす。あて宮歸る。

(語釋)

(一)前に懸懸せし男どもが目をつけてよき折ぞとて入り來らば如何せん  
(二)我が深窓に居し時こそ人前の女かと思ひて懸想する人もありしならんが  
(三)あて宮を迎ひにゆきし時の事をいふをるべし

(考異)

(三)斯う言はるれば一かうさかりて萬の人一かうさかりて萬のはずなどにもかくまさなく言はるれば萬の人

(四)いらへん

かくて大殿の町は、ことに面白き事はなくて、またくいかめし。おほん方々、東の一の對に右大辨、二の對に、二かたにて藏人の少將、大夫の君おはす。さては他人の曹司。君たちは、殿におはせし時はさしもあらざりしかど、里にては人々参りつどひ給ひて見え奉り給へば、いと騒がしとて、藤壺、あて宮、今はあなたに歸り渡りなむ」と聞え給へば、大宮、「いかでか、然ばかりひろき所には。物言ひさしたる人々の、みな見置きて、かゝる折とてはしり入り來ば如何。斯うなくても人によからず思はれ給へれば、名を立てむとて、腹きたなき心つかふ人もあらむ。いとうしろめたき事なり。なほ狭くとも此處にを」と聞え給へば、あて宮「誰か心おきては。廿日、御子にて、かくも見えざりし時こそ、もし人の様にもやとて。斯うさかりて下司などにさへまさなく言はるれば、聞き疎みにたらむものを、宰相の中將、見え給へど、大宮「殊にかたはならぬ人はそれしもこそ」いらへ、あて宮「かたはなりと見ゆる人もあらむ」おとど 正頼「何かは、おのれをも、かの人どもをも、

(五)

(論釋)

(一) 實忠

(三) 實忠と同じ心なるに

(考異)

(二) 知ればこそ人ならぬ  
— 知ればよそ人ならぬ —  
知ればこそ上人ならぬ

(四) 見ゆるなし — 見ゆる  
ことなし

勘事せられしにこそ、いと面目有りしかど、心々に言ひてさわがれ給ひしこそ、  
 思ふときには面だたしかめれ。なほ人に言はれむ事はつよましや、「藤壺 みて宮」さ  
 ても、然るべき人は誰かは。さもやと思ふべき人は、ありきすべうもあらざる  
 を。かの人こそ、いとほしうは聞き侍れ。一日、とふらひに遣はしたりしかば、い  
 みじう喜びて、(二)「今は心にまかせて、野山にも入り、法師にもなりなむ」とぞ言ひ  
 ける。さらむ志を思ひ知ればこそ、人ならぬものだにも、物思ひ知るものな  
 れ」と宣へば皆人いとあやしと思ふ。(三)左衛門督の君、忠直「この族を離ちて、世に  
 ある人は、みな然る心のみこそは。この君しも、かく見え奉りたるぞかしこきや」  
 藤壺、あて宮、思ほえぬかな。年頃より言ひはじめて、今に忘れざんなる人は、誰か  
 は。はかなき文などは、あこきなども數多書くめる」大宮、「志うしなはぬ人は、  
 あまた聞ゆや」藤壺、あて宮、今は誰も然こそは。ことには然見ゆるなし。はかなき  
 宮仕をして、ゆよしき人々のことどもを聞く時は、あぢきなや、志有りし人に

〔語釋〕

(一)仲澄の事をいふ也

(二)かく入込の處には居られ給はじ

(三)あて宮の方に宿直せん

(四)あて宮を

(五)「なかの君」にてあて宮は我々の主君なりといふ意なるべし

(八)生るべき梨壺腹の皇子に對して兼雅をいふ歎

(九)仲思

〔考異〕

(六)何に斯うは―何しかそは―何かそは

(七)さしも―さても

つきてもあるべかりけるものを、さりともかく言はましやは、と思ふ折は多かる。

又も心憂くかなしと思ふ事ありや」とて泣き給ふ。大宮、宰相中將は、知り給

へば、いと悲しと思す。こと人々は、何事とも知り給はず。あて宮「世の中を知らざ

りし時は、よろづの事心にも入らざりき。今思へばこそ、哀にも悲しうも」と宣

へば宰相中將、祐澄、ゆに斯くおほぞうにてはえおはせじ。祐澄等よりはじめ

て、二人づつ、かの御方の宿直仕らむ。行くさき、自らよりはじめて、男女子

どもまで、たのみ奉り給へれば、このなか君にこそは「藤壺、あて宮」あなうたてや。

何に斯うは。梨壺物し給ふめれば、男にてあらばさしも。四の宮の御許へもまう

で通ひ給ふべかなれば。この程にさる事あらば、それこそは世の中定なければ、

必ずとも思はず」おとど、正頼「梨壺は、さしも知らず。たど今、世は右大將親子の

御世になりなむとすめり。世の人はおちおとど、わが身よりはじめて、皆靡きは

てにたり。それはかの君のおしたち悪きにもあらず。自然に恥かしきによりて、



(語釋)

(一) 東宮

(二) 梨雲腹の皇子を太子  
にと申さば

(三) 「后宮は」歟、后宮は  
兼雅の同胞也

(四) 誤あるべし

(五) 仲忠が

(六) ちて宮腹の一の皇子

(七) 仲忠が

(九) 我が子ども仲忠に  
願きたるを見ずや

(一〇) 宿直の番に

(一一) 誤あるべし、「礼う  
ちて」歟

(一二) 近澄

(考異)  
(八) べうもーやうも

人の心をつかへば、靡く様なるなり。宮は内裏にしたがひ奉り給ひ、内裏は右大

將にかなひ給へば、かの主たちもちて之をと申さば、何の疑かあらむ、われも口

開くべくもあらず。中宮はおはします、故郷はみな足未なり。例はさる筋にもあ

らず」宰相中將、詰進いと不便なる事のみ聞え侍れ。天下の御子うまれ給へり

とも、然る心あるべき人か。その中に、若宮をばいと志深く思ひかしづき聞え

給ふものを。この子口、御前の物調じて、もてあそび物七寶を盡して、し設けて

こそ。装束いとうるはしくて、賄しつゝ、手づから参り給ひしに、さる物から、

よの覺おもしろとある人なれば、いさよかに僻みたる心つかふべうもあらずめり」

おとど、正頼「まづ見給へかし。この人どもも、ようこそは靡きたためれ」と宣ふ。

左衛門督、忠澄「なにかこの番に、忠澄等を入れられぬ。こよにもせむ」と宣ひて、

忠澄「宮あこの侍従、いかに御方のふたうして行へ。藏人は入れじ。宮づかへ忙が

し。この御館は、一人をば忌まむやは。二人づつ六番に結ばむ。彼方になほある

(附釋)  
 (一)「させ」衍文なるべし

(考異)  
 (二)御名―御判―御對

(三)兄ともいはず勸當し  
 ―勸當せしめ兄ともいはず

(四)思ひてこそ―思ひて  
 にてこそ

人どもは、番々に入れつよ、この番缺かむ人は一日の變殘さず仕うまつらせさせむと書き給ひて、御名して、宮あこぎみに、「これ預りておはせよ。御前の柱に押して、缺かむ人をば、兄ともいはず勸當し責めせよや」と宣ひてとらせ給へば、喜び取りつ。宰相の君、祐置さらば、これかれ侍る時わたらせ給ひぬかし」と聞え給へば、あて宮「いとなやましく侍れば、安き臥し起きもせむ」とて、あて宮「今又も参り來む」とてわたり給ひぬ。御車には四位、五位、ありとある人、ふさに付きて、引きに引く。若宮二所乗り給へり。君だちうち群れて送り給ふ。

かくておとど、正賴「あやしく、藤壺のいかに思ひてものしつる事ぞや」大宮、「有る様あめり。めにちかう心かはりて有るを、思ひてこそあめれ」おとど、正賴「かたき事かな。いみじうすまひしを、公私居立ちて、強ひてしたるをば」宮、大宮「なほそれぞ。宮仕せさせて、さてもなどは思はれたりける。かく、琴彈き、あそびなどするを、若き心に羨ましと思ふなるべし」おとど、正賴「今犬に琴ならはさ

●あて宮の假御殿・仲忠  
 約東の手本をあて宮に奉  
 る。あて宮原宮と文相答  
 ありて宮の壁を結ぶ前にて  
 侍女等實忠の姉・孫王  
 の君・兵衛、木工等の容  
 貌性質

〔語釋〕  
 (一)「淡まむかし」歎

(二)涼は

〔考異〕

(三)送れど―送れとば

(四)などは―なれば

む時に、さらば羨むかし」などみそかに宣ふ。

かくて藤壺のおはする町は、いと面白し。遣水のほどに、八重山吹の高くおもしろき咲き出たり。池のほとりに大きな松に藤のかよりて數多あり。すべて春の花、秋の紅葉おもしろく、時々の前栽、草木もいとをかし。遣水に瀧おとし、岩立てたる様なども他處には似ず。かゝる事好み給ふ人なれば、暫しなれど面白うし置きたり。此の西の對は、暗き闇にも照り輝きてぞ見ゆる、世のつねの調度をつかはねば。寢殿は清涼殿の様を造れど、例の調度などは例の所の様なり。それは二方にしつらはせ給ひて、東は若宮の御方、めのと四人、童、下仕二人づつあり。皆有るべき所々、せさせ給ひて、東の一の對をさふらひ、藏人所にしたり。方々しおき給へる所々に、あたりく、政所より始めてしたり。東の二の對は、宮あこの侍従、二の御方、寢殿の西面は、二の宮の御めのと、人々あり。西の對は、二宮の御方のさふらひ、藤壺の御さふらひ、これにはやんごとなき四位、五位、い

と多く参り仕うまつる。次の對は藤壺の御方の親族たちの御曹司、西の廊はおしなべての人の曹司。御門は東南にあり。かく廣けれど、なほ狭く住みなし給へり。宿直の君たち、夜毎に檜割籠、らうある物ども調じて、御前にも臺盤所にもまゐる。

かよる程に、「右大將殿より」とて手本四卷、色々の色紙に書きて、花の枝に付けて、孫王の君の許に御文してあり。

仲思みづから持て参るべきを、仰せごと侍りし宮の御手本、持て参るとてなむ。これは、若宮の御料にと宣はせしかば、習はせ給ひつべくも侍らねど、召侍りしかばなむ急ぎ参らする、と聞えさせ給へ。さて御私には、何の本か御要ある。此處には、世のためしになむ。

とて奉れ給へり。御前に持て参りたり。見給へば、黄ばみたる色紙に書きて、山吹に付けたるはしので、春の字、青き色紙に書きて松に付けたるは草にて夏の字、

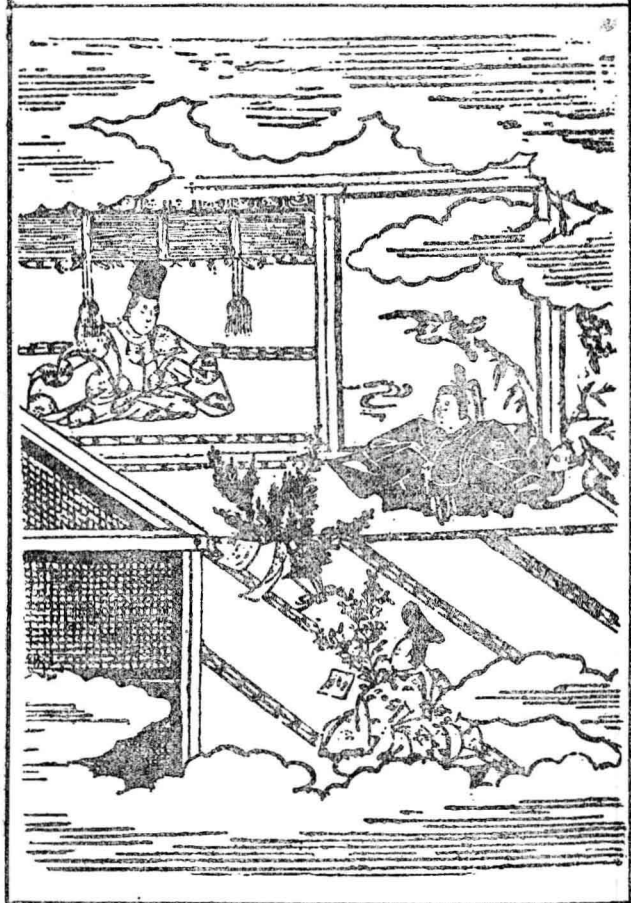
〔語釋〕

〔一〕「し」は「置」の手

〔考異〕

〔一〕本か一本をか

(三)



(語釋)

(一)「あめつちはしそら云々」といふ文にて此頃の  
の手續のはじめに兒童の  
ならひしもの

(四)墨に澄みをかけたリ

(考異)

(一)あめつちぞーあつめ  
かきてーあつめてかき

(三)髪へて書けりーかき  
かへてかきたり

(五)うとからじーうとい  
ふらし

(六)知らすればー知らす  
れど

(七)心をー心にー心あり  
るなよ

(八)わするなよ君ー君忘  
るなよ

赤き色紙に書きて卵の花に付けたるは假名、はじめには男手にもあらず、女手に  
もあらず、あめつちぞ。その次に男手、離ち書きに書きて、同じ文字を様々に變  
へて書けり。(一)(二)(三)

仲思わがかきてはるに傳ふるみづくきもすみかはりてや見えむとすらむ  
女手にて(四)

仲思まだ知らぬ道にぞ惑ふうとからじ千鳥のあともとまらざりけり  
さしつぎに、(五)

仲思とぶ鳥にあとある物と知らすれば雲路はふかくふみ通ひなむ  
次に片假名、(六)

仲思いにしへも今ゆくさきも路々に思ふ心をわするなよ君  
葦手、(七)(八)

仲思底きよくすむとも見えて行く水の袖にもめにもたよすもあるかな

(附釋)

(一)「手をしみ給ふ人の」なるべし

(三)孫王の君をいふ

(四)かゝる使をかへすには無闇にせぬ様に注意せよ

(五)古今集「玉ぼこの路は常にも惑ひなむ人をとよとも銭かと思はむ」

(七)あて宮腹の皇子たちをいふ

(八)「御私には」とありし條の返事なり

(考異)

(二)物せしを―物せしに

(六)聞ゆ―聞え

(九)後に―あと―何とか

(一〇)奉り―奉らせ

(一一)奉れつ―奉りつ

といと大きに書きて、一卷にしたり。見給ひて、あて宮「いとほしくよろづの事に手  
 をえみ給ふ人の、様々に書き給へるかな、一日、たはぶれに物せしを。宮の年頃  
 召しつるも、今日こそは奉らるゝなれ。此の返事は我せむ。使は誹ぞ」と問はせ  
 給へば、孫王奉り置きてまかりにけり」と聞ゆれば、「いと心地なき所の人かな。  
 彼よりかゝる物あらむ使やる、心せよ」と宣ひて、白き色紙のいと厚らかなる一  
 かさねに、

あて宮賜はせためれど、「人をとふとも」と言ふなればなむ。此の本どもを、かく  
 (五)

様々に書かせて賜へるなむ、限なく喜び聞ゆ。なほ此の人々は、御弟子にし給  
 (六)

ひて、これならぬ事も知らせ給へ。誠に後にもとめられたるは、何事にかあ  
 (七)

める。我ならぬ人にやと思ふこそうしろめたけれ。  
 (八)

と例よりめでたう、墨つきて、大きやかに書かせ給ひて、あて宮「これ、また心あら  
 (九)

む者して奉り置きてかへり來ね」とて奉れつ。  
 (一〇)

かよる程に宮より御文、

(語釋)  
(一)前のあて宮の返事に  
いへる事也

(二)其方へ行きたしとも  
思へども

(三)女四宮の方へ行き  
たり也

(五)女四方

(六)女四が東宮へ

(七)「うち」は「うへ」歟

(八)「なむ」衍文歟

(九)「参りうき」歟。一本  
「しりたき」

(考異)  
(四)なほ…なりてばをさ  
しナレ

東宮日頃は如何となむ。されば、「夜の間に」とかありしかば、頼めてもと言ふ

なれば、夜毎になむ。そこにもいかでと思へども、然はえせぬ事なりければ、

心にもあらでなむ。彼の物したりし所には一日なむ。いでや、

筑波根の蔭につけつゝ時の間も思ひわするゝ折のなきかな

なほ夜の間には必ず。世の中になくなりてば、をさなき人を如何などおほさ

ば、物の憂くもあらじ。

とて奉り給へり。上問はせ給ふ。あて宮院の御方へは、何時かわたらせ給へりし。

幾度ばかりかまうのほり給ひぬる」藏人、「朔日、うちになむ渡らせ給へりし。さ

ては夜一夜なむまうのほり給へりし。上は、此の頃は、講師口々に参り 御書遊

ばす。夜は夜更くるまで御手習せさせ給ふ」などなむ聞ゆ。御返書き給ふ。

あて宮日頃は、あやしう惱ましうのみ侍りて、如何ならむと心細き心地なむ。まる

(九)



〔語釋〕

(一)他に寵姫のあるをいふ。古今筑波根のこのもかのもに陰はあれど君がみかげにます陰はなし

(二)「けし」は家司歟。一本「けし」の代りに「か侍りける」

りたき事になむ侍りける。夜の間には、さ思ひ給ふれど、聊か動きもせられ侍らねば、人に知られぬまかりありきは難くなむ。まことや、陰につけつよとか。思ひいづる折しもあらじ筑波根のます陰をのみ添ふる身なれば

とのみなむ。一日と宣はせたる事は、いとよかなり。さてのみも慕ひ参り來るものならば、さて心安くは。

と聞え給へり。

又右大將殿より、今朝の御返聞え給へり。

仲忠見えざりける程に、賜はせたりけるは、唯今なむ。みづから参り來て、この畏まりも聞えさせむとするを、今まで御前にさふらひていと苦しうてなむまかでしか。若宮に侍り参るべき志、侍るうち斯く宣はせられたれば、いかでけし、雑役にもとなむ。誠は、世にとまらぬと侍りつるは、何事にか。其かたぐくに、はま千鳥わが袖のうへに見しあとは涙にのみもまづ消えしかな

(四) 詔釋

(一) あて官の御手遊を

(二) 實忠より贈られし黄金入りの箱

(三) 「ば」衍なるべし

(四) 「おと」とは註文の紛れ入りたるなるべし、これはたは兵衛の弟にて實忠より箱をもちひし人も

(五) 實忠

(六) 入内前ならば

(七) 他人の出来ぬ事にはの意歟

(八) 實忠が一人居る

さだかにだにも見給へらすなりにしものを、今日のみこそ。

と聞え給へり。

又の日になりて、上、孫王の君して、御髪參らせ給ふ。御前に孫王の君、兵衛、木工

さふらひて、御粥まゐり、御賄なんどす。兵衛の君の聞ゆる、「昔見給へし箱は、此

の一日見給へしこそ、いと哀に見侍りしかば、孫王の君、「彼の箱なりし物をかけ

て侍りしかば、三千兩こそ侍りしか」兵衛、「二百兩賜ひてき。さては、これかれ皆

賜ひて、これはたおとには賜はずなりにき」上、あて宮「あやしの物數へや」孫王

の君、「かけつれば多かめるをだにこそ。あはれ此の頃こそ昔思ひ出でらるれ。宰相

の君の思ひ惑ひ給ひし事もこそ、つれごとと思ひ出でらるれ」孫王の君いらへ、

「かく里におはしませば、斯かる物もち見ゆるや。内裏に籠りおはしませば、さう

さうしくこそ。此の頃かく離れ住みし給ふを、昔なりせば、如何なる事あらまし」

兵衛、「宰相の君よ人し給はざりしは、一所おはせし御曹司に召しよに、常に參り

(七)

(八)

(五)

(六)

(語釋)

(一)あて宮に

(三)「少將」前に見えず誤なるべし

(七)「上」は「もく」の誤か一本「もて」

(九)即こゝの孫王の君也

(一〇)仲思

(一一)涼

(一二)此孫王の君を親し  
みしかば

(一三)涼に仕ふる妹をい  
ふ

(考異)

(二)あるとて―あなる

(四)いさや―いらへ

(五)まらち―まら

(六)いらへ―いでや

(八)母の―はらから

しが、と聞えよ、かう聞えよとのみこそ。いさよかなる私たはぶれをこそし給は

ざりしか。若き人は然やはある」とて兵衛いでやかく聖になり給ひける」少將「何

かは私事も言はぬ。されど、人こそ耳に聞き入れぬ」兵衛「いさや、まらちが恐し

ければにやありけむ、聞かでこそ止みにしか」孫王の君いらへ、「まめ人もなきも

のぞや」上、「然かし。君のみこそは」と言ふ。此の孫王の君の母の帥の君は優に

ざれたれば、此の源中納言殿の渡り給ひぬれど、あざれていと畏まらず。女子は三

人あり。大い君はこれに、中の君は大將殿の孫王、三の君は源中納言殿の孫王、

此の御方の、昔容貌なんどよくて、髪長にあまりて、物々しう清けなる人の、心

にくよ心 有るなり。右大將むかし思ひて語らひしかば、それをのみ思ひて、よき

人君だち宣へど、耳にも聞き入れず、君の御身に添ひて、御前片時去らであり。

紀伊國のをば、萬に勞りて、局なる童 おとな、下 仕まていたはる。大將も忍

びてをかしき様にて、物志しなどし給ひしかど、宮の御上参り給ひし後は然も

〔語釋〕

(一)女一宮と女二宮女三宮なるべし

(二)あて宮の假御殿へ

(五)我が生家にすみなれての意歎

御女一宮、女二宮女三宮を伴ひてあて宮を訪ふ。仲忠母子の琴の聲、髪の長さを較ぶ。孫王の君姉妹、上野宮の吟をす。

〔考異〕

(三)なれば―ければ

(四)つゝみて侍りしつゝみつる

あらず。兵衛の君は、兒めきたる人の、髪長に一尺ばかりあまりて、いといたうはやりざれたり。木工は、ふくらかに、愛敬づきたる人の、髪長にて、いとりやうくじき、あこきは兵衛の君に似て、頭つき、姿つき、いとよき程にて、をかしけにて、髪長に一尺ばかり餘りて、いとらうくし。あこ君も、それにぞ似たる。それはいとやはりざれたり。

かよる程に、三月二十八日ばかりなり。一の宮、女宮たち一つ車にて、五位、四位數

知らず、君だちも御供にて渡り給へり。おろし奉りて入り給ひぬ。御装束例のこと。

藤壺は、紫のかいねりの御衣一かさね、薄鈍の張りあはせの御衣奉りて、あて宮其

方にこそ参り來むと思ひ給へつれ。御傍守りの隙なくものし給ふなれば、思ひ

給へつゝみて侍りし程に、いと畏くわたらせ給へるをなむ」と聞え給ふ。女二「ま

もり怖ぢ給ふは如何なるぞ」あて宮「彼の家をならひて、知らぬ人と時々は交るひ奉

りて、さては徒然と眺め侍るを、いとこそ怪しけれ。宮仕心のくとは、何をか

〔語釋〕

(一)ありし人歎

(二)なぜ鯛子を連れて來給はぬぞ

(五)仲忠が

(六)女二女三をいふ

(七)仲忠の

(九)仲忠が我子を友だちにして

(一〇)犬宮の生れし時仲忠母子がひきたる琴の音

〔考異〕

(三)給へるぞ」ぞ」ナシ

(四)いさやーいさへ

(八)然前にーお前に

言ひ侍りけむ」宮、女「此處にもこれかれ集ひて、男にも女にも、疎からぬどち遊をもし、物語などをもしならひて、さりし人をばいと疎くもてなして、音にも聞え影にも見ざりしかば、恐ろしく恥かしと思ひしものに向ひ居たるは、我か人にもあらず怪しきまよに、昔の戀しく思ほゆれば、すなはちまうで來むと思ひしかど、辛うじてこそ」と聞え給ふ。藤壺、あて宮「などかく、珍らしき人はとどめ奉り給へるぞ。其れをこそ、先づと思ひ給ふめれ」宮、女「いさや、前に伏せてのみ置きつれば」藤壺、あて宮「などて人には隠し給ふぞ。小き程には、このおはしますなどを、皆この中には見奉りしは」宮、女「然前にのみあれば、彼が前には人の物せねばにこそあめれ。かよる物を見ならはざりければ、たどに其を友だちにてぞ籠り居ためる」藤壺、あて宮「いでや、聞えてもく、彼の御時の物の音を承らずなりにしこそ。まかでむと聞えしかど、車も賜はせず、御消息も宣はずなりにしかば、いみじうくち惜しうこそ。内裏の上も、いかで疾く降り居て、彼の人

〔語釋〕

(二) 仲忠が先に彈きたり

(四) 俊盛女の琴は

(五) 仲忠の琴

(七) あて宮を娶にしたり

〔考異〕

(一) ゼヤ―ヤシヤシ

(三) 聲―手

(六) いさや―ちち

に琴彈かせて、聞かむ。呼ばむに物せずば、家に入りて彈かせむ」とさへ宣はするものを。此處にはさる事の侍りけるを、と思ふこそ言ふかひなく妬く。誰か先づは遊ばしけむ。何れの御琴ぞや」と聞え給へば、女「彼の三條にありつる琴ぞや。  
 (二) 子こそ先づあめりしか。親のはいと悲しう聞きしかば、たゞ泣きにぞ泣かれし。  
 (三) それ聞きしまよに、苦しき事もなくて起き居にし。琴の聲の、いと荒々しく恐ろしく覺えて胸なむはしりし」藤壺、あて宮の御琴は然ぞある。清涼殿にて、仕まつり給ひし夜、せめて聞かまほしかりしかば、おとど人々にも泣く／＼責め聞えしかば、あな物狂ほしとむつかり給ひしかど、人々の中に率ておはして聞かせ給ひしを聞きしが、何處に生れにたるところ覺えしか。あなかま、かう聞ゆと宣ひながら、おとどのをぞまだ聞き侍らぬ一宮、女「いさや、其の人のをぞ委しう聞かぬ。いかで聞かむと思へど、更に聞かせず。さて言ふ様は、「そこの御許にあらましかば、此の手はいとよく習はし奉りてまし。此の世には、其處にのみなむ、

(福傳)

(二)思ひもよらぬ女一を  
啓りて

(三)あて宮に對して

(四)「實め給はす」なるべし

(五)「たて」衍文なるべし

(考異)

(一)此の族の一そころの

(六)言よ一言よめる

(七)かねて一かきて

(八)爾といと等し一禮に  
ひとし

此の族の手は弾き給ふべき人は物し給ふ。すどろに、思ひの外なる所にありて、  
 (二)御爲に志なき様に見え奉ること」とて、常にのみぞ言ふや」藤壺、あて宮「あなうた  
 (三)てや。世にも然は。御聞きなしならむ。などかは、かよる便に、夜晝責め給ひて、  
 教へ聞え給はぬ様はありなむや」宮、女「さ言へど聽かず、今、上降り居給ひな  
 むとき、御前にて、何事も手をつくして、仕り聞かせたて奉らむとす。かくてあら  
 (五)せ給ふ御心のいとかしこき畏まりには、斯かる事をだにこそは。其處に參りてを  
 聞け」なんどぞ言ふ」藤壺、あて宮「いみじき事にもあるかな。然侍らむ時は、御消  
 (六)息かねて宣へ。忍びて御供に仕うまつらむ。それをさへはづさせ給ふな。御前に  
 (七)は、行末もあり、彼の音あくまで聞召してむ、犬の御徳に」宮、女「あな久しや」  
 など多くの御物語などし給ひて、女「いで御髪は。こよのは皆落ちぬ」とてひき  
 較べて見給へば、藤壺のは今三寸ばかり優りたり。女「いと等しかりしものを、  
 多くも優り給ひにけるものかな」とて、二の宮のを見給へば、鞋の裾といと等し。  
 (八)

(一) 語釋

(二) 正類

(三) 思雅

(四) 上野宮が木槿の根を

あて宮と思ひてかしづき

居るをいふなるべし。さ

らば此の孫王姉妹は上野

宮のゆかりの者なるべし

(七) 上野宮より

(九) 仲思

(考異)

(一) 御髮「髮」ナレ

(二) 三の宮「ひめ宮

(六) などや」や」ナシ

(八) 物狂はしや」物狂はしや

筋、かよれば、一の宮の御髮(一)にいとよく似たり。すべていと同じ様におはする

が、これは少しふくらかに、氣近(二)きになむ。三の宮はまだ小くおはするが、あて

にそびやかなる御容貌(三)の、御髮長(四)に少しあまりたり。

かよる程に、大殿の御方より、檜割籠(五)、御酒、檜餅(六)など奉り給へり。左の大殿より

は、梨子(七)、柑子(八)、橘(九)、荒卷(一〇)など有り。所々よりをかしき物ども、多(一一)に奉れ給へり。

宮の御供には孫王の君、中納言の君、此處の御前には、孫王の君、兵衛(一二)なり。孫

王たちは物語す。姉君、孫王「われらが宮はなどや、此の下藤(一三)の女(一四)を上とは思した

らむ」中の君、二孫王、更なることかな。一日、それより來たりし人に問ひしかば、

或る人、東宮(一五)にさふらひ給ひしぞ九の君とは申すめれ」と言ひければ、捕へてい

みじう打たせ給ひて、下に籠められければ、更にかけて言ふ人なかなり。限なく

かしづきてぞ置かれたる」姉君、二孫王「あな物狂(一六)ほしや。人聞きこそやさしけれ。

御方のおとどや、かやうの事聞き給ふらむと、思ふこそ面恥(一七)かしけれ」彼の君、

(九)



(語釋)

(一) 仲忠が

(二) 「御子にてそこたち」  
歎。さらばこの孫王たちは上野宮の子ともなるべし。一本「御子そえそこたち」

(三) 我方には姉の孫王が居る事故

(四) 女一が御出になるとの仰せ故同じ事なら御供してと思ひて

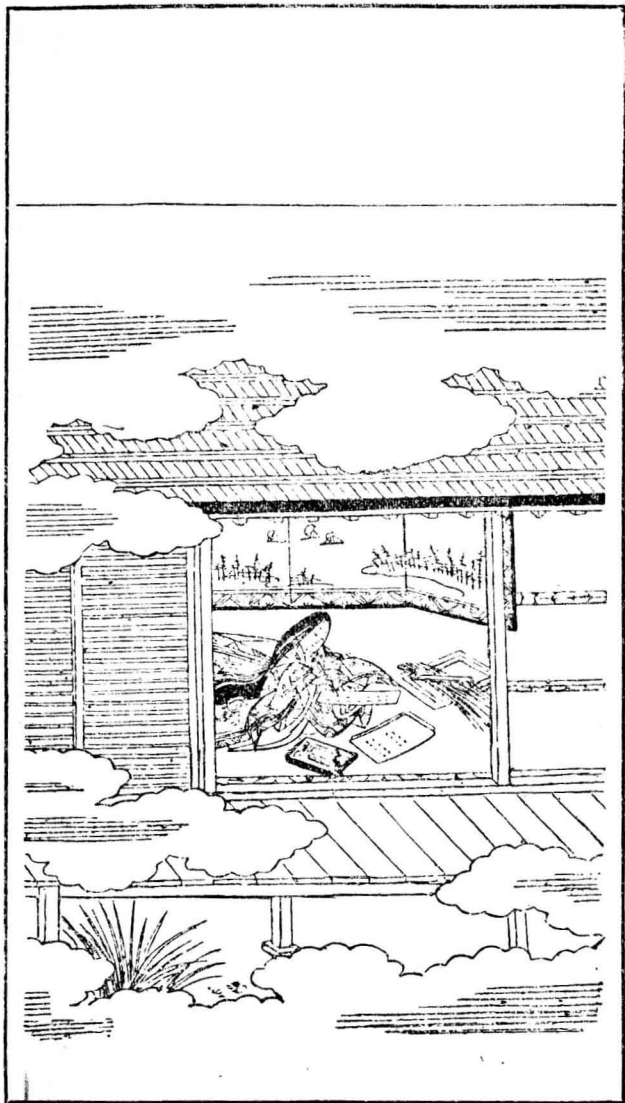
(六) 仲忠に

(七) 私が居ながら取次をせぬとて

(考異)

(五) 一日は「は」ナレ

二孫王「更なることをもし給ふかな。言種にし笑ひ給ふものを。彼の御子の御子にえ、其處たちいかで斯うだにあらむと宣ふ」など言ふ。藤壺、あて宮「何事ぞや。此の君かくて物せらるよを、御供ならずとも、時々はものし給へかし」彼の君、二孫王「然思ひ給へれど、渡らせ給はむとありつれば、同じくばとてなむ。一日は、御方の御事によりて、おとどにかしこく騒がれ奉りしはや。奉り給へりし御文を、下仕のもの持てまうで來たりしかば、侍りながら聞えぬと、「君こそ、などかは参りこぬとは聞えさせざりし、侍りながら。すべて心地なき」など、例のことに物し給はぬ人のむつからせ給ひしこそ、いとほしく侍りしか。さて見給ひて、「御文はこればかり寶はあらじ。今行末は、かくてしも得賜はじ」とて、人に手も觸れさせ給はぬ御厨子に納めさせ給ひて、と聞く。はしたなき目をなむ見給へりし」藤壺、あて宮「孫王の君の御許にありし本どもを、いと煩はしく書かせ給ふめりしが、其の喜び聞えさせしぞや。此處にこそ、いと心地なしとは物せしか。賜へりける



(語釋)

(一) 祐澄

御あて宮女一宮等奏樂、仲忠女一の宮の迎に來りて立聞、女二宮歸らず、仲忠再び迎に來る。まは歸らず、仲忠あて宮の方へ宿す。

(二) 近澄、女二の宮に思ひかけたる人

(四) 音疑

(五) 仲忠が

(七) 女一方の孫王

(八) 仲忠の手に

(九) 仲忠が清涼殿にてひきし手を聞き覺えたるならん

(考異)

(三) 二の宮一宮女二の宮

(六) 取り出ださせしを取ら出ださせしとくださせ

人に御文を取らせずなりにけることを」など宣ふほどに日暮れぬ。

宰相 中將の君御番の夜、同じ番の男女、まうのほりたり。縁人の少將は二の宮

の渡り給ひぬれば、御臺臺盤所に物し給ふ。藤壺、あて宮「いと久しうし侍らぬわざ、

今宵いかで。御前には常に遊ばすらむものを」宮、女二「更に此處にもせず。徒然

なるにかき鳴らせば、つれなしや、まばゆしや」など笑ひ給へば、見だにぞ見ぬ。

いざ今宵、忍びて」とて、琴の御琴ども取り出ださせ給ふ。かたち風をば藤壺、や

まもり風は一の宮、箏の琴は二の宮、琵琶は姫宮、やまと琴はあなただの孫王。御前

ごとのうち置きて、先づ琴の御琴をかき合せつゝ遊ばす。いと面白し。宮、女二「あ

やしう、此の御手こそ、聞くあたりの御手にはいと善く似たれ。いかで斯くはなり

にたるぞ」藤壺、あて宮「あなむくつけや。いかでそれは、聞きにだに聞かぬものを」

宮、女二「いかで、かのわたりならで聞き給ひけむ。彼の夜のならむかし。此處に

は然ばかりだにぞ聞かせぬ」いらへ、あて宮「いとうたてある事をも聞えてけるかな。

(語釋)

(一) 仲思に今夜我琴ひきたりと告げ給ふな

(二) 仲思

(考異)

(三) 聞き給ふを然も一聞き給ふさも一聞き給ふを

のめく、斯く宣はすな」と宣ひて、御琴の音ども弾き合はせて遊び給ふほどに、大將、宮の御迎にとて物し給ひけるを、琴どもの聲しければ、みそかに立ち寄りて、勾欄の下にて聞き給ふを、然も知り給はで、よろづの手を遊ばすを聞き給ひて思ひ給ふ様、いかでか、我清涼殿にて仕うまつりしを弾き給ふらむ、内裏の人ならばこそ、まうのほりて聞き給はめ、いと怪しくもあるかな、と聞き驚き給ふ。御琴の音ども一つに合ひて、面白き手どもを遊ばしはやりて、人の有り無しも知らしめさず。宰相の中將の君、藏人少將、宮あこの侍従ど間に籠り格子の内、母屋の御簾あけておはします。大將、御階よりやをらのほりて、御簾の、御てはな穴をもとめ給へど、いみじく麗はしく造りたれば、隙もなし。あくべき物も無ければ、如何にせむと思ひ立ち給へり。

かくて、夜半ばかりまで遊び給ふ。遊びはてて、物など聞食して、御殿籠りなどする程に、うち聲づくりして、仲思「孫王の君は此處にか」と宣へば、宮たち、藤

(語釋)

(二) 女一 女二 女三 まで 宮等

(三) 御歸りなまらぬか

(四) 犬宮

(五) 我に乳母の役をさせんとするはけしからぬ仰かな

(七) 昔は仲忠なども今夜の様によくあて宮の許に來られしものぞ

(八) 仲忠が

(考異)

(一) 常にかくーよのつねかく

(六) 乳母おほせ言やーめのととはおほせ言や

壺も心地を惑はして、「あないみじや。如何にしつる事どもぞ。常に、かく心地な

き事どもをすする事」とて物も宣はず。宰相中將、驚きて出で給ひて、御座など

敷き給へば、仲忠、此處には、宿直に参りつるなり、君の御宿直所に」と宣へば、

入れ奉り給ふ。南向におはすれば、南と西との隅に、縁を織物にしたる三尺の屏

風、唐錦の端さしたる御座など、中納言殿のしおき給へる物どもあり。宮たち、

御かたいとほしく思されて入り給ひぬ。大將、宰相の中將は内に、他君たちは寶

子に、大將孫王の君して、仲忠、三條にまかり渡りて、今なむ歸りまうで來つる。

覺束なきになむ。今宵は渡らせ給ふまじきか」と聞え給へば宮、女「此處には、

辛うじて對面したれば、暫し斯うてなむ。彼處にあらむもの一人してあらむ

を、などか見棄てては」大將、あやしの乳母おほせ言や、けにうしろめたく、と

思す。夜更けぬれば、宰相中將、祐澄、怪しく昔覺えたる夜や。大將などもかや

うにてぞ」など物語し給ふ程に明けぬれば、つとめて歸り給ひぬ。

〔語釋〕

(一) すくまりてあかした  
りといふ意歟

(二) 「いそは」(一)の  
誤なるべし

(四) 琴の上手はあて宮の  
みなりと仲忠が言ひしに

(六) 仲忠が内裏へ

〔考異〕

(二) さればよいそーされ  
ばこそ

(五) 給へばー給ひつ

(七) 少しなむ難き所まじ  
り侍りけるー少し難き心  
まじり侍りけり

宮の御許に御文あり。

仲忠昨夜、御遊ども承るとて、さも久しく、

しらぶとは音にぞ聞きしことの音をまことにかともひきし宵かな

たち歸り、すくまりてこそ。内裏より召あれば参り侍りぬ。今、夜うさり御

迎に。

と聞え給へり。藤壺あて宮「さればよ」いそ、女「昔だに、唯其處にのみなむおは

すると言ふを、まして今は、珍らしき手ども弾き給へば、いとかしこくなりけ

りとぞ聞きけむ。まろをこそをかしと思ひたらめ。ことは皆聞きたり。此の御箏

の事は、いとよくなりぬべしと言へばあへなむ」とて御返もなし。あやしと思ひ

つゝ参り給ひて、夕さりつ方、内裏より御文あり、

仲忠まかで侍りなむとするを、去年仕りさしと御文、今日仕れと仰せらるれ

ば、皆御覽じ果てよなむ。少しなむ難き所まじり侍りける。明日の夜さりま

(七)

かで侍らむ。

(語釋)

(一) 誤あらんか

(二) あて宮が「夜は忍びて参らん」といひし事

(三) 「宮もの」とも衍文なるべし

(四) あて宮が参らぬは東宮を厭ひての事なりと空言せしといふ意味

(五) 東宮が

と聞え給へり。女「然らばよかなり」と言葉に聞え給て、御文はなし。女御の君おはしまして、宿直もの、寝装束などは奉れ給ふ。

つとめて、東宮より例の藏人して御文あり、

東宮「一日いと心憂かりしかば、かく物せむと思へども、いりてらるよと言ふめればなむ。同じ心ならましかば、と思ふこそ。」

浦風にたち出ざりける白波のいまよりとのみ頼みけるかな

空言をこそねたけれ。

(二)

とあり。一の宮も、女「何事をかは頼み聞え給ひし」藤壺、あて宮「厭ひてなど、空言は聞えさせしなめり」とて笑ひ給へば宮、女「唯一人々々こそ、さやうにも宣

(三)

へ」藤壺、藏人に、あて宮「何わざか此の頃はし給ふ。誰々かまうのほり給ふ。御文などは人の許に遣はずや」と問はせ給へば、藏人「日頃は、晝は御書遊ばし、夜は

(五)

〔語釋〕

- (一) 女四宮
- (二) 渡り給ひて日一日  
なむ歟、東宮が女四の方  
へ行きて止り居給へりと  
いふ意なるべし
- (三) 麗景殿、忠雅の女
- (四) 梨壺
- (五) 私が御使に
- (六) 東宮が寵愛なさる
- (七) 登華殿
- (八) 孫王の君に似たる  
容貌にての意歟
- (九) 宣耀殿、正明の三  
女、「殿のは」なるべし
- (一〇) 女四宮

〔考異〕

- (二) まうのぼらせーまう  
のぼり
- (九) すくよかーすくよ  
かーすくよ
- (一〇) 聞きー見え

御手習、飽くまでせさせ給ふ。院(二)の御方かたなむ、此この月つきとなりて、三夜みよばかりまう(三)  
のほらせ給ひぬる。今日けふは、渡り給ひての日ひ、ひとたびなむ。さてはのほり給ふ  
人ひともなし。御文おんふみは、左ひだりのおとどの御方おんかたになむ、一度ひとたび侍りし。左大將殿さだいしやうぎのの御方おんかたにな  
む、此この月つきに三度みたびばかり奉り給へる。一夜ひとよは参り侍りき。おとど、彼の御方かかたにお  
はします折をりにて、いとかしこく響やぶせさせ給ひき」あて宮(六)いかでか、其處そこのみまう  
でまほしからむ。祿ろくはありきや」藏人くらうじん、「女かんのよそひ侍りき」一の宮いちのみや 女二に「梨壺なしぼ、猶  
立たち交り給ふなめり」藤壺ふぢつば、あて宮(七)時ときの人ひとぞや。心こころいと善よしとて、いとらうたうし  
給ふ。其そがうち(八)に、親兄弟おやは、からは恥はづかして、容貌かたちも右大將うだいしやうになむ似給へるとぞ宣ふ。  
よろづの人憂うれきこと聞く中に、彼かの事ことぞまだ聞かぬ。左の大殿さのだいのは、いとすくよ  
かにいかめしき人ひとの、萬よろづのこと、思おもひながら言いはぬかな。式部卿しきぶきやうの宮みやのは、孫王そんわう  
のかたちにて、何心なにこころもなくなむ聞き侍る。平中納言殿へいちゆうなごんぎのは、いとさよやかに馴なれた  
る人ひとの、らうくしきなり。院(二)のは見奉りき。いと物々ものものしうなむ。清きよらに、す

(一四)

(九)

(二〇)

(二二)

(七)

(八)

(五)

(六)

(三)

(四)

(五)

(六)

(七)

(八)

(九)

(一〇)

(一一)

(一二)

(一三)

(一四)

(一五)

(一六)

(一七)

(一八)

(一九)

(二〇)

(二一)

(二二)

(二三)

(二四)

(二五)

(二六)

(二七)

(二八)

(二九)

(三〇)

(三一)

(三二)

(三三)

(三四)

(三五)

(三六)

(三七)

(三八)

(三九)

(四〇)

(四一)

(四二)

(四三)

(四四)

(四五)

(四六)

(四七)

(四八)

(四九)

(五〇)

(五一)

(五二)

(五三)

(五四)

(五五)

(五六)

(五七)

(五八)

(五九)

(六〇)

(六一)

(六二)

(六三)

(六四)

(六五)

(六六)

(六七)

(六八)

(六九)

(七〇)

(七一)

(七二)

(七三)

(七四)

(七五)

(七六)

(七七)

(七八)

(七九)

(八〇)

(八一)

(八二)

(八三)

(八四)

(八五)

(八六)

(八七)

(八八)

(八九)

(九〇)

(九一)

(九二)

(九三)

(九四)

(九五)

(九六)

(九七)

(九八)

(九九)

(一〇〇)



〔語釋〕

(一) 東宮

(二) 誤りあるべし、「ありては」あれど歌

(五) 立ち出でぬと「なるべし、前の東宮の歌の詞

(六) 「うちみ」は「うちみ」なるべし

(一〇) 朱雀が

〔考異〕

(三) 心高くおはすめれば  
一心にかけて思はずめれば

(四) 御中そばくしきぞ  
御中はあしきぞ

(七) のみーのみぞ

(八) ありーナレ  
(九) 如何にかあらむとーナレ

べて望月の様に、いと見まほしき容貌になむ。宮、それをいとやんごとなきものに、御志もようありて、唯我こそと思して心高くおはすめれば、常に御中そばしきぞ」など宣ふ。かくて御文書かせ給ふ、

あて宮承りぬ。此處にも、いかでくまことと思ひ給ふれば、聞えさせたり

し様に、日の経るまよに苦しう侍ればなむ。立ちいぬと宣はせたる、

しづけきをうちみざらなむ君が爲今より浪のたよぬなるらむ

とのみ聞え給ふ。内裏より又大將殿御文あり。宮の御許に、

仲思度々聞えさすれど、御返の侍らぬは、如何なるにか。かよる御心ばへの有る

にこそ、如何なるにかあらむと、しづ心なく思ひ給へられて、御文も仕うま

つり違ふれば、笑はせ給ふも御面隊にこそ。

春日山今日もふみみぬものならば花はのこらす散りぬと思はじ

犬いかに侍らむ。必ず御返。

(語釋)

(一)東宮の

(二)仲忠が

(三)仲忠が退出したらば  
到底犬宮を見せてはくれ  
まし

(六)仲忠は女一を軽んず  
れども犬宮を珍重す也

(七)御返事を取りて來ず  
ば此儀放逐すべし

(九)いよかひなや」歎

(考異)

(四)だにーナレ

(五)などもさだかにーな  
どもなはざりにーなどを  
はざりに

(八)仰せられしー仰せら  
れつる

と聞え給へり。藤壺見給ひて、あて宮「いとよく宮の御手に似たりかし」とて、あて宮「さ

し較べて見るに、優にはえぞあるまじき。まかで給はぬ先に、犬宮迎へ奉り給へ。

おはせむ時は不用なめり」宮、女「よう乳母どもに言ひ置きなれば。先にも、こ

れかれ「見む」と宣ひしかど、大輔とかくして出ださずなりにき」藤壺、あて宮「さ

らば、今の間にいざ給へ。いかでか、かよる折にだに見奉らでは」女「宮など

もさだかに見給はじかし。此の人は、己をば物にもせず、物も言はねど、彼をぞ

恐ろしきものには。それが出でて行くとは、唯此の事をのみ、返すく言ひ置き

たれば、更に人にも見せず」藤壺、あて宮「あなまさり顔こそ」と宣ふ。御つかひ「御

返賜はずば、やがてさふらはせ給はじ」と仰せられし。必ず賜はり侍らむ。今更

に追はせ給はど、わびしく侍るべし」と申さすれば、女「怪しや。難かるべき事な

らばこそ。異なる事もなければむつかしさに、とて、

女「有りしは見しかど、覺束なからぬ程なりしかばなむ。山路にはゆふかひなや。

(九)

(九)

(九)

(九)

さやは。

とて、

女二山しけみふみはみずとも風またでちるべき花の色とやはみる

犬は彼方にを。

と聞え給ふ。

かくて、日暮れぬれば、大將まかで給ふ。やがて物し給へり。簀子に御座などよそ

ひて物し給ふ。御車、御前などして御車寄せさせ給ひて、消息聞え給ふ、仲忠「まか

で給へるまよに、渡らせ給ひぬべくばとてなむ、御迎に」と聞え給へれば彼方に

は、女二「此處に、いと久しう聞えざりつる事どもをなむ、聞えさせたる。今日明日

此處になむ。彼方にを早」と聞え給へれば大將、仲忠「あからさまに渡らせ給ひて、

又かへらせ給へかし」宮、女二「何か騒がしき様に」と宣へば、藤壺、あて宮「御前にさ

ふらひ給へらむものを、苦しうもこそ思さるれ。渡らせ給ひね。其方に参り來む」

(語釋)  
(一)仲忠

(二)早く歸り給へ

(三)仲忠は帝の御前に勤  
めてありし事故

〔考異〕

(一)見ずとも」とナレ

(二)大將も」とナレ

(三)内に」とナレ

(四)若宮の御方の藏人所  
臺盤所―臺盤所若宮の御  
方の藏人所

(五)この一た

と聞え給へば、女「何か此處には見ずとも、苦しからむ事はおのづから」と宣へば、大將も此方に物し給ふを、強ひてはえ聞え給はず、いと苦しと思して、仲忠「さらば、此方の宿直にこそは」とて物し給へば藤壺、南のひさしに御屏風立て、御座敷かせて、あて寫さらば此處にを」と聞え給へば宮、女「あな見苦しや、狭き所に。犬の許に去ね」と宣へば、大將、仲忠「何せむにか、犬の許に。内に伏すとこそ言ふなれ」とて、一日物し給ひし、君たちの宿直所に入り給ひぬ。今宵、東宮のすけの君と、物など調じて、若宮の御方の藏人所、臺盤所に物せさせ給ふ。御前どもには、折敷などして参り給ふ。大將殿の御前には、宮の御前のをまるる。されど参らず。御宿直物取りに遣はして臥し給ひぬ。内よりも御衾出だし給ふ。御供の人もやがてあり。それにも物など賜ふ。大將、仲忠「こよの御簾のもとに出でさせ給へ。聞えさすべき事」などあれば、女「あな見苦しや」とて御帳の内に入り給ひぬ。皆御殿籠りぬ。

●梨壺、皇子を産みたりとの報知によりて仲忠夫婦離る。あて宮、藏人に梨壺の様子を聞く。

(一)語釋

(二)觸穢の事ありといふに梨壺の御産の事ならんと悟りて男か女かと問ふ也

(三)東宮より

(考異)

(一)侍れば一侍り

(四)有りつやありや

かくて夜なかばかりに、三條殿よりおとどの御消息あり。兼雅「あからさまに物し給へ。とみなる事」などあれば、驚きて、仲忠「何事ぞ」と問はせ給へば、僕「宮の御方の惱ませ給へば」と申す。仲忠「内裏より唯今まかで侍りて、みだり心地東西知らず侍れば、今ためらひて、唯今」と聞え給ひつ。とばかり有りて御使、「よし。なわたり給ひそ。觸穢の事ありて」とあれば驚き給ひて、仲忠「何ぞ」と問はせ給へば、僕「男と聞え給ふ」仲忠「宮より御使は有りつや」と問はせ給へば、僕「知らず。え見給へずなりぬ」と申して参りぬ。曉になりて、中納言の君といふして、仲忠「三條にかよる事侍るなれば、今の間にまかり渡り、立ちながら参らむ」とて出で給ふ。藤壺、あて宮「何とし給へらむ」と宣へば宮、女「男とか言ひつや」と宣へば、あて宮「あぢきな事や」と聞え給ふ。大將「穢らはで歸り給ひて、切に聞え給へば、其の日の夕さりつ方、梨壺もとぶらひ聞え給はむ」とて渡り給ひぬ。かよる程に、御使にはあらで、藏人まかであり。上御前に召して問はせ給ふ。

(語釋)  
 (一)人の噂を滅人が傳ふ  
 名也、何といひても終に  
 梨壺が皇子を生み奉りた  
 れば

(二)誤あるべし

梨壺腹の皇子の産養、  
 兼雅皇子を酷愛す。梨壺  
 の母女三宮の樂やうやく  
 盛なり。

あて宮<sup>なしたば</sup>梨壺には、御使<sup>つかひ</sup>幾度か遣はしよ<sup>つが</sup>藏人、<sup>きしめ</sup>「聞召さどりしに、いたく煩らひ給ふことありとて、御消息申されたる事ありしになむ、驚かさせ給ひて、其の夜、さては今朝なむ参りて侍る。男におはするなりとて、人は、さこそ言へ、終にし給ひつめるかし、いかでか覺えぬ筋にはなむ、申しのよしる。あな聞き憎くや斯様の事は」<sup>かやう</sup>聞かぬ様にて、物も宣はず。

畫詞

こよは西の對。

かくて三日の夜、一の宮産養し給ふ。五日夜は大將殿、七日の夜なむ、東宮より例の御とぶらひはありける。産屋いと面白う濟らにあり。父おとどを始めて左のつかさ人、宮人引きて、幄うちて、夜一夜遊び明かす。其の夜は太政大臣、后の宮、御産養し給へり。右の大殿の君たち、左近中將に、宰相中將、左近少將に藏人の少將、頭の中將など、さらでは上達部、藤大納言、其の御弟の宰相、然らぬもいと多かり。

畫詞 ことよは梨壺の御産屋。

(一) 語釋

(二) 梨壺

(三) 東宮

(四) 梨壺入内後一二年の間に斯の如くならば

(五) 後に生れたる方仕合せよしといふ詠歌

(六) などとてなるべし

(七) 嵯峨院の後宮は兼雅の姉妹也

(八) 誤あるべし、一本「か」に「こ」になし

(九) 此皇子疑なく皇太子に立ち給ふべきに

(一〇) 我が赤兒を見るはこれがはじめて「子持」は誤なるべし

(一一) 「こそは」は「チシ

(一二) 仲忠の赤兒の時

我は見ざりき

(一三) 「など」として「なるべし

(考異)

(一) など奉れりーなどし奉れり

又九日の夜は、右の大將の御産養、例の銀の衝重、すみ物、碁代など奉れり。

祖父おとど、この産れ給へる君を、限なくかなしくし給ひて、臍の緒つきながら抱き持ちて、宣ふ様、兼雅子といふものは、かく悲しきものにこそありけれ。

唯宮の小くおはするにもこそあめれ。これに、同じくば、参り給ひて、一二年の程に斯からましかば、如何に嬉しからまし」と宣へば、俊隆女のちおひのと言ふこと

とのあれば」などて、俊隆女「我が孫にこそあれ、必らず異筋とも思ひつくらむ。院の後の宮は、其處の筋にはものし給はずや。うちのは、御心もことにはあらずや。

などわかこそこのみにならむからに、此の筋の絶ゆべき」と宣へばおとど、兼雅「うたてある事かけてもえ言ふまじき事なり。昔なりせば、何の疑は」など宣ふ。

兼雅「小き子は、この子持のみこそは、目に近くは。中納言は見ずなりにき」など

て此の君見奉りに常におはすれど、かんのおとどは悪しとも宣はず。おとど、

(語釋)

(二) 梨壺腹皇子

(三) 梨壺の母女三宮

(五) 朱雀が

(七) 梨壺が

(八) 女二宮姫宮

(九) 仲忠

(考異)

●仁壽殿女御、女一宮に女二宮の保護を托して内裏に歸る

(一) 見習はぬー見習ひ給はぬ

(四) 様に常に宣へばーと常に宣はすれば

(六) 犬宮ー「宮」ナレ

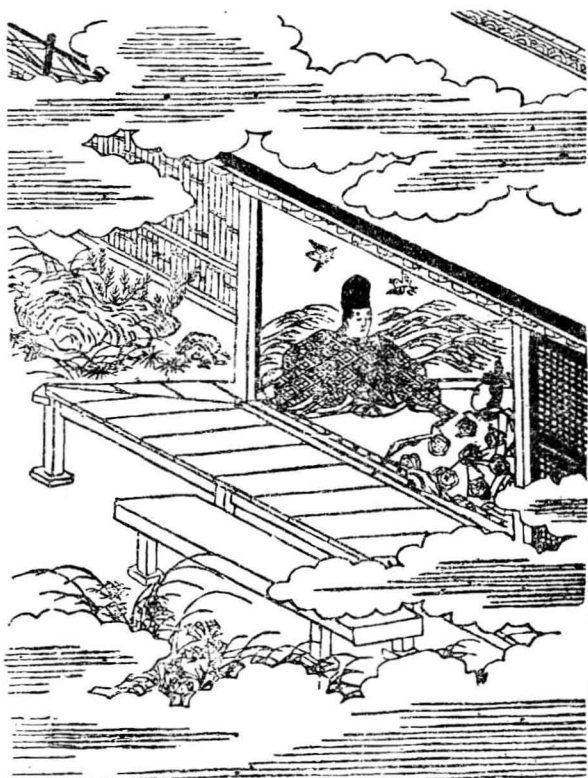
(七) なむーナシ

兼雅「末の世に、らうたき人の物し給へば、見るとて彼方がちなるを、見習はぬ心地し給ふらむと思へば、いとなむ恐ろしき」と宣へば北の方、俊隆女何か。おはせよ。かよらでも物は習ふめれば、今よりこそは」おとど、兼雅「さればよ。前はかう宣はざりきかし」と宣ふ。されど宮の御方には、夜宿り給ふこといと稀なり。中の君とありしも、あからさまにぞ訪らひ給ふ。かくておとど、此の宮に御心止め給ひて、次第に母宮儀式いかめしくなり給ふ。

かくて月立ちぬれば仁壽殿の女御の、御衣更して、五日の日参り給ふとて、一の宮に聞え給ふやう、仁壽参らまほしくあらねど、御國讓も近くあべかなるに、此の頃は内裏わたりにもと思ひてなむ。其の中にも、いと憎けなる様に常に宣へば参る。犬宮を見奉らざらむ事の覺束なかるべきをなむ。さて、此の宮たちを、殿の御方に渡し奉らむとすれども、思ふ心ありてなむ。然聞ゆる様あり。此方にすゑ奉り給ひて、御眼離たず、見とぶらひ給へ。大將いと物ゆかしくし給ふめ

(二) 兼雅「さればよ。前はか  
(三) 稀なり。  
(四) 兼雅「さればよ。前はか  
(五) 稀なり。  
(六) 犬宮ー「宮」ナレ  
(七) なむーナシ





(語釋)

(一) 彈正宮は同體なれば宿直して保護せよと言付けんと也

(三) 仲思をいふ

(四) 近邊、女二宮に懸想せる人

(五) 鞠供にてし歟

(六) 久々にての壁内を破れて壁へたる也

(七) 御産

(八) 前々の産は

(考異)

(二) 殿ごもれ一宿直し

國あて宮の安産及びあて宮腹の皇子立太子の祈

り。ゆめ見せ給ふな。善しとも悪しとも、人には見せぬぞよき。彈正宮に、いと

善く聞えむ、夜は此方に殿ごもれなど。他人よりも、宰相の君はいと煩はしき。

十の御子は、率て参りなむ」と聞え給へば、女二承りぬ。いとよう後見きこえ

む。夜は同じ所にと思へど、むづかしき者や言ひ煩はさむと思へば、え侍るまじ

き。彈正の宮に聞え給へ。職人の少將は、彼の南にありし所に、夜晝ありて、藤

壺をぞ責め聞ゆめりし。いみじく恨むめりしかども、耳にも聞入れ給はざめりき」

と聞え給ふ。彈正宮にも、同じごと聞え置きて、日暮れぬれば、御車二十ばかり、

御前數知らず、君だちさながら御供に、参り給ひぬれば帝、朱雀高腫人來たなり

や」とて即ちまうのほらせ給ふ。

**畫詞** こよは仁壽殿の御局。

かくて藤壺、此の月に當り給へり。東宮より御使日毎なり。参る時は御文なき折

なし。十五日になれば、大宮、此方に渡り給ひて宣ふ、大宮先のは、彼の寢殿にて

(八)

(語釋)

(一)今は廢院に女二宮等あれば也

(二)あて宮腹の皇子立太子の事

(三)今度の御産

(六)梨齋腹の皇子が太子に立たぬ筈はなし

(七)梨齋の母は樂院の皇女なればいふ歎

(九)孝明

(一〇)仲思を我在位中に

(考異)

(四)思オー思よ

(五)思オーおもはず

④思雅正頼兼雅仲思以下昇進、人々の御體まはり、

(八)御方の御腹に一御かたはらに

こそは。其處にて、そこらの子ども出で來、いと平かなり。此の君だちも、生れ給

ひしかども、さて人の御方となりたるを、かよる事なむ有ると聞ゆべきにあら

ず。此處にてこそは。萬のこと、所がらにもあらじ」など宣ひて、かねてより修

法行はせ給ふ山々寺々に、禱の師を据ゑて申させ給ふ様、「思ほす事に疑出で來

たる。これ事なく平かに、さては此度の御事思すやうに平かにて」と手をあがき

て祈り、願をさせ給ふ。おとど、此の事を疑ひて思す。藤壺あて宣「さりとも宮知

り給はであるべき事か。天下の院の御方の御腹に出でて、とも、かうも思ほすべ

うもあらず」と宣ひ、物など思ほして、親たちは思ほし歎けど、いとつれなくて

おはす。

かよる程に中旬になりぬ。太政大臣の御四十九日は、四月六日ばかりに當りたれ

ば、御わざ果てて、暫しありて帝、大將を、御位にておはします程に、大納言に

なし給ひてむと思して、唯今太政大臣無くてもありぬべく思して、なり給ふべ

〔語釋〕

(一) 忠雅

(二) 大納言は「中納言」の誤か、この感誤脱あるべし

(三) 正頼

(四) 質思をちよ

(六) 祐澄

(七) 左大辨を越えて他人が出世することは

〔考異〕

(五) 設し「し」ナレ

(八) ものーこと

(九) 他の事ーたが事も

(一〇) 男どもーこの子ども

(一一) かくれーかくれて

(一二) 慮ませー召させ

(一三) 上は「は」ナレ

き人御年若けれど、大納言のやんごとなければなむ、右のおとど、いかで此の大臣

召の缺に、中納言に思ふ人なさむ、と思ほす程に、祭過ぎて、二十二日に大臣召

あるべし。殿ばら、其の設し給ふ。左大將殿いとなく設し給ふ。右大將おりた

ちて政事し給ふ。此の日になりて、皆参り給ふ。左のおとどは太政大臣、右は左に、

左大將は右大臣になり給ひて、大納言には、又右大將なり給ふ。中納言には、帝

宰相、中將をと思ほす。右のおとどは源宰相をと思ほす。上、朱雀定められよ」と

仰せらるれば右のおとど、正頼、此度の順、師澄朝臣にぞあたりて侍る。左大辨の前

わたり、まかりならぬものなり。かよれど、正頼が思ひ侍るは、故太政大臣の、

終取り侍るとて呼び侍りしにまかりて侍りしかば、他の事申さず、實忠朝臣の上

をなむ、近すく申し侍りしかば、「男どもの上をば知らで、必ず相顧みむ」と申

し侍りしを、喜びてまかりかくれ侍りしを、此の度の缺は、彼を惠ませ給へ」と

奏し給へば上は、「師澄朝臣はさるべき事なれど、思ふ様は、院のおはしましよ、

(一) 此處誤あるべし

(二) 春海翁曰、番上の字音歟

(三) 季明

(四) 誰なりとも思ひ通り  
に任じ給へ

(考異)

(五) なし給ひつ 他官一  
し給よつかさ

(六) 忠雅、兼雅、仲忠

此處になどかくてあるを、同じ親王の胤すはずやなど言ひて、いと下臈なれば、

せてうなるを、さる例も有るを、祐澄朝臣をなむ思ふ。實忠朝臣は、かけたる所

もなく、今は世を捨てて、法師の様になりたる人は、何のつかさの用があるべき」

と仰せらるれば、正頼「當時におや侍る正頼が男どもまかりなり侍りて、彼等がお

くれ侍らむは、此の朝臣の靈の見侍らむ事なむ、いとほしく悲しう侍り。身を捨

てて侍るにおいては、空しうなりて侍る後に賜ふ例と侍りなむ。況んや生きて侍

らむに、などかまかりならざらむ」と申し給へば上、朱雀「さらば、ともかくも御

計らひにあるべき事なるを、先づと思はれむを、誰もく」と仰せらるれば、源

宰相をなし給ふ。おとどの、なり給ふべき君だち怪しと思す。宰相には、御心と

頭中將をなし給ひつ。他官ども皆なりぬ。

かくて、まかで給ふまよに、太政大臣、右のおとど、右大將、仁壽殿に参り給ひて、

右大將、仲忠、度々の喜びを、御方にのみなむ。一の宮の御徳ならずば、かく其の

(語釋)

(一)正頼

(三)正頼

(四)正頼夫婦

(五)あて宮

(六)産の事

(七)初産でも

(考異)  
(二)拜し—をがみ

人と申すにも侍らず、唯今まかりなるべき職にもあらぬを、且は思ひ給へつよみ、  
 且は喜び聞えさする」とあれば女御の君、仁賢「いと覺えぬ筋に思しなるを」など  
 宣ふ。父おとども参り給へり。大將は拜し奉り給ふ。後の宮、近くて御覽じて、  
 いと憎しと思ほす。かくて今日は、太政大臣の大饗に皆参り給ひぬ。  
 又の日、左の大殿のし給ふべきなれど、忌ませ給ふことありて明日なり。藤壺の  
 おはします西の對に、宮もおとどもおはします程に、右のおとど、大宮の御許に  
 喜び申しに参り給へり。驚きながら、廂に御座よそひて、對面し給へり。おとど、  
 衆雅「すなはち参らむと思はしを、昨日は饗の事侍りしかば、それに障りてな  
 む」大宮「いと嬉しき御喜びとなむ、例よりも嬉しく。この宮にさふらふ人の、  
 見苦しく珍らしけなき事にかく侍れば、はじめ物し給ふだに、こと榮もなかんめ  
 るに、見苦しけれど、此處にさへは見放ち侍らむやは、とてなむ、此の頃此處に  
 侍るを」おとど、衆雅「いと怪しう、皆人の羨み聞ゆる事の、かくのみ物し給ふこ

〔語釋〕  
(二)右大臣に榮進したるをいふ

〔四〕立太子の事を含めて言へるなるべし

〔考異〕  
(二)いでやーいふ

(三)思ひ一思う

そ。などかこと物は榮はんなくは。今の人行末じんぎゆうすまの君きみとこそ」宮みや、大宮おほみや「いでや、何なにか斯かしうは、習ならひたるに侍はべらねば、唯ただ此この人の姊あねの、殿どのにさふらふ御後のちなどの數多物あまたものし給たまふをのみこそ、かこちもや聞きえましと思おもう給たまふれ」おとど、兼かね雅まさ筋すぢかはりたる様やうに宣のたまはすれど、兼かね雅まさが後のちは、大人おとなも、童わらわも、子孫こまごまで皆御中みななかにし侍はべれば、更さらに隔へだて聞きゆること侍はべらず。近ちかきをも、遠とほきをも、幼せききものどもは、此方こなたに願かへりみさせ給たまへ、となむ思おもう給たまふる。若宮わかみや、此この世よのものにも見みえ給たまはねば、御方かたをば忝かたじけなきものに。そが中うちにも、かくまだき、まかりなるまじき職しやくになり侍はべれば、世中よのなかを長ながくもえ思おもひ給たまへずなむ」宮みや、大宮おほみや「あなゆよしや。御親おやの様やうなる人ひとだに、然さも思おもひ給たまはざなるものを」と宣のたまへば、兼かね雅まさ「よろづの事御後のち安やすくを」など宣のたまひて立たち給たまひぬ。宮みや、さりとも我等われらが爲ためにうしろめたくも物ものし給たまはむやは、と思おもはす。晝ひるつかた、右大殿みぎのだいどの、一いちの宮みやの御許もとこにまうで給たまへり。やがて藤壺ふじつばの御許もとこに御消息ごうそくあり。

榮雅をより法師の様なる喜びに侍れど、聞えさせでやはとてなむ。

宰相(一)中將(二)して聞え給へり。御返、

あて宮いと畏く、かく宣はするをなむ、此處には時知らるよ心地して侍る。

(三)

など聞え給へり。

歸り給ひぬすなはち、右大將限なく装束きて、花やかに、伯父にも父にも優れて

まうで給ひて、大宮を拜み奉り給ふ。藏人の少將して、仲思(三)暫し侍るべきを、

此處彼處、喜び申さむとてなむ。御方には、今殊更にさふらはむと聞え給へ」と

て出で給ふを、宮も御方も、すべての人、御簾の内に居て見奉り給ひて、あて宮「な

ほ似るものは無かりけり。一の宮こそ幸おはすれ。見聞かかひある人を、獨り

領じ給ひて、つかひ人よりけに從へ給ふなる」と藤壺は宣ふ。宰相(四)、参り、喜び

申させ給ふ。装束いと善くして、拜み奉り給ひて出で給ひぬ。

此の頃は、藤壺今日明日とおはすとて、里の人々参り集ひて、五十人ばかりあり。

(語釋)

(一)未考

(三)仲思

(四)質類

(考異)

(二)心地して侍る—心地し侍り



〔語釋〕

〔二〕賢忠の中納言になりたるを悦ぶ

〔三〕仲忠

〔四〕あて宮の口添による事と思ふ

〔五〕師澄

〔七〕賢忠

〔考異〕

〔一〕思ひ―思う

〔六〕あらぬを―あらず

〔八〕あとどを拜み―あとど拜し

〔賢忠あて宮の許へ禮廻りに来る。あて宮賢忠に出を出でて、賢妻と同接せんことを勤む〕

宮の御方の人もいと多かり。御前にこれかれ候ひ給ひて、宰相の中將の君、祐澄此度の悦をし侍らぬこそ、祐澄悦には思ひ給ふれ。時々、小野にまかりて見給へしかば、いと悲しげに、世中を深く心憂しと思ひて物し給ひしを、哀と思ひ給へしかば、みづからの悦あらましよりも嬉しくなむ。皆人然なむ思ひ侍るなる。右大殿の右大將などは、かく心深く、更に恥かしき事なむ皆聞え給ひし」藤壺、あて宮、怪しき事と聞え置き給ひければ、君だちをおき奉りて、申し給ひければこそあなれ。此處に知るべき事かは」祐澄「いで然も侍らず。そなたにて宣ひし事を思したるなり。さらずば、此度はよも。辨の君はいと多く先だちてなり給ひき。更に言ふべくもあらぬを、祐澄は後にまかりなりしかど、上の御心しらひに仰せられしなり」藤壺、あて宮「さては君だちにも覺えまさられたりけり」とて笑ひ給ふ。かくて夕暮になりぬ。おとどもおはするに、新中納言参り給ひて、御消息聞え給ひて、御前に出でて、おとどを拜み奉り給ふ。花やかに清らなりし名残に、精

(語釋)  
(一)「と」衍文跡

(三)あて宮の懐胎したるが此頃が産むべき月なれば

(四)誤なるべし、一本「いひえんと物宜はん人」

(五)「おはしませしを」なるべし

(考異)  
(二)思ひ一思う

進にて損はれたれど、様もてなしなめきてめでたしと、おとど悦び給ひて御装束

して、簀子に御座敷きて、すゑ奉り給へり。正頼「いと嬉しく、年頃覺束なく、

え對面せざりつるを、思ひ給へ敷きつるを、過り給へるを、限なく悦び申し付

り。近くは殿に参りて侍りしに、え對面せざりしをなむ、思ひ給へ敷きつる」中

納言、實思「世中のはかなく侍りしかば、行もし侍らむとて、しめやかなる所もと

めて年頃筋り侍るを、殿の御事にてまかり出で侍りぬ。思ほえぬ惜ひ付れば、驚

きかしこまりてなむ。かく徒ら人にて侍れば、つかさ位の用も侍らねど、御志

を見給へるなむいとかしこく侍る」とて泣き給ふに、おとども、正頼「昔より、お

なじ所にて見奉り馴れたれば、よからぬ子どもに等しくこそは思ひ聞ゆれ。さ

れど思ほし疎みたれば、これをなむとり申し侍る。此處には此の宮に侍る者の、と

かう侍りける、此の頃物すべき頃なりければ、此方に侍るなり。本意ありていむ

えんと物し給はむ人、同じ所にて見語らひ奉らむとて、おはしませしを、ある

(四)  
(五)

(一) 簡雅

(二) 胤雅が太政大臣になりたるをいふ

(三) あて宮に

(四) 季明

(七) とは「公」の誤解

(九) 仲澄

(一〇) 私を

(一一) 仲澄

(考異)

(三) 動もなく一魂を失ひ

(五) 有る一侍る

(六) 面伏すべきは一而なるは

(八) まじらひても一まじらむも

(一一) 給へむ一給へなむ

國

讀(上)

三四七

一のかみなどになり給ひぬれば、「いかでかよる所には」とて皆殿に渡らせ給ひ  
 (二) にしかば、此處をば、此の人にかく取らせて侍るなり」中納言、實忠もとより愚  
 に侍るうちに、年頃魂もなく、物覺えず侍りて、故殿、宣ひしやうにて、さる  
 御をはりのことも承りしが、ともかくも覺えず侍りしかば、とり申すやうも思  
 ほえず侍りて、自ら心しも有る様になり侍りける」おとど、正頼「何かはさしも。  
 正頼、子ども數多持て侍れど、まことには悔しう面伏すべきは侍らねど、公に交  
 らはむに、面だたく侍るべきもなく、人の遊せむ所には、草刈笛吹くばかりの  
 心どもにて、いと無心にて侍り。辛うじて、とざまにまじらひても恥なかりしは、  
 はかなくて先づ隠れにき。されば、忝くとも、今はた親もおはしまさぬを、頼  
 もしけなくとも、殿の御代と思ほせ。正頼は、昔けりしもの斯くなり給へると  
 思ひ給へむ」など宣へば、中納言、物も宣はず、涙をのみ流し給へば、おとど、  
 (二二) 如何ばかり上手めきたりし人の、かう涙をもち惜まず、世の中を心憂しとおもひ

〔語釋〕

(三)あて宮が御里に下りてからは

(四)あて宮も

〔考異〕

(一)我等は―我所々は

(二)宣ひけり―宣はゞ

(五)様に―様にて

たるを、おほろけにはあらざめり、かよる心ながら、徒らになりなば、恐ろしくもあるかな、うへ我等は哀なりとは宣ひけり、と思して、多くの御物語し給ひて、おとど、正頼<sup>(二)</sup>兵衛は、此處に物し給はゞ對面せむと有りし。昔人物し給へり。聞えよ」とて入り給ひぬれば、兵衛の君、御簾の内にて、兵衛「むかしを今に」とこそ聞えさせ給ふべけれ」と言ふ聲いと近ければ、中納言、實忠いと珍らしき御聲にもあるかな」とて、御簾のもとなる柱のもとに寄りて、實忠「さも久しくなりにける」など宣へば、「何れの世にか忘れ聞えさせむ。片時も思う給へ怠らねど、餘所に離れおはしますなる中に、物馴れたる様なれば、さしわけても聞えさせねば、けに忘れずながら年頃になむ。まして此方に渡らせ給ひて後は、おはしましよ方のみ見やられ侍りて、常に昔戀しくなむ。上にも、更に忘れ聞えさせ給はず、思はずに、まめやかなる御志の有りけること」と聞え給ふ」中納言、實忠「今まで世の中に侍ると見え奉るをこそ、志なき様に。昔より今まで思う給へ集め

(五)

(考異)  
(一)うしろめたきうしろめたなき

(二)此處にて「て」ナシ

(三)なほ此處もとに「こ  
こに」は

(四)此の簾を「と宣ひて  
みすを」と宣ひてこのす  
だれを

たる事を聞えて、世の中になからむことなむ、いとうしろめたき心地する。早う聞  
え煩らひて、死にかへり惑はれし心地なれど、今は思ほし疎むべきにもあらぬを、  
唯「こよもとに出でさせ給ひなむや」と聞え給へ」と宣へば、兵衛、「かく」など聞  
ゆれば、母屋の御簾の柱のもとに臥し給ひて、あて寫「此處にも、いかで聞えむと  
年頃思ひつるに、いと嬉しく物し給ふなるをなむ。さて、宣ひつべからむ事は、な  
ほ宣へ。此處にていとよう聞ゆ」と言はせ給へば中納言、賢忠「今は耳も聞え侍ら  
ず。人の聞召すばかり物も聞えねば、遠くてはえなむ」と聞え給ふ。上、あて寫「か  
たは人にこそは。睦まじうは物し給はざりけり」と宣ふ御聲いと近ければ、いと  
怪しく、珍らしく思ほえて、賢忠「それも、誰がしなさせ給へるにか」と聞え給ふ。  
兵衛、「なほ此處もとに出でさせ給へ。おとどの君も、「御消息聞えよ」と宣はせつ  
るものを」と聞ゆれば、あて寫「いと苦しければぞや。此の簾を上げ給へ」と宣ひて、  
御几帳外に押し出ださせ給ひて、少しさし出でさせ給へり。中納言、賢忠「嬉しきに

〔語釋〕

(五)「いかで」は「いかに」歟

(七)古今集「山里は物の敷しき事こそあれ世のうきよりは住みよかりけり」

〔考異〕

(一)先ブーナン

(二)たぶーナン

(三)侍らましかばー侍りまましかば

(四)なく死なばーなくてせば

(六)なかりしかば見所―なかりしかば如何はせん見所

も先づ物も覺えぬものになむ。昔、さもせむ方なく惑はれ侍りしかば、魂をしづめむと、度々たゞ御文一行を見給はむ、と兵衛を責め侍りしかど、え見給はざりしを、そのかみ死に侍らましかば、かよる折もなく死なば」上、あて宮「此處にも、年頃、いかで聞えむと思ふことあれど、さるべき折なくてなむ。此の山里住し給ふこそ、いと心憂けれ。自ら近く聞き給ふ様もあらむ。さやうにのみ、皆あんなる世の中なれば、うたて言ひなしつと驚けば、いと聞きにくしや」いかで、寶恩世の中に片時侍るべうもあらず、せむ様もなかりしかば、見所侍る所の世離れたるにて、思ひ給へ慰むやとてまかりありきしに、年頃は侍れど「世の憂きよりは」と言ふなれど、猶同じ様にわびしく侍れば、所がらにも侍らず」と聞え給ふ。あて宮「まだ物の心知らざりし時は、人に物聞えず、疎きものと思ひしを、思へば今こそ、人につらしと思ほさるよは、いとほしき心地しけれ。人々の心に見較べ奉れば、まだ忘れ給はざりけるを、常にいとほしと思ひ聞ゆるをも、聞き給はずあらむ」

(語釋)

(一)出家して

(二)私の預りてせし事ではなし

(三)安座して

(四)妻を持ちては

と聞え給へば、實忠世の中の事聞え侍らぬ所なれば、まして思ほされむ事はいか  
でか。今は親も物し給はず、よろづに身の徒らにならむを、宜ふべき人も物し給は  
ねば、様異になりて、深き山に入りなむと思ふ給ふるを、斯くとだに聞え承ら  
ず、とてなむ。覺えぬ悦の侍るを、いと怪しがり侍るに、人のつぐる様に  
侍りしかば、「さまでさて覺しける事。さりととも聞えさせてむ」と頼みてなむ」上、  
あて宮「御悦の事は、此度はこよにも知り侍らず。行くさき平かにも侍り、思ふ様  
にも侍らば、内裏わたりの御後見は、となむ思ふ給ふるを、なほ此の御行の事  
は止め給ひて、例人の有る様に、宮仕などし給ひなんどして物し給はど、此處に  
も絶えず聞え承らむ。さらば、けに此のわたりに御志ありとは知るべき。か  
く聞ゆるに、さもし給はずば、なほ元よりさる御心有りけりとなむ」中納言、實忠「か  
く宜はせば、時々里にまかり通ひても侍りもしなむ。世の人の様に、人につきて  
はえ侍るまじ。此處に聞えさせし時より、人の許には侍らず。殿に侍りしまでは

(附釋)

(一)あて宮入内の後

(二)先妻

(三)元の様にして

(四)實忠及妻子の料として父より受けたる遺産も

(七)女の形したるものは一切見たくなし

(考異)  
(五)彼等一ナレ

(六)世の中に一世の中は

女を餘所に見給へき。それも、兵衛の君に物聞え給へてなむ。參らせ給ひて後、山里にまかり籠りては、下司にても、さる者をなむ見給へぬ。自ら、君たち時々物し給ひて見給ひつらむ。今更に、なでふことかは見給ふべき。斯くながら死なむとこそ思ひ給ふれ」とて涙をつぶくと落して、痛くためらひて、聞えもやり給はねば、いと哀と思ほして、あて宮知らぬ人の、今珍らしきこそあらざらめ、昔見給ひけむ人の哀なるも、持たまへるを、物し給ひけむ様にて經給へかし。世の中に見苦しかりし事どもは、皆あらまほしき様にのみなりにためるを、只其處に斯うて物し給ふなるのみなむ、まだ見苦しかなる」中納言、實忠「それは、まかりにけむ方も知らず。故殿の、實忠彼等が料に侍るなるも、徒らなるべくなむ。自らも侍るべくもあらず。彼等も、世の中に在るにや、無きにや、有らむとも」あて宮「民部卿こそ、在所知りたる様に物せられしか」實忠「尋ね出でば、若し近く侍る所には、それら侍らむ。さりととも名残なく、さる容貌ならむものも見給へじ」と聞

(七)



(語釋)

(二) 遣として持たずともよくはなきかの意歟

(三) 私のいふ權にして居給へ

(考異)

(一) 御行心―御行の心

(四) 思ひ―思う

(五) 多く参り集ひ給へり―多くまゐり給へり

え給ふを、あて宮「怖ぢ給ふは、いみじき御行心(三)にこそあなれ。などかは筋異(四)なる

様には」と聞え給へば、實思「其の筋を心憂し(五)と思う給へ入りにしなり」と聞え給

ふ。あて宮「まめやかには、こよの爲に御志あるものならば、聞ゆる様にて物し給へ。

聞ゆる様にてあらじと思すとも、かう聞ゆることに叶ふと思して、思さるよもの

ならば、疎からず常に聞え承らむ。さらぬものならば、疎くて聞えじ」と宣へ

ば、實思「例の人の様にては、なほえ侍らじ。斯様に時々侍らむ、仰せごと(六)に従ふ

と思ひ給へて」と聞え給へば、あて宮よし、多くも聞えじ。此處にも世の中に侍ら

むとも知らず。平かに侍るものならば、時々兵衛が許に訪はせ給へ。さてを聞え

む。たど今は、行く先の事聞えにくし」とて入り給ひぬ。中納言の君は、兵衛の君

と物語し給ひて、曉(七)に歸り給ふとなむ。

畫詞

こよは西の對に、慶の人々多くまゐり集ひ給へり。中納言、藤壺、物

話し給へり。



國讓(中)

梗

概

① 正頼任大臣の大饗、兼雅任大臣の大饗、實正、實忠に京に歸りて舊妻と同棲せんことを勤む。滋賀の山本に實忠の舊妻を訪ひて京に出でん事を勤む。② 東宮よりあて宮へ贈物、出處不明の贈物。③ あて宮第四の皇子を生む。正頼の喜、産養。④ 仲忠の産養の贈物。内侍のナリ、あて宮の前にて仲忠夫婦の噂す。實忠、あて宮に文を贈る。⑤ 宮の君、あて宮を罵る。實正再實忠に舊妻と同棲せんことを勤む。實正、實忠の妻子を三條の家へ迎ふ。⑥ 東宮屢あて宮を召す。女四宮懷胎の噂、皇太子の地位につきての正頼一家の危惧。⑦ 女一宮懷胎、彈正宮の見舞。仲忠の痛心。兼雅、仲忠を招きて立太子に關する后宮の密旨を告ぐ。仲忠、忠こそを招きて女一宮を加持せしむ。帶を忠こそに示す。⑧ 兼雅、女一宮の病を見舞ふ。⑨ 近澄等の仲忠、女二宮を隱見す。兼雅、正頼に小倉の遊覽を約す。⑩ 近澄等の女二宮に對する熱心。⑪ 仲忠、女一宮の懷胎を悟る。⑫ 女一宮、女二宮、女四宮、兼雅、校隆女、仲忠等桂の別荘にゆく。兼雅、犬宮を愛す。⑬ 二宮、女四宮、兼雅、校隆女、仲忠等桂の別荘にゆく。兼雅、犬宮を愛す。⑭ 若君の御文を見て仲忠其の筆跡を窺む。仲忠、犬宮を愛す。⑮ 若君の御文を見て仲忠其の筆跡を窺む。⑯ 近澄、女二宮の乳母に消息す。⑰ 梨壺、あて宮等處々に誠す。⑱ 梨壺腹の皇子の東宮に立つべき時、正頼等の心痛。⑲ 彈正宮、あて宮を訪ふ。⑳ 實正、實忠を其の舊妻を置ける三條邸に導く。實忠、女を見識らず。そて君の悲嘆、實正、實頼と共に實忠を三條邸に留めんとして盡力す。㉑ 實忠、實忠その舊妻に逢ひて昔を語る。㉒ 仲忠、實忠を訪ふ。正頼、實忠を

訪ふ。④實忠、あて宮と文を贈答す。⑤實忠夫婦の情舊に復す。實正、實忠の文を見て其の情を悟る。⑥正頼食物を實忠に贈る。實忠小野に歸る。⑦東宮よりあて宮へ消息。東宮、あて宮の返事なきを怪む。

④正頼任大臣の大饗、兼  
雅任大臣の大饗

(語釋)

(一)正頼

(二)あて宮

(四)兼雅任大臣の大饗

(考異)

(一)かくて—かうて

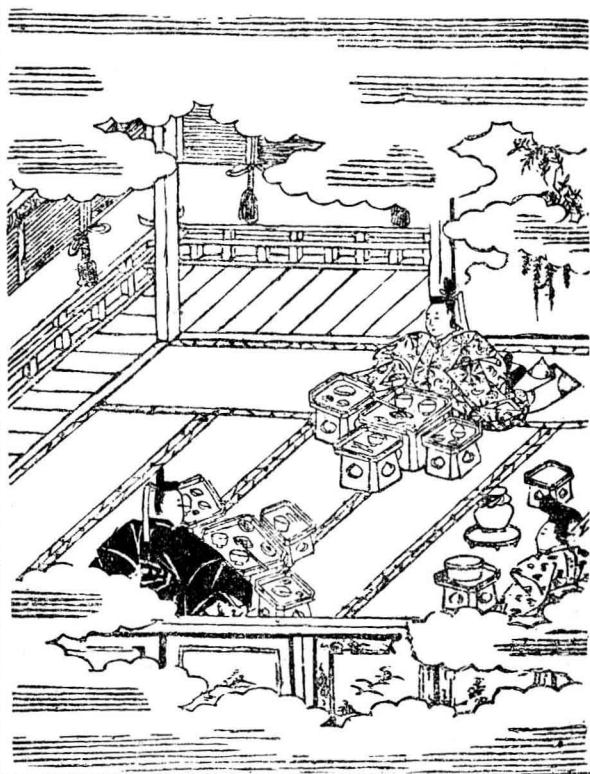
(五)大殿の—大臣殿

(六)たり—ナシ

(七)しつ—して

(八)て牽て—ナシ

かくて今日は、左の大饗の大饗、やがてこの御方の御前にて、寢殿おもしろく、造り様いかめしければ、し給ふ。例の如いかめし。上達部は、皆例の人々なれば、御方ことに見給はず。右のおとどとばかりぞ客人にて物し給へる。又の日は、右の大殿の、いといかめしうし給ふ。三條殿いとおもしろく清らに造りなされたれば、其處にてし給ふ。寢殿は上達部の座にしつらはれたり。東の一の對をば宮たちの御座、大臣の座には二の對、廊かけて、所々せられたり。上達部、つねに物し給はぬ所なれば、御心づかひしつよまうで給ふ。左のおとども物し給ふ。右のおとど、兼雅「こよには、この大饗しはじむる日なるを、畏くとも、宮たちかたらひ聞えて牽て奉り給へ」と聞え給へれば、彈正の宮、帥の宮に斯うくと聞え給へ



(一) 語釋  
 (二) 俊隆の巻の末に見えたり

(六) 仲忠が正頼の外孫たる女一を娶りたれば

(七) 「みすく」、田中道履曰末熟歟、一本「みすく」

(八) あて宮を仲忠に娶せんと遷寢の詩約束せし事  
 (九) 仲忠が妻の女一宮は

(考異)

(一) 「ちむをとて」ちむを聞きていかたとて

(三) 「ごとごとく」

(四) 「ごとにも」ごとにて

(五) 「ごとにも」ごとども

ば、宮たち「大變の所にな著きそと、たびく上の宣はすれば、左の大殿にだに

なむ著き侍らすなむ。さりとも、然は宣ふらむを」とて、おとど諸共にまうで給

ふ。おとど、悦びかしこまり給ふ。この大變のことは、宮更に知り給はず。

かくてこのおとど、主のおとどに聞え給ふ、正頼「此處には、還變はじめし給ひ

し時ぞ参りたりしかし。年頃あらぬさまにしなさせ給ひてけり。昔より斯く習ひ

たるしきに侍れば、御志もかはらで、同じごとと思ひ給ふれど、そのこととも侍

らで、え殊更に聞えさせ侍らぬや」主のおとど、兼雅「こよにも、更に隔て聞ゆる

こともなけれど、そが中に、今はた大將など然てさふらへば、昔より志ふかく」

など聞え給ふ。正頼「さきに参りたりしには、大將のまだみすくにもものし給ひしか

ばこそ、人心地もせしか。此度は、聞え觸るべくもあらぬこそ」と聞え給へば、主

のおとど、兼雅「さきの御基代物、たがへさせ給へり」とて、常に嘆きしものを」と

聞え給へば、正頼「さて奉らずや。かの持給へる人は正頼が孫にて、やしなひ奉る

(八)

(九)

〔語釋〕

〔三〕實忠

〔四〕實忠が参られたるは

〔五〕誤脱あるべし、李明の頼みによりて特に實忠を保護したる也との意な

〔七〕あて宮の事

〔九〕實忠

〔考異〕

〔一〕あらじーナシ

〔二〕なむーなむ侍る

〔六〕なむーナシ

〔八〕などーと

〔實正、實忠に京に歸りて舊妻と同棲せんことを勤む。滋賀の山本に實忠の舊妻を訪ひて京に出てんことを勤む。〕

ぞかし。見奉り給ふに效なくはよにもあらじ」主のおとど、〔二〕「兼雅」されど、本意

違ひたるやうになむ。一日、中納言の、いと珍らしう参られたりけるは、如何な

る事にか。〔三〕殿をふかく恨み奉りて交らはれぬ、とこそ承りしか。然あるは、

此度のことは、萬のことを斯う忘れぬべき御志ぞかし。これを見給ふるこそ心

遣は」〔四〕客人のおとど宣ふ。正朝故おとどのありしかばなむ」主のおとど、〔五〕「兼雅」さ

宣へる、うしろめたき様なり。〔六〕かの筋によりてと見たればこそ、世の人みな心づ

かひし、畏まり聞ゆめれ」など御物語し給ひて、御中いとよけに見ゆ。女方には、

おとな、童下仕〔七〕限なく装束きていと多かり。かづけ物ども、様々にいとめで

たくして取り出させ給ひ、引出物みなあり。御たちはいと心ことなり。かくて

一夜遊びあかし給ふ。御前の池に鶴樂にあはせて、出で來つゝ舞ふ。つとめて

歸り給ふ。

かくて中納言は、此の殿に又物し給ひて、小野へ還り給ひなむと思すに、藤壺宣ひ

(一) 語釋  
(一)あて宮か

(二)あて宮の話を聞かぬ時と同様の生活をせば

(四)以下あて宮の事

(五)「つしやかに歎、一本「つしやかに」

(六)あて宮

(七)李明存命にて

(九)師澄

(一一)舊妻

(一二)洗濯

(一三)あて宮にも咄したる事なるが

(考異)

(三)あはめてーあはせて

(八)おとゞ世におはしましてーおとゞおはしましし世に

(一〇)にはーにも

しこと如何にせむ、然宜ふとて里住をせば、今は何の効かは。心ならぬやうに、世の人こそ思はめ、強ひて山里にあらば、本意かくてあらむと思ふにこそ有りけれ、とこそは思ほすべかめれ、など思ほしわづらひて民部卿に、賢忠「斯うくなむ有りし」と聞え給へば、賢正「然りけむものを、まことにその事を思ほさば、同じやうにて物し給へば、志なき様にこそは。かくて物し給はど、公私惜しみ聞ゆれば、聞きにくさには。事し佗び、うちあはめて、泣くくまじり給ひしかど、夢ばかりの聲をだにし給はず、世の中に心をもつくしやかに思はれ給へる人の、今更に對面してさ聞え給ひけむも聴き給はず、年頃の御志の消えぬるにこそはあらめ。この度の御悦は、おとゞ世におはしまして交らひても、右大辨をば越し給ふべくもあらぬを、おほろけの御志にはあらず。なほ時々は小野にも通ひ給ふとも、かの山里に物し給ふ人、むかへ奉り給ひて、御すましの事など申させ奉り給へ」中納言、賢忠「身一つは京に通ひつよも侍りぬべし。彼處にも聞えてき、古

(一〇)

(一一)

(一二)

(一三)

(一四)

(一五)

(一六)

(一七)

(一八)

(一九)

(二〇)



(附釋)

(一) 妻は持つまじ

(二) 袖君

(四) 此後子が出来たりと

(五) 自分が袖君を世話せねばなるまじ

(七) 實忠の舊妻

(九) 實忠の舊妻

(考異)

(三) 大君も一 大君は

(六) 御料の御調度ども一  
そこらのたからなども

(八) 民部卿は一 民部卿母

(一〇) いでーんちへ

きにもあれ新しきにもあれ人は更に見給はじ」と宣へば、實正「さらば、かの大

君も知り給はじとするか。また出で來とも、小くこそはあらめ。大人になり給へ

る人を知らじと思すらむこそ」實忠「いで、何か今は。身をだに知らぬものを」と

宣へば、實正「さらば、此處にこそは尋ね聞ゆべかなれ。殿の奉られたんなる御料

の御調度ども、家など、誰にかは。徒らになされて効なくこそは」など宣ふ。中

納言、實忠「こよに賜へる所は、え侍りぬらむや。然りぬべくば、時々侍りぬべか

らむ様にしなさせ給へ」いらへ、實正「其處は、全く無くはあらざりし所なり。女

君の御料なるなむ、萬の物具して、たど今も、おはしたらむに便なかるまじき」な

ど聞え給ふ。

かくて民部卿は北の方の住み給ふ山里にまうで給へれば、北の方對面し給へり。

民部卿、實正「年頃いとおほつかなく、何處にもものし給ふらむともえ承らざりし

を、ある人の、斯うてなど申すにつきてなむ、承りし。いであさまのしや。されど、

(語釋)

(一)他に仔細ありての別居ならば一入の歎なるべし

(二)實忠

(三)李明の遺言

(五)父の喪に服することとなりし故延引せり

(六)父の

(七)袖君を李明の子にして

(八)李明がかねて袖君に贈る積なりしと見えて

(考異)

(四)あるを―あるをなむ  
(九)有るべきこと―有るべきなき

あやしき御中ならむ、御歎なるべし。中納言の君の、ありし様にもあらずなりため  
 (二)「と聞え給へば、實忠妻」あなうたてや。悪しかれとも思う給へねばこそ、あらま  
 ほしきやうにては。さても、訪ふべき人だに、年頃まで夢の中にも聞えぬに、思  
 ひの外におはしましたるをなむ」民部卿、實正、宣はせしことのあるを、すなはち  
 参り來むとせしかど、程なく御思になりにかばなむ。宣はせしやうは、「こよに  
 物したらむ女君をば、殿の御子になし奉りて、實正ら仕うまつれ。親は世の中  
 思ひ離れ給へる人なめり。さればえ知り奉り給はじ」とて奉り給ひし物ども記し  
 たる文奉り給ふ。實正「この得給へる殿は、ことに廣くはあらねど、若き人の住  
 み給はむに、いとおもしろき所なり。かく思ほしてにやありつらむ、年頃御心と  
 どめて造らせ給ひ、有るべきこと皆なむせられたる。はやく渡らせ給へ。この南  
 殿は、中納言の君なむ賜はり給へる。近隣にて、今だに御中よくてもものし給へ」と  
 聞え給ふ。北の方も見給ひて、いみじく泣き給ふ。實忠妻「かくあさましき所なれば、

(語釋)  
(一)季明の死夫も

(二)袖君

(三)季明御存生ならばと

(五)袖君は襖服を着ざる也

(七)襖服をきるべき時

(考異)  
(四)思うー思ひ

(六)山里にー山里を

(八)いかゞーいかに

(九)御小桂ー御桂

世の中のことをさく聞えぬを、殿の御事も、久しくありてなむ承りし。いみじく悲しく、親もなき様なる人を持ち侍りて、さりともおはしまさばと思ふ給へつるものを、かゝる事をさへ宣ひける」とて泣き給ひ御服などをも著給へり。例の御服をぞ君は著給へる。實妻「かく承らましかば、この侍る人にも重き御服をこそ著せ侍るべかりけれ。心ときめきの様なれども」とて濃き鈍色の御衣一かさね、黒橡の御小桂取り出でて、著せ奉り給へり。民部卿、泣き給ひて、實正山里にひとりながめてわが宿の藤のさかりをいかで聞きけむ北の方、

思實妻 松かれて藤のみありときよしかば我も袂はふかくなりなき

と聞え給ふ。民部卿、實正「そもく女君は、いかど生ひ出で給へる。昔は、名だ

たる人に劣るまじく聞え給ひしを」とて御簾をかき揚げて見奉り給へば、鈍色の御几帳立てて、親も子も居給へり。姫君、薄鈍の一かさね、御小桂、かいねりの

(語釋)

(二) 袖君

(三) などとてなるべし

(四) 袖君も今に父を越ひ  
慕ひ居る故

(八) 若き袖君は實正の處  
へ引取らるゝもよからん

(九) 身を濕染にやつして

(考異)

(一) 十七ばかり十七ま  
いはかり

(五) 御好と一御好に一御  
好れと

(六) 憂かりし一便りしも  
なき

(七) 何か一何かは

桂うらみせ一かさね著給へり。御年十七ばかりにて、御髪いとめでたし。頭つき御有様い

と美うつくしけにておはす。母君ははぎみいと物々しく愛敬あいぎやうづきて、髪かみうるはしく、清きよけなり。

年三十五のほどにて居給へり。民部卿みんぶぎやう、女君に、實正みままろを親おやとはおほせ。今は

よろづに仕つかうまつらむ(三)なとて御髪をかき出でて見給へば、いと多くて、七尺ばかり

りあり。北きたの方かた、實正妻みまのめ髪などは生なひぬべく侍りしかど、世よの中の斯かくなりによ

り、夜晝よるひるおもひ歎なげき、ある時は伏ふし沈しづみ、頭かしらももたけず嘆なげきて、顔かほかたちも、人のや

うにも生なひ出いでぬなめり。怪あやしく、この子こどもは、人ひとにも似にず親おやを戀こひかなしみ

つよ、一人は徒いたづらになりぬめりき。これも、今いまに忘れざめれば、また如何いかであらむ、

となむ(四)民部卿みんぶぎやう、實正みまいと怪あやしや。何なにでふ契ちぎある事ことにかありけむ。萬よろづの事こと妨たげの

やうにあめれば、世よの常つねならぬ御好おきとなむ見給みたまふる。今はなほ、里ききの殿とのへ出いで給たま

へ。今いまよき日ひとりて、御迎むかへに(五)と聞きえ給たまへば、實正妻みまのめいなや。今いま更さらに、憂うかりし里きき

にも何か(六)。若わかき人ひとの、おはしまさむ所ところにも参まゐり侍はべれかし。此處こゝには、やがて黒くろき

(七)

(八)

(六)

(九)

(語釋)

(三)實忠

(五)未考

(七)あて宮の御直

(九)東宮

(考異)

(一)いかでか—いかど

(二)世捨て—世なれ

(四)とて—にて

(六)あふち—あぶちもち

自東宮よりあて宮へ贈物。出處不明の贈物。

(八)給ひなど—給ふありなど

さまにても歇み侍りなむ、此處ながらもなむ」いらへ、實馬あぢきなき事を。早

わたり給へ。そこにさへ添ひ奉り給はずは、いかでか、後見聞え給ふ人なくては。

さても世捨て給ふばかりの程にはあらざめり。かの君も、つひにさてのみや歇み

給はましと思す心なくさめ給ふ折も有りなむ」など聞え給ふ。斯うて物まゐり給

ふ。色々の折敷四つして、ひきほし、菓物などして、御肴とて、前に柑子、橘ひ

とこ、あふちなど有るをとらせ給ひて、御酒まゐり給ふ。御供の人には、御前に

も、下人にも、皆さまぐくに、御前には皆腰插賜ひ、下人には祿など賜ひてかへ

り給ひぬ。

畫詞 ことば志賀の山本。

かくて藤壺、今日明日にあたり給へば、みな御産屋のまうけさせ給ひて、大殿に

おはしませば、君たちは、三所、四所、夜ごとに宿直し給ふ。御方におはしまして、

あるは夜とまり給ひなどする程に宮より、よき程なる銀、黄金の橘、一餌袋、

〔艶釋〕

(五)皇子たちへ贈ると也

(六)古今集「五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」

〔考異〕

(一)思ひ―思う

(二)過されし―過されにし

(三)つらさにこそ―つらさにもこそ

(四)やちるれ―やちれて

(七)切りて―てナシ

(八)似せて―はらせて

(九)仰せごと―仰せごとを

黄ばみたる色紙一かさね掩ひて、龍膽の組して結ひて、八重山吹の造り花につけてあり。おほん文には、

東宮おほつかなからぬ程にと思ひ給へど、たのめし程を過されしかば、それがつ

らさにこそ此の頃は夜の間はいかどと、覺束なく思ひやられるれ。さて、これ

は幼き人々に、そこに見給ふほとだに、哀にし給へかし。

うらやましいいま五月まつ橘やわがみにひとはいつか待ち出む

と思ふ、心もとなくなむ。

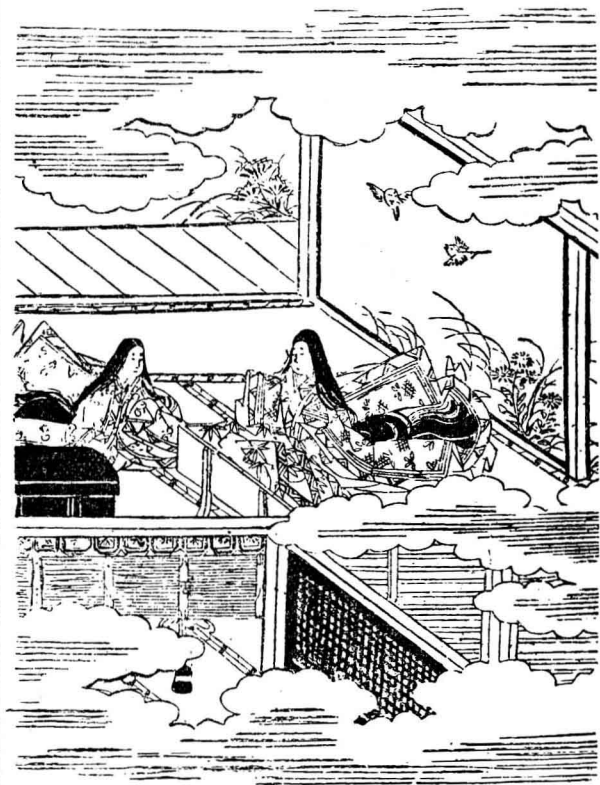
とて奉り給へり。大宮御袋あけて見給へば、大いなる橘の皮を横さまに切り

て、黄金を實に似せて、包みつよ、一袋あり、大宮、「あな煩はしや。いかで、こは、せ

させ給ひしぞ」と問はせ給へれば、例の藏人、「兵衛殿、中納言殿の仰せごと承

り給ひて、お前にて、これかれなむ仕うまつり給ひし」宮、大宮「かやうのをかし

きわざは、かの君ばかりぞし給ひ出でられけむかし」これかれに、押し包みてく



〔考異〕

(一)おはせやーおはすや

ばり奉り給ふ。藏人少將、近衛おはせや君だち、然るべからむ人に橘くはせむ」と、手ごと(二)に君だち弄び給ふ。御返は、

あて言日ごろ訪はせ給はざりつれば、いと心細き心地なむ。さて、これはさしも承らぬものを。

(二)四つ五つかまねてー  
四つつかまねて

みにもかく昔の人をならしつよはな橘をなにかうらやむことぐにまた聞え給ふ。大宮、御使に、女の装束一くだり賜ふ。

(三)物をーを」ナレ

かよる程に孫王の君、藤壺にある夕暮に、かは、はなれてくろき水桶の大きやかなる、四つ五つかまねて、女どもさし入れて去ぬ。局の人々、「あやしき物かな。

御前に、かよる物をさし入れて去ぬ」とて見れば、大きな葉盤を、しろき組して結ひて、五つさし入れたり。取り入れたれば、程は桶の大きさなり。あけて

(四)沈入れー沈を入れ

見れば一つには、練りたるきぬを飯盛りたるやうに入れたり。今一つには、鯉鮭などのやうにて、沈入れたり。葉盤の蓋に、生女の手にて、

(四)



(附釋)

(三)孫王の君

(六)あて宮に食はせ

(考異)

(一)二つ…なとか一つ  
のりつるひしてくす  
ればなとか

(二)此歌誤脱あるべし

(四)あて宮第四の皇子を産  
む・正頼の喜

(四)給へる一給ひつる

(五)おはさふ一おはさう  
す

今日けふならむ辛からうじて一つづつのりつかひしてくまにはなとか

ねぎごと(二)も肯きかすなりにしかさまには神かみのおほかるくほてそとぞ

とあるを孫王そわうの君きみ、「誰たれにか。例れいの人のすさびにこそあめれ。久ひさしくかやうの事ことな  
かりつるを」と宣のたまふ。乳母めのと、「里さとにおはします程ほどを思おもしたるなめり」といふ。君きみ

は、いかでかこれが返事きこ聞えむと思おもへど、さるべき折せりもなければ、お前まへにとり出い  
でて御覽らんぜさすれば、あて宮(三)「いと清きよけなる神かみのおろしかな」と宣のたまふ。鯉かつななどくば

り、飯粒いひよ、葉盤くはては持もたり。

かよる程ほどに晦つごもりになりて、いと平たひらかに、男御子おとこみこうまれ給たまへり。氣色けしきもなくておは

しつる程ほどに生れ給たまへり。人々ひとびとは聞ききあへ給たまはず。おとど、宮みやよろこび給たまふこと限かぎり  
なし。如何いかならむと思おもひつる度たぎしも、何事なにこともなくし給たまへれば、生れ給たまへる御子(四)を

うつくしみおはさふ。宮みやより御消息おんせうそくたちかへりあり。おとど、睦むつましく仕つかうまつ  
る人ひとを御前おんまへに召めして、萬調よろづてうじてまゐり給たまひ、思おもふやうに人ひとのえせぬをば、御手おんてづか

(一) 語釋  
(二) 産婦をば

(三) 損害なき様にしてあて宮を内裏へ還すべし

(四) 東宮

(五) 度々の御返事は

(六) あて宮をいよ

(考異)

(一) 何事をか仕うまつらむ一何事をつかまつらむ

らし給ふ。宮の御腹の君だちは、籠りておはす。御手づからし給へば、君だち、「何事をか仕うまつらむ」と聞え給へばおとど、正頼「其處たちは、まだ見知らぬならむ。翁は、多くの子、孫の母も勞りならひたり。かよる人をば、この折によく勞り心しらひつれば、容貌もことに損はれぬものなり。宮の斯う思すなるに、つひやかさでこそは參らせめ」とてよろづに有り難き物をしてまゐり給ふ。

産養し給はぬ人なく、いと清らにし給ふ。宮より、七日のは、御屏風、御座よりはじめて、長持の脚つきたる三つ、辛櫃五よろひに、綾錦よりはじめて、萬の物入れさせ給へり。御文あり。御使は太夫。

東宮たびくのは見給へき。自ら宣はねば、おほつかなくなむ。如何にと思ふ驗

にや、ことなる事なくて物し給ふなるを。よろこび、萬の事見ぬ物となり  
にけるこそ、あらためまほしくこそ。さて、これは、旅人の料にとて。あ  
またの親になり給ひぬるをなむ、いと哀に。今は、とく對面もがな。とのみ

(考異)  
(一)ともいとよくーとて  
いとよく

(二)御返もー御返事もー  
御返しも

(三)よるづーよつ

なむ。然りぬべくば、夢ばかりも自らも宣へ。うちも驚かされたりとも、いとよく見えつべしや。

とて奉り給へり。大宮見給ひて、大宮かく人の親になり給ひて、心しておはしますこそ哀なれ。覺束なしとあめるを、御返も、臥しながら聞え給へかし」と宣へば聞え給ふ、

あて宮承りぬ。まだ筆も取られ侍らねど、覺つかなしと宣はせられたれば、臥しながら聞えさする。如何にと思ひ歎きつるを、今日まではかく聞えさするを、後はいかど。人の親にか宜はせたるは、よろづはや見るとかいふなることをなむ、今斯う思ひ給ふこそ。旅人に賜はせたる物は、あるじまでなむ悦び聞ゆる。他事には。

と書き給へれば、宮つよませ給ひて、御使に女のよそひ、下人に祿など賜ひて、奉り給ひつ。

(語釋)

(一)石の臺脚

一の宮の御方より、子持の御前、おとどの御前、兒の御衣、襦袢、いと清りに調じて奉り給へり。白き折櫃に、黄ばみたる繪かきて、白き黄ばみたる錢つよみたり。御いしの臺に、例の鶴あり。洲濱に、

(二)思澄

ゆく末も思ひやらるよいしにのみ千歳の鶴をあまた見つれば

(三)此處解しがたし願ふらんか

大將の君の手にてかき給へり。

(六)正頼

源中納言殿の北の方、いとかめしう仕うまつり給ふ。男がたのは、左衛門督の君、よろづの所々のこと、皆君だちあたり給ひつよし給へり。所々より御産養し給はぬなし。おとどの君は、外に出で居給ひて、おはしまさひし時は客人御子た

(考異)

(四)御子たち一きんだち

ちもいさよか集ひ給ひしを、今さしもあらねど、太政大臣、御子たちをはなち奉りて、右大殿よりはじめて、まうで給へり。宮の殿上人などは、無きなし。下人

(五)右大殿一右大臣

も残るなく参れり。かくておとどの御笛、御琴ども遊ばせば大將、仲思、年頃、久しく承らざりつる御遊は、今宵の料におかせ給ひけるにこそは。おとど、正頼後

(一) 語釋

(二) 耳は

(三) 誑か

(四) 口笛

(考異)

(四) 奉れ一奉り

仲忠の産養の贈物、内侍のすけ、あて宮に仲忠夫婦の囃す。實忠文をあて宮に贈る。

(五) かうばしき一かぐはしき

(六) 黒う一ナシ

(七) はらふくらに一はらふくらに

(八) 藥一菓

生の恐ろしかりしかば、みよはすはりにしを、今宵は、(二) いたちのまところそ聞き給へけるは、物一つあそばせ。仕うまつりて試みむ」と宣ひて、笙の笛を奉り給ふ。おとどはかはぶえを遊ばす。兵衛督、中納言、大算策。これかれ御琴ども遊ばして、夜一夜遊びあかし給ひ、歌などよみ給ひつよ、曉には、みな物などかづき給ひてかへり給ひぬ。つとめて宮、昨夜の物、こよかしこへ奉れ給ふ。涼の中納言、はての日といかめしくし給ふ。(四)

かくて九日の夜は、大殿、内裏の大變の御前のものし給ふ。こよかしこより、いと清らにて奉り給ふ。右大將殿、大いなる海のかたをして、蓬萊の山の下の龜の腹には、かうばしき葡萄を入れたり。山には黒方、侍従、薰衣香、あはせ薰物どもを土にて、小鳥、玉の枝、竝み立ちたり。海のとつらに、色黒き鶴四つ、皆しとどに濡れて、そらなる鶴をばいと黒う、白きも六つ、大きさ、例の鶴のほどにて、銀をはらふくらに鑄させたり。それには麝香、よろづの有りがたき藥一つ(七)

(語釋)

(四)あて宮の

づつゝ入れたり。その鶴つるに、

藥くすりおふる山やまのふもとにすむ鶴つるのはをならべてもかへる雛鳥ひなどり

何處いづくよりともなくて夕暮ゆふぐれの紛まぎれにかきすゑたり。涼すずしの中納言ちうなごんの君きみ、かやうに弄てあそび物ものの具ぐまで奉たてまつり給たまふ。その夜よも、これかれおほみ遊あそびなどして、今宵こよひは氣近けぢかくしてなまめきたり。

(考異)  
(一)近く一近う

(二)こととして一ことくして

(三)裝束など一裝束どもなど

夜明よあけぬれば、つとめて御座敷おまししかへ、例れいのごとして、人々ひとびと裝束きやくなどしてさふらふ。内侍ないしのすけ、はじめより参まゐりて、例れいの御湯殿ゆきどのの行事ぎやうじす。御湯殿ゆきどのは、孫王そわうの君きみに、殿守どのもりといふ参まゐる。しめやかなる折せりにて、お前まへにてこれかれ物語ものがたりするついでに、内侍ないしのすけ聞きゆ、ナレ「こよらの御産屋うぶやにあひまうでける中に、物多く賑にぎはよしかりし事は、この御産屋うぶや。七ななの寶降たからふり、おもしろく、心肝こころざら榮さかえし事は、犬宮いぬみやの御産屋うぶや。此度このたびのは、いとあらまほしう、清きよらにぞ侍はべるめる。兵衛督殿ひやうぶのかみどのは、おもしろき事はなくて、いかめしく賑にぎはよしき事はいみじく侍はべりき。かづけ物清ものきよらに、萬よろづの

(語釋)

(二) 仲忠

(三) 女一官

(四) 女一があて官方に

(五) 仲忠が迎に

(考異)

(一) 心地は「は」ナシ

(六) 此以下誤あるべし

物は七の寶にしかへして、いと清らなりきや」といへば藤壺は、あて宮「一の宮の御方にて、けに珍らしき心地はし給ひけむかし。さる人の、心に入れて、居立ちてし給ひける事なれば」内侍のすけ、「さて、更にも生れおち給ひしすなはち、父おとどの舞し給ひしよりはじめて、面白き事ぞ限なく侍りし。大殿、七日夜は舞し給ふ事、こと上達部すかし給ふとて宣ひ、琴弾かれなどせさせ給ひしは、さる事は何處にか。さる效ありて、犬宮のいとをかしくぞおはする。この頃這ひなどして居給へり。人御覽じては、たゞ笑ひに笑ひ給ふ。おとどの君は、とみの事あれど、率て遊ばせ給ひつよ、はた立ち給はず、夜、晝、膝にぞする奉り給へる。けにいと美しきや」御方、あて宮、宮との御中は如何あなる」すけ、「如何ばかりめでたき御中ぞ。そは、先つ頃此方におはしけるに、参り給ひけれど物聞え給はざりければ、五日六日入り臥し給ひてこそは、恨み奉り給ひしか。御遊これかれし給ひしを立ち聞きしかば、御方の琴の御琴を、この筋にあそばしよがいと怪しかりし

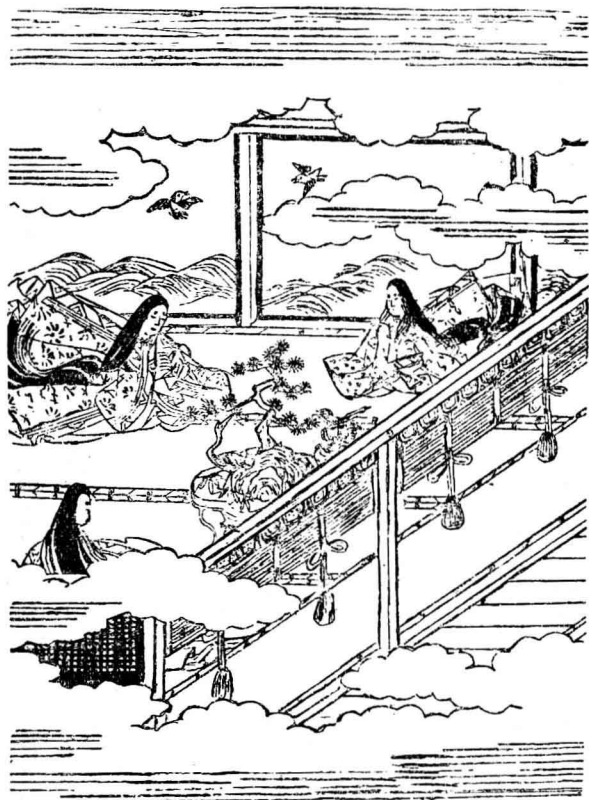
かな、同じ様なる物の音とは言ひながら、此の族は筋ことなることの、お前にて仕うまつりてはなむ、恐ぢ給ひしか」さて宮はいかど宣ひし」と問ひ給へば、ナリ「いかでか、斯うはしも聞き給はぬものを。まことに聞えたるならむとこそきよ給ひしか」と聞ゆれば、よくも宣ひけるかなと聞召す。

〔語釋〕  
(一) 仲忠が奉りたるものなれば

(二) 孫王の君が

かくて大宮は、孫王の君に一夜とり置かせし物どもして参れり。蓬萊の山を御覽じて、あて宮「いと煩はしくしたるものかな。何處のならむ」と宣ふ。孫王の君に語らひて、参らせ給へれば、をかしと思ひつれども、岩の上に立ちたるこの鶴どもを取り放ちつゝ見給へば、沈の鶴はいと重くて、取る手しとどに濡る。「あないみじの物どもや」と言ひのよしる、銀のは、かねなれど殊に重くもあらず。腹に物をしたに入れたり。書きつけたる歌は、黄金の泥して、葦手なり。「これは、誰が手ぞ」とあつまりて見給へどぞ知り給はず。御方御覽じて、あて宮「大將の御手にてこそあめれ。若宮にとて、手本あめりし、同じ手なめり」と聞え給へば、おとど、





〔語釋〕  
(五)實忠

〔考異〕  
(一)如何―いかニ

(二)香―かをりす

(三)香はなど―かはなど

(四)領せられたり―えられたり

正頼「けに然なめり。他人のすべき業にはあらぬ。これを見知らぬ様なるは、いと心なきわざかな。如何せむ」と宣ひて、御火取召して、山の土所々試みさせ給へば、さらに類なき香す。鶴の香も似るものなし。白き香はなど見給へば、麝香の臍、半ほどばかり入れたり。取う出て、香を試み給へば、いとなつかしくかうばしき、物の例に似ず。正頼あやしく、この物どもの、こよらあるが他物に似ざらむ」宰相中將、祐達「ある人の忍びて申しよは、いと有りがたき所より、故治部卿の御唐物領せられたり」とこそ申しよか」おとど、正頼「けに然こそあなれ。去年の冬、人に聞かせで、お前にて御書仕うまつり給ひき。かよる世に似ぬ物など見ゆるは」など宣ふ程に、新中納言殿より「兵衛の君に」とて御文あり。御覽せさすれば、

實忠いと哀に嬉しかりし事は、すなはちと思ふ給へしかど、世の人の心つくさせ給ひしかば、けにうたてもやと思ふ給へし程に、念じ聞えししるしにや、

(語釋)

(一)あて宮の平産を

(三)「一日は」歎

(四)「侍りけむ」歎

(五)誤なるべし

(八)正頼

(九)昔の侍従の「なるべし。侍従は仲澄

(一一)あて宮に

(考異)

(二)ためらひて「がうち

(六)侍る—ある

(七)すれば—それは

(一〇)歸らじ—つゝ

思う給ふるやうにて、平かにおはしまするを、限なく喜び聞えさせつれど、

物騒がしきためらひて、今までなり侍りにける。ひとは、昔のみ思う給へら

れて、物も覺え給へざりしかば、何事を聞えさせ侍らむ。いでや、

ことにてもきよける聲を時鳥まどはれしかなしでの山路に

とてなむ。獨り侍るはらからなどをこそ、女たよりにはすれば、御覽すらむ

かし。おとども宣はせしやうに、昔侍従の君の御代に思ほしなさば、宣ひし

所へもまかり歸らじ。今日明日のほどにまかりて、今。さらば、時々は近く

を。

と聞えたり。御覽じて、兵衛に、あて宮かく書き給へ」とて書かせ給ふ。

あて宮かくなむと聞えつれば、自ら聞えむとすれど、まだはかくしき心地もせぬ

を。一夜は御すまひ制し聞えむとてなむ。などかは今は、または歸り給ふべ

からむ。世の人の有るやうにて、近く物し給へかし。さらば思ひ聞えつべし

や。

と聞え給ひて、奥の方に、

あて宮惑ひけむとか。然らざりせば、

山べにしすむときかすば時鳥なべて知らせぬ聲はせましや

哀ときよしかば。

とて賜へれば、私にも文かきて取らせつ。西の對の御産養の物ども取り出でたれば、君だちいどみつゝ取り給へり。物に入れてをさめ給ふ。

かくして中納言御文見給ひて、「けに、わが志を見給へばこそ、かくも宜へ」な

ど宣ふ。

宰相参り給ひて、實頼宮にも内裏にも昨日参りて侍りしに、宮の御消息、「日頃經

るまよに、いかに心細く、今は效なし。世に人の皆ある事にこそあめれ。たゞ例

の人の有るやうにて物し給へ。何かさて物し給ふ、など聞えよ」となむ」宮の君

(語釋)  
(一)實頼が昭陽殿へ

(二)東宮

①宮の君、あて宮を罵る。  
實正再實忠に舊妻と同様  
せんことを勤む。實正、實  
忠の妻子を三條の家に迎  
ふ。

(語釋)

- (一)あて宮をいふ
- (二)其様な事をいふのを
- 東宮も嫌ひ給ふ也
- (四)君とあて宮とは從姉妹ナリ
- (五)あて宮
- (六)跟あらんか
- (七)東宮が
- (八)あて宮が里に下りたれば
- (九)月
- (一〇)女四宮
- (一一)あて宮をいふ
- (一二)此次の太子は聖德太子の皇子ならんと世人は思ふと然あるまじ
- (一三)女四腹の皇子には最貴はあらじの意なるべし我心よせもあらむは
- 「我心よせもあらむ」は
- (考異)
- (三)宣ひしぜー宣ふぞ
- (一〇)賜ふー賜ひ
- (二三)開かずーあかて

照臨「など己は、密夫し、人と文通はしやはする。然る人をこそは、よきにはし給ふめれ」宰相、實類「かよるをぞ宣ひしぞかし。誰か密なるわざする。疎からぬ御中にこそ。かくな宣ひそ」宮の君、照臨誰かは、宮にある人の限、この盗人をよしといふ。人は幸のおにこそあめれ。ありとある限、御子にもおはせよ、上臈にもあれ、面やは見え給へる。夜晝入り居給へれば、宮人は上のも下のも、わびごとをこそすなりしか。出でて去にたれば、院の御方もまうのほり給ひて、立ちぬる月よりは、さはり物し給はず、惱み給ふなり。こよにも御文賜ふ。御返宣ひ聞えさせすなりにけむこそ、陰陽師、巫、神佛もなき世なめれ。許多の人の、我をもとにて、せぬわざをすればとだに言はずなりにけるこそ。同じくば、この宮、男産み給はなむ、我こそはと思ひて、生み連ねたる者の、口開かず押し伏せつべく」と宣へば宰相の君、實類「天下にいへど、時の人の母とするや。梨壺と世に思ひためれど、何事もあらじ。まして、更にはおはすとも、宮などの、我心よせ

(語釋)

(一) 實忠

(二) 實忠の舊妻の處

(三) 季明の遺言の券

(四) 袖君は遣りてもよし

(五) 實忠がすてたる娘はどの様になりしぞとて

(七) 母子ともに器量よし也

(八) 袖君

(九) あはくして歎、一本「おもほえて」

(一〇) 世話せずして

(一一) あて宮の

(一二) あて宮

(一三) ものーナン

(考異)

(六) 不益一ふよう

(一一) ものーナン

もあらむ」と宣へば、照騰いで、あなかま、給へ」など腹立ち給ふを、中納言聞  
 き給ひ、かたはらいたく思ほす程に、民部卿おはして、物語し給ふついでに、實類先  
 つ頃かの山本にまうでて侍りき。かの宣ひおきし事ども侍りし文ども奉りて、「此  
 方わたり給ひね」と聞えしかば、今更に何しにかは、若き人は然も」などなむ。  
 御服いとおもく著給へりき。不益にしなし奉り給へるは、如何にぞとて、隠れ  
 給ひしかど、見奉りしかば、皆かたち人にこそは。年頃、さばかり物を思しつ  
 つ、服やつれし給へれど、さらぬ人にも多く勝りてなむ。女君は、いとをかしけ  
 にて、見まほしき容貌なむし給ひけるに、御髪のと長けなりしを、搔い越し  
 て見給へりしかば、いとうるはしく覺えて、七尺ばかりにぞありし。頭つき、顔  
 様、いとめでたかりき。かよる人を見給はで徒らになし給ふ、何でふわざぞ。よ  
 き女子は親の面をも起すものにはあらずや。人の容貌を音に聞き給ひて、御身を  
 も妻子をも、徒らになし給はなむ。そこの思ほし騒ぎ給ひし人に、かの君劣り給

(一三) ものーナン

(語釋)

(一)妻を持たんとは思はず

(八)實正の妻の居る廊内にも入りての意歟

(九)襖服を著て居る故か

(考異)

(一)早く―早う

(三)思ひ―思う

(四)時々を―「を」ナシ

(五)にか今更に―にかは今又

(六)ある中らひにも―あるなる子にも

(七)思はさるらむ―思はずらむ

はじや。見苦し。早くともかくもし給へ」と聞え給へば、實忠昔はさても侍りぬ

べかりし。年頃まからねば、忘れ侍りにけむ。今は人見給へむも思ひ給へず。な

ほ彼の賜びたる所におかせ給ひて、時々を訪はせ給へ。こよには、小野にまかり

て、暑き程過して、あるやうに隨ひて、まうで來べくば、時々もまうで來むかし」民

部卿、實正「何せむにか今更に又かへり給ふべき。年頃さて物し給へるを、公私

惜しみ給ひ、交らひのついでなどにも、常に思ひ出でられ給ひつよ、いみじく悲

しくなむ侍る。今はかく、親もおはしまさずなりぬるを、數多ある中らひにもあ

らず、今は斯うて物し給ふに、旅の様に思ほさるらむ。今は、侍る所もいと便な

くなりになり。昔のやうにはあらで、童べの侍る所に入りて見給ひて、同じ所に

物し給へ。何せむに歸り給ふべき」と申し給へば、實忠鈍色のきぬのけにや侍ら

む、いとむづかしう侍れば湯など湧かさせて、物せむとなり。今侍りしやうには

あらで、京にもまうで來なむや」と宣へば民部卿、

〔語釋〕

(三)誤あるべし

賢正いみま今はかくのべ見し人ひともなきものを君きみさへ外ほかへ行いかずもあらなむ  
と宣のたまへば中納言(二)の君きみ、

賢思けんしわが故ゆゑとなけきし路みちにわたれかし君きみがしるべにならむとぞ思おもふ

と聞きこえ給たまへば宰相(三)

賢正いみまなき人の路みちのしるべに君きみなくばおくれて我われもなにか惑まどはむ

(四)

と宣のたまふを宮みやの君きみ聞きこき給たまひて

照陽あつひ有りし世よもかよらばとのみ嘆なげかれて君きみにもつひに後おくれぬるかな

と聞きこえ給たまふ。中納言ちゆうなごんは、御前ごぜんなどして出いで給たまひぬ。民部卿みんぶきやうも、宰相さいしやうも、宮みやの君きみに、

賢正けんせい賢頼けんらい「いかに心細こころほそく思おもはずらむ。今いま、たがひにしほく參まゐらむ。宿直人しゆくぢきんなども

さよせてを」とて殿どのにおはしぬ。

かくて六日むつきになりぬ。民部卿みんぶきやう、そで君きみの御迎むかひ給たまはむとて、三條殿みゆじやうに物ものし給たまひて、

損そとはれたる所ところつくるはせ、池拂いけはらはせ、御調度ごていどどもは、皆みなあれば、置所おきところ有あるべきや

(四)なにかーなどか

(二)の君ーナレ

〔考證〕  
(一)のべ見しーのべにし



(語釋)

(一)「と聞え給へば」衍文なるべし

(三)「わいても」は「わが身は」歟

(四)「いづちこそ」は「いづちにか」と歟

(五)「眼あるべし」

(六)「宣へば」は「宣ふは」歟

(八)「一層深き山に隠れん積なり」

(一〇)「誤あるべし」

(一一)「袖君一人では」

(考異)

- (一)早く一早々
- (七)事ぞ一事ぞや
- (九)斯うても一かくても

うにしつらはせ、御簾かけさせ給ふ。屏風、御帳よりはじめて新しく清けなり。

この殿は一町は檜皮のおとど、板廊、波殿、板屋どもあまた、藏などあり。池近くをかしけなり。三日まで物参るべき事など人々に宣ひて、御車三つ御前などあ

またして、かの籠におはして、近くなれば、我先だちておはして、聞え給ふ、實正「さ

きには、日の暮れにしかばなむ急ぎて。さらば渡らせ給へ、とてなむ。いと暑く

苦しく侍れども、今日ならでよろしき日の侍らざりつれば、参り來つ」と聞え給

へば、實正「なでふ心をか。たどおはすらむまよにて、人見るべき所にも侍らぬ

を」と聞え給へば、實正妻「さらば、早く率ておはしましねかし。わいても、世を憂

しと入りぬめりしを、いづちこそ」聞え給へば、實正「などおもほす事や、いて

こむ、わたらせ給ふまじきさまに宣へば、如何なる事ぞ」北の方、實正妻「こよには

何しにかは。これより深くこそは。世の中の心憂く思ひ給へられしかばこそ、

年頃斯うてもうとからぬ」實正「一所は、かく此處にもいかでかものし給はむ。こ

〔語釋〕

(一) 誤あるべし

(二) 三條の家の跡まは

(三) 侍女の名

(六) 母君の居所も

(七) 内には入りずして

(八) 寶積

(九) 實忠と同様の事

〔考異〕

(四) どももーども

(五) はひ入りてーはひり

(二〇) 聞え給ふ身など心して奉り給ふー門ゆ

の御後見し給ふとおほしてこそは、かく山里には、この君をすまはせ奉り給ふべき。さりととも、此處には劣らじ。そが内に侍る、中納言の君おはせよ。こよよく守りて、人に毀たせて仕うまつれ」と仰せ給ひて、われも御車にておはしぬ。北

の方は、漫に思さるれど、この君を斯くだにあらせむやは、と思しておはして見給へば、いとおもしろく廣くて、調度どももなき物なし。いと清けにて、はひ入り

て見給ふに、物憂がり給ひつれど、斯うてもありぬべしと見給ふ。御座所は、このおはすべきも、姫君のおはすべき方など様々なり。おとどの出居のかたくな

らむと思ほす。人々の曹司などは、いとよくて有り。御藏には、故殿の置かせ給へる、布、錢などあり。こまかなる物などは無し。御前の物などは、宣ひおきた

る人々參る。民部卿は、實正「三日過して參らむ」とて、外ながら歸り給ひぬ。かうて三日過ぎぬれば、新宰相もろともにおはして、實正「いと目やすくおはしぬる。

今一つの事も、いかでせさせ奉りてしがな」と聞え給ふ。物など心して奉り給ふ。

(九)

(八)

(七)

(二〇)

(二〇)

東宮度々あて宮を召す。女四宮懐胎の噂。皇太子の地位につきての正穆一家の危惧。

(語釋)

(一)「つややかにて」歟

(二)大宮

(三)仁壽殿も然り

(四)誤あるべし

(五)此若宮が太子に立たるものと思ひて斯く人が追従するを

(考異)  
(六)思す―思はず

畫詞

こよは三條殿。

かくて藤壺には、御心地も今はさわだち給ひにたれど、大殿はなほおはしまして、  
勞り奉り給へばにやあらむ、殊に損はれ給はず、づしやかにて、あてになりぢり  
給ひて、めでたくおはす。綏の搔練のひとへがさね、二藍の織物のきぬ、脱ぎか  
けておはするを、おとど見奉り給ふ。君だちのおはするに、正親、若き主たちにな  
らひ給へ。子持はかくぞ勞りなすよ」と宣へば、誰もくはよ笑みておはさうす。  
宰相の君、祐造、人がらにこそ物し給ふめれ」おとど、正頼「わが御方も、かく恐ろしけ  
なる人こよら作り出で給へれど、然りけにやは。内裏のなどよ」と宣ひて、若宮  
の御方を見やり給へば、やんごとなき人参りつどひてころたちて、此方などにも  
わたり給はず、いときらしくしておはするを、如何ならむ、人々の然思ひてかく  
はあめるを、恥や見むすらむ、と思すほどに宮より、  
東宮日頃は如何。うちはへ、此處には惱ましくなむあれば、まだえ對面せずやと

〔語釋〕

(一) 生兒と共に參内あれ

(二) 歎く様にして退出せられて

(三) 文もやるまじと

(五) 女四に仕ふる

(六) 御懐胎の御様子

(八) 「おほんせうし」は「御子うみ」歎

〔考異〕

(四) 外に―外にて

(七) 申しと―申しさふら

(九) せう―せうそこ

思ふに、そこには怪しうは物し給はじを、下局にやは。うしろめたくはこそ。  
 (二) 人もろ共によ。いでや

君をまつわがごとわれを思ひせばいままでこよに來ざらましやは

思ふこそ妬く。まかでられし時も、よかるやうにて、かく數にも思はれざめ

れば、しばしはものせじと思へど、怪しく心より外に。  
 (三)

となむあるを御方、あて寫、あな怪しや。たどにてやは。例の憎け言し給ふめり。あ

ないとほし」とて、あて寫、此の頃は、誰々かものし給ふ。いづくにか御使は遣はず。

内裏わたりには何事かある」と宣はすれば、僕、此の頃は、例の御書あそぼしなど

はせさせ給はず、御心地惱ましとて。まうのほり給ふ事は、院の御方にこそは。

其處にさふらふ左衛門といふ人、忍びて申しよは、五月ばかりより御氣色ありて

惱ませ給ふ、となむ申しよ。御使は、一日まるり侍りしかど、申すまじき事なれ

ど、内裏わたりには、梨壺の御方のおほんせうし給へる事をなむ、やんごとなき

(八) (九)

(六)

〔語釋〕

(一)恰も東宮即位の時に當りて皇子の生れたる事喜ぶべし

(四)梨壺にも早く内裏へ歸る様にと東宮より御文あり

(五)「おとよかの事は」なるべし

(六)梨壺

(七)梨壺腹の皇子の太子に立たれん事は

(八)實正のみは我が味方ならん

〔考異〕

(一)見れどー見れば

(三)通はさせー通はせ

所々、よろこばせ給ふなる。ある所には「物の筋といふもの、絶えぬと見れど、つひには出で來ぬるものなりけり。かよる折にあはせ給へる事」とて、常にある所には御文通はさせ給ふとなむ承る。かの御方も、とく参り給へと侍るなる」と聞ゆ。宮の御返、

あて宮承りぬ。惱ましげに宣ふなるは、如何やうにか。いと多く聞えさせぬ。此處にも、なほいと苦しくなむ侍れば、え参り侍らぬことや。待つ我がとか侍るは、

下葉よりしたより色はかはりつゝまつとは更に言はずもあらなむ

とて奉り給ひつ。正頼「かの事は」おとど、正頼「空言にあらじ。内裏の后、いとおぞく心かしくおはし給ふ。やんごとなき人に御子たちうまれ給へらば、必ず然思すらむ。后宫、大臣、公卿たち、心を一つにし、例を引きてこれをと申さむには、何の疑かあらむ。我は馬にまじりたらむ牛の様に、何事をかは。民部卿ばかり

- (語釋)
- (一)季明
- (二)我が血筋を帝位に立てたしと
- (三)あて宮を取返したりとも
- (四)あて宮自身
- (五)「子のはてに」歎
- (六)「子のはてに」歎
- (七)忠雅の態度を見たく思へど
- (八)詔あるべし
- (九)皇太子を梨壺腹に
- (一〇)名宮が
- (一一)立六子疑なしと思ふ折に
- (一二)太子に立たると御運のなきなるべし
- (一三)「子にて」は「御子にて」歎
- (一四)梨壺あるべし
- (一五)梨壺腹の皇子の太子に立たると噂と
- (一六)「考異」
- (一七)何か「何かいと
- (一八)「何かいと何かいと
- (一九)「何かいと何かいと
- (二〇)「何かいと何かいと
- (二一)「何かいと何かいと
- (二二)「何かいと何かいと
- (二三)「何かいと何かいと
- (二四)「何かいと何かいと
- (二五)「何かいと何かいと
- (二六)「何かいと何かいと
- (二七)「何かいと何かいと
- (二八)「何かいと何かいと
- (二九)「何かいと何かいと
- (三〇)「何かいと何かいと
- (三一)「何かいと何かいと
- (三二)「何かいと何かいと
- (三三)「何かいと何かいと
- (三四)「何かいと何かいと
- (三五)「何かいと何かいと
- (三六)「何かいと何かいと
- (三七)「何かいと何かいと
- (三八)「何かいと何かいと
- (三九)「何かいと何かいと
- (四〇)「何かいと何かいと
- (四一)「何かいと何かいと
- (四二)「何かいと何かいと
- (四三)「何かいと何かいと
- (四四)「何かいと何かいと
- (四五)「何かいと何かいと
- (四六)「何かいと何かいと
- (四七)「何かいと何かいと
- (四八)「何かいと何かいと
- (四九)「何かいと何かいと
- (五〇)「何かいと何かいと
- (五一)「何かいと何かいと
- (五二)「何かいと何かいと
- (五三)「何かいと何かいと
- (五四)「何かいと何かいと
- (五五)「何かいと何かいと
- (五六)「何かいと何かいと
- (五七)「何かいと何かいと
- (五八)「何かいと何かいと
- (五九)「何かいと何かいと
- (六〇)「何かいと何かいと
- (六一)「何かいと何かいと
- (六二)「何かいと何かいと
- (六三)「何かいと何かいと
- (六四)「何かいと何かいと
- (六五)「何かいと何かいと
- (六六)「何かいと何かいと
- (六七)「何かいと何かいと
- (六八)「何かいと何かいと
- (六九)「何かいと何かいと
- (七〇)「何かいと何かいと
- (七一)「何かいと何かいと
- (七二)「何かいと何かいと
- (七三)「何かいと何かいと
- (七四)「何かいと何かいと
- (七五)「何かいと何かいと
- (七六)「何かいと何かいと
- (七七)「何かいと何かいと
- (七八)「何かいと何かいと
- (七九)「何かいと何かいと
- (八〇)「何かいと何かいと
- (八一)「何かいと何かいと
- (八二)「何かいと何かいと
- (八三)「何かいと何かいと
- (八四)「何かいと何かいと
- (八五)「何かいと何かいと
- (八六)「何かいと何かいと
- (八七)「何かいと何かいと
- (八八)「何かいと何かいと
- (八九)「何かいと何かいと
- (九〇)「何かいと何かいと
- (九一)「何かいと何かいと
- (九二)「何かいと何かいと
- (九三)「何かいと何かいと
- (九四)「何かいと何かいと
- (九五)「何かいと何かいと
- (九六)「何かいと何かいと
- (九七)「何かいと何かいと
- (九八)「何かいと何かいと
- (九九)「何かいと何かいと
- (一〇〇)「何かいと何かいと

こそは。太政大臣だにも物し給はましかばこそは。物のあしきにやあらむ、折し  
 もこそあれ、物し給はず。子どもとてあるは、下臈なり。院かくて物し給へど  
 も、わが筋をと思さむ道理なり。女子をば、何とかは心憂しと思ひて、子ともを  
 あらせ奉らずとも、わが身ぞ、寡にて徒らにならめ。何の面目かあらむ。それは、  
 皆思ひたらむかし。いみじき恥をも、老のなみに見つるかな。太政大臣の御氣色  
 は見むと思へど、おこはまだしう物せぬ」と宣へば藤壺、あて宮「何か、むつかしう  
 は思はず。まことに定め果てられぬと聞召すとも、夢ばかりものしき氣色にな。  
 この折に人々の御志どもを見給へ。人の志のみこそ、哀にもつらうもあれ。  
 年頃かくて物し給へるに、然もあらでしもや、と思ふ折にかゝる事のあるは、え  
 然るまじきにこそは。また子にておはするには、などかは。吾が佛、さき生ひの  
 子のとてふ事も有るを、聞召したる氣色、ゆめ人々に見え給ふな」と聞え給へば、  
 正頼「あないみじや。若宮をば、いかでかたど、御子にては見奉らむ。かゝる御

(語釋)

(一)誤あるべし

(二)嵯峨院の懸なる仰は帝も背き給はじ

(三)若宮以外に太子の立たるく機ならば口出しせんとす

(六)女四宮に女兒の生るる導もあるべければ

(八)折かへし此文を遣る

(考異)

(四)御位一わうゝ

(五)一つにして一つにて

(七)宣ひておはす一宣ふ

事よ。思はずなる御心ぞや」とほろとく泣き給ふ。左衛門督、思違、何かは、思さじ。よに然るやう侍らじ。こと人々は知らず。おほき大殿腹なるを、え思し棄てじ。何處にも、いかで見給ふれば、疎なる御中どもにも侍らざらめり。いかでか御爲にうしろめたき心は」大宮、「これはさるものにて、四の宮の男、生み給ひつらむ時まで定まらずばぞむづかしからむ。院の切に聞え給はむ事は、いかでか」おとど、正類「それは、天下に御眼、七つ八つつき給へる男、一度に三つ四つうまれ給ふとも、さかしら、さしいらへせむとす。世を政ちなれ給へる御位だにも、下の諸口と申す事は、え否び給はぬことなり。そのかみ、聲も男も、心を一つにしてうれへ奏せむ、これこそむづかしけれ。それも、よう思ふ時は、女兒もあれば、さりともと思ふものを」など宣ひておはす。

かくて又宮より御文あり、

東宮、心ゆかぬやうに有りつれば怪しさに、(八) たちかへり。何と聞き給へるやうやあ

〔語釋〕

(三)かく御文のあるは

(五)此下脱文あるべし

〔考異〕

(一)みたのとり―えたとか

(二)すみのえは―すみよしは

(四)淵瀨思ひ―淵瀨をば思ひ

る。ことよには更に思ほえずなむ。人々に消息したりしに、それも、此頃は惱ま

しくて、物せず。みたのとり草木だに、待たずともなるめれ。あなすどろや。

うちはへてまつのみ繁るすみのえは下葉も枝も何かかはらむ

とのみを、己平かにてぞ。何事もかくては得こそ。

と宣へれば、おとど見給ひて、正類「かく宣ふめるを、参り給へかし」御方、あて宮「何

しにか。梨壺参り給ひなむ。人少なればこそあらめ」とて御返

あて宮み山木の下には風のはやくとも枝には露もすぐなとぞ思ふ

數ならぬ身の、淵瀨思ひ給へすや。

とのみ聞え給ふ。

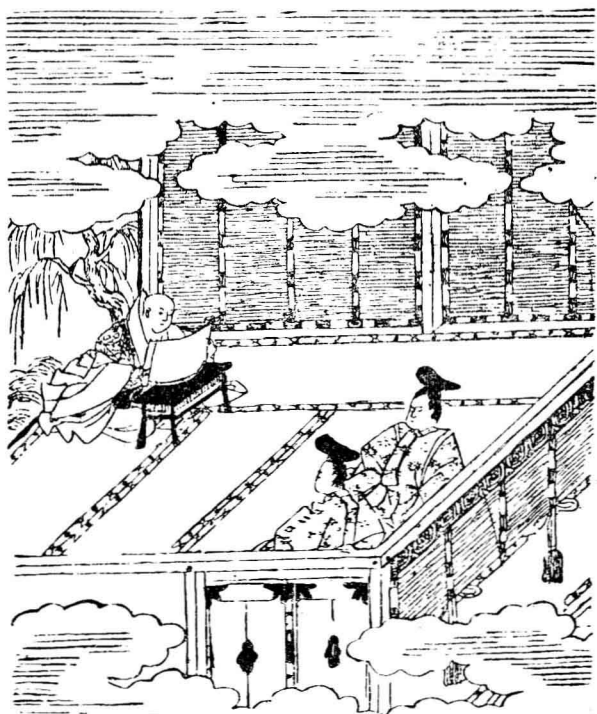
かくてこの生れ給へる御子をば、今宮と聞ゆ。御湯殿参りて、寐起きたまへるを、

大宮はいだき給ひて、大宮をかしくもおはするかな。たど若宮にこそあめれ。こ

れはわが子にし奉らむ

(五)





●女一宮懐胎、彈正宮の  
見舞、仲忠の痛心、兼雅、  
仲忠を打きて立太子に關  
する、后宮の密旨を告ぐ、  
仲忠、思こそを招きて女  
一宮を加持せしむ、帶を  
思こそに示す。

【畫詞】 ことは豈なり。

かくて一宮五月より孕み給ひぬ。此度はいたく惱み給へど、大將の君には、さも  
知らせ給はず。たゞ御心地なやみ給ふ様にてあれば、思ほし騒ぎて、祭祓せさ  
せ、所々にも御修法おこなはせ給ひて、ありきし給はず。女御の君もおはしまさ  
ねば、夜晝、醫師、陰陽師、驗者など召しつとおはしますに、彈正宮と御物語し  
給ふ。女二藤壺の里にもものし給ふ時に、まうでて物申さむと思へど、この月頃は  
殿など物し給ふめれば。はじめまうでたりしに、物騒がしくて、物も申さでまう  
で來にき。人の志は、いとよく見知り給へるにこそあめれ。新中納言出だし給ふ  
を見れば」忠康、まろが志を知り給はぬにやあらむ」女二「とこそ語り給ひしか。  
大宮さる事ありと宣ひけれ」と聞え給へば弟宮、忠康かひなの事や。あまり侮ら  
れて、過せられ給はむに、誰もく何わざかし給はむ。幼かりければこそ、然り  
ぬべき折有りけれど、人々の心をつよみつよ。今ならましかば、かく妬き心地せ

(一) 仲忠妻

(二) 正類

(三) 賢思

(四) 潤あるべし

(語釋)  
(一) 誤あるべし

(二) 我を高官に任じ給ふとも我にあて官がつけなかりし報は必ずすべしの意歟

(四) 女一宮

(考異)  
(三) などにやーなどや

ましや」女宮、女「あなむくつけ。如何は宜ふ。人をば徒らになさむと思すか。

いとど、この見ゆる物さぞあらむといふものを、戯にてもあなゆよしや」と宜へ

ば、忠慮よく宜ふなめり。心ある人の、思ふことをぞ知るかし。たど今かく有る

ほどなめれば、まめやかには然も思はず。世中定まりなむ時、大臣たかき位に物

し給ふとも、憎くもてなし給ふらむ本意とけむとす」と宜へば、いみじく怖ぢ給

ふ。

かよる程に大將入り給ひて、仲忠「今の程は、醫師どもに問ひ侍れば、熱などにや

おはすらむとなむ。物問ふには、靈氣とぞ。されば、眞言院の律師のもとに、消

息言ひ遣はしつ。参り來ば、護身せさせ奉らむ。三條より、「言ふべき事あり」と

度々侍るを、たど今の間にまかりて、いと疾くまうで來なむ」とて参りぬ。

仲忠「召侍りけるを、即ち候はむとせしかど、彼處に侍る人の、日頃いたく惱み給

へば、女御など物し給はぬ程なれば、見譲る人なくて、免さふらはす侍りつる」北

〔四續〕

〔二〕懐胎

〔三〕兼雅の同胞也

〔四〕立太子の事をいへる也

〔五〕梨壺が歸らぬとて催促せらるれば

〔六〕梨壺を

〔七〕謗なるべし

〔八〕謗なるべし、鎌倉時代の謗に「齒のなき間の貂はこり」といへると同義なるべし

〔一一〕正か方より

〔考異〕

〔二〕なむ―なむ侍る

〔九〕なき間の―まへの

〔一〇〕仲忠は―は「ナシ

の方、俊隆女「え更に承らざりけり。如何様にか。などか、斯くなど宣はざりし。参りて見奉らましものを」大將 仲忠「知らず。靈氣などいひて物まゐらずなむ有りつるを、昨日今日は重くなりてなむ」おとど、兼雅「いとほしきかな。参るべうこそあめれ。もし前にありし筋にやあらむ」と聞え給へば、仲忠「さも見え侍らず。然りし時も、かくは物し給はざりき。さても、程なくは如何」と聞え給ふ。おとど、兼雅「消息申したりしは、後の宮より宣ふ事なむ有りし。如何なる事にか、思ふ時には、然もありぬべき事なれど、世の亂となり、騒がしかりぬべき中に、天下にまさる心ありと、誰々も思ほえし」となむ。如何なる事ぞ、と申さむとてなり。宮もかしこ参らずと宣ふめるに、今宵なむ参らせむと思ふ。藤壺参り給ひなば、しやうぞくの薫物のやうなるべし。鼯のなき間の鼠としも仕うまつれとなむ」(七)と宣へば、仲忠「如何なるべき事にか侍らむ。仲忠は、いかでかとり申さむ、殿の御爲にやごとなき事なり。それによりて、侍らむ所に思ひ疎まれむも苦しう

(八) (九) (一〇) (一一) (一二) (一三) (一四) (一五) (一六) (一七) (一八) (一九) (二〇) (二一) (二二) (二三) (二四) (二五) (二六) (二七) (二八) (二九) (三〇) (三一) (三二) (三三) (三四) (三五) (三六) (三七) (三八) (三九) (四〇) (四一) (四二) (四三) (四四) (四五) (四六) (四七) (四八) (四九) (五〇) (五一) (五二) (五三) (五四) (五五) (五六) (五七) (五八) (五九) (六〇) (六一) (六二) (六三) (六四) (六五) (六六) (六七) (六八) (六九) (七〇) (七一) (七二) (七三) (七四) (七五) (七六) (七七) (七八) (七九) (八〇) (八一) (八二) (八三) (八四) (八五) (八六) (八七) (八八) (八九) (九〇) (九一) (九二) (九三) (九四) (九五) (九六) (九七) (九八) (九九) (一〇〇)

(語釋)

(一) 脱文あるべし

(二) 「ちとよ」なるべし

ナ (四) 梨壺の御供にも行か

(考異)  
(三) かへりまかて

なむ。たゞ后きさひの宮みやの宣のたまはむ、奉たてまつり給へ。非常フゼウと見る事ことも侍らば、いとよき事ことなり」と聞きこえ給へば、いとゞ、兼雅(二)身の爲ためには、いとよかるべき事ことなれど、大方おほぶたさわ騒さわがしかるべければ、こゝにも然さぞ思おもふや。さらば早物はやせられよ。つとめて此處こゝにもまうでむ」と宣のたまへば、大將たいしやうかへり給ひぬ。梨壺なしつぼ、御車おくるま二十ばかりして、御前ごぜんいと多くて参まゐり給ひぬ。うまれ給へる宮みやは、母宮ははみやのもとにおはす。

畫詞

こゝとは三條殿。

かくて大將たいしやう歸かへり給ひて、宮みやに、仲思なほおも「今の間まはいかど。言いふべき事こと有あり侍はべりしかば、まかりたりつるに、やん、ことなき事ことども申まされつれど、僻答つがいらへをなむしてまうで來きぬる。さるは、梨壺なしつぼ、今宵こまじぞ参まゐられける。されど、其方そなたにもまからずなりぬ。里人さとびとも今参いままゐらむ」と聞きこえ給ふほどに、「律師りし参まゐり給へり」と申まうせば、仲思なほおも「なほ此方こなたに」とて、簀子すのこに御座敷おまししかせて請まうじ入れ給ふ。仲思なほおも「これは恥はづかしき人ひとぞや」とて直衣なほしきうやく装束さうくにて出いで給ふ。律師りしは、綾あやの装まいと清きよらにて参まゐり給へり。姿すがた、顔頭かほかしらつき、

〔活釋〕

〔四〕させむは作善歟

〔五〕忠こそは生佛なれば  
とて頼みたる也

〔考異〕

〔一〕大將―ちとよ

〔二〕大將―ちとよ

〔三〕給ひつるをなむ―給  
へるをなむかしこう思ひ  
給へるまで

いとめでたう、御供の者ども、装束清らに、容貌よき、十人ばかり、若法師十人、

大童子三十人ばかり、〔一〕擗榔毛の車の新しき〔二〕に乗りて参り給へり。中門より、大童

子はとどめて、侍〔三〕、法師、童して入り給ひて居給へり。大將〔四〕、仲忠〔五〕、宮の中などに

ては、對面賜はれど、その事となくては、え取り申さぬ事をなむ。さるは、昔よ

り志〔六〕、侍れど、自然に怠り侍りてなむ」律師、忠こそ「山伏も、いかでかと志し侍

れど、殿の仰せごと賜はらぬを嘆き侍るに、たましく仰せ給へれば」と申し給ふ。

大將、仲忠いと嬉しくて。こよにも數に思さねばや、訪はせ給はざらむ、と思

ひ給へるに。内裏の召などにも参り給はぬ時おほきを、如何ならむと思ひ給へる

に、かくものし給ひつるをなむ。消息聞えたりつるは、此處に、立ちぬる月の晦

より惱み給へるを、日頃重くなりまさりてなむ。これかれに物問はせ侍れば、邪

氣など申す。させむなど行なはせ侍れど、なほ心もとなきを、たゞ今は現れたる

薬師佛にこそはとてなむ。一夜二夜ばかりものせさせ給へ」と聞え給ふ。忠こそ「心

〔一〕

〔二〕

〔三〕

〔四〕

〔五〕

〔六〕

〔七〕

〔八〕

〔九〕

〔十〕

〔十一〕

〔十二〕

〔十三〕

〔十四〕

〔十五〕

〔十六〕

〔十七〕

〔十八〕

〔十九〕

〔二十〕

〔二十一〕

〔二十二〕

〔二十三〕

〔二十四〕

〔二十五〕

〔二十六〕

〔二十七〕

〔二十八〕

〔二十九〕

〔三十〕

(落釋)

(二)后宮より召されて、行かずに此方へ来られしを、疎末にしては勿體なし

(三)女一方へ

(四)懐胎を仲忠に知らせぬをいふ

(七)御懐胎の事を仲忠に申上げむ

(考異)

(一)侍りつれど一侍れ

(五)もとと一大将

(六)心して一志ありて

(八)もとと一大将

には、久しくさふらひ候ひなむを、佛と宣はするなむいと恐ろしくて、まかり逃げぬべく。此の頃は、所々に斯くなむ。后宮の姫宮も、かくなむ惱ませ給ひて仰侍りつれど、まづ殿にをとてなむなど聞え給ふ。大将、仲忠「おほやけの御許よりだに然りけむ御心を、恐ろしや。奥の方におはしませむ」とてしつらはせて入れ奉らせ給ひつ。

かくて「まうのほり給へ」とあり。南の廂に、よき御屏風立てたり。例の空薫物

などして参り給ふ。かくて宮に、内侍のすけの申し給ふ。ナリ「いと腹きたなくお

はします。これは何の罪にてある御心地にもあらず。知らせ奉り給はねば、お

とどはさわぎ給ふ。それはとまれかうまれ、生きてはたらき給ふ佛と言はれ給ふ、

加持参り給へば、ともかうもこそあれ、かよる人は、さる心してこそ加持まるれ。

いと恐ろし。おとどに聞えむ」と申せば宮、女「何心地とも知らず、いと苦しき

は、死ぬべきにこそあんめれ」と宣へば、ナリ「あなさがなや」などむつかりの給

(語釋)  
(五)山より

(七)故なく聞くわけにも  
ゆかぬを

(考異)

(一)見給へつるを給へ  
るを一つるを  
(二)おはしけりーおはし  
ます

(三)佛神ー神佛

(四)多うはーおのれは

(六)思ひー思う

(八)思ひー思う

(九)仕うまつるまじかな  
るー仕うまつり合すまじ  
かなる

へり。律師は加持參り給ふ。さらに、はやき陀羅尼讀ます。童より、聲かぎりな  
く有りし人なれば、まいていと尊し。

曉になりて、大將殿、仲忠世の中のこと、とざまかうざまに、皆承り見給へ  
(二)

つるを、この御陀羅尼をのみなむ、音に承れど、まだ承らざりつる。けにいと

尊くおはしけり。いかで秋深からむ程に、木葉の降り落ち、風の聲心細からむ時、  
(二)

人の聞かざらむ山里にて琴に合せて承りにしがな」律師、忠こそいと尊き仰せご  
とにも侍るかな。たゞこれをのみなむ、夜晝佛神にも申し侍る。御琴なむ、昔ほ

のかに承りて、多うはこれによりてまかり出でしなり。されど、仰せごとをだ  
(四)

にえ承らざりつれば、思ひ給へ嘆きつるを、かく仰せらるれば、思ひの叶ひ侍  
(六)

るなりとなむ。わいても、御琴の音は、いと承らまほしく、たゞにもえ仕うま  
(七)

つるまじきにぞ思ひ給へわびぬる」仲忠「琴ぞ、え仕うまつるまじかなる。そもく  
(八)

いと怪しくて、御行につき給ひけるは、などてにて侍りけむ。春日にて見奉  
(九)

いと怪しくて、御行につき給ひけるは、などてにて侍りけむ。春日にて見奉



(語釋)

(二)此間脱文あるべし

(四)繼母の乞食になりたるにあひて

(五)侍りし歟

(六)其身の事と

(七)脱文あるべし

(一〇)正頼

(六)侍るなるべし

(考異)

(一)言ふこと一いひかくること一いぶかしきこと

(三)え知らず思ひ給へ

(八)責め—せめて

(九)給へば—給ふ

り侍りしは、いとこそ悲しう侍りしか」思こそ「山にまかり籠りし故は、いといみじき事の侍りけるを、更に知り給へざりき。たゞ漫に物悲しく、世には侍るまじき心地のせしかば、親をも見捨ててまかり出でにし。その人、繼母に侍りし人なり。宮仕侍りし程に、言ふことの有りしを、その事便なかりしかば、聞かぬやうにて侍りしに、怨じたるにや有りけむ、親に、怪しき事を申しけるを、え知らず、思ひ給へ嘆きしを、不意に異様にて逢ひて侍りしに、「など斯くはなりにたるぞ」と問ひ侍りしかば、「繼子なりし人の爲に、親の寶とする帯を取り匿して、これを賣らすと言ひ、帝かたづけ奉らむとすと奏しけり、となむ聞かせ給へ」と申しよを、山伏の上に聞きなし侍りて、その日つひに後の事まで、先つ頃知り侍りにき。

(六) 此事を聞き侍りしかば、いとよう逃けてけりとなむ。然ることを聞き給ひて、責め宣せざりける親の御心なむ、いとかなしき」と申し給へば大將、仲思、恐ろしかりける人の心にこそは。その事は、左のおとどぞ宣ひしや。然る事ありける帯は、

〔解釋〕

(二)千蔭、忠こそその父

(三)忠こそが居合せたら  
は與へんと思ひしに

〔考異〕

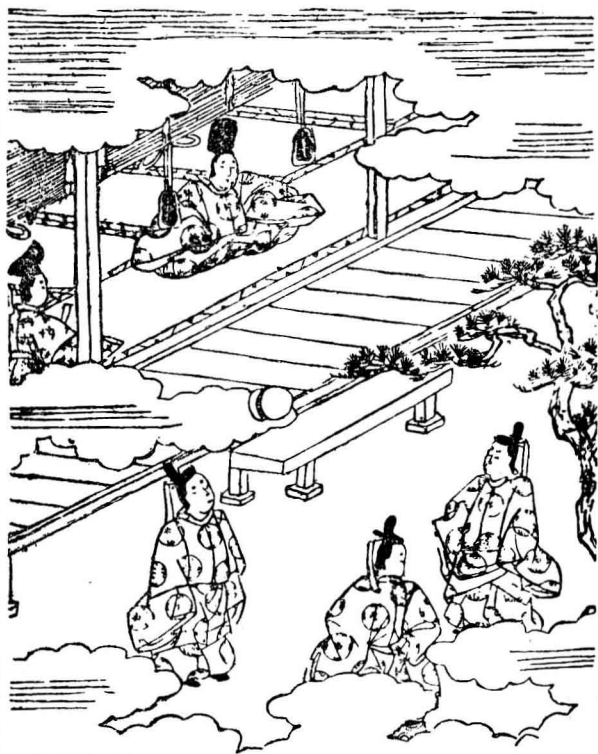
(二)仲忠の—仲忠が

(四)侍り—ナン

(五)仕うまつりし—つか  
まつりしに

(六)侍る今暇に—侍りけ  
る今—侍るを今しも

仲忠のもとに侍り。このおとど、亡せ給はむとて、「そこに物し給はどと思ひしを、  
 (一)今は誰にかは」とて、院になむ奉られたりけるを、内裏になむわたりて侍りける  
 (二)を、去年の十二月に御書仕うまつりし祿になむ賜はりて侍り。けに世になきいみ  
 (三)じき寶にこそは。かよる物を、然間えなしけむが恐ろしき」律師、忠こそ「さる禍  
 (四)になむあたりて侍りし」大將、仲忠「この帶は、物し給はましかば、御物とぞなら  
 (五)ましか。奉りてむとなむ思ひ給ふる」律師、忠こそ「山伏は何の料にかし侍らむ。僧  
 (六)の具に玉の帶さし侍らばこそあらめ。もて侍らましかば、とかくの事、殿ばらに  
 (七)こそ奉らましか」大將、仲忠「たどそれかと見給へ」とて見せ奉り給へば、律  
 (八)師見給ひて、いみじく泣き給ふ。忠こそ「この帶は、故千蔭の内宴にまかり出で給ふ  
 (九)とて、装束し給ひしになむ、見給へし」と聞ゆ。大將、仲忠「この春日に侍りし少將  
 (一〇)仲頼の、入道して侍るとぶらひに、その時の同じ人々などこれかれ、今は仲忠  
 (一一)もかく上達部にて侍り、あるは頭なんどにても侍る、今暇に訪らひにまからむと  
 (一二)



(一) 女一宮

(二) 兼雅

①兼雅女一宮の病を見舞ふ。頼朝、仲忠女二宮を隙見す。兼雅正頼に小倉の遊覽を約す。

(三) 承りになむ」歟

(考異)

(四) など一ナレ

す。そのかみ御前にてあそび侍りし頃、戀ひ申し給ふ事はまり無し」かくて明けぬれば、御方へ下り給ひぬ。大將、御心とどめて、家司どもに仰せ給ひて御前に物奉れ給ひつ。

畫詞

こよは大將殿、加持參り給ふ。

かくて宮わづらひ給ふとて、右大臣殿參り給へり。左大殿、大將、いそぎて御迎して入り給ふ。右の大殿、左の大殿にきこえ給ふ、兼雅「こよには、惱ませ給ふ事のおはしける。如何様にかと、承りなむ參りきつる」左のおとど、雅頼正頼も然承りになむ參り來つる。さいつ頃より、かく承れど、けしうはおはせずと有りしを、この山箒の律師など否されけるに驚きてなむ。ことに、そこはかとある御心地にはあらで、起り給ひなどして、物まるらずとなむ。かたへは暑氣などにやとて見給へ侍る。日頃は、かく極熱の頃に侍れば、苦しうて、内裏にも參り侍らず」右のおとど、兼雅兼雅も、久しう參り侍らず。さるは、御國護のこと近

〔語釋〕

(一) 梨羹

(二) 忠澄

(三) 近澄

(四) 仲忠

(七) 誤脱あるべし

(八) 何も召しあがらざに

〔考異〕

(五) 大將殿—大將のもと

(六) 大將殿宮に—大將宮に宜ふ

(九) かしこ—もそろしや

くなり侍るを、宮へも参るものの侍るをいとあつしく侍りて、片時見給へ棄てが  
たう、引き入れておき侍りしを、辛うじて出だし立て侍りし。この惱ませ給ふと  
承り驚きてなむ」かくて御菓物参り御物語し給ふ。

かくて右のおとど参り給ひぬとて左衛門督の君、藏人の少將、宮あこの侍従など  
参り給へり。宮たち、おとどたち、「いざ、かよる所にて脚病勞らむ」と宣ひて、

楓の青やかに茂りたるもとに立ち出で給ひ「をかしき鞆のかよりかな」と興じ給  
ひて御鞆あそばす。皆上手なり。人々装束し給へり。宮たち、おとどたちは直衣

奉り。大將殿、藏人の少將、鞆も上手、様もよく見ゆ。宮たち、「怪しのわざ  
や」とて御覽す。暮れぬればみな入り給ひぬ。宮たちは、二の宮の御方に入り給

ひぬ。

大將殿、宮に、仲忠「今日は、例の風のいもるに」御前なる人々、「まして今日はい  
と物清くてくらさせ給ひぬ」ときこゆれば、仲忠「あなかしこ」とて水飯してまる

(一) 語者

(二) 水飯を食はせて

(四) 女二宮の方を警戒せよと注意する也

(六) 此處腹股あるべし

(九) 女二宮姫宮

(考異)

(一) 見給はねば―入れ給はねば

(三) を―ナレ

(五) いかで聞き給へらむ―いかでかき給ふらむ

(七) 給ひつれば―給へる―見え給ひつるは

(八) いと―ナレ

(一〇) たれば―たるに

り給へど、御目ふたぎて見にだに見給はねば、犬宮膝にするて、さしくよめて参りて、仲忠「御徳をも見給ふるかな」と宣へば宮、女二あつし。簀子にを」と宣へば、仲忠「昨夜をだに思ふ所に、今宵居眠ぞ用なきや」と宣ひて臥し給ひて、仲忠「かの御方に、いざとく人候へ。聞く様有り」と宣へば乳母胸潰れて、いかで聞き給へらむと。藏人の少將も、簀子に居給ひて、かの人見え給ひつれば、右大將殿とほくてさし出で給ひ、仲忠「あなかしこや。人去ぬれど、いと怒ろしき兵ありくなり。外にては知らず、此處にてはいとさがなからむ」と宣へば、宮たち御目もさめて起き居給ひぬ。乳母は、身も冷えはてて、我にもあらで居たり。かくて曉になり、御格子もおろさず。二の宮の御方と此方とは、高き御屏風立てたり。おはする所近ければ御屏風にて隔てたるなりけり。大將この折宮たち見奉らではいかでかと思ひて、一の宮いとよく御殿籠りたれば、脇息を踏みたてて、御屏風の上よりのぞけば、明けぬとおほえて、男宮たちは皆御殿籠りたり。二の

〔語釋〕

(二)小川を足さんとして

(四)ゆふらうは「遊覧」  
敷、又は「納涼」の隠語、一

本「いふらう」

(七)御隠位之事

(一〇)正頼の心を探る爲  
に

〔考異〕

(一)かたびらは「かたび  
らは御たち

(三)給へる「給ひつる

(五)さて「まで

(六)さて「も」も「ナレ

(八)なれど「なれば

(九)をもの「ナレ

宮は、御几帳のかたびらは、うち懸けてまだおろさず、起き給ひて、いさよかな  
る事せむとおほして入り給へるを、いとよく見奉り給ふ。白き綾一かさね奉  
りて、御髪なども、御殿籠りふくだめたれど、いと氣近くうつくしげなりと見る。  
姫宮も、起きあがり給へるを、これはまだ小くかたなりにて、あてなり。よくも  
生みあつめ給へる御子たちかなと見て居給ひぬ。  
(三)

ほのぐとをかき朝ほらけなれば、おとどたち勾欄におしかよりて居給ひつよ、  
右のおとど、實正昔斯かりし極熱に、この釣殿へこそは度々のふらうしに参りし  
か。今日さて侍る人をや」左のおとど、正頼「今日も、昔のやうにせむかし。別い  
ても、朝涼にこそは。さても公の御いそぎは、眞實に、月や定まりて侍らむ」右  
のおとど、兼雅「この八月ばかりには承れど、確にはまだ承らず。朱雀院み  
な造り果てたんなれど、なほ疾く急ぎて、あるべからむ事をものせよ」と仰せらる  
れば、さらば思し惱むことも侍らむかし。言はせしめ給へや」左のおとど、  
氣色  
(二〇)

〔語釋〕

(二)なりぬるを「歎

(三)兼雅の桂の別荘近ければ也

〔考異〕

(一)月も一月の

(四)すさみなども―すみなし

(五)承はりて―承はりぬ

(六)如何…入りて侍る―ナシ

●近邊等の女二宮に對する熱心。

(七)女二宮

(八)聞えおき給へれば―聞え給ひつれば

見むとて宜ふにやあらむ、と心づかひし給へど、誰もく、何心なくうち語らひ給ふ。大將殿は、御酒など參らせ給ふ。右のおとど、兼雅「かく惱ませ給はずば、月も残、少くなりぬる、小倉の方へ御前たまはらむと思ふ給へるを」と聞え給へ(二)左のおとど、正頼「何か、さやうにすさみなどし給はど、怪しうはあらじ」と聞え給ふ。兼雅「さらば、承はりて、嘔がたにおはしませむ。昔御覽せしよりは水なども深くなり、魚もいと多く棲み侍り。如何なるにかあらむ、山の前より川なむ入りて侍る。賣り買ふものどもは、家の中よりなむ往き返り侍る、御覽せさせばや。春秋は、昔よりも木の數もあまたになりて、いとをかしく侍り」など聞え給ひて、みな還り給ひぬ。

かくて二の宮、姫宮は、このおとどの西の方におはします。彈正の宮は、二の宮の御乳母など具しておはしませど、女御の君の聞えおき給へれば、二の宮の御許に、夜も晝もおはします。藏人の少將、いかでなどは思せどおとど宮おはしまい



(語釋)

(一)様子ありげに女二宮に物申上ぐる女中あるとき

(三)女二宮の

(四)宮より「はかく」の誤歟

(五)懐胎

(七)國母

●仲忠、女一宮の懐胎を悟る。

(考異)

(二)リリーナ

(六)こそとぞ

て、いさよか氣色ありて物聞ゆる御たちもあれば、氣色あしく宣へば、物聞ゆる人もなし。この二の宮に思ひ困じたる君たちは、皆御たちにつきて、物取らせつ、「盗ませ奉れ」と宣ふも有りけり。藏人の少將は、中納言の君とて、御身につき仕うまつる人に、萬の財物を取らせ給ひつよ、「盗人に人れよ」と宣へど、さるべき折もなし。如何ならむ隙に入らむと、うかどひ給ふ人々あまた聞ゆる中に、五の宮より切に聞え給ふ。

宮より聞ゆる程に一の宮の御心地を、かよる筋に大將見なし給ひて、仲忠「さりと著く思さるらむものを、宣はせで、心魂を惑はかせ給ふものかな。なほく斯くことくしき御心こそ。世中に佗しかりしは、内裏にさふらひ困じて、南の宮に、御迎にとて参りて侍りしかど、はしたなく宣ひしに、えまからざりしに、藤壺の、國の親となり給ふべき御心なればにやあらむ、局などして賜ひしに、出で給はでやはせ給ひしこそ、忘れがたく。相思さぬ折おほくなむ。さては御遊し

(語釋)

(一)「など」として「なるべし

(二)兼雅が桂の別荘へ觸

招待申す由なり

(四)忠こそ

(六)仲頼を尋ねに同行す  
べき事

(八)君よりも音信し給へ

(一〇)「たひ」は裂梁

女一宮女二宮女四宮兼  
雅俊隆女仲忠等桂の別荘  
にゆく。兼雅、犬宮を愛  
す。勅を捕りて所々に贈  
る。詠歌管絃。

(考異)

(三)と開ゆーとき

(五)大將―ちと々

(七)思したれー思し立て

(九)給へりー給ふ

給ひし夜一夜外に立ちて侍りしこそ。かの君の御聲のほど近う聞えしかど、この

常に聞ゆる事をも然も」などて、仲忠「三條に、桂におはしまさせむと聞ゆ。一日二

日涼み給へ。宮たちなどして出で給へ」と宣へば宮、女「苦しきに何方か」と宣ふ。

仲忠「何か、なほ」とて、十九日ばかりにと思はず。律師も十日ばかり有りてまか

で給へば大將、仲忠「さらば、かの聞えし水尾へは、必ず然思したれ。今よりはそ

れよりも宣へ。これよりも聞えむ」とて御弟子の中にきぬ、物につよみて出ださ

せ給へり。律師には、菩提樹の數珠具したるたひなど一くだり奉り給ひぬ。

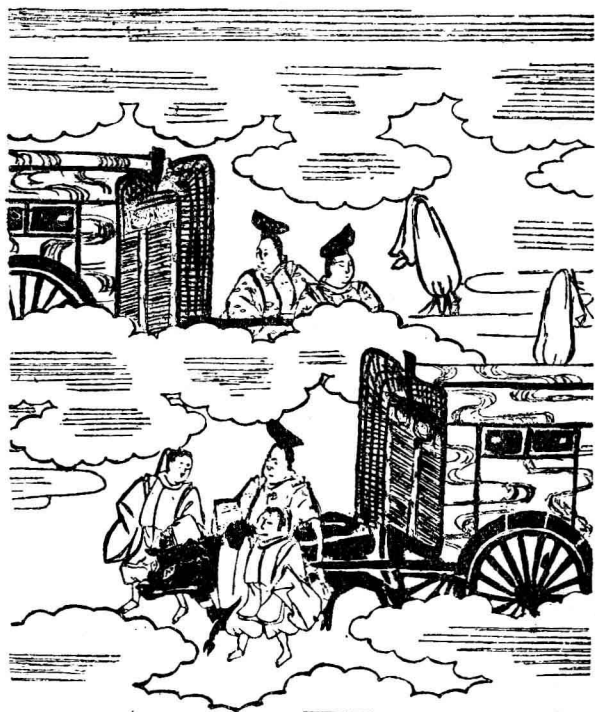
かくて十九日になりて、御車十二、絳毛には宮たち、孫王の君、犬宮いだき奉り

て太輔の乳母。つぎくに大人、うなる、下仕、男宮たち、右のおとど、右大將、

ひとつに、かんのおとど、御車六して、出で立ち給ふ。左のおとども引き續きてま

うで給へれば、これかれ出で給ふ。宮の御車一に立てて、かんのとの二にて、お

し合せて二十ばかりなり。御前は、宮ばら、殿ばら、二かたにおし合せて、數知



(語釋)

(一)「物かなとて」歌

(四)「など」として「なるべし

(六)兼雅

(考異)

(二)「ありくり」のりありく

(三)「そへ」ナレ

(五)「ちと」ト一男

らず。男の御車、御簾あけて、こほれ出でて、道の程遠くて、御笛吹き、琵琶弾きなどしておはします。おはしまし著きて、寢殿の南面を、御方にしつらひ、西面にかんのおとど、中には一の宮東に二の宮、嬪宮としつらひたるまよに、下り給ひぬ。一の宮、「女御の君を率て奉らぬこそ効なけれ。をかしきものかな」舟どものありくを御覽じて、興じて、苦しけになくて起き居給へば、大膳の君いと嬉しと思ひ給へり。

犬宮いとをかしくて出で給へば、引き入れつ。左のおとど、正頼「なほくおはせ

よや。彼は、すきものものするそへ言を申すぞ」などで、御簾の前によりて、萬の

をかしき物を取う出であざむき呼び出で給へば、たど出でに這ひ出で給へるに、

かしこう抱き取り給ひつ。父君、おとどの見給ふをば思さねど、外住し給ふ宮た

ちの見給ふを苦しとおほす。犬宮は、父おとどの抱きありき、をかしき物取らせ

ならはし給へれば、おとどをば怖ぢず、面嫌をもせず。祖父おとどはかなしや、

(五)

(六)

(一) 語釋  
(二) 誤あらんか

(二) 梨壺

(三) 生れちちから

(五) 「いぬ宮」は「いま宮」  
の誤なるべし、今宮は梨  
壺腹の皇子

(六) 發露自身をいふ

(身異)

(四) 居給へりいぬ宮も一  
居給へりちちはかしこ  
に物し給ふ犬宮も

呼び出でて見むと思して萬のをかしけなる物。宮、内侍のかみの御髪の箱なるを  
探し取りて、懐に入れて持給へりけるを、取らせ給へれば、悦びて抱かれ給へり。  
おとど宣ふやう、兼雅「人の子は、天下にいへども、女は睦ましく、男は疎くなむ  
有りける。この朝臣をば、親君のとかなむ思ひつる。かよれど、この犬を今ま  
で見奉らざりつる、かよりけるものを。この宮にさふらふものは、年頃疎く、  
をさく見語らはず侍りしかど、彼處に物せらるゝ兒をば、すなはちよりなむ見  
侍る。今日もこの犬をば見せじとこそは思ひためれど、故あれば、吾が君こそ這  
ひおはしたれ」とて懐に入れて、奥に向きて居給へれば、人はえ見ず。おとど斯  
く宣ふを、大將いとほしと思して、まめだちて居給へり。兼雅「いぬ宮もいとをか  
しくなり給へり。起きかへりつよ、人見ては笑はせ給ふ。これを常に見まほしけ  
れと、兒の里へまかれれば、翁をもゆるさず。心にまかせても見侍らずや」宣へば、  
母宮たちわらひ給ふ。内侍のかみ、俊隆女「あな聞きにくや。翁をば、誰かゆるさぬ。

(語釋)

(一) 犬宮が

(六) 「さか木」は「その木」  
なるべし

(七) 衛府の少將などなる  
べし

(八) 兼雅

(一) 二人共に兼雅の妾

(二) 梨登の許へ

(考異)

(二) 手さくげて「て」ナ

(三) さして「見て

(四) しはし「しはしは

(五) 給へる「給ひつる

(九) それを「を」ナシ

(一〇) そへて「そへつゝ

心ときめきなりきや」と宣ふ程に、父おとどを見つけて、手さよけて這ひ出づれば、兼雅「あれはあらぬ人ぞよ。いと恐ろしく憎き人ぞ」と居隠し給へど、泣きて這ひ下りて這ひ往けば、父君かき抱きて、御簾の内に入れ給ひ、仲思「此處にか」とてさし入れ給へば、更に下り給はず泣けば、御簾と御几帳との中に入れて、こしらふれど、舟漕ぎうたふを見て、外のかたをさしてなむ、笑ひてしばし居給へり。祖父おとど、持たせ給へるをかしき物ども、多に持たり。(四)

かよる程に、魚いと多く、川のほとりに、いかめしき木の蔭、花紅葉などさし隠れて、玉蟲おほく棲む榎、二木あり。(五)

さか木の蔭に、時蔭、松方、近正ら、今かうぶり得て、このすけどもの官人にてある参りて、幄うちて居たり。魚荒巻、人の奉りたらむ、多く有り。(六)

おとどの、斯かる折の料とて、鮎篝火、いとをかしけに造りおかせ給へり。それをとり出でさせ給ひて、荒巻そへて、梨登、宮の御方、中の君に奉らせ給ふ。(七)

内裏には、たゞ御消息して奉らせ給ふ。(八)

〔語釋〕

(一)「大將の御方の惱ましく」歟

(二)「三條の」なるべし、俊隆女を云ふ

(三)「甘言を云ふ」と

(四)給ひてして「ナン

兼雅まだ大將の惱ましくし給ふに、すどませ奉るとて物しつればなむ、聞えずなりける。さてこれは、乳母たちの料に。

とて、ことさらに手づからぞ書き給ふ。中の君の御許には、

兼雅日頃はいかでとなむ。近けれど、しばくも聞えぬを、今は覺束なき心地な

む。對面久しくなりにけりや。さてこれは、一條の御曹司の、手づから取り

て侍りつる。かひなく、例の人々に取り散らさせ給ふな。

君がためあまのがはらに釣すとて月の桂もをりくらしつる

となむ今日は。

とかき給ひ、兼雅「これ見給へ」とてさし入れ給ふ。北の方、俊隆女「あな言よやと思

ふためとか」とてさし出で給へれば、おし巻きて奉れ給ふ。

かくて遊などこれかれし給ひて、日やうく夕かけになる程に、主のおとど土器

取りて、彈正宮に参り給ふとて、

兼雅（一）ゆく水（二）とけふみるどちのこの宿（三）にいづれ久しとすみ比（四）べなむ  
彈正宮、取り給ひて大將（五）にさし給ふとて、

忠康水（六）のいろは君（七）もろともにすみ來（八）ともわれらはひとの心（九）やはする  
大將（一〇）、

仲忠水（一一）はまづすみ替（一二）るともまとるぬる今日（一三）のならばいつか絶（一四）ゆべき  
とて宮（一五）に奉（一六）れ給へば、

女（一七）三千世（一八）へて澄（一九）むなる川の淵（二〇）は瀬（二一）になればぞ人（二二）のこよろをも知る  
彈正宮（二三）、

八の宮、  
人（二四）はいさわが身（二五）にかなふ心（二六）だに行（二七）くさきまでは知（二八）られやはする

我（二九）らだにむすびおきてば行く水（三〇）も人（三一）のこよろも何（三二）か絶（三三）ゆべき  
と宣（三四）へば大將（三五）、仲忠（三六）吾（三七）が君（三八）、よく宣（三九）はせたり。このわたりこそ、あな心（四〇）憂（四一）や」と

〔語釋〕  
（一）「宿」と歟

（二）「六の宮」歟



(語釋)

(一) 女一宮

(二) つればなるべし

(三) 「いでや」歎

(四) 今宮

聞え給へば、みな笑ひ給ふ。

かよる程に、あかき色紙に書きて常夏につけたる御文、持て参りたり。彈正宮、

「何處のぞ」と取り給ふ。使「藤壺の御方の、宮の御方に参らせ給ふ」と聞ゆれば、

忠康「我こそは宮」とて見給へば、

あて宮日頃なやませ給ふと承りつれ、如何にして参り來むと思ひ給へれど、こよ

にもまたいと苦しく侍るを思ふ給へつる程に、いと遠くわたらせ給ひにけれ

ば、七瀬の旅にてなむ。とてや、

もろともに朝夕わかす祓せしはやくの瀬々に思ひでらるよ

忘れがたくのみこそ。

とて端書に、

あて宮これはなめけなれど、こよにある人の小き、物食ひはじめけるを、若宮の、

犬宮にとて奉れ給ひける。

(語釋)  
 (一) 跟あるべし、えひ「文  
 「えひ」えひ」などとも書  
 けり

(二) 我に書けと仰せらる  
 るか

と聞え給へり。彈正宮の、御ときよくえひ給ひて参れり。御覽すれば、一つに  
 は、参る物にはあらで、いと清らなる、今一つには参る物なり。取りひろけて、  
 宮たちまゐり、遊びなです。彈正宮、忠康「この御返は聞えさせよとか。さらばい  
 らへ聞えむ」と、いらへ給ふ人のなきに、空答をし給ひつと、忠康「さらば」と聞  
 え給へば、一の宮、「あな見苦しや、御使の見るに。賜へ、その御文」と宣へば、  
 なほ聞えとり給ひ、忠康「御心地苦しと宣はす」など宣へば、大將、いとをかしと  
 思して、うちほと笑み給へば、忠康「いで宣旨書き奉らむ。見給へ」とて書き給  
 ふ。

女一みづから聞えさせむとすれど、なほまだ筆も取られ侍らねばなむ。日頃は、  
 如何なるにかあらむ、うちはへ惱ましくなむ今朝は、心にもあらぬありきを  
 ぞ。御文は朝夕とか。

みそぎせし瀬々の流つせ思ひ出でばわがころもでも忘れざらなむ

それにも劣らぬ。犬にと宜のたまひつる物は、子の徳見つやとて、大將ひとり皆食みなくひつめり。なかまろには賜たまはぬ。これさへ妬ねたうこそ。

とて出だし給へれば、大將かんのおとどに、仲思なごも「まうけの物や侍る」と聞え給へば、單ひとへがさねのほそなが、小鞋こうちげ あはせのはかま、具ぐして奉たてまつれ給ふ。もて出で給ひて、かづけさせ給ひて奉たてまつれ給ひつ。

鮎あゆの御使つかひども、いととく歸かへり参りて、御消息せきそくどもみな聞ゆ。御返事かへりごとども有り。中の君きみは、

中君ちゆうきん近くても同じおほつかなさなれば、御文おんぶんはさて手づからとぞ。さればこそ年頃としころは、

わだのはら餘所よそになりにし魚いさなとりはくもいづる原はらを誰たれかあけけむ取り散らすなどあるは、ひとり言ことばよく。

とあり。おとど見給ひて、兼雅かねみや「はかなし者は、例れいの乳母めのとに取らせて、一つも食くは

(語釋)  
(一)中ちゆうの君きんををちよ

(語釋)  
(二)女二宮

(四)誤あるべし「頭の」二  
本「かはの」

(考異)  
(一)してありしつゝあ  
り

(三)さうさうさう

でぞあらむ」とつぶやき給ひて、兼雅「これ見給へ」とてさし入れ給ふ。北の方見給ひて、俊隆女「けにや」と宣ふ。

かくて、御前ごとに物まるる。御折敷どもして、わざと清らなり。鮎さまんに

調せさせて、いと多く、御たちの前に、衝重して有り。大將、宮の御許にまうで

給ひて、仲忠物は聞召しつや。何をか参るべき」と聞え給へば内侍のすけ、「物も

聞食さず。削り氷をなむ食す」大將、仲忠「あな恐ろしや。いみじく忌むものを」

宮、女二「かよればこそ、いや増りつれ。氷食はでは、いかでかあらむ。さきに、

物忌むといひつゝ、食はまほしき物も食はせず」と宣へば、仲忠「あな心憂や。食

物むつかりを。醫師侍り。言ひて聞えむ」とて出で給ひ、典藥頭に問ひ給へば、聞

ゆ、典藥「めさぬにや。過し給ひぬる時は、あつく冷やかなる物を寫きて御胸やませ

給ひ、まだしき時はいとあしき物なり」と申せば大將、仲忠「斯くなむ」と聞え給

へば、女二「あな侘しや。いと著し」と宣へば、仲忠「團扇も参らせむ」と宣ひて頭

(四)かしら

のところは、かのほとり、おとどより西によりて、屋あるをしたり、そこに氷召せば、小さく割りて、蓮の葉につよみて、様器にするて、近江守もて参りたり。大將とり給ひて参り給へば、少しまりて、女「辛うじてよかりつる心地を、惑はすかな。此處にな來そ。去ね」と宣へば大將笑ひて、仲思「前には、かくも宣はざりしを、ものの罪などにや」と宣へば内侍のすけ、「度々の事に侍れば、内裏の御方は、大宮の御時にはいとみじくなむ。この御時には、例よりも違はせ給ひもおはしまさざりき」と聞ゆ。犬宮這ひ出で給ひて、物どもに取りかよりて、搦み毀し給へば、父君、仲思「この人こそ、いとまさなけれ。かよる業は、女はせぬものぞや。男おほかる簾のもとなどに、這ひ出づるものかは」と宣ふ。夜に入りぬれば、燈籠かけつよ、御殿油まるりわたしたり。

亥の時に、「御はらへ時なりぬ」と申す。おとどの壇の上より、水いだして、石だたみのもとまで水せき入れて、瀧おとして、大井川の如く、簀子には、御簾かけ、

〔語釋〕  
 (一)侍ればは「給へば」なるべし

(二)殿文あるべし

(三)殿文あるべし

御床立てて御屏風ども立てたり。そこに、宮三所出で給ふ。かんのおとどは床もたてで出で給ふ。高欄におしかよりて御階の前に、おとど、宮たち四人、殿々の御たち、こなたかなたに居たり。陰陽頭、御稜ものして、仕うまつる。馬ども木綿つけて引きたり。御衣脱ぎ給ふ。一二の宮、唐綾のかいねり一かさね、姫宮御小袷、かんのおとど、白き緑のひとへがさね、男宮たちも脱ぎ給ふ。宮たち、御はらへ仕うまつり侍れば、夜更けぬ。御遊し給ふ。一の宮和琴、二の宮箏の御琴、かんの殿琵琶。宮たちおはすれば、御几帳の後におはす。一の宮、女二「いと暑し。なほ此處にを」と聞え給ひて、御几帳の中におしやりて、女二「いとよう侍る」とて、御床におしかよりて、琵琶ひき給ふ。し給はぬ、はたまうけ給ふ。大將、仲恩「こよもとは遠からず」と男たちの御あそばすにも聞え給へば、やがてならひ給ふやうなり。かよる程に、十九日の月山の端よりわづかに見ゆ。かんのおとど、扇に書きて一の宮に奉れ給ふ。

(考異)  
(一)おもーかほ

(二)あそび給ふ夜明けぬればーあそび給ふにあけぬれば

得仲忠勤をあて宮腹の若宮に奉る。若宮の御文を見て仲忠その筆頭を褒む

俊藤女木綿かけて襦をしつともろともに有明の月を幾夜待たまし  
宮見給ひて、

女二ながき夜の有明の月も待つべきをみそぎの神やいかごとぞ思ふ  
二の宮、

女二かくしつと月をし待たば淺き瀬のみそぎのかみも何か知るべき  
姫君、

女四月まつと桂わたりにさ夜ふけてひく琴の音はかみも聞くらむ  
とあるをかんのおとど、大將に奉り給へば、また取りて、

仲思かみも聞けおもがはりせず八百萬世々みそぎつと思ふどちへむ  
とて、人にも見せでさし入れつ。かくて、夜一夜あそび給ふ。夜明けぬれば、御  
(二)

簾の内に入り給ひぬ。

大將、銀の篝四つ、脚つけさせて、鑄物師ども召して作らせ給ひて、跳びあが

(語釋)

(三) 往來歟

(四) 簞歟

(五) 未考、一本「かんでう」

(六) 正頼まだ此處にありの意歟

(考異)

(一) 一節「ナレ」

(二) 御もとに「御もとに」と

(七) ちはしまさ「おはしまさず」

る魚ども取らせつ。鮎(一)一籠、鮠一籠、いしぶし、小鮎入れさせ、荒卷など添へさせて、藤壺の若宮の御もとに、手づから、わうらひ月日書きて、せむたてて、御名し給へり。かたはらに、

仲思君がためしづけき空にすむ魚をけふより見せむ千世の日ごと

と書きて、蘇枋(二)籤にして、赤き色紙に書きて、瞿麥の花につけたり。かてうなる

人を召して、仲思「これ、三條の院の南宮に参りて、若宮の御方に持てまるれ」と

宣へり。御使持て参りたれば、若宮見給ひて、若宮「西の對になむ」と奉れ給

へれば、大殿(六)まだおはします。君たち、御方見給ひて、「此方わたり給へ」と聞え

給へば、おはしたり。「かく書き給へ」とて、このやうに書かせ給ひてかたはら

に、

君がかくとりそめければ山川のあさちぞおきの上に見えける

教へつと書かせ給へれば、いとをかしけにかき給ふ。御使に祿賜びて、奉れ給



(考異)

(一)給ひつるかな給へるかな

(二)など出で給ふ一などかくてその日一日すゞみ黏ひかせ

(三)藏人の少將の君の御許より一藏人の少將の御許より一宰相中將の君の御許より

近澄、女二宮の乳母に消息す。

ひつ。おとど御前に人召して、調ぜさせ給ひて、興じてまゐる。藤壺は、鮎ならぬ魚擇りて参り給ふ。

かくて御使参りければ、青き色紙にかきて、桔梗につけたり。見給ひて、女患いとかしこうも書き給ひつるかな。只さいつ頃こそ、手本召しよかば、奉れしか。いとよう似させ給へり」と宣へば、右のおとど取りて見給ひて、兼雅「なほかしこき君なり」宮、女二「さいつ頃見給へしかば、手をこそならひ居給ひしか」大將、仲忠「かたちもいとをかしけにおはすや。坊にも、内裏の宮、若宮よりは、この君をこそ。いとらうくしく故づきてぞ生ひ出で給ひぬべかぬり」など宣ひて、おとどはかしこに出で給ふ。

日暮るれば鶉飼はせなどし給ふ程に、藏人の少將の君の御許より、二の宮の御乳母の許に、女のおよそひ一くだり、白張のひとへがさね包みて、御文あり。

近澄昨日のつとめて、消息聞えたりしかど、いそぎて出で給ひにければ。かの聞

〔語釋〕

(四) 近澄が私の爲に衣類の世話をなし下さるは恐縮なり

〔考異〕

(一) 川邊に―なほともに

(二) 御返事―御返

(三) 如おはしまさひて―ごとくおはしまさひて

えし事、宮にてはいと難かるべき事を、宮たちも御遊せさせ給ふべし、川邊にすどみ給ふめる宵の間にたばかり給へ。昨日のつとめて、追ひてまうで来て、このわたりになむ、然る心して侍る。さてこれは、いと暑き日なめるを、脱ぎかへ給へ。

とあり。乳母見て、乳母あな恐ろし。人もこそ氣色見れ」とて、里より洗ひに遣りたりし物持て來しさまにて、いとよう持て隠して御返事、

乳母かしこまりて承りぬ。昨日は、左のおとど参り給ひて、いそがし聞え給ひしが、いととく出でものし給ひしなり。宣はせたる事はあな恐ろしや。宮におはします時よりも、宮たち、垣の如おはしまさひて、夜は御めぐりにおはしまさふめれば、これかれだに、え近くも参らずなむ。いと忝く、旅におはしますなるを、はや歸らせ給ひぬ。人に氣色見えさせ給ふな。さて賜はせたる物は、あな忝や。かく、御櫛匣殿をせさせ給ふなむ。いかでこの御衣

〔語釋〕

(一)女二宮の

(二)近置の來り居らる上

由を女二宮に申上げん

(三)かくて、衍文歟

(五)宮たちには「なるべ

し

(六)皮籠の箱歟

(一〇)兼雅

(一一)仲忠

(二三)女三宮

〔考異〕

(四)夕がたー夕がたに

(七)かうこのーヤつこの

(八)には「は」ナシ

(九)壺のー蓋切の

梨壺あて宮等處々に設

(一一)五つ：遣遙など一  
五つばかりして奉り給ふ  
殿の若宮などして出で給  
ひて遣遙など

は御目にもかけさせ奉りてしがなとぞ思う給へる。まめやかには、宮にわ  
たらせ給ふなむと聞えさせむ。

と聞えつ。

かくて明けぬれば、一日すゞみ、鮎ひかせなどし給ひて、かくてその日の夕がた歸  
り給ひぬ。男宮たちは、あるじのおとどの御馬、鷹など奉り給ふ。女宮たちに  
は、黄金のかうこの箱に、萬のあり難き物ども入れて、一の宮よりはじめ奉り  
給ふ。犬宮には箱の小さきに、よべの物入れて奉り給ふ。乳母たちには、裝束一  
くだりづつ賜ふ。御たちの中に髪(九)の具など出ださる。

かへり給ひて、右のおとど梨壺の御はらへに出ださせ給ふ。大將御車ども五つば  
かり出でたて奉れ給ふ。宮たち君だちなど参り給ひ、遣遙などをかしくし給ひ  
て、かへり給ひて、二日ばかりありて宮、東河に車三つばかりして出で給ふ。お  
とどは出で給はず。睦ましき人々して出で給ふ。近江守に宣ふ、兼雅「この東河

〔語釋〕

(一)女三宮は

(三)正頼

(五)「一つ」は「二」にて  
てあて宮の車の最先に遣  
れとの意なるべし、一本  
「御車をまづひとつ」と

(七)あて宮の御殿

〔考異〕

(一)物せよと仰せよ―物  
せさせ給へ

(四)程―程に

(六)哀と思ふべし―哀に  
思ひて

(八)給ふついでにて―つ  
いでにて

●梨壺腹の皇子の東宮に  
立つべき噂、正頼等の心  
痛。

に、祓はらしに物ものすなるを、東ひんがしがは河あつの水ちかに近ちかからむあたりに、車くるまた立たてさせて、鮎あめなど  
くふべき様に物ものせよと仰おほせよ。あやしう若わかき子のやうに、人ひとのするに隨したがひたる人  
なれば、心こころ苦くるしくなむ」とて出いだし立たて給たまひてかへり給たまひぬ。

〔畫詞〕 ことばは三條殿。

かくて、藤壺ふぢつばも、辛崎からさきに御祓はらし給たまはむとて、大殿おどももろ共ともに、君きみだちさながら、御  
供ごもの人々多ひせとかり。御車くるまひきつゞくる程ほど、大宮おほみや、「あなた(三)の御車くるまを一つに」と宣のたまへば、  
藤壺ふぢつば、あて宮(四)「いかでか先まづ」と宣のたまふほどに、御車くるまども一方かたにひき續つづけて立たちわづらふ。  
おとど、正頼まさたね「なほ彼かれを促うながせ」とて藤壺ふぢつばの御車くるまを一たに立たてさせ給たまへば、みな人々ひせとい  
と哀あはれと思おもふべし。辛崎からさきにおはしまして、御祓はらいかめしうし給たまひて歸かへり給たまひぬ。大  
殿(六)もかへり給たまひぬ。此方こなたには例れいの番ばんむすびて、君きみだち宿直しゆくちくし給たまふ。  
かくて經給へたまふほどに、東宮とうぐうより、おそく参まゐり給たまふとて、ある時ときは哀あはれに心苦こころしげに、  
ある時ときは憎にくけに怨うらみ給たまふ。(八)ついでに隨したがひて御使つかひあり。その御使つかひの藏人くらうどの申まうす様やう

(語釋)

(一)あて宮が御返事を  
(二)東宮の御文に對して  
御返事のなきをいふ

(四)東宮が

(五)正頼

(六)藤壺腹の皇子東宮に  
なり給はゞ私を東宮付の  
授人又は帶刀にして下さ  
れなど

(八)藤壺腹第一の皇子

(九)正頼が

(二二)あて宮の殿

(二四)分別づきて來りし  
我が了簡をも直接に申上  
げんと

(考異)

(一)誤あるべし

●彈正宮あて宮を訪ふ

(七)宮づかさ帶刀一宮つ  
かさ藏人殿上人帶刀

(一〇)なし一なく

(二)七月の中の十日に  
一七月中の十日ほどに

(一三)しばし一志をも

藏人「梨壺のなむ、坊には居給ふべき、と申しなりにためり。まつりにも、屢まうの

ほり給ひ、晝はことにわたらせ給はず。日頃はことに御遊もし給はず」と聞ゆれば、

ある時は一行二行と聞え給ひ、ある時は聞え給はず。かよれば、皆人の申す、「あ

な異様や。またなき例をもし出で給ふかな。かく侮られ給ふ事」とそしり申す。殿

には、大殿の御方にも藤壺の御方にも、今より宮づかさ帶刀など申す人おほかり。

若宮の御方には、人々参り込みつよ、公のやうになりておはしますを、見奉り

給ふまよに、おほし嘆くこと限なし。山々寺々に、修法おこなはせ、神佛に申し

給ふ程に、七月の中の十日になりぬ。

ある夕暮に、彈正宮、西の對に参り給ひて、御物語きこえ給ふ。患康かくて物

し給ふ程に、しばし聞えまほしけれども、物騒がしう物し給ふめれば、いとお

となしくなりまさり給ふなりし心地も、みづから聞えむとせしを、あえものの程

過しつるになむ」御いらへ、あて宮「あえ物は、年隔ててこそは。こよにも徒然と侍

(語釋)

(一)「つては」は「うち」の  
 隠歎

(三)「方々へ遣はさるゝ文  
 をたまには私にも下され  
 たし」

(四)「賜ひつべくや」歎、「  
 本給へつはや」

(五)「我を愛にせんといふ  
 人」

(七)眞面目男

(考異)

(二)心憎くてして「チヤ」

(六)思はえぬーおぼえぬ  
 (八)あて宮が出京を勧め  
 たりしに

秘實正、實忠を其の舊妻  
 を置ける三條邸に導く。  
 實忠、女を見識らず、そ  
 で君の悲嘆、實正、實頼と  
 共に實忠を三條邸に留め  
 んと盡力す。

るを、誰々にも聞えまほしけれど、皆こそ思し忘れにたれ」宮、忠康「さらに忘れ  
 聞えず。かくて侍るをば、何の心ありてとか思す」あて宮「いでなほ心憎くておはし  
 ますとこそは」宮、忠康「このあまたし給ふわざ、時々はこよにもして賜ひつべく  
 はや。斯くてやは」君、あて宮「いと見まほしくて、數多物せらるめるを、何かは」  
 宮、忠康「まめやかには、年頃かくては侍るを、こよかしこにも物せよといふ人侍  
 れど、御心のつらかりしにのみ、忘れ難くて、さやうの心も思ほえぬに、なほ昔  
 の様にも思ほさで、忍びて知る人にはし給ひなむや」と宣へば、あて宮「あやし。忍  
 びずとも、然て知らぬ人にやは。かく聞え承るも疎からねばこそ」など聞え給  
 ふ程に、左大辨の君、師登「いと疎々し」とて参り給へば宮、忠康「生憎や。このう  
 るはし者は何しに来るぞ」とて聞えさし給ひつ。  
 かくて新中納言、實忠「藤壺ものし給ふこと有りしを、かくてあらば物しともぞ思  
 す」とて小野より物し給ひてけり。民部卿、實馬「いと嬉しく物し給へり。遅くお

(語釋)

(一)凶兆ありし故

(二)三條殿なるべし、實忠の妻子をもちきてある處なり

(四)實忠の妻子

(五)わざとまだ迎へ取らぬ様に偽り言ふ也

(六)三條へ

(七)實忠の妻

(八)實忠が

(一)袖君なり

(考異)  
(三)内に入りて一うちいりて

(九)恥ぢ聞えぬ所にいとひがくしく一恥ぢ聞えぬ所にいとひがくしく一恥ぢ聞えぬ所にて一恥ぢ聞えぬ所にはかひなくとくく

(一〇)柱の「」のしなれ

(一一)居たり一居給へり

はせば、御迎にまうでむとなむ。こよはいとかく便なきを、日頃侍る所に物のさと

しなどせしかば、さいつ頃二條殿になむまかり渡りて侍るに、其處におはして、聞

えしやうに、内に入りておはしませ」と聞え給へば中納言、實忠「何か。こよにも

しばしは物せむ。尋ねむと宣ひし人は如何は」と聞え給へば、實正「いと暑く侍り

つれば、程遠くては物せず。今少し涼しくなりなむ時」などつれなく聞え給ひて、

「なほいざ給へ」とて一つ車にておはす。下りてもろ共に入りおはするを、北の方な

ど見給ひて、おどろきて、御几帳立て直しなどす。まづ民部卿入り給ひて、實正「あ

な見苦し。こは何ぞ」とて御廉あけ給ひつ。あるじだちつい居給ひて、實正「な

ほ、こよには恥ぢ奉る人もなし」と聞え給へど、つよみてえ入り給はず。民部

卿、實正「なほ入らせ給へ。女だに恥ぢ聞えぬ所に、いとひがくしく」と聞え給

ひて御圓座さし出で給へば、いと澁々に入り給ひて、いとまめやかに見給へば、

奥のかたに小き几帳立てて、人あり。柱のもとに若き女のいと清らなる居たり。

(語釋)

(一)袖君を實正の妻と思ひ違へたる也、實正の妻はあて宮の姉三の君

(二)袖君

(四)袖君の

(六)見つめて

(七)實忠妻は實忠が娘を見知れるならんかと恐かしく思ひたれど實忠は氣付かずして詞もかけず

(八)今は斯くて」歎

(九)「と」衍文なるべし

(一〇)實忠妻

(一一)舊妻に

(考異)

(三)見給ふを「見給ふを

(五)いと一ナシ

(一一)外に一よに

中納言いと怪しく、睦ましと言ひながら、つれなくとも居給へるかな。これは、藤壺の御姊なれば、かく良きぞ、と見居給へり。姫君は、とまれかうまれ、わが親に見え奉らむ、親の御顔見むと思ほして、伯父おとど見給ふを物にも思ほしたらで、さし向ひて居給へり。中納言は、容貌のいと美しけなる、まほらへて居給へり。女君は、見や知り給ふと恥ぢたれど、物も宣はず。姫君、父君のえ見知り給はぬをいとかなしと思ほして、え念じ給はで、つぶくと泣き給ふを、民部卿、いと哀と見給ひて、實正「思ほし出でずや」と聞え給へば中納言いとまめにて、物も宣はず。民部卿、實正「この君を、いとあさましく、斯くなり給ふまで見奉り給はねば、思ひわびて、かくおはしまさせつるなり。今、斯くておはしませ。世の人のあらぬやうにては、え長くは物し給はじと。御髪も、斯くぞなりたる」とてかき出でて見せ奉り給ひて、實正「今一所も、かく此處になむ。天下に外にもとめ給ふとも、勝る人しもえ侍らじ。實正らを人と思すものならば、なほかくて物し

(二二)

(九)

(八)

(二二)



〔語釋〕

(一)實忠が

(二)洗濯

(四)實忠の世話を思ふ様にすること能はじ

(五)舊妻には構はずともよし

(六)袖君

(八)「もとるへにたれど」歎

〔考異〕

(一)まさご君の—またまさご君の

(七)物巻る仕うまつる人は—物巻り仕うまつり人は

給へ」と聞え給ふ。實忠「年頃見ざりつるほどに、大人にこそは」と宣ふまよに泣

き給ふ。昔の人々あつまりて泣く。まさご君の御乳母の前なるを見給ひても、中

納言いみじく泣き給ふ。さても怪しう、心にもあらで來たるかなと思ひ給へり。

民部卿、實正「故殿のおはしましよ時こそ、女親のごと、折々の御すましの事など

も、御口入れ給ひしかど、今は女同胞とておはするは、さやうに心しらひても物

し給はず。實正らが如きは、自らの事にもかなふ人し侍らねば、志は有りなが

ら、えおほしき様にも仕うまつらじ。かく世中をおほし離れにためれば、母君は、よ

しな知り給ひそ、この君を御後見にて、よろづの事さやうに思ほして物し給へ」な

ど聞え給ひて、御供の人々、所々にするさせ給ひて、もの賜はせなどして、實正「遠

くよりおはしましつるまよにて、率て奉るなり。物まゐれ」と宣へば、黒き御

臺一よろひ、精進の物、いと清らにして物まるる。仕うまつる人は、そで君、ま

さご君の御乳母、おとなひにたれど、かたち宿徳にてあり。童なりし人ぞ、大人

(語釋)

(一)實忠を

(二)實忠が心に舊妻を許する也

(四)父季明

(考異)

(三)御うちは一御うちき

になりて、若人にてはありける。童ばかりぞ知らぬはある。かくて物参り、御酒など参りて、山里よりわたり給ひし日、しつらひ置かれたる御方に、「彼方に入らせ給ひて、いと暑きに、休ませ給へ」と聞え給ひて、入れ奉り給ふ。昔持てつかひ給ひし調度、いさよかに手習し給ひし反故など、とり散し給ひなどして居給ひしまよに、他御調度の清らなる、あまた添はりたれば、無き物なくしつらひ置かれたり。中納言、なほ有りがたき心ばへありかし、親もなくて、我のみ頼みたりし人の、子ども持たりしを見棄てて年頃有りつるに、かく一つも失はで有りける、など見給ふ。こなたにも、むかし見給ひし人々の参りて、御衣とり懸け、御うちはなど参れば、たゞ昔の様なり。民部卿は、女に掣取したらむやうに、居立ちて、殿へも物し給はで、たゞ此の君の事をいそぎ給ふ。新宰相も、いそぎ参り給ひて、實頼實頼は、殿かくれ給ひてのち、夜晝かなしき事を思ひ給へ嘆きつるに、今日なむ、その心も忘れて、嬉しう思ひ給ふる。なほ斯くて經給はど、すべ

(語釋)

(一)兄弟なれども實忠を親の如く君の如くにして仕ふべし

●實忠舊妻に逢ひて昔を翻る

(二)實正實續

(三)舊妻の方

(四)思出したらば又も來べけれど度々は來らじとの意歎

て同じき同胞と聞ゆとも、親君と仕うまつらむ」とて二所ながらこよに物し給ひ  
(二) かしづき仕うまつり給ひつよ、二三日經給へど、北の方にも姫君にも、まだ物聞  
え給はず。

かよる事を、内裏にも東宮にも聞召して、「らうたく、徒らになりぬと聞きつるを、  
今は宮仕せむと思ふにやあらむ」と宣ふ。左のおとど、いみじう悦び給ふ、年頃  
も聞えつるを、わが逢ひて、さて物せよと言ひしかばにやあらむ、と思ほす。

中納言、世の人、藤壺なども心ならずや思ほすらむと思して、四日ばかりありて  
夕さりつ方、此方にわたり給ひて、姫君に聞え給ふ、實忠いと珍らしく對面した  
りしかど、見奉りしにも、己が心からは言ひながら、よろづの事哀に覺えし

かば、まめやかにと思ひてなむ。年頃、いかでか今更にはと、哀にかく物しにけ  
れば、それも心憂くおほえて、此のわたりには、思ひ出でられむによりてなむ。  
多くはえ」など聞え給ふ。姫君、ともかくも物も宣はで、たどつくくくと泣き給

(一)誤あるべし

(二)あれがそて君母子のかくれがなりしと

(三)實正の

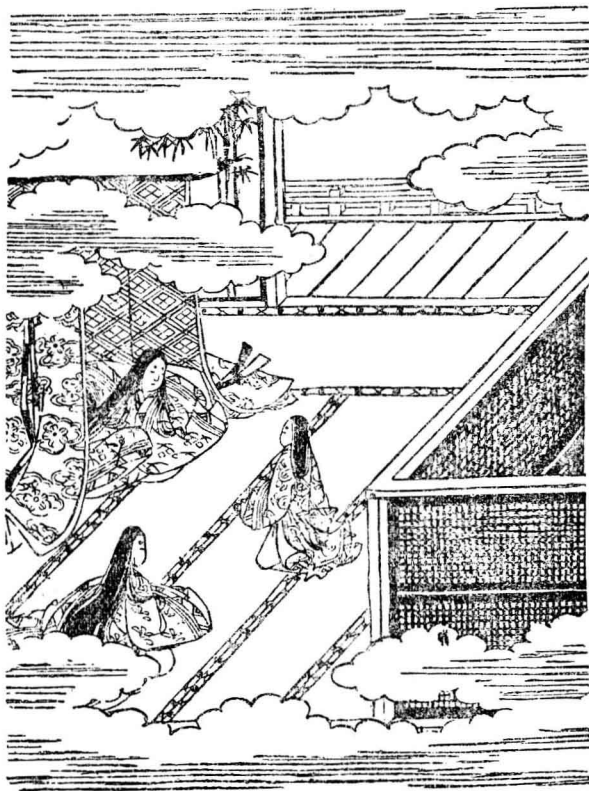
(五)父季明が

(七)實忠が

(考異)  
(四)いづ何かは—いかで何か

(六)をも—ナレ

へば、實忠（一）なほ年頃（二）有り經つらむ物語をこそせめ（三）など宣へば、そて君年頃（四）戀し  
 くなしくのみおほえ給ひつるを、辛うじて、對面賜（五）はりたれば、夢の心地して（六）  
 など聞え給へば、實忠（七）世の中にえ久しかるまじき心地のせしかば、法師にもなり  
 なむと思ひて、山里（八）に、年頃（九）は「そて君民部卿（一〇）かなたに物し給ふ所にて、尋ね聞え  
 むばかりなかりしかば、折節（一一）に思ひ出でつよ、いかでとのみ思ひながら、年頃（一二）え」  
 など聞え給へば、實忠（一三）紅葉見むとて、知らぬ人ものせし時に、まうでたりし所な  
 む、其處（一四）と、殿かくれ給ひし程に、卿（一五）の君の宣ふになむ然なりとは知り（一六）にきこい  
 と里離（一七）れては有りけむ（一八）など多くの御物語し給ひて、實忠（一九）母君は何方にぞ。物聞  
 えむ、と聞え給へ（二〇）と聞え給へば姫君悦びて、北面（二一）におはする所にまうで給ひ  
 て、聞え給へば、北の方、實忠妻（二二）いで、何かは（二三）と聞え給へば民部卿、實正（二四）かけの  
 ごと添（二五）ひてと宣ふをも、斯う宣ふをも聞き給ひて、吾が佛（二六）など斯うは宣ふぞ。消  
 息（二七）し給はずとも、まうでて對面（二八）し給へ、とこそは思ひつれ。御上（二九）を思ひ聞ゆるに



(語釋)  
(一)實忠

(二)我があはゞ實忠は彌  
出家の志を堅くすべし

(三)「聞え給ふめりしだ  
に」なるべし

(六)「見たてまつれど歟、  
段は昔とかはりはてたる  
様にて其方に對面すれ  
ど」の意なるべし、「本」見  
たまへれど」

(考異)  
(四)「几帳を」を「ナレ

(五)にも「も」ナレ

しもあらず。この君の、世に惜まれて徒らになり給へば、とさまかうざまにたばかり聞ゆるなり。早おはして、何心なく語らひ聞え給へ。おほろけに思ひてやは斯う聞ゆる」と申し給へば、實忠妻「いでや。こよに對面せむにぞ、いとど、鷲の山にも思ひ入り給はむ」民部卿、實正「おなじうは、戀てふ山には」と聞ゆるを北の方うち笑ひて、實忠驚年頃の住居こそさやうには。いでや、今さらには、と思ひ給ふれど、かく宣へば」とて薄鈍の單がさね、黒つるばみの小袷奉りて、まうで給ふ。几帳おし出でて對面し給へば、中納言、實忠「むかし恥ぢ聞えしなめりしにだに、然もあらざるを」とて几帳をおし遣りて見奉り給へば、昔にもことにお劣り給はず、仁壽殿の女御のやうにて、面瘦せ給へるしも、あてに見めきたり。中納言、實忠「あな珍らしや。いと久しうなりにけるかな。あさましう、あり所も知らせ給はざりつれば、年頃山里のつれづれ、春秋の夜寒などには、常に思ひ出でられ給へど尋ね聞えむ方なくて、ありし人にしもあらで見給へれども、そこに

(六)

(語釋)

(一)まさご君の亡くなりたるをいふなるべし

(二)給へればし歎

(四)季明薨去の時をいふなるべし

(五)北方の無事なる由を聞きたり

(七)父の喪中になりし故

(考異)

(三)そめにし心地の—そめにしをなほ心地の

(六)聞きし—きこえし

(八)如何にぞ—いかにぞ

は變り給へることもなく、たゞ哀なる人のみなむ」とて扇に書きつけて奉り給

ふ。

實忠 雲井よりかへりてみれば故郷のいま雛鶴ぞまち見ざりける

とて奉り給つれば、北の方泣くく、

實忠妻 むかし見しやどもの山に荒れましてかへらぬ鶴をまつも枯れぬる

と宣ふをいと哀と思して、實忠「まめやかには、昔怪しきそごろ心のつきて、あく

がれそめにし心地の、鎮まらざりしかば、世にもあらじと思ひて、あやしき山里

に籠り侍りて、親の御許にもまうでざりき。唯此の折にぞ、まうでて見奉りし。

其處にてなむ、こよには平かにおはしますなど聞きし。すなはち思ひになりにし

かば、今まで。すなはち聞えむとせしかど、心ふかき所つき給へりしかば、如何に

ぞ思ひつよみてなむ」北の方、實忠妻「年頃は、いと哀と物おほして居給ふ、と承

〔語釋〕

(一)舊妻を

(二)不詳、「一本」さきを

(三)實忠が自分の住居の

方へ

(四)物し給はずばにて

自分たちがついて居ねば

實忠が小野へ歸るかも知

れぬとての意なるべし

(五)實忠の處につききり

にして

仲忠、實忠を訪ふ。正

頼、實忠を訪ふ。

りつる。わがことにやと思ひ知られて、いかで訪らひ聞えむと思ひつれど、それにつけても、思ほすことやあらむ、とてなむ」中納言、實忠「何かは、今までは。暫しこそ、人を憎しとは思ひしか」などおほく御物語、年頃ありつる事など、かたみに聞え給ふ。中納言、實忠「いとよかめり、かくて物し給へば。こよにはさえついつけても、そへて物し給へば、煩はしうて、來るをりあらば、親同胞のごと語らひきにたれば、恐ろしとこそ思さるらめ」など夜更くるまで聞え給ふほどに、夜さりの御臺参り物など聞食して、おほん方にわたり給ひぬ。

かくて御同胞の君だちは、物し給はず小野へや歸り給ふとて、北の方たちの御許に、「かよる事のあればなむ」とて、夜も晝も物し給ひて、人々の参る物なども、皆「持てまうで來」と宣ひて、内にも奉れ給ひ、此方にも取り散らし給ひつよ、人にも賜ひなどして、物し給ふほどに、昔見かたらひ給ふ人は、上達部も、殿上人も、めづらしがり悦び、あるは興ある物など奉れ給ふ。右大將殿も夕暮のすど



(語釋)

(一) 實忠の妻のかくれす  
みし志賀の山本

(三) 思澄祐澄

(四) 實正實賴實忠

(考異)

(二) もとの御妻一本妻

(五) 思ひ一思う

しけなるに物し給ひて、仲忠「こゝに斯うて物し給ふと、只今なむ承る。年頃お  
 はする所にまゐり來むと思ひ給ふれど、とかく參らでなむ。然るは、かの見付け  
 し山里にも、いかでもろ共にとぞ思ひ給へるや。かの人は、おはしてとひ給ひき  
 や。誰とは聞き給ひつるや」と宣へば中納言、實忠「年頃は、尋ねとはせ給ふとこ  
 そ、深き山人には」と申し給ふ。北の方、姫君などは見給ひて、かの山里に物し給  
 ひし人にこそはあめれ。見しよりも、いと宿徳に濟けにもなりにたるかな、誰な  
 らむ、と見給ふ。かくて物語などし給ひてかへり給ひぬ。

かよる程に左のおとど、君だちに、正賴「新中納言もとの御妻にかへり給ひて、こ  
 のたど東に物し給ふなるを、訪らひに物せむ。故殿「徒らになすな」と宣ひし  
 ものを、かく世づきて物し給ふなる悦申さむ」と宣ひて、左衛門督、宰相中將  
 などしておはしたり。民部卿、おどろきて、三所ながら出でて御迎して入り給ひ  
 ぬ。おとど、正賴「かくて物し給ふとなむ、一日承りし。すなはちと思ひ給へし

(語釋)  
(二) 眼脱あるべし

(考異)  
(一) 言ひ一ナレ

(三) 空にて一空にし一こ  
くにて

(四) ころを一ころは

を、いと暑く侍りてなむ。いと嬉しく、思ふやうにておはするを、限なく悦び聞ゆ

るを」民部卿、實正「あからさまに、妹とぶらひに物し給へりしを、言ひとどめて

侍るなり。なほ山里になむ、いと忘れ難けに」おとど、正頼「御心と、かくて物し

給ふにあらずやはとて、かねてまうでけるよろこびにこそ、祈などする時さいは

ひといふ事あるは」とてみな笑ひ給ふほどに、内裏より、精進の御肴して、心こ

とにいと清らにて、御酒まるり給ふ。中納言に土器さし給ふとて、

正頼忘るなと契りおきけむたらちねも笑みて見るらむ雲の上にて

中納言、賜はりて、

實思契りけむ雲井をかつは忘るれば空にて君が見るをしぞ思ふ

民部卿、

實正おひのほる雲も知るらむ山里にたづねいでつと契ることろを

宰相

(四)

(語釋)

(一) 實忠が妻と別居したるをさよ

(二) 「など」としてなるべし

(三) 正頼が實頼を以て實忠の妻に言傳する也

(考異)  
(四) 聞え給ふ―ナシ

實頼昔ひがしのもいまくもの雲くもははれぬらむ契ちぎりし宿やどにありと見みつれば  
左衛門督、

忠澄くも雲くもよりもおのが山やま々々年としへつる君きみをばたれか嘆なげかざるべき  
(二)

宰相中將、

祐澄やまざと山里やまに行いきつと見みればうちながめひとり經へしこそ哀あはれなりしか

民部卿、實正あたらしく牛僧うしや。同じ心こころに」と宣のたまへば、「いらへするはと仰おほせられつれば」な  
(三)

どて御酒度おまんみきたう々々きこしめす。御物語ものがたりなど久ひさしくし給たまひて、新宰相しんさいしやうの君きみして、内うちに御

消息せうそき聞きえ給たまふ、實頼じつらいいと嬉うれしくて物ものし給たまひけるを、喜よろこび聞きえさせに。いまだに隔へだ

て聞きえず承うけたまはらむなどやうにてかへらせ給たまふ」と聞きえ給たまへれば、北きたの方かた、土器かはらひに

かく書かきて、瓶子へいじもたせて奉たてまつり給たまふ。

實忠妻じつちゆう巢立すだつ子ことまだ知しらざりし雛鳥ひなどりの枝えだはいづれぞ知しらず顔かほにも

とあり。おとど見み給たまひて、正頼じつらい「けにいと理ことわりや。されど、

正頼（二）鳥（一）の居るおなじとぐらはとひしかど古巢ふるすを見てぞとめずなりにし」

とて奉り給へば中納言ちゆうなごん、何事なにごとならむ、かたはらいたし、と思す。かくて民部卿みんぶきやう、

凶事きやうじの處ところなれば、かづけ物はせで、御供ごともの人々ひとびとに腰插こしざしなどし給ふ。おとどかへり

給ふとて、正頼（二）かくてのみを、今は物ものし給へ。さておはせば、かう近ちかき程ほどなるを、

さし歩あゆみつゝ参り來こむ」とておはしぬ。

④實忠、あて宮と文を贈答す。

かくて十日ばかり有りて、民部卿みんぶきやうなむ、夜よるは殿どのへおはし、晝ひるはこよにのみおはす。

中納言ちゆうなごんは藤壺ふぢつばいかに聞き給ふらむと、しづ心こころなく思おもほして、下しもの殿どのへ還かへりなむと

おほせど、晝ひるは萬よろづの人々ひとびと参りて、故殿このどのの人々ひとびともなづき奉りなどし給ひ、仕つかうまつ

る受領うりやうりやうなども、まめやかなる物もの、菓物くだものなど奉れば、時ときの所ところのやうなり。藤壺ふぢつばに御

文奉ふまたまつれ給ふ。

實忠御消息せうそくしき聞えたりしすなはち、遠とほくまかりて、山里やまびとせ制せいさせ給ひしかば、時々ときと

（語釋）

（二）自邸（一）かへり

（考異）

（一）處（一）頃

三（三）すなはち一（一）のも



(語釋)  
(三)其内定めし内裏へ歸り給ふべし

(四)はは「と」の誤なるべし

(五)生ひ直りの意歟

(考異)

(一)あからさまと—あからさきにと

(二)なむ—ナレ

(六)おはせば然る—おはする

はと聞えさせしかば、一日 (二) あからさまと思ふ給へてまうで來しを、思の外なる事ども侍りてなむ、おのづかきこし 自ら聞召すらむ。

故郷ふるさとにありとは人(二)に知らるれど涙なみだにのみぞ浮寐うきねせらるよ

いづしか内裏うちにも。さらば時々ときどき、と宣のたまはせしかばなむ、今日けふまでもかく近ちかき程(三)に侍るを、ありしやうなる折せりもいかでかとなむ。参まゐらせ給たまひなば何時いつを何時つとか。

は聞え給へり。御かへり、(四)

あて宮日頃みやひごろは、ちかく物し給ふと承うけたまりつれば、おひなをりをもとなむ。時々ときどきと聞えし事は、なほ然さてのみおはせば然さる折(五)も有ありなむ。とみに参まゐるまじくなむ。(六)

そこにかくありと聞ゆる今いまよりぞ言いひてしことも思おもひ知らるよと聞え給ふ。

●實忠夫婦の情舊に復す。實正、實忠の文を見て其の情を悟る。

〔語釋〕

(一) 仲思をいふ

(五) 我が志賀にかくれ家を尋ねし時なぞ名乗りてはくれざりしぞ

〔考異〕

(一) 給ひつる―給へる

(三) にてぞありしそれは―にぞありしこれは

(四) 思う給へつゝ―覺え給ひつゝ

(六) そで君―ナシ

中納言いと花やかにもてなされて、かくてもつきなからずや、山里につれぐと、

男どもをのみ使ひておはせしよりは、と思ほさるれど、なほ世の人の心をつよみ

て、北の方には物も聞え給はず。塗籠はなくて、中戸をたてて、東の方には北の

方、西には中納言と、いと疎々しうて、女も召使ひ給はず、使ひつけ給ひつる男

を召し使ひ給ひつよおはす。時々、姫君のみ呼びわたし給ひつよ、物語し給ふ。

實忠「年頃は、何事かし給ひつる。一日こよに物し給へりしは、かの山里におはせ

し人ぞかし。そのかみは中將にてぞありし。それは、萬の事する中に、琴の上手

ぞ。それこそ、紅葉見るとてありし。そこにや有りけむ、琴弾きしを、「よくなりぬ

べき琴かな」と宣ひしが、その後はよくなりたりや」そで君「年頃は、夜晝、こひし

く悲しくのみ思う給へつよ、世にえ侍るまじくのみ思えしかば、「かくてもえ對面

すまじきにや」と嘆かれて、萬の事もかひなく、徒然となむながめ侍る」君、實忠「な

どか、まうでたりしには、こよには「我ぞ」とは宣はざりし」そで君、「さ思う

(語釋)  
(二)あて言の

(三)つがせしかどゆめ」  
歟

(四)出家して後女に近づ  
く様に見ゆる故矢張今迄  
通りにして居らん

(考異)  
(一)ゆめ人には―ゆめも  
人には

(五)御返―御返事

給へしかど、母君制し給ひしかば、出でて、聞召しもやするとて、よろづの事を聞えしかど、知しめさずなりにしかば、いとこそ悲しく侍りしか」と聞え給へば、心あやまりこそしたりけれと思して物も宣はず。

かくなどぞもてなして、隔て給へど、北の方には、人の寢静まりたる夜々、中戸より窃に入りて、時々物など聞え給へど、ゆめ人には知られ給はず。みそか人のやうにてぞ聞え給ふ、實忠「年頃、心變りてあるやうなりつれど、御もとより出で

て、他人を目に近くだにぞ見ざりつる。この西の院に有りし時、物聞えし人の御許

なりし、兵衛といひしになむ、物聞えつがせしこと、ゆめ戯れ事も言はずなりに

き。此頃ばかりぞ、斯くてありつる。容貌ことなる頃しも、人に物聞ゆるやうな

れば、なほ斯くてはあらむ」とて出で給ひぬ。

晝つ方、御文かきて、中戸のもとにて、姫君を招き寄せて、實忠「これ、母君に奉

り給ひて、御返取りてを」と宣へば、持ておはして、然らぬやうにて奉り給へ

(五)



〔語釋〕

(二)「あなたのかたまはりて見む」歎

〔考異〕

(一)民部卿の物し給へり  
—民部卿ものし給ふ—民部卿ものし給ふ

(三)昔のみ—み—ナレ

(四)給ふるも—給ふるに

ば、民部卿の物し給へり。北の方斯くこれかれ物し給ふに、物いはすと見給ふらむ、  
と思せは、取りて見給ふに、民部卿 實正「あなたのかたま見む」と宣へば、姫  
君、そて君かしこに立ち給へる、「人に見すな」との給へるを」 實正「いかど思すらむ  
と、いとゆかしく思ひ給ふるに」とて取りて見給へば、

實思いと哀に、昔のみおほえしかば、萬聞えむとせしを、山籠の心なきやうに  
やとつよましくて、

逢ひも見でふる年月はなになれや暮がたくのみ見ゆるあきの日

暮にだに、心靜にもがな。忍びて、こなたにもやがて。

とあり。民部卿 實正「さればこそ。悪くやはたばかり聞えたる。はやく御返事聞  
え給へ」と宣へば、實忠實「何か」とて書き給はねば 姫君、

思ほし出づるなるは、近かりし昔の効にや と思う給ふるも、けに如何にと  
なむ。いでや、

〔語釋〕

(一)實忠が妻の方にゆき居る時

●正頼食物を實忠に贈る 實忠小野に歸る

〔考異〕

(二)瓜一粟

(三)人の許にとて一ナシ

(四)來ぬらむゝぬらむ

(五)給へ給へや

餘所なれどなほ夕暮はたのまれきかはるを見つる今ぞかなしき  
心細くなむ

とて奉り給ふ。

かくて夜さりつ方、此方にわたり給へるほどに、左大殿より、よき蜜、瓜、焼米、

生海松、水茨など奉れ給へり。北の方の御許に御文あり、

正頼一日参りたりしかど、出で立ちたりしなどありしかば、煩はしさになむ、急ぎ。さてみるはた人の許にとて、

わだつうみの底に入りてぞ求めつるものと見るめをかづき來ぬらむ

とく見習し給へ。焼米は、嬭の齒は立たで、噛み残したる。若人の御許に。

とあり。取り寄せて見給へば、いとよき瓜、よき水茨、折櫃に積みて、大なる甕

に、「おひ姫君なむ御覽ぜよ」とかきつけたり。あけて見給へば、銀の甕どもに、

練りたるきぬ、唐綾など入れて、糸を輪にまけて、組みて、沈の枋につけたり。

〔語釋〕  
（一）「とて」は「さて」なるべし

（二）誤なるべし

（三）「やうせ」は「やかせ」歟

（五）などして「の下脱文なるべし

〔考異〕

（四）給ひつゝ給よ

中納言見給ひて、實忠「あな忝や。わづらはしく御志あるを、枋かたがはえ給へる」とて奉り給ひつ。御返事は、

實忠妻何事か、怪しうなむ。とて、この海松は、

伊勢の蟹あまもみるめをかくしかづきせばうきに心はしづまざらまし

燒米やいごめは、大かみにこそはなむ。さてもやまとのには見え侍らずなむ。あなかしこ。いととくやうせ給へ。

と書かせ給ひて、御使うけつかひに祿賜ろくたまひひて、奉れ給ひつ。かくて、夜々よるよるなほまうで給ふ。

姫君ひめぎみに、實忠「今は御服おんぞくぬぎ給ひてよ。明日あすなむよき日」と申し給へば、そて君「人

人の脱ぬがせ給はむ時にこそ」と母君ははぎみは宣のたまふ」と申し給へば、實忠「益えきなき事。かた

の如ごとくにて、親おやありとならば」とて御車くるまども、御前ごぜんなどして、脱ぬがせ奉り給

ふ。歸かへりおはしたるを見給へば、濃こき御衣おんぎ、小袷こうちぎなど著きたま給へる御容おんかたち貌かたち、いと清きよら

なり。藤壺ふぢつばのやうなる人の、氣け少し劣おとりたるなり。父君ちちぎみ、いとよき御女おんむすめなりと見

〔語釋〕

(一) 君が來ぬ間れの意歟

(二) 讓位の事近くなりたるをいふ

④ 東宮よりあて宮へ消息、東宮、あて宮の返事なきを怪む。

(三) 「これした」なるべし

(四) 前の如く矢張あて宮の御返事なくば再び歸り來らな

給ふ。

かくて、小野へ物せむと思ほす。北の方同じ装束いと清らにして奉れ給ふとて、

賢思妻君にとてぬひし衣もこぬほどに涙のいろに濃くぞなりぬる

御返し、

賢思涙にし濡れけるきぬの黒ければなほ墨染といかど思はぬ

とてあからさまに小野へおはしぬ。

かくて東宮は、藤壺の参り給はず、御返さこえ給はぬをおもほし嘆きて、院の御

方、梨壺なども久しうなむまうのほらせ給はず、御局へもわたらせ給はず、つれ

づれと物も聞食さず、日に隨ひて、御氣色あしうなりおはしませば、内裏にも、

朱雀「折しまれ、かよる頃しも惱み給ふなる事」と聞え給へば后宫、「何か。ことな

る事にもあらじ。暑氣などにや。さては、漫なることを思すにこそあらめ」など

聞え給ふ。これかたの藏人召して、御文賜ひて、東宮「これ、前々のやうにならば、

(三)

(四)

(考異)  
(一)かくて…御文も侍る  
とて奉る一ナレ

(二)心憂かるめれば欺

(三)出勤をとどめられん

更さらになまゐりそ。さふらはせじ」と仰おほせらるれば、痛いたうなけきて、持もて参まゐりて奉たてまる。かくて例れいの藏くら人にん参まゐれり。「此頃御返事このころかへりごまこと少すくなに、御心ごころゆかぬやうにてあやしきを、参まゐりて御氣色ごきしよ賜たまはれとてなむ。御文ごふみも侍はる」とて奉まる。見給みたまへば、  
(二)東宮とうきゆうたびく聞きゆれど、物ものも宣のたまはせざめれば、いと覺おぼ束つかなくてなむ。人のあやしがり騒さわぐなむ聞ききにいく、聞きえじと思おもへども、然さてのみは有あるまじければ、  
とて、

もろ共ともにありてぞ夜々よよも惜をしまれしかくてはなぞやつゆの命いのちも

いでや小ちひき人々ひとびと數多かずたあめれば、そこの御爲ためにこそ、命いのちもさらぬ事ことも、いかで  
かは。心憂こころからめれば、世よに在あらまほしくもあらず。

など有あり。見給みたまひて、例れいの物ものも宣のたまはず。藏くら人にん、「御返持ごへんもちて参まゐらずば、簡削かんせつらむ」と  
(三)仰おほせられつるものを、御德ごとくに、勞いたりなさせ給たまへ。とどめられ侍はりなば、いと効かひな  
く」など申まうす。孫王そわうの君きみをはじめて、兵衛ひやうゑ、「あこきを願かへみさせ給たまふと思おもほして、

(語釋)

(一)しきじにもしか、職事は藏人の中の専務にて殊に權力あるもの

(三)これはたけ乳母子なればとて宮が特に大事がり居る事故

(四)免官せば

(五)東宮の心

(考異)

(一)思はむさばかりと思はむと同様のことかちせ給へり藤壺さらば今日はさもやと御心うるばかり御返事きこえじさばかり

(六)人々今ば

(七)のほらすのほらす

しるしばかり聞え給へ。これが徒らになりなば、いと悲しう」など集まりて申す。君、あて宮「御返聞えずとて、御使を罪し給はど、わが爲にぞあらむ。罪し給はずば悦と思はむ。さばかりだに仰せられたらば、これに勝りたらむしきにも申しなしてむ」と宣へば藏人、「いかどし侍らむ。やがて参らずや侍るべき。参りてかゝる由をや啓し侍るべき」上、あて宮「たゞ参りて、「御返事も聞えず」と乳母たちして申させよ」と宣へば、泣くく参りて、然啓せさす。宮、これは、乳母子とて、いとらうたくするものぞ。これを解き棄てたらば、これが事言ひに、文はおこせてむと思ほして、勤事にすゑ給ひつ。かくて、日頃待ちおはしませど、殿の君たちの参り給ふに、是にやとおもほせど、御消息も聞え給はず。いみじう恐ろしき人の心かな。何により、斯く深く怨すらむ。人々まうのほらすとにやあらむ、と思し給ふ。残は次々にあるべしとぞ。

(六)

(七)

國讓(下)

梗

● 朱雀院の後宮、忠雅兼雅仲忠等を招きて梨壺腹の皇孫を東宮に立てんことを謀る。忠雅等之に與かる事を辭す。○ 后宮、東宮に梨壺腹の皇孫を立てんことを勸む。東宮喜ばず。○ 后宮更に兼雅を招きて事を謀る。○ 后宮、立太子の事を帝に迫る。帝故らに決せず。后宮の怨。○ 朱雀院讓位。今上の即位。女四宮(承香殿、季明の女、昭陽殿)忠雅の女麗景殿、あて宮藤壺等女御になさる。○ 后宮、忠雅を招く。忠雅が后腹の女三宮の甥になるべき噂。慮々よりの祝に集まる。立太子の噂。忠雅を以て忠雅を招く。忠雅脚氣と稱して行かず。后宮、忠雅の假病を悟る。○ 忠雅歸りて六の君を招く。六の君歸らず。○ 即位式。忠雅不參。正賴以下昇位。司召。季英以下昇進。○ 六の君なほ歸らず。仲忠妻を警戒す。○ 朱雀院の氣樂なる生活。御子たちを招く。仲忠警戒して女一宮を參らせず。○ 后宮、兼雅に文を贈りて立太子の事を迫る。○ 世間の噂。正賴、あて宮の落膽。○ 仲忠の女一宮に對する釋解。仲忠、水尾に仲賴を訪はんとす。○ 仲忠、涼、藤英、行政、忠こそ等仲賴を訪ふ。○ 仲賴の欺待。管絃。讀經。贈物。仲忠、仲賴の子どもを世話すべき事を約す。○ 仲忠、朱雀院に參りて水尾の有様を奏す。○ 仲賴、涼に贈られし米、綿などを妻の許に分つ。○ 藤英時めく。妻の己に不満なるを諷す。○ 立太子の期近づく。○ 紹

(語釋)

(一)朱雀院の後

(二)忠雅、後の兄弟

(三)忠俊、清正、共に忠雅の子

(四)兼雅

(五)仲忠

(考異)

(六)いざさらば仰せごと

侍るにさふらはむと聞え給ふ—今さらば仰せごと

承らむと聞え給ひて

●朱雀院の後宮、忠雅兼雅仲忠等を招きて梨壺腹の皇孫を東宮に立てんことを謀る。忠雅等之に與かる事を辭す

概

望せる正頼。●立太子の當日。忠雅召さる。●忠雅密書を正頼に贈る。あて宮腹の御子立太子の吉報。一家のさよめき。兼雅、仲忠等の態度。●立太子の宣旨。東宮付職員任命。●后宮、仁壽殿女御の榮華を憤る。出家の望。●六君夫の許に歸る。●嵯峨大后の落膽。●梨壺腹の御子、あて宮腹の第二の御子共に親王になまる。●今上、あて宮の歸りを促す。●仲忠、あて宮の御方に伺候す。東宮參内の用意。●あて宮、實忠にそて君を入内せしめん事を勸む。實正の賛成。●東宮、あて宮參内。行列。仲頼の妻と其の母見物の中にまじりて行列を觀る。●今上、あて宮并に其腹の皇子たちを寵愛せらる。登花殿懷胎。●新年、菅原忠保修理頭に任ぜらる。滋野眞菅父子散されて召還さる。女四宮、皇子を産む。●仲忠、母を訪ふ。女二宮の噂。●正頼女二宮女四宮を自邸に迎ふ。祐澄近澄等女二宮を途中に奪はんとして成らざ。●五宮、彈正宮に托して交を女二宮に贈る。●女一宮難産。人々の周章。仲忠の悲痛。正頼の同情。男子を産む。女二宮の乳母が祐澄の胎を受けて、女一宮の御産の騒ぎに紛れて女二宮を盗ませんとせし噂。●嵯峨大后、今上の女今上、朱雀院以下參會。詩歌。仲忠講師をつとむ。嵯峨大后、今上の女四宮に厚からざるを怨む。

かくて中宮より、太政大臣に、その日の夜うさり、后、聞ゆべき事なむある。大納言、宰相もろ共に忍びてものし給へ。切なること聞えむ」とて奉り給ふ。右の大殿にも、后、大將もろ共にものし給へ」とあり。おとどたち、「畏まりて承りぬ。」

(六)



(一) 諸卿

(二) 帝の

(四) 百如の首班は其方なり

(六) 正頼方は

(七) 大臣は正頼のみ

(八) 季明は死去したり

(一〇) 東宮に忠雅兼雅ら  
が女を奉りし時は其等の中  
には皇太子を生む人あるべしと思ひしに

(一一) ちて宮をいふ

(一四) あめれと詠

(考異)

(一) 人みな一人を少な

(二) 斯くし來る一かくし  
つる

(五) やんごと一やうごと

(九) 臣の物し給はずなり  
ぬ一ちととに物し給へ

(一二) ナトなる一心の  
まくなる

(一三) になく一二つなく

ざさらば、仰せごと侍るにさふらはむ」と聞え給ふ。その夜になりて、皆参り給へ

り。後の宮、御前の人みな立てさせ給ひて、請じ入れ奉り給ひて、太政大臣に

聞えさせ給ふ。且、消息に聞えしやうは、昔よりこの筋に斯くし來る事の今違ひて、

行末まで絶えぬべき事聞えむとてなむ。御國讓の事、この月になりぬるを、宣ふ

やうは、「同じ日、東宮も定めさせむ」となむあめる。それを、己等もあるに、

の上にては、そこにこそ物し給へ。又次々斯くやんごとなく物し給ふを、かの筋

は、おほいまうちぎみのみこそは。大臣の物し給はずなりぬ。さてはみな下藤

(七)

(八)(九)

(五)

にてのみこそは。この筋にしつる事を、一世の源氏の女、后になり、その御子坊

にすゑたる事は無かなるを、などかこれしも然るべき。宮に女をこれかれ奉り

給ひし時は、この中にさりともこそ思ひしか。年の越ゆるまでさる事のなきを、

思ひ歎きし程にすゞろなる人出で来て、になく時めきて、子をたゞ生みに生めば、

これにこそはあめれ。この筋の絶えぬべき事、くちをししく思ひつるを、此の梨壺、

(語釋)  
(七) 後の御意見を帝に申上げられて帝が決定せられなばそれにて宜しかるべし

(九) ちて官が退出し居れりとして

(一〇) 東宮

(一一) 梨壺腹の御子を東宮に立つると聞かれなば

(一二) 梨壺腹の王子

(異考)

(一) 坊には「は」ナシ

(二) 捨てて「捨てつゝ

(三) 恥とあるをば何事も「恥」となる大いなる事を

(四) とみに「とばかり

(五) いかでか「いかでか申さむ」いかでか何をか申さむ

(六) 時こそ「時にこそ

(八) その御心に「みこのとみに

思ひの外に夢のごとし給へるに、斯かる折に、これを坊にはすゑむとなむ思ふ。

女はよになき物にもあらず、此の御身のすぢを思ほし捨てて、來し方行くさき、

又此筋の恥とあるをば、何事をもとどめ給へ」と聞え給へば、太政大臣、とみに

物も宣はず、しばし思ほしたためらひて、思雅「忠雅らは、ともかくもいかでか申さ

む。臣下といふものは君の若くおはします、御心の疎におはします時こそ侍れ、

斯く明王のことおはします世には、何事をかは定め申さむ。たゞ「その御心に

かくなむと思す。如何」と聞え給はむに、御心にさだめさせ給ひて、これをと

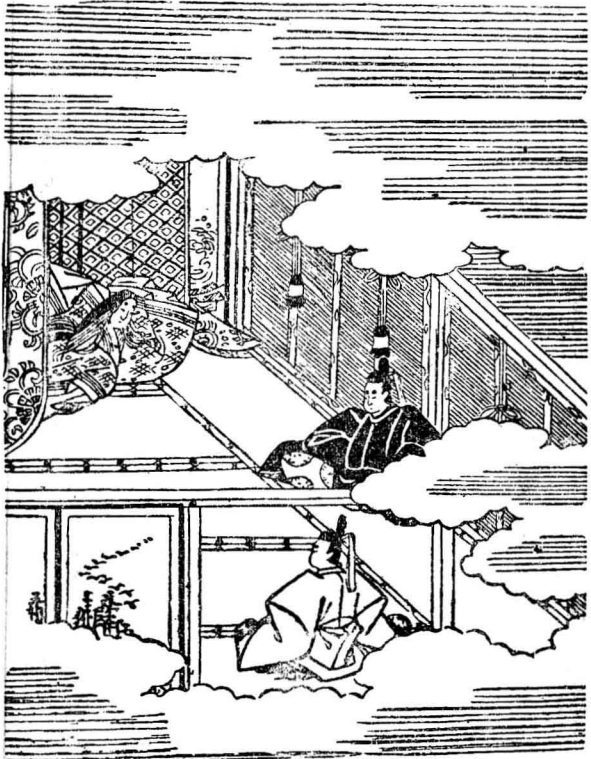
さば何の疑か侍らむ」中宮、「それは、然ばかり、此の頃里なりとてだに、戀ひ

悲しび、物もまゐらず、影のごとなり給はむ人は、まいてかけても聞き給ひなば、

徒ら人になり給ひなむものを。他の國にも、大臣公卿定めてこそは、よろづの事

をもしけれ。これかれ心を一つにて、この事を、斯くなむ有るべき。この筋のむ

けに無くばこそ、他筋のまじらめ。かく然るべき人を措きては、いかでか」と己等



(語釋)

(一)東宮は

(四)兼雅

(五)兼雅の意見によりて決すべき事なるべし

(六)帝の

(七)兼雅

(九)正領の味方なり、忠雅父子仲思いづれも正領の縁者なるをいふ

(二〇)我子仲思が仁壽殿腹の女一宮を妻にし居れば

(考異)

(二)悲しと一悲しく

(三)御心あらば一御心のあらば

(八)かく一ナシ

(一一)仁壽殿もあて宮も正領の娘なり

もそこにも申さばこそ、さすがに道理失ひ給はず、賢しくおはする人なれば、心には、あかす悲しとおほすとも、世を保たむと思ほす御心あらば、ゆるし給ふやうもあらめ。おのれ一人「斯うなむ思ふ」とは申さじ」おとど、忠雅、忠雅は、承らす侍りぬべし。公卿大臣さだめ申し侍りなむ。大臣は御女のことなれば、こよにこそは、まづかよる事はしも依りなむ。如何なるべき事ぞ。男ども」と宣へば宰相、大納言、忠俊清正「さらに知り給はぬ事なり。上の定めさせ給はむまよにこそ従ひ侍らめ」おとど、忠雅「さらば、大臣は御女又御孫なり。大將は下藤なれど、ゆく未只今、物のかためと侍り給ぶ人なり。その妹、御の上なり。有るべからむごと定め申し給へ。忠雅はそれを承らむ」右のおとど、兼雅「いと尊く、斯く思ほし召させ給ひける。かく仰を承るは嬉しけれど、こよに五人さふらふ人は四人はみな犬に侍り。兼雅も此の朝臣侍れば、思ひ棄つべきにも待らず。降り居おはしますべき帝の、數多の御子たちの母にてさふらひ給ふも、世を継ぎ給ふべき君

(二〇)

(二一)

(語釋)

(一)あて宮腹の三皇子を

正頼の預かれるをいふ

(二)忠雅父子仲忠と正

頼の女どもと

(三)誤あらんか

(四)忠俊等の生母、兼隆

の先妻

(五)仁壽殿の妹、正頼の

六の君

(七)八は七の誤なるべし

(八)當に生れんとする子

もあり

(九)忠俊がつまらぬ女に

關係したりとて

(一〇)兼雅一本「さねま

さ」いづれにても解しが

たし、宰相清正の妻は正

頼の八の君也

(一一)女一宮の夫にまれ

るをいふ

(一二)犬宮

(一三)正頼が聞かば

(考異)

(六)給はず侍るなる一給

はざなり

(一〇)なくもてわび一な

くてもてわび一は

(一二)子に一こより一は

の二つなく思ほして三所の君も近うさふらひ給ふ、同じ人の女なり。この御中ども

疎なるにもあらず。如何、命をかけ給へるやうなり。この太政大臣君この子ども

の母まかり隠れて後、この女御のはらから持たまひて、又一日一夜別の所をなむ

知り給はず侍るなる。その母に、子四人侍るなり。又この大納言の朝臣は、その

妹の八にあたるをなむ持て侍るなり。それまた、子一人。又今日明日にて侍り。

これ去年の今日、はかなき人に物言ひ觸れて侍りとて、まかり去りて親の許に侍

りければ、この幼きを取り持てなむ、せむ方なくもて佗び給ひけるが、辛うじて

此の頃なむ、あの父など言ひて、わたりて侍るなる。宰相の朝臣のも兼雅が姉の

腹なり。それも子ども侍り。仲忠の朝臣、かの家に侍らねど、あるが中に君にし

てもてかしづき侍る人につきて侍り。子に、限なくかなしうする女子侍り。また

も有るやう侍るなり。かくの如、手を組みたるやうにゆき交り、此の中にいさよ

か疎ならず、命をかぎりて侍るに、斯かることをなむ相定むると聞き侍りなば、

〔語釋〕

(一) 正類は

(六) 仲弘

〔考異〕

(二) その一ナシ

(三) めのことともも侍る  
はなど一女御のこともら  
侍るなど一めのことども  
も侍はなど

(四) 目か一日か一べき  
か

(五) しつるししたるし  
をり

(七) 朱雀院第三皇女

この女どもをも取り離ちて、帝にもかれこれにも、又相見せ奉るべきにも侍ら  
ず。いとよき人なれど、いと急に強き人になむ侍る。また然思はむ理になむ。  
家の尊きことは、かやうの折の用意なり」と聞え給へば中宮、おほきに御聲出だ  
し給ひて、后宮その仁壽殿のめのことともも侍るはなど、すべてこのめのことども  
は、如何なる目かつきたらむ、つきとつきぬる者は、みな吸ひ付きて、大なる事  
の妨もしつる」と宣へば太政大臣、忠雅かの大將の朝臣の聞きはべるに、いと  
不便なる仰なりや」と聞え給ふ。忠雅忠雅らは、人にも侍らず。かの朝臣は、男  
だに恥かしく侍るものを」とてうち笑ひ給へば、みな笑ひぬ。后宮然ぞかし。女  
なる己らだにこそ、筋の絶えむことは思へ。主たちは、何のなり給へればか、そ  
の妻子の悲しとて、かゝる大なる事の妨をば、なさるゝ。世の中に、女はなき  
か。それに勝りたらむ人をも、おのれ奉らむ。近うは、己が一人もち奉りた  
る女御子え給へ。然りとも、その女の子どもには劣らじ。いと斯く拙くな計らひ

(語釋)  
(四)東宮に

(五)「と」衍文なるべし

(六)東宮があて宮を譲せらるること

(九)あて宮腹第一の王子  
(一〇)誤あらんか

(考異)

(一)なめれど一なめり

(二)ある一ナシ

(三)かこれば心おぞくなむ一かく心をとなへてなむ

(七)になく思したるとて一ふたつなくおほしたのみて

八)さても一ナシ

(二)あなほうしくとくなしつべかりき一あるほうしくとなしつるつきて

給ひそ」太政大臣、忠雅「なほこれは私事なり。なほ侍ることを斯うなむと申さ

るなめれど、子を思はぬ人なれば、ことの道理のある事なり。かゝれば心お

ぞくなむ、え申すまじく侍る。なほたゞ、啓するやうに、御子の君に、有るべき

様を、善からむ折、こしらへ聞え給えと。仰ごとにて許し給はゞ、この中の幸

にてこそ侍らめ」後の宮、「其處たちは、妻方をのみ思して、宮のになく思したる

とて宣ふにこそあめれ。よしや。我なほ世の中の事どもまかせて見居らむ」と宣

ふ。右のおとゞ、兼雅「さても、此坊がねの君をば、まだ御覽せぬにやあらむ。そ

の君は、もとより天地に承けられて、明王がねと生れ給へる人なり。彼をきしろ

ひ思さば、いと悪しからむ。なほかゝる御おもてだてもみずと言はれ騒がれ侍り

つるに、かゝる事の侍るこそ、恥すこし免かれて思う給へられてぞあらむ。人に

きしろひて、徒らにならむと思ひ給へず。知るく、のやうにても、え侍らすのみ

こそ」宮、后宮「あなほうしくとくなしつべかりき。男の端となりて、斯う物を言

語釋  
(一) 誤あらんか

(二) 東宮とても

(三) 女ぐるひ

(五) あて宮をいふ歌

(六) あて宮が里にありし時は

(八) 呪ふ詞也

(九) 東宮

〔考異〕

(四) おはせずをはたあまがつ―思はずはをあまがへ  
(七) 侍りし―侍る

◎后宮、東宮に製盤腹が皇孫を立てんことを勸む。東宮喜ばず。

はむよな。一人だに賢きものは。たゞ女の子どものやうにて」と腹立ち給ひて、その朝にも宮とても、妻まきぐるひをこそし給へ、いと憎けにはおはせず、をはたあまがつ女なれば、おもてはふけたるにこそあらがはざらむ。けに、氣色の恐ろしけに、人を殺すべからむは何ぞ」太政大臣、東皇侍る人なり。更に凡人に侍らず。氣色ありさま、いと恐ろしき人に侍り。かの大將の朝臣こそいまだ若き男には侍れど、いとよく人見侍る人なり」大將、仲馬うたて、遊のやうに申さるゝかな。なほ見侍るに、いとかしこく見え給ふ君也。かの侍る所に住み給ひし時は、近く侍りしことなり。いと恐ろしく侍りし」と聞え給へば後の宮、「さる者しもぞ、神佛はほしうし給ひしかな」と宣ふ。おとゝたち、「よき事に侍れど、えなむ此の中には定め侍らぬを、なほ申しつるやうに奏せさせ給へ」とて皆まかで給ひぬ。

かくて日頃ありて、宮に、后宮聞えさすべき事なむある。わたらせ給へ」とあれ

(九)



(一) 御血族にて

(二) あて宮に離れては

(三) 梨邊護立太子の事あらばあて宮は御血族中に歸るまじ

(四) よく共は「いかでか」の誤か

(五) 史難らが葵の方の事を思ひての意歟

(六) あて宮腹を立てんとするを歟

(七) 位なども一即位も

(八) なほ一なせ

ば、渡らせ給へり。御物語など聞えさせ給ひて、后宮斯うくなむ思ふ。如何に

有るべきことぞ」と聞え給へば宮、いと御氣色あしくて、青くなり赤くなり、物

も聞え給はず。いと久しくありて、東宮昔より、誰も、親の仰せごとは、ともあ

れかうもあれ、否び聞えじと思ほえ侍れば、否び聞ゆべきには侍らず。この國な

らず大なる國にも、國母、大臣ひとつ心にてこそ、事を謀りけれ。臣下ども、御

脚末にて、やんごとなくともせらるめるを、相定めて、ともかくもせさせ給ふ

ばかりになむ。こよにはた、かの人離れては、いと便なく侍るに、かふる事侍ら

ば、参るべきにも侍らず。されば、かの人、幼き者もろ共に、生くとも死ぬとも、

山林にも入りて侍るばかりにこそは。位なども、願みむと思ふ人の爲にこそは。

なほ俄にこれを徒らになしては、よく共侍るべき」とて涙をこぼして立ち給ひぬ。

宮、后宮聞えじと思ひつる事を、これらが女がたに思ひて、己等は知らず顔にて、

然はせむといふを、かふる中らひに離れたる人をば、入れ交ぜむが憎さに、宮に

しかぐ、申せば、かく宣ふなめり。大方はさざれい」など腹立ちておはす。

畫詞

こゝは後の宮。

かくて又後の宮、右の大殿に、后后しの忍びて、直衣なほしよがた姿にて物し給へ。聞ゆべき事な

むある」ときこえ給へば、その夜参り給へり。宮對面たいめんし給うて、后宮ごう宮に、かの

ありしこと聞えしかば、「ともかうも、あるべからむやう様に。此處こゝにはいかでか」と

有りしかど、氣色けしきむよくも見えざりし。それ思ふやうは、上に聞えて、同じ日

定めさせ給ひて。たゞ太政大臣おほきおとぎの御心みこころなり。そこには彼方かなた此方こなたにより給はんや

は。位くらゐに居給ひぬすなはちこの事ことをこそは思おほさめ。王昭君わうせうくんを胡この國くにへやり、楊貴妃やうきひ

を殺させ給へる帝みかどなくやはありける。太政大臣おほきおとぎは、女おんなを思ひ給へれば、それにつ

つみ給へるにこそあれ。すべき様やうなからずと思ふを。さる心こころし給へれとなむ」お

とゞ、兼雅かねみやともかうも、御心みこころと定めさせ給はむになむ。こゝには、みなく、人々ひと々

かのそに入りまじりて侍れば、心一つこゝろひとつによろづ思ひ給ふとも、力ちからなう侍るべけれ

- (語釋)
- (一)「さ」衍文歟
- (三)兼雅
- (四)東宮に
- ◎后宮更に兼雅を招きて事を謀る。
- (六)朱雀院に申上げて御讓位みじやうゐの日に太子を定められよ
- (七)其方は梨壺の父なれば無論此方の味方ならん
- (一〇)東宮が
- (一一)「かのぞう」(族)に入りまじりて「歟」一本「人々かのぞ」を「人々の數」とかけり
- (考異)
- (二)さばれいさいはれむ
- (五)様に一様にとて
- (八)やは「は」ナシ
- (九)居給ひぬすなはちこの事をこそは「居たまひぬともなほしはしくゆなりしとこそ

(語釋)

(一) 女一の關係上正類に  
屬すべき筈なる上又特に  
あて宮に心を寄せ居る譯  
もあれば梨壺方に變ぜし  
むること叶ふまじ

(四)「ならむ」は「ならば」  
歟

(七) 同日に決定したしと  
思ふ譯は

(八) 梨壺腹に皇孫のある  
上は

(九) 女四宮

(一)「ものならば」歟

●后宮、立太子の事を帝  
に迫る。帝故らに決せず  
后宮の怨。  
〔考異〕

(一) 侍るめれば一ばべめ  
れば

(三) よにも「もしナシ」

(五) 宜はむせさせ給は  
む

(六) やは「は」ナシ

(二) 給へるがそれし  
給へるなりそれしも

ば、思ひかけぬなり。たゞ仰せごとになむ。萬の事、仲忠の朝臣に語らひて侍る

を、大方の心よせよりも、また思ひ侍るめる筋侍るめれば、よにも動じ侍らじ」

宮、后宮いと不孝の子こそ、然こそあなれ。然不孝ならむものをば、子ともな見

給ひそかし。さもあらばあれ、それ等は一つ心ならずともありなむ。たゞ一の上

だに一つ心ならむ」と宣へば、兼進承りぬ。たゞ宣はむになむ」とてまかで給ひ

ぬ。

かゝる程に、上わたらせ給ひたるに、后宮國讓は、實にいつ程にか侍らむ」上、

朱重「この十餘日ばかりになむ」后宮坊も同じ日にやは定めさせ給はぬ」上、朱重何

か、然あらずとも。騒がしきやうなり。長閑にもありなむ」宮、后宮その由は、

かうく思ふことなむある。その人無かりし時こそ、あるに隨ひてと思ひしか。

かゝる人ありとならば、同じくばその腹のをとなむ」上、思ほすやう、宮孕み給へ

るが、それし男ならば、これをもや、とこそ思ひ聞え給はめ。然あらぬものから、

(一)

(二)

(三)

(四)

(五)

〔註釋〕

(一) 正類

(二) 帝の外戚になりえぬ事を怒りて

(三) 仁壽殿

(六) 不幸歟、仁壽殿が帝を擁ひ奉りての意歟

(七) 帝が

(八) 仁壽殿をさふ

(一〇) 仁壽殿へ

(一一) 東宮

〔考異〕

(四) あらむ—あるらむ

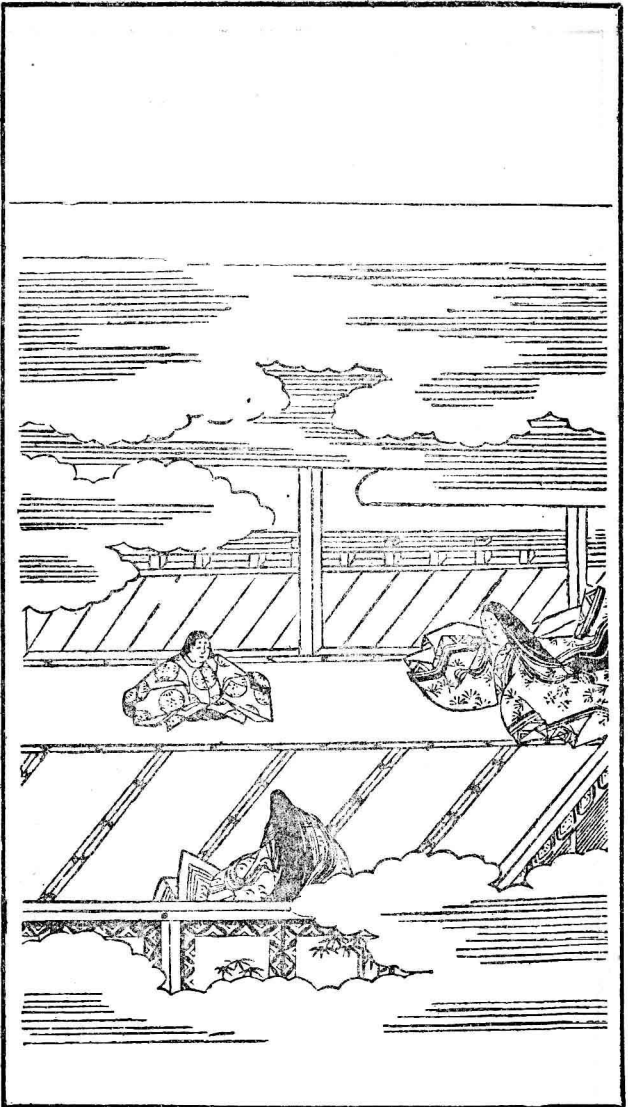
(五) さかしらをも—さかしらも—さかしうも

(九) それ—それを

(一一) あんめる—あめる

左のおほいまうち君の思はむ事あり。そこばくの御子の祖父にて、かくあること  
 思ひて、女御をもまかでさせ給ひて參らせずば如何せむ、と思はして、朱雀何か。  
 只今ならでも有りなむ。自ら位にあり定まりて、親とあらむ人の心よろしからむ  
 やうに定められむ。然しも思はざらむ人を子にしたらば、あぢきなくさかしらをも。  
 恥かしき人にさも覺えじや」と宣へば、后宮この仁壽殿の盗人により、宣ふ  
 ぞかし。ふけうし奉りて、籠り居りて、戀ひ悲しび、待ち居て、青蠅のあらむ様に  
 立ち去りもせでおはすれば、如何に恐ろしく思さるゝらん。さる人のゆかりをこ  
 そ思すらめ」上、うち笑はせ給ひて、朱雀何か、然までも思すや。めづらしき人な  
 らばこそ。神さびにたる子どもの母をば何か。十の君の、まだ見ざりつるが有り  
 ければ、それ見にこそ時々わたれ。さて宣ふやうは、彼處に、しづかになりなむ  
 時、あるべき様に語らひ給へ。便あるべからむことを宣はせむには、よも否びら  
 れじ。やんごとなき人の、みな御脚末にてあんめるを、わいても思ふ人の類と宣

(一一)



(語釋)

(一) 兼雅

(二) 仲忠

(三) 正頼

(五) 正頼が不平を起して頼どもを引取りたらば

(七) 帝位を我獨りのものと見よとていつ迄も歸らぬのか

㊦あて宮歌を以て東宮に立太子の噂につきての不平を漏す。

(考異)

(四) 才もあり心もいとかしこく重し—才あり心もいとかしこくをかし  
(六) 給ひて—給ふ  
(八) をば—をも

へど、世をば左大臣、仲忠の朝臣となむ政つべき。太政大臣、いとよき人なれど

も、才なむなき。才なき人は、世のかためとするになむ悪しき。右のおほいまう

も君は、有様、心もかしこけれども、女に心入れて、好いたる所なむついたる。然

るべき人は、頼もしけなくなむある。この二人は、大將の朝臣は更にいふべきに

もあらず。今一人も、才もあり心もいとかしこく重し。その人臥し籠りて、女と

もとり持ちて惑はさむに、人々なむ騒ぐ事あらむ。よし見給へ」と聞え給へば、

后宮「よし聞えじや」など怨じ聞え給ふ。

かくて御國讓明日になるまで、藤壺、藏人の事も申させ給はず。宮、斯うながらあ

らば、徒らになりなむと思して、その日勘事ゆるさせ給ひて、さて夜うさりつ方、

他藏人して聞え給ふ。

東宮日頃、ことに参り給ふやとのみ。年頃契り聞えし事を、違へ給ふめるこそ。

もろともに思ひそめてし紫の雲の原をばひとり見よとや

(七)

(語釋)

(一)我が生みの御子の太子に立たぬを憂みたる也

(三)新帝が

(四)昭陽殿

●朱雀院讓位、今上即位。  
女四宮(承香殿)、季明の女(昭陽殿)、忠雅の女(麗景殿)、あて宮(神意)等女御になさる。

(八)忠雅の娘の麗景殿とあて宮とを

(八)皇后にもなるべき

(考異)

(一)こうとければ―ことなれば―ことなれど

(二)宮の―の―ナシ  
(七)なりて―て―ナシ

と聞え給へれば、たゞ斯くなむ、

あて宮ながきよを見るべき人はうとければ餘所にのみきく雲の原をば

(二) (三)

と聞え給へれば、この後の宮宣ひし事によりてなりけりと思ほして、あな幼や、天下に言ふらむと思す。

下に言ふらむと思す。

十一日に、御國讓り給ひて、帝は朱雀院に出で給ふ。仁壽殿の女御、御供仕、うまつり給ふ。後の宮は、内裏におはしませど、藤壺のもろ共に見給はぬを、夜晝思

ほし歎きて、更に人もまうのぼらせ給はず。こと君たちは、みな参り集ひ給へり。

しばしありて女御なし給ふ。唯今しも、なし給ふまじけれども、藤壺を参らせ給は

むとおぼして、急ぎなさせ給ふ。四の宮ひき越えて、故太政大臣殿の、一の女御、

今の太政大臣のと、藤壺とを二の女御となし給はむとする時に、後の宮の聞え

給ふ、后宮、いかでか、梨壺をばなし給はぬ。さかしき世ならば、これも王の親と

もなりて、高き位にもなるべき人なり。かく亂るゝ折なれば、かくいふにこそあ

(七) (八)

(二〇) 昭陽殿  
(二一) 昭陽殿

(二二) 昭陽殿を女御にして

(二三) 季明の女は

(二四) 庶雅の女は

(二五) 庶雅

(二六) あらざらめ—あらめ—ナシ

(二七) あらめ—ナシ

(二八) このさがなもの—このときなしのさがなもの

(二九) 鞆—うしぐるま

(三〇) 鞆—うしぐるま

(三一) 給へり—給ふとぞ

なれ。必ずなし給へ」と聞え給へば帝、今上二人は、太政大臣の女なり。これは下藤にこそあらざらめ。相次いでこそはあらめ。これをしてはいかでか」と聞え給へば後の宮、「このさがなものをななし給ひそかし」と聞え給へば、今上いかでか。これこそ、ある中の上藤なれ。公に、世をしづめ、久しう仕うまつりたる人の女なり。そのうちに、いと便なく心細き人にこそ。こまにだに願みずは如何せむ。なほなして、鞆を梨壺に許さむ」と申し給へば後の宮、「さも、とざまかうざまに、申す事を聞召さぬかな」と聞え給へど、皆し給ひて、梨壺には鞆をゆるし給へり。かくて、四の宮は、承香殿に、故大臣殿の昭陽殿、今のは麗景殿、左の大殿のはやがて藤壺、式部卿宮のは登華殿、右の大殿のは梨壺、平中納言殿の君官耀殿にすませ給ふ。御名も皆しか申す。登華殿は女御になり給はず。父宮よりはじめ奉りて、かゝる恥を見る事と思し嘆きてまゐり給はず。昭陽殿は、服にて里に久しく居給ひてまうのぼらせ給はず。



③后宮、忠雅を招く。來らず。

(一)后宮の心

(二)朱雀院

(四)忠雅をわが腹の皇女の罪にして事を謀らんと巧める也

(六)后腹の皇女三宮

(考異)  
(三)悪しうも—あしくも—あしとも

(五)たるをば—たるは

畫詞 こよは御國讓の所

かくて後の宮の思すやう、同じ日、坊をすゑすなりぬれば、今はしにくかりぬべき事、一の人の心だに一つになしてば、子ども親に従はざらむやは、と思して、彼岸の程によき日を取りて、さるべき事おぼし設けて、太政大臣に忍びてものせむ、完きこしめしても、悪しうも宣はじ、右大將をだに、よき掣にし給へば、これも、年もまだ若う、かたちも心も目やすく、世の一の人にもあれば、など思ほして、太政大臣に、后宮聞ゆべき事なむある。今宵、こよに忍びてものし給へ」とあり。おとど怪しく、かゝる事によき日といふなる日しも、斯うく宣へれば、坊定のことによあらむ、煩はし、と思して、兼羅畏まりて承りさふらひぬ。さふらふべき由仰せられたるをば、日頃勞る所侍りて、院にも内裏にも参り侍らぬ。いま今日明日過して、ためらひて参り侍らむ」と聞え給へれば宮くち惜しう、いかでかこれ呼び取らむ。天下に思ふ人持たりとも、わが御子を見奉らむ人は、

〔五回禮〕  
(一) 忠雅が

●あて宮の姉妹等あて宮の祝に集まる。立太子の噂。忠雅が后腹の女三宮の聲になるべき噂。處々よりの祝の文。

(二) 五の君

(三) 忠雅の妻、六の君

(四) 十一の君

(五) 三の君

(八) あて宮腹の皇子が太子に立ちかぬる恐あるをいふ

〔考異〕

(六) 年頃は「は」ナシ

(七) 内裏へも「湯水も

(九) 后宮から召すめりきや」后宮より召すめりき

(二〇) と問ひ申せど」とは申せど

疎ちろにはあらず、と御心ごころ一つに、人ひとには言いはで思おもほす。たびく聞きえ給たまへど、参まゐり給たまはず。

かくて、藤壺ふじつばの御方かたに、よろこび聞きえ給たまふとて、これかれわたり給たまへり。大宮おほみやも

民部卿みんぶぎやうの宮みやの御方かたも、おほきおとど、兵部卿ひやうぶぎやうの宮みや、民部卿殿みんぶぎやうどのの北きたの方かたも渡わたり給たまへ

り。「必ず、何かなにはと思おもへる事ことなれど、あやしく妨さまたげられつるやうに聞きえ侍はべるを、

かくてだに」と宣のたまへば、「年頃としごろは、かしこの國讓くにわづらひの事ことによりて、思おもひ歎なげき、心損こころそなひ

たるやうにて、内裏うちへも参まゐらず、ものし給たまふこそいと見苦みぐるしけれ。子持こもたるも苦し

けなるものにこそ」大宮おほみや、「いでや、こゝにも、この御事みことを、とざまかうざまに思おもは

ば、おぼろげにやは。ほとく斯かくもえ有あるまじきにこそは聞きえつれ。又またいかなる

恥ちをも見みむとすらむとぞ、彼處かしこにも思おもひ歎なげかるめれ」おほき大い殿たいだん、六三むさんその事こと、

いと騒さわがしかりなむや。一日いちにちも、后宮ごうきゆうから召めすめりきや。度々たびたびになりぬれど、煩わづら

はしとて参まゐり給たまはずなりにし氣色けしきを、「それはかやうの筋すぢなるべし」と問とひ申まうせ

(語釋)

(一) 忠雅をのみ力にして居る

(二) 忠雅は

(四) 忠雅は

(八) 后宮より

(考異)  
(三) 世にもかく一とにもかく

(五) とや一となり

(六) 見まほしうて一て一ナシ

(七) つる一つるは

(九) 思したなる一「な」ナシ

ど、更に宣はせねど、著くなむ」大宮、「方々、とざまかうざまにたばかり給はずめり。たゞ此處には、おとゞをのみ頼み聞えたる。さりとて、一つ心になり給はずばとこそ思へ」北の方、六君「かしこには、世にもかく思し騒ぐが苦しき事、とこそ思はれためれ」大宮、「いさや、いとあやしき事をぞ人言ひつるや。眞にやあらむ、おとゞを、あるやんごとなき所に取り籠めらるべしとや。それこそ、いと恐ろしき(四) たびかりなれ」北の方、六君「何處に、如何聞召しつるぞや」大宮「後の宮の姫宮にとかや」北の方、胸つぶれて、六君「あな心憂や。さも知らずかし。こゝにはさる氣色もなきは、隠さるゝにやあらむ。幼きものどもあまた侍るに、またも見まほ(十) しうて侍るに、さる名だたるめでたくおはする所に取り籠められなば、願みもせじ。如何様にせむ」と氣色悪しうて聞えたまへば、大宮「いさや。さぞ言ふなりつる。たしかなる事にやあらむ」北の方、六君「彼處よりたびく」忍びて」とぞあるや」宮、「朱雀院は、一の宮より勝るはなしとぞ思したなる。それは、小くよ(九)

〔語釋〕

(一) 后腹の女三宮

(二) 忠雅が

(三) 女三宮を后宮から申  
込あらば

(四) 女三宮の乳母

(五) 實忠

(六) 實忠の舊妻

(八) 三の君が居るとて

(九) 舊妻に對して

(一一) あて宮を尋ねると  
て

〔考異〕

(七) 昔の人―の「ナシ

(一〇) やうにて―て「ナ  
シ

(一二) おはしたなるが―  
「ナナシ

り思しつきたればにこそ。かの宮、さらに劣り給はざなる。まだかたなりにて、いとをかしけにおはすなり。今すこしねび給はゞ、いとようなり給ふべき人にこそ。北の方、六君、二の宮、思ふやうにおはすなり。いかで見奉る物にもがな。大將こそ羨ましく目ざましけれ」と時々宣ふを、此の宮さやうに聞え給へば、よもあしと思はじや」民部卿殿の、三君、こゝにも、あの乳母のいふとて、言ひしろひなどせられたりけり。それは、たゞ此の事により、萬の事をすとしてたばかりなめり」など女御の君と御物語し給ふ。三君、新中納言の御事は昨夜きこしめしたりや。いとこそをかしかりけれ。かの三條に、昔の人を迎へおきて、然も知らせで、己が侍るぞ」とて率てまかりたりければ、そで君の、あらぬものに生ひなりてあむなるを、己と見なしたりけるは、いとこそ怪しかりけれ。されど己が方をなむ、いと疎く、心にもあらぬやうにて物せられける。小野へとてかへり給ひけるを、一日なむ、此處にもものせむとておはしたなるが、かの北の方こそ、いとよき人な

(五) 實正は

(一) 實正は

(二) 實正にそで君母子が  
親しむとなり

(三) 實忠が妻と別居した  
るを

(五) 同居を我が馴めたり  
き

(七) 仁壽殿

(八) あて宮の女御になり  
たる事

(九) 立太子の事

(考異)

(四) たりーナシ

(六) いと奉らせまほしき  
をーいとど奉らまほしき

れ。(三) 彼處には、いとめでたきものにこそせらるなれ。中納言をば、いと疎きもの

にして、いらへも昔は聲も聞えざりける人に、今は親同胞の如して、親も子も

さしむかひてあるとこそいふめる」女御の君、あて宮年頃、いとあやしくて、所々

にもものせられたりつれば、かの中納言對面して、なほ斯くてをとこそ物せしか。

かのそで君の、よく生ひなり給へるを、いかで内裏に參らせてしがな。睦ましき

人のいと奉らせまほしきを「北の方、三書さなむ思ふとあらば、いとよく奉

られなむ。今。ことの序あらば、彼處にもものし侍らむ」と聞え給ふ。

朱雀院の女御の御もとより、

仁壽必ず有るべきことと思ふ給へしかど、うたてきしるふ人がちなりけるを、

かく物し給ふをなむ。今一つの事を、内裏の御用意にこそは。

と聞え給へり。御返、

あて宮承りぬ。宣はせたる事は、もし參ることあらば、徒走の苦しかりしをの

(頭釋)

(一) 忠俊の妻、七の君

(二) 妻が病氣にて

(五) 女御になりたるにつきて侍典侍などに下され物などの御用あらば承はらん

(考異)

(一) 給はねば一給はねど

(三) 参りても一参りまうでて

(六) やうにて一やうにては

みなむ。さて物たばかりは、そがいと様々なるを、あぢきなく、人の御爲に  
さへあべかなるをぞ思ひ嘆く。

と聞え給ふ。藤大納言殿の北の方は、たちぬる月の晦にこそ子産み給へる。ま  
ださはだち給はねば、御使して聞え給ふ。源中納言殿より、

涼参りても聞えさすべけれども、こゝに日頃惱まるゝに、見給へ譲る人もなく  
てなむ。いと嬉しく、いつしかと待ち聞えし様におはしますなるを、内侍

のかんの殿たちなどには、物や遣はすべき。さらば宣はせよ。こゝにものし  
侍らむ。

と聞え給へり。御返事、

あて宮承りぬ。なやみ給ふは、如何様なるにか。さらに承らざりけり。まち  
給ひける事は、時過ぎたるやうにて。乳母たちは、いさや然する物にやあら

む。今されば聞えむ。

(一) 立太子の事

(二) 仲忠は后宮の隠謀には我は無関係なれど若其に與したる様に思はれはせめかと心配し居る

(三) 仲忠の御傳言は

(四) 后宮に黨する心のなきは寧ろ不自然なり

(五) ありて一ナシ

(六) 御心なからむこそ御心ならむこそ

(七) 太政大臣殿の北方の誤なるべし忠雅が后宮の聲になる噂をききて六君が憤りたる也

と聞え給ふ。一の宮より、

女一日頃あさましく、頭ももたけられずありて、え聞えざりつる程に、思ふにも

しるき御喜あなるをなむ。これはさるものにて、かの事をなむ念じ聞ゆ

る。こゝにあめるものは、怪しき事あなるを、更に知り侍らぬを、もし誰も

誰も思ほしや疎むらむ」とぞ、いとほしがり聞ゆる。

とぞ聞え給へる。御返、

あて日頃はなやませ給ふなるに、自ら參るべけれど、え然も侍らぬをなむ。思

ほしけることは、いでや、この頃の花櫻ばかりにこそ思う給へらるよ。宣

はせたる人の御消息は、さる御心のなからむこそ、僻みたる様には。かく宣

はせたるをなむ頼もしうは。

と聞え給ふ。

左大辨殿の北の方、かくて後は思ほし倦じて、親同胞にも聞え給はず、夜晝おぼ

〔語釋〕

(一) 忠雅殿

(三) 十一の君

(六) 忠雅に

〔考異〕

(一) 經給へば―ナシ

(四) どもは―「は」ナシ

(五) 斯う遙げけには―斯うは遙げくては

(七) かしこに―かしこの

し嘆きて泣き給ひつゝ、よき事もあしき事も知らぬやうにて經給へば、え聞え給はず。おとゞは、この君をぞ私物にて、らうたくし給へど、心もゆかずのみおはす。兵部卿の宮のは外住し給うて後、まだ藤壺に對面し給はざりつれば、あて寫年頃の御物語聞え給へ」とて切にとゞめ聞え給へば、またわたり給はず。かくて御方々も、大宮、男君たちもみなおはず。御装束どもは、あはせ一かさね、御小桂ども、さまざまにいと清らなり。

夜うさりになりて、太政大臣殿より、御迎たてまつり給へれど、六君「今宵はこゝになむ」と聞え給へばおとゞ、例ならずあやしと思して、おはしたり。北の方、六君いと狭うて、これかれ物し給へば、さらに對面すべき所もなし。歸らせ給ひね。今一日二日ばかりありて、其方にを」と聞え給へば、おとゞ、忠雅「あやしう、例ならず宣へば、聞きならはぬ心地なむ、驚きながらなむ。など斯う遙げけには宣へる。たゞ此處もとに出で給へ」と聞え給ふ。大宮、「なほ對面し給へ。かしこ

(五)

(六) (七)



(一) 詔釋

(二) 忠澄祐澄師澄

(三) 大宮腹

(四) おはすかゝる程に  
なるべし

(五) 女三宮

(六) 上雅方へ

(七) 忠雅が病氣届をして

(八) 后宮の心

(九) 兼雅をさがせし時  
の事俊藤巻にあり

(一〇) 忠雅

(一一) 母のかみをいふ  
ては衍文なるべし

●后宮使を以て忠雅を招く。忠雅脚氣と稱して行かず。后宮、忠雅の假病を悟る。

(考異)

(五) 如くに「に」ナシ

(八) しつこゝして

に御過あやまちやある」と聞え給へば、六君かゝる事のありけるを、知らせざりけるが  
 憎にくければぞや。あぢきなや」と聞え給ふ。簀すのこ子に御座ままりて、左衛門督さゑもんのかんの君宰きみ  
 相しやう中將ちゆうじやう、左大辨さだいべんなどはべり給ひて、おはしますべき所に、これかれものせらる  
 べければ、とてすゑ奉れり。御前まへに、此方こなたの御腹みはらの君きみたち、皆みなおはするほどに、  
 后きさいの宮みやは、この事をいかでと思して、姫君ひめきみを玉たまの如ごとくにつくろひ磨みがき奉り給ふべ  
 し。天上てんじやうの吉祥きしやう天女てんによを持たるものの夷えいなりとも、わが宮みやをば、と思しつゝ、たび  
 たび御消息ごせうそくを聞え給へど、かく病申やまひまうしをのみしつゝ参り給はぬを、我われまことの天地あめつち  
 に承うけられたる、國くにの親おやならば、しはづさじとおぼして、昔むかし若小君わかききみをもとめし  
 中將ちゆうじやうの、母北方はくきたのかたの兄せうと、宰相さいしやうになりて若わかくて亡うせにける子この小ちひさかりけるを、取りて  
 養やしなはせ給ひける、今は宮みやの權ごんのかみになして、いとやんごとなきものにし給ふ人ひと、  
 いとかしこう萬正よろづただしう、おほやけ人ひとなり、おほき大殿たいだんもおなじ御親族ごしやくにて、馴なれ  
 仕つかまつる人ひとにて、御文ごぶんをかきて取とらすとて、宣のたまふやう、后宮ごみや「これ、人ひとに持もたせで、  
 (二二)

(語釋)

(三) 權のかみ也

(四) 忠雅が

(五) 「くだし」は御下命の意か、一本「てたし」

(考異)

(一) 給ふとあるは一給ふとてあるは

(二) 承りて一給はりて

懐ふところに 入いれて、太政大臣おほきの御許いもとにもて行ゆきて、人傳ひとつとてならで、御手てにたしかに奉たてまつれ。惱なやみ給たまふとあるは、まことか空言そらごとか、たしかに案内あなして言いへ」と宣のたまふ。かしこまり承うけたまはりて持ちて参まゐるに、この南みなみの御門みかどに、大殿おほとくの御車くま、御前まへなど、北きたに立たてり。こまにおはするなるべし、と思おもひて、下おりて入いり見みれば、おとどこれかれおはす。宮みやの亮すけ、消息せうそく申まをさせて、たゞまうでにまうでて、御階みはしのもとに侍はべるを、疾とく見みつ(三)け給たまひて、何事なにごとならむ、これに見みえぬる事こと、煩わづらふ由よし申まをしたるものを、と思おもひて物ものも宣のたまはず。御簾みすのうちに集あつまりて、立たちさわぎ給たまふ。左衛門督さゑもんのかんの君きみ、忠登あや宮みやの大た夫おの朝臣あそん侍はべり」と申まをし給たまへば、忠雅あや何事なにごとによりてぞ」と問とはせ給たまふ。麩宮あやの御使みつかひにさふらひつるなり。「これ、まのあたりにて参まゐらせよ」と侍はべりつるくだしの侍はべりつれば」とて懐ふところより、陸奥紙あきのくにがみにてある文ふみを、藏人せうじやうの少將すしやうの君きみして奉たてまつらす。御簾みすの内うちには、「さればよ」とて集あつまりてまどひ給たまふ。北きたの方は、青草あせくさの色いろになりて、六重むつむ今宵こんや呼よびもて去いなむするにこそあめれ」と涙なみだをながして伏ふし轉まひ給たまふ。他人ことひと

(語釋)  
(一)世になき父母が

(三)君に

(五)聖取の事

(六)妻が

(考異)

(二)人々の一人や一人々も

(四)誰にかはしはしナシ

人はいとほしと思す。おとどは、胸つぶれて、開けて見給へば、

后宮切なる事ありて、度々ものし給へと聞ゆれど、「惱ましけにて」とのみあるを、

然しもおはせぬ様に承るは、おこたり給ひけるにや。たどあからさまに、

立ちながら物し給へ。斯う敷にもあらず、人侮られなる身にはあれども、昔

の人々の、「世にあらむ限は、思し寄らむこと聞え合せてあれ」とこそ宣ひし

か。萬の憂はしからむことをも、誰にかは聞えむとてこそ。必ず。

と書き給へり。見給ひて、夢にもこの事とは思さで、この東宮定の事にこそあら

め、斯う御消息などあるに、思ほし疎みて、いとど相見え給はじ、と思していと

ほしく思はず。内には、かよる事を知り給へれば、限ぞと思ほして、北の方はう

つぶし臥して泣き給ふ。おとど、

仲難畏まりて承りぬ。日頃は、みだり脚氣にや侍らむ、更に踏み立てられ侍ら

ず、立ち動もし侍らぬを、年頃あひかへりみ侍りつる者の、親の許にまうでき

(語釋)

(一)いかで御力にならんとのみ思ひ居れり

(五)思雅は

(六)思雅

(考異)

(二)して一ナシ

(三)給ひつる一給へる

(四)委しうは「は」ナシ

①思雅歸りて六君を招く六君歸らず

て、「俄にわづらひ侍りて、いと怪しくなむ」と告げまうで來つれば、「空しくもこそなり侍れ。見給へざらむやは」とて、みだり車ながらまかり下りてなむ。昔の事どもは、何か仰せらるよ。萬の事、いかでとのみこそ。少しも踏立てられ侍らばまるり侍らむ。

とておし包みて奉り給ひつ。

宮の亮が御許へ参りて奉るを御覽じて、后宮「いづくに如何様にて逢ひつる」と問はせ給へば、亮「左大臣の家の藤壺の女御のものし給ふ方に、公卿たち數多、これかれしてなむものし給ひつる」宮、后宮「心地病むとあるは、然あるにや」亮「な(四)しうはえ見奉らず。車は門の外に立ち侍りつ。簀子にことなる事もなけにて」など聞ゆれば、宮、后宮「なほ聴かじと思ふなめり。負けじ。脚病むといふは、輦の宣旨を申しくださむ」など宣ふ。

おとどなほ簀子におはす。夜の更け行くまよに、八月十七日ばかりの月のやう



(語釋)

(二) 正頼の子息等

(考異)

(一) ちとよの「」の「ナシ

(三) しなまやーしなりやーしなかや

(四) 日一日一日

やう高くなり、御前の遣水、前栽さまぐくに面白く、蟲の音も哀に、風も涼しきまよに北の方、大君かくて後、我が心とこそ、親の御許などにおはして、餘所なる折もあれ、恐ろしき所に取り籠められなば、如何様にせむ」などおほし嘆く。他人々も、母屋の隅のもとに集まり、おはする所のいと近ければ、おとどの宣ふ、(二) 思雅「今参りたらむ童へのやうに、御簾の外にさふらはせ給ひて、内にこれかれ御覽するこそはしたなけれ。例ならず斯かるは、内裏の御方の御もてなしにやあらむ」など聞え給へど、出で給はず。夜、一夜おはすれば、(三) 君たちえ立ち給はず。曉に、おとど、かへり給ふとて、御消息あり。

思雅よろづ怪しくならはぬ心地こそ、よきものよしなよや。(三)

世の中はかよる物ともしら露のおきゐて消ゆる今朝ぞ知りぬる

老の學問を、などなむ。只今わたらせ給ひねとて、御迎に奉る。

とあり。北の方、御返もきこえ給はず、御消息もなければ、御迎の人は、日一日立(四)

●即位式。忠雅不參。正  
賴以下昇位。司召。雲英  
以下昇進。

(一)今上の

(二)あて宮をいふ

ちくらしして、歸り参りて、「ともかくも仰せられず」と申せば、怪しと思す。この御腹の君たち四所、十一なるを兄にて、四つ五つなるおはす。七つにおはする女君ぞ、父母いみじうかなしうし給ふ。女はそれが限りなり。

かよる程に、御即位二十三日あるべしとのよしする。帝は、かよる事を何とも思さず、たゞ藤壺のるまり給はぬを、夜晝おほし嘆けど、御使も久しう奉り給はず、後の宮の聞え給ひし事をのみ御心憂しとおほしつゝ、御徒然とながめおはしませば、御乳母たち、命婦、藏人などは、「かよる物の初に、おもしろく興ある事をこそ。かく物をのみ思ほし嘆き、日々に御かたちの衰へおはしますこと」など言ふ。

かくて御即位になりぬ。上達部みな参り給ふに、太政大臣、暇文出だして参り給はず。御心もゆかず、萬の事、もろ共に、と思しと人に見せぬ事、と思せど、これかれそよのかし聞え給へば、出で給ひぬ。例のことなりぬれば、上達部、陣にて宣ふ、「太政大臣の、かよる大事に参り給はぬかな。暇文出だし給へれど、ことに

(語釋)

(一) 兼雅仲忠

(三) 后宮の隱岐

(四) 正頼兼雅

(五) 藤英

(六) 仲忠

(七) 兼澄

(九) 兼澄歟

(考異)

(一) 居給へれば―居給ふれば

(八) 難く―いたく

(一〇) これはた―これと

惱み給ふことも無かなるものを」と宣へば又他人、「かの北の方、親の許にこもり

居給へれば、小かりし子どもの騒くなるをこそ、もてあつかひてものし給ふなれ」

(二) 右の大殿、右大將、この事の聞えの出で來たるにこそあめれ、然は思ひし事

ぞや、など心の中に思ほす。大將、藤大納言などは、太政大臣をだに、斯くし奉

り給へば、まして如何に、など思ほしつ。

かくてかうぶり賜ひ、みな人加階し給ふ。大殿、右大殿、二位になり給ふ。東宮

亮、四位階こえて、學士の右大辨三位になる。家あこの衛門尉、かうぶり得給ふ。

女かうぶりに女御、更衣、皆かうぶり賜はりぬ。乳母たち加階す。藏人たち、か

うぶり得なとす。

かくて晦に、司召のころ、右衛門督かけたる宰相なくなりければ、宰相には

右大辨季英、右大將按察使かけ給ふ。右衛門督に兵部大輔、「いと難くなり給へり」

と世に言ふ。兵部大輔に顯澄、右大辨に東宮亮、これはたの藏人右衛門尉になり



御大の君なほ歸らず、仲  
忠妻を警戒す。

(語釋)

(一) 忠雅自身來れども

(二) 忠雅も歸れと曰ては  
言ひ居る中に自分の方か  
ら離れて仕舞ふがましな  
り

(四) 母をさがして

(五) 忠雅

(考異)

(三) 去り侍りなむ一去り  
侍る

ぬ。

かくて太政大臣の北の方、大宮の御許にわたり給ひて、おとどの御消息はあれど、

御返も聞え給はず、まことに物し給へど、對面し給はず。宮もおとども、正頼大宮あ

ぢきなし。童へにもあらず。心のかはり給はむにだに、身一つにもあらず、子ど

もあまたあり、かく物し給ふめれば、忘れ果てじとこそ思はめ。かく宣ふめる

を、對面し給へ」と聞え給へば北の方、大君何か、普う人に知られぬ前に、彼處に

もかう宣ふ程に、己が心と去り侍りなむとなむ。これかれ見習ひてもあるものを、

己しも、かしこき心に忘れじとなむ。たどつきたりし乳母なくて懐にのみ習ひ

たる子の、求め泣くなれば、らうたさに、とぎまかうぎまかにたばかりて迎ふれど、

許されぬをのみなむ、いと悲しくは」とて物も聞え給はねば、大殿は、かくやん

ごとなき折にもまるり給はず、君だちをのみもて煩ひ給ひつと、姫君をば、北の

方のいと悲しうし給ひしかば、これ見には、然りともわたり給ひなむ、と思しつ

(一) 諸君

(二) 兼雅

(三) 仲忠

(六) 后宮

(一〇) 女一宮の容色が衰

(十一) たりとかこつて取か

へさるゝを恐れて外へ出

さぬ也

(一) 給ひつゝ給ふ

論朱雀院の氣樂なる生活、御子たちを招く。仲忠警戒して女一宮を参らせず。

(考異)

(一) 目を一目をば

(四) 添ひ居て「屈」ナシ

(五) する一などすれば

(七) のみ一のみは

(八) 御子たちは「は」ナ

シ

(九) 呼び参らせ給へば一

御消息ありつれば

つ、目をはなち給はず、守らへておはする、右の大殿の聞き給ひて、然思ひしこと

ぞや、<sup>(二)</sup> 後の宮にも、然聞えてきかし、<sup>(三)</sup> と思す。右大將我もかよる目をや、<sup>(三)</sup> と思し

怖ぢて、<sup>(四)</sup> ありきもし給はず、夜晝添ひ居て、御消息あれば参りて、<sup>(五)</sup> 人の参りまか

でする車の音すれば、<sup>(五)</sup> たづね問はせ給ひて、心ゆるびなく思す。

かくて朱雀院には、こと人々また参らせ給はず、仁壽殿の女御のみ、出で給ひし御

供に仕うまつり給ひてさふらひ給へば上、<sup>(六)</sup> 朱雀今はかく、中宮も内裏のみこそは。

こと人々は参りもせじ。そこにのみ添ひて、<sup>(七)</sup> 御子たちはあまたあれば、睦ましき

ものには。凡人のやうに、<sup>(八)</sup> 子ども前にすすて、つい並びてあらむと思ふなむ」と

て御局ひろく造りしつらはせ給ひて、<sup>(九)</sup> 殿上人、上達部も、さりぬべき、御前にお

はし、車どもなどして、朱雀女御たち、一の宮も参り給へ」とて呼び参らせ給へ

ば大將、<sup>(一〇)</sup> 仲忠この頃、いたく損はれ給ひにためり。然あらざらむ時、ことさらに

も参らせ奉らむ」とてとどめ奉らせ給ひつ。二の宮は参り給ひぬ。上、見奉

(二)

(三)

(四)

(五)

(六)

(語釋)

(二)「たち」衍文の歎

(三)用する歎

(四)忠康を疑にせんと望む人あれど

(八)「朝臣の」歎、實忠をいふ

(九)あて宮をいふ歎

(考異)  
(一)この一なし

(五)まうでーまで

(六)て侍りーナシ

(七)られたりけるにこそはーられたりけるにこそ

り給ひて、朱雀、一の宮をこそ、こともなしと思ひしか。これも、怪しうはあらざ

りけり。琵琶、箏の琴の上手もがな。この御子たちの料にせむ」と宣ふ。男御子

たちも、みな同じ所にて、夜晝御遊せさせ給ひておはします。御妻持たまへるは、

夜はまかで給ふ。彈正宮は、夜晝さふらひ給へば上。朱雀「なか、この宮たち

の、見る限まかでぬは。里もなき、ようする人のなきか」と申し給へば女御、仁賢「こ

れかれ、然ものする人侍れど、如何なるにか、かく獨りのみぞ」と聞え給へば、

朱雀「もし藤壺をや、月見るやうに思ひけむ。實忠の朝臣こそ、さやうに聞きしか。

それだに今は然も無かなるものを」仁賢「それ、山里に侍るまよにさふらひし、と

て喜びにまうで來たりけるを、言ひこしらへ侍り。それは、時々京に通ひまうで

來けるを民部卿の言ひたばかりて侍りけるにこそ」上。朱雀「怪しみ思ひしは、こし

らへられたりけるにこそは。心さへこそあらまほしう。かの朝臣は、山籠こそあ

いなかりしか」女御、仁賢「いでや、いと幸なく侍りける人にこそ。若君のまだ産

(稱稱)

(一)豫期の如くにゆかば此子は賢忠に妻あはせん

(二)今上

(考異)  
(三)こと一こそ

(四)絶えて一絶ちて一絶え

(五)侍まなれば一侍れば

后宮兼雅に文を贈りて立太子の事を迫る。

(大)あるぞかしと一ある所かゝると  
(七)事とこそ一事と一事こそ

れ給はず、さる氣色侍りける夜、「思ふやうにてあらば、必ず然せむ」と宣はせければ、

親もこれかれも、然思ひて侍りけるを、かよる折節にも、かくやんごとなく

妨げ給ふ人の出で給ふめれば、父母、「今まで世に侍りて、かよる恥を見る」と

伏し沈みて湯水も絶えて思ひなけき侍るなれば、親をなけかするにまさる幸な

き事は、何處にか」と聞え給へば、上、朱雀よに然契られたらば違へられじ。われ

らが心には似ずさる所し給ふ人の御心なればあるぞかしと聞えしかど、あるまじ

き事とこそものせしや」と宣ひて夜晝物し給ふ。

**畫詞** こよは仁壽殿の女御の御方。

後の宮聞召して、思ふやうに子どもひき率て、我が儘にはた目ざましや、と思し

て、右の大殿に御消息奉り給ふ。

后宮對面聞えまほしけれど、これも煩はしくし給へばなむ、ものし給へと聞え

ぬ。太政大臣に聞のべき事ありて、度々ものし給へと聞ゆれど、悩むことあ

(語釋)

(一)あて宮の手前を兼ねて

(四)思雅

(五)同意せぬ事はあちぢ

(六)父の意に背くならば

子と思はぬがよし

(八)商山の四倍の力によりて漢の文帝が皇位に即

きしをいふ

(一〇)我を

(一一)手紙の中にある文句

(一二)大將を「歟

(考異)

(二)とは「は」ナシ

(三)人に逢ひて一人にもあひつゝ

(七)子は「れ」は

(九)成しれ「に」ナシ

(一一)すえずとも「すえず」は「すえず」

りて、など聞ゆれど、然しもあらぬやうに。かの事は如何思しなりぬる。そ

こにもや、昔の懸想人の心つよましくなむとて、長き世の悦とあるべき事

をも、せじとは思すらむ。こよには、萬に思へど、人に逢ひて、言語らふべきに

もあらず。かの人にもあひ給ひつよ、よく言語らひ給はど、然りともなむ。大

將、そこに、やんごとなく思さむ事を、何か妨げむ。然らば、子ともな見給ひそ

かし。天下にかしこき身なりとも、親の見給はざらむ子はいと悪しからむは。

四人翁を語らひてこそ、事は成しにけれ。五人の心を一つにて、「昔より斯う

なむある、この事許されずば、山林に交りて、公にも仕うまつらじ。何を勇に

てか」と申されば、然りともえ否び給はじ。此事に叶はざらむ人をば、かく數

ならず思はれたりとならば、この世にも、あの世にも深くつらしと思はむ。

とあり。おとど、「大將をな見そ」と宣ひつるに驚きて、坊をばすゑすとも、大將

の疎にはいかど思はむ、かく宣ふが恐しく畏きこと、と思して御返事、

兼雅かしこ畏かしこまりて承うけたまはりぬ。仰おほせられたる事こと、世よにいかでと思おもひ給たまふれど、あひ叶かなふ

人ひとの侍はべらぬになむ。今いま、かたぐ宣のたまひ語かたらひて聞きこえさせむ。

と聞きこえ給たまひて、大將たいしやうの御許ごもとに、「宮みやより斯かくなむ」とて奉たてまつり給たまへれば見み給たまひて、人ひとにも見みせで隠かくしつ。

**畫詞** ことば右大將殿。宮みやの御方かた。右近うこんの君きみといふ人、御前まへにて聞きこゆるやう、

右近うこん「宮みやのすけ、大臣だいじんにて、思おもふやうにておはしまさば、まかるらむ」と申まうす人

侍はべる」宮みや、「あな聞ききにくや。いと心違こころたがなり」と宣のたまふ。人々ひとと多く参まゐり集つへり。

人ひとの奉ほうりたる物もの、いと多おほかり。ことば宮みや、乳母めのとたちなどして遊あそび給たまへり。殿内どのうち、

ひきかへたる様やうに、人ひと多く参まゐり集つひて、市いちの如ごとのよしる。

かくて、内裏うちよりはじめ、世界せかいにのよしりていふやうには、「梨壺なしつぼの御腹はらのなむ居ゐ

給たまふべき。后きさきの宮みや、夜晝よるひるな泣なくく聞きこえ給たまへば、帝みかど然さ思おぼしなりにたなり。おとど

たちは、知しらぬやうにて、皆心みなこころを一つひとつにてなむ物ものし給たまふなる」と言いひのよしる。

自世間の噂、正頼あて宮の落牌。

(二)いと一ナシ

(考異)

(一)いかでと一いかでかと

(語釋)  
(三)東宮に

(三)

(語釋)  
(一) 忠雅等

(二) あて宮

(三) あて宮腹第一の皇子

(四) 正頼

(六) あて宮の心

(考異)

(五) なでふにか世に交らふべき―なでふ事にか世に經まじるべき

(七) 宮たちを―を―を―を

左のおとどは、御聲たちをつらしと思す。御聲たち、かく言ふことを、如何に思すらむ、夢にても知らねど、など互に思せど、誰もく物もきこえ給はず。女御の君につき奉りつゝ物望せし人々、一人目に見えず、若宮の御方に参りつどひし人々も参らねば、ひきかへたる様に、いとしめやかにながめおはします。内裏よりも、久しく御消息も見えねば、おとど、この事實に定まりなば、またの日法師になりなむ、なでふにか世に交らふべき、とおほし嘆きて、君たちもみな集ひて、萬にこしらへ給へど、思ほし慰むべくもあらず。藤壺は、萬におもほせど物も宣はず、帝の御心あやまりにたればこそ、人も斯くは言ふらめ、かく言ふも著く、御返聞えねど立ちかへり賜ひし御使も見えぬは、如何なるにかあらむ、この事は、けにくく然なりて、おとども宣ふやうになり給はゞ、我も尼になりなむ、何か世に交らむ、と思ほす。宮たちを見奉りておはす。若宮は、何心もなく、遊びありき給ふ。

仲忠の女一宮に對する辯解、仲忠水尾に仲頼を訪はんとす。

(語釋)

(一) 自分も梨壺方に賛成したる様に

(二) 「おはしますにだに」歎

(三) 女一宮が見知りたれば

(五) 六の君が里に留りて歸らぬを

(六) 假令本人は后宮に御目にかゝらざとも事を圖る事は出来ぬにあらず

(七) 仲頼を尋ねに

(考異)

(四) 罪には一罪にも

かくいふ程に、十月になりぬ。大將宮に聞え給ふ、仲忠「世に人のいふなる事は、

こよにも知りて侍らむやうに聞き給へらむがいとほしき事。自ら御覽すらむ。御

即位に参りて侍りしまよに、院のかく旅におはしますだに参らず、三條にもまか

らで侍るは、知り侍らぬよしを、一所に御覽じてば、罪にはあて給はじとてな

む。太政大臣の、ひとり月頃おほし歎くなるを、人の御上とも承らず。こよに

は、見給へ煩ふべき人あまたも侍らねど、一所の御心を思ひ給ふるも、恐ろしく

なむ」宮、女「それは、人のし給ふにもあらざなり。對面し給はぬをこそ、誰も

誰も宣はすなれど、聞くやうありとて、正身こそ對面給はざめれ。こよには、さ

やうにたばかりとも、し果てられむ様をこそ見侍らめ。大將、仲忠「何事を、いか

やうなる筋に」宮、女「みな集はれてこそ、定められけれ。知らず顔にも」大

將、仲忠「すべて、この事な宣ひそ。さらに知り侍らず。さるは、去歲より「水尾

の山籠とぶらひにまからむ」と言ひ契りて侍るを、花盛にも、とかく障りて物せ

(七)



〔語釋〕

(一) 正頼方より言ひ來るとも

(四) 何處へ行くものぞ

(六) 仲頼の妹

(七) 腹胎の頃

(一〇) 仲頼の妹を招きたれば

〔考異〕

(一) はどは「は」ナシ

(三) まうてーまで

(五) さうくしきを「を」ナシ

(八) 頃しもー折しも

(九) 恥かしくー恥かしき様

ずなりにしを、此の頃紅葉の散らぬさきにとてまかり出で立つなるを、一二日侍らざらむ程のうしろめたければなむ。然あらむほどは、「あからさまに渡り給へ」とありとも、ゆめわたらせ給ふな。まかり歩いてまうで來るに、此方におほしまさぬ時は、いと便なく佗しくなむ。なほ然きこゆる心あり。歸りまうで來なむ。待たせ給へ」ときこえ給へば宮、女「いづちか。苦しくのみあれば、臥し起きも心安くてこそ。日頃はこれかれ物し給はねば、人少にてさうくしきをのみなむ」大將、仲思「それ、然ど實におはしますめる。この東の對に侍る人を、召しあけてさふらはせ給へ。琴などいとよう弾きて、様々にせぬわざ無う、よき人なり。心なども善けに侍るめり」宮、女「恥かしけに、かくいと異様な頃しち、いかでか」大將、仲思「何かは、いと恥かしく侍らぬ人なめり」とてまうのほらせ給へば、いと日やすく装束きてのほり給へり。容貌もいとおとなくしう清けなり。宮御琴賜ひつゝ弾かせ給ふ。いとおもしろく弾き、さまぐくにいとらうくしく、を

(語釋)

(六)按察使の君を

(考異)

(一)といふ—となわいふ

(二)按察使に—の

(三)侍る—はべる

(四)大將殿—殿ナレ

(五)聞えつ—聞えなごす

(七)これかれ—それかれ

●仲忠、涼、藤英、行政、思こそ等仲頼を訪ふ。

かしき人得つと思ほす。按察使の君といふ。大將殿按察使に宣ふ、仲忠「水尾へま  
 かるなり。御消息やある」按察使、「かくあらはれて侍りとて、恥ぢ侍るものを」  
 と聞ゆれば大將殿、仲忠「世に然もあらじ。いとよく褒め聞えつ」と宣ふ。犬宮を  
 かしけにて、ひとり立ちし歩みはじめ給ふ程なり。父君見奉り給ひて、仲忠「こ  
 こに、かく睦まじくなし奉るは此の子によりてなり。火水に入れども、宮は見も  
 入れ給はず、乳母どもの限は、うしろめたければなむ。侍らざらむ程に、出だし  
 給ふな。いとあわたどしくて、出でつよ人に見ゆれば、見苦しくなむ。上局など  
 して、斯くてものし給へ」と宣ひ置く。宮に、仲忠「今、いと疾くまうで來なむ。  
 聞えさする様にを」と出で給ひ、其處にてこれかれ待ちつけ給ふ。  
 山籠にとらせ給ふべき物とて、御衣櫃一かけ、長櫃一かけ持たせ給ふ。ほそを風  
 といふ琴持たせ給へり。御供には御前六人、御馬添六人、御前二人は四位、二人  
 は五位、二人はやんごとなき官ある六位、御隨身四人、雑色六人、装束白きろう



(語釋)

(一)涼

(三)「あかうま」は「はかま」

(五)精英

(六)「せい」は「制」

(七)行政

(八)松方

(九)思こそ

(考異)

(一)鈍色の「色」ナシ

(四)やどもり風―山もり

のさしぬき、青露草あを、ゆくさしてらうずりに摺すりて、白しろき綾あやのうちき、白馬あせうま、御供ごともの人ひとよ  
りはじめて、さまぐの白しろ、青あせ、しなぐに著きたり。中納言ちゆうなごんは、あか色の織物おりものの  
襖あは、鈍色にじいろのさしぬき、綾あやかいねりのうちき、あかうま、御前ごぜん二人は劣おとれり。やど  
もり風かぜといふ琴持こともちたせ給たまへり。右大辨うだべんは青鈍あせにじあを、その外ほかも皆同みなおなじ色のあを、御  
馬添うまひ四人、せいありて、學生がくせいとも御前ごぜん四人、秀才すきいふたり二人、進士しんし二人。御供ごともの人ひとみ  
な大學だいがくの衆しゆの下藤げらふなり。良中將らうちゆうは青色あせいろのあを、白しろのさしぬき、薄色うすいろのあやの袷あは、御  
供ごともの人前ひとまへの如ごとし。琵琶持びわもちたせたり。雅樂うた權頭ごんのかみ、琴持きんもちたせたり。右馬助うまのすけ近正ちかまさは和  
琴わこん、左衛門さゑもんの非違尉ひゐのぢ時正ときまさ、笛持ふえもちたせたり。これかれ装束さうそくは心にまかせたり。律りつ  
師し わらは四人、法師ほふし四人、童子ごうじ六人、これもみな、よう装束さうそくとよのへたり。こ  
の人々ひとびとの御供ごともに、かゝる物ものの上手じやうずの限かぎりおはしつどひて逍遙せうやうし給たまふべしとて、人ひとの  
數かず少すくく擇えらむるとて、我われもく見聞みきかむと思おもひて、雜色ざふしきは、やんごとなき侍さむらひの人ひとぞ  
出いで立たつ。御衣櫃みゑびつ、割籠わりごもちには、侍さむらひ出いで立たつ。かくて、二條にじょうの院いんに集あつまりて、

(考異)

(一)なはかまるー多かる  
(二)山籠は：うち群れて  
おはしたればーナン

④仲頼の歌待。管絃。讀  
經。贈物。仲忠、仲頼の子  
どもを世話すべき事を約  
す。

(三)まづ紅葉のーまつの  
紅葉のーまづこの紅葉の

(四)どもーナン

(五)まづーナン

(六)おもものーもの

そこにて變かなどして出いで立たち給たまふ。大宮おみやの大路おほぢより、北きた様さまにのほり給たまふほど、車くるまどもいみじく立たてつゞけ見みる。徒人ちからびもいとおほかり。忍しのびて、やんごとなき人ひとども。なほかよる中なかにも、大將たいしやうはいとこよなう清きよけなり。山路やまぢまで、御送おくりの人ひととおほかり。到いたり著つき給たまひて、麓ふもとより「迎むかへにものせよ」とてかへされぬ。

畫詞

こゝは水尾みづのの路みち。

かくていたりつき給たまひて、山籠やまごもりは、年頃としごろ、堂だうなどもいと廣ひろく、いかめしう、瀧たきいとおもしろく落おしたる所ところに住すみて、里さとなりし女子をんな迎むかへて物ものならはす。山犬やまいぬ、里犬さといぬといふ男子おのこどもに、笙吹さうふき横笛よこふエ吹かせて、箏さうの琴女ことじすめにならはして居ゐたる夕暮ゆふぐれに、うち群むれておはしたれば、山籠やまごもり喜よろこびかしくまり聞きえ給たまふこと限かぎなし。まづ紅葉もみぢの林はやしに御座おきども敷しきて、みな居ゐ給たまひぬ。まづ「勞つれ給たまひぬらむ」とて、山やまの法師ほふしばら、童わらわへ出いだして、をかしき枯木かき拾ひろはせて、お前に銀しろかねのまがりなどとり出いでて、おもおもの炊かしがせ、お前の朽木くちきに生おひたる茸くさびらども、羹あつものにさせ、苦茸にがたけなど調ていじて、銀しろかねの金かね

(語釋)

(三)「山伏に」なるべし、  
山伏は仲頼をいふ

(八)「など」とて」なるべし

(考異)

(一)添へて参り―添へ参  
る

(二)御前には―は」ナシ

(四)昔は―昔―昔の

(五)嵯峨野の襟にも―釋  
迦の供養にも

(六)かなしき―かなしき

(七)山籠も―も」ナシ

碗わんに入いれつよまるれば、君きみたち興けうじつよ召めし添そへて参まり、御物語ものがたりなどし給たまふほど  
に、御割籠わりごども持もちて参まれり。取とりわたして、山籠やまごもりの御弟子みでし、童子ごうじ、その邊へんのも  
の此この君きみに仕つかうまつるなど召めし集あつめて賜たまふ。御菓物くたじゆひばかり、御前まへには参まれり。  
御酒度みきたび々くきこしめして、物ものの音ねどもかき立て、山風やまかぜは紅葉もみぢの散ちりたるをば吹ふきた  
て、枝えだなるをば散ちらしなどする夕暮ゆふぐれの興けうあるに、松方まつかたの雅樂頭うたのかみ、おほきなる木きの  
節ふしの、いとをかしきを取とりて、山伏やまぶしと御土器かほらひまるるとて申まうす、松方まつかた權頭ごんのかみは、昔むかしは、  
いさよかの御みありきにも、後おそれ奉たてらすこそ仕つかうまつりしか。かよる路みちにおもむき  
給たまひにし折をり、告つげさせ給たまはましかば、御供みともに仕つかうまつりて、御弟子みでしにてもさふら  
ひなましものを、世よの中なかに交まじらひ侍はべれど、何なにの勇いさみも侍はべらぬに」と泣なくく御土器かほらひ  
まるりて、松方まつかた「嵯峨野さかがのの樣やうにも侍はべるなり」とて、  
松方まつかた吹上ふきあげにさそひしともの山深やまふかくたづねて君きみを見るみるがかなしき  
山籠やまごもりも「今日けふは」などて、

(七)

(八)

(六)

(四)

仲頼谷風の吹上ぞわれもおもほゆる山の錦にまとるせるけふ

大將殿

仲忠もよしきの昔の友を見にくればあらしの風もにしきをぞ敷く

中納言の君

涼君をのみたづねていまは秋山もみちも深くなりけるかな

右大辨　むかしの藤英なりし火影姿思ひて、

藤英七夕のあふ夜ぞわれも君をみしたれも心のめづらしきかな

律師

思こそ限なく憂かりし身だにありはてぬ山にて君がおもひをぞ知る

中將

行政君をだになしと嘆きしもよしきにありし世さへも變りぬる哉

右馬助

(考異)  
(一)大將殿—大將も

(二)秋山も—秋山の

近正君によりしぐるよ袖のふかき色ををれる紅葉と里人や見む

時蔭

いにしへは君がころもにみえし色の今は山べに散りまがふかな

とて中將は琵琶、山籠箏の琴、權頭琴、近正和琴、時蔭横笛、またそれらが中に、

箏築吹くものと吹きあはせて、他人々は唱歌し、歌うたひ、夜一夜あそび給ふ。

所々見やれば、遠う火を焼きて、その山のめぐりの山じにたにあり。ちかう見れ

ば、火を山のごとくおこして、大なる鼎たてて、栗を手ごと(二)に焼きて粥(三)に煮させ、

よろづの菓物食ひつと、人々の御供なる人に賜び居たり。夜更けゆけば、露霜お

く。夜一夜あそびあかし給ひて、つとめてになれば、御粥(四)まるる。露(五)に濡れたる

御衣(六)ども脱ぎかへ給ひて、山籠の御供に、よき人の子どもの四人あるに、四所(七)なが

ら取らせ給ふ。

その日は題出だして、用意しつと文(八)つくり給ふ。右大辨の御供なる秀才一人は文

(語釋)

(二)「山ぶしふさにあり」  
歟、一本「山ふたたにあり」

(考異)

(一)まがふ→まよふ

(三)粥に「に」ナシ



〔考異〕

(二) 多う多く

(二) にもまろりーにまろる

(三) がたーナシ

(四) たゞごとー常ごとーつねのこと

(五) やどもり風ーやまもり

つくる、一人は講師す。かよる程に、源中納言殿より、槍割籠、たゞの割籠、屯食などいと多うあり。御前どもにもまろり、人々にも賜ふ。よき物いと多くもてこみ給ひて、日暮れて文つくりはてて、讀ませ給ひて、おもしろきはみな誦し給ふ。右大辨の御聲は、いと高ういかめしう、大將の御聲はいとおもしろう哀なり。夜更くるまで、文誦じ、曉がたになりて、風いと哀に、木の葉の雨の如くに降るほどに、律師陀羅尼よみ給ふ。大將いみじくめで給ひて、箏の琴ひき合せ給ふ。おもしろきこと限なし。山人も里のものも、みな涙落さぬはなし。しばし遊ばせ給ひて、山籠たゞごとにて陀羅尼をよみ給ふ。中納言やどもり風召して調べ合せ給ふ。かくて暫しありて、君たち、諸聲に文あそび給ふ。律師、山籠の御聲のいと尊きを聞きめでて、土器取りてかく申し給ふ。忠こそ出づとせし身だに離れぬ火の宅を君水の尾にいかですむらむ山ごもり。

〔語釋〕

(一)此處にある者誰かあ  
て宮に戀せざりし者あら  
んや

(三)「くらみ」なるべし

〔考異〕

(二)袖のみをにも―その  
みのをにも

(四)もて―ナン

仲頼ちゆうらい烟けむりたついへは思おもひの苦くるしさに身みも消けちがてら入いれるみづのを  
大將たいしやう、

仲思ちゆうしこよにかくあるどち誰たれか燃もえざりし袖そでのみをにもぬるみやはせし  
中納言ちゆうなごん、  
(二)

涼ひや人ひとよりは我われぞけぶりの中なかなりし今いまもきえねどえやは出いでける

辨殿べんどの、

藤英ふじえ夜よをくらめ螢ほたるもとめしわが身みだに消きえしおもひの目めにけぶりつよ  
中將ちゆうじやう、  
(三)

行政ぎやうぎやうもえ渡る火ひのほとりにはありながら乾かわかぬものは袖そでにぞありける  
など宣のたまひつよあそびあかし給たまふ。

かくて日ひやうく晴はれもてゆく程ほどに、種松山籠たねまつやまこもりの御料みりやうに、粥かゆの料れうあはせ、いと  
清きよらに調てうじて、馬うまどもに負おほせて、乾飯かんべん、馬うま二十にじゅうばかりにおほせて、布ぬののあを、綿わた

〔語釋〕

(一)「櫃」は「長櫃」なるべし

(四)袋

(五)「三袋ばかり」歟

〔考異〕

(二)鉢―はし―ナレ

(三)たり―たる

あつく入れて、いと多う持たせ、長櫃どもに飯入れさせ、酒樽に入れて、持たせ  
てまうでて、山伏どもめし集めて、飯酒くはせ、乾飯、襖、一つづつ取らす。大  
將もたせ給へりし長櫃、御衣櫃、山ごもりに奉り給ふ。こ櫃には、淺香に沈の脚  
つけて、蘇枋を枋にして、銀の鉢、金碗、(三)かいさし、銚子、水瓶など、よろづの  
調度つくし入れたり。御衣櫃には、御法服一つ、限なく清らにて、夜の装束、綾  
のさしぬきに、織物の襖、あやの裏どもなどして、その襖に書いて結びつれたり。  
仲思露けて山邊にひとりふす人のよるの衣にぬぎかへよとぞ (三)

子どもの装束、女子のもの、いと清らにし入れてまゐり給ふ。山ごもり見て、  
仲類世をすてしこけの衣にぬぎかへばまた夜々にもものをこそ思へ

とて賜はり給ひぬ。中納言は、きぬあやをいとのかどつに入れて、供養のやうに  
て、三所ばかり奉り給ふ。右大辨も、いとをかしき物奉り給ふ。(四) 律師は、よろづ  
の行の具、菩提樹の數珠よりはじめて用ある物を奉り給ふ。中將は墨染の装束、

(語釋)  
 (一)非道を行はざる旨を  
 佛に誓ふ法

(三)仲頼の妹

(五)妹の手柄をいふ

(考異)  
 (二)織法せさせ—こんぐ  
 打たせ

(四)額りて—てしナシ

(六)え—ナシ

うちき、さしぬき、黒椽くろつらぬみのうへのきぬ、五條ごじょうの、袈裟けさぎ具したる法服はふぶく三くだりは  
 主に、裝束さうそく四くだりは上童うへわらはの料りょうに、下衆げすの裝束さうそく三十具ばかり、童子さうじの中に皆みなし給ふ。  
 これより外ほかは、心こころにまかせてをかしき土産みやげども。

かくて物ものなど参りて、又またの日は文ぶんつくり、その寺てらにも、めぐりの寺てらにも、御讀經みよきやう  
 せさせ織法せんぽふせさせなどし給ひて、その夜よはとまりて、とざまかうざまに遊あそび給

ふ。山やまごもり、大將たいしやうに聞きこえ給ふ、仲頼ちゆうらひ昔むかし一條殿いちじょうどのに侍はべりし人の、便たよりなけにて侍はべるめ  
 りしを、見給みたまへ棄すててまかり籠こもりて、年頃としころいかで侍はべらむと思おもひ給たまへしを、殿どのにな

む願かへりみさせ給ふと承うけたまはるをなむ、深ふかうよろこび畏かしこまり聞きこえさする。別わかいても昔むかした  
 にようも侍はべらざりしを、如何いか様やうにと思おもひ給たまふるになむ、かたはらいたくは「大將たいしやう

仲思ちゆうし」年頃としころさて物ものし給たまひしを、え承うけたまはらざりき。去年こぞ、事ことのついでありて、彼處かしこに  
 宣のたまひしになむ、驚おどろきながら聞きこえむとせし。これかれ集つぎはれて騒さわがしかりし程ほどは、

さし別わかきたる様やうなりしかば、え。その宮みやむかへ奉ほうりてしかば、これかれ外ほかへわたり

(六)

〔語釋〕

(一) 仲頼の妹の體遜なるをいふ歟

(二) 犬宮

(三) 女一宮が

(五) 仲頼の妹に

(六) 仲頼の妹に

(九) 仲頼自身をいふ

(一〇) 「いかう」は「一向」なるべし

(一一) 「侍らせじ」等

〔考異〕

(四) 惡みーナシ

(七) 御徳とー御徳に

(八) 思ひー思う

(一一) ちかうにーちやうに

(一一) ちちーゾレに

給ひなりにしかば、この三條の本家なりし方になむ侍る、東の對になむすませ奉

る。さて、殊に頼もしけなる事も無けれども、自らをだに人にもし給はぬかな。

幼きものの侍るめるを惡みきたながるめれば、身にはらうたくおほえ侍るになむ、

あづけ奉りてなむ侍る。いと目やすく、警策なる人にこそ物し給ふめれ。君をの

み見奉りて、彼處に對面せざらましかば。人のいふことは空言になむ」山ごも

り、仲頼「然だに御覽じなさば、いと嬉しく、佛の御徳となむ。この侍る童べも、

母亡せ侍る。身ひとつだに、侍りがたけに承れば、こよら召しあつめて、松の

葉をも苦の衣をも、もろ共にこそはと思ひ給へてなむ。女子をさへものして侍る

を、童へは、いかで宮仕も仕うまつらせむ、と思ひ給ふれど、親は便なく侍れば、

いかでかは、とてなむ」大將、仲思「何處に、如何にせむとか思はず。せむ様を宣へ。

かの伯母君にあづけ奉りて、いかうにこの事をうしろみ奉らむ」いらへ、仲頼「い

と嬉しき事になむ。昔だに、いと御前にさふらひ難かりし上に侍らじ。今居給は

二〇(二) 二〇(二) 二〇(二)

二〇(二) 二〇(二) 二〇(二)

二〇(二) 二〇(二) 二〇(二)

二〇(二) 二〇(二) 二〇(二)

(語釋)

(二)いよゝ東宮に立たれなば

(四)我には隠してある

(五)當然と思はるゝ事なれば

(七)思さやちむと敬

(九)などとしてなるべし

(一〇)子どもは今日にも引取るべし

(考異)

(一)それぞーそれは

(三)されどーさりとも

(六)たどーナン

(八)給ひたればー給ふめればー給ひたれば

(一一)多く御物語ー御物語多く

む東宮に奉らむとなむ」大將、仲思「藤壺の一の宮こそは。それぞ、さらにと

の人とは見え給はぬ。今ながら、内裏の御氣色に劣り給はず、いと氣かしこくな

む」山ごもり、仲頼「また承るやうぞ侍る。さらば、まして、如何にこれらが爲

に嬉しう、さふらはまほしう侍らむ」大將、仲思「あなうたて。何でふさる事か」

中納言、涼「されど、みな定まりたる様にこそ。日さへ取られにたりとか申すなる」

大將、仲思「すべて知り侍らず。ことには忍びてなむ」中納言、涼「御心にこそ、忍

びてとは思せど、他人は然思ひたらざめり。然もはた覺えたる事なれば」大將、

仲思「おのづから終には見えなむ。たど藤壺は、え然や思すらむ、と思ふのみこそ、

いみじうかたはらいたけれ。それも、おとなしき心つき給ひたれば、然思すや

うもあらむ」などで、仲思「さらば、このあこたちは、今日もいざかし」山ごもり、

仲頼「今年ばかりは、物の音すこし聞き知らせ侍りて、年かへりて奉らせむ」など

これかれ多く御物語してかへり給ふ。御装束どもは、白き襖綿入れて、銀の泥

(二二)

(語釋)  
(一)香塗敷

(二)舞ひて―にてナレ

(四)「御供人に饗まうけて」なるべし

(考異)  
(三)御迎に―御迎の

(五)まうけて―にてナシ

して繪かきたり。あや、かいねりの袿、薄色の香のさしぬき、御供の人は、薄色の

の襖、露草して遠山を摺れり。わた皆入れたり。下人は朽葉、色の襖など、心に

まかせて著たり。山ごもり、子ども、法師、童べ御供にて、ふもとまで御送し給ふ。

君たちは、御馬牽かせて徒歩より、大將は笙の笛、中納言は横笛、中將、篳篥、松

方、近正は御さきに立ちて、陵王落鱗舞ひて他人々御後に立ちて、錦の如く散り

たる紅葉の上を歩み出で給ふ。山のあらしに、いろくの紅葉雨の如く降りかよ

れば、御襖にいろくに付きたり。麓にて別を惜みて、歌よみて、山ごもりはか

へり給ひぬ。

君たち御迎に、さまざま人多く参れり。大將、中納言の御迎に、人々小鷹手にす

ゑつと参れり。歸り給ふまよに、野邊ごとにあさらせ給ひて、御餅袋に入れさせ

給へり。右大辨は路にて別れ給ひぬ。人々は、大將の御送して殿へかへり給ひぬ。

御供人、饗まうけて、御前にはかづけ物し、御馬添、雑色には腰挿せさせ、入りて

(附釋)

(一)仲思が

(二)女一宮

(考異)

(三)野へにいでて一秋の野に

(四)知らせやはする一知らずるとやは一知らずるかさは

(五)し給ふこゝは置かしくありきし給ひこゝかしこありき

(六)つれづれとまもり給ふ一つれづれとまもり居給ひ

①仲思、朱雀院に参りて水尾の有様を奏す

(七)住居の斯く一住居のみ

(八)久しう見ねば一久しうこそ見ねば

(九)と一か一ナシ

見給へば、宮ありき給はでおはすれば、いと嬉しとおほす。小鳥ども、生きたるは

犬宮に奉り給へば、もてあそび給ふ。御餌袋なるは、調じて宮にまゐり給ふとて、

聞え給ふ、

仲思君がため小鷹手にすゑ野べにいでてまつむしをくふ鳥をとりつよ

宮、

女一鷹すゑて野べにといふは我がためにかりの心を知らせやはする

と宣へば、仲思「思ひぐまな」とて按察使の君に山のありつる様など御物語し給ふ。

書詞

こよは晝。

かくありきははじめ給ひてぞ、院に参り給ひける。上きこしめして、御前に召して、

物も宣はで、つれづれとまもり給ふ。久しうありて、朱雀年頃かよる住居の、斯く

せまほしかりつることも、見まほしき事もせむ、とこそ思ひしか。などか参られ

ざりつらむ。一の宮も久しう見ねば、迎へに物せしかど、止められにきとか」と



(語釋)

(五)夫を持ちて喜したくば望の如くにせよとの意歟

(考異)

(一)申し奏し

(二)ありし大将：文どもなどありしと問はせ給ふ文どもなど

●仲頼涼に贈られし米縮などを妻の許に分つ

(三)奏し申し

(四)給ひつれば給へれば

(六)わいてもこゝにわいてだに

宣へば大将、いとほしう苦しと思ひてものも申し給はず。久しうありて、仲思年

頃、勞るところありて、まかりありきもえし侍らざりつる。仲頼が侍る所にまか

りて、相勞り侍りてなむ、辛うじて参りて侍る」と申し給へば上、朱雀、それは皆

獨居してこそ物せらると聞きしか。何でふ事かありし」大将、彼處のあはれなる

様奏し給ひ、人々のつくれる文どもなど御覽せさせ給ふ。

〔註〕

詞 ことは院の御前。

かくて山籠は、人々の奉り給ひし物ども見給ひて、人々に賜ふべきは賜びて、わ

が御用になるべき留めなどして、中納言の粥の料にとてありし物をば、子どもの

母君の許にやり給ふとて、御文には、

仲頼日頃、これかれ人々物し給ひつれば、駭がしくてなむ。いかに徒然にとの

みぞ。なほ人の有る様にてあらまほしく思されば、さやうにても。わいて

も、こよに見奉りし様にてもありにきとな思しそ。今の人の心は然しも

〔語釋〕

(一) 我も出家してせめて  
御近處に居りたし

〔考異〕

(一) 琴もならはせむ一琴  
どもならはさむ

(三) 宣へる一宣ひつる

あらし。山の末すゑよりも、時々ときどきとぶらひ聞きえむにつきて物ものし給たまひぬべうは、さても、

松風まつかぜのさびきまにく年としを經へてひとり臥ふすらむ君きみをこそ思おもへ

さては、これは粥かゆの料れうとて、人ひとの賜たまへりし。そこにて煮にさせ給たまへ。子こどもの宿直物しゆくちくもの、綿わたおほく入いれて賜たまへ。戀こひ聞きゆれど、暫しばし琴こもならはせむとてなむ。

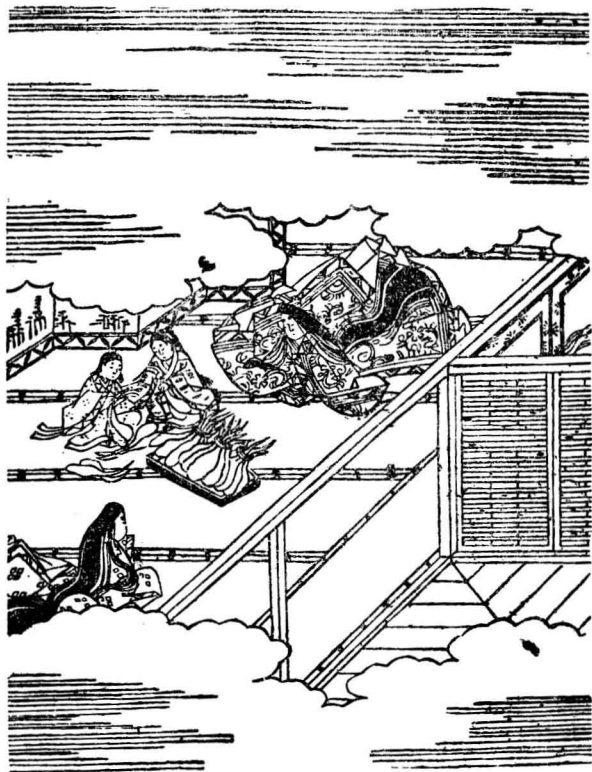
とて奉たてまつれ給たまふ。女君おんなぎみ見給みたまひて、いみじく泣なきて御返ごへん、

仲頼妻うちよりめ 承うけたまはりぬ。客人きやくじんたち、いとめでたう、花はなやかにてまうで給たまふなりしをなむ、いと悲かなしう承うけたまはりし。世人よびとのやうにてとか。いでや、人ひとに見みえぬべき所ところなりとも、今更いまさらにさる心こころをば、いかでか。さやうなる様さまにて、近ちかうだにいかで、とこそ。松風まつかぜはそれをのみなむ。

ひとり寐ねるよさむもいざや昔こけを薄うすみ霜しもおく山やまのあらしをぞ思おもふ

この粥かゆの料れうは、宣のたまへるやうに。

(三)



(附釋)

(一)正頼郎

(三)仲忍方

(四)實頼

(五)兼雅郎をさるべし

(七)藤英

(八)不詳一本に「檢非違

使か」と註せり

(一一)藤英は

藤英時めく、妻の己に  
不潔なるを諷す

(一四)正頼の十四の君

(考異)

(二)馬車も「も」ナレ

(六)集ひまゐる「ツトキ

まゐる

(九)衆一すけ

(一〇)こといとかしこし

一とくいとかしこしと

(二二)今の一今も

(二三)この一ナシ

(二五)大學の院に鶴脛一

此の院に鶴脛一此の院に

侍りし程は鶴脛

と書きて奉り給ひつ。きぬ、綿を見れば、いと多かり。親に奉り給ひ、按察使の君

の許に、箱に入れて奉りたまふ。御たちも、みな賜はりて、引き散らしてむしり

なです。女君、仲頼賢昔も今も、この吹上の君の御贈物をこそ、豊に見れと宣ふ。

畫詞

こよは宮内卿殿。

かくて三條の院には、四面めぐり立ちし馬車もをさく見えず、藤壺の御方に人

もなし。大將殿にいと多かり。頭中將の御方に數多あり。大殿には集ひまゐる人

人、君たちの御車ども。右大辨殿の御かた、式部の大輔かけたれば、此頃ひしせ

むとて、大學の衆の車あまた立つこといとかしこし。世におもく思はれ、人に許

されたる學士なりしかば、今の帝、御心に御書入れ給へれば、常に御前にさふら

ひて、この議り申すことども、いと疾きこしめす。容貌もいとものくし。北

の方に聞ゆるやう、藤英昔、大學の院に、鶴脛はだかにて、飯に飢ゑつよ、書

見ゆる限は守らへて、夜は螢を集めて、學問をし侍りしときに、心地常におもし

(語釋)

(一)十四の君が稱英を不足に思ひて常にすねて居る也

(二)我如きつまらぬ者に難したりとて

(四)正頼

(五)球を

(六)石陽り丸

(八)籠を専にして

(九)其の生みたる御子が

(一一)梨壺

(一二)却つて皇太子にもなるとす

(考異)

(三)奉るなむひがみたる機なる一奉り給ひなむひがみたる機なり

(七)ななり一なり一なると

(一〇)坊一はと

(一二)あめれ一あれ

(二四)人の「の」ナレ

ろく頼もしく、思ふ事なく侍りし。今かう、公に仕うまつり、かゝる御中にさふ

らへど、物思はしう、侘しうなむ。それは、かう見奉るかぎり、親にも對面し

給はず、世には心もゆかぬ様にて經給へば、生きて侍る效なむなき。拙き人につ

き給へりとて、親を勘じ奉るなむひがみたる様なる、おとどは、御前去らず召し

つかひ給ひ、公事につけても、思ほし數まへ給へり。御前をも、斯くてこそ思召

しかへりみ給はめ。いとあぢきなき御物恥なり。世の中ははかなきものぞや。藤

壺の、昔よりななり給ひて、多くの人をいたづらにしなし、宮仕をし給ふとては、

傍 ほとりに人寄せ給はず、すなはちより子を生み給ひしかば、坊、后かねとの

のしられ給ひしかど、音もし給はず。思ひがけざりし人の昨日今日うち生みてし

給へるこそはあめれ。かよれば、かく花やかに見給ふらむ人々はかなうなりて、季

英人々しくならむとも知らず。大學院の藤英と言はれ侍りしかども、上達部の端

にまかりならずや。博士とて侍る人の、侍らぬをぞ思ひ侍る」と聞ゆれど、いら

へもし給はず。

畫詞 ことは右大辨殿。

(語釋)  
(二)正類  
立太子の期近づく、絶望せる正類。

(五)あて宮

(考異)  
(一)の外一ナレ

(三)男君一男子

(四)集ひてさふらひ給ひて一集ひさぶらひて

(六)恨をもしをナレ

かくて東宮月のうちに居給ふべしといふ。右大殿の御門の外には、人も避りあへず、馬車立ち、市の如くのよする。後の宮よりは、日ごとに御消息あり。三條院には、内裏の御使も見えず。かよる事の筋も聞え給はねば、おとど ともあれかうもあれ、この事定まりなば、又の日頭おろして、山に籠りなむ、と思ほして、然るべき所おほし設け、法服などまうけ給へば、男君も女君たちも、集ひてさふらひ給ひて、泣くく聞え給へば、おとど、正類「我女子おほかる中に、此の子生れしよりらうたけなりしかば、懐よりといふばかりにおほし立てて、いかでこれをだに人竝々に、と思ひしに、ある時は對面におもだたしき時もあり、ある時はいとをかしき時も有り來しに、なほいかでと思ひて持たりしに、これによりて人の恨をも負ひ、徒らになるといふ人も聞えしかど、強ひて宮仕に出だし立てたれば、安

(一) 語釋

(二) 立太子の事

(五) 正頼に取次げども

(六) 忠雅の心

(八) 立太子の取計らひを

(一〇) 近澄

(一一) 宮あこ君

(一二) 知らせ上

(一三) 我れ

●立太子の當日。忠雅召さる。

(考異)

(一) べきにあらざべき

(三) 何ゆむにーなでふに

(四) ぬみ居給ひてーなみだをまさへて

(七) 今は「は」ナシ

(九) 一人の一人も

からず羨まれ言はれし人の、かく人笑へに恥を見むを見ては、世にもまじらふべきに

「明日になりぬ」といふ。君たちは萬に聞え給ふを

も、正頼「すべて我このこと聞かじ。人も言ふな」と宣ひて、その日のつとめて、

塗籠にさし籠り給ふ。大宮「我も、何せむにかよる目を見るべき」とてもろ共に

入り給ひぬれば、君たちは、左右の戸口に並み居給ひて、泣きまどひ給ふこと限

なし。

その日晝つ方、「まるり給へ」とて御使あり。「斯くなむ」と聞ゆれど、音もし給は

ねば、参り給はぬよしを申させ給へば、太政大臣を召す。それも参り給はねば、立

ちかへり召せば、今は斯く俄になりにたれば、我がすると人の思ふべきにあらず、

と思してまるり給ふ。正頼「藏人の少將の君、左衛門佐の君、なほ参りて、物の氣

色も案内せよ。こゝに参り給へとありつる、疑あり」とて参らせ給へば、我か人

かにもあらで参り給ふ。

(語釋)

(一) 忠雅

(二) 質賴をして忠雅に渡さしむ。

(三) 梨壺腹東宮に定まれるならんと想像せる也

(四) 忠雅が

(五) 近衛が

忠雅密書を正頼に贈る。あて宮殿の皇子立太子の吉報。一家のさどめき。兼雅仲忠等の態度。

(考異)

(六) 副せて一ナレ

(七) ぬきて一とりて

かくて、酉(さび)の時(とき)ばかりにおとど参り給へれば、上(うへ)、ともかくも宣(のたま)はで御硯(すずり)とり寄せ  
て、物(もの)を書(か)かせ給ひて、封(ふ)じて、頭中將(びょうちゆうじやう)して奉らせ給ふ。おとど見給ひて、御氣色(けしき)  
よろしきを、藏人(くらうりのせうしやう)少將(せうしやう)、これは我が御甥(おひ)の御子(ごこ)なれば、思ふやうなりと思したるな  
り、と思(おほ)して、我が親(おや)は徒(いたづ)らになり給ひぬと思ふに、色(いろ)もかたちもなくなりてさふ  
らふを、上御覽(うへらん)じて、をかしう哀(あはれ)なりと思してうちほよ笑ませ給ひて、今上(いますこ)すこ  
し生き出(い)でて、太政大臣(おほきおとぎ)の御後(ごしろ)につきて立ち給へ」と宣(のたま)へば、御供(ごとも)に宣ふことや  
あると、氣色(けしき)を見ありき給ふ。

その夜(よ)は、職(しき)の御曹司(ごせうし)にとまり給ふ。其處(そこ)にまうでて、御前(ごぜん)にさふらひ給ふ。曉(あかつき)  
方(がた)におとど、人間(ひにま)をはからひて、御文(ごぶん)をいと小さく書きて賜ふ。賜はりて、急(いそ)ぎ出  
でて見れば、「おとどの御許(ごせ)に」とある御文(ごぶん)、いとよく封(ふ)じてあり。従者(ずき)の行末(ゆくすえ)も  
知らず、御門(みかど)に立(た)てる馬(うま)にのりて、馳(は)せて三條院(さんじょうのゐん)に参り給ふを、君たち、太刀(たち)を  
ぬきて殺(ころ)しに來(く)る者かとおほして、如何(いか)に言(い)はむとするものならむと、身(み)も冷(ひ)え

(七)



(一) 諸將

(二) 東宮臣

(三) 忠臣

(四) 優者にて

(五) 七) ちて官居第一の皇子

(六) 今上の

(七) ちて官

(八) 考異

(九) ちち一ナレ

(一〇) のいらへ知らずい  
さまだ聞かずいさま聞  
かず

(一一) 聞き給ふにちとど  
聞くにちとどは

はてて、物も言はねば、宰相の中將、辛うじて、うち戦きて、詰還如何に。誰か

定まり給ひぬる」と宜ふ。少將のいらへ、近還知らず。おとどの御文ぞある」と

うち戦きて宜ふ。君たち、あけて見むと騒ぎ給ふ。少將、近還御文をいかで」と

て塗籠の戸をたよきて、近還近澄さふらひ侍り。取り申すべきこと侍り」といふ

聲を聞き給ふにおとど、いとど物おほえ給はず。宮、大耳言ふべき事こそはあら

め」とて明け給へば、君たち押し込み入りて、御文を奉り給へば、おとど、御衾

をひきかづきて、うつぶし臥して、御文を左衛門督の殿に、讀めと宜へば、女

手して、

忠雅東宮には、若宮居給ひにけり。昨日の酉の時ばかりになむ、宣旨下り侍りに

し。例の作法にもあらず、御心一つにせさせ給ひて、「宣旨の前に人に漏ら

すな」となむ仰せられたる。巳の時にぞ、列引くべう侍る。参り給へ。

と聞え給へり。おとど、いとすくよ兼に起き居給ひて、正類彼處には告げつや」

(詔書)

(三)あて宮が

(四)第四の皇子

(考異)

(一)参る―参れ

(二)告げよや思ひ―告げよと思ひ

(五)東の御方―北の方

(六)せられたらむ―せられし

と宣へば、近道「まづ此處に参るとて」と申し給へば、正頼「はや告げよや。思ひ困じぬらむ」とて御氣色いとよし。

少將は、南の宮に参りて見給へば、若宮をば膝にする奉りて、今宮をばいだき奉

り給ひて、帝の年頃の御契を思し出でつよおはするに、藏人の少將、近道「斯うく

なむ」と聞え給へば、女御の君うち笑ひ給ひて、あて宮「然ればこそ。年頃の御契は

よもあやまち給はじと思ひつれど、怪しう言ひのよしりつれば、心地もあわたどし

うぞありつるや」とて宮をひきする奉り給ひて、御裳ひき懸けておはする程に、

おとど君たち、装束し給ひて、打連れておはして、寢殿の東の御方にわたし奉

り給ひつ。二の宮をば西の對にうつし奉り給ひて、君たち殿人ひき率て、しつらひ

仕うまつり給へば、片時に、玉の如しつらはれぬ。所々みな有るべき様にしつら

はれぬ。御前には、いと雪の降れる庭のごと、砂子敷かれたれば、かねてせられ

たらむ様なり。斯く、しする奉り給ひて、みな内裏にまゐり給ひぬ。上には乳母

(一)語釋  
(二)梨壺腹の皇子が東宮たるべき旨を

(三)今更梨壺腹が立つ位ならば、以下兼雅の心

(四)あて宮の腹に

(六)梨壺腹立太子の事は

(七)賢思

(考異)

(一)よりて「一」ナシ

(五)ならひならねば「なちひならねど」なからひならねば

(八)給はて「給ひて

(九)給へど「給はて

たち、大人、わらは、里なりしも皆まうのほりて、髪揚げ、装束したり。西の御方には、例の御方々みなわたり給ひぬ。大宮、太政大臣の、民部卿の宮の北の方たちは、寢殿にわたり給ひぬ。

大將聞き給ひて、仲思「この事によりて、頭をえさし出でて、朱雀院には、ひがひ

がしき様に思されき。三條には、たえまうでよ、辛き目を見つるかな」とて内裏

へいそぎ参り給ひぬ。右の大殿、中宮より斯く宣へれど、夢にも思ひかけず、然

るべくばかゝる人の腹に、こよら生れ集まり給はましやは、天下に言ふとも、ま

さに、と思して、斯くなむと人にも宣はず。兼雅「こよらのならひならねば、人に

心もおかれじ。善からぬもの一二人心をあはせてだに、悪しと思はれぬれば、人

を徒らになすものなり」とて思しかげざりつれば、斯かるをもなにとも思さず。

されども、内裏へも参り給はず。新中納言は、小野へものし給はで、此の頃は京

にものし給へど、例のかたく疎々しうて物し給ふに、誰も聞えたまはで、昔を

(詔稱)

(一) 梨麩屋立太子の事を

(三) 仁壽殿

(四) 宮にも一職

(考異)

(二) けるを一ゆれど一ゆれば

(五) 如何にぞと一如何にとぞ

(六) 御消息一御機こそ

(七) 屈ナラむ一くんずらむ一うんずらむ

思し出づることども多かり。されど人々のいとほしう言ひのよしりつれば、いとほしう思ほしけるを、斯かれは、耳安く聞き給ふ。

かよる程に、院(三)の女御の御許に御文あり。

實思月頃(三)いと思はずに承りつれば、心憂く思ひ給へつるを、只今なむ承り直

しつる。真にやあらむ。大方のいとほしさよりも、殿におほし歎きつるなむ

いみじう。宮たちも、みづから参り來むとすれば、ゆよしけなる身なれば、

物のはじめにはとてなむ。いま今日明日過してぞ聞えさせむ。

となむある。御かへり、

仁壽承りぬ。宣はせたる事は、けさ太政大臣の消息になむ、さやうにありける。

今の程も如何にぞと、いと煩はしく、恐ろしき世の中なれば、今見給へ定め

て、ことごとくには聞えむ。宮たちの御消息思ふには、何事にかは思ほし屈す

らむ。

(語釋)

(一)涼なるべし

●立太子の宣旨、東宮附職員の任命。

(三)東宮附の武官

(四)東宮の

(五)などぞの「ぞ」衍文なるべし

(八)推薦状を上こしたる也

(九)辨解すべき

(一)御役に立つべき

(二)仲忠北山より出てし時の馬添の一人

(考異)

(一)給ひつー給ふ

(六)みなーみなう

(七)召さるるーなまらる

(一〇)事もー事ども

と聞え給ひつ。

かくて夕方になりて、宣旨持て参りて、上達部などみな参り給へり。中納言殿に、

今日はまうけし給ひつれば、皆あるべき様にせられぬ。帶刀どもは、君たち、御

掣たちの中に然りぬべき、一人づつ出だして、なし給ふ。殿上人、藏人などぞ、

これかれ御勞りにて、みなまゐりぬ。宮司召さるゝ程に、大將殿より、人のなる

べき御文してあり。見給へば、

仲忠日頃、宮に度々まるれど、物騒がしきやうにて、え聞えさせず。さるは自ら

も聞えあきらめぬべき事も侍るを、いかで。さて年頃相願みるべきもの侍

るを、數ならぬ心地して、え勞り侍らぬを、この折にだにこそはとてなむ。か

れこれの御賜、しか侍るめれど、御勞になさせ給へ、とてなむ。然も仕う

まつりぬべきものなり。宮の大進にまかりならむ、となむ申し侍る。

と聞え給へり。それは、伊豫介になされしが今一人なりけり。御かへり、

〔語釋〕

(一) 私人選せよとの仰故

(三) 東宮大夫

(四) 希望者の中にて

(五) 仲忠

(七) 藤英の妻十四の君

〔考異〕

(二) 思ひ一思う

(六) 大將の殿人—大將殿の人

(八) 上には—ナシ

(九) ことに—ナシ

●后宮、仁壽殿女御の榮華を憤る。出家の望。

正頼承りぬ。宣はせたる人の事は、いとやすき事なり。一人は此處にもものせよ

とあれば、然るべき人も侍らぬを思ひ給へ煩ふを、然りぬべしと御覽ずる人

侍らむを、よろこび聞ゆる。

と聞え給ふ。

かくて、大夫には伯父たちならまほしう思したれども、帝、心寄あるやうに聞ゆ

る中にて、然てぞよからむと思して、大將をなし給ふ。権亮には、大殿の御勞に

て、學士には、もとより宮に仕うまつる文章博士、大進は大將の殿人、少進には、

大宮の御いたはりにて一人、女御の君のいたはり給ふ一人、もと宮なる一人なり

ぬ。それより次々の、みなこれかれ御勞になりぬ。御櫛匣殿、右大辨の北の方。

〔書詞〕 こよは東宮のはじめの所。

かくて后の宮は、御心にこそ萬思したばかりつれ、帝にはじめ聞え給ひしに、御

氣色悪しかりしかば、ことに聞え給はざりしかば、斯かることも、上にはことに怨

(八) (九)

(語釋)  
(一)あて宮腹の、以下后  
宮の心

(二)「給ひぬる女御」なる  
べし

(三)后宮の心

(五)仁壽殿が

(七)祇澄殿

(九)仁壽殿女御の方

(一〇)仲忠

(考異)

(四)えも一だも一も

(六)迎へて「して」ナシ

(八)ありたる如して一も  
りたるにまして

み聞え給はざりけり。下には、いと妬しと思すこと限なし。この腹の御子たちみ  
な死なよむ、遂に思ふ如せむ、などおほして、朱雀院に出で給ひぬ女御憎しと思  
すこと、昔よりこよなし。いかで憎み立てて、院の内にえもさふらはせじ、と思  
せど、近きに大殿を二つ三つばかり賜はり給へば、御子たちの御局をしつよ、や  
んごとなき人の御女を迎へて、八の宮も宰相の御女をえ給ひて、迎へてさふらひ  
給ふ。我もくと清らをしつよ、めでたき御勢なり。彈正の宮御妻のなければ、  
物すこし覚え、かたちよく親ある人、我もくと参り集へば、それしもぞ人はさま  
ざま多くさふらひ給ふ。女御の御許に、宮たち集ひて、御かたちは花をおりたる  
如して、大人も童も、夜晝あそびのよしり給へば、院の帝は、これを御覽じ聞召  
すとて、此方にのみおはしまして、朱雀、一の宮むかへて、大將の朝臣あはせて、  
遊をせさせて聞きしがな」と宣ふ。父おとど、御同胞の君たち、常にまるり仕う  
まつり給ふ。大將も掣たちも、院に参り給ふととてとぶらひ聞え給ふ。五の宮も、

(語釋)

(一)女二宮

(二)后宮の心

(六)六の君

(九)思雅

(一〇)六君が夫の許へ歸りたり

(一一)后腹の女三宮は

●六君夫の許に歸る。

(考異)

(三)心憂きー心憂い

(四)スからむースキ

(五)思すーおもはず

(七)ゆくーとーゆらゆらと

(八)夜寒に心細きをー夜寒心細き

(一一)よりーよりて

二の宮を切に聞え給へば、いかでかと思したり。

かくて后の宮、わが御族よりはじめ、上達部、御子たちを憎しと思したれば、睦

ましかるべきおとどたちも、畏まりて参り給はず。斯かれば、なほ心憂き世なり、

これ等が世になりはてぬるにこそはあめれ、斯かる事を見で、御おろして、然

りぬべからむ所に、籠り居にしがな、と思せど、只今は心をさめぬ様なりと思す。

書詞 こよは朱雀院。

かくて太政大臣の北の方は、この事によりてこそ、宮の御掣取もあべかりしか、

今は音もなし、若君たちは戀ひなき給ふ、御腹はのくくと高くなる、何心もな

く出で給ひて、秋の頃ほひ夜寒に心細きを、月頃離れ給ひて心ほそく思す。おと

ども夜毎におはしつよ、泣きわび給へば、六君如何せむ」とてわたり給ひぬ。

思雅「何事により、如何に思ほしてありつるぞ」と聞え給へば、斯かる事をなむ聞

きしかとも聞え給はず、世の中にのよしりいで給ふ宮なれば、男の御心といふも



(語釋)

(一)正嗣が引留めし機に

(四)若し我が其方を望せ  
ずして正嗣の言ひし如き  
報端をしたらば

(五)子どもなどを「歎

(七)寺のもご位

(考異)

(二)給へる一給ひつゝ

(三)こそは「は」ナレ

(六)ことばをぞーことば  
は

の妬くもと思して、おとどのとどめ給へるやうに聞え給ふ。おとど、患雅「然思し

けるこそは心憂けれ。天下に然宣ふとも、此方に疎なる心はありなむや。よし、

親然宣ふとも、哀とおほさば、月頃かく佗びさせ給はましやは。そこをおろかに

思ふ人にて、人のおほし宜ふ様にしてましかば、我が様なる人にしもなくて、こ

とになどを如何にし給はむ。よき人はありとも、己が志のやうなる人はえしも

あらじや」北の方、聞き給ひてけりと思して、ありし様をはじめより聞え給ふ、

大君「宮の御文奉り給ひし時は、限となむ思ひし。その御文を見せ給はずなりに

しかば、つらきになむ」と聞え給ふ。おとど、患雅「それは、實に然聞き給ひければ

思しけむ。いかでか、然おほぞうには思ひなむ。こよにありや」とて取り出でて

奉り給ふ。斯くて、ありしよりおほん中いとめでたし。

〔讀前〕

こよは大殿の北の方、御物語し給ふところ。君たち遊びありき給ふ。

女君御髪喝食ばかり、いとをかしけにて、雑遊し給ふ。御たち三十人ばかり、

(七)

嵯峨大后の落膽

- (語釋)  
 (一)女四宮懷胎中也  
 (二)四の宮なるべし  
 (三)生れたる皇子男ならば  
 (四)四宮腹を太子に立て給へと  
 (五)朱雀も其積りて今上に申し給へ  
 (六)朱雀も其積りて今上に申し給へ  
 (七)正頼の妻、大宮  
 (八)太子のあて宮腹に定まりたりと聞きて  
 (考異)  
 (四)なりけしに」に」ナ  
 (八)思ひ―思ひて  
 (九)侍るべけれ―はぞ給ふべけれ

童あまた。御前に人の奉りたる物いと多かり。簀子に大納言、宰相いませがり。  
 宰相中將、藏人の少將など物語し給ふ。

かくて、嵯峨院、もし宮男もぞ生み給ふと思して、朱雀院降り給ひてはじめて参り給へりけるに、大后の宮聞え給ふ、嵯峨后、いかで聞えさせむ、と思ひ給ひつるに、

一の宮、時過ぎてめづらしき事のありけるを、もし思ふやうにてあらば、「斯く今日明日になりたるは、斯くし給へ」と内裏にも聞えむとなむ思ふ。院にも御心

えて申させ給へ。三條の御子も、聞きてつらしと思はめど、かの人まだ小かりし時、そこをば、大人になし給ひしなり。然思ひ奉りしかば、目に近く見るはかな

しきうちに侍るべけれ」など聞え給ひければ、朱雀「それまで定まらずば、然こそ物すべう侍るなれ」后の宮、嵯峨后、それを、定まるまじきやうに聞え給へかし。こ

れを思ふになむ、限になりたる命は惜う、冥路は安かるまじけれ」と聞え給ひけるに、斯く聞召して、くちをしう、急ぎてもしてけるかな、と思す。朱雀院は、

(二〇)

(語釋)

(二)必ず此御子を東宮に立てんと

●梨壺腹の御子、あて宮腹の第二の御子共に親王にまさる

(四)今上があて宮と約束して

(五)梨壺腹を立てんと

(六)朱雀院、嵯峨院、嵯峨太后

(七)女四宮腹の御子を立てんと

(八)今上が

(一〇)あて宮腹の御子を東宮に

(考異)

(一)御心も「し」も「ナシ」

(三)「なご」と

(九)帝「ナシ」

(一)「見世人の一世人の一みな人の

●今上、あて宮の歸りを促す。

然ぞあらむと思しければ、悪しとも聞召さず、たと嵯峨院の后ぞ如何に思すらむ、とぞ思しける。

かくて内裏の帝、母后の、御心もゆかでまかで給ひにしをいとほしと思して、只今生れ給へる梨壺の御子を、今上坊にするよとこそ宣ひしか」とて親王になし給ふ。

藤壺の二の宮は、二なれど、三の親王になし給ふ。東宮孕まれはじめ給ひしより、「世中たひらかに思ふやうならば、必ず」など宣ひ契りて、年月ゆくを待たせ給ひし程に、あるは生れあるは孕まれ給へるを、母后は、昔よりの筋ありとて、

おほき、いくやう、ひせ、おほやけ、帝、太后、孕まれ給へる御子をと、思して、返すく、一つ御心にして妨げ給ふべし、と聞召して、人にも宣はで、

帝、御心一つに思して、その日まで音もせで、俄にはすゑ給ふなりけり。后の宮の御氣色を見、世人の言ひのよしるなりけり。

藤壺の参り給はぬことを、夜晝上はおほし嘆く。人もことにまう上らず、わたり

(百利)  
(二)今上が来て宮へ

(考異)  
(一)月頃は御使もたてまつり給はず一月頃御使もたてまつり給はず

給ふ所もなし。起き臥しおほすに、月頃は御使もたてまつり給はず。坊するてば、  
 その喜してむ、それにつけてを、と思して待たせ給へど、然もあらねば、今上あ  
 さましう、心強き人にもあるかな。例の、我こそは負けぬべかめれ」とて木工助  
 なる藏人して、御文奉れ給ひければ、御たちめづらしがり悦びて、御簾のもと  
 にたど出でに出で、土器さしなどす。御文には、  
 今上たちかへり聞えても、覺束なく、度々のを、見つとだにあらざりしかば、見  
 る人もあやしがりしを、常に世の例にはあらでもありぬべしや。月頃は、あ  
 る様にもあらずや。

とて、

今上山彦のこたへざりしを聲々にまだしらくもと騒がれしかな  
 なほ参らるまじきにや。

とあり。いと珍らしと思して御返、

(語釋)

(二)東宮

(四)なるべく同行せん

(七)東宮

(考異)  
(一)思ひ一思う

(三)べかめりーべかめり

(五)参りぬー参り給ひぬ

(六)なむーナレ

(八)下にはまがくしけなりやーしけなまかしまなりや

あて宮いと珍らしう賜はせ給へるは、畏まりて承りぬ。いと多く嬉しき御喜

は、まづ奏せむと思ひ給へりしかど、月頃仰せごとも侍らざりしかば、如何な

る御氣色にかと思ひ給へつよみてなむ。山彦とかや宜はせたるも、いさや。

白雲もいろかはりぬと聞きしかばやまびこもいかど答へ憂からぬ

おほろけにや。参り侍らむことは、この宮今日明日参り給ふべかめり。同じ

くばとてなむ。

と聞え給ひて、織物のほそなが、あはせのはかま一具賜ふ。御かへり御覽じて、

参りぬべかめりとおほして、

今上昨日は珍らしきなむ。雲の色とか。

たつ雲をいろくみだる風といへどいづる月日をかざしやはする

悦とかあるは、おほろけの志にやは。この宮一人によりてなむ、数多の親

にも恨みられ奉りぬる。下にはまがくしけなりや。今傍も羨ましとこそ思

(語釋)

(一)それらも皆御身を愛するからの事

(二)立太子の事につきて

(三)脱文あるべし

(六)あて宮の方

(八)あて宮に

仲思、あて宮の御方に伺候す、東宮参内の用意、

(考異)

(四)月日とかゝるは一月と日は

(五)給ひて給ふ

(七)参り給ふ参り給ひ

(九)言ひつがせ取リつがせ

へ。それらも皆。

(二)

とて、これはたの藏人して奉り給ふ。喜びて持て参れり。大宮もおはす。見給ひ

て、大宮、嵯峨院も、聞え給ふ事あとりに聞きしぞかし」と宣へば、女御の君、あて宮の

(三)

(三)

とこそきけ。怪しくも」とて笑ひ給ふ。御返、

あて宮 承りぬ。月日とか侍る。

(四)

いづれともくもへだつれば月も日もさやけく人に見ゆるものかは

それも御心にこそは、と承りしかば。

と聞え給ふ。

かくて東宮の御讀經に、物のはじめなりとて、僧綱たち、名ある智者どもなど召

して、論義などせさせ給ふ。大將参り給ひて、夕つ方、西のおとどに参り給ふ。

(五)

(六)

(七)

簀子に褌まゐり給ひてこれかれ物聞え、大將、女御の君に物聞え給ふ。孫王の君し

(八)

て御いらへなど言ひつがせ給へば、大將、仲思、今はかく、ありしよりも親しく仕

(九)

(詔書)

(一)御取次なしに御話し  
たししたし

(二)立太子の事に關して

(六)兼雅の許に

(七)朱雀の后宮

(八)孫王の君

(一〇)「思すとて」となる  
べし

(考異)

(三)さても―はなぞて

(四)なく―なくなむ

(五)所々より―により

(九)者ごとともぞおぼし出  
づる―ものごとぞ思しつ  
る

うまつるべく侍るを、路し無くとも承りなむ。さても先つ頃、世中にあやしき事  
 を申しけるを、いかに思ふ給へるならむと聞召しけむことをなむ、此處にも彼處  
 にも、限なく思ふ給へなけきて、誰々もまかりありきもせで侍りつる。所々より、  
 (四)かの三條に、とかく宣はする事なむありける。さる心も思ひ知れとて、かの宮消  
 (六)息にて侍りし、事定まりて御覽せさせむとてなむ、まだ失はで侍る」とてこの  
 君して、宮の御文を奉り給ひて聞え給ふ、仲忠「かくも聞ゆまじけれど、昔の  
 (一〇)志 うしなはず、今行くさき頼み聞ゆることもなほ侍れば、うたてある心も持た  
 る者ごとともぞ思し出づる」と聞え給へば見給ひて、大宮なども、いと恐ろしくも  
 (九)ありけるかなと思す。大將、仲忠「御覽じてば賜はりなむ」と聞え給へば女御の君、  
 (一〇)かく書きて出だし給ふ、  
 あて宮くる春を雲に知らせずなりにせばふちも絶えぬる松にやあらまし  
 大將、見給ひて、

〔語釋〕

(一) 正額

(二) 正宮

(三) あて宮へ

(四) 原處の近きをいふ

(五) 未考

②あて宮、實忠にきて君を内せしめん事を圖む、實正の實成。

仲忠 巖のうへの種よりまつと聞きしかば縁もはるぞふかく知るべき

など聞え給ふほどに、大殿おはし合ひて、内裏に宮参り給ふべきことを定め給ふ。

十月十五日、女御もろともに参り給ふべしとて、あるべき事どもみな定め給ふ。か

くてみな参り給はむとて、童、下仕とよのへ、六人三十人、わらは八人、唐綾のあを

色の五重がさね、繚のうへのはかま、下仕八人、檜皮の唐衣、うちぎども著たり。

かくて出で給ふに、三條の新中納言殿より御文あり。

實忠いともく、思ふやうなる御慶は、まづ自ら参りて聞えさせむとせしを、

忌々しけなる様に思ふ給へつよみてなむ。「近うさふらはど」とか宣はせし

を、陰踏むばかりにて久しうなりぬれど、いとおほつかなくて参り給ふべか

なれば、あさづまの心地してなむ。

身をすてし山邊にもなほあるべきをいまもまどはす君にもあるかな

宣はせむまよにと思ふ給ふるこそ心ならぬ様にも。



〔歸釋〕

(一) 東宮の事

(三) 季明

(四) 實忠が

(五) 實正

(七) そと君

(八) 今上へ

〔ル〕そと君を我が手許へ

(一〇) 我が娘の如きは

〔考異〕

(一) 宮の御事は一見給ひ  
つ宮の君の御事は

(六) けりーナシ

と聞え給へり。見給ひて御返。

あて宮の御事は、あしきやうに言ひ騒ぐなりしかば、いと昔の人のものし給はぬをなむ、哀に心細く思う給へし。今も心ゆるびなく、恐ろしき世な

れば、御宮仕などし給ひて、後見きこえ給はど、頼もしうなむ。民部卿殿に

聞ゆる事ありしや。聞き給ひけむ。なほおほし立たば、よもうしろめたうは。

と聞え給ふ。見給ひて民部卿殿の物し給ふに、實忠「かよる、何事にか侍る」と聞

え給へば、實正「そよ。然る事ありけり。姫君の御事ぞや。睦まじき人奉らまほ

しきを、事々しくはあらで、忍びて局に物し給ふやうにてまゐらせ奉り給へ、

と聞えよ」となむ、女御になり給ひし慶に、かしこに物する人のまうでたりけ

るに宣ひける」中納言、實忠「苦しや。前々のやんごとなき人をだにも、あるもの

ともし給はざるものを、これらは何の事にかあらむ。親の人竝々にて勞るにこ

そ、女は人とも見ゆめれ。かよる徒ら人の子をば何にせむ」民部卿、實正「それは

〔語釋〕

(一)今上が  
(二)他の女御たちと中あしければ

(五)あて宮が身を入れて世話したらば  
(七)季明の聲

(八)入内の世話すべし  
(九)今の御妾たちの中に

は  
二〇〇 結澄  
二〇一 三の宮なるべし、

彈正宮忠康  
(二二)返事するなど煩に言ひつけ置けり

(二四)朱雀院  
(二五)誤あらんか、一本「その折は」又「その折々」は

〔考異〕

(三)中どもの強しければ  
—中々ものあしければ、  
(四)ものし給ふを—ものし給ふなり

(六)いと一ナシ

(一一)見給ふるにいきき給ふるにいきき給ふに

然しもあらじ。かの女御の御心に入れ給ふと見給はど、いと哀にぞ思さむ。前々

の人はあれど、みな中どもの悪しければ、女御も心解けず物し給ふなれば、それに

隨ひて、上もものし給ふを、彼處に勞り給はど、いとよくぞあらむや。この御服

はてて、四月ばかりに裳など著せ奉り給ひて、出だし奉り給へ。己らも、も

ろ共にこそ參らせ奉らめ、たどの人の然りぬべきもなし。宰相中將こそは

昔より志有るなどあめれど、見給ふるに、物思ふ人にこそ。然あらぬわかき人々

は、數多あれど、然せむやは」中納言、實忠「この日頃は、五の宮の御文とて度々

見ゆれど、世の中の煩はしさに、「物な聞えそ」とてぞ侍る」民部卿、實馬「それは

然るあだ人にて、女ありと聞く所にては、然ぞ宜ふるなる。朱雀院の二の宮をも

思ひかけ給ひて、入りなどし給ふなれと、男御子つどひて、夜晝遊をしつよ、起

き居給ふなれば、上も、それ聞召すとおはしますなれど、さりとて、帝の御前

に參りなどし給ふなれば、その折には人こむ、とて兵をまうけてそ待ち給ふな

(二五)

〔語釋〕

(一) 正額

(二) 用心せねば

(三) 忠康が女二を捨てた

らば

(四) 女二宮の警固の人数

に加へて

(五) 女二

(六) 正額が番人とたのむ

積の人の中にも

(九) 別々の處におきこ比

較すればよく思はると女

も

(二〇) 所で君はあて宮に

別段劣るまじ

(二二) あて宮は

(二三) あて宮を

(二五) 地盤敷、一本

ふ

る

〔考異〕

(七) 多かれれば一多かん

なれば

(八) 生憎心一あやにて

(二二) 宣ふ一申し給ふ

(二四) こそは「は」ナシ

る。一日、左の大殿の宣ひしは、<sup>(二)</sup>「後の宮の、よくもし給はずば、この御子して、

名を立てさせて、<sup>(三)</sup>恥を見せ、棄て給ひなばいかどせむ。子どもよりはじめて、

いくらもあらむ人を申し加へて、<sup>(四)</sup>この御子まかださせ奉り給へ」と宣ひしかど、

たのみ給ふ人の中にも、然思ひたるも多かれれば、如何にあらむ。かく生憎心お

はする宮なれば、よろしと聞き給はど、<sup>(五)</sup>たど入りに入りおはしなむ。なほ然思ほ

せ」實思「いさや。所々にて思ほし合せむに、恥かしけなるものも、同じ所にて見

くらべ給はど、土と玉との如こそあらめ」實正「いで、何か、この君ことに劣り給

はじ」中納言、實思「いみじきことをも宣ふかな。如何ならむ人とか思す。女一の

宮こそ、おとり給はずと聞きしか。それも向ひ居たまへりしかば、氣劣りてこそ。

世に類あるべき人にもあらずや」民部卿、實正「かたへは見なしなり。思ふ人は然

ぞ見ゆるや」實思「吾君は、あやしき御族にこそは」など宣ふ。

〔畫詞〕

こよは三條の西のかた。民部卿、中納言、物まゐる。御前に、ちろし

(一) 語釋

(一)「すみ物」殿

(二)「見給はど」なるべし

(四)内々は夫婦の中は元の如くになれるを知らず

やの意

(五)東宮

(七)「宮の」衍文歟

(八)誤あらんか

●東宮もて宮内。行列仲頼の妻と其の母、見物の中にまじりて行列を疑ふ。

(考異)

(三)べけれどーべけれど

も

(六)銀の箔ちりしたる白袴一白かさね白はかま

て、まがりなどして物調ず。割籠、する物あり。これは東のかた。御簾のう

ちに、北の方臥し給へり。姫君物まるる。おとな、童多かり。姫君の御乳母の

いふ、「上の、うちはへ惱み給ふを、おとどの氣近う見給へば、如何なるぞとも

聞えつべけれど、もて離れ給へればこそ」まさご君の乳母、「若の根這ふらむと

も知らずや」姫君、「あな聞きにく。何事ぞや」など宣ふ。

かくて東宮参り給ふ日になりぬ。御車、宮の御方に十、女御の御方に二十、絲毛

六つ、擲擲毛二十、うなる下仕、車二つづつ、人給どもは、これかれ出だし給ふ。

車の口付ども、装束どもとよのへ、容貌もえらびて、十人づつ付けたり。宮の人

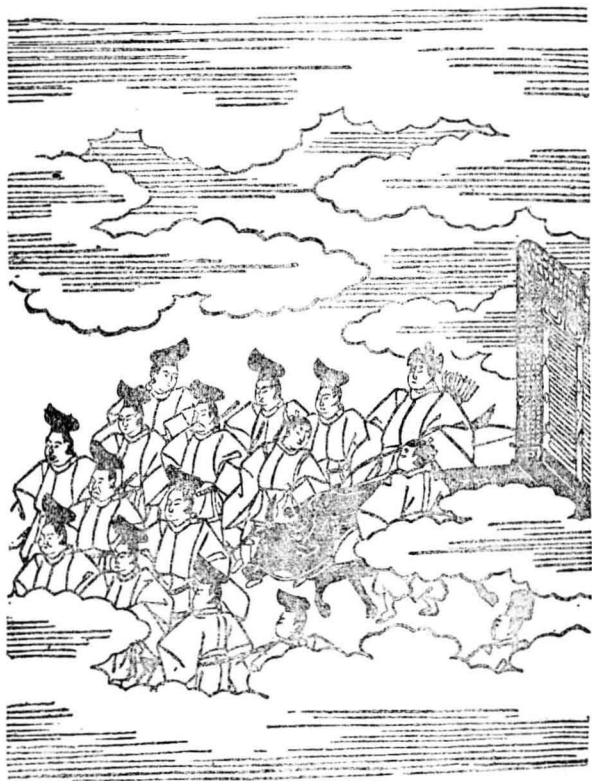
給は、裾のきぬ、冠したり。あるは銀の箔ちりしたる白袴、あるは薄色の下襲、

裾濃のはかま、心々にせられたり。女御の御方の人給は、狩装束、車ごと心々

なり。かくて、東宮の御車は東の大路の前、大宮の大路に引き立てたり。宮の

御車はあかすけにて、鞆の大なるやうなり。黄なる御車牛かけたり。御車添は

(八)



(詔稱)

(三)「おほきもと」の御族は「なるべし、忠雅の一門の人々

(四)東宮

(考具)

(一)線鞋靴—ふかやつ

(二)黒牛—黒うて

嵯峨院さげのいんの庖くりの人の子こなるを、長たけひとしく、容貌かたちあるをえらびて、十二人、かいねりがさねの下襲したぎね線鞋靴せんがいせつはきて、後しりには宮みやの藏人くらうき、所衆ところのすぞ仕つかうまつる。女御くまごの御車くるまは、南みなみの御門かじ、三條おほしの大路おほぢにひき立てたり。御車牛くるまうし、黒牛くろうしかけたり。御車添くるまほひ、御方かたのさぶらひの人ひと十二人、葡萄染えびちめのしたたがさね著つたり。後しりに廿人仕つかうまつる。上かみ達部たつめ、左ひだりの大殿おほこのの御子ごども三人、源中納言げんちゆうなごん、良中將らうちゆうじやう、右大辨みぎたひん、おほき大殿おほきだいでん。御族ごぞくは、后きさきの宮聞召きこしめすことありとて仕つかうまつらず。民部卿みんぶきやうの御族ごぞくは服ひらなり。さあらぬ殿上人だにんは、四位ゐ、五位ゐ無なきなし。六位むも目めあきたるは無なきなし。宮みやおはしませば、藏人くらうきども、宮みやの御車くるまにたてまつる所に、さながら仕つかうまつり給たまふ。御車くるまの後しりに、乳母めのと二人、左大臣殿さだにんの君きみたちは、女御くまごの御車くるまに奉たてまつる。大宮おほみや、いと參まゐりまほしう思おぼせど、まかで給たまはむが煩わづらはしかるべければ、とまり給たまひぬ。一ひとの人給たまひぬ。女御くまごの御乳母めのと三人、孫王そわうの君きみ。かくて出いで給たまへば、みな人馬ひとうまに乘のりぬ。次第しだい司し二人、事行ことおこなひつよ、女御くまごの君きみの御

(語釋)

(四)仲頼

(考異)

(一)乗りたれど一乗りた

(二)うちませ立てたりー  
うちませけて立てたりー  
ちませ立てたり

(三)ごとくなる御前に松  
明一ごとくて御前まつた  
き

車の次には、御櫛匣殿の人だまひさながら立つ。その次に、よろづの宿徳乗りたれど、女御の御方の人だまひの後にぞ立てける。宮たちの御乳母のいふやう、「同じ御腹に生れ給ひつる同じ宮に仕うまつれど、如何なる人の、一の車に乗るらむ。我ら如何なれば、宮のをさめ、御廁人の後に立つらむ」と腹立つ。孫王の君、「かの宮をかしづき聞え給へばぞや」と言ふ。大宮の大路よりのほり給へば、おほくの左右の物見車、うちませ立てたり。夜静に月の光、晝のまごとなる御前に松明ともしたり。絲氣の車には御前六人、擯榔毛には四人、火ともせり。車の簾高くあけて、後口よりこほれ出でつゝ乗りたまへば、装束、容貌、あらはにめでたし。物見車、大將と中納言とを見て言ふやう、「これは、名だたりし涼、仲忠ぞな。めでたくもなり勝りたるかな」といふ。右大辨を見て、「これは藤英ぞかし。生きながら、人の身變るものなりけり。この世にも淨土はありけり」又ある女良中將を見て、「これは行政ぞな。いといみじく濟らなりや。あはれ源少將法師あらまし

(彌傳)

(三)仲頼

(四)あて置

(五)仲忠

(六)仲頼

(八)仲頼なればこそ

(考具)

(一)はやーをや

(二)はやーをや

(七)かの君は「は」ナシ

(九)むれつるーむれくる

かば、如何ならまし。容貌心めでたかりしはや。手をかき、歌をよく讀みしはや」と車ごとと言ふ。少將の妻母、ひとつ車にて物見る。母、「わが掣の君をほろほし給ひてし人の、めでたくて物し給ふかな。斯かりける幸人を、思ひかけ給ひけるぞ、おほけなきや」女「仲頼妻」さればこそ、死に入りて久しかんめりしか。山へ入るとてこそ生き出でたりしか。そのかみ侍従なりし人だに斯くなり給ふめれば、かの君は、今は大臣にもなりなまし」母、「かの大將のやうに、いかで。宰相などには然もありなまし。されど、君なればこそ、かよる君たちの、うち羣れて、深き山邊を尋ねて、いみじう志をしてとぶらはれ給へ。その御徳にぞ、かよる面白き目をも見れ」とてみな泣く。女、

仲頼妻かたらひてむれつる鳥を見る時ぞのこれる袖も朽ちはてぬべき

母、

袖のみやくちははつらむ君なくてみも見る効のみえずもあるかな



(語釋)

(三)あて宮が帝の所へ

(考異)

(一)二人は「は」ナレ

(二)御供人など一二十人

(四)御物語一御物語に

(五)給ひつゞ給ふかつ

がつ給ひつゞかつ

(六)間の一間を

●今上、あて宮并に其腹の皇子たちを寵愛せらる。登華殿懐胎。

などいふほどに、御前は中の御門にいたりぬれば、後は宮まだ近し。

かくて参り給うて、まづ東宮入り給ふ。御車に、乳母二人はさふらふ。今二人は、

藏人御供人などと歩み入り給ひぬ。梅壺(二)におり給ふべしと、鞞(二)の宣旨申して、

女御入り給ふ。御鞞にては、宮たち、いま宮の御乳母、孫王の君さふらふ。後に

おとな六十人ばかり、わらは、下仕あゆみ、四位五位具したり。こと君たち、皆

おはす。かくて藤壺におり給ひぬ。御おくりの人、男女まかで給ひぬ。

書畫三詞

こよは東宮まるり給ふ所。

かくてまう上らせ給ひて、月頃の御物語、おそく参らせ給へる事など、かたみに

聞え給ひつよ、まだ御殿籠らぬに、「丑二つ」と申すに、女御下り給ひなむとすれ

ば、今上「しばし待ち給へ」とて、今上「この頃の夜は、かう言ひてもまだ暗し。

今上「獨りねし夜はまぢかねし時の間の疾くもこよひは思ほゆるかな

明けがたかりしものかな」と宣へば、女御、

あて宮夜々(二)は知りけるものをこよひしもなほさへとくはなどか聞くらむ

上(三)、今(三)うたてくも言ひなさるよかな。さりとも「うちなす鐘(三)の」など宜ふほど

にあかくなれば急ぎ下り給ひぬ。すなはち御文あり。

今上(三)只今は、

歎きつよふる夜もあれど朝ほらけおきつる霜のわびしかりつる

女御、

あて宮明けぬれば雲のうへにもとまらずておきゆく霜の寒きをぞ知る

と聞え給ふ。

二の宮、赤らかなる綾かいねりのひとへがさね、織物の直衣、襷がけの御はかま、

今宮(四)、こもんの白きあやの御衣一かさね奉りて、襷かけて、いとをかしく肥

えて、這ひありき給ふ。女御、上わたらせ給へば、みな出だしすゑ奉りて、乳母(五)

たちは、御几帳の後に並み居て、いづれの宮をかまづ抱き給ふと、挑みかはして

(考異)

(一)とくはうらぐも

(二)うたてくうたてう

(六)女御一ナレ

(語釋)

(三)未考

(四)あて宮腹第二皇子

(五)あて宮腹第四の皇子

(七)今上

(八)今上が

〔語釋〕  
(一)「えう(塵)しかけたる」なるべし

(六)あて宮の參内が此の子故に遅なはりし故

〔考異〕  
(二)やり給へーやりて給へ

(三)我ーナシ  
(四)これも類の人ぞーこれも類の人ながらーこれはたゞの人ぞなど

(五)とて「て」ナシ  
(七)罪をも負ふまじきー罪も思ふまじき

(八)かきーナシ  
(九)夜うさりー「う」ナシ

見るに、二の宮あそび給ふをかき抱き給ひて、御膝にすゑて、かき撫でつゝ見給ふ。御髪はやうしかけたる様にめでたし。肩うち過ぎたり。御容貌いとめでたし。うへ、今上坊をこそ、まづ見むと思へ。呼びにやり給へ」と聞え給へば、あて宮「いま、今日明日過して」と宣ふ。今宮の御乳母、いとねたしと思ふ。二の宮のは、乳母「されば我こそ」とて誇る。今宮、なに心もなくたゞ笑ひに笑ひて、二の宮に「這ひかより給へば上、今上これも類の人ぞ。これも憎くはあらねど、いたく我に物を思はせつるや」とて宣ふ。

今上二葉にもまだ見えざりし玉かづら這ふまでまつぞ久しかりける

女御、

あて宮まつだにも苦しからずば玉かづら立つをぞ君に見せむと思ひし

うへ、今上おそく参り給ひしかば、これをいと憎く、見じと思ひつれど、親の罪をも負ふまじきものかな」とてかき抱き給ふ。おはしまし暮らして、今上夜うさ

(語釋)

(二)「左衛門督の君に歎、忠澄なり」

(三)東宮を

(四)東宮が

(六)あて宮をいふ

(二〇)今上があて宮方へ

(二一)あて宮が今上へ

(二二)あて宮が他の女御

たちと同列にてどの女御

たちにも平等に満足を與

へて然るべき時に珍儻に

あて宮をのみ寵せし故昔

は不平も言はれしが

(考異)

(一)坊一坊を

(五)これは一見れば

(七)いかゞいかゞは

(八)もどくまじうもど

かるまじく

(九)かくかくて

(二二)候ふ一ナレ

りまう上り給へ」とておはしましぬ。

まう上りて下り給へば、今上坊呼びてすゑ給へれ。こよに物せむ」と宣ふ。下り

給ひて、左衛門の君に、「わたし奉り給へ」と宣へば、大殿、上人などしてわたり

給ひぬ。知らぬ顔にてわたり給へば、いとくおとなしう、紐ついさしてさふら

ひ給ふ。御髪は居長にて、いと氣高う濟らなり。今上けにこれは、聞きつるやう

に、たどの人には見えざりけり。親にこそいとよう似たりけれ。あいなう心さへ

似るかな」と宣へば、女御、あて宮「いかど然は侍らむ」上、今上人のえもどくまじ

う、心強くこそは」と宣はす。

かく、來つよつねに宮たちを見給ふ。夜ごとに参らせ給ひ、晝も日々にわたらせ

給へば、女御、あて宮身一つ候ふだに、ゆよしく聞きにくき事さふらふものを、か

く若き宮たちひきつれて候ふこと、いかにうたてある事侍らむ」うへ、今上は

然もあらじ。人々の心をやりても、いとよくありぬべかりけるものを、思の儘に

(附釋)

(一)女御たゞき

(四)照臨殿

(五)登壇殿が

(考異)

(二)遂にて—女御遂にて

—女御

(三)まう……ことなし—  
まう上り給へと申し給ふ  
ことなし

(六)はちみーにんじ

(七)帝もしも「ナレ

ありてこそ、院にも騒がれ奉りしか」など宣ひて巡にてまうのほらせ給へば、い

と花やかになまめかしくもてなし給ひて、世中まつりごとも、いとかしこうせさ

せ給ふ。御學問に心を入れて、御遊も常にせさせ給ひて、いとおもしろうし給ふ。

梨壺は、なほもの宜ひなです。他人は、まうのほり給へど、殊なることなし。人

の御宿直の夜も、藤壺の御ためには、然るやうにもあらずもてなし給ふ。四の宮

は、藤壺参り給ふべしとてまかで給ふに、さがなものはまだ参り給はず。式部卿

の宮のは、女御にならずとて、父宮おほし嘆くと聞召して、度々召しければ、

登壇殿「如何はせむ」とて参り給へれば、輦ゆるされ給ひぬ。時々まうのほり給

ひ、晝も時々わたらせ給ふほどに、十月ばかりよりはらみ給ひぬ。父宮、すこし

嬉しと思す。

かくて世の中定まりけり。太政大臣は、さるやんごとなき一の人におはす。左大

臣のおとど、世の中をまつりごち、帝も政事をあづけ給へる様にて、いさよかの

(語釋)

(一)正頼に御相談なくて

は

(四)實忠

(六)頭役をつとむる也

(七)宣耀殿

(八)仲頼の妻の父

●新年、菅原忠保修理頭に任ぜらる。遊野眞菅父子放されて召還さる。女四宮皇子を産む。

(考異)

(一)あるべきなるべき

(三)定め……ならぬは

御爲にやんごとなき事に

ても

(五)やくーやごと

事も、宣はせではし給はず、奏し給ふことも否び給はず。おとども、公の謗とあ

(一)

るべきことは定め給はず、やんごとなき事ならぬは奏し給はず。右の大臣をば、

(三)

心憎き恥かしきものの心ある人にし給ふ。右大將は、公私にも、かしこきもの

に思はれ給へり。然あらぬ人も、調ひたり。新中納言、よろづ人に惜まれ、上も、

(四)

これ宮仕せさせてしがなと思す。

(五)

かくて年還りぬ。朔の日、朝拜きこしめす。二日、朱雀院、嵯峨院に参り給ふ。

三日朱雀院に行幸あり。大將、思ひあるべければ、かうぶり賜はせず、やくなき

ものどもに賜ふ。これはた、かうぶり賜はりぬ。次々の節會どもも、みな聞召す

内宴には、平中納言殿の御息所なり。容貌も清けなり、ある中に下臈にてまかな

ひ給ふ。

司召にもなりぬ。女御奏し給ふ、あて宮内卿忠保朝臣は、よき官はえ賜はるま

じき人にや侍らむ」うへ、今上然も聞えず。よろしき人なめるを、嵯峨院の御た

〔語釋〕

(一)あて宮の侍女兵衛がわが親の身寄なればとて

〔考異〕

(一)侍るなるにやは―侍るにや

(三)眞宮さけしき人に侍りしかど―眞宮はさかしき人に侍りしかば

(四)かの男どもの―あの男どもが

(五)四の：大后宮―嵯峨院の四の宮男宮うみ給へり父みかど大后宮

(大)いと―ナシ

めに過あやまちしたること有りて沈しづむとこそ聞きしか」女御、あて宮さ侍らば、いと哀あはれに

て侍るなるを、修理頭すりのかみのあきて侍るなるにやはなさせ給たまはぬ」うへ、今上いまなど、

勞いたるべき様やうやはある」女御、あて宮さも侍らねど、兵衛へいゑが親おやがたにて、常つねに申まうさす

れば」など聞きえ給たまへば、なされぬ。世よの中に「いみじき官つかさど得とつるものかな」と驚おどろ

きさわぐ。左のおとど、よき折をりに奏そうし給たまふ、正頼ただたね「このはなち遣つらはしてし、滋野眞菅しげのますすひ

さけしき人に侍りしかど、その罪つみを、後のちまではかうぶり侍るまじ。かく御世みやよのは

じめなどには、天下てんがの罪つみあるものを免ゆるさせ給たまふなる。か(四)の男おのこどもの、哀あはれにて侍る

なる、召めしにつかはさむは如何いかで侍らむ」うへ、今上いま「ともかうも知らざりし事ことなり。

これかれよろしう定められて、あるべからむ様やうに物ものせられよ」と宣のたまへば、喜よろこびて、

みな召めしに遣つかはす。

か(五)よる程ほどに四の宮男御をよこみこ子生こみ給たまひぬ。大后宮おほのきみ、斯かかりけるものを、今いましばし、坊ぼう

定さだまらざらましかば、と思おぼす。御産屋うみやいとになく、所々ところどころより御産うみや養例やしなひれいの作法さほうな

り。三條院（三）よりもいかめしう仕つかうまつり給たまふ。

畫詞

こよは嵯峨院（四）の宮みやの御方かた。

かくて修理頭（一）は、覺おぼえぬ喜よろこして、驚おどろきよろこぶこと限かぎりなければ、出いでてありか

むとするに、年とし老おい、牛車（二）、装束（三）もなし。直衣（四）装束（五）は、女（六）著きせたれど、上うへのきぬは

無し。女（七）紀念（八）にせむとて少せう將（九）の装束（十）一もくだり持もたりける、取とう出でたれど、うへ

のきぬは元もとより無し。とかうたばかり程ほどに、三日（十一）も過すぎぬ。辛からうじて、所ところ々に慶よろこび

申まうすとて言いふ、患（十二）保（十三）こよらの年頃（十四）、公（十五）に捨すてられ奉たてまりて、諸（十六）資（十七）財（十八）を賣うりて、世よ

にかなしく佗（十九）しき目めを見て、わづかに侍はべる女（二十）の童わらわの夫（二十一）に侍はべりし山伏（二十二）の、昔（二十三）の衣ころもを

ぬぎ松（二十四）の葉はを包つみて、深（二十五）き山（二十六）よりとぶらひ侍はべる物（二十七）をわかちて養やしなひ侍はべるにかよりて、

一人（二十八）の従（二十九）者（三十）も侍はべらず衣（三十一）裳（三十二）も侍はべらで籠（三十三）り侍はべるを、明（三十四）王（三十五）の出いでおはしまして、斯（三十六）くま

かり浮（三十七）びたる慶（三十八）を、すなはち申（三十九）さむと思（四十）ひ侍はべりつれど、とかくの事（四十一）ども出いでて侍はべ

りつる程（四十二）に、今（四十三）までになり侍はべりにけり」と申（四十四）すを、他（四十五）人はなほ聞き給たまふ。左（四十六）のお

〔語釋〕  
〔六〕右のもととよしの限

〔考異〕  
〔一〕なれば―なけれど

〔二〕物をわかちて―をもちて

〔三〕侍るを―侍るに

〔四〕申さむ―奏せむ

〔五〕とかくの事ども出で侍りつる程に―とかくの如くはていし侍りつる程に

〔六〕左のお



(語釋)

(一)修理頭を留む者他に  
数多あり

(二)節置

(五)仲頼の妻

(一)一あて宮へ

(二)近邊などに取次を  
頼みて

(考異)

(三)主一まし

(四)仲頼の「の」ナレ

(六)もの「の」ものにて

(七)亡ぼして「て」ナレ

(八)天上の天女をも持て  
ならさすめれば「天下の  
仙人も御目ならさめれば

(九)女御は「は」ナレ

(一〇)思して「て」ナレ

とど 兼雅「けに、いと怪しう沈み給ひつるを、如何に思はれつらむ。此御慶は、

兼雅らには免宣はじ。東宮の女御になむ、返すく申さるべき。かの女御こそ、

度々申されけれ。他人あまたあり、かの御同胞の左大辨「兼けて仕うまつらむ」

と切に申されけれど、主を申しなされけるとぞ聞きしか「修理頭、おどろきて、

忠保「何の故にか、女御然奏せしめ給ひけむ。私事には侍れど、仲頼の朝臣の、

山にまかり籠りしも、かの女御によりて」とて、童への詫び申すことを、聞召すと

ころや侍らむ、と畏まり侍る。忠保は、「男の好色といふものは、怪しきものに侍

れば、おほけなき心の侍りて、身をも亡ぼして侍るにこそあれ。女御知り給ふべき

事にもあらず」と愚なる心にも制し侍るを、身の便なきまよに申すなり「おとど、

兼雅「男の好色は然ぞあるや。女あるときけば、天上の天女をも持てならさすめれ

ばにこそ。かの女御は有識にて、さやうの事を思して勞られたるにこそはあらめ。

新中納言御兄弟を越してこそは物せらるなりしか。彼處に、藏人の少將などして、

申させ給へ」と宣ひつ。

畫詞

ことは右大臣殿の御方。修理頭年六十ばかりなり。宮、おとどに梨壺

の御文見せ奉り給ふ。女三「この頃は、なまうで給ひそし。藤壺、隔てもこそ思

せ」兼雅「今衣更の程にもものせむ」とて、生れ給ひし宮の、脇息をおさへて立ち給

へるを、抱きてありき給ふ。

かくてかんのおとどの御方に、大將まうで給ひて、仲忠「なほ申すべき事の侍るを、

疾くわたり給ひなむや」北の方、俊隆女「此の晝ぞまうで侍りぬる。夜はこよにもと

まり給はず。かの宮見奉りにぞ、かく晝間には」大將 仲忠「この東にはものし

給ふや」北の方、俊隆女「わざとにはあらで、夕暮、夜の間にごうじ隠せらるなる

や」大將、仲忠「然思すべき人にこそは。年頃いかに思ひつらむ。かの按察使の君

なども、いと目やすき人にぞありける。かよる人どもを見捨てて、いかで物し給ふ

らむとこそ。屢、まゐり來べきを、かしこに疑はしき程になり給ひぬるを、人少に

(詔釋)

(二)兼雅が

(三)梨壺腹の皇子

(四)中の君等をあきてあ  
る處

總仲忠、母を訪ふ。女二  
宮の囀。

(五)「こころじかくれ」は小  
路隱、一、本「こしがく  
れ」又「かうしかぐれ」

(六)仲頼の妹

(七)女一宮

(考異)

(一)年一ナレ

(七)

(語釋)

(一)仁壽殿

(二)仁壽殿女二宮

(三)五宮以外の人も、「さちぬも人知れず」なるべし

(四)とても奪取することは叶はぬものと

(五)「大事」は「御車」の誤なるべし

て、心細けにおほしたればなむ、まかりありきもえせぬ」北の方、俊薩女「けにさぞなり給ひぬらむ。参らむとするを、按察使など、憎しと思へば、恥かしくてこそ。院の上は、などか今まではまかで給はざらむ」仲患「いさや、かの二の宮を、五の御子の、世を世ともし給はず、帝后も物聞え給はぬ人の、いかで取らむとのみし給ひて、「まかで給はどともかくもせむ」とのみあれば、里にもえ。然らぬ人知れず盗まむ、入らむ」とのみあなれば、それに怖ぢて、えまかで給はぬぞや。藤壺の さばかりのとしられ給ひしかど、情づき、人の御返事申しつぎ、えすまじきは、さてこそあらまほしくてえ給ふなりしか。これは物驗がしくぞあるや。「さては得ぬものと懲りにたるにこそはあらめ。然てのみあらむやは」とて明日ぞ、これかれ大事して迎へ奉り給へるなる」と聞え給ふ程におとどおはしぬれば、御物語など聞え給ふ。

畫詞

こよは右大臣殿。

●正頼、女二宮女四宮を  
自邸に迎ふ。祐澄近澄等  
女二宮を途中に奪はんと  
して成らず。

(附傳)

- (一)女二宮の迎に正頼等
- (二)「忠澄ら参りて」なる
- (三)「勿體ぶりに居る間に
- (四)實は祐澄がかねん」
- (五)實は祐澄が居る也
- (六)近澄
- (七)實正、涼、勝英

(考異)

- (一)然れど一まば
- (二)大事は一大事の
- (三)「八」をば「七」ナシ
- (四)「胡籬負ひたる男ど
- (五)「胡籬を負ひたるをの
- (六)「胡籬をひたるもの
- (七)「をのこち

かくて、御迎に、おとど、君たち出で給ふ。左衛門督の君、忠澄「何か。まるり  
給はずとも、忠澄は参りて、まかでさせ奉りてむ」おとど、正頼「然れど、一所  
をだに、我らかしづき奉るべし。況や、七所の孫の宮たち迎へ奉りたらむに、  
何の事かあらむ。宿徳つくらむ間に、事惹き出でては、え効もあらじ。我主たち  
の御心もしらず。わかき男女、同胞と具し給ふ、やすく思ふべきにもあらざり  
けり」と宣へば宰相中將うち笑ひて、祐澄「聞召し懲りたる事やあらむ。さやう  
に好いたる人も、今は侍らぬものを」とつれなく言ふ。下には、いかでこの折に  
盗まむ、と思ひたばかる。藏人の少將は、物も言はで、下りて入り給ふらむほど  
に、入り臥しなむ。まさに殺されむやは。又、さらば然て死なむ、と思ひおはす。  
かくてみな出で立ち給ふ。おとど、正頼「私の大事は、この事にまさるはあらじ。  
此の事かく同じ心にし給はざらむをば怨み申さむ」民部卿、源中納言、右大辨  
まうで給ふ。上達部は御馬にて御前、弓、胡籬負ひたる男どもあまたして、衛門督、

宰相などは御馬にてまうで給ふ。

(語釋)  
(一) 奮固の武士あり

(二) 朱雀院

(三) 女一宮懷胎中儀

(四) 思澄

(六) 誤あらんか、五宮を  
いふなるべし

(七) 心得違したる様なる  
は如何

(考異)

(五) 入り給ふー入り給ひ  
つゝ

朱雀院の御門には、後の宮おはすれば陣居たり。御車も寄せさせず。御門にひき立てて参り給へり。上おはします。女御、仁賢まかで侍りて、御産平かにもものし給はど、いと疾く参り侍りなむ」うへ、朱雀かく大事とて物せらるれば、頼もしきものを。されど、今日やんごとなき迎人ども、頼もしくあめれば。男御子たちは、な率て物し給ひそ。いと騒々しからむ」と宣ふ。上おもほす御心ありて制し宣はせて、御車近う寄せさせ給ふ。左のおとど、右大將、左衛門督、近くさふらひ給ふ。五の宮いとしどけなき氣色にて、上立ち給へる御前より、二の宮の御許へ、たど入りに入り給ふ。今と何方にぞ。あな騒がし。かのおほいまうち君は」大將の朝臣の見給ひて、仲忠いと怪しからずや」とて引き留め給へば、涙をながして、たど泣きに泣き給ふ。今となど御子のあやまりて見ゆる。思ふ心あらば、我にこそ言はめ」と宣へば、涙を拭ひてさふらひ給ふほどに、皆ひき連れて

(語釋)  
 (二)かひなくしき出立ち  
 したる者、女二宮を奪は  
 んとせる也

(六)伊忠の心、祐澄近澄  
 等はたくめる所ありと見  
 ゆ

(考異)  
 (一)御前に―御前の

(三)ひたぶる装束―ひた  
 ぶるの装束

(四)寄り來べくも―寄る  
 べくも

(五)なきに―なきを

(七)やごとなく―やんど  
 となく

(八)見給ひて―見て

出で給ひぬ。御車の左右には、おとど、大將の御車をひき竝べて、御前に君だち  
 うち圍みておはしませば、こよかしこに、ひたぶる装束したる者ども、うち群れ  
 つよあれど、寄り來べくもあらねば隠れぬ。(三)(三)

大將、宰相の中將、藏人の少將のなきに、これはみなたばからるゝ様あらむ、此

處をば離れぬ、彼等ぞ煩はしき、と思ほして、御車をひき別れて走り先だちて、宮

におりて、入りて見給へば、宰相の中將、かよる業の爲に片時に千里行く馬立て

飼ひ給ひけるに、鞍おきて、やごとなく睦まじう仕うまつり給ふ四人、狩衣に草

鞋はきて隠れ立ちたり。をかしと見給ひて、上にのほりて見給へば、御車寄する

程にあたりて、立てり。見ぬやうにして入りて、紙燭をさして、御帳の内その邊

をめぐりて見給へば、藏人の少將、直衣すがたにて、壁代と御障子との間に立て

り。いとをかしと見給ひて、待ち奉り給ふに、おはし著きぬ。

御車寄せて、御几帳さして、仲忠「はや下りさせ給へ」と聞え給へばおとど、左衛



(語釋)

(一) 我は恥かしくもなげれど

(三) 仁壽殿が

(考異)

(二) こそあらめこそはあらめ

(四) 五宮 彈正宮に托して文を女二宮に贈る。

門督もんのかみと立ち給たまへば、女御にみよの君、仁壽にじゆ「あな見苦みぐるしや。こよには恥はぢ奉たらさず。物恥ものぢし

給たまふ人ひとこよにもものし給たまふめり」大將たいしやう、仲忠ちゆうちゆう「宮みやたちもおはしまさぬを、とてさふら

ふなり。仲忠ちゆうちゆうをばな疎そませ給たまひそ。火ひを暗くらうなさむ」とて御松明ごせいめいも暗くらうなさせ給たま

へば、さる様やうこそあらめとて、まづ下おり給たまひて、宮みやたちおろし奉たり給たまふ。おとよ、

左衛門督さゑもんのかみ、御几帳みきちやうさして入いり給たまへば、大將たいしやう後ごに立たち入いり給たまひて、やがて御座所ごましよころへ

も入いれ奉たり給たまはず、一ひの宮みやの御方かたにおはしまさせて、御帳ごちやうの内うちに入いれ奉たりつ。宰さい

相しやうの中將ちゆうしやう、詰つ置ぢこは、大將たいしやうの今日けふ盜人ぬいびとの氣色けしきを見みてするにこそあらめ。宮みやたちも

おはせで、いとようたばかりつべかりつるものを」とて齒咬はぐみをして出いでぬ。少將せうしやう

もすべり出いでて去いぬ。つとめては、つれなくて皆出みないで來きたり。大將たいしやう、見合みあせて、い

とをかしと思おもひたれど、いとまめやかにうち語かたらひ給たまへば、氣色けしきいと悪わるくて、宰さい

相しやうの中將ちゆうしやう居ゐたまへり。

かくて五みやの宮みや、彈正だんじやう宮みやの膝ひざを枕まくらにして、夜ひとよ一ひとよ、泣なくく物語ものがたりして、五宮ごみや「まろを



(語釋)

(二)女二宮

(三)彈正宮が

(五)君の御文の中は封入して女二宮に上げて下され

(七)「人と宮たちにも」

(九)「あて宮が読んでもなかりし何を憶りて手を出さざりしぞ」

(一〇)「ありしぞ」なるべし

(一一)女二宮

(一二)女二宮を

(一三)實忠の女そて君

(一五)響にしてもよき器量と聞く

(考異)

(一)この宮—二の宮

(四)宮に—一宮の

(六)をば—をも

(八)にも—にぞ

(一四)聞きしは—聞きしが

ば、如何にせよとて、この宮をばまかでさせ奉り給へるぞ。かよる心ありとて、宮

も月頃は見給はず、上もよからず思したれど、それも思はず。宮に、我を子にし

て助け給へ」など宜ひあかして、つとめて御文かきて、五宮「これ、御文の中にて

奉り給へ。まろをば、よも憎しと思はじ。皆人に憎まれぬ人を、宮たちにも思

しつらむ」と宜へば彈正宮、忠康「こよにこそ、人に憎まれて獨りのみ侍れ」五

の宮、「あな痴や。同じ心なりけむ人を、何につよみてたどにはあらじぞ。わりな

くても、物をだに言ひそめつれば、その人をこそ我いかでと思ひたれ。何れの男

か、人を思ひかけて、それに憂くて一人はある。上の御心を思はずば、宮をも今

までかく思はましやは。昨夜は、萬のこと覺えざりしかど、とらへて参り給ひに

しかばこそは、え見合せ奉らずなりにしか」彈正宮、忠康「中納言の女のもとに、

御文遣はすと聞きしは、それこそ人も見つべう聞ゆれ」五の宮、「よしと人の言ひ

しかば、文やりしかども、返事もせず」兄宮、忠康「なほそれを宜へかといふな

〔語釋〕

(一)我も

(二)女二宮を手に入れん

と

(五)女二宮を我に譲り給

へ

(六)「など」とて「なるべし

(八)五宮が頼む故差上る也と五宮の文を封入したることわりをいふ也

(九)女二宮が

〔考異〕

(三)思ひしを―思ひしかど―思ひしかども

(四)この一二の

(七)にや―にやは

(一〇)まよひて―まどひて

り。此處にも斯くてのみやは侍らむ、いかで見むと思ひしを、然宣ふと聞きしか

ば〔二〕五の宮、「この御子を賜べ」忠康「それは譲り聞えむ」などて、五宮「この文を疾

くく」と宣へば、二の宮の御もとに御文かき給ふ。

忠康夜の問いかど。昨夜御送もえせずなりにしをなむ。平かにや。覺束なくな

む。

とて、

忠康これは、いと哀に宣へば、いとほしさに奉るなり。

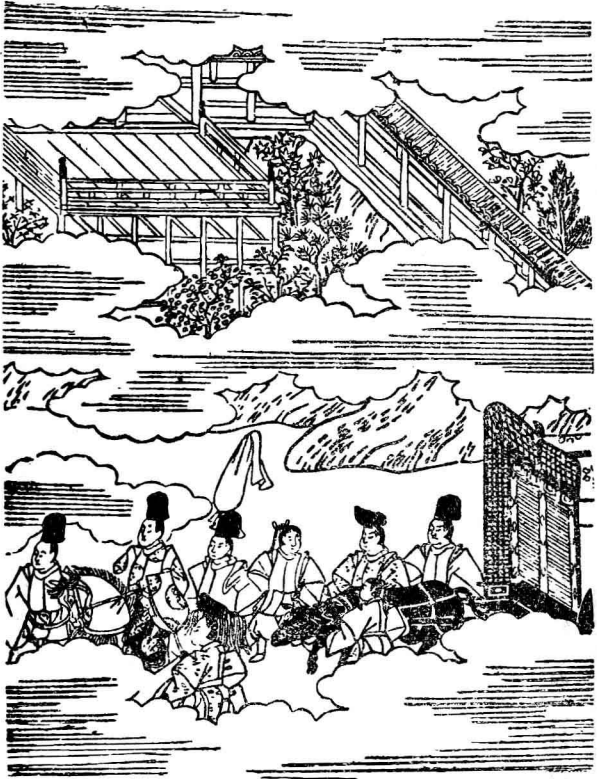
とかき給へり。見給へば五の御子の御文には、

五宮よべは御供にと思ひしを、あさましく、上の許させ給はずなりにしかば、中

空になむ。

かへり行く鴈のさとへと思ひしを雲にまよひてひとり音ぞなく

今そこに参りこむ。別いても近き衛どもこそいと恐ろしけれ。



〔語釋〕

(一)仲恩

(二)女一宮の安座

(三)思こそ法師

(四)大殿の術文歌、一本

〔大段に〕

〔女一宮〕安座。人々の別業。仲恩の悲痛。正頼の同情。男子を生む。女二宮の乳母が産後の感を受けりて女一宮の御座の座ぎに殺れて女二宮を産ませんとせし時。

〔考異〕

(一)君には一君に

(四)御産屋を一御産屋のまま

と聞え給へり。二の宮、見給ひて、女二「あなうたてや」と宣ふ。女御の君、見給ひて、仁豊「けに然もし給ひてまし。あな煩はしや」など宣ふ。宰相中將、藏人の少將など、今は氣色にも出ださで、女御の君には見え奉り給はで、まうで語りひ給ひつと、よろづの事志ふかう仕うまつり給ふ。

かくて大將殿は、宮の平かにおはしますべき事を、神佛に申させ、所々に修法な

どせさせ給ひ、御産屋をありしよりも清らにして待ち給ふに、十月といふ上の十

日過ぎぬ。人々心もとながり給ふに、中の十日も過ぐれば、萬のかしこしといはる

る僧都、僧正、申し集めて、不斷の御修法七八壇させ給ふ。眞言院の律師して、

孔雀經の御修行はせなどして、思しさわぐに、廿三日の晝つ方より惱みはじめ

給ひて、その夜一夜なやみ給ふ。いとほしがり騒ぎて、大宮、かんのおとどわた

り給ひて、明る日一日惱みくらし給へば、民部卿の北の方、大殿の、子産み給ひて

いくばくもなければ、あえ物にとて聞え給ひければ、わたり給ひぬ。宮の内より

〔語釋〕

(二) 女二宮を

(三) 御氣がかりて

(五) 女一宮をいふ

(七) 后宮の機嫌を損ねまじとて

(一〇) 女一宮は女二宮が朱雀院を下りし時の騒ぎを聞き居る故

〔考異〕

(一) 壺坂よるづの―壺坂まてよるづの

(四) 腹立ち―腹立ちて

(六) 死なくむと手を打ちて―しくなむと手うちて

(八) 人々さわぎ―人々多くさわぎ

(九) この折に盗み出でむ―この折には盗み出してむ

はじめて、左右の大殿、朱雀院よりも修經の使、乗り連れて、行きちがひつゝ、初

瀬、壺坂、よろづの所々にまうで、左右のおとど、御子たちも皆おはしましぬ。

よろづの人、皆簀子に居並み給へり。

かよる折に、人々騒ぎてしづ心あらじと思ひて、例の君たちは、乳母を語りひて、萬

のたから物を取らせて、「日だに暮れば盗ませよ。入れよ」とて暮るよを待ち給ふ。

朱雀院には、帝やすくもおはしまさず出で入り思ほし歎きて、おはしまさむとす

れば、后の宮腹立ちのよしり給ひて、いみじき事をし給ひて、后宮、この盗人死な

なむ」と手を打ちて宣へば、御心をやぶらじ、とてえおはしまさず。

五の宮、「彼處の人々さわぎたらむ。この折に盗み出でむ」とて日の暮るよをまち

給ふをも知らず、女御の君よりはじめて、宮にかより奉り給ひて心まどひ給ふに、

二の宮は、何心なくて西の方に人少にておはす。一の宮、まかで給ひし夜のこと

をきよ給ひにしかば、さるいみじき御心にも、女二の宮に「おはして我を見給

〔語釋〕

(四)女一宮が仲思に止められて朱雀院へ行かざりしを

〔考異〕  
(一)恥ぢ聞え給ひて一こ  
えて

(二)給ひて一給ひつ

(三)持ち給へる一も給へる

へよ」と聞えよ」と宣へば、然聞ゆ。宮あまたの御方々を恥ぢ聞え給ひて、まどひて泣くく入り給へり。女「此方寄り給へ。わが許なしりぞき給ひそ」とてすゑ奉り給へるに、心知りたる人々は、いみじく泣く。その夜、いとおそろしく病みあかし給ひて、その日の晝つかたより、をさく物も宣はず、たどなへになへ臥し給ひぬ。女御の君聲も惜み給はず、ふしまろび泣き給ふ。大宮、「あなかまや。かく宣へば、いとど湯水も参らずまどひ給へば、我も死なむと泣きこがれ給ふめり。あまた持ち給へる族にだに、斯く宣はするを、まして唯一人持ち給へる父母、如何聞き給ふらむ。誰もかよる目をこそは見しかど、今まではあらずやは」と聞え給へば、仁壽數多おはすれど、この宮をば、小くより、上の限なくかなしきものにし給ひて、「寶持ちたる心地こそすれ」と宣ひつよ、「年頃見ぬこと」とおもほし嘆きて、迎へ奉り給ひしにも、参り給はざりしを、いとくち惜しと思ほしたりしものを、今一度見せ奉らずなりぬるにやあらむと思へば、いみじう悲

(語釋)  
(二)朱雀が

(考異)  
(一)こそは己を人とも—  
こそ己をも人にも

(三)聞きつるは—はしナ  
シ

(四)侍るとし侍るを

しうなむ。此の宮により奉りてこそは己を人とも思したれ。片時も、見奉らで  
は如何はあらむ」と泣きまどひ給ふ。(二)朱雀院より御使、「只今も、いみじう聞きつ  
るに、如何なる事にかあらむ。定かに宣へ。いとくち惜しく、年頃いとおほつ  
なく思ひつるを、斯くいふかひなかなる事。只今ものせむとするを、男ども一人  
もなく、皆そこに物しにければなむ。「心のうちに、己にあひ見むと念じ給へ。こ  
こにも限りなく願ひ侍る」と聞え給へ」とあり。大宮、見給ひて、大宮「斯く  
なむ」と申し給へば、女「ねたく、召しよ折参りなむとせしものを」と息の下に宣  
ふ。大宮、御返、

大宮 畏まりて承りぬ。おほせごと賜へる人は、この晝つかたより、物も宣はず。  
いと頼もしけなくなむ。かくても、平かにあるものとは思ふ給へながら、心  
細くなむ。かくなむと物し侍りつれば、「参らずなりにける事」となむ聞え給  
ふ。

とて奉り給ふ。

大將殿、衣も脱ぎあへ給はず、直衣などのうへに、水を浴みつよ、まどひ給へば、

人々脱ぎかへさせつ。庭に出でて、大願を立てて申し給ふ、仲忠「この人を免れ給

ふまじくば、おのれを殺し給へ。片時おくらし給ふな」と伏しまろび泣く。箕子

に、上達部、御子たちおはす。ありとある人は、立ち並みてぬかづく。朱雀院の

御使は降る雨の脚のごと、参りては立ち並みてあり。萬のところくの御使あり。

左右のおとど、下りておはして、「などが、かくも見え給はぬものを、心弱くは見え

給ふ。よろづの事、心をしづめてこそは」とて集まりのほりて、父おとど、兼雅女

にもまたも逢ひぬるものにこそあれ。親こそ、え逢はざんなれ。よしや、兼雅を

ば然も思ふらむ。かたのやうなる女子もあり、女親をば如何にせよと思ふぞ。昔

忘れにたるか」と宣へば、仲忠「女親にはた、あるに随ひて仕うまつり侍りにき。

殿にまだえ仕うまつらぬ。仲忠が代には犬を願みさせ給へ。女子なれど、たどには

(六) 女にはまたも兼雅は再び得べし親は再び得べからずの意なるべし

(七) 犬宮

(八) 俊隆女

(考異)

(一) 衣も脱ぎあへ—衣は脱ぎもあへ

(二) かくも—しもナレ

(三) 弱くは—はナレ

(四) こもは—はナレ

(五) 集まり—集まりて

(九) 昔—昔は



(語釋)

(二)官あこ君誕生の時

(三)妻の

(五)私があて宮を許さぬ  
とて君に怒られたり

(六)産婦の

(考異)

(一)おくれじとーおくれ  
じとすと

(四)うちーナレ

あらじと見給へるものなり。いとよく仕うまつりなむ。此の君徒らになり給は

ば、やがて淵河にも落ちいりて死に侍りなむ。更におくれじ」と聲も惜まず泣け

ば、かんのおとど、俊隆女「目もこそ二つあれ。一所を、親君とたのみ奉るわが子

にて、などか斯くは宣ふ。我が子の御代に、我こそ死なめ」と臥しまろび給ふ。

左のおとど、正頼男は、必すかよる目をぞ見る。左衛門佐の折になむ、かよる目

見侍りし。人のかなしう覺え侍りしよりも、嵯峨院の思召しけむことを思ひ侍り

しなむ、いと辛かりし。これも、院のかく思しさわぐらむを聞き給ふらむ所、苦し

うおほえ侍らむ」大將、仲島「それまでも覺え侍らず。かの御身のいみじきをのみ

なむ。御方々物し給ふとて、あたりへだに寄せられねば、御面をだにえ見奉らぬ

こと」と宣ふ。左のおとど、うち笑ひ給ひて、正頼「かよりける御中を、はじめは心

ゆかず思ほして、勘當せられしはや」と宣へば、人々わらふ。正頼「物な思しそ。

正頼生け奉らむ。人の勞れにたるならむ。かやうの事は、人勞れぬれば、斯うも

(語釋)

(二) 正頼は湯兼雅は食物

(三) 仲忠を

(四) 仲忠

(六) 仲忠が女一を

(考異)

(一) 誰がのも〜たがのをも〜たがをも

(五) 隔てたり〜たてたり

あり。おのれ、二十餘人の子どもの親なり。こよらの御子たちは、誰がのもく、居立ちてなむ生ませ奉りし。まづ、湯まるれ」とて、おとどは湯、父おとどは物とりて、すかせ給へどえすかせ給はず。辛うじてこしらへて、参りて、正頼いざさせ給へ」とて率て入りて、正頼人々しばし入り給へ。この主えみ奉らず、と侘びまどひ給ふ。入れ奉らむ」女御の君、仁賢何か。くちをしうなり給ひにたるものを、今更に」と宣へど、人は出で給ひぬ。二の宮は添ひておはするに、ちひさき几帳隔てたり。女御の君、仁賢おのれは、物の恥も知らず、さきにいとよう見給ひてしものを」と宣へば、入りて見給ふに、いと御腹たかくて、息つき臥し給へり。大將、仲忠「わが君は、如何に侍れとてか、かくは臥し給へる」とてかき起して、湯まるり給ふを、えまるらねば、仲忠「ともかくもなり給ふとも、仲忠が志と、御湯聞しめせ」と泣く〜聞え給へば、一啜まるる。お物一口くよめ奉り給へば、すき給ひつ。よろこびて、脇息に尻かけて、かき抱きあけ給へば、心

(二)

(三)

(三)

(四)

(五)

(六)

(語義)

(一) 赤兒の泣聲の形容

(三) 仲忠をいふ

(四) 生兒は男か女か

(五) 男兒を祝ひて翁といふなるべし

(考異)

二(一)くくと泣く一う  
まれ給ひぬいかにかくな  
ど

知らひたる人抱きつきて侍る。おとど、弓走り引きて、うち聲づくり給ふ。大徳  
たち、近うさふらへど、加持高うもせさせ給はず。仲忠「弱き人は、それにまどひ  
給ふものぞ」とて密に讀ませ給ふ。眞言院の律師一人、いち早く讀む。いと尊し。  
おとど、正頼「かよる折には、人多くなさふらひそ。騒がし」とて、御湯度々まる  
りて、弦打しつよ、聲づくり居給へるに、寅の時ばかりに、いかくくと泣く。お  
どろきて、女御探り給へば、後のもの平かなり。臥せ奉りて、大將やがて添ひ臥  
し給ひぬ。ないしのすけ、「仕うまつるやうあり。あやし」と聞ゆれば、仲忠「なほ  
さて仕うまつり給へ」とて起き給はず。笑ひて、物など著せかへ奉りて、「いとあ  
やし。なほ起きさせ給へ」と集まりて聞ゆれば左のおとど、正頼「よかんめり。な  
ほ休ませ奉れ。いみじく迷ひ給へる人なめり。まづ湯まるれ。そもく何ぞ」  
と問ひ給へばすけ、「おきな」といと心よけに、ないしのすけ申す。仲忠「あなむく  
つけ。はや追ひ遣れ。いと恐ろしきものなり」と宣へばかんのおとど、俊隆女「さら

(語釋)  
 (三)氣をもひ給へる

(考異)  
 (一)目見—目を見—目を見せ  
 (二)給へど—給へども  
 (四)給ひつれど—給へれど

(五)他事なく—ことなく

ば、賜はりて率てまかりなむ」と宣ふ。宮、女「何か。しばし。今見む」と宣ふ。大將、仲思「いみじき目見給へるものを、なにか見給ふべき」と聞え給へど、女「何か憎かるべき」とてゆるし給はず。おほん臍緒切りて、湯殿まゐる。講師文よむ。左のおとど、お物湯につけて、まづ大將の主にまゐらす。正頼「いみじういられ給へる、理や。よくもあらで數多侍るが、一人かけにたるだに、いかと思ふ。御後見しに参りつるぞ」とて参り給ふ。かく、いみじう惱み給ひつれど、産み給ひては、ことなる事もなし。たゞ他事なく、御身すくみてぞおはする。朱雀院に御使参りて、くはしく奏す。限なく悦び給ひて、よろづの物多く奉り給ふ。左のおとど、正頼「いたく煩ひ給ひつ」とて、例の御手づから君だちひき率給ひつよ、物調じて奉り給ふ。

例の御産養、所々より有り。御産屋、いと面白ういかめしけれど、大將入り臥し給へれば、興ある事もなし。女御殿もえ入り給はず。かんのおとどのみ、夜晝

(附釋)

(一)女一宮に

(二)女一宮が

(四)「おきき」は此處見を  
し

(五)俊隆女が

(考異)

(三)此處のはなをくし  
かゝる—こたのいなをし  
かな

仕うまつり給ふ。御たち、「犬宮の御時おもしろかりしを、此度は醒めたりや」といふ。

かくて七日過ぎぬれば、かんのおとど、宮に聞え給ふ。俊隆「すこしさわだち給は

ば、院に参り給ふべかなり。御方、とく参り給ひなむ。此度のはなをくしかる。

おきなるてまかりて、徒然とさうくしくて侍るに、もてかしづきぐさにもし奉

らむ。ゆかしく思さむ時は、るて奉りて御覽せさせむ」ときこえ給へば大將も、

仲思「いとよき事なり。憎くとも、つねに参りて見侍りなむ。御覽せむと思さむ程

には、迎へて見せ奉らむ」と宣へば宮、女二「いさや、かく恐ろしきことなれば、

またあるべくもあらぬを、吾兒をこそは」仲思「犬がもてあそびにもとてぞや」

女二「然らば何かは」と聞え給へば、乳母湯まるる。ないしのすけひき奉てまかで

給ひぬ。

かくて、大宮もおとどもわたり給ひて、萬の物調じて奉り給ふ。大將、仲思「い

(語釋)

(二) 嵯峨院へ参りて参りがひある程の器量なりや否や

(六) 此儘ても

(考異)

(一) 給ひつれば一給へれば

(三) 給ひ一ナシ

(四) むかひ居一居ナシ

(五) 給へれど一給ひつれど

(七) 人に一にナシ

(八) 忘れ聞えむ一忘れむ

みじう煩<sup>わづら</sup>ひ給<sup>たま</sup>ひつれば、御<sup>ご</sup>髪<sup>かみ</sup>や落<sup>お</sup>ちむと思<sup>おも</sup>ふこそいとゆよしけれ」宮<sup>みや</sup>、女<sup>に</sup>「さるは、少<sup>すこ</sup>し人心<sup>じんしん</sup>地<sup>ち</sup>もせば院<sup>いん</sup>に参<sup>ま</sup>らむと思<sup>おも</sup>ふものを、かくて歌<sup>うた</sup>みぬるにやあらむ」と思<sup>おも</sup>ひしかば、いと戀<sup>この</sup>しく覺<sup>おぼ</sup>え給<sup>たま</sup>ひしものを」仲<sup>なつ</sup>忠<sup>ちゆう</sup>「それも、見<sup>み</sup>所<sup>ところ</sup>ありて、人<sup>ひと</sup>の樣<sup>やう</sup>に物<sup>もの</sup>し給<sup>たま</sup>ひしかば、それを思<sup>おも</sup>はしてゆかしがり聞<sup>き</sup>え給<sup>たま</sup>ふにこそあらめ。今<sup>いま</sup>は效<sup>かひ</sup>なからむや、見<sup>み</sup>え奉<sup>たてまつ</sup>り給<sup>たま</sup>ひぬべしや、見<sup>み</sup>奉<sup>たてまつ</sup>らむ。起<sup>お</sup>き給<sup>たま</sup>へ」と聞<sup>き</sup>え給<sup>たま</sup>へば、女<sup>に</sup>「さらば見<sup>み</sup>よ」とておき給<sup>たま</sup>へり。大<sup>たい</sup>將<sup>しやう</sup>うち笑<sup>わら</sup>ひて試<sup>こころ</sup>みに、仲<sup>なつ</sup>忠<sup>ちゆう</sup>「むかひ居<sup>ゐ</sup>給<sup>たま</sup>へるこそつれなけれ」とて御<sup>ご</sup>髪<sup>かみ</sup>をかき撫<sup>な</sup>でて見<sup>み</sup>給<sup>たま</sup>へば、落<sup>お</sup>ちけもなくめでたし。かくてすこし瘦<sup>や</sup>せ青<sup>あを</sup>み給<sup>たま</sup>へれど、いと清<sup>きよ</sup>らなり。仲<sup>なつ</sup>忠<sup>ちゆう</sup>「かくながらも、憎<sup>にく</sup>けには見<sup>み</sup>奉<sup>たてまつ</sup>り給<sup>たま</sup>はねども、今<sup>いま</sup>すこし人<sup>ひと</sup>となりてこそは。しばし念<sup>ねん</sup>じ給<sup>たま</sup>へ。衣<sup>ころも</sup>更<sup>がへ</sup>の程<sup>ほど</sup>にをまるらせ奉<sup>たてまつ</sup>らむ。吾<sup>わ</sup>が君<sup>きみ</sup>、かくて見<sup>み</sup>奉<sup>たてまつ</sup>るこそ、徒<sup>いたづ</sup>ら人<sup>びと</sup>に見<sup>み</sup>奉<sup>たてまつ</sup>りたる心地<sup>こころち</sup>もすれ。死<sup>し</sup>にて臥<sup>ふ</sup>し給<sup>たま</sup>へりし樣<sup>さま</sup>よ。いづれの世<sup>よ</sup>に、左<sup>ひだり</sup>の大<sup>おほ</sup>殿<sup>どの</sup>の御<sup>ご</sup>心<sup>こころ</sup>を忘<sup>わす</sup>れ聞<sup>き</sup>えむ」宮<sup>みや</sup>、女<sup>に</sup>「物<sup>もの</sup>も覺<sup>おぼ</sup>えざりしに、律<sup>りつ</sup>師<sup>し</sup>の加<sup>か</sup>持<sup>ぢ</sup>せしこそ、とほく聞<sup>き</sup>えて、助<sup>たす</sup>かる心<sup>こころ</sup>地<sup>ち</sup>せしか。いかでこの悦<sup>よろこび</sup>言<sup>い</sup>はむ」

〔語釋〕

(一) 祓澄に女二宮を

(四) 祓後乳母が

〔考異〕

(一) 乳母は「は」ナレ

(二) けるーけるが

(五) さいなみてーおひ出  
てて

(六) 呼びーナレ

大將、仲忠「今よく物し侍らむ。いとみじき人なり」など宣ふ程に、左近の乳母といふ、騒がしけなる氣色にて、出で来て申すやう、左近いと恐ろしき事をこそ聞き侍りつれ。二の宮の越後の乳母は、宰相中將に盜ませ奉らむとたばかりて、多くの物賜はりにける。大なる瑠璃の壺に、黄金一壺入れて、沈の衣箱に、きぬ綾入れてこそ賜はりにけれ。かゝる事知りたる下衆を、はかなき事にてうちさいなみてければ、腹立ちて、言ひのよしりければ、皆人聞き侍りつ。前々もおほくの物得てけり」と聞ゆ。宮、女「然ればこそ。それを思ひて、一夜も呼び入れ奉りしぞかし。あなかまや。聞きにくし」大將、仲忠「何事ぞや」と宣へば宮、女「あらず」と宣ふ。大將、仲忠「いとよく知りて侍る事ぞや。五の宮も、狩衣すがたにて、細殿に立ち給へりけり。さるさわぎに、少將入りなましかば、如何ならまし。心すとも、さるべき心か」と宣ふ。乳母、左近「左近等こそ然るいみじき物も賜はらず、恐ろしきはかりごととも仕うまつらで歎みぬれ」大將、仲忠「やぶれ子持に

おはすとも、今もさやうにたばかりよかし。否とも言はじや御伯父どもに一など宜ふ。

**畫詞** こよは御産屋のところ。

嵯峨院の花の宴。今上朱雀院以下参會。詩歌。仲忠齋師をつとむ。嵯峨大后今上の女四宮に厚からざるを怨む。

〔語釋〕

〔三〕實忠

〔考異〕

〔一〕給へれば、給ひつれば

〔二〕思して―思召し

かくて、年いとおそき年にて、三月かみの十日ばかり、花盛なり。嵯峨院、花の宴きこしめさむとて、造りしつらはせ給ふ。よろづの財物をつくして、御前の物どもまうけ給ふ。多くのまうけ物せさせ給へば、源中納言は院の家司なれば多くのかづけ物調じ給ひて、奉り給ふ。

かくて、十日なむ、その日なりける。かねて、朱雀院に嵯峨花御覽じにわたらせ給へ」と聞え給へれば、参り給ふを、内裏の帝、聞召して、朱雀院に参らむと思ふを、同じくばその日嵯峨院に参らむ」と思して、御供にとて、度々中納言を召すに、参り給はむともなければ、明日になりて、藏人御使にて、今与嵯峨院に参るべきを、院の御供に、民部卿これかれ仕うまつるべければ、御供に人さふらふ



〔語釋〕

(一) 實忠に勤むる也

(二) 御供に参りたりとも  
あて宮が段に對して薄情  
なりとは思はるまじ

(七) 仲思

(八) かくて一衍文歟

〔考異〕

(一) 里にはた久しう―里  
には久しう―里にはさい  
しやう

(四) とぞ―とや

(五) 思ひしも侍らねど  
―思ふにあちねど

(六) 帝には―帝ぞ

(九) などかかと宣へば―  
などせめ給へば

(一〇) 見棄てて参りて―  
見棄て参りては―見す  
見すずて参りて

まじきを、里にはた久しう物せらるなるを、仕うまつられなむ。世にあらむ人の明

日見ざらむや。ひがみて」など仰せられたり。民部卿、實正「かく度々仰せらるよ

を、なほ参り給へ。かの女御、世に、志なくてあるき給ふとも聞き給はじ。申

し給ふ事を聞き給ふとぞ思さむ」中納言、實忠「何か、それをば思ひしもし侍らね

ど、久しく交らひもし侍らぬに、そこばくの帝の御前には、いかでかさふらはむ。

そが中に、嵯峨院は、いかに目癖つい給へる帝には」民部卿、實正「東人は、宮の

うちには、來ぬものか。然思ひてこそ参るべかなれ」とて、さふらふべき由奏せ

させ給ふ。民部卿よろこびて、我仕うまつらむとて調ぜられたる直衣の御衣ども

を奉り給ひて、我はあるにしたがひて仕うまつり給はむとす。

大將も、暇文出だして参り給はぬを、行幸あるべしとて召せば、え参るまじき由

を奏させ給へば、かくて宮、女「猶参られよかし。などかか」と宣へば、仲思「か

くておはするを見棄てて参りて、しづ心もなからむに、文作り、遊せよと責められ

〔語釋〕

- (一)「もしぢうやくにやさしあて給はむ歎ぢうやくには「重役」なるべし
- (二)嵯峨院の御勤にて
- (三)さて責められて琴をひきしが故にこそ斯く君と夫婦にもなりたれ
- (四)朱雀院に「のこ」行交なるべし
- (六)迫て省試といふ試験を経て進士になるべき者
- (七)「ちかすみ」は傍聴の擧入歟
- (九)誤あらんか
- 〔考異〕
- (五)「人一人才人
- (八)給ふ一給へと
- (一〇)有りしもせじ一有りしもせぬ

ば、心空にて、（二）過をしてや驕がれむ。そのうちに、嵯峨院の見付け給はど、も

しぢうやくにさしあて給ふ。御前にて騒がしき目を見せ給ひしも、（三）かの御そどの

かしにて、上は責め給ひしぞかし。別いても、然てぞかくてもさふらふぞかし」

など宣ひつ。その日になりて、事缺けぬべし。右のおとどは院の御供に仕うまつ

り給ふべければ、大將さふらひ給はではあるまじ」と騒げば、むつかりて参り給

ひぬ。

辰の、一點ばかりに、朱雀院に、上達部、御子たちひき率て参り給ひぬ。辰の二

點ばかりに、内裏の帝行幸し給へり。此院喜びかしこまり給ふ。花の蔭に舞

人ども、樂所の者ども、皆さふらふ。文人は、博士よりはじめて、進士より出で

たる人三十人、擬生も召したり。しばし有りて右大將、源中納言、新中納言、宰相

の中將、右大辨、良中將、藏人の少將、ちかすみなどは文の人に召さる。嵯峨院題

給はせて探韻せさせ給ふ。仰せらるゝ（七）嵯峨「このえうにも有りしもせじ。公卿た（九）

（八）

（九）

（一〇）



(語釋)

(一)誤あるべし「はう」  
本「かう」又「け」

(三)末考

(考異)  
(二)心勞し—心をちらうし

ちに役仕うまつらせむ。右大辨季英の朝臣に、はう仕うまつらせむ。右大將の朝臣には、講師仕うまつらせむ」朱雀院、「いと興あり。朝臣は、文講師する事をなむ申し侍り」内裏の帝、「御前の講ぞ、いとなく仕うまつりき。よき今日の講師に侍り」と皆ゆるし給へば大將、然ればよ、何事にあて給はむとは思ひつる、いかで仕うまつらむとすらむ、と思ほす。

かくてみな探韻す。大將、文を賜はりに參るを、嵯峨院御覽じて、嵯峨「この朝臣見る時こそ、齡延ばはる心地すれ。いと警策になり勝りにけり、この國の人には餘りにたる人かな」朱雀院、「この頃は憔悴しにたるにこそ侍るめれ。先つ頃、ほととしき病者をなむ持て侍りて、かしく心勞し侍るなり」嵯峨院、「然聞き侍りき。三の内親王のもとに、とぶらひに物して侍りしかば、頼もしけなくものして侍りしを、ことなる事もなく物せられけるを喜び侍り」朱雀院、「いみじう侍りけるを、辛うじてちうはいして侍り」嵯峨院、「今日此の朝臣に、何でふわざし出ださ

(三)

〔考異〕  
（一）文題ども賜ふに高くも一文題どものたまふにかたくも

せて、おもき祿賜はせむ」院うち笑はせ給ひて、朱雀「今は、賜はすべき祿もなし」とて笑はせ給へど、いさよかつよみたる氣色もなく、いと目安くて入りぬ。つぎに源中納言目安くて入りぬ。新中納言出で來たるを、帝たち、「山籠は、いかで出で來たるにかあらむ。今日めづらしき事は、先づこれなりけり」と驚き給ふ。内裏の帝、「辛うじて召し出でたるなり」と宣へば朱雀院、「あたり、さてもありぬべき公人の、怪しうてもありつるかな。此の朝臣の、常に嘆きしものを」など宣ふ。

午の二點ばかりに、擬生の男どもに、文題ども賜ふに、高くもあらず、五位、六位なり。あらはなる所にさふらひて、近衛づかさの官人ども、左右にさふらひ、そなたに居たる、近く参りて、仕うまつらせ給ふ。探韻賜はる人の目やすきをば譽め給ふ。見苦しきをばわらはせ給へば、憶しつと、天下の失禮を仕うまつりあり。上たちも、御文あそばす。御子たち、上達部、御心にまかせて作り給ふもあ

(考異)  
 (一)御子たち―御子たち  
 は

(二)笛―よみ

(三)ゆるちか吹く―ゆるちか吹く  
 たかに吹く―ゆるちか吹く

り。朱雀院の御子たち、后腹の二の御子は、御病して、法師になり給ひて、西山におはす。大殿腹の四人、后腹の五人さふらひ給ふ。七の御子、中の君のあね、女御の御腹、それ参り給はず。九の御子は、更衣腹、わらはにて参り給はず。嵯峨院の御子は、三人ながら、内裏の御ともに仕うまつり給へり。御前ごとに皆まゐれり。文人樂所の者どもなどに物賜ふ。上たち御琴あそばし、上達部御子たち、笛仕うまつり給ふ。樂所には、樂仕うまつりあはせて、いと面白し。

申の一點ばかりに、擬生の文題とらせ給はむとすれば、あるは清く書きたるもあり、あるは半書きたるもあり。とかくし惑ひて、手をひろけて奉り参るに、途に倒るよもあり。かく惑ふを今日の物見にはしたり。花さそふ風ゆるらかに吹く夕暮に、花雪のごとく降れるに、大將文奉るに、胡篋負ひてかうぶりに花雪のごとく散りて、仲頼「右の近き衛の府のかみ、藤原の仲忠」と申し給ふ聲、いと高ういかめし。嵯峨院、「よき講師の試の聲なりや」とて笑はせ給へど、つれなくて

(語釋)  
(一)誤あるべし

(三)女一宮の御産の時の事をいふ

(考異)

(二)つらむーつらむ

(四)花をー花に

(五)雪と見るかなー雪ぞよりける

(六)帝ー御歌

(七)けむーける

入りぬ。文みな奉り侍れば、文題とらせ給ひて讀ませ給ふ。大將まるらせ給ひて讀み申し給へば、帝たちよりはじめて、皆聞き給ふ。いさよか怖ぢつよむ所なし。朱雀院、かよるものに心強き、物に怖なき人、いかで前後知らず惑ひけむ。なほ吾が御子をおろかには思はざりけり、と思す。やんごとなき文どもをば誦せさせ給ふ。大將の文を、みな帝たち誦じ給ふ。土器まるる。新中納言いみじう褒めらる。右大辨土器まるる。

かくて、御遊はじまりて、朱雀院、「老せる春を弄ぶ」と歌の題にかよせ給ひて嵯峨院に奉り給へば、御土器とりて内裏の帝に奉り給ふとて、

嵯峨春くればかみさへ白くなる花をことしは君も雪と見るかな  
(四)

内裏の帝  
(六)

今上積りけむ花をもなどか見ざりけむ春とはわれも言はれつる世に  
(七)

朱雀院

しらくとも千代しつもらば花を見にいづれの春かつれて來ざらむ

式部卿の宮、

〔語釋〕

〔三〕朱雀院第四の皇子

つもり行く花もなけきに木隠れて空にしられぬ下枝なりけり

など申し給へば五の宮「すどろに仕うまつりそしたるや」とて御土器まるり給ふ。

土器くだりて、中務の宮、

かくばかり枝は盛に匂ひつよいつかは春のふかく積りし

兵部卿親王、

いにしへは春の色をや君はみなこひてををしむ花はちらめや

彈正宮、

ちる花ぞかしらの雪と見えわたる花こそいたく老いにけらしな

師の親王、

うちむれて花をしをりてかざさずば何にか春の老も知らまし

〔考異〕

〔一〕ナトろに―ナクわい

〔二〕春の―雪の

〔三〕



(詔書)

(一)我ら「我がみ敵

(二)朱雀院第六の皇子歟

五の宮、

風をいたみ我らにふれる花をさへかしらの雪と見るな宮人

常陸の太守の親王、

さくら花咲かざらませば野べに出でて春の齢を何に知らまし

大政大臣、

忠雅櫻花いつかあくべき野邊に出でてこころづくに君がをしむに

左の大殿、

正頼もとのひに花結べりと見ゆるまで見れどもかよる春の花かな

右の大殿、

兼雅散りぬとて手ごとに折れば櫻花髪さへ白くなりまさるかな

右大將、

仲思さくら花幾世をふれば木隠れてみる人ごとに老を見すらむ

民部卿みんぶがきやう

實正おおい老おいもみな花はなをり遊あそぶ此このくれは春はるさくらやとしもにわくらむ

藤大納言とうだいなごん

忠俊ただ立ちよれば老おいをのみます櫻花さくらなを折りつよかさず君きみは幾いくよ世よぞ

權中納言ごんちゆうなごん

忠澄ただちる花はなに頭かしらのおほく白しろくるは世よ々々をへだつるやどにさけ春はる

源中納言げんちゆうなごん

涼すず花はなの色いろはさかりに見みえて年としごとに春はるのいくたび老おいとしつらむ

左衛門の督さゑもんのかむ

清雅おほ老おいいぬとて春はるをばをしむ頃ころしもぞよろづの花はなは盛さかなりける

新中納言しんちゆうなごん

實思おほ君きみむれて花はなみるけふと思おもはずばやまの朽木くちきも春はるを知らめや

〔語釋〕  
(一) 誤あるべし

(二) 「さけ春」は「さけばか」の誤なるべし、「本」さけやと」

(三) 「右衛門督」なるべし

(語釋)

(一) 仲頼をいふ歎

(二) 仲澄をいふ歎

(四) 「など」としてなるべし

(七) 忠こそをいふ

(考辨)

(三) かなしきーかなしき

(五) 源中納言ー源一ナシ

(六) かな人ーみなう

とあるを、朱雀院すざくゑんといたく誦ずんぜさせ給たまひて、土器かはらけまる參まゐらせ給たまひて宣のたまふ。

朱雀すざくわが前まへに木こ高たかくなりしもと櫻山ざくらやまべにえだぞ朽くつと嘆なげきし

内裏うちの帝みかど

今上けみかみ朽くちぬとてなけきし枝えだは春はるを知るしありし櫻ざくらの見みえぬ今日けふかな

嵯峨院さかゑゐん

もろともにおひし櫻ざくらのまづ枯かれてのこれる枝えだを見るみがかなしさ

なむとて御土器かはらけたびく度々たびになりぬ。御時ごときよき程ほどにて、御遊あそびさかりて、大將たいしやう源中納言げんちゆうなごんな

どに、箏しやうの琴こと賜たまひて、みな人も物ものの音仕ねつかうまつりあはせて、順ずんの舞まひし、歌うたうたひ猿さる

樂がくせぬはなし。上うへたち、いみじう興けいじあはせ給たまひて朱雀院すざくゑん、「今日けふはいと興けいある

日ひなりや。いぬる年としの秋仲頼あきなかよりが居ゐつる所ところにて、此この族ぢゆうまかりて、人も聞きかぬ所ところに

て、己おのがどち、隠かくしたる手てどもあらはして、警束けいすくに侍はべりけるこそいとなく侍はべり

けれ」嵯峨院さかゑゐん「然さ聞きくや。忠たけまる法師ほうしに陀羅尼たらに讀よませて、かの朝臣あそんの琴きんひきける

(語釋)

(一) 嵯峨太后

(三) 正頼の華大宮

(六) 嵯峨院第四皇女、今上の御妾

(一〇) 後の位

(一一) 承香殿を

(考異)

(二) 久しうもーしもナシ

(四) 屢もーしもナシ

(五) 思ひー思う

(七) 承香殿に侍る人ーあづけ奉り侍りつる人

(八) 思ひー思う

(九) 思ひー思う

曉たど人などのみな集ひにけるをや」と宣ふ。

内裏の帝立ち給ひて、(一) 後の宮に對面し給へり。後の宮、「あなかしこや。久しう

もなりにけるかな。三條に侍る御子の、若菜摘にまうで來たりしまよにや侍らむ」

帝、今上(四) 屢もまうで來べきを、まかりありきも心にまかせ侍らざりければなむ」

宮、后宮今は、かく今日明日になりにて侍れに、聞えさせ置くべき事も、聞えさ

せ置きて、冥路も安くと思ひ給へるを、いとく嬉しく、わたりおはしましたる

事をなむ。此承香殿に侍る人は、思ほえず老の後に出來て侍りしかば、中に

かなしく思ひ給へて、「願みさせ給へ」とて參らせし効なく、人數にも思ほされざ

なれば、恥かしう思ひ給へるを、此の位讓り侍りなとなむ思ひ給へる。便なき

事」と、これかれ聞ゆとも、昔思う給へし志叶ふるとおほして、必ずをせさせ

給へ」帝、久しく思ほし煩ひて、今上まだ物の心も知らず侍りし時、見なれ奉り

にしかは、睦まじく頼もしきものには、彼處をなむ。あやしく人にも似給はず、疎

(一〇)

(一一)

〔語釋〕

(一)考へさせ侍らむに  
なるべし

(二)「たうばり」なるべし、  
封祿

(三)皇后と名のちせしたし

(四)あて官を后にしたりく  
思はるべし

(五)女四宮

(六)女四腹に皇子誕生の  
事

(七)大后から女四宮服を  
立てよとの仰せありては  
一大事と思ひて

(八)東宮が

(九)皇子出生せば東宮に  
立てんと約束せし故

(一〇)天子は空言せずと  
よ語あり

(一一)「こ」衍文なるべし

(一二)今の東宮も此大后  
の曾孫なれば也

〔考異〕  
(二三)申し給ひて―申し  
奏して

疎しくものし給ひしかば、思ほし直すまでとなむ、しばし物聞えざりし。宣はず

る事は、かやうの事は例とはせでなむ物すなるを、考へさせ給ふらむに、然る例

あらば、何かは。然らずば、封賜はりなどをこそは、御位久しく物すべく侍るな

れ宮、后宮封賜はりなどせずとも、この位とこそ言はせまほしく侍れ。其處には、

坊の母をとこそは思すらめ。此の人をば哀と思さましかば、かよる事も侍りける

を、しばし待たせもこそはし給はましか。然もや聞ゆるとて、急ぎし給へるこそ

は「帝、今上かよる事の疾くものし給はましかば、何の疑にかは。年頃さもあ

らで、彼が出でまうで來たりしかば何心もなく、「然あらむをりは然せむ」と宣ひ

てしかば、「空言せず」といふ族にまかりなりにたれば違へじこととなむ。彼も思

ほし棄つべきにもあらぬを」と聞え給へば宮、后宮すべて幸なき者は」とて御

氣色よからねば、立ち給ひて、四の宮の御方に參り給ひて、今上いと痛く酔ひに

けり」とて裝束解きひろけて臥し給ひて、今上いとよく案内申し給ひてさいなま

産禱<sup>(一)</sup>

(一)皇子をなせ早く生み給はざりし

(二)女四腹の皇子を

(四)産の時あて宮は里に下りたれば小き時見ざりしと也

(考異)

(三)あるものかあるにや

せ給ふなめり。萬の事かたみにならひて、哀に睦ましくこそ。あさましよう打ち泣き給ひしかば恐ろしさにこそ聞えざりしか。などかは、かよるわざをも、疾くはし給はざりし」など聞え給へば、女四「あなむつかしや。何でふ然るものをか」上、今上「かよる程のをまだ見ねばぞや。かよる序に、此處のを見で、いつか。なほ見せ給へ」と宣へば、乳母召して、見せ奉り給ふ。まだ五十日にも足り給はず、いとつぶらかに、白く肥え給へり。上、抱き給ひて、今上「あなちひさや。人のはじめは斯くあるものか、我らも然ぞありけむかし。かよるものを大になすこそ、女は恐ろしけれ。(三)宮は、いと大になりけり。はじめはいとあさましや」女四「月ごろ御覽じならひたらむを」今上「それはまかでにき。大になりたり。それをぞ小きと見しか」とて、今上「これをも對面とや言はむ」とてあこめの御衣ぬぎて乳母に賜ふ。かくて上達部殿上人座に著きさふらひて、御輿寄せてぞ「久しくなりぬ」と奏せさせ給ふ、上、今上「あな物憂や。こよに泊りなばや」と宣ふに「亥四刻」と申すに、

(語釋)  
(三)女四宮

(考異)  
(一)よく一ナシ  
(二)ばかり一ナシ  
(四)擬生衆まで一清らに

時なりぬとて騒ぐに、今上しづ心なく言へば。然ば疾くまゐり給へ」とよく聞え  
こしらへ給ひて出で給ふに、后宮より、源中納言の奉り給へりし女の装二十  
くだりばかり、櫻色の細長、あはせのはかまなど、上達部殿上人に賜ふ。院の御方  
よりも、例の公様にてはあらで、御子たち、上達部に、例の女の装束一具、殿上  
人には細長はかま、下藤の文つくりなどには、腰插棒持の綿擬生衆まで賜ふ。大  
將には、講師の祿とて、御馬一つ、御子たちにも御馬一つ、帝たちには、世にか  
しこき御帶、御佩刀など奉り給ふ。

畫詞

こよは嵯峨院の花の宴の所





# 樓の上(上)

## 梗

## 概

● 兼雅、一條西の對に遺題の歌を見て宰相上の行方を尋ねんと志す、俊蔭女之を仲忠に謀る。○ 仲忠石作寺に參詣して宰相上とその子とに邂逅す。○ 仲忠邂逅の趣を父に告げて先づ文を贈らしむ。○ 仲忠宰相上を訪ふ。父に自ら宰相上を迎へんことを勸む。○ 兼雅自ら行きて宰相上を三條に迎ふ。宰相上腹の小君兼雅に懐かずして仲忠を慕ふ。○ 兼雅梅壺を三條に迎ふ。俊蔭女に對する他の妻妾たちの嫉妬。俊蔭女兼雅に愛を他の女に分たんことを勸む。○ 仲忠小君を携へて參内す。東宮小君を携へてあて宮の許に至る。○ 俊蔭女太宰大貳の贈物を人々に分つ。○ 仲忠犬宮に琴を教ふべき心構を女一宮に語る。母を訪ひて同じ事を語る。兼雅來合せて夫婦古を追懐す。○ 犬宮の美しくしき。仲忠の祕藏。○ 仲忠京極の舊邸に犬宮に琴を教ふべき櫻を造る。人々の噂。○ 新築の櫻の結構。○ 仲忠朱雀院及び嵯峨院に參る。嵯峨院俊蔭女の琴を聽きに京極の邸に御幸あるべき事を約す。○ 仲忠櫻上にて琴を教ふべき由を犬宮に告ぐ。○ 涼仲忠を訪ふ。櫻の噂。涼犬宮を謁見す。歸りて妻今宮に犬宮の美しさを語る。○ 仲忠犬宮の修業中は一切人に逢はずまじき由を女一宮に告ぐ。女一宮犬宮に名残を惜む。○ 犬宮の京極に移るべき日の準備。○ 犬宮京極に移る。行列。女三宮の感傷。見物人の評判。○ 到著。饗宴。○ 櫻上の景色。○ 朱雀院より女一宮及び俊蔭女を訪はる。○ 仲忠母及び犬宮と京極に籠居す。兼雅京極を訪ふ。兼雅夫婦の懷舊。

●兼雅一條西の對に遺題の歌を見て宰相上の行方を尋ねんと志す。俊隆女之を仲思に謀る。

〔語釋〕

- (一)兼雅
- (二)兼雅の妾の一人也
- (三)兼雅は「年をまちわびて」とあり
- (四)兼雅は「年をまちわびて」とあり
- (五)三途の川
- (六)多くの妾たちが居られしに
- (七)「さうくしきに」歎
- (八)兼雅がかくく仰せらるる故
- (九)「鮮蝦院の女御也
- (一〇)「とよめて」てしナ

〔考異〕

- (一)まことやーナレ
- (六)をば「ば」ナレ
- (一〇)とよめてー「て」ナレ

まことや、三條の右の大殿の、かの一條殿の對どもに居給へりし御方々、宮、むかへられ給ひて、今は限なめりとて、思ひくになたり給ひにし中に、西の一の對に、源宰相の君、

宰相上ふるさとおほくの年は住みわびぬわたりがには訪はじとやする

と書きつけ給へりしを、殿おはして見つけ給ひて、兼雅心ふかくをかしう、容貌

などもことに難なかりしを、いかでこればかりをば、在處を聞かましかば、尋ね

てしがな」と宣へば、内侍のかみ、俊隆女いとよき事なり。宮のおはしける所に、

あまた然てもものし給ひけるを、女子もなく、さうくしき。處は、廣うおもしろ

う、めでたきに、元のやうにて物し給はど、聞え交してあらむ」とて、右大將の

参り給へるに、俊隆女「こよに宣ふめる事なほ御心とどめてたづね給へ」と聞え給へ

ば、けにながくと思す。

かよる程に、朱雀院の御同胞、承香殿の女御と聞えし御腹の齋宮にておはしつる

(二〇)承香殿の女御と聞えし御腹の齋宮にておはしつる

〔語釋〕

(一)伊勢より京に

(二)誤あるべし、右大臣殿の歟

(三)扱が親族故

(四)齋宮を

(五)誤あるべし

(六)齋宮になりて伊勢に

(七)齋宮に通ひたし

(八)女一宮が不快に思はるべし

(九)誤あるべし

(一〇)宰相上

〔考異〕

(七)せしに又一せしをや

(八)仲忠石作寺に參籠して宰相上とその子とに邂逅す

(八)大將殿げに物せられなば一將殿だにものせられずば一將の侍りしけに物せられなば

が、其の御母女御のかくれ給ひぬれば、のほり給はむとす。右大將殿宣ふやうこの

宮の御母方も、離れ給はねば、はやう、ちかうて時々見奉りしに、御かたち清け

にて、をかしくおはせしが、折々に聞えかはしよに、何かは思し契りしを、俄に

下り給はむとせしに、又かく見つけ奉りて、他事おほえでなむ」大將殿、仲忠「け

に物せられなば、忍びてたまさかにさやうに有りなまし。まだ御年も若うおはす

らむかし」兼雅「何かは。今も然おはせかし。宮いかどおほさむ。忝、けれども、

こよには、大將の年の程見給ふに、今にあらねばこそ」と聞え給へば、仲忠「いさ

や。なほすさめ事なり。今の一條西の對の君は、尋ね侍らむ」と聞え給ふ。

かくて、石作寺の樂師佛現じ給ふとて、多くの人まうで給ふ。大將殿御物忌し給

はむとて、いと忍びて一所、御供に人多くもなくて參り給へり。けにいみじう騒

がしきまで人まうでたり。

曉には、皆出でぬ。この御局のかたはらに留まりたる人、いとあてはかに故々し

(語釋)

(一)仲忍の心

(三)仲忍が此兒を見れば  
兒が目を見合せて

(考異)  
(二)男子の「の」ナレ

き聲して、上に人二人ばかり、下仕なめり、人にいたうも隠れで、几帳のほころびより見えたるも目やすし。大徳の、御堂のうちより來ためれば、乳母なるべし。さやうの大人々々しき聲にて、「此の君の御事よかんべく祈り給へや。親におはする殿に知られ奉り給へと申し給へと、いと心苦しうなむ、おほし歎くを見奉る」など言ふ。逢ふ期あるにやあらむ、哀なる事なりや。親子と見ず知らざらむよ、誰ならむと聞き給ふ程に、八つ九つばかりなる男子の、髪も鬢ばかりにて、かいねりの濃き桂一かさね、櫻の直衣のいたう馴れほころびたるを著て、白う美しけにて、あてに美しけなるが、假粧もなく、たゞ見に立ち出でて、外のかたに立ちたり。よう見給へば、宮の君の顔に似たり。聲はいとあてになまめかしう愛敬づきて幼げに物など言ふ。いと美しけに、み給へば見あはせ給ひて、扇して招き給へば、うち笑みて、ふとおはしたり。内に、いとあてなる聲にて、「かれ呼び給へ。かの君は、何方ぞ。あな見苦し」と言へば、「おはしませく」と言へど

(詔釋)  
(一)仲忠の心

(二)兼雅が

(六)宰相上が

(考異)  
(三)承りにし—承り給ひ  
にし

(四)近く—近う

(五)賜うて—賜うとて

(七)なり—なめり

(八)おもひ—もぼま

も肯かす。大將、膝にする給ひて、仲忠「母君は此處にか」と宣へば、是「おはすめり」仲忠「誰が御子ぞ」見「知らず」仲忠「御父は、誰とか人はきこゆる」見「右の大殿とかや人は言へど、まだ見え給はず。呼ぶなり。まうでなむ」とて立ち給ふ。(二)あやしき事かな、「西の對の君にこそ兒ありしを、たゞ一目見ずて、伯母君なむ、かなしうして取り籠めてし」と宣ひしにやあらむ、あはれにもあべきかな 其にやあらむ、なほ氣色見む、とおほして、硯召し寄せて、

仲忠「わたり川いづれの瀬にか流れしと尋ねわびぬる人を見しかな

おはしまさせ給へや。まめやかには、いかでか承りにしがな。しるべは、いと善うことよに。(三)

とかき給ひて、上に近く使ひ給ふ童して、奉り給ふとて、仲忠「この御返賜うてなむ、わか君を」と聞え給ふ。取り入れさせて見給へば大將の御手なり。いとみじう恥かしう、いかに見給ふらむとおもひ給へど、佛の御驗もあらむと、嬉し

(語釋)

(二) 仲忠の心

(三) 兼雅が

(四) 出家などして居給はずは

(五) 私を

(考異)  
(一) 思うー思ひ

うおほす。白き色紙に、

宰相上いとおほつかなく思う給へらるれど、

わたり川たれか尋ねむき沈み消えてはあわとなりかへるとも

え覺えずぞ侍る。

とかき給へり。思ひあてに、かの見たまひし手よりは、いとなまめかしう、あて

に書きたれど、それなめり、けにまがへる心かな、と思す。たちかへり、

仲忠心憂く、もてはなれては思されじものを。今よりは親などこそ頼み聞え

させむと思う給へらるれ。いとまめやかに、年頃「いかで物せさせ給ふら

む」となけき聞え給ひて、「思の外ならぬ御さまにて物せさせ給はど、御迎も

いかでか」などなむ聞え給ひたる。心細く思ひ給ふに、いと嬉しく見奉る

も、いと頼もしくなむおほえ侍る。殿をば、忝けれど、然る方に思ひきこえ

給ひて、心やすく思さば、とりわきてとなむ、君には語らひ聞えさする。

(五)



(語釋)

(一)宮の君に似たりといへる兒

(二)小君の目より見たる仲忠の姿

(三)宰相上より

(四)仲忠が

(六)兼雅が

(九)小君の身上につきては兼雅は赤てにならぬ故

(考異)

(五)御上―御聲

(七)今は三人にて―常に  
かく頃ちひ侍る人にて―  
常にかまづちひする人にて―  
常にかたらしひする人にて

(八)見苦し―見苦しう

と聞え給へり。小君には、仲忠「まろが弟におはしけれど、子の様に思ひ聞えむ」  
 などいとよう語らひ聞え給ふ。いと思ふやうに、めでたき様にて、かう宣へば、  
 見ならひ給はぬ幼き心にも、いと嬉しくて、小君「まろも思ひ聞えむ」など聞え給  
 ふに、「おはせ」とあれば入り給ひぬ。御乳母など限なく喜ばしう思ふ。日暮れ  
 て、屏風のもとにて、對面し給へり。いとあてに、けはひなども、式部卿の君よ  
 りも心にくく恥かしけに物し給へり。院の女御の御上におほえ給へり。若君の御  
 事も、おいらかに宜ふさま、恥かしけなり。仲忠「今必ず御迎侍りなむ。しかく  
 なむ常に聞え給ふ」と宣へば、宰相「なにか。自らは今は隠ろひたる人にて、侍ら  
 むも見苦し。心苦しう見給へる人は、かの御心は輕もしけなくおほえ給ふを、け  
 に御心留めさせ給はむこそは、たのもしう侍らめ」大將、仲忠「いかど」など聞え  
 給ひて、仲忠「やがて率て奉らむ」と宣へど、宰相「今まづ、然る人など聞え給は  
 むに、けにとおほし出づる事侍らばこそ」と宣ふ。



〔語釋〕

(一) 小君を仲忠が

(二) 小君が

(三) 仲忠が

(四) 宰相上が

(五) 宰相上が

(六) 宰相上が

(七) 宰相上の隠家が

(八) 宰相上が

(九) 宰相上が

(一〇) 宰相上が

〔考異〕

(一) 給ひて一給へど

(二) 來べき一候ふべき

(三) 美しくうつくしげにて

仲忠邂逅の趣を父に告げて先づ文を贈らしむ。

又の日も、呼び奉り給ひて、御菓物などまゐり給ひて、遊をのみし給ふ。大將の詩誦し給へば、聲いとをかしうて、諸共に誦し給へば、仲忠いと美しう。誰か教へ奉りしぞ。小君、母君」と聞え給へば、をかしかりけりと思す。

三日果てぬれば、出で給ひなむとす。仲忠「何處より参り來べき」と聞え給へば、宰相上「言ひ知らぬ山里のやうになりたるはべり。御覽せむにも、いと怪しけになむ侍る」と聞え給ふ。同じ程に出で給ふ。此の君の御供に、ことに人もなし。御迎に参り給へる、然るべき人、睦まじき人を、仲忠「まるれ」とて添へ奉り給ふ。

西の大宮なりけり。一町なれど、いといみじう荒れて、いと幽なり。伯母君も、斯くなむと聞き給ひて、限なく喜び給ひ、人どもに菓物など清けにして出だし給へり。

大將は、やがて殿に参り給ひて、仲忠物忌し侍らむとて、石作寺にこもりて侍りつるに、しか此の人なむ、いと美しうてこそおはしけれ。はや、今日明日にても、

大將は、やがて殿に参り給ひて、仲忠物忌し侍らむとて、石作寺にこもりて侍りつるに、しか此の人なむ、いと美しうてこそおはしけれ。はや、今日明日にても、

大將は、やがて殿に参り給ひて、仲忠物忌し侍らむとて、石作寺にこもりて侍りつるに、しか此の人なむ、いと美しうてこそおはしけれ。はや、今日明日にても、

大將は、やがて殿に参り給ひて、仲忠物忌し侍らむとて、石作寺にこもりて侍りつるに、しか此の人なむ、いと美しうてこそおはしけれ。はや、今日明日にても、

大將は、やがて殿に参り給ひて、仲忠物忌し侍らむとて、石作寺にこもりて侍りつるに、しか此の人なむ、いと美しうてこそおはしけれ。はや、今日明日にても、

大將は、やがて殿に参り給ひて、仲忠物忌し侍らむとて、石作寺にこもりて侍りつるに、しか此の人なむ、いと美しうてこそおはしけれ。はや、今日明日にても、

大將は、やがて殿に参り給ひて、仲忠物忌し侍らむとて、石作寺にこもりて侍りつるに、しか此の人なむ、いと美しうてこそおはしけれ。はや、今日明日にても、

〔語釋〕

(一)宰相上の居處として

(二)「ぐさ」に古本「具者」と註せり

(四)多くの子どもを

(五)仲忠は只一人の子なれど

(六)正頼の子どもを壓倒する位に

(八)今更上い加減な子どもを外に儲くるは異な物ならん、なまよろしくての上いかでなどあるべし

(九)「大將」衍文歟。一本「殿は」

(一〇)その子がさ程よくなくとも

(一一)仲忠の

(一二)宰相上の

(一三)兼雅の

(一四)宰相上の父なるべし

(一五)外に立派な妻を設けたりとも

〔考異〕

(二二)ゆら〜と〜ゆう

(七)彼ををし伏す〜彼に劣らむとす

(二二)給はめ〜給ふべかめれ

むかへ奉らせ給へ。東の一の對の、南かけてこそはよく侍らめ」など聞え給へ

ば、兼雅「いさや、心などの思ふ様によくもあらずば、御爲にも面目なくこそは。

左のおとどの、ぐさのやうにて、ゆらく〜とひき連れてありき給ふに、一人なれ

ど、彼をおし伏すばかりに物し給ふこそ、世中の人も、なか〜辛しと思ひたる

を、なまよろしくてあるべき」と宣へば大將、かんのおとども聞え給ふ。俊隆女「すべ

て御心せばく思ほせばなりけり。たとひ、人の同胞、なま悪くても侍らむからに、

それにつけてや、覺の劣らむ。思ふやうに物したまはずとも、それにつけてこそ、

いとどかの勝れたる様は、見聞え給はめ。いと心憂き御物言なりや。はや迎へ奉

り給へ」と聞え給へば、兼雅「今ははや、ともかくも」と聞え給ふ。大將、仲忠「今

朝の御おくり、人奉りつるに、かの住み給ふなる所は、いみじう荒れて心ほ

そけになむ侍るなる。まづ御文なども、只今は物せさせ給ひてや、よく侍らむ」

殿、氣色いとすが〜し、兼雅「昔、あはれ、源宰相の、ゆく末やんごとなき人

殿、氣色いとすが〜し、兼雅「昔、あはれ、源宰相の、ゆく末やんごとなき人

殿、氣色いとすが〜し、兼雅「昔、あはれ、源宰相の、ゆく末やんごとなき人

〔語釋〕

(一) 誤あるべし

(四) 物の入りたる儘宰相上へ御贈りなされて然るべし

(六) 返箱歌

(七) 小君をいふ

〔考異〕

(一) 見給へ―見奉ち

(三) 心ばへは―「は」ナレ

(五) 三重がさねの御衣また人に賜はむとて―三重がさねにもき給はむとて

おはすとも、なほこれ心苦しう見給へ。さらむ、心ほそく物はかなき様にて散り

侍らむは、いと悲しかるべくなむ。容貌は、世にもいと多く侍らむ。心ばへは、

え憎ませ給はじ」と言ひしものを。何をかは遣るべからむ」と宣へば、仲忠「かく

心深かりける御心を、いかにさて頼もしかりける。いでや」とて、仲忠「尾張より

奉りたりし辛櫃あらば、入物ながらや、よからむ」とて召し出でたり。片つ方に

きぬ廿疋、あや十疋、いま一つ方には、内侍のかみ、俊隆女「こよに物入れむ」と宣ひ

て、かいねりの綾のきぬ一かさね、薄色の織物のほそなが、はかま一くだり、山

吹のあやの三重がさねの御衣、また人に賜はむとて、またらきぬなど入れ給ふ。

御文は、

兼雅あさましう、年頃になりにけり。おほつかなさ、心より外にてなむ。何處

とも知らせ給はざりけるも、理なれど、よろづ心憂く。大將聞えられけれ

ば、<sup>(七)</sup> 哀なる人もあやしう。又も見せ知らせ給はざりしかば、いと覺束なき

(潘釋)

(二)「すこし」は「すべし」

歟

(三)人よりの買物なるが

(六)「珍らしく見給へ」つ

るは「歟」

(七)此子を可愛そうと思

召すならばよき様に御計

ひありたし

(八)誤あるべし

(考異)

(一)よろしからむ「よく

(四)人のものし「たど今

人の一人の

(五)給ひつ「給ふ

(九)つたへむ「つたへて

む

(一〇)あひなきにや「あ

ひなき方や

(一一)よりはよく書きた

れ「よりよく書きぬれ

を、今然てのみは。まで給ひなば、いとよろしからむ。心安くてわたり給ひ

ぬべき所なむ侍る。御むかへ、すこし、心苦しき人の戀しさも、

すみなれし垣ほ離れて年ふれどわがとこなつはいつか忘れむ

さりとともとかや。さて、これは、人のものし給ふめる。何にかあらむ。

とて、早くかの御方に心寄せにてありし、大和介なる人を召し出でて奉り給ひ

つ。殿人出であひて、珍らしがり、御返り、

宰相上めづらしよくみ給ひつるは、けに覺束なき程になりけるにや。

もろともになれにし中の床夏を露とおきふしわれぞ忘れぬ

心苦しく思すなるは、ともかくも持てなさせ給へかし。これはまたやつたへ

むと見給へるも、今更にあひなきにや。

と聞え給ひつ。御返、かんの殿に、兼雅「これ見給へ。手こそ、この氣ちかく見し人

人よりは、よく書きたれ。見所ある様にをかしく書きたるや」かんの殿、俊隆女「け

(語釋)

(三)我が宰相上を愛した  
らば

(四)仲忠は

(五)俊隆女が死後の事を  
いよを思ひたる也

(考異)

(一)こゝには同胞など言  
ひ一とりわきて思ひ

(二)なりとりわきて一  
なりきとりわきて

(六)こそことば

(七)明の夜ぞおはした  
りあすの夜とておはした  
り

(八)様になりけり一様  
なりけり

(九)音せず一音もせず

●仲忠宰相上を訪ふ。父  
に自ら宰相上を迎へんこ  
とを勸む。

に、いとをかしけなり。こよには同胞など言ひ睦まじき人もなし。心細きに、心

ざまなども、思ふやうにおはすなより。とりわきて思ひ聞えば、大將をも同胞の

やうに思ひ給ふべし。怪しく、大人々々しくなられたれども、まづはかなき事も、

己と言ひあはするに、亡くなりたらむ世にさうぐしと思ひ惑はむもいと哀なり」

と殿にも聞え給へば、兼雅のよしき事はうたてあり。大將あひ思ひ、互にうしろ

安く思ひ給はむには、いとよろしき心様ぞ。あはれ宮の君こそ、やんごとなく思

ひ聞えし効なく、物はかなく、いふかひなけれ」など宣ふ。

**畫詞**

こよは東の一の對。大將の御物忌などに、時々わたり給ふ所なり。

さるべき様にしつらはせ給ひ屏風どもなど立てさせ給ふ。

大將殿明の夜ぞおはしたり。木ども、前裁などは、數あまた有りけれど、けに山

里の様になりにけり。對ども、廊などかたぶき、怪しき様なり。人の音せず。東

の方によりたる格子の、二間ばかり明きためり。坤の戸より見入れ給へば、中

(語釋)

(二)これ宰相上也

(四)小君

(七)給ひつゝとは給ふ

歟

(八)仲忠が

(九)宰相上が

(一〇)小君

(考異)

(一)濃き―こぢあき

(三)長げなり―なまめか

し―ナシ

(五)思ひ―思う

(六)をかしくらう―じ

く―こらう―しくをかし

(一)給へば―給へり

の障子も壞れたり。南の隅より上りてのぞき給へば、東の妻戸の簾あけて、人々物めしるたり。母屋の方の柱に、いと濃きうちぎの艶やかなる、一かさね、薄き縹のあやのはりわた重ねて著て居たる人のかみ、絲をよりかけたる様に艶やかに長げなり。額にかよれる程、いと美しげなり。そびやかになまめかしき容貌、内侍のかみの御様躰かたちに見えたり。ありし君、かいねりの濃きうちぎばかり著給ひて、鶴脛にて、いと小くをかしげなる琵琶かき抱きて、前に居給へば、いと美しと思ひ給ひて、髪かき遣り給ふ手つき、いと美しげなり。此の君、琵琶をいとをかしくらう―じく弾き給ひつゝ、君、宰相上、今さへ、この小き琵琶をひき給ふは、いと見苦しからむは」と宣へば、小君、然ば御膝に居てひき侍らむ。たゞは倒れに侍り」とて大なるを弾き給ふ。いと上手なり。これを弾き給ふを、殿に見せ奉らまほしくおほえ給ふ。大將うちしはぶき給へば、驚きて、几帳ひき寄せ給ひて、此の君して、御裾出だし給へば、仲忠おはせ。忝し」とてかき抱き

(二〇)

(八)

(二二)

(九)

(一) 番釋

(二) 宰相上

(六)「あらむやとも」歎

(七)近々迎取るべしなど

(九)父が晩年に我身の上

を氣遣ひしを今は父も死

したる事なれば假令どう

なりても苦勞はなしの意

歎

(一〇)私が別に父に勧め

たる譯でもなし

(二二)宰相上の方では校

勘女を何とも思はずとも

(考異)

(一)明日なむ侍るべかめ

る一明日なむ侍るべかん

なる一明日となむ侍る

(三)心一心ばへ

(四)見給ひつらむ一見給

へらむ

(五)は一ナレ

(八)思ひ一思う

(二二)給へど一給ふも

て、仲思いで、その御琵琶持ておはせよ。たど今なむ参り來つる。今は、なにか

は恥させ給ふらむ。やがてや参り侍るべき」と聞え給ふ。仲思「御迎は、明日なむ

侍るべかめる」など聞え給ふ。母君、いと恥かしく、あさましかりけるわざかな、

然ばかり心恥かしけにおはする人の、いかに見給ひつらむ、と思す。御返りは、

宰相上「承りぬ。只今自ら聞えさす」とて母屋の障子のもとにて對面し給へり。

「今は世にあらむやうも思されで歎みにしを、いかに聞えさせ給へれば、「ちかき程

に」などまで宜ふらむと思ひ侍れば、聞えさせむ方なく、なほも何とも思ひ給へ

侍らで、明暮もことに見給ひ入れざりしを、ほれぐしくなられたる人、殘少

くおほえ給ふ、さらにいと歎かしきことに宜へるを、今は後安くなむ」と聞え給

へば、仲思「それこそはいと理に侍るなれ。ことには、殊に聞ゆる事も侍らず。

まことに、年頃覺束ながり聞え給ひつ。仲忠が母ものし給へど、いと心細く、た

だ一人物せらるれば、あまた物せさせ給ひける御中に、何とも思されずとも、と

〔語釋〕

(一) 母の性質をいふ

(五) みて言

(六) 御心にもすこし」歎

(七) 戀慕の情をもはのめ  
かしたけれど

(九) いと便なき事」歎

〔考異〕

(二) 御心劣もやと思ふ給  
へる一御心劣るやと思ふ  
給ふる中記

(三) 聞えさせなむと一聞  
えさせむなど

(四) めてたく一めてたう

(八) べけれど一べげれど

(二〇) 一くだり一つに  
は

りわきて思ひ聞えさせむ。睦ましく思さるべきものなり。いま近くても見給ひて

む。古めかしく、いと心安く、御同胞などのやうに思されむに、いとよくなむ侍

るべき」など聞え給へば、宰相上、いと嬉しきことにも侍るべきを、近くては御心劣

もやと思ふ給へる。こよにも、いと心苦しうてもものし給へば、「小き人は、添ひた

る人も侍りなむ。餘所ながらも、今は頼み聞えさせなむ」と聞えさせ給へ」など

宣ふ様の、いとめでたく、限なき人の御けはひにも通ひたれば、いとまめやかな

る御心、すこし僻言も聞えつべけれど、有るまじく便なき事、と思ひかへし給ひ

つ、然も聞え給はず。仲思、いとなき事。時々はわたらせ給ふとも、此度は、いか

でか渡らせ給はざらむ」宰相上「今それは此頃邊してなむ」と聞え給へば、仲思、いと

あしき御事に侍るなり。かの御本意なく侍らむ」など聞え給ひておはしぬ。

夕つけて、衣箱一よろひに、唐綾の翟麥のうちぎ、濃紫の織物のほそなが、三重が

さねのはかま一くだり、若君の御料に、いと濃きうちぎ一かさね、薄き蘇枋の綾

(二〇)



〔語釋〕  
(一)「母君」は「伯母君」の  
誤なるべし

(二)宰相上の氣安き様に  
と仲忠が心配するものと  
見ゆ

(四)仲忠の歌の戀を含め  
るを答めたる也

(五)御返事だけ頂戴すべ  
しとして

〔考異〕  
(三)「ばかりは」は「ナシ

のうちぎ、櫻の織物の直衣、躑躅の織物のさしぬきなど入れ給ふ。女のはかまの  
腰に、あかき薄様に、

仲忠人知れぬむすぶの神をしるべにていかどすべきとなけく下紐

とて御文もなし。いと小き小舎人童、御返賜はらむ」といふ。宰相上「いと恥かしく、

あやしき有様を思しはかり給ふ事」と宣ふ程に、これを見つけて、あさましく覺

え給へば御返も聞え給はず。母君、「いとあはれに忝く、何事も思すまじく、

萬に、此の御心の斯うもてなし給ふにこそあれ。なほしるしばかりは宣へ」と切

に宣へば、たど斯く、

宰相上うちとけてうらもなくこそ頼みけれ思の外に見ゆる下紐

様々にも見給へられて。

など聞え給へり。童に、躑躅のこうちぎ、若君の御今やう色のうちぎ一重添へて

かづけ給へるに、便童「御返のかぎり」とて取らねば、強ひて取らすれば、歩み避り

〔語釋〕

(一)世の常にもし歎

(二)宰相上が来られなげれば不都合なるべき由

て、お前の村薄の上(へ)にうち懸(か)けて走り出(い)でぬ。「いとされて、くち惜(お)き童(わら)かな」と言(い)ふ。御返(ま)らすとて、童(わか)云(い)々なむして、逃(に)けて参(ま)りつる」と申(ま)さすれば、仲思(なほ)いとをかしくしたり」と仰(おほ)せられて、御祐(みさとめ)一(ひと)かさね賜(たま)はす。御文(ふみ)見たまひて、「さればこそ、悔(くや)しう、何(なに)せむに、世(よ)の常(つね)もこそ思(おも)ひ給(たま)へ、かよる氣色(けしき)を見(み)えぬらむ」と恥(はづ)かしくおほえ給(たま)ふ。

又(また)の日(ひ)、殿(どの)に参(ま)り給(たま)ひて、仲思(なほ)「昨日(きのう)かしこにまうでて侍(はべ)りき。いかど物(もの)し給(たま)ふ、

見(み)給(たま)はむとて、聞(き)えしかば、自(みづか)らはおはすまじけにこそ宜(のたま)ふなりしか。度々(たびぐ)、さら

ずば便(びん)なかるべき由(よし)聞(き)えしかば、しかぐ宜(のたま)ひしを、おはしましてなむよく侍(はべ)る

べき」と申(ま)う給(たま)へば、兼雅(あや)「怪(あや)しき事(こと)かな。などか然(さ)はあらむ。恐(おそ)ろしげに、頭(かしら)も

なりにとらむ。容貌(かたち)もめでたかりしが、あはれ今(いま)まで物(もの)し給(たま)ひける。琵琶(ひば)は今の

世(よ)に、さばかり彈(つ)きたる人はあらじはや」と宣(のたま)へば、仲思(なほ)「そよや。わか君(きみ)こそ、

しかぐ物(もの)し給(たま)ひしか。理(ことわり)にこそ侍(はべ)るなれ」殿(どの)兼雅(あや)「をかしき事(こと)かな。らうたく

〔考異〕

(一)さらば一さらば一さらば

(二)はや一をや

(三)らうたく一らうたう

(五)

〔語釋〕  
〔三〕兼雅を宰相上の所へ

〔五〕織物に」歟

〔四〕なよか—なやまか

〔考異〕

〔一〕もとど—との

〔二〕おはせめ—おはせ  
め

〔三〕兼雅自ら行きて宰相上  
を三條に迎ふ。宰相上服  
の小君、兼雅に懐かずし  
て仲忠を慕ふ。

して教へ給へるなめり。母君もいとよく彈きき」と宣ふ。かのおとど、俊隆女、日暮れたらば、早うおはして、なほ一度にわたし奉り給へ。いでや、あやししく心憎き人、さまざまに集め給ひける程よりは、なまめかしくをかしくこそおはせめ。左のおとどは、いと愛敬づき、をかしくこそ見え給ふめれ」殿、兼雅「いでや、その大殿こそ、目につきて覺え給ふらむな。身の上めでたく、今めかしくおはしますを見奉り給ひて後こそ、己をも思ひおとして、かく恥のかぎり宣ひ出だせ」と宣へば、俊隆女、例の事よ。さりとて、病したる理なれば。口ふたけ」とて、意物などよくせさせ給ひてやり奉らせ給ふ。

〔三〕  
御車にておはしたり。昔見給ひしよりも、いみじうなりにけり。几帳などは、いと清けなり。たど入りに入り給へば、燈よき程にて、母屋に、いとなよやかなる鞋に、柳の織物のうすき、織物かさねて著て居給へり。わか君は、いと清けに装束かして直衣のかぎり著給へり。御髪は臍すぎ給へり。さがりば、いと清けなり。

(語釋)

(三)兼雅を

(四)小君を

(五)小君を

(六)宰相上が

(七)兼雅が

(八)我も行かねばならぬか

(考異)

(一)小くて「て」ナレ

(二)きらやか—きよら—きよらか

(九)何せむにか—なてふにか

燈の下に立ち寄りありき給ふ。見給へば、おとな四五人ばかり、小くてをかしけ

なる童などあり。いと目やすし。昔いときらやかなりし人の、いとめでたくてし

つらひ、掣取り給ひしを、思ひ出で給ふも、いみじう悲しうおほえ給ふ。兼雅「わか

君はや」と宣へば、大人しくつい居給へり。兼雅「此のわらは、その燈取り寄せよ」

と宣へば、持て参りたり。見奉り給へば、大將の兒なりし時、かくやありけむと、

美しけに恥かしき顔の笑み給ふは、けに愛敬いとはひやかなり。女君に、兼雅「い

と怪しく、またも見せ給はで、ひき隠し給ひてしこそ」など年頃の物語など聞え

給へど、人のやうにも恨み聞え給はず、たどいとおいらかに恥かしう、いらへ聞

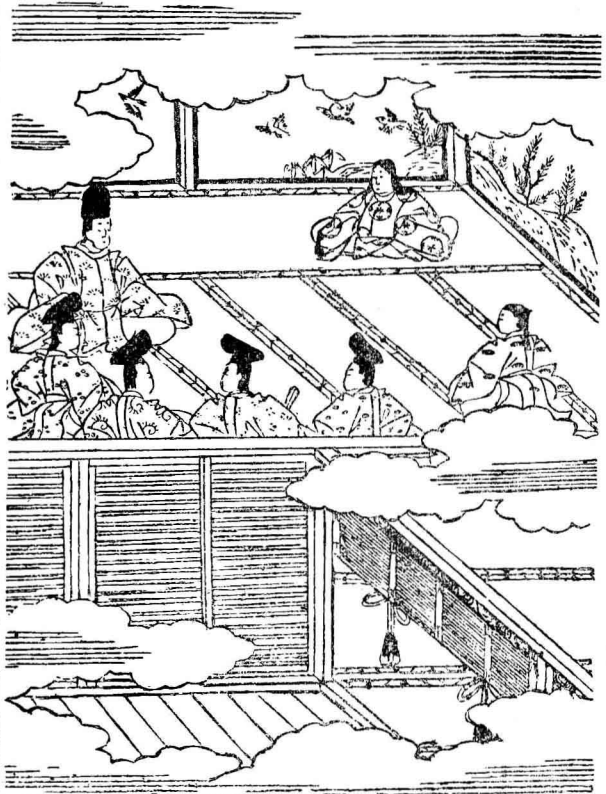
え給へば、なかく宣ふべき事もなし。いと哀に昔思ひ出でられ給ふ。しばし打

臥し給ひて、兼雅「夜更けぬらむ。いざ給へ」と聞え給へば、宰相上「こよにもや、さら

ば」兼雅「さて参り來つるぞかし」と宣へば、宰相上「何か、心靜に。かつく、然ば

早う」と聞え給へば、兼雅「怪しき事。さらば、何せむにか。また幼き一人をばい

(九)



〔語釈〕

(一)小君が成長してから  
連れゆき給

(四)「理は」嫌

(六)變體が今日引越せと  
讀めらるれど伯母君と一  
掃てなれば行かぬ領

(七)既服あるべし

〔考異〕

(二)大人々々しー大人し

(三)いかでかーわが君い  
かてか

(五)には「は」ナシ

かでか」と宣へば、宰相上さらば、今すこし大人々々しからむ程に、物せさせ給へかし。心細けにものせらるゝ人を、いとうしろめたく侍ればなむ。なほ後に」と聞え給ふ、衆雅「それも、やがてもろ共に、物せさせ給へ。人も住まで、いと心やすき所ぞ」女君、宰相上「いかでか」殿、衆雅「昔には似給はず、いと心憂く思しなりにけり」とまめやかに恨み聞え給へば、うち笑ひ給ひて、宰相上「昔の心のやうには、實にえあらずこそは」と聞え給へば、衆雅「吾が佛。理には、聞ゆる限もあらず。疾くく」と宣へば、宰相上「かよる所に、一人離れておはせむが、いと心苦しう覺え給へばなりけり。然ば聞えむ」とて入り給ひて、宰相上「なほこの度とあめるを、わたり給はずば、更に物し侍らじ」と聞え給へば、伯母「あな見苦し。さらば」とて出で立ち給ふ。大將の御許に、衆雅「その御車、只今賜へ」と聞え給へば、奉り給へり。これの女君、若君の御乳母を御車には伯母北の方、御親族におはする大輔の君、少將などいふ乗りぬ。次におとな三人、童一人乗りぬ。さるべき御

〔語釋〕

〔三〕女一宮

〔四〕兼雅

〔六〕誤あらんか、「まじ

一本「まじ」

〔八〕仲忠

〔九〕兼雅

〔二〇〕兼雅の處

〔二一〕此處誤脱あるべし

〔考異〕

〔一〕ありつれば―ありし  
かば

〔二〕御方―御前

〔五〕今めかしく―今めか  
しき

〔七〕給へれば―給ひつれ  
ば

供十餘人して、いときら／＼しくてわたり給ひぬ。大將、仲忠「などが、曉がたに

はなり侍りぬらむかし」と申し給へば、兼雅「いとうたて、渡らじとありつれば、若人

も、もろ共に、とて強ひてなむ物しつる」とてかんの殿の御方へおはせむとし給へ

ば、仲忠「早しづまりて人も寝入りて侍らむ」とてみな思ふやうにおろしおきて、出

で給ひぬ。宮に、仲忠「あやしく夜更け侍りにけり、おとど、今めかしく古事あらため

させ給へるとて」女「何事ぞ」仲忠「さらの人なり」など聞え給ひて御殿籠りぬ。

かくて、参り給へれば、若君の、此の殿をば「父こそ」とて、睦まじうまとはし

奉り給ふ。居給へる所にも、いと近う睦れ居給へり。殿をば「殿」と聞え給ひ

て、ことに睦れ聞え給はず。

小弓射給ふ日、大將殿の君だち、大殿へあまた参りたり。梨壺の宮の君、此の若

君の、いと清けに装束きておはする、人々若君を「いと美しけにおはするは誰

ぞ」と問ひ聞ゆれば、「おとどの子少く、さう／＼して物しためる」と聞え給

〔語釋〕

〔三〕「など」とて「なるべし

〔六〕小君を

〔七〕琵琶を請求して

〔考異〕

〔一〕似給ふめり―わたらせ給ふめり

〔二〕おはすめる―おはすめるは

〔四〕大將殿―大將〕ナレ

〔五〕宮の君もかやうにこそ―宮の君もわがやうにこそ

へば、「かの御子か。いとかしこう似給ふめり。宮の君はらうくじく、これはなまめかしくおはすめる」などと呼び奉り給へれば、おはしたり。御髪も、なかに長く清らなり。大將殿、宮に、仲忠、参り給はむには、指貫著てこそ」と宣へど、宮も、女「宮の君もかやうにこそ」とて著せ奉り給はぬなりけり。案内も知らぬ人は、「大將のひつ御腹なめり」と聞ゆ。宮笙の笛、宮の君横笛、皆いとめでたく吹き給ふ。「此の君何かし給ふ」と聞え給へば、「琵琶ひき給ふ」と宣へば、「いとをかしき事かな」とて大殿の侍従大納言の御太郎、藤宰相の御弟四位の少將、大宮の御方に琵琶聞え給ひて、「これ」とて弾かせ奉り給へば、小君、人に抱かれでは弾き侍らず」と宣へば、「おはせく」とて抱き給ひて、弾かせ奉り給へば、いとになく面白くひき給ふ。笛にひきあはせて、三所あそび給ふ。人々、「いと珍らかにをかしき御有様どもなり。内裏などに御覽せさせばや。いみじき物の上手は、またも出で給ふべき所なめり」と感じあはれがり給ふ。大殿も、さ



- (語釋)  
 (一) 兼雅の心  
 (二) 小君  
 (四) 兼雅が  
 (六) 北山の空瀟の住居の  
 時の事をいよなるべし

- (考異)  
 (三) あなれ—あんなれ  
 (五) 見捨てて—うち見捨てて  
 (七) 心憂しと—心憂くぞ

まゝにうつくしう見給ふ。御遊の具によかめり、大將子すくなう物し給ふに、かたみに行末を思ひ後見るも善かりけりと思す。入り給ひて、兼雅對の子を人々のをかしと言ひつる。あやしきは、大將見つけて侍りし、宮などにも睦れあそび給へるめり。我をば親とも思はず。子は、誰とも言はで、つきたればこそらうたけれ」と宣へば、俊隆女、理にこそあなれ。小き人は、たゞ思ふ人に睦るよものなり。一日見奉りしかば、對の簀子にて、宮をいだし奉り給へりしに、宮の君「まろもく」とありしをいだし給ひしに、打見あけて立ち給へりしを、小き心地に見捨てておはせしかば、一人勾欄にながめてなむおはせし。などか、この君も、時は抱き奉り給はざらむ。すべて、かよる御心のあればぞ、月を經しかど、物の思ひ出でもなくて、おはして、いみじき目の限見しぞかし。涙落ちぬべく、つらき氣色みえ給ひしか。大將は、宮をも誰をもわかず、さまゝにこそ思ひ聞えたれ。かの伯母君などの見給はど、心憂しと思ひ給ひなむ。人の歎負ひたまはず

〔語釋〕

- (一) 誤あるべし
- (二) 俊隆女の侍女の侍従といふ女
- (三) 俊隆女の侍女の侍従といふ女
- (四) 宰相上の侍女の少將といふ女
- (五) 伯母君等のいふ也
- (六) 「御心の」の「し」衍文なるべし
- (七) 母殿隆女の
- (八) 登雅
- (九) 小君が
- (一〇) 宰相上を登雅が迎へて己を迎へざるを
- (一一) 今「り」のひびと
- (一二) 今「り」のひびと
- (十三) 今「り」のひびと
- (十四) 今「り」のひびと
- (十五) 今「り」のひびと
- (十六) 今「り」のひびと
- (十七) 今「り」のひびと
- (十八) 今「り」のひびと
- (十九) 今「り」のひびと
- (二十) 今「り」のひびと

普く情あり、世に久しくおはせばこそ、己なくとも、大將の御爲にも頼もしう善からめ。顔容貌の、さ思ひ給へらむに、物しく心も見ゆるもなし。いとたとしへなく思ひ給はむをこそ、人はうたてなむ見奉らめ」などうちくに聞え給ふ事を、かの御方の侍従の君、對の御方の少將の君とは、從姉妹どちなれば、往きあひて語れば、伯母君も母君も、「嬉しき事」とよろこび給ふ。「大將の御心の有様かたち、よくおはするは、この御心ばへの斯うおはすればこそ有りけれ。この殿の御心は、いでや。心深からざらむ人は、人のいはで思ひたらむ心ばへなどこそ思ひ知り給はね。うべたど大將殿をのみ思ひ聞えたりけり」など宣ふ。

かくて後、梅壺の更衣と聞えし、怨み聞え給ひて、山菅をつよみてかうの扇、薄様の中に入れ給ひて、

機習うらやましおなじ籠の山すけもわきてぞ人はおもひかさぬる  
思ひ出づること多く。

機習うらやましおなじ籠の山すけもわきてぞ人はおもひかさぬる  
思ひ出づること多く。

など宜へば、御かへり、

兼雅（語釋）餘所よそながらおもひかさぬる山やま菅すげをひとつにつらき例たのしとやする

目もたどくしく、今は覺おぼえ侍はたるを、なほ昔むかしのやうに、近ちかき程ほどにやはものせ

させ給たまはぬ。

とて、後のちにむかへ奉たてまつり給たまひて、東ひんがしの二の對たいの、北きたの廊らうかけておはす。なかに

も宮みやの御方かたの人々ひとらは、（二）「安やすからぬ世よの中なかかな。あはれ古いにしへを思おもひかへせば、わが

君きみかよる御住居すまひをさせ給たまはむと思おもひし。品しなにもよらずや」など言いふを、かん

の殿どのの人々ひとら聞ききてまねび聞きゆれど、俊隆女すんりゆうめ「あなかしこ。ゆめ聞きき入いるな。下人しもひだは然さ

ぞあなる」とていと清きよらにもてなさせ給たまへり。殿どのは、一ひつ月げつを、二ふた十五じゅうご日は此方こなたに、

いま五夜ごよをば宮みやの御方かた、この對たいなどには通かよひ給たまひて、晝ひるも此方こなたにのみおはするを、

かんの殿どの、俊隆女すんりゆうめ「なほこれなむ、いと見苦みくるしく見奉みたまつる。今は心こころしづかに、時々ときときは行い

もしてあらむ。宮みやの思おもすらむこともあり。これよろしきに聞きえ給たまへ」と大將たいしやうに聞きこ

（語釋）

（一）女三宮付の女どもは

（二）兼雅

（四）俊隆女の方

（六）女三宮

（海異）

（二）安からぬ世の中かな  
—安からず世の中あぢき  
なう

（五）給ひて—給うて

（七）よろしきに—よろし  
く

(語釋)

(一) 兼雅が

(二) 仲忠が

(三) 背き給ひ一なるべし

(六) 兼雅が俊隆女の處にのみ居るは

(一) 外の女の許へ兼雅が通ふを俊隆女が不満に思はゞ遠慮もあるべけれど

の意歟

(考異)

(四) 給へるを取リ給へるをなほ取り

(五) 見給へるを一見給ひつるを

(七) 十日一十夜

(八) 十日一十夜

(九) 給ふ人も一給ふも一給はむも

(一〇) ものしたる事はまた一またものしたる事は

給へば、仲忠いとよう仰せられたり。爰にかくて、わが御儘にておはします。仲忠侍り。今は人とかく申すべきならず、聞えにくきを、宣はせむ序に、申し出でむ」と宣ふに、入りおはしたり。いとをかしと見奉り給へり。仲忠人々の、あるは世を背き給ふ、所々に剛にてもものし給へるを、取り申すまよに、目やすく斯くものせさせ給へるを、いと嬉しく見給へるを、一方にのみおはしますは、いとものしき様に侍り。此方に十日、宮の御方に十日、いま十日を三所におはしますせむ」と聞え給へば、うち笑ひ給ひて、兼雅「いとあやしく、果は有るまじき事をさへ物せらると。昔若かりし時こそ、さまよひありくも目やすく、見まほしく思ひ給ふ人もありけめ。今は身の覚えも花やかならず、腰も痛ければ、え歩くまじ。一所にものしたる事はまたいとをかしう、いかど人も思ふらむ、とてこそあめれ。あるまじき事なり」と宣へば内侍のかみ、俊隆女「否や。御心さりとていかどなど思はばこそあらめ。人々もつれぐにながめ給ふらむ。さてうち通ひ給ひておはせば、

〔語釋〕

(一)かく俊隆女一人を守り居りても手柄でもあるまじ

(二)宰相上

(三)兼雅が

(七)梅盞

〔考異〕

(四)十五夜は―十八夜は―二十日を改

(五)外は―外を改

(六)などには―にも―に

よくなむあるべき。左のおとどは、宮、大殿、いとうるはしくこそ、十五夜づつおはしつよ、子どもいづれともなく思ひかしづき給へ。かくて添ひおはせむからに、かしこくやは有るべき。そが中にも、宮の御方は、院のとりわきて思ひ聞え給ひて、をりくも聞かせ給ふらむ、いと忝し。對の君などは、御心ざまなどもあはれに見え給ふ人なめり。そればかりには、なほこよに聞えむまよに、人よりは殊にもてなし給へ。大將も「伯母君の、泣くくよるこび給ふなる、おのれ一人して思ひ聞ゆるも、ゆよしくのみ覺ゆるに、心深からむ人には、思ひおかれ給ふらむぞ嬉しき。行末に行きあふ事もあるものなり」など切に聞え給へば、十五夜は此方に。その外は、宮の御方などには「など宣ふを、兼雅」さばその程に、思ひくにおはせむ」と宣ふ、兼雅「更衣の方は、らうくじく、くせくしう物し給ふ。式部卿の君は、心おきなくて、乳母の物言なめし。對の君は、おいらかなれど心深ければこそ人々の御爲にも心安けれ。そればかりは、けに宣はむに隨はむ」など

仲忠、小君を携へて参内す。東宮小君を携へてあて宮の許に至る

〔語釋〕

(一) 仲忠の男の子

(二) 誤ある人し

(八) 東宮腹

〔考異〕

(三) 御装束し給ひびづら

結ひ給へれば―御装束はし給ふびんづら結ひ給へるは

(四) 仕うまつれ―つかまつれ

(五) 給へば―給ふ  
(六) 宣はすれど―宣へど  
(七) ちて―ちて

宣ふ。

かくて、内裏東宮にも、若君見まほしうせさせ給ひて、度々宣へば、おのれは、

若小君(一)ゐて参らせよとて、参らせ奉り給ふ。かんの殿の御方にて御装束し給ひ、

びづら結ひ給へれば、いま少しをかしけに、めでたくおはす。率てまゐり給へれ

ば、内裏東宮も一所におはしまして、「いと美しき人なりけり」と宣はす。有様

らうたけにをかし。琵琶召して、「弾け」と宣はす。しばし御答もし給はねば大將、

仲忠「なほ仕うまつれ。まだいと幼く侍り。大なるは、人に抱かれてなむ弾き侍る」

と奏し給へば、女房たちあまたさし出でて見る。源中納言、遠「この聞きつるはこ

れか。いと美しかりける人を、今まで見奉らざりけるよ。この膝にを」と抱

きて弾かせ給へば、少しばかり、いとなく弾きてさし置き給ふ。上も宮も、「やが

て留めむ」と宣はすれど、仲忠「まだいと幼く侍りて」と奏し給ふ。中納言忍びやか

に、遠「いで、その宣ふ宮とて、かたじけなけれども、此の若君にはまさり給はじ。如

(七) (八)

(語釋)  
(三)若宮を

(四)あて宮が

(五)すは、一本よく又  
「人々」

(六)「向き給へば」の意疎

(八)誤あらんか。一本「ま  
ことはまことけさのたと  
ひもあれば」

(考異)

(一)あらざめりーあらざ  
りけり

(二)仲思らが「ら」ナシ

(七)給へばー給へれば

何に」と宣へば、仲思（一）さらに、いと見苦（二）しう。たゞ宮の御眞似（三）をして、さがなう

心強（四）く、なまめかしきけも侍（五）らず。されば、宮にも、あからさまにも率（六）て參れば、

見給ふとて、「生れし時（七）より心恐ろしきものと見（八）き。犬宮の同胞（九）にはあらざめり。

率（一〇）て去ね」とぞ宣ふ。おとどはたゞ心にまかせて見給ふ。不用（一一）のものなり。此の君、

仲思（一二）らが教へむことも聞きつべし。手などもいと美（一三）しう書き、聲もいとをかしうぞ

侍る」東宮「藤壺の御方（一四）にいざ」と率（一五）ておはす。大將（一六）參り給ふ。内にたゞ呼びに

呼び入れ給ひつ。几帳（一七）ばかりひき寄せておはす。いみじううつくしがり給ふ。大

將（一八）孫王の君に、仲思（一九）いと幼き人參り給ひにけり。呼び入れ給へ」孫王の君、「いと

美（二〇）しきは、誰に奉らせ給ふにかあらむ」とて隠（二一）もあらせ給はざめれば大將、仲思（二二）あ

らじものを、くは、見給へかし」とてむき給へば人々笑ふなり。仲思（二三）まことはけさ

のたまひもあなれば、物のはじめにゆよしきを、いかでか」とて、仲思（二四）まかです

せむ」と宣へば、あて宮「あやしの事や」とて忍びやかに笑ひ給ふけしきも聞ゆ。

(一) 翁

(二) 東宮

(三) 仲忠が

(四) 小君の機子

(五) あまり東宮と違はぬ

(六) 小君が頂戴して

(七) 兼雅

(八) 人によりて筆差を

つけて贈れと宣へどの義

歟

(考異)

(一) と宣へば一とのみ宣

へば

(八) 小君は一宮は

(九) 父こそはこそ

(一〇) かくて一ナレ

(一一) 二人は一人の

● 役藤女、太宰大貳の贈物を人々に分つ

仲忠「疾くく。と宣へば、孫王「さのみやは。まことは、いと美しき御有様を、つ

ねに参らせ給へ」とて宮もろ共に出で給へり。見くらべ奉らせ給ふに、うつく

しげに、あてにけだかき事の、いとことの外にもあらぬを、子にひき連れて見む

ぞ、面だたしく覺え給ふ。銀、黄金のわらはの、相撲とりたる形を得給ひて、ま

かで給ひぬ。

かんの殿に、仲忠「云々なむ」と聞え給へば、いと嬉しとおほす。宮の君は、殿

をば「父君」とてむつれ奉り給ふ、大將をば餘所に見奉り給ひて、「大將参り給

ふめりや」など聞え給ひてことにさし離ち給ふ。小君は大將をば「父こそ」とつ

け給ひて、いとようし奉り給へば、をかしがり美しがり奉り給ふ。

かくて大貳のほり来て、殿に銀の透箱二十、唐綾、沈のみねに螺鈿すりたる櫛な

ど奉りたり。内侍のかみ、宮の御方に七つ、我が御方に四つ、御方々にも二つ三つ

づつくばり奉らせ給ふ。殿は、人の御次第に宣へど、役藤女「然べき事なれど、人は

(一一)

(一二)



(語釋)

(一)とて奉り給ひつし歟

(二)願あるべし

(四)末野、一本をはのと

(五)俊隆女が宰相上は逢ひて

(考異)

(三)ことを一ものを

(六)給へば一給上

仲思、犬宮に琴を欲よ  
べき心構を女一宮に語  
る。母を訪ひて同じ事を  
語る。兼猿来合せて夫歸  
古を追贈す。

心こそ恥かしけれ」とて給ひつ。かれらの透箱一つにはからあや五疋、いま一つ

には沈紫壇の櫛あるを、對の御方に奉らせ給ふとて、かぬの殿

俊隆女思ひやる心をつけの櫛ならばおほつかなさを嘆かざらまし

とて奉り給へれば、御返、

宰相上そのかみにふりにしことを改むるこれこそつけの小櫛とは見れ

おいのと思う給へらるよ。

と聞え給へり。さまざまに心にくく申しかはし給ふ。いと忍びて然べき折には、

此の御方には對面し給ひて、かたみに心ふかう、哀に聞え契り給ふ。

大將は、院、内裏、東宮など、おほつかなからぬ間に参り給ふ。また、動すれば召

され給へば、心地さへ世に心しづかなる折なくおほえ給ふ。宮に聞え給ふやう、

仲思「身に思ふ事侍りし時、かくて侍りてば、心のどかに思ひなり侍りしを、犬宮

うまれ給ひて後は、いよく命も惜しう思ふ事あるまじと思ひ侍りしを、よく思

- (一) 静(静)  
 (二) わが人に勝りたる心地すといふのが割分りなさらぬは犬宮を何とも思はれぬかちの事  
 (三) 犬宮が物心つかは  
 (六) 一人々だけこそあれなるべし  
 (七) 仲思は心静に犬宮に歌よる暇はあらじ

- (考異)  
 (一) 何をしをしナシ  
 (四) 心ナシ  
 (五) 事かんのあとどは事となむ歌き侍るかんのあとどは事となむ歌かしう侍るかんのあとどは(八) 心ナシ

ひ侍れば、世の中に物思ふにこそなりぬべけれ。身に限りては、人にまさりたる心地こそし侍りつれ」宮、女「何を」と宣へば、仲思「犬宮などをおろかにおほしたるにこそ侍るめれ。まだ這ひるざり給ひし時だに、此の琴を見たまひて、いと弾かまほしうし給ひき。此の年頃は、月日も疾く過ぎなむ、ものの心も知り給はば、心静にて然るべからむ所をつくりて、率て奉りて、習はし奉らむ、と夜は目をさまし、晝はこれを思ひめぐらし侍るに、本意のごと、静なるべい事の、難かべいをなむ、如何様にせまし、と思ひ侍る。來む年は七つになり給ふ。今までこれを教へ奉らぬ事。かんのあとどは、四つよりこそ弾き給ひけれ。御袴著の事急ぎ侍りしに、ことにもあらざりけり」となけき聞え給へば、女「けに、身にも思ふ事なり。然しもあらぬ人々にだにこそあれ。世の常ならむは、いとこそ効なかるべけれ。そこにこそ、え心静に物し給はざなれ。かんのあとどこそは」と宣へば、仲思「獨り離れてもえおはせじ。又下れる手よりこそ習ひ給ふべけれ。昔

〔辨釋〕

(一) 俊隆

(三) 俊隆

〔考異〕

(二) 詩には一時にこそ

(四) こそ一ナシ

(五) ほのかに鳴く—ほのかなる

(六) 思ひあはせ—思ひあはれか

(七) 彈き出づればこそ—ひき待れば

の朝臣あそんは、七人の山人なつかの中の劣せうりの手てよりこそ、勝すぐれたる極きはまりの手てをば彈つきとり給たまひけれ。仲忠なかつたてが彈はき侍はべるを、院ゐんの上うへなどはよしと仰おほせらるれど、かんのおとどを同おなじう宣のたまへむとも覺おぼえずこそ侍はべれ、かの彈つき給たまふ時ときには、治部卿ちぶきやういかに彈つき給たまひけむとこそ、昔むかし戀こひしく思おもひやられ侍はべれ。かんのおとどは、如何いかんは。一所ひとところにおはして、まづ仲忠なかつたてが覺おぼえむ限かぎりをこそは、習ならはし奉たてまつらめ。春はるは霞かすみほのかに鳴なく鶯うぐひすの聲こゑ、花はなのほひを思おもひやり、夏なつのはじめ、ふかき夜よるの郭公ほととぎすの聲こゑ、曉あけ空そらのけしき林はやしの中なかを思おもひやり、秋あきの時雨しぐれ、夜よるの明あきらかなる月つき、思おもひくくの虫むしの聲こゑ、風かぜの音おと、色いろの紅葉もみぢの枝えだをわかと折をりのけしきを思おもひ、冬ふゆの空そらさだめなき雲うゑ、鳥獸とりけだもののけしき、晨あしたの雪ゆきの庭にはをながめ、高たかき山やまの頂いたゞきを思おもひやり、したよる池いけの下したの水みづをあはれば、深ふかき心こころたかき思おもひも、諸もろくの事ことを思おもひあはせ、世よの中の、すべて千種ちくさにありと見みゆるものの覺おぼゆるもの、又また時ときに随したがひつよ、色いろ衰おとろへ、久ひさしくなり、又またむなしくなりぬるものを、心こころに思おもひつゞけて、琴ことの音ねに彈つき添そへむと、思おもひをなして彈つき

〔語釋〕

(一) 女一の彈くやうに

(二) などに「衍文なるべし

(六) 誤あるんか「みはし」一本「みはと」

〔考異〕

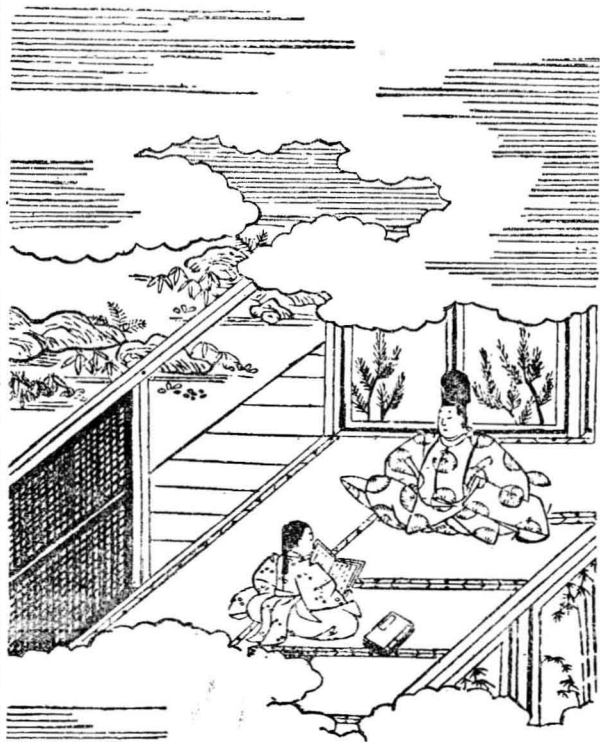
(三) あしうぜーあしく

(四) 侍ちザーあらず

(五) 出でーナレ

(七) メかりきかしーメかめりきかし

出づればこそ、琴の音も弾くに随ひてひどき、萬の折にはあひ侍れ。遊ばすやうに、たゞ弾きにやは弾くものならむ」と聞え給へば宮、いと哀に、疎ならむ心を思ひて弾きならずことにはあらざりけりと、恥かしく聞き給ふ。かよりける事どもを、さても、なごて一つをだに教へらるまじき。など、犬宮のをりこそ聞き習ふべかなれ」など宣へば、うち笑ひ給ひて、仲忠「今いとあしうぞ聞召してむを。まめやかにには、此事を思ひ侍るに、獨寝たまはらまほしきを、如何にさても侍らむ、然るべき所を思ひめぐらし侍るに、こよはいと驕がしくて、然るべきにも侍らず。かんのおとどの京極を、然るべき様に、まかり出でて造らせむ。此の頃、伊賀守辭するを、「明年の院の御給を、今年申させ給へ」と女御殿の御前に聞えさせ給ひて。さるべき屋どもは、一歳つくらせて侍り。對などなむ造らすべきやう侍る」とて「みはしにや侍らむ」とてかんのおとどに参り給へり。御物語聞え給ふ。おとど、(六) 俊隆女「小君に千字文ならはし奉り給ひしかば、やがて一日に聞きうかべ給ふべかり(七)



〔語釋〕

(一)小君を

(二)おとどとのこのの術  
文なるべし

(三)今までなぞ大宮に教  
へざりしぞ

(四)母を請じて

(五)愛らしくもこの意致  
一本「あやしく」

(六)大宮が

〔考異〕

(一)には「は」ナレ

(五)までは「は」ナレ

(九)おもひひ覺え

(一〇)入ひいと

きかし。大殿おとどの誦ずんじ給たまふ御聲ごこゑにはまさるなめり。いとおもしろう哀あはれになむ」仲思ちんし「い

とをかしう侍はべる事ことかな。犬宮いぬみやの御事ごせをこそ、何事なにことにもまづは思おもひ侍はべるに、妬ねたく

疾やくもおとなしう教せしへなさせ給たまひてけるかな」かんのおとどの、俊隆女しゅんりゆう「心憂こころうくもわ

きまへ給たまへるかな。よくぞ、私わたくしのものにし給たまひてける。いかど御琴おんことは、今いままで

は」と聞きえ給たまへば、仲思ちんし「いと弾つかまほしう物ものし給たまふを、いかどとのみ思おもひ給たまふる。

公おほやけにも院ゐんにも、御氣色けしき賜たまはりて、暇いとま申まうして、よろづを棄すてて靜しづかにこもり侍はべりて、

忝かたじけなくとも、おはしまさせて、おほつかなき所ところ々々も承うけたまはりてとなむ、夜盡よるひるなけき

思おもひ給たまふる」かんのおとど、俊隆女しゅんりゆう「けに、その御事ごせをなむ、こよにも思おもひ給たまふる。

いとあいしくもなりにたるを、さらば、早はやう思おもひ立たてかし」仲思ちんし「いと恐おそろしうも

物ものの心こころよう思おもひ知しりたる様さまにおはすれば、いとよう弾つかせ奉たまり給たまひてむ」と宣たまふ。

忍しのびやかに聞きえ給たまふやう、仲思ちんし「この事ことおもひ侍はべるなむ、多おほくのこと侍はべる。かの

宮みやは、いと人騒ひとさわがしく、不ふ用ようなり。此この殿どのも、さるべきにも侍はべらず。京極きやうごくを、然さ

(一〇)

(一) 御傳

(二) 京極の舊邸

(三) 兼雅

(四) 仲忠の言ふに聞よべし

(五) 故俊隆の遺書

(八) 「こころ」は「こころ」の限なるべし

(九) 兼雅存生中は出来がたかるべし

(一〇) 御事をなすべし

(考異)

(一) 遣り—遣らし

(六) いかでと—いかでかと

(七) 私—私と

るべき様に造りしつらはせ侍りて、となむ思ひ侍る。萬の處よりも、かの殿をな

む、然ものせむに本意のごと侍るべき。殿や便なしと宣はせむ。仲忠、これこそ

は一生の大なる大事に思ひ侍れ」かんのおとど、俊隆女「更なる御事なり。便なしと

ありとも、それにやは。たど宣はむにのみこそ。彼處はいと世に異なり。年頃思

ふに、なほ聞きわたり、住まよほしう思ひ侍り。心のどかに昔を思ひ出でて、

然べき尊きことをもせさせ、行も彼處にてせむとなむ思ひ侍る」など宣ふに、

涙もとどめ難う落ち給ひぬ。大將も、かなしき事や思ひ出で給ふらむ、泣き給ふ。

仲忠「よく思ひ仰せらるゝ事なり。仲忠も、世の中といふもの、常なきものなり、

しづかに、時々は籠り侍りて、見給はまほしき法文、書どもも侍り。然るべき昔の

御爲の事どももいかでと思ひ給ふるも、公私「こころ」の暇なく侍るになむ。

しづかなる御行殿の御世の間はせさせ給はじ。尊きことはしも、思ふやう侍り、

犬宮の、思ふやうに物し給はど、さやうの折にも、猶かくてこそは御覽せめ。い

(商標)  
 (二)女三宮、「御事」は「御方」の誤なるべし

(三)「思ひ出でつるなり」  
 歟

(四)自分が倭姫女を棄て  
 置きしを思出さるべけれ  
 ば也

(五)幾雅の關係なき時分  
 也

(考異)  
 (一)思ひ—思ふ

かで、世にあらまほしく珍らかなる事を御覽せさせむ、となむ思ひ給ふる」など  
 哀なることども聞え給ふ程に殿、兼雅「前おふ聲して、久しくなりぬるは、こゝ  
 にものせらるよにこそありけれ」とて、御子いだし奉り給へり。宮の君「まろ  
 も」と聞え給へば、宮をば、肩にかけ奉り給ひて、いま一所をば、たどにかき  
 抱きておはす。若君もおはしたり。いづれとなく、様々に清らに美しけにおはす  
 る、うつくしう見奉り給ふ。かんのおとども、大將の御氣色も、泣き給へりけ  
 るを、兼雅など例ならぬ様に見え給ふ。もし、宮の御事、對などの人々の中に、便  
 なき事言ふやあらむ」と、大將「思すらむ事恥かしくて宜ふ。かんの殿、いとよう笑  
 み給ひて、倭姫女「あな物狂ほし。京極つくらむとあるにつけて、哀なる事思ひ出づ  
 るなり」殿、兼雅「それこそは、思し出でむにいと苦しけれ」とまめやかに宣へば、  
 倭姫女「怪しく、それより前にも、いみじう哀なる事どもは無くやは」と聞え給へば、  
 兼雅「そよ。それにつけて、物思はせ奉りけむを思ふに、いと苦しうなむ。いかで、

(二)

(二)

(四)

(五)



(講釋)

(三)宰相上の方

(四)兼雅夫婦の贈答の歌を

(考異)

(一)今めかしき一いまはしき

(二)あはれに覺え給ひていでや一哀とほぼえ給ひていでや一哀にほぼえ給ひていとしく一あはれにほぼえ給ひて

昔むかしの世よの中の事なかをなかけじ」と宣のたまへば、俊薩女とんざくめ「たゞ、今いまめかしきことことの限かぎりもおほえ

給たまふなるかな」とて、斯かく書かきつけて居ゐ給たまへり、

(二)

俊薩女とんざくめいにしへのちどやちぐさの物思ものおもひを今いまもかなしといかど忍しのばむ

と書かき給たまふにも涙なみだ落ち給たまふを、殿どのもあはれに覺ねえ給たまひて、兼雅かねたか「いでや、

(三)

兼雅かねたかちぐさには涙なみだぞ露つゆとむすびけむかよるこの世よに思おもひひここなむ

おろかなる御守おんまもりか。

と書かきつけて見みせ奉たまり給たまふ。大將たいしやう、これを取り給たまひて、出いで給たまふまよまよに、對たいに

(三)

おはして、仲思なかつし「久ひさしく參まゐらず」と聞きえ給たまふ。御おん頼たのまるらせ給たまひて、るざり出いで給たま

へり。宰相上さうじやうじやう「けに、覺おぼ束つかなき程ほどになり侍はべりにけるかな。いとうれしく宣のたまはするに、

萬よろづの事ことみな慰なぐさまれ侍はべりてなむ、明あけ暮くらし侍はべる」と聞きえ給たまへば、仲思なかつし「あやしき故ふる

郷さとの侍はべりつる、ついでに、今いまめかしき御中おんなかに宣のたまへる事こと」とて、ありつる物御ものおん懐ふせ懐こころ

(四)

より引ひき出いでて見みせ奉たまり給たまへば、いと哀あはれにおほえ給たまひて、かたはらに、

(語釋)

(二) 女一宮

(三) 犬宮の

○大宮の美しくしき。仲忠の遺骸。

(考異)

(一) 如何にぞ「ぞ」ナシ

(四) いみじうーいみじき

(五) 斯くはえーかくばかりにて

宰相上 故郷はいづくともなく忍草しけき涙の露ぞこほるよ

とてさし出で給へれば、見給ひしもけに如何にぞと、哀におほえ給へば、御筆の

おろしにて、

仲忠 任み来しも見しもかなしき故郷を玉のうてなになさばなりなむ

など聞え給ひて出で給ひぬ。

大將は、御徳もいといかめしう、大殿に次ぎ奉りては、この殿を、天下世の人

もかしこう頼み奉り、参り集ひ、何事も物宜へなど思へり。一の宮は、犬宮と

雖遊し給ふ。御かたち日々に光り勝るやうにおはす。いみじう腹立ち、恐ろし

きものの心にも、見奉らば萬の事わすれて笑まれぬべし。あて宮も、今のほど

斯くはえおはせざりけむと、思ひ竝ぶべき様ならず見え給ふ。御乳母五人、宮の

君、源氏の君と、御乳主。乳母子六人、おなじ程にて、長五尺なる裳を、結び籠

めに著せ給ひて、御遊の具にてさふらはせ給ふ。これより外の人々には、見せ奉

〔語釋〕

(三) 仲忠が

(六) 醍醐の時の事

(八) 治部卿…いひ勝れたるなり」は傍註の擧入せるなるべし。一本「うつぼの巻に見えたり其の後大辨」なし

(九) 「いひは」いと「歎

●仲忠京極の舊邸に大宮に琴を教ふべき樓を造る。人々の噂。

〔考異〕

(一) 給はず祖父―給はずたゞ二宮ばかり女御殿と見奉り給ふ

(二) かくて―ナシ

(四) 木草―草木

(五) 山なる―山中

(七) 一歳はちほよそに―一歳はいたくちほよそに

(一〇) ころ―ナシ

り給はず。祖父大臣、ゆかしがり聞え給へど、更に見せ奉り給はず。公も、か  
(二) 讀みさし給ふ文聞かまほしうし給へど、とかう免れ申し給ひて、おほろけなら  
で参りにくくし給ふ。

かくて京極におはして、靜に見めぐらし歩き給ふに、世の中にありとある木草、  
(三) 花紅葉、數をつくしてあり。唐土にもありけるものの、實をかしく、花紅葉めづ  
らかにする木草どもの種をさへ、植ゑおき給へりけるも、山なる所々に、いとお  
もしろく、何とも人知らぬ、生ひたり。一歳は、おほよそにこそ面白しと見給ひ  
しか、のどかに今見給ふに、かよる所なし。年経たる巖の、いろくの苜生ひ様  
もいとをかしう珍らかなるを、立て置かれたりける。さらに取り動し直すべきに  
もあらざりけりと見給ふ。治部卿は、うつぼの巻に見えたり。其の後大辨滋野の  
親王の聲なりしかば、この家もと名高き宮とて、今の世のおもしろき所にはいひ  
勝れたるなり。この三月十餘日ごろより造るべき由を、修理頭、宮の乳母の同胞  
(四) (五) (六) (七) (八) (九) (一〇)

勝れたるなり。この三月十餘日ごろより造るべき由を、修理頭、宮の乳母の同胞

(語釋)

(一)未詳一本「かきのま」

(四)榕子歎

(五)仲思は

(一)「側よりは」の「は」  
衍文歟

(考異)

(二)「べかめり」べかめり

(三)「ならべて」ならびて

(六)「えせじ」よせじ

(七)「中じ」なにがし

(八)「方分きて」かたはな  
る事なく

(九)「仰せかくせ給ふ」仰  
せ給ふ「宣はせ給ふ」

(一〇)「長高」繁ければ  
長の高きをそれよりは南  
なる木し繁ければ

なるにおほせ給ふ。北の對、西、東の對、ことにうるはしくよかりけり。四面に

かきのくに、白き壁塗らすべかめり。この西の對の南の端に、坤の方かけて、昔

の墓ありける迹のまよに念誦堂立てたり。南の山の花の木どもの中に、二つの樓、

長よき程に、こちたからぬ程に、たちまちに造るべし。西東にならべて、樓の

二つの中に、いと高き反橋をして、北、南には、かうしかくべし。それに、我は

居給はむとす。仲思「これ造らむには、なべての工はえせじ。修理職の中に、勝れ

たらむもの二十人を擇りて、方分きて、心殊に造らすべきなり」とて、靈師召し

て、造るべきやう仰せかよせ給ふ。東の對の南の端には、廣き池流れ入りたり。

その上に、釣殿立てられたり。その水のさま洲濱のやうにて、御前の南には中島

あり。それに、樓は建つべきなり。「御殿の長高けれども、外よりは南なる木ども

繁ければ、透きて僅に見ゆべし。西、東の側よりは見えたらむは、柳の木どもの

中より、木高くおもしろからむこと限なからむ」など人々興じ申す。樓の勾欄な



(器釋)

(一)造作

(七)女一宮に仕ふる宮の君

(八)孫王君がて官に

(考異)

(二)あるしがねーしあかね

(三)黄金ーナシ

(四)給ひー給ひて

(五)給ひてー給うて

(六)あるべからむーあるべからむ

ど、あらはなるうち造りなどには、かの開け給ひし御倉に置かれたりける、蘇枋、

紫檀をもちて造らせ給ふ。おろしがねには、銀黄金に塗り懸をす。櫃子すべき

所には、白く、青く、黄なる木の沈をもちて、いろくくに造らせ給ふ。さるべき

所々には、銀黄金の筋やりたり。まづ門さして、大將殿おはし給ひて、御覽じ

て造らせ給ふ。中に勝れたる上手、いどみかはして、有り難うめでたう造る。

此の事を内裏院にも聞かせ給ひ、殿ばら聞き給ひて、「珍らかにをかしき事なり」

とて、涼の中納言、行政の中將、これかれ行きあひ給ひて、「いかで見む。あやし

う、絶えず珍らかなる事出で来る所にてこそあれ。定めて有る様あるべからむ」

とゆかしがり給ふ。藤壺の方の孫王の君の同胞の四の君、犬宮の御方の宮の君と

いふに、物語に行きあひて、宮の君殿の、犬宮に琴教へ奉り給ふべき事なけき給

ひし有様、ほのかに聞きしは、少々の琴の音聞かむよりもめでたかりしものかな。

「今まで教へ奉らせ給はぬこと」とてぞ歎かせ給ふや」など語りけるを聞えけれ

(語釋)

(五)仲忠の手を傳習し置きたらば

(七)あて宮の機嫌あしく

(考異)

(一)上わたらせ給へり  
わらはせ給ひて

(二)なりぬるを―なりに

(三)給はめ―給ふらめ

(四)犬宮のうつし傳へた  
らむは―犬宮にうつし傳  
へたらむは―犬宮にのこ  
し傳へたらむは

(六)つけて―つきて

新築の樓の結構

ば、上わたらせ給へり。あて宮、「一の宮何事を思すらむ。この造りのよしる樓は、

(二)いみじうおもしろきことあるべかなり。内侍のかみもろ共にむかへて、犬宮に琴

教へむを、一の宮聞き給はむに、世にさる事はまたあらじを。年頃聞かまほしう

し給へど、こよに聞かせずなりぬるを、惜む手を、かの折にこそは、残なく聞き

給はめ。羨ましうこそあれ。よろづの事よりは、面白きことを、明暮聞きてあら

むことより外の事あらじ」と宣ふ御氣色むづかしければ、上にも、けに、いみじ

う有りがたき事ならむかしと思せど、物宣はで今上「犬宮のうつし傳へたらむは、

東宮の御世に、さりととも飽くまで聞き給ひてむ。こと様にはたあらじ。心のどか

に物思ふこそよけれ。此の大將の事につけてこそ、度々氣色あしう苦しけれ。い

たう腹立ち給はぬさきに」とてわたらせ給ひぬ。

かくて、樓にのほり給ふべき程の吳橋は、いろくの木をまぜくに造りて、下よ

り流るゝ水は涼しく見ゆべく造る。樓の天井には鏡かた、雲のかたを織りたる高

(語釋)

(三)「も座所したり」敷

(四)帳臺の中の床

(一〇)此處誤脱あらんか

(一一)「給ふ」なるべし

(考異)

(一)張らせさせ一張らさせ

(二)薄らかなるを一筋うちたるを

(五)半づから一こもにて

(六)天井には三尺の淺香を一天井に三尺のからか

(七)四方に薰りわたれり

一世にかうばしきよりも

(八)たる一たり

(九)言ひ一ナシ

(一一)聞きつぐ一聞きつ

麗錦を張りたり。板敷にも、錦を張らせさせ給ふ。わが御座所には、たゞ唐綾の

薄らかなるを、天井にも、張りたる板にも敷かせ給ふ。西の樓にかんのおとどの

御座所、東の樓には、犬宮の御座所なり。溜床をのみぞ、犬宮の御料は、さよ

やかにせさせ給へる。その溜床には、紫檀、淺香、白檀、蘇枋をさして、羅鈿す

り、珠入れたり。三尺の屏風四帖、唐綾に唐土の人の畫かきたりけるを、手づか

ら大將の張らせ給ひて、一雙づつ、二の樓の溜床の後に立てたり。樓の天井には

三尺の淺香を、かんのおとどの御にも、これにもかけ給へり。いといみじき香の

匂は、四方に薰りわたれり。此のしつらひ、細なる有様、造りはてたる。照り輝

き、珍らかなるを、工匠、造物所の者ども、「また斯かる事あらじ」と言ひ思ふ。

大將は、しばしにても、思ふやうにて珍らかなる様にて、かんのおとどをわたし

奉りて、見奉るべきも、犬宮のし給ふと、いとど美しく、すどろにてはいかで

見ましと、思ひ奉り給ひて、此の事を聞きつぐ人々ふかき心を知らぬは、「いか



(語釋)

(二)朱雀院なるべし

(八)相撲節會の時に倭薩女の琴を

●仲忠、朱雀院及び嵯峨院に參る。嵯峨院、俊隆女の琴を聽きに京極の邸に御幸あるべき事を約す。

(考異)

(一)し給ふべきし給へる

(二)人々一人

(四)犬こそ一犬宮

(五)べかなり一べきなり

(六)かはしはナシ

(七)厭なき事にはあなれ

いとびんなき事にはあらざめれ

なる事し給ふべきならむ」とゆかしがり給はぬなし。一二町を経て行く人々の、  
此の樓の錦、綾の、許多の年月、さまざまの香どもの香にしみたる。風吹くたび  
ごとに芳しきをめで怪しむ。

大將院に參り給へるに、朱雀古き所、珍らかなる様に、樓など造るべかなるは、

如何なる事あるぞ。男ども、「いとをかし」などところ言ふめれ」と宣はすれば、

仲忠「何で事も侍らず。犬こそその、しづかなる所に侍れば、彼處にて琴習ひ給

ふべかなり。内侍のかみ、「いまはやうく身あつしく侍るに、此の手傳へ留めむ

事、今は誰にかは」と侍るを、昔のやうにも侍らざめれば、仲忠、おほやけに暇賜

はりて、心しづかにて物し侍らむ」と奏し給へば、いと御氣色よろしくて、朱雀「け

に然るべき事なり。それこそ厭なき事にはあなれ。相撲にいとつかに聞きて、

えまた聞かずなりにしこそ、いとくち惜しけれ。はじめには、うたて心あわたど

しき様ならむ。かならず、かの末つかたに、行きて聞かむ。思ひのやうに教へら

〔語釋〕

- (一) 退位はしたれども
- (五) 仲忠が追請したる俊藤の遺書
- (六) 仲忠の
- (七) 蟻峨院が
- (八) 女三宮
- (一) 女三を兼雅が迎へしは仲忠の勤めによりしとか
- (一) 女三宮が
- (一) かく老い朽ちて
- 〔考異〕
- (二) 然りともしナシ
- (三) この一その
- (四) あべかめれあるべけれ
- (九) あはひめ見ゆるあそび給へるあはれめ見ゆる
- (一〇) 給へりしを給ひしかば
- (一四) 四世のいかうにたむしをのいかうにたむしせのいかうにたむし

れたらむ悦も、今は斯くなりたりとも、然りとも此處にこそはせめ。いと嬉しく、一の宮の御許に此の手のとまるこそ、本意なる心地すれ。さて、暇は、心しづかにて見許されがたくや物せられむ。如何に」と宣はす。大將殿、仲忠「この事をなむ。たゞ御氣色になむ侍る」「難かるべうとも、然こそはあべかめれ」と仰せらるよ。かの書の残ゆかしく思ふ様など仰せられて、まかで給ふに、蟻峨院の藏人、御使にて、御車のもとに寄りて、藏人「殿に参りて侍りつれど」「院になむおはします」と侍りつれば、必ず参り給ふべき」と聞ゆれば、やがて参り給ふ。

外の方におはしましたしけり。蟻峨「月ごろ待ちかねてなむ。然るは、いと嬉しき悦もいかでかと思ふや。この事は、一條に心苦しうて物せられし宮の、あはひめ見ゆるさまにてなむある、とものし給へりしを、その事、御許に言ひ催されたるになむ、事に觸れていと哀にうれしと言ひ給へば、行末今はいと短きに、いと嬉しくなむ。かくいと恐ろしけにて、人に厭はるよ世に、四世のいかうにたたむ事も

(二二)

(二四)

(語釋)

(三) 我を

(六) 女三宮を兼雅が迎へ

取りし事

(八) 兼雅が

(九) 京極の舊邸

(一一) 從陸の妻の父

(一二) 内方歟、妻をいふ

(考異)

(一) まことや人の聞ゆる

は—まことにある人のい

ふ

(二) いふを—きくを—の

みきくを

(四) と宣はすれば—ナン

(五) 事どもの侍りて—事

ども侍りて—事ども侍る

に

(七) なわいとよく—なわ

と—よ

(一〇) かの所ゆかしう覺

ゆること—かの所なわ

ゆかしと覺ゆるやうは

(一二) これかれ—ナン

(一四) 見しを—見しをば

—見しに

がなと、今一度とのみぞ思ひ出づる。あはれに心細き慰めにと思ふかな。まこと

(二)

や人の聞ゆるは、舊き跡あらため造られて、樓など珍らかなるさまに造りて、い

と面白きことあるべしといふを、などかいと心憂く、むげに思ひ棄てられ給ふら

む。院の御幸内裏の行幸などあらむには、こよにも對面のかたに。人々にはさや

うの序にだにいかで、となむ思ふ」と宣はすれば大將殿、仲忠「畏まりて承りぬ。

屢もさふらひぬべきを、公私と、えさらぬ事どもの侍りてあけくれ暇候は

ずしてなむ。宮の御事は某が取り申しつる事にも侍らず。ことに觸れて、忝

く、如何にと畏まり給ふる事をなとなむ、いとよく仕うまつるを、思ふ事ものせむ

と宣はせてなむ」と聞え給ふ。院、嵯峨かの所ゆかしう覺ゆることは、昔の滋野

の王布留朝臣のなはいはうは、わが祖母にいまそがりし宮なり。俊蔭朝臣の母の

源氏は、御息所腹のまた妹なりしかば、我まだ親王なりし時かの祖母宮の住み

給ひし時、いとおもしろかりし所なりしかば、これかれ春秋文作りにもものして見

給ひし時、いとおもしろかりし所なりしかば、これかれ春秋文作りにもものして見

給ひし時、いとおもしろかりし所なりしかば、これかれ春秋文作りにもものして見

給ひし時、いとおもしろかりし所なりしかば、これかれ春秋文作りにもものして見

給ひし時、いとおもしろかりし所なりしかば、これかれ春秋文作りにもものして見

給ひし時、いとおもしろかりし所なりしかば、これかれ春秋文作りにもものして見

給ひし時、いとおもしろかりし所なりしかば、これかれ春秋文作りにもものして見

給ひし時、いとおもしろかりし所なりしかば、これかれ春秋文作りにもものして見

給ひし時、いとおもしろかりし所なりしかば、これかれ春秋文作りにもものして見

給ひし時、いとおもしろかりし所なりしかば、これかれ春秋文作りにもものして見

給ひし時、いとおもしろかりし所なりしかば、これかれ春秋文作りにもものして見

給ひし時、いとおもしろかりし所なりしかば、これかれ春秋文作りにもものして見

給ひし時、いとおもしろかりし所なりしかば、これかれ春秋文作りにもものして見

給ひし時、いとおもしろかりし所なりしかば、これかれ春秋文作りにもものして見

給ひし時、いとおもしろかりし所なりしかば、これかれ春秋文作りにもものして見

給ひし時、いとおもしろかりし所なりしかば、これかれ春秋文作りにもものして見

給ひし時、いとおもしろかりし所なりしかば、これかれ春秋文作りにもものして見

(語釋)

(三) 仲忠の心

(五) 侍りてむ歟

(六) 年ふかく参りしは二年  
若く思ひ入り歟

(七) 誤あるべし

(八) 犬宮

(考異)

(一) いとナシ

(二) こかむの事おほえて  
— ころむの事もはくて

(四) 給ふに— 給へば

(九) 行幸— みゆき

しを、今ほのかに思ひ出づるに、いと哀にゆかしき所になむあるを、如何なる業  
 をせらるべきぞ、然るべき事あらばこかむの事おほえて、交らまほしくなむある」  
 と仰せらるよを、常に古のこと思ふにも聞くにも、哀にのみ物おほえ給ふに、  
 覺束なかりつる事も、明らかに宣はするに、面白う忝うおほえ給ひて、仲忠あ  
 なかしこ、御念佛にもなどは、必ず参り侍りて。昔がたは、年ふかく参り侍ら  
 で、思ひ給へ憚りしを、今は快く、何かの事のをりにも、仰言のまよにこそ、  
 背かずは侍らむと思ひ給ふるに、仲忠こそはへだてあらためられめと思ひ給ふる  
 うちに内侍のかみ本意ありて、今はかの所には侍らむ。ついでに、一の宮の若君  
 の、今はおよすけて、琴弾かまほしうし給ふに、教へさせ侍らむとてなむ、大  
 方にては、静ならず侍れば、すこし離れて高き様なるもの建てさせ侍るを、然こ  
 とくしく人の奏するにや侍らむ」院、大におどろき興ぜさせ給ひて、嵯峨行幸  
 よりは、それこそ天下に面白きことはあなれ。朱雀院は、内裏にても、相撲のをり

(語釋)  
(一) 琴の

(二) 俊隆を遣唐使にやりし譯なるに

(三) 俊隆の恨を

(四) 餘命幾許もなき身に

(五) 俊隆女に

も聴き給ひけり。俊隆朝臣の、唐土よりのほりて、琴を奉りしに、その音、例の琴にも似ず、響よくおどろくしかりしかば、弾きとどめてとものせしにも肯かず、聞かまほしかりしかども聴かせず、斯かることなる事を好みし間に、「文の道をばさる方にて、この方の師にせむ。女宮たちにも教へ奉られよ」と度々言はせしにも肯かで、かの内侍のかみを、父母のかなしがる人にて、限なく勞はしう、またなきものに思ふと聞きて、心もありしかば、女方よりも度々ものする事ありしにも、いと心強う、心深かりし人にて、公を恨み、世の中を知らでなむ、身をも心づから沈めてし。その折の大臣どもの、「この國の爲の、限なき面目を弘めむ」と言ひ出だし立てし事を、此處には惜しみ思ひしかひなく、我一人に怨を留められしになむ、今に飽かずあはれに思ふ。「この御世にだに、かの勘事を、今はかく残なき身に許されなば、如何に嬉しからむ、となむものしつる」とかならず傳へられよ。それを聞かむには、琴の聲を、あくまで弾きてきかせ給はどこそ

〔語釋〕

(一)母が

(二)嵯峨院が京極へ御幸あるべき事

〔考異〕

(三)あるべからず―あるべきならず

(四)未詳

(五)父君―父宮

(六)兵衛など―兵衛かれと

龜仲忠樓上にて琴を教ふべき由を犬宮に告ぐ

は、けにと心安く覺えめ」大將、仲忠「昔の事は、委しうもえ知り給へず。仰せ

ごとは、いとよく物し侍らむ。今はほれぐしうなりて侍れども、そのうちにも

参りて、いとよく聞召させ侍りなむ」院、うち笑ませ給ひて、嵯峨「否。それはえあ

るまじき事なり。公私となくならはれたれば、かの兒に教へはてられむ末つ方

なむ、いと聞かまほしき」などさまぐくに、古の哀なる事も、いさよかほけくし

からず仰せらる。おはしまさむこと、免あるべからず宜はず。院のうちしつらひ

ておはします。年高うならせ給へる様ならず、いと清らにめでたし。月の十五日

には、僧あまた召して、御念佛、殿上人、上達部あまたして、それに堪へたる人し

ては、さうがうせしめ給ふ。院のうち、儀式いとなし。かくてまかで給ひぬ。

犬宮の御方には、同じ母屋の西に、けに小き几帳立てて、しつらひ給へり。小き人

人、さよやかなる碁盤にて、碁うち居たり。御手の、綾のひとへの黒きよりさし出で

給へる、いと美しけにおはす。父君、仲忠、兵衛など、犬宮といかどうち給へる」とて

(五)

(六)

(語釋)

(四) 仲忠が

(五) 女一宮

(六) 誤あらんか

(考異)

(一) これら見つけて一これらにつけて

(二) いふがひーいひがひ

(三) 美しと一うれしと

見給へば、恥ぢ給ひてうち給はず。これら見つけて走れば、「いといふがひなき御供

人かな。裳著たる足音にはあらずや」と宣へば、大人ども「けに」とて笑ふ。大將は、

犬宮に聞え給ふ、仲忠「弾かまほしくし給ふ琴習はい奉らむ」と宣ふよりいと嬉しと

おほして笑み給へり。いと花やかに、見まほしう、愛敬こほるばかりにておはする

を、いと美しと見奉り給ふ。仲忠「琴習はせ給はど、宮には聴かせ奉らでなむ習ひ給

ふべき。いと面白うをかしき處に率て奉りて、かんのおとどはおはしましなむや」と

宣へば、犬宮「さりととも、宮おはせではいかでか」と宣へば、仲忠「いとくち惜し

く。さては不用に侍なり。人に聞かせで、仲忠、かんのおとどなむ、人に教へ侍

る。しばし念じ給ひて、おはしませ。さてよく弾き取り給ひてむ程に、宮はおは

しましなむ」と聞え給へば、犬宮「さらばよかりなむ。などて宮には隠し給ふぞ」

仲忠「みな人の聞くにも弾き給ふは、この侍る琴をなむ、さは弾き給ふ。これは異

なり。人に聞かせつれば、聲もせず、みならず侍り。宮も二の宮もおはせぬ所

(語釋)

- (一) 犬宮が氣に入りの乳
- (二) 犬宮の心、女一が犬宮を寵愛せらるるに
- (三) 子どもの方は躓されてもあるべけれど
- (四) 前に「見つけて走れば」とありし童ども也
- (五) 女一宮に語る也
- (六) ちやははーちやはははーちくはく
- (七) 久しくや宮はー久しくやは宮
- (八) 程一ナン
- (九) 宣はむずらむ一宣はすらむ
- (一〇) いづら一いづらにや
- (一一) 暮方一くれん方
- (一二) さふらはで参りて一さふらひて
- (一三) 仲涼、仲忠を訪ふ。櫻の噂、犬宮を隙見す。歸りて妻今宮に犬宮の美しさを語る。
- (一四) 物仰せ一物を仰せ

なり。いと面白くなむ侍る」と聞え給へば、犬宮「さてちやはは」と宣ふは、中に  
 思す御乳母なりけり。仲忠「それは近う候ひなむ」犬宮「さば、宮、羨ましと宣はむ  
 な」仲忠「されど、聲きかぬ程にこそは。侍りて、御乳ほしうおはしまさむ程は、  
 ふとおはしまさせてむ」犬宮「さてなほ久しくや、宮は見奉らざらむずる」仲忠「な  
 どてか。たどしばしが程なり」と聞え給ふにもいと哀に、まつはし奉り給へる  
 に、兒におはするは、こしらへてもおはしなむ。宮いかに思し宣はむずらむ、と  
 いとほしけれど、然るべき事ならねばと思す。仲忠「御前に乳母たちさふらひ給  
 ふや。いづら、この駒競の音しつる人々も参れ」とておはしぬ。暮方になりけ  
 り。

仲忠「朱雀院に久しくさふらはで参りて、まかでつるまよに、嵯峨院に召ありつれ  
 ば、参りて、今まで侍りつるを、いと恐ろしう、御年の程よりはさかしう物仰せ  
 らるよ君にこそおはしませ。此の院の御前にさふらふは、恐ろしう、萬に宣ふ事



(語釋)

(四)未詳、誤あらんか

(五)當方より御尋ね申さんと

(六)同じ都に住む事となりては

(考異)

(一)様をかー様をかかつ

(二)いとーナシ

(三)などは面白き事はあちむかしーなど面白き事なむせむかし

のらうくじく愛敬つき、いかなる様をか御覽じつけられむ、とこそ思ひ侍れ。

まことや 此の樓作らせ侍る事を、今よりはいとことくしう聞召しつよ 尋ね

問はせ給ふに苦しくなむ。御幸あるべく仰せられつる。本意なく騒がしくやあら

む。果て方になどは、面白き事はあらむかし」など聞え給ふほどに、涼の中納言

おはして、涼久しく對面の侍らねば、参り來たる。嵯峨院に参りて、まかで侍るな

り」と聞え給へば、仲忠「あな苦し。何事ならむ。院の、琴を興せさせ給へれば、來

給へるなり」と宣ひて、仲忠「そのことのためひにやあらむ」とて、仲忠「それへだに

こそ参り侍らめ、と思ふ給へれ。たゞ今かく侍り」とて、直衣著かへ給ひて、西

の對と渡殿の南の間にて、對面し給へり。涼一所にては、費束なからず承りな

む、とこそ思ひ給へしを、本意もみな違ひにけり。いにしへ契り聞え侍りし事ど

もは、皆ぞ思し忘れたりける。遙なる程に住み侍りし折にも、とりわきて、いか

で對面もがな、と思ひ給へしに、たまくの對面の有りがたくて侍りしかば、極

〔語釋〕  
 (三)我と同じ都に

〔考異〕  
 (一)心安く—心安き  
 (二)給ふを—給ふと  
 (四)一所に思ひの—一所に  
 にあらず思ひの—一所に  
 よくもあらず思ひの  
 (五)思ひ—思う

(六)殿—ナレ  
 (七)吹上の—吹上が

なくこそ嬉しく思う給へしか。何時しかも、一所にて、思ふやうに聞え承りて  
 心安く遊をも、とこそ思ひ給へしか」など聞え給ひて、遠先は、いみじき大車だいしやの  
 事を思すなるこそ。涼には隠し給ふを思う給へれば、如何つらしと思ひ聞えぬ」  
 大將、仲思「いと怪しく。けに一所に思ひの外の住居にてさふらはせ給ふ心慰め  
 には、けに明暮きこえさせ承らむを、慰めにせむ、となむかねて思ひ給へしを、  
 何の、いふらむやうに、心静にも侍らすなむ。昔の心ばへ、たと思すらむ心のや  
 うに。今は、いま少し睦まじうなむ、思ひ聞えさする」中納言、遠いでや、かの  
 京極殿を、世の中ゆすりて、珍らかなる様に樓などつくらせ給ふと承るを、う  
 とき人々だに、定めて有るやうあらむと物し侍り。行政の中將、左兵衛督なども  
 のせられしと侍りしも著く、になく面白き事侍るめるを、などが、昔の御心ばへ  
 の名残あらば、けしきばかりも聞かせ給はざらむ」とて恨み聞え給へば、大將殿、  
 仲思紀伊國の吹上のはまの濱へにて契りしかひはなぎさなるかは

(六)



中納言、涼いでや、

(語釋)  
(一)てれかくしの詞

涼吹上の濱への契りなごりなくかひあることは見せじとぞ聞く

(三)「なごり」は「なごり」歟

御物がくし、なほあらかじの御詞などは、琴などの音よりも勝れてこそおはすれ。萬の事、いかで、かくしもみな具し給ひけむ」と笑ひ給へば、大將もいと快く

(七)所々にて「歟」一本「心々にとて」

うち笑ひ給ひて、仲思「何事をかは隠し聞えむ。物覺えずなりにて侍るなごり、京極は、然御耳とまるべくも侍らぬものを。高き物おもしろくば、朱雀門、旗鋒な

(考異)

どを、いかに絶えず見る人侍らまし。静なる處なれば、時々もまかり移りて、心安く行をもと思ふ給ふるなり」など聞え給ふ程に、入日のいと赤くさし入りた

(二)聞えむ…なごりー聞ゆらむともおぼえずなりて侍るなごり

るに、犬宮白き羅のほそながに、二藍のこうちぎ著給ひて、長は、三尺の几帳に

(四)心安く行をもとー心安くもとー心安くも

足らぬ程なり、御髪は、絲をよりかけたる様にて、細脛にはづれたり、扇の小ささ

(五)白きー白

さけ給ひて、兒、大人ども三四人添ひてあれど所々にとて、簾のもとに、何心な

(六)こうちぎ著ーこうちぎを著

く立ち給へるに、風の簾を吹きあけたる、立てたる几帳の側より、傍顔の透き

く立ち給へるに、風の簾を吹きあけたる、立てたる几帳の側より、傍顔の透き

〔語釋〕  
(一)涼が

(二)汝等が犬宮の側につきて居らぬが惡し

(四)「ら」とは「らべ」歎

(五)引歌未考

〔考異〕  
(一)「うちはえてーうちはづれて

(六)侍るーるにナシ

て見え給へる容態、顔いと花やかに、美しげに、あなめでたのものやと見え給ふを、  
え念じ給はで、笑みて見遣り給ふに、大將あやしと見おこせ給ふ。あらはなれ  
(二)ば、仲思いと不便なりや」とて立ち給へば、遠何の不便なるぞ。若き時は、うち  
はえて、ほのかに人に見え給へるこそ美しけれ。世の中のよしり給ふ人も、む  
げに見ぬは、心地むづかしき時は、いでや、如何ありけむと見ゆるものなり。い  
みじう、世に物思出で來ぬべき世なめり」とて飽かず美しくおほえ給ふ。仲思「ま  
たこそ見え給ふ」とて入り給ひて、御乳母たちに、仲思「いとあさましう、云々な  
む有りつる。いみじきわざなり。近うあらぬわざ、いと惡し」と宣へば、乳母「蝶  
の、御簾のもとに飛び侍りつるを、この幼き人々の、われも捕らむくと騒ぎ侍  
りつるを、御覽じつるならむ」と申せば、仲思「いと、此おとなども、いはけなし  
や」とて出で給ひぬ。仲思「かた思ひはとこそ言ひ侍るなれ。くち惜しきわざかな」  
(五)と宣へば、遠「まめやかに、いといみじう、美しうおはしつる様かな。何を思すらむ。  
(六)

(語釋)  
 (一) 波の子をいふ

(考異)  
 (二) あが佛—あが君佛

(三) にも—しもナレ

(四) 「えや」ナレ

彼處かしこにおはする兒こは、この御同おなじ程ほどぞかし。いと醜みにくく物ものし給たまふに、思おもひわづらひ侍はべりぬるものを「など宣のたまふ。仲忠ちゆうちゆう」氣色けしきをかしけなるべし。内侍ないしのすけ知り聞きゆめりき」とてゆかしう、如何いかならむとおぼえ給たまふべし。中納言ちゆうなごんご殿、大將たいしやう殿のたまに宣のたまふ、波「あが君きみく、かの御手ごての限かぎりをつくして、教をしへ給たまふらむは、さる事ことはありなむや。人に實ひじになべて聽きかせ給たまはじ。たゞ、片時かたときの程ほど、いと聽きき侍はべらまほしきを、必ず聽きかせ給たまへ」と慇ねんころに聞きえ給たまへば、仲忠ちゆうちゆう「あが佛ほとけ、隠かくし聞きえさせず。いと面白おももしろき事ことは、あるべきことにも侍はべらず。兩方ふたかたの院いんの上うへも、怪あやしう聞き召しめして、仰おほせられつる。この侍はべる所ところは、いと騒さわがしく、宮みやたちもあわたどしうおはしまして、人繁ひびしひけれは、たゞ、犬宮いぬみや一人ひとりを、かしこにわたして、仲忠ちゆうちゆうが教をしへ奉ほうるべきなり。内侍ないしのみも、身みもあつしう物ものし給たまふうちに、あわたどしき人ひとの扱あつかひなどせられて聞きゆとも、心靜こころしづかにも物ものし給たまはじ。犬宮いぬみやも、いといはけなくおはすれば、はかしく、えやは習なひ給たまはざらむ。今は、昔むかしのやうに、聞きかまほしき様さまも、え彈ひきなされずや」

(一) 語釋

(二) 仲思が樓へ移ること

(三) 妻ちま宮

(五) 巨勢氏曰、「少しの事は」にて多少の風情はあ  
るもの也との意なるべし

(考異)  
(二) 思ひ—思う

(四) こそ—こそは

深「さて、何時かわたり給ふべき」仲思相撲のこと、國々騒がしき事ありて、今年はあるまじとか聞き侍りつる。もし然あらば、立たむ月の間にやとなむ思ひ給ふる」<sup>(二)</sup> 遠<sup>ちか</sup>近く侍るなるは、さば必ず<sup>かなら</sup>く」と聞え給ひてわたり給ひぬ。

中納言、御方に、遠いと美しきものをも見侍るかな。大將の御方にまうでたりつるに、犬宮、しかぐなむ。天下のあて宮、さらに今の程よりはかくものし給はざりけむ。すべて、斯ばかりの容貌は、此の世に又はあらじとなむ見えたる。いと

をかしかりける君かな」今宮あさましく今に見せ給はぬこそ。いかゞものし給ふ」遠いで、更にめでたう、聞えむ方もなしや。大人の世には、用意などしてもてなしすれば、少しのことあり。これは、いと美しくこそおはしけれ。髪の様

など、まだいと幼けなる顔の、けだかく美しけなるに、髪をつやくとよりかけたる様にて、懸かりたり。たゞ兒にかづらをうち懸けたる様にて、何心もなく、蝶にやありつらむ、物の飛びつるを、扇さよけてうちあふぎ給へるこそ。それに、

(語釋)  
 (三)「あちむ」の下脱文あるべし

(四)涼の娘

(七)格別の御用の外は

(八)母に

●仲忠、犬宮の修業中は一切人に逢はずまじき由を女一宮に告ぐ。女一宮、犬宮に名殘を惜む。

(考異)

(一)姿にぞ物し給ひつる  
 —かたちにも物し給へる  
 (二)疾く—とう  
 (五)何事にも勝れたりり  
 —何事もすぐれたる

(六)殿—ナシ

恥かしう、なまめかしき顔姿にぞ物し給ひつる。側より見るだにあり、向ひ居て

あらむは。大將、いと疾く見つけて、いみじと思ひて、乳母を言ひつるにやあら

む。今年は、琴習はさむとて、内侍のかみもろ共に、京極に移るべきなめり。此

の姫君、容貌はいとこよなうは劣り給はじを、何事にも勝れたりける上手の筋に

て、今より、何事にも世の中を響かすこそいと妬けれ。小き子どもいとをかし

けなるを、大人につくりてぞありける。萬の事、あやしく珍らかにものし給ふ人

にこそあれ。女兒も、いかに見るかひありと思すらむ」など宣ふ。

大將殿、宮に、仲忠、中納言の、この京極の事にて物し給へるに侍り。斯く、上下

かねてより、事々しう、公私ともものし給ふを、思ふやうに弾きつたへ給はず

ば、如何にくち惜しからむ。生れ給ひし時よりだに、如何ならむと、安からず人

人はものし給ひしを、「異なる事なくば、公事をものせず侍らむ」とて院に暇申

し侍りしを、來む月よりとなむ思ひ侍る。犬宮は、いとよく「離れ奉り給ひてあら

(八)



(語釋)

(一) 女一が犬宮に逢ひに來たらば

(三) 女一を來させずに

(六) 誤あるべし

(七) 俊隆女在世中に

(考異)

(二) お前に見に—御前の見給へに

(四) 見させ—見せ

(五) 給ひぬれ…いとよく—給ひけれ七つになり給ふ犬宮いとよく

(八) 御世—「御」ナシ

む」と宣ふ。お前(一)(二)に見におはしまさば、院宮(三)たち、また誰(四)も騒(五)がしう侍らむに、

本意(六)なかるべし。おはしまさせで、たゞ一所(七)をなむわたし奉りたる、とて門(八)もあ

け侍らじとす」と聞え給へば、女「いく久しさかは」と宣へば、仲忠「いかでかは。

いと疾くは、みな習はせ給はじ。物の心くはしく見させ給ひてこそ。内侍(九)のか

み、四つより三歳こそ、他遊(一〇)せられて習ひ給ひぬれ。これは七つになり給ひぬれ

ば、いとよく、然りともいと疾く弾き給ひてむ。今(一一)まで習ひ給はぬ、いと心もと

なき事なり。院、内裏(一二)の御書などの事により、徒ら(一三)に年月を過し侍りにたり。世

の中(一四)もいくばくかなき物か、なほ一歳ばかりとなむ思ひ侍る。内侍(一五)のかみ、心細

くあつしく物し給ふ。この御世(一六)に、これを覺束(一七)なからず習ひ給はむこそよから

め」宮、女「いかで、いと然(一八)まで、戀(一九)しく見ではあらむ。時々は渡りてこそは見

め」と宣へば、仲忠「仲忠も、おほつかならず、夜などは参り來なむ。それを御

覽(二〇)せば、慰ませ給ひてむ」など聞え給へば、女「それは、やがて見ずともありな

(語釋)  
 (二) 誤あるべし

(考異)  
 (一) 更に「さらば

(二) なくて「て」ナレ

(四) いかでと「いかでか

む。犬宮いぬみやの事こと」といとまめやかに宣のたまへば、仲思なむし「いとまがくしき事宣ことはす。かく宣のたまはせば、更に二三年もわたし奉らじ。いと心憂うれく、戯たはれにくよ、かよる事は仰おほせらるべしやは」とて怨うらみ聞き給たまへば、女に「これこそまがくしかめれ。琴彈ことひく人は、たゞ人見みず、離はなれてや習ならふ。靜しづかなる處ところは然さもありなむ、二年ばかりは」とあれば、いとあさましく、幼せまければ、何心なにこころなくて、何時いつとも知らで離はなれてあらむと、ものしげにこそあらむなれ。しばし、人々ひとびとの物ものせらるよ時とき、彼方あなたにあるをだに、心こころもとなり纏まつすものを、佗わしともこそ思おもへ。如何いかなるべき事ことにかあらむ」といと心苦こころがしげに宣のたまへば、大將たいしやう、仲思なむし、理ことわりなれど、何事なにことも、心こころに入れて習ならひ移うつすにのみこそ、人ひとよりことに侍はべれ。幼せまくおはせむも心苦こころがしとてやは。思おもふやう侍はべるものを。然さらば聞きえさせじ。ともかくも御心ごこころなり。此處こゝには教をへ奉らじ」とまめやかに聞きえ給たまへば、さてあべい事ことならねば、宮みやも、この事ことを、心こころことにいかでと思おもす事ことなれば、女に「さらば念ねんじてこそあらめ。いと忍しのびて、あからさまに

(踏舞)

(二)女一さへ入れぬ故他人は一切入れぬと断りて

(三)犬宮と雜遊なるべし

(四)他所に居るならば我を

(考異)

(一)給はゞやむづかしう  
給はゞやまくましう  
給はゞやかましう

(五)琴の「の」ナシ

(六)念じてやあらむ一念  
じてあらむ一念じてや  
はす一念じてやおはする

(七)密におはせよ一密に  
おはせよかし

などは、などか物せざらむ。なほ此處には聞かせじとなめり。かんのおとど、いかでか、心靜に聞かせむ」と常に物し給ふ事はあらずや。その程だに然らずば何時」と宣へば、仲思いかどは、然こそは。それも、末つ方になむ、忍びて渡らせ給はむを、此の人々聞きつけ給はゞや、むづかしう、人々のものし給はむにこそ、お前をだに、とて過し侍らむとなり」と聞え給ひて、今ぞ思ふやうなる心地し給ふ。

宮 女「久しう見奉らざらむを」とて明けぬれば暮るよまで、犬宮雜遊し給ふ。

女「外にては、戀しく思ひ給ふべしや」と宣へば、犬宮「如何は。琴の弾かまほしければ、念じてやあらむ。密におはせよ。この雛にもや聞かせじとする」と宣へば、

いと哀にをかしうおほえ給ひて、女「などてか。率ておはせ。大將のをばきくとぞ聞ゆる。雜遊は時々をし給へ。琴を心に入れ給へ」とて、女「いと面白く弾かむと思せ」など聞え給ふに、久しく見奉り給はざらむ事のいみじう戀しくお

(語釋)

(一)犬宮の供して京極に行すべき人々の

犬宮の京極に移るべき日の準備。

(三)女一も同行して

(四)女一宮

(五)女一宮へ

(考異)

(二)うすものうすものなど

ほえ給ふべきを、うちまもり奉り給ふに、涙のこほれぬべければ、今少しも聞え給はず、苦しと思すまじき事を語らひ給ふ。

大將わたり給ふべき人々の装束、宮にもかんの殿にも分たせ給ふ。御渡の料とて、

人々にも奉りたり。内侍のかんの殿にきぬ百疋、綾二十疋、織物、うすもの、染草

などは、ことに奉り給ふ。尾張守に料を賜ひてせさせ給ふ。宮の皆あり、綾同

じ數なり。同じ日、宮にもわたり給ひて、三日過して還り給ふべし。大人、かんの

殿に三十人、わらは四人、宮の御方も同じ數なり。女御殿のみぞ、これは數勝りた

るといふべきなり。宮の御方のおとなは、皆還り參るべければ、この數へのうち

には入らず。容貌ども勝れてめでたし。かんの殿の御方に、少しねびたるが交り

たりしも、なほ人に勝れて、もてなし有様心憎くめでたし。この御方の宮、はじめ

の時に整へられたりし、なほ心有様目やすくよしと、女御殿の御方に見給ふ人を

ば、此處に賜ひなどもし給ふれば、いと類なしと見えたり。

(五)

〔語釋〕

(二)唐松に孔雀を縫はせ給へり。歟、一本唐とりくざくを縫はせ給へり。

(五)二條は三條歟

〔考異〕

(一)かんの殿ないしのかみ

(三)かたをうつしーかたくさむら

(四)虫鳥ーむら鳥

(六)左右のー左の右め

(七)参り交らざらむはーまじらざらむはーまみらざらむは

彼處にわたり給ふは八月十三日なり。大將、かねてよりも心殊にてわたし奉ら

むと思しければ、内侍のかみの御車、新しく調ぜさせ給へり。かんの殿のは、濃紫

の絲毛に唐松にくさくを縫はせ給へり。宮の御は、二藍に雲襪、秋の野のか

たをうつし、薄、虫、鳥のかたを、いろくに縫はせ給へり。いとなまめかしう、

様々にをかしう、鞞にも唐草のかたを縫はせ給へり。下簾も、かうの地に羅

かさねて、小鳥、蝶などを縫ひたり。右大殿も、もろ共におはして、三日過して

還り給ふべし。右大將殿も、御前いかめしう調へ給へり。左の大殿の御方にも、人

人の容貌よきを仰せられ、院よりも四位、五位、六位、かたちよく年若き、内裏

の藏人經たるも擇びて、かの一條京極なる所にわたり給ふなるに、仕うまつる

べきよし仰せ給へれば、我もくと、賀茂の祭はさるべき限こそあれ、これは左

右の大殿、院とよのへさせ給ふに、世の中に物のおほえある人々、「この中に参り

交らざらむはいみじき恥なり」と申し、装束を調へまどひたり。馬鞍よりはじめ

(語釋)

(一)未考

(二)海邊の樓を模倣にあらはしたる裳

(考異)

(三)上藤車四つには一上藤四車あるには

鶴犬宮京極に移る。行列、女三宮の感傷。見物人の評判。

(四)給へり給ふ

て、ひどきて急ぎたり。大將、仲忠「かんの殿の御前どもは、若やかなる、女郎花色の下襲を著よ」と宣ふ。仲忠「宮の御方は、うすき二藍を著よ」と宣ふ。女房車ども、かんの殿の上藤三車は、紅のうちあはせに、はしの織物、つぎくのは朽葉、かうのかさね色の地摺の大海の裳なり。宮の御方は、上藤車四つには、紫苑色のうちぎに、赤色に二藍のからきぬ。次々のは、薄二藍、をみなへし色などのを著て、青摺墨摺の裳なり。童も、おなじく著せたり。夏の縁の上のはかま著たり。

畫詞

こよは大將殿の御方、中のおとど。人々参り集まれり。

酒の時なり。殿の中、宮たち、殿ばら、いだし車し給ふ。居集まれり。大將殿は出で居給へり。院より人々参り、また「出で給はむ、見奉れと仰せられつる」とて左馬頭源宗良さふらふ。やがて、宮の御方の女房車の、次第立てて、寄すべき事おこなふ。同じ時に、かんの殿も出で給ふ。車の次第定めにくければ、

(語釋)

(一)「給はむとす」なるべし。「本」給はむも」  
(二)此方の車の數を多くして二十五にせむと也

(考異)  
(一)どもは一ナシ  
(二)どもは一ナシ  
(三)いと一ナシ  
(四)巳の一ナシ

(五)右の大殿一右大臣殿  
(六)いかめし伯父のいかめしうちも  
(七)仕うまつりつかまつり  
(八)子ども一子どもの

(九)かけ給へば一し給へば  
(一〇)及ばざらめ一及ばね  
(一一)こそ一こそは

大路をわかれて入り給はむと、西の御門より、内侍のかんの殿、東の御門より、

宮の御車 參るべきなり。その御前どもは、宮の御方に、院より四位の殿上人十人、

五位三十人、かたちいと清けなる六位二十人、殿上わらは二人、日の装束どもいと

麗しくしつと參れり。これに右の大殿など、すべていといかめし。伯父の、中納言、

宰相などにおはするは、車にて仕うまつり給ふ。中納言の君たちは馬にて仕うま

つり給ふ。かんの殿に四位八人、五位二十人、六位十五人、六位といふも、受領の

子ども、雅樂助、主殿の助、兵衛の左右の尉などいふなり。大將、東宮大夫かけ給

へば、帶刀十二人を、中よりわけて仕うまつらせ給ふ。たどの四位、五位もいといか

めし。黄金づくり、たどの絲毛、此方のも二十有るを右の大殿、兼雅「これこそ現

なる移ろひなれ。左の大殿の、いかめしうて、二方もてかしづき給ふに、己か劣

るべきか」とて、兼雅「子どもの數こそ及ばざらめ、車は、いま五つ、此方のはま

た添へむ」と宣へど、仲忠「便なく侍らむ。仲忠が、これはわたし奉るにこそ侍

(語釋)

(一) 女一宮

(二) 「九」は「三」の誤なるべし

(三) 俊隆女が

(四) 仲忠の事はいふまで

(五) 俊隆女が

(六) 仲忠の事はいふまで

(七) もなし

(八) 之に比べては

(九) 兼雅の持物たる女三宮

(一〇) 俊隆女の

(一一) 「など」とて「なるべし」

(一二) 大宮、正頼の妻

(考異)

(一) あひなし—あいなし

(四) おはして—おはしぬ

(七) もてなし給ふ—ナシ

(九) 儀式—けしき

れ」とて制し聞え給へど、兼雅「知りてあひなし」とて、かねてより然思ひ給へりければ、なほ二十五なり。

時なりて、殿は御車寄せさせ給ふ。宮の乗り給ふ御几帳、左大殿、大將、とさし給へり。乗り給ひぬるすなはち、大將、九條殿に馬を打ちおはして、南の廂に出

で居給へるを、仲忠「はやく」とて乗せ給ふ。几帳も、殿二所してさし給へり。

宮の御方々の人々見て、「殿をば聞ゆるに限もあらずや。斯う言ふばかりもなくめでたき大將のもてなし給ふ御様よ。帝にて子を持たらむも、めでたくも有るまじ

からむ。この子もてかしづき給ふは、いみじきものかな」とめであへり。次々の

車ども、乗りつどきて出で給ふ儀式、けにいとめでたうあらまほしき様なり。宮見

出だし給ひて、女三「いかめしの人の御幸や。一人にても、斯く子を産みけむよ」

などで、わが姉宮を思ひくらふるに、斯う、子孫まで、我がまよに廣がり充ちて

のよしる、かよる中らひにて見るにも、よく物を言ひ思ふべくもあらず、あたを



(語釋)

(二) 女三の心

(四) 女一宮、仲忠の妻

(六) 仲忠程立派に

(七) 長恨歌の衛士が蓬萊宮に到りし故事を幻といふ語によりて思へる也

(考異)

(一) なる宮一ナ

(三) いらぬ一入りつる一入りぬる

(五) いはザーいはじ

(八) あらはれのーあちはなる

みるぞ心憂きや、と思せど、もとより怪しきまで御心よくあてなる宮におはすれば、

然るべきにこそあらめ、梨壺のみ時々に見聞きてむ、けに言ふとも、まづ一の

御子を産み給へらましかば、如何にかはあらまし」とのみ身の憂きのみ思す。殿

宮の御方に入り給ひておはす。

大將いと疾う、宮の御車おほく内にいらぬ程におはして、宮の御車ちかう、院の

御方ともうちまじり給ふを見れば、夕映して、いとみじく色うるはしう、花や

かに清けに見え給ふを、そこばく立てて見る車ども、「宮何を思ひ給ふらむ。たど

人にはさらにいはず、宮たちと聞ゆるも、更にいと斯ばかりおはするなければ、

めでたしと見給ふらむかし」と人々やすからず言ふ。宮の御伯父の、中納言と聞

ゆる、御車にさし寄り給ひて、簾おしあけて、中納言「さも幻のやうにも」と聞え

給へば、打ほよ笑みて、女「蓬萊の山にまかりたりつるや」と宣へば、中納言「さて

も餘にこそ今日は見ゆれ」と宣ふ。一つ車に乗り給へる殿ばら、「あらはれの大な

(語釋)

(一) 宇の東宮の御世には  
犬宮が寵を專にすべしと  
也

四「給へれば」歎

(七) 仲忠が

御到者、樂宴。

(考異)

(二) かしづくとーかしづ  
くくと

(三) とぞあらむーにぞな  
らむ

(五) ゐざりーナレ

(六) なまめかしくーなま  
めかしう

る急とし給ひし、女御殿の宮腹の大將の姫君のめでたき幸の料なりけり。藤壺  
のよしり給ふも、かの東宮の御世に、この犬宮の御世の中とぞあらむ。我らが  
しづくと思ふ子は、本意もかなはで、皆その折の擇りくづとぞあらむ」など宣ふ。  
車の有様よりはじめて、世の中の人々めで騒ぐめり。

おはし著きて、まづ主方にて、かんのおとどの御車、西の御門より入れて、西の

對の南に寄する。殿を二方しつらひ給へれど、西の對におはすべきに、宮の御車、

東の對の南に寄す。それより殿にわたり給ひて、まづ宮下り給ひて、四尺の裾濃

の龍膽の御几帳さして下り給ひぬ。犬宮の下り給ふには、同じ色の三尺の几帳さ

して下り給ふ。大將、仲忠「乳母抱き奉りており給へ」と宣ふに、犬宮「いな。宮

の御様に下りむ」と宣ひて、小き扇さしかくし給ひて、靜にゐざりおはする様、今

からいとなまめかしくせさせ給へるを、いと美しくゆよしく、覽え給ふ。殿ばら

は、東の對の釣殿に居並み給へり。

(語釋)

(一)「三」は「今」の誤なるべし

(考異)

(二)左の大殿—左大臣

(三)右の大殿—右大臣

(四)御前に—御前の

●樓上の景色。

三日の御賄まかひは、宮みやの御前ごぜんの殿上人てんじやうびまでおしなべて左の大殿(三)、一日のは右の大殿(三)、三日のは大將殿たいしやうどの宮みやの御前ごぜんの、内侍ないしのかみ、犬宮いぬみや、淺香せがうの折敷せしき十二、紫檀したんの高杯たかつき、羅らの打敷うちしきなり。上達部かんだちののお前に、孟度きかづたひく々々になりぬ。かんの殿どのの御方ごかたより、心こころ殊ことにまうけ給たまへるかづけ物もの、南みなみの庭にはより取續とりつづき歩あひみたる、色々いろくにしかさねたる。いと清きよらにうるはしく、薰物たきものの香かなど匂にほひめでたし。六位むいの藏人くらうきには、織物おりものの三重みへがさねの小桂こうちき、三重襲みへがさねのはかま、帶刀たはきには、羅らのこうちき、一重襲ひとへがさねのはかまなり。これより下しもには更さらにも言いはず。上達部かんだちの、殿上人てんじやうびのさふらひ、御隨身みずみじん、御前ごぜんの人々ひとびと、皆みなかづけ給たまふ。かんのおとどの御方ごかたの御前ごぜんには、大將殿たいしやうどのの御方ごかたよりかづけ給たまふ。

又またの日樓ひろうへ皆みなおはす。宮みやも見みやり給たまふに、聞き給たまひしよりも、あなめでたと見みゆるに、近ちかうて見給みたまふ人々ひとびとの御目ごめには、照てりかどやきて、此この世よにかとる事ことまたあらじと、目めもあやに見みえたり。南みなみの庭にはの、遙はるかなる水みづの洲濱すはまのあなたの山際やまぎはにたて

(語釋)

(一)「なかみ」は「なから」  
歟一本「なかしま」

(二)「には」の「は」衍文な  
るべし

(考異)

(三)薄きを皆瓦のうす  
きさばみたるをはしの

(四)樓の西より一樓より  
西

(五)尻ひきたる水の流の  
一尻をやり水の

(六)出でて一まいて

(七)給はむはまの石一給  
はむはまの木一給はむか  
はまの石

(八)あべけれ一あんべけ  
れ

る二つの樓の、なかみばかりを、いと高き反橋の高さにして、北南には沈の格子

かきたり。白き所には、白粉には屋久貝を春き交せて塗りたればきらりとす。

樓の上に、檜皮をば葺かて、あをじの濃き薄きを、皆瓦のかたに焼かせて、葺かせ

給へり。樓の西より、西の對の南の端なる念誦堂に著く程、十五間なり。山の井

の尻ひきたる水の流の上なる反橋の左右には、勾欄にして、瓦葺にしたり。東

の釣殿に盡くまでの程は、同じ十五間なり。樓のそばにも、かよる反橋をしたり。

長は、たどの人の歩くばかりにて、長々と造られたり。水はながくと下より流

れ出でて、樓をめぐりたり。立石どもは、様々にて、反橋のこなたかなたにあ

り。めぐりく人々見給ひて、「言はむかたなく面白き事」とめで給ふこと限なし。

「見さして歸るべき事なくなむ。これを朱雀院、峨嵋院に御覽せさせばや。如何に

いみじう興せさせ給はむ。はまの石には、春は花、秋は紅葉の盛などには、かの惜

しませ給ふ手は、えとどめ難くこそあべけれ」など宣ひて、夜に入るまで立ち暮

しませ給ふ手は、えとどめ難くこそあべけれ」など宣ひて、夜に入るまで立ち暮

らし給ふ。月の水にうつりたるを、宮の御伯父の右衛門督、  
兼澄うべこそはすむ人ありと思ほゆれ雲井の月もうつりける宿  
大將

仲思我が宿をすぎずと思へど月影の水のうへぞと見ればかひなし

こと人々も詠み給へれど、騒がしくて聞かず。かんの殿の御方の御前には、大

〔語釋〕  
(一)此園みの中なる文は次の六七八頁の文の摺入したるものにして現に春海本には彼處にありて此處にはなし。されば削るべきものなれども多少の相違あるを以て姑く之を存せり

〔考異〕

(二)はびこりてーおひなりて

(三)し給ふ勢し給へるを今

(四)給へりし給へる

將の御方よりかづけ物は賜ふ。又の日、かんの殿にしへ思ひ出だし給ふに、  
年々の草は、八重律の板敷よりも高う生ひ、くりの木のつまの草は高う生ひ  
たふれて、下様にはびこりて、人影もせずありしを、思ひ出で給ふに、大將  
の、二方にひきつどきて率てわたり給ひ、つくりなし給へる様、出で入りし  
給ふ勢見奉り給ふに、年頃おもひ忘れ給へりし古の御有様、よろづに思  
ひ出で給ふにえねんじ給はず、涙の溢れ給へば忍び給ふ氣色を、兼雅「ゆよし  
う、かよる事思みあへ給はじ、と思ひきかし。さりとも念じ給へ。まろが仕

〔語釋〕

(一)「など」としてなるべし

(二)女一宮

●朱雀院より女一宮及び  
俊隆女を訪はる。

〔考異〕  
(三)ながる―なる

りしは、けしうはあらぬは」と右の大殿聞え給へば、俊隆女「さらずば然あるま  
じくやは。大將も悪くや」といらへ給へば、兼雄「さて、それは誰が子にかあら  
む」などて戯に聞えなし給ふ。大將いと思ふやうなる心地し給ふ。

三日、院より銀の髻籠二十、銀黄金して毬栗、松の實櫃、聚など、作り  
入れさせ給ひて、宮の御許に、

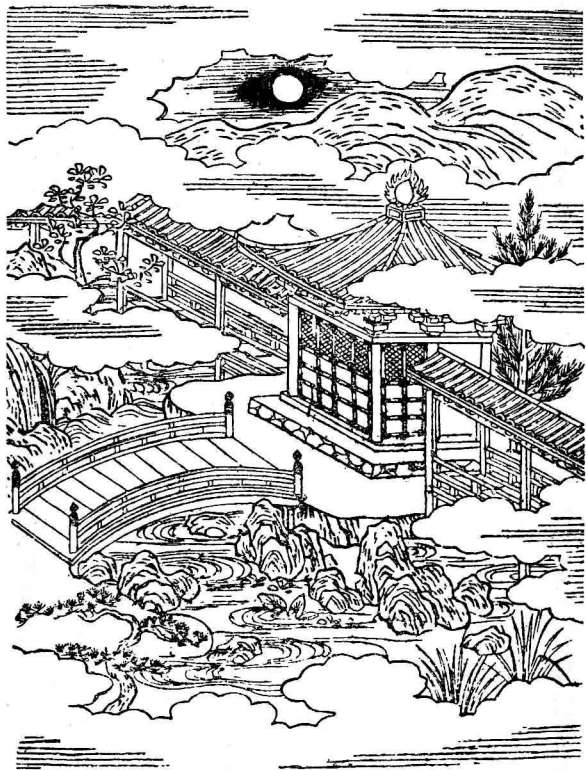
朱雀覺束なき程になりける。騒がしき程すぎて、犬宮の物習はれむ手つきのゆ  
かしきに、いかでかとなむ。この髻籠は、白髪になりける程も哀になむ。  
と宣はせたり。かんのおとどにも、同じ數にて、

朱雀あさましく忘られにてや。ことには何時となくのみ。

うらやまし明けくれ人と結ぶらむ髻籠のさまはかけも離れで

末の世にこそながるべかりけれ。聞かまほしき事どもあらむかし。

と書き給へり。御使藏人に出であひ給ひて、東の對にて、よき程に酔はし給ひ



(考異)  
 (一)戸口にも一とみにも  
 (二)よるほひに「に」ナ  
 (三)わらひ給ふ一わらふ  
 なり  
 (四)みだり脚も一みだり  
 心地脚も

て、御返とらせ給ひて、前におし立てて、西の對にて、いとみじく酔はし給ふ。藏人「いかで、かよる御使を召し籠めて、かう懲ぜさせ給ふ、いと不便に」と申せば、いみじう笑ひ給ひて、仲忠「勘當は、仲忠こそはさいなまれめ」とて物もおほえず酔はし給へり。宮の御方よりは、紫苑色の綾のほそなが一襲はかま添へ給へり。また女の方に、「御使の藏人こなたに」とて、戸口に、朽葉の裾濃の几帳の縫物したる立てて、いとおとなしう宿徳なる聲にて、「なほ此處にこそ」とて翻さし出でて、赤色に蘇枋がさねの織物の唐衣黒むまで濃く清らなるに、紅のはりあはせ一襲著て、色ずりの裳、いとあざやかに見ゆ。袖口ながやかにさし出で、土器さし出でたる、見るにいよくいと侘しう、心地あしうなりて、藏人「いかに仕らむ」とて苦みて、戸口にも寄らねば大將、仲忠「例なき事なりや。早う」と宣へば立つに、たゞよろほひに倒れぬ。内に人々わらひ給ふ。取るとて、藏人「唯今は御返は賜はるまじく侍り」「如何なれば」といらふれば、藏人「今日はみだり脚も踏

(四)



(語釋)

(二)「くんだり賜ふ大將御返とりて」なるべし

(四)誤あらんか

(考異)

(一)つれど一つれば

(三)様一ナシ

(五)むらさめなるをーし  
ぐれなるをや

(六)夕にー夕日

(七)なくーなる

み立てられ侍らねば」といふ聲も、片言のやうなり。飲む眞似にてうち溢しつれど、いとほしくてえ又も強ひず。唐綾の翟麥襲のほそなが、一二藍の織物の唐衣、うすものの地摺の裳、はかま一くだり、大將の御返、取りて出で給へり。唐の紫の色紙にて、豎文にて様よき松につけ給へり。藏人、「みだれ脚は動かれず侍り。みきにかづき給ふものは、叢虫のやうにてや、むぐめきまるらむ」といふ程に、内よりふと、

雨の脚はむらさめなるを叢虫となにむづかしくかけていふらむ

藏人、「物もおほえ侍らずや」とて、

藏人「朝夕にてりみかどやく大殿になくべきものかけにや叢虫  
(六) (七)

ことわりく」とて逃けて、倒れもこよひつゝ往けば、内にもをかしがり、大將も笑ひ給ひぬ。庭の前に、かづけ物を落し往けば、大將、人召して車に入れさせ給ふ。かんの殿の御返、

俊薩女かしこまりて賜はせつる。

老の世にながれてきよきくれ竹の末のよにこそ結ぶ名もたて

とぞありける。

四日の夜、夜半ばかりに、宮かへり給ふ。忍びやかにて、さるべき四位六人、五

位十人ばかりして。大將いと覺束なくおほえ給ひけれど、よろづに聞え慰め奉

り給ふ。曉にかへり給ひぬ。二の宮は、「いとつれぐに侍るに」とて喜び聞え

給ふ。

大將、仲思「召なくは參るまじ」とて、然るべき年老いたる大舍人頭の大ふる、小

ふるなどいふものども五六人、番をくりてさふらはせ給ふ。御門守、夜半だにた

しかに候はせ給ふべき由、たしかに宣ひつと、御門も、ことなる事なければ開け

ず。

かくて右の大殿、かんの殿の御方におはしまして、兼雅覺束なからむ事、いと苦

(語釋)

(二) 女一宮

(四) 女一宮の廻りを

(五) 内裏へ

(考異)

(一) ながれてきよき一な  
れてぞきよき

(三) 六人—六人ばかり

(註) 仲思、母及び犬宮と京  
極に籍居す。兼雅京極を  
訪ふ。兼雅夫婦の懷舊。

(語釋)

(三) 女三宮宰相君などが

(五) 此處誤脱あるべし

(二) 聞かじと歎

(考異)

(一) 宜ひそし給ひそ

(二) 悉くレシブ心なく

(四) と一など

(六) こゝにも一これに

(七) いかゞいかで

(八) ちむ一ちむもの

(九) 今二所ながらも一

今ひかむ琴ひかせ給ひて

院の上内裏の上も

(二〇) 事はひき出でむ一

こと聞いと恥かし

(二二) 人を一ものを

(二三) 早や一はやく

しからむ。晝ぞあらぬ、夜々はなほまうで來む」と聞え給へば、俊隆女、物狂ほしく、

若々しき事(一)な宜ひそ。夜こそ、まして心靜(二)に習ひ給はめ。宮の御方(三)、悉く心

安くは思すべし。さてわたし奉り給ふめる、おほろけには。對などにも、つれ

づれに人々思すらむに、今めかしく物し給へ」と聞え給へば、兼雅(四)「めでたからむ。

またこゝにも離れ居給ひて、つひに何事(五)ともして給ひてむ」俊隆女「いかゞ今然あ

らむ。年頃(六)さまぐくに集めたりけるを」とていと愛敬(七)づき、恥かしけにうちほよ

笑み給へば、兼雅「今やがて琴(八)ひき習はせ給ひなば、院の上たち(九)二所ながらも、御

覽ぜむとておはしまさむと宣はしつる。大將、そこながらも、まろが爲にも御爲に

も、事はひき出でむ」と宣へば、俊隆女かよる耳いかで聞かじ。この程は、すべて

門さして、公私(一〇)ことも聞かじ、他事(一一)もなく思ひまどふ人を、かの聞かれむに、

かよる事なし給ひそ。あけぬ前に早々(一二)おはしね。宮の君、若君(一三)、いかに戀しうお

ほし給ふらむ。それをだに、此のほどはわたし奉らじとあるぞわりなきや」大

(語釋)  
(一) 其方の側を離れては居難し

(二) 「あらめ」なるべし

(三) 「たまは」だに」歎

(六) 兼雅も

(七) 「たりけれとてむかし歎

(二〇) 兼雅が

(考異)

(四) 思び、く、に時々まうて來む、思び、く、は時々まうて來むとす

(五) にて「て」ナシ

(八) 五は「かうらんは

(九) 草蓬、草ども蓬

殿、兼雅「紛らはし言なし給ひそ。こよに琴教へむからに親とある人の中をも、みな取り離つ。怪しうこそ宣へれ。片時も、見奉らでえぞあらぬ。宮をも急ぎわた

し給へ。我も、たゞ此處にこそあらむ」<sup>(三)</sup> かの殿、俊隆女「よし、聞かじ。今しばし

こそ念じ給はめ。大將のかしこにたままうでられぬを」と宣へば大殿、兼雅「今お

のれは、天下に言ふとも、<sup>(四)</sup> 忍びく、に時々まうで來む」とて、物憂けにて出で給

ひぬ。明くなりにけり。<sup>(五)</sup>

大將殿、大殿の御前に参り給へば、御供にて所々見ありき給ふさま、たゞ兄

弟のやうにて、<sup>(六)</sup> これも、いと清けに、若うなまめかしき御容貌なり。大殿やがて

かの殿の御方に入り給ひて、兼雅「これは、もとの礎のまよか」<sup>(七)</sup> 俊隆女「然侍

り」いと面白くこそ造られたりけれ」むかし屋どもみな倒れ、所々に葺などの、

高き草の中に朽ち倒れて、念誦堂の柱のみ、所々立てわたし、寢殿の瓦はある所

なく散り落ちて、いといみじかりし、長よりも高かりし草蓬が中を分けて入りお

なく散り落ちて、いといみじかりし、長よりも高かりし草蓬が中を分けて入りお

(二〇)

(語釋)  
(一) 俊隆女が

(二) 「折の心地の」なるべし

はして見給ひしに、屋のそら、所々朽ち明きたりしより、月の光見て居給へりし程を見つけ給へりしこと、わりなく出で給ひにし折、心地の思ひ出でられ給ふに、  
いとといみじう、胸ふたがる心地し給ひて、涙のつぶくと落ち給ふを、大將、昔おほし出で給ふなめり、と見給ふ。かんの殿も、そこら見出だし給ふに、年々の草は八重葎の板敷よりも高う生ひのほり、軒のつまの草は繁くたふれて、下様に生ひ凝りて人影もせずありしを思ひ出で給ふに、大將のかく二方にひき續き、率てわたり給ふべく造りなし給へる様、出で入りし給ふ勢見奉り給ふに、年頃おもひ忘れ給へる古の御有様、よろづに思ひ出で給ひ、え念じ給はず、涙のこぼれ出で給ふをしのび給ふ御氣色を、兼雅「ゆよしう、斯かることを忌みあへ給はじと思ひきかし。さりととも念じ給へ。うへこそ、まろが仕うまつりしは、けしうはあらぬはや」と右の大殿聞え給へば、俊隆女「さらすば然あるまじうや。大將もわろくや」といらへ給へば、兼雅「さてそれは、誰が子にかあらむ」など戯に聞えなし

(語釋)

(大)朱雀院が俊隆女に來よと切に言はるれど犬宮がまだ幼稚故恐られぬといふ意歎

(七)成るべく兼雅に來てもらひたくなしといふ意

(八)我が君を思ふ程君は我を思はぬと也

(考異)

(一)忘れー忘れ

(二)さぶらふーサレ

(三)給ふー給ひつ

(四)上う侍めりーよくはべなり

(五)院の上の切に宣ふをー院にせちに申し給へり

(九)辛しやー憂しや

給ふ。大將殿(一)いと思ふやうなる心地し給ふ。右の大殿は、斯かるにつけても、何事も片時(二)忘れ給ふ世なく、物のおほえ給へば、我も涙のこほれ給ひぬべけれど、さぶらふ人々の見奉れば、よくノ念(三)じ給ふ。兼雅「いと覺束なかるべし。忍びて時々はものせむ。いかど」と宣へば、俊隆女(四)「よう侍めり。有様にしたがひてとり申させ侍らむ。暇の度ごとにと、院の上の切に宣ふを、只今はおよすけ給はねば、夜もさるべくば、かよる折は如何となむ思ふ給ふる」と申し給へば、兼雅「なほ難かるべきなり。この思には、劣りたりける。辛しや」と宣ひておはしぬ。十七日なりかし。(七)  
(八)  
(九)

樓の上(下)

樓

① 犬宮樓上に琴を習ふ。 ② 顯悟絶倫なる犬宮。 ③ 女一宮侍従の乳  
 母に消息して様子を尋ぬ。 ④ 乳母の返事。 ⑤ あて宮、父と大宮、東宮な  
 どの事を語る。 ⑥ 涼樓の門前を通りかゝりて歌を仲忠に贈る。 ⑦  
 仲忠、朱雀院と女一宮と、兼雅とを見舞ふ。 ⑧ 犬宮母を基ふ。 ⑨  
 精す。 ⑩ 俊蔭女、犬宮を勞はる。 ⑪ 仲忠母子昔を憶ひて感傷す。 ⑫ 俊蔭  
 女父の菩提を弔はんことを思ふ。 ⑬ 犬宮の進歩。 ⑭ 仲忠の驚嘆。 ⑮  
 の日雪山をつくりて犬宮を慰む。 ⑯ 仲忠、涼を訪ひて強ひて其の子  
 を見る。 ⑰ 歳暮に仲忠節科を處々に願ふ。 ⑱ 新年。 ⑲ 樓上の  
 二月、三月、四月、五月。 ⑳ 六月の詠。 ㉑ 七夕に仲忠等星に手向けん  
 とて琴を弾く。 ㉒ 奇特。 ㉓ 涼庭にありて琴を聞く。 ㉔ 俊蔭女、妻に父の  
 告を聞く。 ㉕ 妻のしらせの珍客を待つ。 ㉖ 珍客。 ㉗ 上しむねの時宗、老  
 婦さがのの孫四人、携へて来る。 ㉘ 俊蔭女の懐舊。 ㉙ 四人の孫を留めて  
 寵用す。 ㉚ 仲忠樓を下りて三條邸に歸るべき準備。 ㉛ 涼、嵯峨院に参  
 りて七夕の夜の噂をなす。 ㉜ 前院、大后宮以下争つて仲忠が樓を下る當  
 日京極に参會せんとす。 ㉝ 前夜より京極に集まる人々。 ㉞ 嵯峨  
 院、朱雀院御幸。 ㉟ 俊蔭女、犬宮樓を下る。 ㊱ 輩の仰言。 ㊲ さがのの四  
 人の孫人々に愛せらる。 ㊳ 朱雀院、嵯峨院、琴の祕曲を盡さん事を俊  
 蔭女に迫る。 ㊴ 俊蔭女の煩悶。 ㊵ 俊蔭女、うかく風を弾く。 ㊶ 琴聲内  
 裏に聞ゆ。 ㊷ 今上、少將信方をして琴の聲を尋ねしむ。 ㊸ 信方、琴を尋ね  
 て京極に到る。 ㊹ 朱雀院、俊蔭女に迫りて更にはし風を弾かしむ。

●犬宮樓上に琴を習ふ。  
穎悟絶倫なる犬宮。

(語釋)

(一) 朝飯

(二) 俊隆女と犬宮

(六) 俊隆女の

(八) とて留めおきて

(考異)

(三) つまき一つまげ

(四) つまきたりまづつ

づけたり銀のすき餅袋に

潤くだ物入れたりまづ

(五) 奉り給ふ唐綾の一奉

り給ふ著給へる唐綾の

(七) めてたしーめてたう

見ゆ

(九) 皆一ナシ

(一〇) 宣ひて一宣うて

概

奇特、人々の感動。● 俊隆女、犬宮をしてりうかく風を弾かしむ。  
妙なる音、人々の驚嘆。● 嵯峨院の奏請によりて俊隆に中納言を  
贈られ俊隆女正二位に叙せらる。● 朱雀院の奏請によりてさかのの孫  
四人衛門尉になさる。● 兩院以下樓御覽。● 嵯峨院の懷舊。● 仲  
忠、兩院以下に贈物を奉る。還幸。

斯くて、つとめての御臺、こよにて参らせ給ひて、とばかりありて、樓へ二二所

わたし奉り給へり。かんの殿のも、犬宮の御方のも、おとな十二人、几帳さしつ

づきたり。まづかんの殿のほり給ふ。段階は、御手をとりにてのほせ奉り給ふ。唐

綾の御衣一かさね、紫苑色の夏の織物のうちぎ、紅の三重がさねの御はかま、大

將白き綾のひとへ、紅のうちあはせ、脱ぎ垂れ給へり。几帳のさしはづれたる

よりはつかに見ゆる御容體、七尺餘の御髪、瑩しかけたるやうなる、いみじうめ

でたし。中納言の君といふをば、「しばしさふらひ給へ」とて、東の樓に、犬宮

いだし奉りて、仲忠、几帳を高う皆させ」と宣ひて、これも同じごと、長々と人歩

みつどきたり。御衣、縹色のほそなが、御はかまいと長し。率てのほり給ひて、



〔語釋〕

(五) 音の「の」衍文歟

(八) 我四歳の時父が琴を

〔考異〕

(一) 氣高く―氣高う

(二) 様程よりは―様は

(三) 給ふ―給はず

(四) しらべ試み―しらべ  
させ

(六) りうかく風―風ナ  
シ

(七) 習ひはて給ひつ―し  
ちべひれ給ふ

(七) 習ひはて給ひつ―し  
ちべひれ給ふ

琴取り寄せて奉り給へば、犬宮いぬみや「誰ひになきに聞かせむ。いづら」と宣のたまへばわらひ給ひて、

仲忠なかつちゆう「こよに侍はべり」とて、御前まへにさしすゑ給へり。内侍ないしのかみ見奉り給ふに、お

はせしよりもいとこよなく美うつくしけになりまさり給ひけり。氣高けだかう、清けうらにおはす

る様さま、程ほどよりはいとこよなうおはしけり、と哀あはれに見奉り給ふに、(二) 靜しづかに、兒ちこの御有あり

様さまともなく、おほどかなり。まづ、かの治部卿ちぶぎやうの習ならはし奉り給ひしりうかく風ふうを

犬宮いぬみやの、ほそを風ふうを犬將たいしやうのにて、彈ひかせ奉り給ふ。(三) まづかんのおとど、二ふたつな

がら取り寄せてしらべ試み給ふ音おとの、限かぎりなくおもしろし。大將たいしやう、犬宮いぬみやにりうか

く風奉り給ひて、(四) 彈ひきはじめ奉り給ふに、御手てはいと小ちひさきに、彈ひき鳴ならし給

へる音おと、さらに心こころもとなからず、いとかしこく心こころを給ひてひき給ふ。(五) 片時かたときに習ならひ

はて給ひつ。(六) 次にまた、曲まがの物もの一つ教をしへ奉り給ふに、いと同じく彈ひき取り給ふに、

かんのおとど、俊隆女しゆんりゆう「然さべきにて斯かくおはすると見奉り給ふに、ゆよしくなむ」

とて彈ひきたて給ひかきあはせ給へる程ほどに、涙なみだの落ちつゝ宣のたまふ、俊隆女しゆんりゆう「むかし、(八) 四よつ

(語釋)

(一) 父が

(二) 犬宮は

(三) 犬宮は  
(四) 「べかめりと戀しう  
たるべし」

(考異)

(一) ごとくのーごとの

(二) 給へらむやー給ひつ  
らむや

(三) 見聞かぬーえ聞かぬ

(四) ありけるをー「を」を  
レ

(五) 給へらむー給ひつら  
む

④ 女一宮侍従の乳母に消  
息して様子を尋ぬ。乳母  
の返事。

にて習はし給ひしに、心には入れながら、程もなく、乳母の膝に居ながら、手

どもは弾きとりて、音をよく弾き傳へたる事は七つよりなむ、大人のごとくの音

になりぬ、と宣ひし。これは、大人だに琴の音を、斯くうるはしうは弾き立つるこ

とは得せぬものを」と聞え給ふ。大將斯くおはするを、本意は叶ひぬべかめり、

嬉しう覺え給ふこと限なし。俊薩女「まだ弾き給ふべけれど、苦しくもぞおはする。今

日はこれを」と聞え給ふ。三度と問ひ給はず、年月を経て、上手に弾きおきたり

ける人の、今人の弾くをきよて心得るやうなり。年頃も宮の弾き給ふを、添ひる

て、弾かまほしうし給ひしものなれば、いさよか苦しくも覺え給はず、御心に入

れ給へるさま限なし。

又の日、宮より、侍従の乳母の許に、

女一とおほつかなく、夜の間は如何あらむとなむ。習ひ給へらむや。見聞かぬも

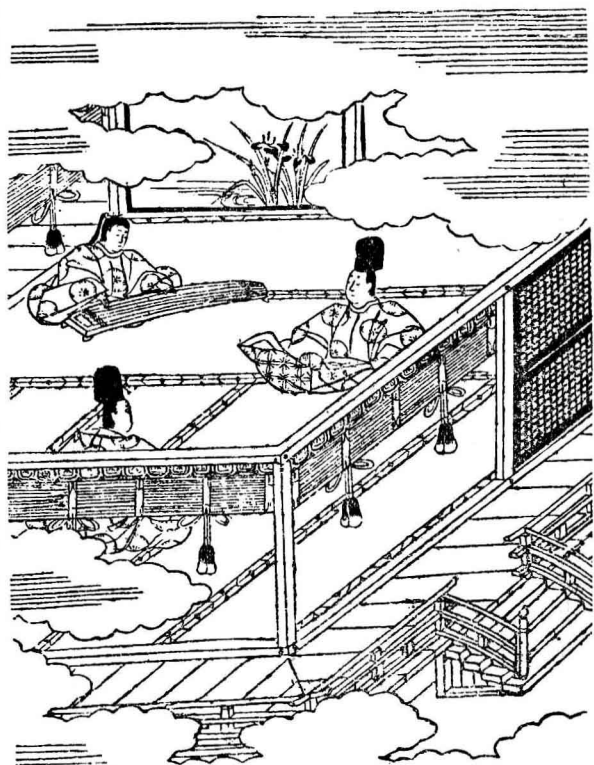
あやしうなむありけるを、夜や弾き給へらむ。いと戀しうなむ。ありさま宣へ。

(七)

(八)

(五)

(六)



(考異)  
(一)手鳴らせ—手をたぐり

(二)我が—わが

(三)手鳴らして—手たぐきて

(四)手鳴らせば—鳴らせば—たぐりば

(五)なほも秋の—なほも事ぞとも思ひながらに秋の—なほも—事ぞとも思ひながらに—なほも事ぞとも思ひならず

(六)ことは—こととて

(七)給ふ—給ひ

とあり。樓におはする程なりけり。仲忠「然るべき事あらむには、釣殿にて手鳴らせ」と宣ひ置きければ、中納言といふ、よき若人なり、みやぎといふ童に御文持たせて、釣殿へ行かむとて、御許たちに、中納言「さても我らが覺よ。人に異なりかし。かばかりの事を、手鳴らして呼び奉らむするよ」など笑ふ。釣殿の南の端なる帽額の簾の、長押の下に居て、わらはは勾欄にいたりて手鳴らせば、大將おはしたり。見給ひて、仲忠「硯こよにありや」中納言「さふらふ」とて参らすれば御返、仲忠「畏まりてなむ。御氣色のいとおそろしう思ひ給へりしかば、え聞えさせで、覺束なさは更に聞えさせむ方なくこそ。如何とものせさせ給へるは、身に勝りてなむ。これに、覺束なきことは慰め侍りぬべかめるを、まことにいと哀にこそ見奉れ。なほも、秋の夜をながめ明かさむことは、とがなむつむや」と宣はせためるは、戀しう侍める身をこそつみ侍れ。

と聞えさせ給ふ。やがて人の居たる所までおはして、さし覗き給ひて、仲忠「大貳

(六)

(七)

(一) 語釋

(二) 女一宮が心配して

(三) 「とて」衍文なるべし

(四) 彈正宮をいふ歟

(六) 乳母といふ名はつけ  
たれど

(七) 女一宮が

(八) 「給ひ」なるべし

(考異)

(一) 御中「御」ナシ

(五) 乳をたらしはしり参  
り一ちをたらしはし参り

の君や。人々の御中に、菓物めさせて、ひき散らさせ給へ。碁、雙六、例の打た

むかし。うしろめたうおほえて宜ひたりける。只今の様にては、思ふやうに、と

て彈き給ふべく見ゆ」ととて、けに御心地よけに仰せておはしぬ。侍従の乳母とい

ふは、嵯峨院の御子の、兵部卿にておはせしが御女なり。此の侍従の、童にて御

遊がたきなりし一の宮の御同胞の宮の、いと忍びて、容貌いみじく美しけなれば

通ひ給ひしに、乳をたらし、はしり参りけれど、乳母とすべき様ならずとて、名

はつきたれど、宮のいとらうたきものにし給へけるなり。御返、

侍従聞え給ふめれば。御琴は、いとよく習はせ給ふにこそ侍れ。殿の御氣色もい

とよけにこそ見奉れ。あさましく、雲居遙にてこそ、え承り侍らね。帥の君

聞えさせ給へ。

と聞えつ。宮見給ひて、いと嬉しとおほさる。女二怪しの心ときめきや」とてう

ち置き給ひつ。

〔語釋〕

(三)「つぎに」なるよし

(六) 未考

〔考異〕

(一)「な遊をーひひな遊を

(二)御含嗽取りてー御ぞ  
かゝとりて

(四)居給へるー居給へり  
つる

(五)かけそーかけ

(七)ごと面白しーごと  
と面白し

(八)多くも彈きー多く彈  
きも

例の夜さりの御臺は、樓に參らす。大將、仲思、苦しくやおほえ給ふ。然ばこよ

に、侍従ばかりは召さむよ」と聞え給へば、犬宮「いな。遊をこそあらめ。なほこれ

を、宮の彈き給ふやうに、月の見ゆるまでこそ彈かめ」と宣へば、いと嬉しと

おほさる。御臺下仕四人とり續きて、裳唐衣著てまゐる。上藤二人、さきに三尺

の几帳さして、樓にのほりて參らす。御まかなひは、例の大將仕うまつり給へ

ば、發聲女「あな見苦し。中納言、侍従を」と宣へば、仲思「何か」とてまかなひし參

り給ふ。中納言は御含嗽取りて參りておりぬ。犬宮の御方にも、おなじき、うる

はしく裳唐衣著たる御乳母二人あり。大將とりつぎて參り給ふ。御菓物ばかりを

まゐりて、ことにまゐらず。へきに、大將の居給へる所に、かたちよく、髪長く

て、髪一もとに結ひたる男童の、よき程なる四人、かけそにして、南の方の山

の、木の根に造りかけたたる反橋の方より參らす。少し下りたる勾欄に出でて參る。

繪にかきたるごと面白し。かくて、多くも、彈き習ひ給ひぬべけれど、ことさらに、

(七)

(八)

〔語釋〕  
(五)ちやが犬宮を

〔考異〕  
(一)日歌添ふまゝに一庭の山―こゝは庭の山―ナ

(二)たがへる―たがへたる  
(三)覺え―思ひ  
(四)これは―こぞより  
(六)参りて―まよらひて  
(七)給へるなりや―給へるべしや

たゞ日に二つ三つを教へ奉りつよ、過し給ふ。

日數添ふまゝに、前裁いと面白くなりゆく。犬宮、南の山の方を見出だし給ひて、

獨語に、犬宮「宮もろ共に、え見せ奉らぬよ」と宣ふを大將聞き給ひて、いと哀とお

ほして、仲忠今、此の琴いとよく習はせ給ひてむ時に、わたり給ひて、もろともに

御覽せむ」とぞ宣ひし」と宣へば、恥かしうて物も宣はず。夕暮、晝などに、内侍の

かみも、大將もうち休み給ひて聽き給へば、琴を習ひ給へる、いとになく、いさよか

誤りたがへる所もなく弾き給へり。二所ながら、いと悲しくゆよしく覺え給ふ。

如何なる時にかあらむ、かんのおとどに、犬宮「下仕を召し、ちやを呼ばよや」と聞え

給へば、召したり。これは、ことに参らず。されど、うつくしがり奉りて、猶

まゐり習はしたりければ、哀とおほして参らせ給ふなりけり。琴ひき居給へる御

程のまだ斯かるを、大將哀に見聞え給ふ。侍従参りて、侍従「御琴は弾かせ給へる

なりや」と申し給へば、犬宮「弾きつべし。宮などのやうに、側におきて、常に

〔語釋〕

(一) 仲忠母子

(三) 女一宮

〔あて宮、父と犬宮、東宮などの事を語る。〕

(六) それ程にせずともよき事なるに

(八) 仲忠に書を講ぜさせし時は仲忠が、藏開の巻にありし事

〔考異〕

(二) 調を「を」ナン

(四) 遊を「を」ナン

(五) こくばくこくばく

(七) をも「も」ナン

(九) 千年を「せんねんも

今は弾きてむ」など語り給ふ。夜いとふけたる月夜の、はるかに澄みたるに、

二所弾きあはせ給ひて、犬宮に同じ調を弾かせ奉り給ふ。唯同じことなるを、

うれしう大將おほえ給ふ。

あて宮、いみじう妬う、羨ましく思したるに、一の宮おはせぬをぞ、少し嬉しう

おほす。藤壺に左の大殿参り給へり。あて宮、「一の宮何事を思すらむ。女御子お

はせましかば、羨ましからまし」と聞え給へば、うち笑ひ給ひて、正頼「東宮のお

はしますよりほかに、羨ましき事や思すべき。宮、大將をば物とも見給はで、か

の犬宮と明けくれ難遊を起き臥し給ふを、こよばくの日頃いと然しもあらず

ありぬべきを、内侍のかみをもひき離ちて物せらるれば、此處にも彼處にも、怨

じ恨みて、右のおとどは、さらがへり文をぞ書き通はし給ふなる。一日院の仰せ

られし、「わが文讀ますとて有りし程は、一夜も千年を暮らすやうに思ひたりしを、

おほろけにはあらじ。人々しう如何にや」など仰せられし。怪しき心に」など聞



(語釋)

(一) くて宮腹の皇子たち

(二) 入れたるさては「入れたまひて」歟

(四) 東宮が仰せらるる

(五) 「もと」は「本」にて手本の意なるべし

(六) 本人の仲思が

(七) 誤ちらんか

(八) 「ふさい」は「ふさひ」にて氣に入る意

(考異)

(三) ひきくりに「かたがたに

え給へば、くて宮、さて有り難くて、今より然教へ奉りたらむこそ、いとになき傳

ならめ。此の宮たちの、遊にのみ心を入れたる、さておはする事。かの梨壺の宮

は、いとなつかしう、美しけにもかき給ひ、書も讀み給ふなれば、東宮教へ奉

らば、いとよくさやうにおはしぬべきを、皆人は、ひきくに思ひ挑まれてある

身なれば、宮たち心に入れず、物習はし奉る人もなかめり一正頼「たいくしう

誰か然は思ひ奉らむ。學士こそは、明暮参りて仕うまつらめ」くて宮、「いさや。

まづいと怪しきは、「學士には讀まじ。大將、源中納言にこそ、書も讀み、何事も

習はめ。かほ醜き人には向はじ。憎し」とあめる、何でふことぞ。手ばかりは、

大將のもとあめりし、いとよう書き似せ給へるめりとぞ、御主宣ふめり。書も何

も、行政の中將のをぞかし給ふ。いと心こはく、今めかしき人々のをのみふさい

給ふ、心づきなし。源中納言はしも、うちくにきけば、今より哀に宣ふもあめ

り」など聞え給ふ。殿は、正頼「美しうもおはします」など聞え給ひて、正頼「この

(語釋)

(一) 御遊がたきに發らせむと」だ。

(二) 今から御側にあきたらば成長の後入内せしめん折必輕蔑せらるべしと

(三) こそ」衍文歟

(四) 持たまひては」歟

(五) 仲忠の樓を

(六) からもり」は古き物路の中の主人公の名

(考異)

(一) なるが」なりし

(二) 内裏に」のちに

(三) なるが」が」ナレ

人たちは、みな宮をば限なき物にこそ思ひ聞えさせ給ふめれ。中納言も、此の大

宮、同じ程の幼き御子うみ給うたるを、いみじうかしづき物にし給ふなるが、「い

かで宮の御遊に參らせむと思ふに、目に近きわたりの、内裏に參り給へらむに、

定めて、こよなく思とおとさむこと」など宣ひながら、さる財の王の傳にてこそ、

世にあり難き笛の御遊の具など、めでたきを持たらひては、「いとうつくしけなる

が賜べまろに、といふにも見せじ。思ふ様あり」とぞものし給ふなる」など聞え

給ひて、出で給ひぬ。

源中納言被して歸り給ふとて、餘所ながら、車とよめて見給ふに、けに此の樓、

いといみじき見物にぞあるかすと、遠いとらうくじく叩きて、かく聞えて、ふ

と來ね」とて、

涼からもりがやどを見むとて玉ほこに目をつけむこそかたは人なれ

と思ひ給ふれば、まかり過ぎぬる。川原よりなむ。

(語釋)  
(二)御立寄りなまされてよ  
い都合なりし

(三)御出下されても御坐  
りなさる處もなし

(四)うつし馬

(五)涼に迫付きて返事を  
奉れり

(考異)  
(一)ひげけむーわくらむ

由仲忠、朱雀院と女一宮  
と兼雅とを見舞ふ。

とぞおどろくしう叩かせて宣へり。いといたく妬がり給ひて、

仲忠こよのへをいかでわけけむ鹽づつのからき袂のくちをしき身は

よう過ぎさせ給へり。つかせ給ふべき所もなくなむ。まめやかには、今自ら

まゐりてなむ。

とてうつしに乗せ給ひて、走らせ給へれば、御門おり給はぬに聞えけり。

**畫詞**

こよは内侍のかみの御方に、右の大殿より、白き色紙に、こと多く恨

み聞え給へり。大人、わらは、居竝みたり。あざやかなる装束ども、いろく

縫ひたり。犬宮の御方には、御櫛匣殿より、縫ひかさねて、九日の御節供にも

て來たり。大人、わらは、几帳そばめつよ、物語讀み、遊しためり。佛の御日、

内侍のかみ、御堂にまうで給ひて念誦し給ふ。御前にて、年老いたる人名香と

り散らして、著き居たり。

大將、内裏よりも度々召あれば、参り給ふ。まづ院に参り給へり。朱雀いと覺束

(語釋)  
 (一) さつさと擠まして仕舞ふ譯にもゆかぬ

(三) 女御は里にぞ歌

(四) 女一宮の處へ仲忠が

(五) 女一が

(考異)  
 (一) 然一いちハ

なしや。國々のなるべき文どもあなるものを。然なる大事あらむ日は、参らるべきものなり」いらへ、仲忠「走り参るべく侍る」朱雀「犬こそ、如何に琴習ひつべからむや」仲忠「然。いと疾く心得つべく侍り」と啓し給へれば、いとよう笑ませ給ひて、朱雀「うつくしき事かな。内侍のかみのとどめらるゝ手なめるを、皆弾きうつしたらむは、いと思ふ様なるべきかな。さても、何時ばかり習ひ給ふらむ」仲忠「心につけてものし侍らば、疾くも果て侍りぬべけれど、幼くものし給へば、心静に物を心得させつゝ侍るべければなむ。時のうつるに隨ひて、曲の物などは、習ふやう侍れば、またさる節會などに参るべく侍るべければ、すがくとも得」朱雀「珍らし。けに然もあらむ。いと面白かなる。いかで見む」と宣はす。女御の里にぞおはしける。

夜さり宮におはしたりけるに、二の宮と遊び給ひて聞き入れ給はず。仲忠「院のうちに久しうさふらひて、苦しう侍るを、犬宮の御事も聞えむ」と宣へば二の宮、

(語釋)

(一) 女一が

(二) 序に犬宮に逢ひ給へといふ事歟

(三) 「たいちん」は「たいども」にて宰相上等を訪ひたるなるべし、「一本」は「たいめん」又「たいめ」に

(考異)

(四) 家司ども一家司ばら

④ 犬宮母を基よ、琴に出精す。倭姫女、犬宮を勞はる。

かたはらいたがりて入り給ひぬ。むつかるく出で給へり。大將うらみ聞え給へば、女「逆様なりや。人の見聞かむ事こそ恥かしき。いと戀しきに、見でや無期にあらむ」大將、仲思「今、御物忌などの序に。いとむづかし。人々ものし侍り。それに暇の入るべく侍りてなむ」女「さて如何」仲思「いとうつくしう彈き給ふべかめり」など聞え給ふ。

曉に右の大殿に参り給ふ。宮の君も、わか君も、めづらしがり悦び給ふ。大殿、兼雅「あさましく覺束なく、はては御返もなかめり。いと覺束なきをば、九日の物忌しに、いと忍びて物せむ」と宣ふ。仲思「よう侍なり。菊の宴なれば、参るべく侍り」など聞え給ひて、たいらんに、立ちながら「如何に」など聞え給ふ。つれづれに見え給ふ様なれば、殿家司ども召して、菓物、さるべき物など、御方々に参らせ給ひて、急ぎおはしぬ。

かくて、檀の色々、いとをかしくなりゆくを見給ひて、犬宮、宮のも斯くやあらむ。

(一) 父上は母上に御逢ひ  
なきし。

(二) 寐て一見て  
(考具)

宮見奉り給へるか。「戀しうとも念ぜよ」と宣ひしを、今は忘れやし給ひぬらむ。  
御文も賜へかし」と宣ふまよに泣き給ひぬべければ、仲思「な泣き給ひそ。御文侍  
り。それには「よく習ひ給ふや。今はさらば、わたり給ひて見奉らむ」となむ  
侍りつる」と聞え給へば、いと嬉しと思ひ給ひて、いとよう弾き給へり。いと心  
苦しう、理なりとて、おもしろき晝など取う出見せ奉り給へど、ことに例の  
やうにも見給はで、心にしみて琴を弾き給ふ。月のいと明かに、空澄みわたりて静  
なるに、山の木蔭、水の波、やうく風涼しくうち吹き立てたるに、いととおとなおと  
なしう弾き合せ給へるを、大將、かんのおとども、折も心ほそくなりゆくに、涙  
落ちて、琴教へさし給ひて泣き給ふ氣色を、犬宮、「まろを宣へど、宮戀しくおほ  
え給ふべかめり。母君も泣き給ふか」と内侍のかみに聞え給へば、皆いとをかし  
くなり給ひぬ。俊藤女「苦しう思ひ給ふらむ」とて、俊藤女「下へ」とて聞え給へば、  
犬宮「月あかきには、なほ寐で久しう弾かむ」とて、夜中までおはす。下り給ふに

(三)

(語釋)  
(一)空淵の住居の當時

も、犬宮いぬみやを樓ろうのはしまで抱いだき奉たてまつり給たまひて、乳母めのど人々ひとびとまるる、抱いだき移うつさせ給たまひて、  
かんのおとどの御手てかけさせ給たまひつよ、おろし奉たてまつり給たまふ。仲思ちゆうし人々ひとびとあるものを「  
と宣のたまへば、俊隆しゆんりゆう女め、斯かくおはしますことだにいと畏かしこきを、他人たにびとの兒ちごならば、斯かくもお  
はしますまじけれど、院いんの御心こころばへのいと忝かたじけなく、萬よろづにおはしますに、効かひありて、  
心こころことに思おもひ給たまふる程ほどに、いと不便ふびんに侍はべる」と申し給たまひて、例れいの御送おくりし給たまひて、  
俊隆しゆんりゆう女め「物聞ものきこしめ食たさどめる、いとく悪あしきこと」とて、手づから然さるべきさまに調てうじて  
參まゐり給たまふとておはしぬ。

④仲思母子音を思ひて感傷す、俊隆女父の菩提を弔はんことを思ふ。

かく心得こころえ給たまふまよに、いとかしこく、いさよか苦くるしと思おもじたらで、萬よろづの折々せりくに著しるう、  
曲まがの物彈ものひき給たまふ様さまいと悲かなし。前栽せんざいも山やまの木きどもも、紅葉もみぢし、櫛はじの紅葉もみぢ今いま色いろつく、様さま  
様に面白おもしろく、風かぜやうく荒うらく、山やまの中なかより落おつる瀧たきも、靜しづかなる所ところにて聞きき給たまへば、よ  
ろづ物の音ねにあひて哀あはれなり。かんの殿どの、むかし思おもひ出いで給たまふこと多くて、俊隆しゆんりゆう女め「何なに  
方かたぞや、このはよ斯かくてあるに憂うれしと宣のたまひしは」と宣のたまふまよに、涙なみだこほれ給たまふ。大たい

將、「かの坤の山よりこそまかり歩きしか」と聞え給ふ。御硯ひき寄せて、

仲思山おろしの風もつらくぞ思ほえし木の葉もみちもやくとみしかば

と書きつけて、おき給ふ心地もいと悲し。

(語釋)

(一)「やく」は「せく」歟

俊隆女ひきあてて峯だにわけし心には紅葉の關をこととやはせし

かたみに哀に思すこと限なし。犬宮も、楓の琴の上に散りおほひたるを、

犬宮まろが弾くうらやましとや琴の上にかへでも

とばかり宣ひて、犬宮「恥かし」と宣ひて、末も宣はぬを、かんの殿、俊隆女「如何に

か。なほ宣はせよ」と宣へば、

犬宮かよる音をひかむとか

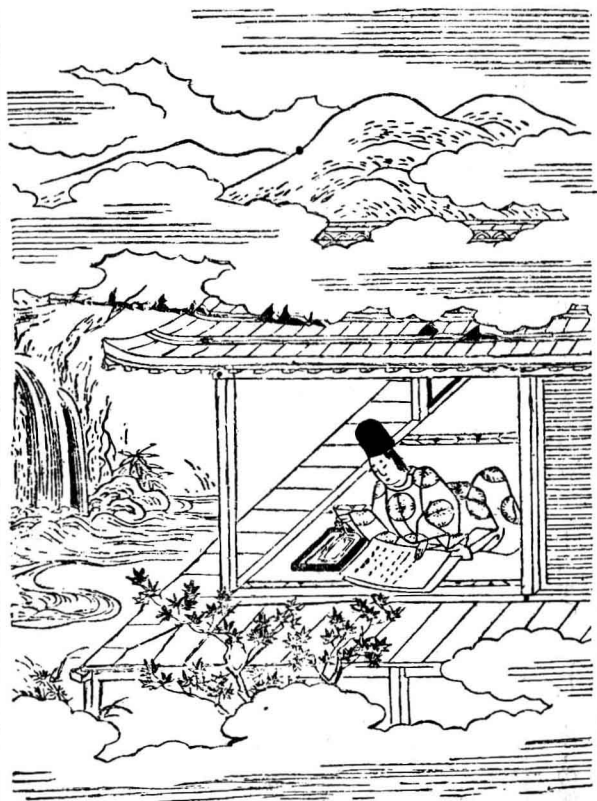
と宣はす。木の葉散る風のあらし音に、いとかしこく合せて弾き給へるを大將か

なしう聞きおはす。

十月時雨に紅葉かきつくし、とどまる木の葉稀なり。大將、かんのおとどうち休

(二) 隈あるべし





(語釋)

(一)「よ」は讃歎

(二)「きくつけて」歎

(五)「ら」と「しう」は「ら」と  
と「し」歎

(七)俊薩をいふ

(八)以下俊薩女の心

(九)父俊薩が

(一〇)我國にありて

(考異)

(三)そよとーそよや

(四)臥しーとなむ臥し

(六)そよとーそよやと

み給へるやうなる折なり、折にあひたるふの、いと哀なるを遙にうち誦し給ひて、

仲思もろこしの山の山彦ひきつけてそよといふまで響きつたへむ

臥し給へれど、いとどしう聞きつけ給ひて、涙こほれ給ふこと限なし。臥しながら

ら琴に忍びやかに、

俊薩女 山彦はそよといふとも調べおきし人なき宿を見るかひもなし

心に思ひ臥し給へり。世の中を見れば、言ひ知らぬ人しもあれば、才も時にあひ

人々しければこそ、めでたう効あれ、人より殊に、才ものし給ひけれど、こよに

して効ある事もなく、知らぬ世界に、年若うして行き傳はり給ひつよ、悲しき目

のかぎりを見給ひて、多くの年を経給ひて、内裏はじめ、世の中のこと、飽かぬ

ことを歎きて、年月をあかし給ひける程に、また頼もしく言ひ傳へおき給はむ人

もなく、何事も、我身を人並々になすべきことも及ばず、年高うなり、心ほそく

おほし給ひけるまゝに、これをまた歎とし給ひて、十六年のあひだ、多くの涙を

(語釋)

(二) 父に

(四) 以下また俊隆女、心

(五) 父が今は如何なる世

界に轉生し居るならん

(七) うたをもよみ給ふ

に「たよとよよみ給ひ歎、

一本、うたをもよみ給ふ

は」

(八) 「せかいはかくせさ

せむ」は「いかで八講せさ

せむ」歎、一本、せかいは

かくせむ」又「せかいはか

かせさせむ」

(考異)

(一) 奉りて「て」ナレ

(三) 見給ふらむー見給ふ

ならむ

(六) 給ひつらむー給へら

む

(九) 陀羅尼一たえず

落させ奉りて生立ちける報にや、また知らず悲しくいみじき目を見けむ、昔よ

り、我がうまれける日より、亡くなり給ふまで、思しけるやう、有りける事ども

を、記しおき給へる日記は、肝絶えてかなしきこと數知らず、大將の御ありさま、

公、私の天下にて一の才かたち、心有様を見聞くに、すこし思ひ慰む心地す

れど、これをえ見せ聞かせ奉らぬ、悲しう効なきこと、如何なる人か、帝ご申

すとも、さらぬ人も、八九十餘までの命ありて、めでたき末の世をも、あくまで

見給ふらむ、心憂く悲しくもあれ、と思ひつどけて悲し。如何なる身とかなり給

ひつらむ、一生の間、うたをもよみ給ふ、わづかに請せさせ給ひし法師しても、

讀み講せさせ給ひし提婆品最勝王經、此處にして、日々に、かの御爲に讀ませ

む、せかいはかくせさせむ、やうく年もねびゆく身に、かぎりては思ふ事もな

し、心靜にて、われも陀羅尼念じ奉ることせむ、すべて、萬に尊からむこと、

いかで此處にてせむ、など、來し方行末まで、哀によろづ思ひ臥し給ふ。

〔語釋〕

(一)「宮を」歟

(三)犬宮にさへ逢はぬに

(五)京極へ

(七)兼雅が

(九)「見參」歟

〔考異〕

(二)まぜなどに—まぜに  
など

(四)ともすれば—ともあ  
れば

(六)獨臥をせらるゝに—  
ひとりふしものをせらるゝ  
に

(八)いとをかしき—いと  
しき

④犬宮の進歩。仲忠の驚  
嘆。雪の日雪山をつくり  
て犬宮を慰む。

かくて宮に、大將おほつかなく哀におほえ給へど、限なき大事を夜晝思ひ給ひて、  
(二)過し給ふ。月に四五日まぜなどに、夜おはすれど、宮、女(三)「こひしき人をだに見  
ぬに、見苦しの様や」とて格子もあけさせ給はねば、仲忠「あやしき勘當かな」と  
て勾欄に居明かしつゝ歸り給ふ。右の大殿、さるべき折やとて、ともすればおは  
すれど、かんのとの、俊薩女「わかき人だに、子を思ひて、うちはへ獨臥(四)をせらるゝに、  
いと見苦しからむ」とて、さらに出で給はず。俊薩女「對面し給ひては、あぢきなく、  
大事と思ふことあらむ」とてそのまゝに還し奉り給へば、いとまめやかにむつ  
かり給へど、俊薩女「大將の思はれむ程もむつかし」とて答へもはてさせ給はねば、腹  
立たしうおほえ給へど、大將の御ことかよりたる事なれば、むつかるゝ歸り給ひ  
ぬ。此方彼方の人々見聞きつゝ、「いとをかしき御中らひかな」といふ。  
(八)  
十一月朔日より、いと遙に、げざんとてわたらせ給ふほどに、便なしとて、寢殿  
にて、人けも遙なれば、さて習はし奉り給ふ。風かぎりなう烈しく、日荒れ、

(語釋)

(三) 俊隆女の手よりは

(五) 以下俊隆女の心、仲忠が幼かりし時の事を思へる也

(考異)

(一) あひし手―あひしらひ

(二) 今ナこし―今ナシ

(四) 大將も―内侍のかみ

空の氣色苦しげなり。かんのおとど斯かる折にあひし手弾かせ奉り給ふに、い  
 さよか誤らず。今すこし、もとの御琴の音よりは勝れたりと聞ゆ。大將も驚き給  
 ふ。大將、かんのとのに聞え給ふ、仲忠大人だに、心には得ながら、え斯うはか  
 き鳴らさず。院の上、これをいかに限なく哀に見奉り聞召さむ。他人は、源中  
 納言ばかりぞ聴き知り給はむ」と聞え給ふ。

畫詞

こよは新嘗の日、大將殿の内裏へ参り給ふとて、世に覺あり、みめき  
 らきらしき四位、五位、數をつくして参り集ひたり。寢殿と、西の對と、渡殿、  
 北の廊かけて、居竝みたり。

雪よるよりいと高う降りて、御前の池、遣水、植木どもいとおもしろし。二尺ば  
 かりいと高う降り積みたり。人々、「此の年頃、いとかよる雪は降らずかし。これ  
 に歩きたるをば、おほろけならずかし」といふを、かんのとの、あはれ昔かよる  
 年ありきかし、いと然るにはいかでか、と言ふをも肯かで、山へこそ行かざらめ、

(釋語)  
(一)「うちめ」は「ちかめ」歎

(四)「給へば」は「給よ」なるべし

(五)「人よりも」は「いつよりも」歎

(考異)  
(二)君の一まゝの

(三)二の宮と一の宮とは

(六)すくみにて一すくみにて

(七)入り給ふに「に」ナレ

(四)仲忠、涼を訪ひて強ひて其の子を見さ、

川へこそいらめ、とて、強ひて歩み出でておはせしを思ひ出で給ふに、雨の脚よりもけに多う、袖に涙の落ち給ふも、ゆよしう覺え給へど、え念じ給はで、

俊隆女山はさえ川べのこほり雪しみてなみだの雨とふりし宿かな

とおほえ給ふを、犬宮、「な泣き給ひそ。まろも念じてこそあれ」と聞え給へばお

と、俊隆宮をば、いと戀しうや思ひ聞え給ふ。いかどありし」犬宮「雪の降るま

で見奉らねば、いと侘しけれど、君の「な泣きそ」と宣へば。宮は、雪をぞ山

につくらせ給ひて、まろと二の宮と並びて見侍りしかし」と宣ふまよに泣き給ひ

ぬべければ、他事にまぎらはし給へば、いと黒うつやよかなる御衣に、薄蘇枋の、

唐綾の御ほそながにはえて、濟らに、いよく美しけになりまさり給ふ。雪山つ

くらせ給ひて、雛遊などもろ共にして、見せ奉り給ふ。

大將、人よりも疾く、宮にまかで給へるに、例の入れ奉り給はず。侘びて、源

中納言の方におはして、仲忠「身もすくみにて侍りや」とてたど入りに入り給ふに、

(語釋)

(一) 女一宮の

(三) 帥の君も中納言の君も涼方の女房の名

(四) 帥君が

(考異)  
(二) 食まずや―たばずや

遠けにいみじう侍り。かよるやうにぞ、しつらひたりけるや」と笑ひ給ひて、遠まづ、御衣ぬがせ給へ」と取りて、屏風にかけさせ給へば、仲忠いとあやしう、女房になし給はむや」とて中納言、遠身にあまりたる事したらむ人ぞ、然はあらむ。擇屑の人は「など笑ふく、御前の長角櫃の火おほくおこさせ給ひて、御衣架にかけたる鞋ども五つひき襲ねて、遠「これは汚れず」とて著せ給へれば、仲忠例の物狂ほしさ。今大人々々しうおはせむや。さても、いみじき宮の御心かな。さはれ、いとうれしき夜なり。もろ共にあかさむ。など疎くもぞ思す。例のまよにてあらむかし。いづら目安くも、まだ物も食まずや。師の君、日暮るよなり。御賄せられよ。中納言の君、おそし。いづらく」と宣へば、帥君「いとわりなき世かな。然ば如何はせむ」とて、色擗目などもえならぬ。めでたく装束きて、師の君三尺の几帳ひき添へてゐざり出でたり。よき童べのはかまいとつやよかにて、燈よき程にとりなさせて、御臺は参らせ給ふ。大將は、  
(四) 恥かしと思ふらむとて、う





(語釋)

(一)他の事は効へても琴は効ふまじと

(二)置に打ち殺さるゝ法もあれ、「いかづち」一本「かやつち」

(四)我子は器量強し

(六)以下涼の心

(九)我子が犬宮に劣るかも知らねど

(一〇)我子も

(一一)我子の犬宮をばよく君は見たりしものを

(一二)御娘を

(一三)涼の娘

(一四)これ見奉りては」  
歟

(考異)

(三)にぞー」にチシ

(五)とはーなど

(七)我のみー我らのみー  
我とのみ

(八)少しも劣らぬー少し  
劣らぬー少しも劣らず

る事は知らせじとて、腹立たしくて、他事は教ふともとてなむ」仲思「あひなの御

事や。萬の事よりも、かの琴弾かざらむをば何にかはせむ。いで、まろいかで見

奉らむ。さらすとも、犬宮とひとしく教へ奉らむ」遠な習はし給ひそ」仲思「い

かづちの神にもうち殺され奉らむ。眞にぞとよ」中納言、遠御傳はしも、け

に必ず然るべきことならむ。これはわざとならずともあへなむ。まづく、顔い

と、醜し。心劣りし給ひなむ」とは聞え給ひながらいみじう、我のみになきもの

をと、思ひ給ふに、我もものを見知らずやはある、内侍のすけの言ひしやうに、

けにあなめでたと、花やかなる事の、少しも劣らぬ、なべては、このわたりにも、

また斯ばかりの容貌はあらじ、これもけしうはあらざりけり、今もや見せ奉ら

む、と思ひ給ひて、如何にせましと思ひ給ふに、仲思「まろがいと明らかに見給ひ

てしを、よかなり、吾が佛、なほ見せ給へ。内侍のすけの聞えしは、見苦しう、

まだあやめも見えざりしをだに、「かの犬宮見ては、この姫君ゆかしく、これに

(語釋)

(二)「をつつ」は「せち」の誤歟

(三)涼の若君が

(五)若君が

(七)仲思が

(考異)

(一)とてをつつ 宣へば  
一とかたみに宜ふ

(四)見給ひつれ 見給へ  
れ

(六)すこしぞ長に すこ  
しうしろたけに すこ  
しぞこしたけに

奉りては、また犬宮ならべてゆかしうなむある。行末の人も、今然にぞ聞えむ

と言ひし。かたみに睦まじう見奉らむかし」とてをつつ 宣へば、涼犬宮は、不

意にこそ、たどかたはらの御姿を見奉りし。内侍のすけは人に心傲せさせて物

言ふさがな者なり。さても、母君と晝かき給ふめりつるを」と宣へば大將、仲思そ

れこそよかなれ。忍びて率ておはしてのぞかせ給へ」中納言うち笑ひて、涼をか

しの事や。しれものところ見給ひつれ。さばれ賺され奉らむかし。伯父ぬした

ちに、夢にも見せぬものを」とて、おきて、俄に入りおはして、晝かくとて居給へ

るを、傍より、ふとかき抱きて、燈の程、間半ばかり離りてついすゑ奉り給

へる様態、頭つき、けにいみじうあてに細やかなり。仲思「いでく」とておはす

れば、いとあさましき心地し給ひて、立ちて、中納言の御方に歸り給ふ程、犬宮の

御長にて。髪は今すこしぞ長にはづれ給へる。これは、様態小ながら、大人にて

いみじう美しう、中々飽かずおほえ給ふ。涼「いとほし」とて、抱きて立ち給へば、

(七)

(六)

(五)

(四)

(三)

(二)

(一)

〔語釋〕

(一) 仲忠が

(三) 涼が

(五) 仲忠に語る也

(六) 今宮が我を

(七) 「空口」詐の意歟

(八) 「をわたり」は「御わた  
り」歟

(一〇) 女一宮のも、犬宮  
をいふ

異)

(二) 給へり君一給よさま

みや

(四) わざは「は」ナシ

(九) 美しげなる一美しき

(一) 御かたち一御様

仲忠「燈臺の燈の明きに、その御顔よ」と宣へば、遠いかでか。然までは」とて抱

きながら立ち給へる、つやくとして、縹のいと薄き唐綾のうちぎにかよりたる

御髪、尾花の末のやうなり。いとなまめかしき容貌なり。燈のあかき方に晝かく

とて獨り居給へりける、こともなげなり。急ぎて入り給ひぬ。犬宮のいとをさな

けに、兒の顔し給ひて、けだかう優れ給へる、けにこよなしかしとおほえ給へり。

君、今宮いとあざましく珍らかなること」とて腹立ち給へば、ついすゑて、逃け

て出で給へば、今宮物に狂ひ給ふなめり。萬の人を集めて見せむよりも、此の大

將には、かよるわざはし給はましや。目見合せ奉るや」と宣ふを、遠云々なむ

悔りつる。いみじう騒がれなむ。いとうたてし。常にそらぐちもし給へるをわた

りにこそあめれ」とてうち嘆き給へば、仲忠「吾が佛、なほおはせよ。けしうはあら

じ。さても美しげなる御様かな。宮のも同じ年にこそ生れ給ひし。御髪長さま

さり御かたちも同じ程を、いま少しばかり勝り給へりと、まろは思ふことなきを、

〔語釋〕

(二) 思澄の娘が器量よしとか

(五) 若宮を見せて下されたる禮に

(八) 誤あるべし。一本、あきらかになる

(九) 女一宮へ

〔考異〕

(一) 多からじいおぼえじ

(三) いでーいらへ

(四) などーなんだ

(六) たゞにーなほも

(七) はてーナン

(一〇) 侍るーめて

(一) うしろめたくうしろめたううしろめたなく

● 盛暮に仲忠節料を感々に願つ。

誰にかは、かくばかりめでたき女持給へる。多からじかし」「左衛門督の、いとよ

しとか」大將、仲忠「いで、さりととも、え人知らじ」など物語りあかし給ひて、あけ

ぬ。仲忠「この祿に、何事をか、まことは仕うまつらむ」茲、他事もなし。たどに、内

侍のかんの殿の手のかぎり弾き盡し給へらむ、犬宮の習ひはて給へらむぞ、いと

聞きあはせまほしき」仲忠「いと易きこと」と宣ひて、逸しばし」と聞え給へど念

ぎおき給ひて、宮の御方におはして寢給へる間に當りたる格子をうち叩きて、

仲忠「すもりこのかへらぬ程は冬の夜の鴨の浮寝ぞわびしかりける

さても生憎き目を見るかな」とをかしき聲して詠みかけておはしぬ。聞き給へど

女「憎し」とて返も宣はず。まめやかに、月日に添へて、古こひしう宮もおほ

す。中納言、いかどあさましとて、物も聞え給はず。

十二月、すこしあきらかなる折ありて、懲りすまに大將わたらせ給ひつ。仲忠「年の

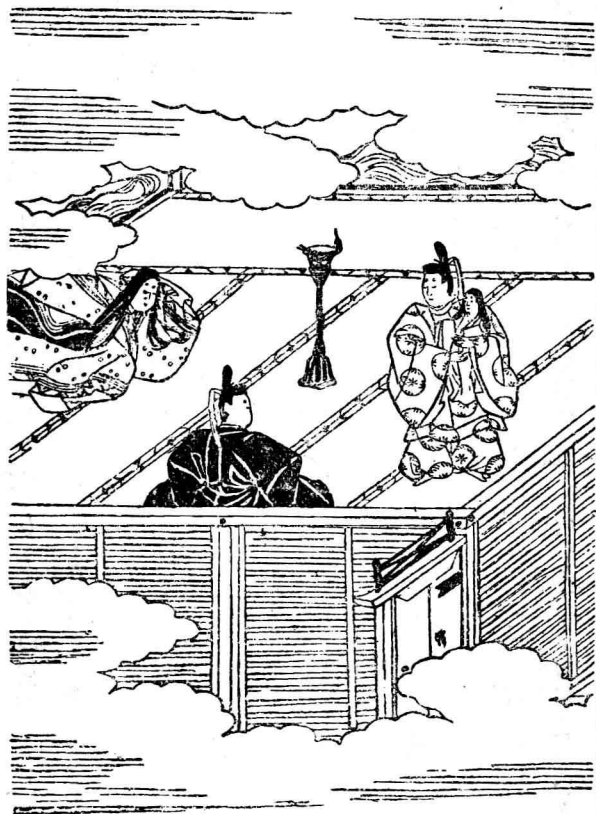
はじめに獨り侍る、あしかるべし。其方にと思ひ給へるは、うしろめたく聞え侍

(八)

(一〇)

(九)

(二〇)



(語釋)

(二)仁壽時

(三)年を越し給ふの意歟

(八)「御ナけもなまめかしき」歟

(九)「ありて調じたり」歟

(考異)

(一)給へれば―給へれど

(四)べければなむ―べければ便なし

(五)おはするに便なし―おはすれば

(六)などかんの殿君だち―などかんの君の―などを上の君たち

(七)御方―御許

るべし」と聞え給へれば、女二院の女御殿、辛うじてまかで給ひて、とし返し給ふべければなむ。犬宮、御車ながら見む。此方に」と宣へれど、仲忠「御子たちの(四)おはするに、便なし」とて聞き給はず。

(五)國々の御莊より、節料に人の奉るきぬ、わたなどかんの殿君たち、御許人、下に(六)さふらふ人々に、例の御節料より外に、いとかめしう分ち給ふ。女御殿の御方

に、いとうるはしうて、さまざまに奉らせ給ふ。三條殿の對におはする御方々、

宮の君の御方にも色々に奉り給ふ。内侍のかみ、對の宰相殿の御方、なまめかし

き様にて、もの奉り給ふ。御使人々召して、はなだの綾のほそながかつけ給ふ。

さまざまに持て出づれども、又同じごと、御前の庭のはるぐと廣きに、三百ばかり、

様々にをかしき物ども添へて、置き集めたる、例のありさまならず。御遊

の具など、いろく、見所あり調じたり。かんのとの見給ふに、大臣の所にだに、

いと斯くはあらず、いかめし、と見給ふ。院、東宮の御方より得給ふ物、いと

新年

(語釋)

(一)仲頼

(二)仲忠が

(三)「する」は「ある」歟

(五)女一宮

(六)誤あるべし、一本えしも「を」えしとも「に」作る

(九)「よろしからぬ様」に歟

(考異)

(四)あやしう恥かしうーあやしうくやしう恥かしう

(七)生憎けーあやにくく

(八)理とー理に

らきらし、入道の君の御許、忠君僧都の御もとに、奉り給ふ。

正月朔日には内裏院、東宮、大后の宮などに参り給ふ。御前といかめしう、

御かたぐいの人々ものしうみ奉る。宮におはしまして、大宮の御方、つぎに女

御君拜し奉り給ふ。女御、仁豊「わかうより帝を見奉る、などかはする。この

大將見るこそ哀ならねど、あやしう恥かしう、命延ぶる心地すれ」宮の御方に入

りたまへば、逃けて女御の御方におはすれば、仲忠「こは何ぞ」と見苦しかり聞え

給はすれば、二の宮、女三犬宮おはするまでは見えじ。とて、去年の秋より斯く

なむ。藤壺に宣ふらむもはづかし、とて如何にえしも聞え給はず」と聞え給ふ。

女二「けに、あまり生憎に怪しきわざなり」とて、かく聞え給ふ。女三「身をつみ給

はどとこそ。みには、思ひ聞えむ程は、思すまじくや。侍らじとあめるも理と

なむ」大將うちわらひ給ひて、仲忠「仲忠こそ、うれへ聞えさせむと思ふ給ふこと

侍れ。いかに聞えさせ給へればか、年の始に、よろしからむ様に宣はすらむ。ゆ

(語釋)

(一) 歸り給へ

(二) 仲思が

(四) 中の「は」沈の「を」を「ぢうの」と書けるより誤れるなるべし

(六) 女一に

(一) 正頼の一族は

(二) 女一が

(三) 「など」として「なるべし」

(一五) 思雅兼雅も大變を見合せたる也

(考異)

(三) 女御の君より一女御より大將殿に

(五) 三つ四つして一三三

いして

(七) なりナシ

(八) られザラられて

(九) はなれしはなれ

(一〇) 思ししもばえ

(二四) 大殿の厄年におはするとて一大殿は思み給ふ年におはするとて

ゆしう侍るを、二日はなほわたらせ給ふべく聞えさせ給へ」とあれば宮、女二世

の常ならず心ある人ならば、さりともみな思ふ給ふやうあらむ。なほ早わたり給

へ」と聞え給へど寄り臥し給ひぬ。女御の君より、御菓物を中の折敷三つ四つし

てまゐらせ給へれど、まゐらず出で給ひぬ。

中納言、立ちながら對面し給へり。茲、女御の君おはすれば、如何に、さりとも御

對面はありつらむな」仲思「さも侍らず。腹立たしければ、急ぎまかづるなり」中

納言、遠くやしき事をして、その儘にまた目も見あはせられずかたことにとりは

なたれにたり」仲思「あやしかりける事を、うたてこそ憎き御心なれ」中納言、茲か

の國讓のことと思し給はずや。帝をだに、事ともせられぬ、かのわたりは」と宣へ

ば、仲思「いでや、かの御心に似給へるこそは、いと憎きことなれ。あなかまや。

まろがならむ様に、なほあるばかりぞ」などて出で給ひぬ。

左の大殿の厄年におはするとて、大變せられねば、いま二所も、「何かは」とてあ

る

(一五)



〔語釋〕

(一) 正頼の一家と思雅兼雅の一家なるべし

(三) 未考誤あるべし

白隠上の二月、三月、四月、五月

〔考異〕  
(一) スキーメ

れば、「さうぐしかるべき年かな」と人言ふ。晦がたに、「子日せよ」とて、  
かたの人々あまた、山にありかせ給ふ。日のどかにて、樓より見おろしたれば、  
色々にわかき人々、わらは、下仕、装束き、つほよりもありて、此方彼方の人々  
歌詠みたらむかし。

二月 晦がたよりは、猶樓にてならはし奉り給ふ、山のけしき、色づく見るもい  
とをかし、とて。三月節供、例のいと清らにて参り給ふ。櫻の花、榊櫻の花、い  
とおもしろし。樓はたど櫻の花の中につよまれたり。犬宮、一所まめやかにてお  
はすればにやあらむ、いとこよなく大人々々しうなりまさり給ふ。鶯の聲いと  
近く、花に居て啼くを、いとのとやかに、その聲にあはせて弾き給ひつよ、  
犬宮、鶯の花にむつるよ聲きけばこひしき人ぞ思ひやらるよ  
と弾き給ふを、大將いと哀に聞き給へど、かしづき給へば、いと恥かしげに物恥  
をし給へば、たどにおはす。

(語釋)

(二)君だちとは御たち」歟

(四)俊隆女、仲忠、犬宮

(考異)  
(一)殿のもの」のナレ

(三)降りくちサ一降りて  
くちサ

四月祭の日、葵かづらいといつくしう麗しき様にて、禰宜の太夫、かんの殿の御方に持て参りたり。かづけ物し給ふ。大將清けなる四位、五位して、かんの殿の御簾につけさせ給ふ。あをき薄様に書きて奉り給ふ。

俊隆女 玉すだれかよる葵のかげそへば心のやみもなかりける世を  
大將御返

仲忠 雲井なるかつらにかよる葵にもむかはぬ程ぞくれ惑ひける  
掛けさせ給ふにつけて、つきせず思ひ給ふる。あなかしこ。

と聞え給ふ。かたみに哀におほえ給ふ。

五月節供、右の大殿よりあり。宮の御方の女御にも贈り給ふ。この殿のも、心こ  
とになくて参らせ給へり。君だち、下仕までも、衝重いと清けなり。例もかん  
の殿の御節供は、藏人ぞ参り給ひける。今は長雨がちなり。しづやかに降りくら  
す日、時鳥かすかに鳴きわたり、月ほのかに見えたり。三所ながら、靜に彈きあ

(四)

(語釋)

(三) 限あるべし「給よ」と一本「給ふに」

●六月の鼓。

(考異)

(一) 中にもいとよく——中にもとよく

(二) 給へば——給よ

はせ給へる、いとおもしろし。此方彼方の人は、泉殿に出でて聞く。殿の人々の中にも、いとよく琴習ひたる數多あり。いづれと聞き別き奉らず。今、手の限をつくして、弾きとどめたる折につけつよ、琴をかへて弾き給ふ。靜なる音、高うひどき出で、土の下までひどく音す。哀に心すこきこと限なし。

六月暑けれど、樓の上は、山高き木どもの風、いみじう涼し。犬宮、白き羅、ひとへがさね著給へり。晦に、御祓し給ひに、二所ながら、御前いかめしうて、河原に出で給へり。右大殿の梨壺の御子も牽て出で奉り給へり。大殿の御孫もまうで給へる程に、平張いと近し。御子君、若君と遊び給ひて、梨壺皇子「いざ、かの平張に往かむ」と宣ひて、御簾ふと掲げて入りおはします。犬宮、かんの殿の御傍に、三尺の几帳立てて居給へるに、さしのぞき給へる、うち見合せ給へば、ふむ後とき給ふに、内侍のかみうち驚き給ひて、胸ふたがり、いみじきわざかな。大將の給ふと思ひ給ひて、遠くわれるざり出でて。俊隆女「いふかひなきわざかな」

(語釋)

(三)有の儘にもの意歟

(五)梨壺腹

(考異)

(一)なければ一なし

(二)おはしませばありありしうも宜はず一おはすればありしう上に宜はじとおぼす

(四)御子に我一御子には我

とて、え荒く聞え給ふべき方もなければ、俊隆女「此方おはしませ」とて御座うち敷きて、すゑ奉り給ひて、俊隆女「何か御覽じつる」と聞え給へば、いと靜に、皇子物やは見つる」と聞え給ふ。いみじうつくしけに心深く、大人のやうにおはしませば、ありくしうも宣はず。幼き心地、小き人々を見るに、まだかよる人は見ず、いみじう美しう、また見まほしきかな、もろ共に遊ばよや、と心にしみて覺え給へど、物も宣はず。犬宮は、宮の君にだに見えぬものを、あさましきわざかな、と恐ろしきまでおほえ給ふ。御子に、我、とりすゑて、御菓物まゐり給へど、ことにまるらず。宮の君、若君、いと美しうて、「宮こそ、おはしませ。鳥の水に下るよ見給へ」と聞え給ふに又や見べき、と氣色見給へど、さるべくもあらず。大將おはすれば、おはしましぬ。仲思「あなかしこ。騒がしう。宮や入りおはしたりつらむ、と思ひ給へつる」と宣ふもいとほし。夜さりまで、鶉飼などして歸り給ふ。大將は、殿の御送しておはしぬ。

●七夕に仲忠等星に手向  
けんとて琴を弾く、奇特  
流、庭にありて琴を聞く。

(語釋)  
(二)歩陣舞

七月七日、犬宮御髪すまさせ奉り給ふとて、樓の南なる、山井の尻ひきたるに、  
濱床水の上に立てて、内侍のかみもろ共におはす。それもすましためり。人も見  
えぬ方なれど、ほうせうひかせ給へり。乳母の君も、二人して、粕ばかり著て、  
童へ取り次ぎたり。御髪、心もとなしと宣ひし、長になり給ひにけり。御容貌も、  
變化のものの様に、なりまさり給ふ。棚機祭、かなたこなたとせさせ給へり。  
内侍のかみ、棚機に、今宵の御供のもの、少しひきて奉らむ、靜なる所なり、  
とおほすに、二方に、君だち人々、反橋に几帳ばかりを立てて出で居給へり。宵  
少し過ぐる程に、源中納言、狩の装にて、馬にておはして、南の山の籬の外にお  
はして、御座敷かせて、傘、かの木の空洞におき給ひ、頬杖つきておはす。  
氣色だつ風冷やかにうち吹く程に、かんのとの、袂陰玄いざや、御供彈き奉りな  
む」とて、はし風を我彈き給ひ、ほそを風を犬宮、りうかく風を大將に奉り給  
ひて、曲の物たゞ一つを同じ聲にて彈き給ふに、世に知らぬまで、空に高うひど

く。萬の鼓、樂のものの笛、琴、彈物、ひとりしてかき合せたる音してひどき上る。おもしろきに、聽く人空に浮むやうなり。星ども騒ぎて、雷鳴らむするやう

にて、ひらめき騒ぐ。かつは、如何にせむとおほえ給へど、聽きさし給ふべくは

たあらず。御供なる左衛門尉なるものに、太刀を抜かせて聽き給ふ。様々におも

しろき聲々の哀なる音、同じ聲にて、命延び、世の榮を見給ふやうなり。わりな

くても、斯くて聞かざらましかば、如何にくち惜からまし、と覺え給ふ。左衛門

尉は、天を仰ぎて聽きるたり。夜いたう更けぬれば、七日の月今は入るべきに、

光たちまちに明かになりて、かの樓の上と覺しきにあたりて耀く。雷はるかに

鳴りゆきて、月のめぐりに星集まるめり。世になう芳しき風、吹き匂はしたり。

少し寐入りたる人々目さめて他事おほえず、空に向ひて見聞く。樓のめぐりは、ま

して様々に珍らしう、芳しき香満ちたり。三所ながら、大將おはする渡殿にて彈

き給ふなりけり。下を見おろし給へば、月の光に、前栽の露玉を敷きたるやうな

(語釋)

(一)涼が

(三)涼の心

(考異)

(二)給ふべくはたあらず

(四)わりなくとも「て」ナレ

(五)あたりて耀く「あた

(六)三所：彈き給ふなり

りりーナン

(七)見おろしー見いだし

(七)

(六)

(五)

(三)(四)

(語釋)  
(一)涼の心

(二)俊隆

(考異)  
(三)主の書一集

(四)知らぬ一ちりて

り。響澄み、音高きことすぐれたる琴なれば、かんのおとど忍びて、音の限もえ  
かき鳴し給はず。色々の雲、月のめぐりに立ち舞ひて、琴の聲高くなる時は、月、  
星、雲も騒がしくて、靜になる折はのどかなり。聞き給ふに飽くべき世なう、曉  
までも聞かむとおほすに、夜半おほく過ぐるほどに、彈きやみ給ひぬ。

大將、次に横笛を聲の出づるかぎり吹き給ふ。おもしろき折にあひて、哀にすこ  
う、これも世になく聞ゆ。聞き驚き給ひて笛は、昔、われと等しうこそありしか、  
ことに好み給はずと聞くに、いとこよなうまさり給ひにけり、とあまましう覺え

給ふ。曉になりゆく。空しづまり長閑なるに、治部卿の主の書の中に、唐土よ  
り知らぬ國に到りて、知らぬ道を行き給ひけるに、いみじう哀におもしろき所々

に、四季の花咲きみだれ、ある所には恐ろしくいみじき容貌したるもの集りてあ  
るわたりを過ぎ給ふとて、道のまよに長く思ひつゞけて、哀なる聲を出だして誦  
し給へる、また歸りて後、家のさびしきを眺めて、時につけつゝ作り集め給へる、

(語釋)  
(一)涼が

(三)大將の跡

自後陸女妻に父の告を聞く。殿のしちせの珍客を待つ。

(考異)  
(一)なきにーなきを

(四)只今一今

詩を誦し給へる、聞きしらぬ人だに、涙落さぬはなきに、まして大將の、此の所にて誦し給へるは、聲よりはじめておもしろう哀なるに、御直衣の袖、まして絞るばかりになる。琴の聲、がくの聲、もろ聲にしみたり。盡きずおほえ給へど音せずなりぬれば、あかで歸り給ふ。道のまよ、世の中いとはかなくも哀にて、紀伊國に年經給ひしなど、よろづ思ひつどけられ給ふ。

大將もうち臥し給ふ。かんの殿も、琴に手をうちかけて、いさよか寐入り給ふともなき程に、見給ふやう、「昔のものとの聲の、さも哀に珍らしく聞き侍りつるかな。

大將も、おほん樂の聲も、哀にかなしうなむ。さて今日、御門に參らむ人、必ず召し入れて見給ふべき人なり」と治部卿の御聲なり。いらへ聞え給はむとする程

に、醒めて、いみじう泣き給ふ。大將、まだ寢給はねば、あやしと驚き申し給へば、俊陸女いと哀なることをなむ見つる。かくれ給ひて後、「夢にだに見え給へ」と

心細う佗しかりしまよに思ひしかど、絶えてなむ見え給はざりしに、只今かくな

(四)



(語釋)

(四)今日尋ね来る人あるべしと俊隆が告げし人

(六)今住める大將は俊隆の子孫か

(考異)

(一)給ひつる一給へる

(二)かの一木の

(三)給ひしも聞き給ひけるよ一給ひけるを聞き給ひけるにこそ

御珍客、よしむねの時宗、才媛さがの孫四人を携へて来る、俊隆女の懐舊、四人の孫を留めて寵用す。

(五)具したりつる一こしたれたる一むしたれたる人

む見え給ひつる。此のなん風は、中に勝れておもしろき物にし給ひしを、かの空洞

より出でむとせし時、さては昨夜こそ、いさよかかき鳴らしつるを、聞き給ひける

か。哀なる詩を誦し給ひしも、聞き給ひけるよ。いみじう悲しうなむ覺ゆる」とて

泣き給ふ。大將も聞き給ひけることと、悲しくて泣き給ふ。理なり。仲忠「人の事、

如何なることならむ。斯かるを見給ひける、と、思ふなむ、効はなけれど、いと哀

に嬉しう」など聞え給ふ。御門には、つとめてより、然べき人々に宣ひて、仲忠「如

何にもあれ、人の來む、斯くなむと申せ」と宣ひて、今日は寢殿におはす。

酉の時ばかりに、東の御門に、馬に乗りたる男、童四人具したりつる人來て、

下りて、向なる御廐にて、御門に居たる人に問はず、童「此の殿をば何とか申す」

といへば、門番「大將殿となむ申す」といふに、童「此の殿に昔より住み給ふ人や聞

き給ふ」と問はず。門番「治部卿の殿となむ申し侍りし」と言へば、童「此方に物し

給へ」とてみづから逢ひて、男「吾が佛いと嬉しう、いらへ給へる」とて、男「か

(語釋)

(二)かく申上ぐるると申上げて下され

(六)主の男も

(八)此男が

(考異)

(一)といちよ然ばといふさるべきとこたふさ

(三)とリーナレ

(四)ほど一程に

(五)齊しく一齊しう

(七)笏に取りて一さしかざして

(九)せられつるぞ一せらるぞ

の御末すゑの後のちか」といへば、門番かど然しか。此この御後のちのおはします」といらふ。男おとこ然しかば、

「ふるき家司けいし、御厨子所みづしやしろに、切せちにうれへ申まうすべきこと侍はべるとてなむ、昔むかしこの殿どのにさ

ふらひし、下人しもひこなむ参まゐりたる」とこれ申まうすととり申まうし給たまへ。一生しやうきみの君きみと仕つかうまつ

り、悦よろこび申まうさむ」といふ。門番かど斯かくなむ」と申まうせば、大將たいしやう聞き給たまひて、仲思なむある

やうあらむ」とて、まづ寢殿しんでんなる人對ひとたいにおろさせ給たまひて、我出われいで給たまひて、仲思なむた

だ此處こゝに参まゐれと言いへ」と召めし入いる。悦よろこびて、いとをかしけなる童わらはの、長四尺たけに足

らぬほど、髮鬘かえまげばかりにていと齊ひとしく整ととのひたる、いと清きよけに、装束しやうむかせて、四人

後しりに立てて参まゐりたり。これもいと清きよけに装束しやうむきて、扇あふぎに取りて具ぐしたるさま、

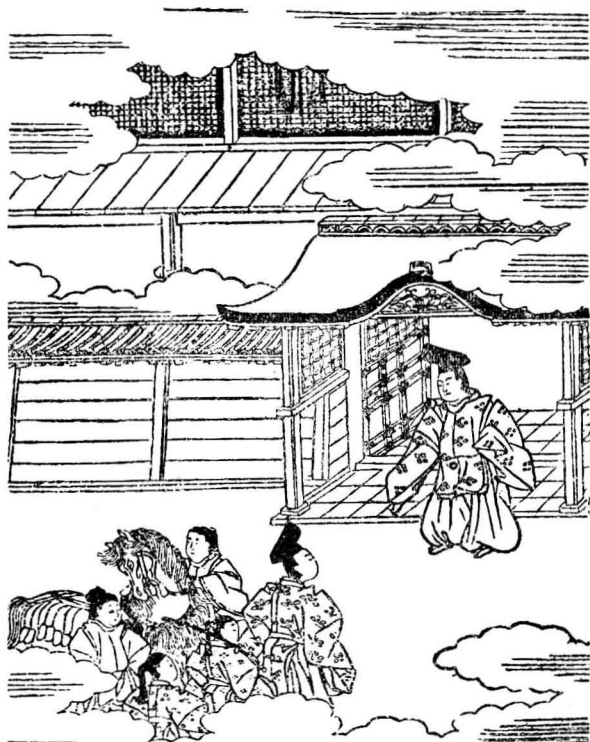
いとゆゑなくし。年四十としばかりなり。北きたの廂ひやうにかんのおとど、大將たいしやうの君きみもおはす。

大將たいしやうを見奉みたてまつるに、けに恐おそろしきまで清きよけに氣高けだかうおほえて、上のほらず。いと氣けな

つかしう、仲思なむ「此方こちや」と宣のたまへば、上のほり参まゐりたり。仲思なむ「いづこより物ものせられたる

ぞ。誰これに逢あはむと、ものせられつるぞ」と宣のたまへば、男おとこまづ、仰おほせられむ事こと承けたまり

(九)



(語釋)

(一) 俊隆女が仲思を産む時に世話せし老婢

(三) さがのが

(五) 姉は時持の妻になり、妹は右馬允の妻になりし也

(六) 連れて来たるが即ちその子どもなりとの意なるべし

(七) 私は

(八) 御願をあづかりて長門の嶽か目などを兼任せる也。「みまや」一本みや

(九) 姪は即ちさかのの女ども也、この男はさかのの弟と見ゆ

(考異)

(一) さかのの：族にて「さかのせき」とさふらひしかのさかのせきが子にて

(四) あると一ありと

てなむ、委しくは申し侍るべき。かく申し侍るは故治部卿のおとどのおはしまし

し世に、さかのとてさふらひし、かのさかのが族にてさふらふ」と申す。かんの

殿、御几帳のほころびより見給ふに、十ばかりにて、けに見給ひし者なり。哀に、

けに當時おほゆる人なり。さかのといひしぞ、末の世に、年いたく老いて、哀に

たど一人、大將の生れ給ふべきこと、急ぎありきしなりけり。俊隆女、いと哀に思ひ

し人の子なりける。此の年頃、この人の年若くてあらましかば、と思はぬ時なく

なむ。女などのあると聞きしは、ありや」男、三人侍りし大あねは、なくなりさふ

らひにき。今二人さふらふは、近江椽よしむねの時持といひ侍りし、その同胞

の右馬允にて侍りし、姉妹、年頃すみ侍りしを、一昨年、いとあやしく、二人な

がら亡くなり侍りし。男子二人づつなむ生ませて侍りし。此の参りて侍るぞかう

と申す。男は、嵯峨院の御厩の、長門かけて侍りし者の弟の時宗といひ侍る、攝

津國にぞ侍る。かの近江に侍りし姪ども、いとかう侍れば、去年より子どもひき

〔語釋〕

(二)國分寺に召使ふ童子に缺員ある由囁あり

(六)さがのをいふ

(七)俊隆

〔考異〕

(一)おとなしく〜おとなおとなしく

(三)法師はしがり侍りつるに―法師のほりし侍りつるを

(四)言ひなどし何かとむつかしう―言ひおどし何かとうべ〜しう

(五)勘じ〜てうじ

連れて携み侍り。その子どもの童べ四人、いときたなけには侍らぬ、そこに侍るものども、身の程の様などおとなしく、程につけては、京の殿ばらに奉らむと申すを、去年までは親の服に侍りしかば、籠めすゑて侍りしを、國分寺の童べのあきたる事のさふらふなど申しき。此の童べを法師ほしがり侍りつるに、親侍りし時、俗になさむと、母にて侍る者どもの申しき。これらが事を國の守に言ひなどし、何かとむつかしう申して、僧の方よりも、公がたにつけて、責め勘じ、家を亡し侍り。これらが母の申すは、「おのづから、某侍らむ。此の母、若くより宮仕を仕うまつりし、身の程あやしきをも知らず、故殿の御はての世までさふらひて、子どもの顔をも、終にはかゝくしく見侍らで、みまかり過ぎ侍りにき。我等のみ、殿をもえ知り奉らず、かく佗しくうれはしき事」いとも〜かしこくて、數多の世の御榮おはしましてなんど申すものの侍りしかば、泣く〜思ひ給へ悦びてなむ、斯くさふらひつる」と申す。かのさがのといふ女、いと哀に、

(語釋)

(一) 俊隆女

(二) 病氣がもう直るか  
直るか

(三) 俊隆女が

(五) 尋ねて來たる汝等を

(六) 我々に對して窮屈に  
思ふな

(考異)

(四) 人にて一人にも

(七) 物一サレ

病つきにけるに、子の許に往かまほしけれども、此の殿の、たゞ一所幼き子を  
 持給うておはしける、え見捨て奉らで、心地今や歎む、と思ひ居りける程に、  
 京にてはかなくなりけり。申しけることども、今日聞き給ふにつけても、思ひ  
 出でられ、胸ふたがり、悲しくおほえ給ふまよに、つくぐと涙のみこほれ給ふ。  
 大將にも、昔聞え知らせ給へりければ、然なりと思すに、いと嬉しとおほす。し  
 ばしためらひ給ひて、俊隆女、盡きせず哀なる、昔の人のことを物し給へば、いと悲し  
 くなむ。何かは、昔の人のこと、覺束なからずものし給へばなむ。委しき事は人  
 にはな宣ひそ。たゞ、かの人の代とは、とかく尋ねものしたる人をこそ、同じ事  
 に思はめ。此處をも、など物心苦しうあつかひ立て給ふ。吾が大將にぞおはすめ  
 る。うれへ歎きたる事ども、いとあやしき事なり。忽に、かの攝津守のもとに  
 も言ひやらせ給ひてむ。とく物し給はで、今まで然りけること。かの人々、何處  
 にとも、はかぐしう聞き置かずなりにしかばなむ、今に心には思ひながら、え尋

(語釋)

(一)と「衍文歟」

(二)ものしたれ」にて此儘我方に仕へよの意歟

(三)これはさかのの娘どもなるべし、此處脱文あるんか

(五)その妻は」歟

(考異)  
(四)いと一ナレ

ねざりつる。いとこそ嬉しけれと、かくてもものしたる」と宣はす。年若く、いと  
 たちある下仕にてぞ仕うまつりける。今も田舎びず、由々しく、かはらかなる顔  
 つきして、髪、細脛ばかりにて、時宗「かのあらぬ若き人々具し給へるが、みなみ  
 な率て参り侍りつる」仲思「いとよきことなり。さやうの人々の、いとよう仕うま  
 つりつべき君だちものし給ふ」と宣ひ、かの童べ召せば、時宗「然さふらふ」と申  
 せば、仲思「なほよし。此處にまうで來」とて召し出でて御覽するに、いとをかし  
 けにて、白くらくくじき顔したり。仲思「いと思ふやうなる者どもかな。遊は  
 すや」と宣へば、時宗「二人は、笛をなむ吹かまほしうし侍る。いま二人は、舞を  
 ぞ好み侍る。さやうの事もし侍りぬべしとて、かくいと生憎に、いみじき目をも、  
 さまぐくに見侍りつるなり」仲思「いとをかしき事かな。みな一所に置きて、さま  
 ざま好むらむ舞もせさせむ」と宣ふ。時宗「かの近江椽に侍りし時持が妻は、朱  
 雀院の御時、采女をなむし侍りし。そが妻は、上人と官なり侍りて、かうぶり賜

〔解釋〕

(一)「ども」は「と」歟

(三)申立てたらば

(四)他の方法にて目をかりてやあべし

〔異考〕

(二)御代にも出て立ち申さば―御代には出て立ちて申さば

(五)さるべき―さへき

(六)物などまづ―まづ物など

はすべかりしほど、あさましく、後の人に横様に越えられ侍りて、賜はらずなりにしこと」ども申せは、仲患「いと易きことなり。今の御代にも、出で立ち申さばものしつべきを、今はあぢきなし、ことざまにて、いとよく願みむ。子ども、京にあらば、家をも願みさせむ。誰もく、時々はかよひて住めかし。このわたりにも、さるべき所ものせさせむ」と宣へば、時宗「限なく畏きこと」と申す。仲患「苦しからむ。物などまづ食へ」と宣ひて賜はす。仲患「守のもとには、家もとよりよく造りて取らせ、うちのもの、數によりて取らすべき由言ひにやらむ。又かの國に、院方より領する所あり。今よりは、時宗に預け知らせむ」と宣ふ。かの殿、かいねりの綾のひとへがさね、織物のうちき、はかま、一くだり賜はす。又きぬ十匹、俊隆女「これは、かの國にあらむ人々にもものせよ。必ずく京に上れ。さてのみなむ、思ふやうにあるべき」となむ宣はす。限なく、返すく悦び聞えさす。



(語釋)

(二) 汝は暫時京に留れ

(五) なりけりと殿の内なるべし

(考異)

(一) おり給ふーおりに給ふべき有様次の巻に見えたり

(三) 知らぬー知らず

(四) かよるーかよる

(六) 急ぎ一ひとりと

畫詞

こよは寢殿。時宗童へ四人。御前にあり、大將殿。もの宜ひなどす。

こよは犬宮の樓よりおり給ふ。

大將殿より、紅のうちのき一襲。織物の御さしぬき。仲忠「これは、かよるありき

に入るべきものなめり」と宣はす。きぬ廿匹。仲忠「これは、國にあらむ人に物せよ」

とて。仲忠「馬につきたらむ者に」とて調布三十賜はす。守のもとに、やがて殿の

下家司そへて、くだし遣はす。仲忠「人をやりて、暫もあれ」と宣はすれど、時宗「か

く限なきことを、とくまかりて、聞かせ侍らむ」と申す。時宗「年頃、田舎に、む

づかしき目どもを見、又かくいみじう言ひ懲せられて、泣き歎きて佗しかりつる

に、覺えぬ物どもを賜はりたるよりも、まだ知らぬ、清らに光り給ふやうなる殿

の御容貌を、けぢかく、今は吾が物と見奉らむとするは、いみじき吾が幸か

な。禍は、忽にかふるものなりけり」殿の内めでたきを見るに、物覺えぬま

で嬉しくて、<sup>(六)</sup>急ぎまかでぬ。童はさるべき人におほせ給ひて、仲忠「よく勞はりも

〔語釋〕

(一) 仲忠が

(四) 俊隆女の心

(五) 京極より本邸に

仲忠權を下りて三條邸に歸らんとす。其の準備涼、嵯峨院に参りて七夕の夜の曉をなす。兩院大后宮以下争うて仲忠が權を下る當日京極に參會せんとす。

〔考異〕

(一) 顔の「の」にナシ

(三) 朔日にもなりぬ一ツ  
ごもり

(六) 給ふ一給ひつ

のせよ」とて、やがて殿にとどめさせ給ふ。顔の清けに愛敬つき、らうくじまこと、殿上童とも言ひつべし。夜うさり召し出でて、笛賜はせて吹かせ給へる。田舎びず、いとなく吹く。四人ながら皆様々にいとよく吹きたり。いと嬉しきものかなと思す。舞せさせ給ふ。ましてこれは、明け暮れ心に入れたりければ、になし。人々、「いとをかしくさふらひける者かな」と興じ申す。

八月朔日にもなりぬ。九月上の十日の程に歸り給ふべきに、樂人召して、西東にて遊せさせむ、と思して、今よりかづけ物の事などせさせ給ふに、この童へのかたち整ひて、いと思ふやうに舞するを得給へるにつけても、見給ひける夢悲しうおほす。今四人の人々にあててせさせむと思す。いかめしき御莊どもに、きぬども召し集め、あや、織物、羅など殿中のしつらひ儀式忍びていといかめしう、然べき人々に仰せ給ふ。左の大殿の所々にも聞かせ奉り給はず。童べは今四人加へて、とのべさせ給ひて、夜晝しらべ整へさせ給ふ。八月十五日と、この御急ぎ

(語釋)  
(一) 仲忠が

(五) 侍るには「侍るよ  
りは一歟

(考異)  
(二) けりナレ

(三) 聞き給へしー聞き侍  
りし

(四) あがり侍らましかば  
ーあがらましかば

おほす。宮みやわたり給たまふべし。内侍ないしのかみ、犬宮いぬみやの御方かた々の人々ひとびとあはせて四十人、  
わらは下仕しもづかへ、例れいの扇あふぎ、裳も、唐衣からぎぬ、心こころことにせさせ給たまふ。犬宮いぬみや、いよくひきかへ  
たる様やうに大人おとなしくおはす。琴きんは、たどかんの殿どのと同じおなさまに、これは今少いますこし音ねは  
優まさりさまに弾つき給たまふに、今は限かぎりなく、この世よに思おもふ事ことなくなりぬとおほす。程ほどは  
八月十日(二)ばかりなりけり。

かくて源中納言げんちゆうなごん、嵯峨院さあがのいんにまゐり給たまひて、遠とほみだり脚病かくびやういたはり侍はべるとて、石山いしやまな  
どにまうで侍はべるとてなむ」と御物語ものぶた申し給たまひて、遠とほ云々しやうして、いみじう世よになき物もの  
の音ねを聞き給たまへし。珍めづらかなるまで、哀あはれにかなしく侍はべりし。はじめよりは、いま少すこ  
し心こころすごく、まだ聞き給たまはぬ音ねどもの侍はべりしは、なほ秘ひしたることや數多あまた侍はべらむ。  
いかでこれ聞召きこしめさせ侍はべらむ。今いますこし高たかく響ひびきあがり侍はべらましかば、いといみじ  
うなむ侍はべるべかりし。官位つかさくらるのごよなく侍はべるには、かく世よの中なかの上下うへにすぐれた  
る、物ものの上うへずに物ものし侍はべるなむ、めでたき事ことに侍はべる。公おほやけの御前ごまへなどにて、打解うちざけて

〔語釋〕

(三)季英

〔考異〕  
(一)晴し—そろし

(二)誦し侍りし—ずんじ  
て侍りし

(四)など—なんど

(五)少しよくせさせよと  
仰せたるを—ナシ

(六)かみのいと—かみの  
こといと

誦したる折侍らぬを、おほかたの聲、書講じ侍りしよりも、聲の出づるかぎり、昔の詩ども誦し侍りしなどは、すべて涙留められずこそ侍りしか」院、嵯峨「いとおもしろく、哀なる事かな。いかでこれを、思ふ様に聞くべからむ」中納言、遠犬宮に、手の限、この二年をしへ調へて、此の十五日になむ、樂人ども集めて、左右と樂して櫻よりおろすべく侍る。かの日興あることども侍りなむ」院の上、嵯峨「かの日こそ彼處に俄に御幸せめ。如何に」と宣はすれば、彼ある者の申すは、一院の、かの日ぞ、彼處におはしますべしなど申すなりし。さやうに侍らば、さる御心せしめ給ひてこそよく侍らめ」嵯峨「如何は。九月九日、右大辨に、さりぬべく文作らせて見むとてなむ。女の装など、少し物せさせよと、仰せたるを、二十くだりばかりは、少しよくせさせよと仰せたるを、まづ然ばかの家の琴聞かむ。内侍のかみの、いと聞かまほし。右大將いみじき人なり。天下におもしろく哀に有り難きことどもの留りたる家よ」など宣はせて、中納言まかで給ひぬ。

〔語釋〕

(一)以下仲忠の心

(二)斯様々々と朱雀院へ  
申上げたらば

(三)「こえ申して」は「聞  
えありて」歎、本「こえ  
給ひて」

(五)誤あらんか

(六)「うるはし」は「うるは  
しく」歎

(八)「家」は「我」歎、自分の  
分として紫檀の濱床をつ  
くらせての意なるべし

(九)「たり」は衍歎

〔考異〕  
(四)よりこなた―よりは  
こなた

(七)ながら―ナシ

朱雀院は、大將に、必ずかの日行かむ、ことごとくしからず、中々知らぬやうにて

物せられよ、騒がしきやうなり、右の大殿の、迎にもぞとてあると思ふなり、と

仰せられけるに、又嵯峨院返すく、忝く仰せられしを、然など啓し申さんに、

人たど便なく言ひなしてむ、おのづからきこえ申して、然らば然りと思はむ、お

はしまさむ様の用意せむとて、治部卿集の中にある、唐土よりあなた、天然よ

りこなた、國々のかみを、その年頃の有様を、かの大將書かせ給へる屏風、例に

似ず清らに、うるはし。皆ながら唐綾にかきて、縁の錦裏よりはじめて清らなり。

寢殿に二所ながらおはしますべくして、御簾の帽額には、大紋の錦をせさせ給ひ、

たかく捲き揚げて、御濱床に蒔繪して、家も紫檀のを造らせ給ひて、黄金の筋や

り、螺鈿摺りたり、珠入れたり。大方の所の面白きよりも、御しつらひいとめで

たし。

嵯峨院の太后の宮、「七十に餘りぬるに、萬の事聞き見るに、琴の音よきなむ飽か

(語釋)

(二)大后宮に

(考異)

(二)給へるはなく—給ふべきなく

(三)大將—大殿

ぬ。大將の、何時にかありけむ、早う彈きしを、いとみじく世になく覺えし。ましてかの内侍のかみの彈きたらむ、いかで聽かでは、あるべきにもあらず。御供にて聞かむ」と聞え給へば、蛭如何なるべき事にかはあらむ」とは宣へど、止り給ふべきならず。内裏の女御にておはする、此の大后の宮御腹の若宮も、承香殿いとよき事なり。こよにも聞き侍らむ。必ずおはしませ」と聞え給ふ。女一宮は、女御、男君たちのかぎり七所、一二の宮とおはすべし。源中納言、かの七月七日のこことをさへ、睦しき御中らひに聞え物し給へば、我もく、とまり給へるはな(二)く、おはすべし。御供の人までは、居べき所なし。寢殿の西の廂に大后の宮、北の廂には大殿、大宮、その御腹の女御の君、今の女御はなち奉りて八所、大殿の腹の女君だち五所、母上わたり給ふべき方なり。かく御方々、我もくと宣へば、「大將くるしう宣はむものぞ」と制し聞えさせ給へば、「あぢきなき事なり。然るべく御暇得給ひて、聞き給はざらむにより、世に聞きがたきことを聞き侍らざ(三)

(語釋)  
(一)あて宮は聞きに行くとも其方は行くなといふ意歟

らむこそ」とて一人とどまり給ふべきならず。東の廂には宮内侍のかみ、院の女御の御局とおほす。左の大殿の大殿腹の男君だち四人、宮ばら七人の男君だち、「いとむづかしう責めらるゝを、然りぬべからむ物の間に」と切に覺しつゝ、せめ聞え給へど、あるまゝに、逃れ聞えざるべき方なきまゝに、仲思「明きたる方なきを如何せむ」と聞え給ふ。

かよる事を藤壺聞き給ひて、左のおとどに、あて宮「只今、みづから聞ゆべき事なむ」と聞え給へれば、宮に、正類「さればこそ。此の事ならむ。いかに聞えむとすらむ。暇ゆるされ給ふべうはいとよし。定めて、聞召し忍びて車にてとあらば如何せむ。すべていと苦し。大事の聞きにくき事ありぬべかめり。然ばわたりなむ。彼方にはものせらるとも、此方にはなわたり給ひそかし」と聞え給へば、大宮「然もありぬべけれど、久しくをかしき物の音も聞かぬを、さうくしく思ふに、内侍のかみのひき給はむは、いかで、かよる折ならでは聞かむ、と思へばなむ」

(語釋)  
 (一)自分一人だけ

(二)御許容の御様子はお

(四)今上が

(語釋)  
 (三)などーなどを

正頼「こよに斯く宜はすればこそ」とて歎くく、参り給へり。居給ふまよに、あて宮、まろを彼處にまかせて、たどにあらむと思ひ侍りしを、かう離ちする給ひて、むつかしき事をのみ聞き、有り難う聞かまほしきことを、誰もく聞き見給へること。心に思ふことなく、あらまほしき目を見聞かむこそ、思ふやうなるべけれ。十五日、犬宮、内侍のかみ、樂して物し給ひ、院の上もおはして、かの手の限、さまざま弾き給ふべかなるを、後の宮もおはすべかなるに、一人しも、斯く交らふまじく侍るなむ、いとあさましく侍る」とて泣き給ひぬばかり聞え給へば、正頼「いと怪しく。けに有りがたき事を聞かせ給はど、いとよき事にこそ侍らめ。大后の宮も、必ずやおはしますらむ。時にのぞみて、あるまじなど人申さば、如何侍るべからむ。御暇は」あて宮、上は御氣色は侍り。昨夜いみじう聞えしかば、知らずなども宣はず。こればかりは、天下に宣ふとも、行かではえあらじ」と宣ふ折に、(三)わたらせ給へり。おとど、隠に居給ひぬ。あて宮「明日の夜さり、必ず迎へ給へ」と



宣へば、正頼「さればよ」とて出で給ひぬ。

(留釋)

(二)正頼が

いとまめやかにむつかり申し給ひて、御暇強ひて聞え給へば、今上「はや。いとよかなり」とて、今上「出で給ひなば、やがて彼處に物し給へ。萬の人の思はむよりは、

大將の朝臣の思はむぞをかしきや」あて宮「みな人も聞き給はぬに、獨りものし侍ら

ばこそ、さも思ふ人も侍らめ。大后の宮よりはじめ奉りて、おはせむには」と

申し給へば、今上「それはさしもあらじ。けにかの宮おはせば、さあるばかりに、

宮ぞ、ものし給はむ。よし聞かむ。さもあらじとて、また内侍のかみの琴きかぬ

人は、世にはあらずやあらむ」と宣はすれば、藤壺、大后、必ずおはせむなど人

知れずおほす。

(三)早速行き給への意歎

新中納言、今は人にもことに見え交り給はぬを、斯くなど聞き給ひて、

(四)實忠

實忠「夜の御事ならば、忍びて参らまほしくなむ承る。」

とて、

實思死にかへりおもひ過ぎにし世の中なかのあかぬことこそ哀あはれなりけれ

もし然るべくば参りなむや。

(考異)  
(一)過ぎにしーそめにし

とあり。見給ひて、よろづの事より如何様にして聞かせ奉らむと思ひ給ひて、仲忠悦びて承りぬ。わが佛ほつえ聞えさせぬ程に、いと多く珍らしく、嬉し

き事は、いでやけに、

年ふれど誰も忘れぬうき世にはなぐさむことの何かあるべき

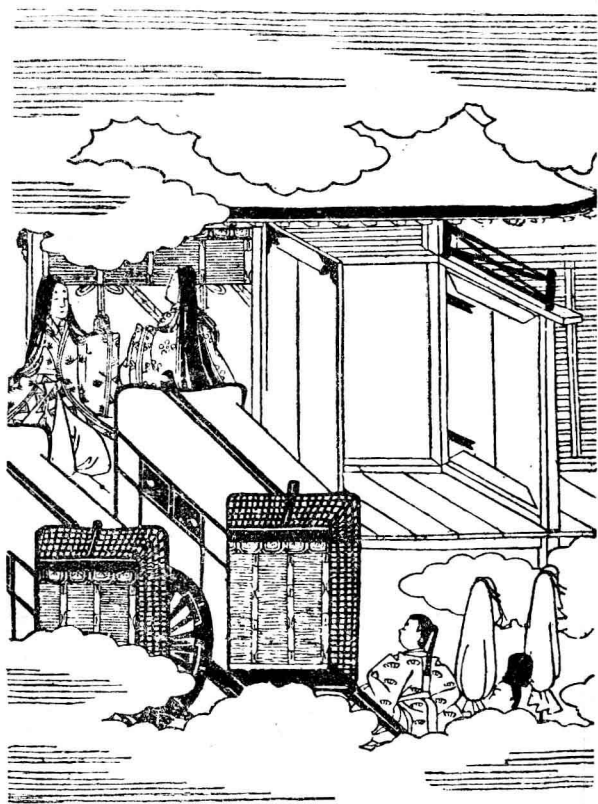
(二)わが佛え聞えーわが佛のきこませぬ

まめやかに、世の中の哀あはれに心細くおほえ給へば、しるしばかり、幼き人に、月頃ものし侍りて、忍びたる所、侍りがたくも、あながちにてもと思ひ給ふるを、と聞えさすれば、馬検所の法師の心地なむし侍る。

と聞え給ひつ。

(三)馬検所ー馬見所ー聞けん所

世に安からずのよすれば、御方々の北の方たち、御女たち、宮たち、如何様にてこれを聞かむと、おほし給はぬなし。忍びてとおほせど、院いん二所おはしますべき



(考異)

(一)こくばくーそこばく  
こくばく

(二)乞食かたるー賤山が

(三)宮ーこの宮

●前夜より京極に集まる  
人々

(四)などもーなども

(五)檳榔毛合せてーびり  
やうげは合せて

(六)ひたしあーひたし人

儀式、心ことなるありさまを言ひ騒ぎ、「こよばくの限なき宮、殿ばらつくして渡り給ふべきことあり」とのよしければ、乞食(一)かたるまで「如何なる事ならむ。見聞かばや」と思ひ言ふ。

右の大殿の宮、梨壺の御方、一つ所にとて、大后の宮、俄にわたり給はむとす。十四日の夜、嵯峨院の女御、大殿の御方々、おとな一人、わらは二人、御供にてわたり給ふ。御たちは、例の儀式にて、その車はおかず。南の方の山のかくれに立て並めたり。二御方の男君たち、姫君たち、御車ながら、「所もゆかし。かの降り給はむ有様、かくなども見給はむ」とて十一人の御同胞、黄金造檳榔毛、合せて十一、ひたしろにて、樓の西、東のはし殿にむかへて立つ。大后の宮、絲毛の御車つどけて、十四してわたり給ふ。西の御門より西の對に、人々、檳榔毛に乗りたるをばまづおろして、御車、中門より入れて、寢殿の坤の方の勾欄をはなちて、おり給ふ。儀式いとかめし。曉方なり。左大殿の君たち、いと多く、ひ

(一) 稱(稱)なりしは「なる」歟

(五) 綱しとねしは衍文歟

(六) 誤あるべし

(考異)  
(二) 驚きたまひ一驚きて

(三) 四間に南に一四間を俄に南に

(四) 一の宮一の宮

(七) もはす一居給ふ

き具して、御前仕うまつり給へり。儀式いといかめしううち續きて、三條殿の右

大殿の宮、梨壺わたり給ひぬ。西の對なり。かんの殿の人々も、みな坤の御堂

の廂、渡殿にうつりて、西の對を嵯峨院、犬宮の殿上人、藏人所にしたり。藤壺

わか宮たち、寅の時にまかで給へり。大將、思ひかけ給はぬに、驚きたまひ、俄に

東の廂、四間に、南によりて二間を、一の宮の御方とおほしたるを、一つにて中

をへだてて藤壺のおはし所にし給ひ、次の二間を、庇かけて宮の御方おはす。内

裏、東宮の殿上人、いと多く参れり。絲毛のになき御車、檳榔毛十二、たどの二

つあり。一の宮、大宮の御方々の人々、かたへは釣殿にうつりぬ。藤壺の女御の、

對かけたる渡殿などに、東宮の殿上、一間をわけてしつらひ居たり。南の廂の御

階の東は朱雀院の宮たち、御しとね、勾欄の端より西の廂は、嵯峨院、宮たち

九所おはす。御裯、隙なくよそひ續けたり。母屋分けて、二つにしつらひて、

はしたてり。さるべき大將たち、おとどばかりぞ、内にはおはす。上達部は、勾

(一) 詔釋

(二) 正頼の六の君

(三) 嵯峨大后

(六) 梨壺腹の皇子は何の感にもなけれど

(七) 梨壺

(考異)

(一) 居給へる―居ためる

(四) 聞かせ―聞き

(五) たとし―なく―さま

(八) もはせねば―もはせ

欄の簀子にぞ居給へる。太政大臣のも、「院の上のおはしませば、参りて聞かむ」と宣ふ。一の院は、嵯峨院おはしませぬと聞かせ給ひて、後に御對面あるべきにて、おはしませむとし給ふ。東の對は、一院おはしませむ。殿上、藏人所にせられたり。

明けゆくまよに、御方々、南の方の池、中島、釣殿、坤の堂の方、左右の反橋、樓のさまなど見給ふに、限なくおもしろく、めでたしと見給ふ。北の方を見やり給へば、遣水をかしう落し、枝ざしをかしう、珍らかなる木ども、小松ども、遣水のこなたかなたに多かり。對などは、こなたには見えず。はるくと庭のたとしへなく廣く面白きに、苔生ひ、紅葉の木ども見ゆ。藤壺見給ふに、大殿は、いかめしう上臈しう造りたることこそあれ、見所を斯うはあべきならず。かなたこなたを見遣り給ふに、いとみじく面白く見給ふ。一の宮は何事をも思ほさねど、女御の君は、東宮おはせねば后にもなり給はぬを、心よからず思しよに、大將の

(七)

(八)

(六)

(大將)

(語釋)

(三)嵯峨院が

●嵯峨院朱雀院御幸。

(四)船尾歌

(考異)

(一)言へる一言ひし

(二)きろくしくしてーち  
ろくしくーナシ

(五)あちじかしそやかか  
ーあちじはやかか

有様かたち、帝と申すともきしろひ難くおほしたるを、少したけくおほすに、今日の有様、此處のつくり様、人々のいみじう言へる、けにと思ひ聞え給ふ。

未の時ばかりに、嵯峨院おはしましたり。右大將参り給ひて、御階に御車よせて、

右の大殿、大納言三人、中納言宰相五所、源中納言、宮たち、いといかめし

う清らに、大人々々しくきらくしくして、ひき連れておはします。七十二におは

しませど、いと清らに、若く、只今ぞ五十ばかりと見え給へる。御髪白からず、

御腰すこしうつぶし給へり。いとよく笑ませ給ひて、嵯峨「いとおもしろき所と、

昔見しを、ゆかしきになむ物しつる。かの池のふなやは、此度は、長ぞ高くなり

にけり。いと哀に、たど同じやうなりや。我が見し同じ程を見し人あらじかし。

そや、かの宮内の兼躬の朝臣有りける。覺ゆや」と宣はすれば、兼躬「然侍り。山の

木ぞ高くなり侍りける」と申す。一院より、右馬頭なる人御使にて、

朱雀、右大將の朝臣の家に、わたりおはしましたり、と承るは、まことにや侍ら

〔語釋〕  
 (一)「びく」は「びん」なる  
 べし

〔異考〕  
 (二)知らねば―知らずな  
 む

(三)給ひつゝ給へば

(四)居給ひぬ一院は―居  
 給ひぬ嵯峨院は御物語御  
 堂の御床の上にてし給よ  
 一院は

む。内侍のかみの幼き人に琴教へて、今日もとの所へ歸り侍るを、かよる序な  
 らでは、聴きがたく侍るを、まことに御幸侍らば、参りてと思ふ給ふるを、  
 例あらぬことならば、(二)びくなくや侍らむ。  
 とある御返事、

嵯峨承りぬ。こよにも、まだ聴き知らねば、ゆかしき人も侍り。兒のならひ給  
 ふうむ聴かまほしくて、物し給へるに従ひてなむ。まうで來つるを、(三)  
 おほつかなきを、必ず御幸あるべし。例はありとおほえ侍る。  
たいめん

と聞え給ひつ。大將御むかへに参り給ふ。左の大殿、右の大殿、それより外は、あ  
 る限御供に仕うまつる。すなはちおはしましたり。太政大臣のおとど、次に参り  
 給ふ。院の御子たち、この御腹の御子七所、清らに美しけにて、五所は御かうぶ  
 りし給へり。二所はまだ童にて、うち續きて居給ひぬ。(四)一院は、清らにうるはし  
 く、そびやかにおはします。御覽じまはして、朱雀人々みな残なく物するに、内



●俊隆女、大宮權を下る。  
●の仰言。

(路釋)  
(一)因あるべし

裏には、誰かさふらはるらむ」左のおとど、正精「大藏卿源朝臣、藏人少將信方、さては六位の男どもなむさふらふ」と啓し給ふ。車、東面をきはにて、西は三四町まで立てたり。次々の下人ども、路なく見ゆ。

午かぎりて、酉のはじめに樓よりおり給ふべし。樂人も皆平張にあつまりぬ。一院御覽じて、右大將、左のおとどに、朱雀「時やうくなりぬめるは、いづら、遅し」と度々仰せらるれば左のおとど、頭中將、右近、藏人少將、こなたかなたに

まかりて、「はやとぞ仰せよ」と宣ふ。立ちて事の行事す。西の方の錦のひらばりより大鼓をうちて、靜にやうく樂し出づ。八人の童、四人は孔雀の裝束す。四

人は胡蝶。左右に立ち出でて、いとをかしう舞ふに、吹物、彈物あてて賜はず。宮たち、「手おそし」と宣ひて、吹き、彈き合せ給へり。院、大將を召して、朱雀か

の人々もはや物せられよ」とて、車よせて、かの西東の反橋に寄せさせて、一

院の上は氣色おはする御心にて、多くの大臣たち、大宮方々に見せざるに、藤

(語釋)  
 (三)大宮の輩を俊隆女に用ひさせ上

(四)犬宮の事は我世話すべし

(五)殿りちらんか、一本「御かたを」御くだ物」とかけり

(考異)  
 (一)心もなげに「心もとなげに

(二)ながら給ひて

壺をうしろめたく思ふと、心もなげに、一つにては皆狭けなりと御覽じて、かの東の放出の母屋、一間を、屏風立てて、「犬宮、内侍のかみは、こよにもものせらるべきなり」と宣はすれば、喜びながら屏風立てしつらひ給ひつ。人々心ことに見給ふ。左のおとど、正頼「遅し。はやく」と仰せらる。嵯峨院、「忝けれど、大宮の御輦、内侍のかみ。一院のは犬宮」と仰せらるれば、承りて、右のおとど、いと花やかに行ふ。左のおとど、正頼「内侍のかみの御車寄せさせ給はむや。正頼、犬宮に物すべし。右大將の朝臣、思ふとも、身を二つにはえ分けじ」と宣ふ。右大將、仲思「こなたかなたに早々」と宣はすれば、蘇枋の裾濃の裳出だして、晝かき、縫物したる几帳ども、三十人のおとな取り續きて、童四人、線のうちのはかま著たり。又犬宮の御方の人に、紫の裾濃に縫物して、唐組を紐にしたり。三十人、童の長これは少し劣りなる、ながくとある反橋の上に、さし續きたる、いとをかし。まづおとど御かた参りて、しもに、右のおとどに譲り聞え給ひて、犬

(三)

(二)

(四)

(五)

(考異)  
(一)脇息とりて—脇息をとりて

(二)こくばく—こくばく

宮おろし奉り給ふ。右大将抱き奉り給ひて、几帳のさき、童、こなたにも、  
襦火取、薰物に銀黄金の壺二つするもの、脇息とりて歩みたり。長とよ  
のひ、髪長に一尺餘りたるが、容貌うつくしけなり。隙なくつどきたる几帳、色  
色のうちき、裳の裾どものはづれたる、いとなまめかし。近き車どもよりも遙に  
見ゆるいとめでたし。左のおとど、几帳に添ひて、はつかに犬宮の御様體を見給  
ふに、いみじく美しけにめでたう見え給ふこと、あて宮の兒におはせしにこよな  
う優り給ひて、あてになまめかしう、見驚くばかりいみじきものかな、こよばくの  
君たち、一二の宮ばかりこそは、品まさりては見え給ひしかど、まだ小き程に、い  
と斯うは見え給はざりき、これは、ゆよしく變化の物と見え給ふ。樂の聲、御前  
の御子たちよりはじめて、彈物吹物、聲しづかに等しくて、おもしろきこと限な  
し。嵯峨院、御扇して、拍子うたせ給ふ。一の院、時々唱歌し給ふ。かよる事又  
あらじと見え聞えたり。

(四) 桔梗色し敷

御車寄す。四位、五位殿上人、階よりおりて、牛かけて寄せたり。一院、朱雀かの車、異の隅の勾欄はなちて寄せさせよ」と頭中將に宣はすれば、左右大臣さ

きに立ちて歩み給へり。右大將、犬宮の御車ひき給へり。右大將、右のおとど、

几帳さしておろし奉らむとするに、「例の儀式あるを」とて御氣色賜はり給ひて、

まづかんのおとど下り給ふ。次に犬宮の御車寄す。左のおとど手かけ給へば、

(海異)

次々の人おりて寄せたり。几帳、夕日の隙影より、内侍のかみ、紅の黒むまで

濃き唐綾のうちあはせ一かさね、三重のはかま、龍臈の織物のうちき、唐のこま、

羅かさねたり。地摺の裳、村濃の腰さして、唐の織物の、あか色の二藍かさね

て、唐衣著給へり。犬宮、唐撫子のからあやのうちき一襲、きかう色の織物のほ

そなが、三重がさねの御はかま。内侍のかみ、るざりよりて、下し奉り給ひて、

御衣ひき繕ひなどし給ひて、るざり入り給ふすきかけ、玉虫の巢よりすきたる様

に、あなめでたと見えたり。小き扇さしかくし給ひて、るざり入り給ふを、一院

(四) すきかけ玉虫の  
きかけ犬宮玉虫の

(二) 給よー給ひ

(二二)

(四)

(語釋)  
(三)正頼の心

(四)まがのの孫ども也

(考異)

(一)かみの「の」ナレ

(二)装の「の」ナレ

④まがのの四人の童人々  
に受てゐる。

几帳きさやうのほころびより御覽らんじて、いと美うつくしとおほす。内侍ないしのかみの様態やうたい、細ほそやかに  
なまめかしう、あな清きよらの人ひとやと見えたり。たど今いま二十餘よばかりに見みえて、裳もの  
裾すそにたまりたる髪かみつやくとして、すそ細ほそからず、又またこちたからぬ程ほどにて、引き  
添そへられてゐざり入り給たまふを、左のおとど、几帳きさやうさし給たまふまよに見み給たまひて、いと  
みじかりける人ひとかな、年としの程大將ほどおおいしやうの妹いもうとといはむにぞよき、仁壽殿にじうでんの女御にようには、  
様體やうたいけはひも勝まさり給たまへり、昔むかしの心こころならましかば、かよるを見過みすこさましや、と妬ねたう  
おほえ給たまひ、辛からくおほしたり。

この四人わらはの童ひより、一人はかたち、色いろいと白しろく美うつくしけにて、舞まひも勝すぐれてかしくする  
を、御前まへよりはじめて、「彼かれはいとをかしく童わらはかな」と興けうじ給たまふ。院いん、朱しゆ雀せきいと小  
くて、かしく舞まふものかな。彼かれ、こよに召めし寄よせて、樂がくも静しづかに仕つかうまつらせよ  
と宣のたまふに、左のおとど、正頼せいらい「四人いふはこの家いへに侍はべる童わらはなり」と啓けいし給たまへば、朱しゆ雀せき「い  
とをかしく整ととのひて、いかで斯かくあるらむ」と宣のたまふ。御子みこたち、御方かた々、これに目め

〔語釋〕

(一)田舎形氣にて恥かしがりに逃げたるなちん

(三)せめて二人だけでも此弟官たちも奉りたしと

〔考異〕  
(二)いとをかしういといとをかしう

をつけて、見興じ給ふ。御階のもと近くて、「更に、さばかりの程にて、かく舞ふなし」とめで給ひて左右大臣、袖脱ぎて賜へば、御子たち、殿上人、同じく脱ぎかけ給ふに、舞ひさして逃けてゆけば、「かれ留めよ」と召すに、恥ぢて参らねば、人々興じ給ひて大將に、「誰が子ぞ」と問ひ給へば、仲思しかづくの者どもの、兄弟の子どもにて侍り。鄙びて、斯くまかでつるなめり」と啓し給ふ。宮たち、上達部、「宜なりけり。時持は、いと清けに侍りしものなればにこそありけれ。聲いとかしこく出で侍りしものなり」と申し給ひて、召せば、参りたり。仲思笛なむよく吹く」と申し給へば、「いとをかしき事かな」とて賜ふ。四人ながらいとをかしう、吹かぬ笛なく吹きたてて、まだ小きも、顔かたち愛敬をかしけにて、かよる才をいと美しくすれば、院の宮たち、我もくと、得むと宣へば、左のおとど東宮の御弟の宮たちも、かよる事するを、然しもあらぬをだにもてなし給ふ、二人をだに、と思ひ給へど、同じやうなる宮たちの、乞ひ領じ給へば、えともかうも宣

(三)

(語釋)  
(一)宮は東宮

(三)あて宮が

(五)二宮歟

(考異)

(二)をかしく―をかしく  
て

(四)五の宮―の宮ナシ

●朱雀院、嵯峨院琴の秘  
曲を蕪さんことを倭隆女  
に迫る。倭隆女の煩悶。

はぬを藤壺、中にも勝りたる二人を、いかで宮、二の宮に奉らむ、容貌はまさ  
るもまた有りなむ、小くてさま／＼をかしく、宮たちもてなし給ふに、嵯峨院さ  
へ、「一人は院にさふらはせむ」と宣ふを羨ましくおほして、二の宮の、御簾のも  
と近くおはするに、あて宮、「かの笙の笛吹くは東宮に奉らむ。横笛吹くは我得て  
む」と大將に宣へ」と聞え給へば、大將の居給へるに、はた斯くと宣へば、仲忠「い  
とよく侍るなり」と聞え給ふ。一院の五の宮六の宮、「我も得むとするなり。いか  
でか」と宣へば七の宮、「然ば、こよに得むとしつるものをば不益なり」と宮、「然  
ば、見てやあらむするや」と宣へば、仲忠「かの今四人さふらふも、いとよく侍り。  
それらをも」と申し給へば、「いな、それは舞もえせず、悪ければ、辛きなり」と  
宣ひて、かたみに幼くおはするどちぞ宣ふ。院の宮たち、あるは「上に申さむ」  
など宣ふ。院の上、いづれともなく美しと見奉り給ふ。  
かくて日暮ると程に、一院御床より下りさせ給ひて、内侍のかみの几帳のもとに

(語釋)

(二)「感せかゝるまじくとてし歎」

(四)「御」は衍なるべし

(七)「給かくし」は「給へかし」歎

(八)「忘れねど」歎

(九)涼

(考異)

(一)昔時々一會も時々

(三)こよなくはかなく

(五)ようーかう

(六)はかなくしうもー「も」ナレ

おはして、朱雀あさましく、覺束なくもてなして、年頃も、自らこそとてなむ。  
 今日(一)は、昔時々聞かまほしきことも飽かずなりしかば、ところせかましくとて車  
 など物せしかど、効なくて止みにき。今は心安きさまにてだに、如何にと人知れ  
 ぬ志(二)もありき。こよなく思ひおとされたるばかり、世にくち惜しう妬きことは  
 なくなむ。よしや思ふ心のうちこそ及ばざらめ、易かるべき物の音だに。身の爲  
 は、かくもてなさるよこそつらけれ」と宣はすれば、内侍のかみ、俊藤女いとも畏  
 き仰せご(三)とを、明け暮れおろかならず思ひ給へながら、年頃は、宮、わか君たち  
 の御事を、とかく見給へし程にこそ、時々もえ参り侍らで。御琴は、いとよう聞  
 かせ給ふべかりけるは、ほれなくしうなりにて侍れば、はかなくしうも侍らじ。  
 如何に侍らむ」と聞え給へば、朱雀いとかしこくも宣へるかな」とて、朱雀「かや  
 うになむ教へつる」とて引き寄せてきかせ給かくし。かのほそをの曲の物「今三  
 つ四つは」とありしも、更になむ忘れぬと  
 (八)中納言の朝臣、「七月七日の夜、また聞  
 (九)



〔語釋〕  
〔一〕「のたまふへしは」も  
のし給ひし」歟

〔考異〕  
〔二〕なにとか―なにかは

〔三〕心ばへらかに―心ば  
へらまに―心ばへはいま  
に

えぬ物の音なむありし」とものせしかば、すべて、りうかくの調にはじめて、か  
の七日の夜のこと、今宵きかせ給へ。いつか、又かよる夜の事あらむ。嵯峨の上、  
年頃ゆかしうせさせ給へる、残少き御世になり給ひたる、斯くておはしました  
るいと畏きことに、人知れぬ思ひ過しも心とどめておほされば、たゞ、今日やそ  
のしるし見ゆべき。何事も思されぬにつけても、有りがたう聞えしことども、の  
たまふへしことども、今日の夜の御心ばへにこそ、愈限なく覺ゆべけれ。大將  
の朝臣の悦なども、言ひてまし。なほさまぐくに心疊くこそ思ほゆれ。此の聞  
ゆることどもは、然思はましや。如何に」と宣へば、俊隆女「けに理と聞えさすべ  
き、疎ならぬことをこそ、なにとか啓し侍らましか、とより外にと思ひ給へしなむ。  
まことに、琴はあまた侍りともおほえ侍らぬを、りうかく、ほそをばかりこそ。そ  
れは入將をりくに仕うまつりしを聞召され侍らむものを」と聞え給ふ。右のお  
とど心安からず見奉り給ふ。朱雀左のおとどの心ばへいかに、なほたどならじ

〔語釋〕

(一)未詳

(五)俊隆

(七)雷鳴堂

〔考異〕

(二)みづしに―みつゝに

(三)責めさせ―めさせ

(四)入れて―入れ〕ナレ

(六)啓し―きこえ

(八)彈き給はずなむ―ひ  
かずなむ―ひき給はずなむ

はやと思ふに、右大將、心もとなくこそ覺ゆれ。かのりうかく、ほそを、又かの治部卿の朝臣の集の中に、今かみに書き消たれたりし、さいこくに思ひくすべしとありしみづしに」と度々責めさせ給ふに、いみじく清らなる、高麗の錦の袋に入れてあり。とり渡すに、匂ひたるが、えならず、奉り給ふ。朱雀今一つあり

と仰せらるれば、ともかくもえ啓せず。

内侍のかみ、如何にすべきにか、と思ひ煩ひ給ふほどに、嵯峨院、近くおはしまし

て、嵯峨大將の朝臣にもものせし事ども、傳へ聞き給ひけむや。昔の人の、勘事、罪

にあたるを、今は残なくなりたる身なるを、此の身にゆるし給はど、嬉しくな

むなど宣ふさま、らうくじく愛敬づかせ給へり。俊隆女「いと畏きこと」と啓

し給へば、嵯峨さらば、かのりうかくよりしてなん風、はし風などいふなむ。かん

なりにて、大將中納言のひきし琴の聲なむあまたある心地せしを、空の雲の騒が

しくらうがはしき事ありとて、彈きさして、残その世に彈き給はずなむ。いと聞か

(八)

〔語釋〕  
(二)とく一解く 疾く

(三)いかでかはと怪しくなるべし

(五)俊隆女の心

〔考異〕  
(一)翻きたる一聞えたる

(四)申しきこえ

まほしき。又はし風などは、仄(一)に聞きて、ことのさまに聴きたる人なし。もしそれによあらむ、と思ひあてに傳へ聞く様なむありし。それ、今宵聴かせ給はど、此の世にも、世々にも盡きず嬉しくなむ。これをきかせ給はで、後の永き世に、人にきかせ給はど、世中に恨となむすべき。

いまは身のかぎりと思ふすゑの世にもとの恨をとくもきかなむ

内侍のかみ、源中納言聞き給ひて、かく啓し給はむことのいかでかは、怪しく思ひ給ふ。御返し、

俊隆女「二葉にておもほえぬかな結び松うちとけてこそ人はひくらめ

なむ風は、數多しらべありとも思ほえ侍らぬ」となむ申し給ふ。朱雀院は、氣近くなつかしくて、萬の理なることを宣はせ、嵯峨院は、御年高く、かたじけなくおはしまして、古をかけて逃れがたく宣ふ。如何すべからむ、と思ひわづらひ給ふ。故治部卿は、ほそを、はしふ、二つの琴を立てて宣ひしやう、世中今は

(考異)

(一)幸を極めむ時また世に幸きはめ次に世に

(二)まさらへむまさらへむ

(三)宣ひしかば空洞の獸の宣ひおきしをまほかみ獸の

(四)給へしに給へしを

(五)然るべきさまべき

(六)給はぬ大將の御様も給はず大將の御様を見給ひ

(七)こまばくこくばく

(八)サメてナシ

かぎりの幸を極めむ時、また世にいふかひなくなりさそらへむ時にを」と宣ひしかば、<sup>(一)</sup>空洞の獸の中にして、ほそを風の聲のものの限は弾き給へしに、人々聞きつけて物せられしかば、<sup>(二)</sup>弾きさしてき、<sup>(三)</sup>今然るべき年の程にも<sup>(四)</sup>のし給はぬ大將の御様も、内侍のかみになさせ給ひし御心ばへも、<sup>(五)</sup>限なく、昔の人の宣ひしありさまを思ひ出で給ふに、今日のありさま、位を去り給へど、<sup>(六)</sup>二所の帝、これを聞かせ給ひにおはしましたり、式部卿の宮はじめて、こまばくの、時にあひ盛とおはします、内裏、東宮の上達部、つどひ給へり、<sup>(七)</sup>后ときこゆる中に、勝れ給へる太皇太后宮、女王、左の大殿の北の方をはじめて五所、女御は式部卿の宮の御女を加へて三人おはす。たど人は、公、私のやんごとなく重きものに思はれたる太政大臣、上達部のかぎり十五人、三位、左右大辨頭、藏人、すべて殿上人おほくあるかぎり残るなし、聞き知り給ふも、さらぬも数々はかりなき中に、<sup>(八)</sup>さてもほそを風は、少しもなくとも、その曲の物の、果の音を弾かむことはいと易し。はし風

(語釋)  
(一)「院の一の宮の御腹」の犬宮の御祖母となり大臣の北の方となりどもしなどあるべき歎ふは「一本むち」

●俊隆女りうかく風を弾く、琴壁内裏に聞ゆ。今上、少將信方をして琴の聲を尋ねしむ。

(考異)

(一)觸れむ一觸れなむ

(二)觸れむ一觸れ「風」ナ

(三)りうかく風「風」ナ

(四)音を一音をば

(五)いろくの一いろ

に手觸れむこと、音のこと思ひ出づるに、心くだけて悲し、七日の夜は柵機に奉るべきには、犬宮に聴き知らせ奉らむと、それもたど忍びてかき鳴らしとなり、かく、帝と申せど、世に心ことに思はれ給へる院の一の宮、犬宮の御おほぢとなり、大臣の北の方と思へども、なほ心ゆき極まることとも思ほえず、二所の帝かしくくとも、はし風はしばし、と思ひみだれ給ふ。

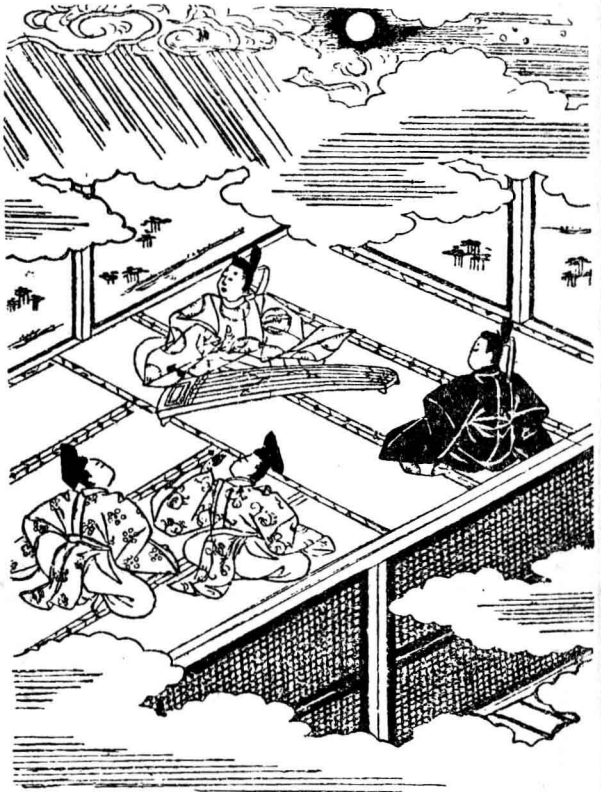
十五夜の月の、明かに限なく、靜に澄みておもしろし。「心もとなし」とあまた度嘆き宜はすれば、まづ習ひはじめのりうかく風を、秋の調に弾きならし給ふ。音高く、清涼殿にて弾き給ひしには勝れて、世になくおもしろく、明かなり。萬の樂、笛の音をはやし、諸のおもしろき聲を整へたり。二所の上、宮たち、御方方、りうかくの聲をほのかに聞きしもありしかど、「まだ斯うはあらざりき」と驚き給ふ。耳に入り、心にしみて面白き事、かよる事あらむやと勝れて聞ゆ。次にほそをを、曲の調にて一つ弾き給ふに、いろくの散しばく降り、雲忽に出

(考異)  
 (一)殿上人—殿上の人

(二)給へば異の—給へば  
 東興の

で來、星さわぎ、空のけしき恐ろしけにはあらで、珍らかなる雲立ちわたる。廂に居給へる人々、狭くて、人氣に熱かはしくおほえ給へる、忽に涼しく心地たのもしく命延び、世中めでたからむ榮をあつめて見聞かむやうなり。同じ調ながら、はるかに澄みのほりたる聲、心細く哀にて、上は空をひどかし、下は地の底をゆるがす。四方の山、林に聞きわかれて、悲しう哀なること、世の中は常なきことも、忽に思ほえて、涙落つること留めがたく哀なり。帝よりはじめ奉り、そこばくの上下、聞き給ふに涙落さぬなし。

此の琴の音聞ゆること、響風に隨ひて、近くは内裏に、夜さりの威儀のおものに就かせ給はむとする程に、心ほそ悲しう、哀なる物の音、風につけて聞ゆるを、驚きあやしがらせ給ひて、今上殿上人、此の物の音は聞くや。何處にかあらむ。いと怪し」と仰せ給ふ。「然侍る。いとあやし」と申す。強ひて聞かせ給へば、異の方より聞ゆ。藏人の少將、「面白くとも、京極の大將の家の琴の聲、内裏まで聞え



(考異)  
(一) 草一葉

(二) 草ゆ一草

(三) 聞ゆば一聞くは

●備方変を想ねて京極に到る。

むやは。あやし」と男女方聞きて、哀がり涙落さぬなし。上も、いと悲しくおはします御心にて、今上なほ、これいと怪し。藏人所 瀧口の男ども、少將信方、寮に早からむ馬はや召しに遣はして、これが聲する方をさして参りて、目に見えずとも、その程と申せ」とおはせ給ふ。帝 限なく哀におほされて、かつは物の變化にやとまでおほして、涙落させ給ふこと限なし。高きもさらぬも、さふらひ給ふ御乳母、内侍、命婦、藏人、下のしなもの、泣くく哀がり、あやしと思ふ。上は、端に出でさせ給ひて、ながめさせ給ふ。人々もさふらふ。空のけしきも例に似ず、哀なる聲の聞ゆること、萬のこと深く思ふ心みな忘れて、たどひとへに物悲しう、世の哀なる事のみ思ほゆ。

少將 樂の聲聞ゆる方に、馬を早め打ちてゆけば、京極なり。道は二三町をかぎり(二)に、人隙もなく立ち居たり。御門はいとど足踏むべき隙もなし。人の中を、わりなくて分けて行く。近くて聞けば、まして三つ四つ聲を合せて、さまざま哀なり。(三)



(考異)  
(一)何ぞ一なぞ一なんぞ

(二)奏せよ一申せよ

いふかひなけなる姿したるものも、哀がり面白がり居たり。辛うじて参りて御階の下にて啓せむと思ふに、樂の聲、琴の響に聞きつけ給ふべくもあらず。強ひて、聲のかぎりをくだして、「藏人少將藤原信方、内裏よりさふらふ」と申す。内侍のかみ、疾く聞きつけ給ひて、琴を弾きやみ給ふ。上たち、聞きつけさせ給ひて、「何ぞ」と問はせ給ふ。信方「しかるく聞き侍りつるを、上聞召しつけて、「此の聲の聞えむ所を尋て奏せよ」となむ仰せられつる。こなたに聞え侍りつれば」と啓す。御洩どもかませ給ひて、「いよく珍らかなりける事かな」と人々驚き給はぬなし。朱雀「内裏におほつかなく思さるらむ。疾く参りて奏せよ。昔ほのかに聞き侍りしに、飽かずおほえ侍りしを、然りぬべき折になど聞きて、ものして侍るを、耳近く哀に聞き侍りしが、内裏まで聞召しけるかな」と仰せらる。院の御前よりはじめ奉りて例の儀式にこと加へて、みな御酒など皮々まるれり。しばし有りて、嵯峨院さらに、嵯峨今宵なむ、露心地に思ふことなく覺ゆる。

(語釋)

(一) 限あるべし

(五) 嵯峨院が

(考異)

(二) これを一かれを

(三) 聲に合せて此の童べ  
四人舞ひて侍らば一ナシ

(四) 侍らば一侍らむは一  
侍らむ

昔、内裏にて折節の節會、花の宴の折には、面白くかしこき文を興じ、よろづ思ふ事なくて、身をまかせて、年月を過し、をりくの面白かるべき遊をし、琴弾かせしに、朝臣の世よりなむ、有りがたく勝れては覺えし。此の琴の聲になむ、世に心もなく物覺えつるに、今宵なむ、天の樂も斯くやあらむ、と覺ゆる」と宣ふに、源中納言「涼ほそを風は、犬宮の産屋に、大將のたどいさよかかき鳴らし侍りしは、たど面白くなむ侍りし。今宵聞き侍るには、いづれなれど、調ことにかはりて、又なくさまぐに哀に侍りけり。まして、七日の夜の琴は、いみじくこそは侍りしか。これをいさよかかき鳴らし給へらむ聲に合せて、此の童べ四人舞ひて侍らば、いかに面白くになく侍らむ」と啓し給へば、これに勝りて、けに如何ならむ、と思ほす。(五) 一院、哀なる事を心深くおもほす御心に、ましてまだ聞かせ給はぬ様の、いと珍らかに悲しう思さるよに、世々を經とも忘れがたき人かなと、愈あさましき御心添ひて、朱雀「さて、かのはし風をなほかき鳴らし給へ」

(語釋)

(一)俊隆女が

(二)「何とか」は「何とも」歟

(四)はし風の琴を仲忠が

(五)「ことを」の「を」衍文なるべし

(考異)

(三)なるに一なれば

(六)どもにも似ずしも」ナレ

と宣のたまはす。

夜半よなかばかりになりゆく。切せちに、とかく啓けいして逃のがれ給たまふを、責せめて肯きき給たまはず。

朱雀すざく「何かは、せぬわざくの事ことのあらむかし」とていと近ちかくゐざり寄よらせ給たまふに、

いとどむくつけく、世よを何なにとか、今いまはまして思おもすまじき御心ごこころなるに、思おもひ煩わづらひて、

俊隆女しゅんりゆうのむすめ「いと怪あやしく、さらに珍めづらかなる様さまの侍はべらぬを、あいなう侍はべるに、左ひだりのおとど、

春日詣かすがまぎなどに、みな聞きなしたるなむ侍はべらむ。大将たいしやうに仰おほせごことを」と申し給たまへば、

いとよく打笑うちわらはせ給たまひて、朱雀すざく「疾ぞくこそ、かく教をしへ聞きえ給たまふべかりけれ」とて大

將しやうを近ちかく召めして、責せめさせ給たまへど、疾ぞみに立たたねば、「一院ひつゐんの御許ごゆるされなめり。早はや

う」と宣のたまはすれば、内侍ないしのかみ、扇あふぎをうち鳴ならし給たまへば、立たちて、樓ろうに昇のぼりて、

取りて参まゐりたり。嵯峨院さかのかみ、やがて取とらせ給たまひて御覽ごらんするに、琴きんの様さまも例れいに似にず、

清よくめでたう、美うつくしげなることを、昔ひかしより、同おなじ唐土たうこにわたりて、持もて上のぼりたり

し、彌行やゆきが琴きんどもにも似にず、治部卿ちぶきやうの數多あまたわたしたるにも似にず。御手ごてすさびに、

(語釋)

(一) あめれと上たちも」  
歟

(三) 女が髪に垂れたる髪を耳にはさむこと、常ははたらかんずるときの仕度

(四) 晋の王質が石室山に入り仙人の圍碁を見て斧の柄の朽るを知らざりし故事

(考異)

(二) こゝろ くゝこくばく

(五) 仙人一人

(六) 嗚りナレ

緒を一筋鳴らさせ給ふに、ひときいと珍らかなり。怪しとて、次の緒をかき鳴らさせ給ふに、露ばかりの音もせず、聲もなし。いと恐ろしき物にこそあめれ。上たちも怪しがり給ひて、几帳の内へさし入れさせ給ひつ。

内侍のかみ、賜はりて、引きよせ給ふに、まづ涙落ちて、昔宣ひしこと思ひ出で給ふことどもあり。強ひて涙を念じ、心をしづめて弾かむとし給ふ。こよばくの御子たち、上達部見て、これを如何ならむと、心を惑はして思ほえ給ふ。御方方、あるは耳はさみをし給ひて、晝のやうなる御殿油を、おしはりて、端近く居給ふ。内裏の御使も、山中に入りて多くの年を過しけむ例のやうに覺えて、歸り参るべき心地もせて居たり。此の琴は、かの作り出で給へりし琴の中の、勝れたる一のひときにて山中の仙人の勝れたりし手は、樂の師の心とよのへて、深き遺言せし琴なり。唯、はじめの下れる師の教へたる調一つを、まづかき鳴らし給へるに、ありつるよりも聲のひとき高くまさりて雷いと騒がしく鳴りひらめきて、

(六)

(考異)  
く(一)兩より一兩のごと

地震のやうに土うごく。いとうたておどろくしかりければ、たゞ緒一條をしのびやかに彈き給ふに、俄に池の水たよえて、遣水より、ふかさ二寸ばかり水流れ出でぬ。人々あやしみ驚きぬ。一條はおもしろく、二條は悲しく、哀なる事はじめよりは勝れたり。此の音を聞くに、愚なるものは忽に心さとく明かなり、怒り腹立ちたらむものは、心和かにしづまり、荒く烈しからむ風も靜になり、病にしづみいたく苦しからむものも、忽に病おこたり 動き難からむものも、これを聞きて驚かざらむや、とおほゆ。いみじき岩、木、鬼の心なりとも、聞きては涙 落さざらんや、と聞ゆ。源中納言、いといみじく、萬のこと覺えず、心にしみて悲しくおほえ給ふ。一院の上は、御目より、涙 雨よりもしゆく落させ給ふを見奉り給ふに、ゆに如何にきこしめすらむ、と悲しくおほえ給ふ人々、多く、見まはし給へば、一人として、も、疎に思ひ、泣き給はぬなし。大將は、いまだ此年頃聞き給はぬに、親ともおほえ給はず氣恐ろしきまで、悲しうおほえ給ふ。

四人の童べ、細くやはらかなる聲の面白きを出だして、秋の野の蟲の鳴かむよりも哀なることをいふを、同じ聲に合せて舞ふに、愈哀がらせ給ひて、御扇して拍子うたせ給ふ。朱雀院の、

(語釋)  
(三) 頤あるよし

おもしろく哀にためしなき事をきよて苦しくはなにのなにせむ  
といとめでたくをかしき御聲に合せて誦せさせ給へば、嵯峨院、

哀なることのしるしの見えざらば何をか後のかたみにはせむ

(考異)  
(二) 面白きを「を」ナシ

と聞えさせ給へば、人々めで聞ゆ。朱雀「今しばし」と宣はすれば、俊隆女「日頃みだり心地の惱ましく侍るけにや」とて彈きさし給ひつ。朱雀院、なか／＼此度は、  
いよく飽かずおほえさせ給ひて、内侍のかみに、斯く、

(二) いよを「を」ナシ

朱雀琴の音のあかざりしより白雲のおりるて今日ぞうれしかりける

御返事、

俊隆女塵つもる山もなにせむ雲かよることのほかなる宿をうれしむ

●倭隆女、犬宮をしてり  
うかく風を弾かしむ。妙  
なる音。人々の驚嘆。

〔語釋〕

(一)朱雀が

(二)倭隆女の心

(三)調子の變るは何故ぞ

〔考異〕

(一)とはしは「ナ」

(四)りうかく風「風」ナ

とは、身にこそ思ふ給ふれ」と聞え給ふ様のいとめでたければ、いかで萬に斯かりけむとおもほす。

(二)

犬宮に、りうかく風を、かよる大方の聲に合せて、弾かせ奉りて、試みむと思して、弾かせ奉り給ふ。院の上、朱雀かはるなるは」と宣はすれば、倭隆女「りうかく風を、曉の調にもものし侍る」とて我弾き給ふやうにて、弾かせ奉り給ふ。曉になりけるに、いとみじく面白く、樂の聲、鼓の聲を、しばし整へさせ給ひて、みな一度におし入るとやうに消ちて、たゞ琴の聲のかぎり、上にのほりて、澄み響くこと、大將の御手よりはまさりたり。大將のみぞ、人知れずあやしと思ひ給ふ。源中納言の、遠怪しく、りうかくの聲は、曉なれど少しこそかはれ。此の斯うさまの音は、大將は同じやうにはえ傳へ給はざりけることかな」と宣ふを、近き程なれば、一院の上、朱雀「けにまだ聞かざりつ。萬の樂の聲みな消ち、琴の聲のかぎり、聲々におもしろう哀なるは、さる調をはなれてありける

(附釋)  
(一) 異なるべし

(二) 樂人等の申す也

(五) 犬宮が彈くなりとは知  
らせんとて

(考異)

(三) 面白うてしてしナレ

(四) わきてしめて

(大) いとナレ

(七) 見給ふー見給はする

(八) 給ふを念じさせ給ひ  
てし給ふ念じて

には、かの樂がくにぞ。いま少し、樂がくの聲こゑ高く、仕つかうまつれ。あやしく樂がくの音ねのたれ  
てあるかな」とて遣つかはす。「樂がくの音ね、例れいかぎりあれば、曉あかつきに合あせて仕つかうまつる」  
(二) と申まうす。なほ琴ことの聲こゑはさまざまの響ひびあまたに別わかれて、面おも白しろうて、樂がくの聲こゑはしづみ  
(三) て細ほそう聞きゆ。ほのくくと明あけゆくに、風かぜの音ねはせて、空そらすこし霧きりりわたりすみた  
り。折せりの面おも白しろきに、琴きんの聲こゑわきて哀あはれなり。内ない侍しのかみ、一いん院んにかくと聞きかせ奉たてま  
(四) らむ、とて、俊俊隆隆女女いとようも彈つかせ給たまふかな」と聞きえ給たまふに、おどろかせ給たまひて、  
几帳きちょうのかたびらふと引ひき揚あげて、御ご覽らんすれば、内ない侍しのかみの彈ひき給たまふにはあらで、  
燈影とうかげのあかきに、犬宮いぬみやのいと白しろう美うつくしけにて、彈つき居ゐ給たまへるなりけり。早はや斯かくな  
(六) りにけりと見み給たまふに、いといみじくかなしく覺おぼえさせ給たまふに、涙なみだこほれさせ給たまふ  
(七) を念ねんじさせ給たまひて、朱雀すゑ「これは、此この兒この彈ひくくなりけり」と宣のたまはするに、「如何いかに  
如何いかに」と人々ひとびと驚おどろきて、哀あはれに、「物もののついではいみじかりけるものかな」と聞ききさわ  
ぎ給たまふに、けに理ことわりと聞きえたり。「たどの人ひとは、一しやう生うを添そひ居ゐて習なふとも、更さらにえ



(一)しちがーかしち

かくは侍らじ。これは、然るべくて彈き給ふなりけり」と聞ゆ。右の大殿此の中  
にすぐれて嬉しうおほえ給ふこと限なくて、兼雅喜にも、涙とどめられず侍り  
ける」と啓し給ふをば、女御の君、一の宮の御心いと哀にうれしくおほえ給ふ。  
嵯峨院、「老は厭ふまじかりけり。いみじう聞かまほしと思ひし、昔の手をひき、  
末の世にかく有りがたき事の留まりぬること」と興じ給ひて、いとになく上手に  
吹かせ給ふ高麗笛を、これに合せて吹かせ給ふに、さらに兒の彈き給ふやうなら  
ず、手のなりにけることと、いみじく哀なるにえ堪へずと宣はせて、立ちて舞は  
せ給ひつよ、

嵯峨ひめ小松ひきつることに忍びあへず白きしらがの新羅舞せむ  
(二)  
と宣はするに、右のおとど、

兼雅雲の上のしたにかよふ末の世にひきとどめつることの嬉しさ  
式部卿宮、

(語釋)

(五) 俊隆の體

(六) 俊隆女

(考異)

(一) 水もー水の

(二) 書かぬなりーかぬ  
さは本のまゝなり

(三) いらへーいざや

●嵯峨院の奏請によりて  
俊隆に中納言を贈られ俊  
隆女正二位に叙せらる。  
朱雀院の奏請によりてま  
がの孫四人衛門尉にな  
る。

(四) 珍ちかなるー珍ちし  
かな

この世にはあらぬこととぞ思ほゆる空にはひととき水もながれて

右大將

仲忠ことの音の昔にすめる 曉は水もながれて悲しかりけり

となむ。人々ありけれど書かぬなり。源中納言は、大將に、(二)「遼何事をか思ひ給ふ」

と聞え給へば、藤壺の御局を見やりて、仲忠いかになほ物をば思はぬぞ。心憂の

御心や」と宣へば、(三)「いらへ、(二)遼などかは。如何聞きなさむ」とて笑ひ給ひぬ。

朱雀院今宵の内侍のかみの祿に、いかなる事をせむ。犬宮に、いと上手に、同じ

ごとと弾き給ふにつけても、いかで珍ちかなることをせむ、とおほす。萬兩の黄金

も悪くおほして、嵯峨院に、朱雀世を去り侍りて、今宵の祿をこそ、え心のまよに

侍るまじけれ」と申し給へば、嵯峨けに、如何はあるべからむ。ことには、世を

さりて久しくなりにたり。大將を、人より越して、大臣になして、ことにて大饗

せさせたらむ。昔の靈も、少しうれしと見るべきを、かの正身には、正二位の加

(五)

(六)

〔語釋〕

(一) 我その由を今上に申上げん

(四) 誤あちんか

〔考異〕  
(二) それがしーナレ

(三) はじめてーゆして

(五) 左右大臣左大將―左大臣左大將―右大臣右大將

(六) 給へる―給ひつる

階をものして、珍らかなることをとどめ置かむなむ、かの身に榮あるべき。ことに聞えむ」

内大臣に右大將藤原の朝臣それがし、内侍のかみ正二位に加階し給ふべし。中宮、東宮、大臣家の大變に準へて、内侍のかみの家に大變ゆるされむ。數のまよに女大變あるべし。その宣旨をはじめて、嵯峨院も奏しくだす。かの日の設の物は、院よりおくるべし。次々の太政大臣、同じく傳へて用意せらるべし。朱雀院の女一の宮を、男に準へて、四品の位賜ふべし。この由をおほせ給ふべし。

とかよせ給ひて、左右大臣左大將のをばかよせ給はで、つかさ位をこれに書きつけて、近う召して賜ふに、二三人は書き出でて奉り給ふ。右大將、その御氣色を賜はりて、仲忠仰せごとは、限なくかしこけれど、さらに此の度の大臣の宣旨は、承らじ。強ひて御願みさふらはど、忝く御幸せしめ給へる、畏まらむ

爲ために、ところにかうぶりを賜たまはらむ」と度々啓けいし給たまへば、朱雀院すざくゑんは、嵯峨院さがゑんへ、朱雀けい「啓けいせらるよまよにも」と聞きえ給たまへば、唯御消息ただせうじにて、左大辨さだいべん召めして、嵯峨院さがゑん内裏うちに奏そうせさせ給たまふ。

〔語釋〕

(一)「ところ」は此京極の舊邸をちよ弊

〔考異〕  
(二)ことには思うーことに思ひ

嵯峨さしか年高としたかくなり侍はべりて、心地こころちのほれぐしうなり侍はべるに、此この内侍ないしのかみの家いへ、昔むかし見給たまへしゆかしさにまうで來きて、琴きんひかせて聞きき侍はべるに、珍めづらかなる事ことどもなむ。故治部卿こぢぶきやうの朝臣あそん、おほやけ人びととして侍はべりしあとだに、身みを公おほやけにしたがへて、唐土たうどの使つかひにまうで、あたの風かぜにあひて、多おほくの年月としつきを經へて、父ちち母ははの顔かほも相見あひみずして、悲かなしき目めを見て、たまぐ歸かへり侍はべりて後のち、同おなじきやうに、いくばくも侍はべらぬ程ほどになくなり侍はべりにき。内侍ないしのかみ、男をとこならましかば、一度たひに大臣だいじんにもなさまほしくなむ。今宵こんよひのことには思おもう給たまふる。これ、いといと易やすきことに侍はべるを、唯今宣旨ただいませんじくだし給たまへ。

と奏そうせさせ給たまふ。嵯峨さしか「そのかうぶりには、右大將うだいしやうの朝臣あそん大臣だいじんに、と思おもう給たまふれ

(一)まがのの裏  
(語釋)

(二)右大辨惠重が

(三)仲忠が大匠を辭した  
る由を

ど、度々逃れ申せばなむ。故治部卿の朝臣、三位になむ侍りし。贈位の中納言にな  
させ給へ」と奏せしめ給ふ。一院は、朱雀「嵯峨院の御幸侍るに、對面賜はらむと  
てなむものし侍る。勞らむと思ひ給ふる童四人、左右の衛門尉に缺侍らむに、こ  
れ同じうはなさまほしくなむ」と奏せさせ給ふ。事(一)のよしを奏す。委しく問はせ  
給ひ、聞召して、今上(二)けにいと珍らかなりける人の琴の聲なり。輕々しからずば  
參りても聞くべかりけるをとなむ覺えし」と宣ひて、嵯峨院の御返、  
今上畏まりて承りぬ。けに、難く例なきことに侍りとも、仰せられむことは、  
いかで。ましていと易きことどもに侍り。

右大將のことを聞かせ給ひて、今上(三)なほ用意ある人なりや」と宣はせて、治部卿  
を中納言になさせ給ひ、京極にかうぶり給ふ。内侍のかみのことも、奏し給ふま  
まなり。朱雀院の御返、

今上かねて仰せられ、氣色承らましかば、自らも參り侍るべかりけるものを。

衛門のつかさどもは、行末の缺も心もとなく侍り。今も、唯仰せられむになむ。

(語釋)  
 (二)大將になきを」なるべし

(考異)  
 (一)この事—二の事

(三)給ひつる—給へる

と奏せさせ給ふ。左大辨立ち歸り参りて啓すれば、宣旨の疾く下りたるを、院の上たちもよろこばせ給ひて、上達部の中に告げさせ給ひて、宣旨高く讀むを、内侍のかみ聞き給ふに、治部卿の所に、涙おち悲しくて、身の内侍のかみになり給ひしよりも嬉しくおほえ給ふこと限なし。右大將、この事の喜のよし奏せさせて、舞踏し給ふ。嵯峨院は、たちまちに、思す様に花やかなることの、大將のなきを、なほ飽かず思さる。御方々より、童への舞ひつるに、かづけさせ給ふ物、いろく濃く薄くさまゆくなる織物、かいねりのめでたく擣ちたる、朝ほらけに、いとくをかし。御方々、「世にまた類なく物し給ひける人かな」と宣はぬなし。犬宮の彈き給ひつるさまを、親宮の、かの五十日の餅まわりし程の、昨日今日とおほすに、いと哀なり。藤壺これをわが御子と思はましかばと思す。

●兩院以下樓御覽、嵯峨院の懷舊、

院の上二所、左右大臣、宮たち、上達部おほん供にて樓御覽じにのほらせ給ふ。嵯峨院は、西の對よりおはします。上の御子たち、上達部左右別けて、御後に歩みつどきたり。樓の芳しき匂、かぎりなし。御方々御覽じまはすに、をかしくなまめかしく、見所ある、樓の中のありさま、御覽じて、「いみじくをかしく、めでたくもしたるかな」と仰せらる。まして嵯峨院は、らうくじく、花やかにめでさせ給ひて、嵯峨院の音を聞くと、こよの有様を見るとこそ、天女の花園もかくやあらむと覺ゆれ」と宣ふ。朱雀院、こまかに御覽するに、飽かずめでたければ、朱雀院に、こよに、容貌よろしからざらむ人の、居るべき所の様にはあらざりけり」と宣はす。やんごとなき限、隙もなく、樓のめぐりの勾欄にさふらひ給ふ。山の高きより落つる瀧の、傘の柄さしたるやうにて、岩の上に落ちかよりて沸きかへる下に、をかしけなる五葉の小松、紅葉の木、薄ども、濡れたるに隨ひて動く、いとおもしろきを御覽じて、朱雀院、

(考異)  
(一)上の——院のうへの  
(二)下に——しり

(語釋)  
(二)「わかねば」歎

(考異)  
(二)「櫻」櫻

(三)「枝を見るかな」枝見  
つるかな

(四)「なるあはれ昔を」な  
りむかしを

(五)「奏し給ふ七八尺」申  
し給ふ七八本「奏し給ふ  
七八木

すむ人も宿もわかねばまるとりして世をつくすべき心地こそすれ

右のおとどに、朱雀(二)「羨ましの家のあるじや」と宣へば、いと疾く、

兼雅「やよもせば枝さしまさる木の下にたどやどり木と思ふばかりを

今日よりは、ましていと畏くこそ」と啓し給ふ。心ばへ、哀なりと聞かせ給ふ。

嵯峨院、樓のかみにさし上りて、いといかめしき森のやうにて、櫻の木あり、

嵯峨「あはれ、此の木見るこそいと恐ろしけれ。昔十餘歳にて、春ごとに來つゝ、書

見るとて、見困じ一 下りつゝ遊びし。いで、この樓(三)なくば、及びなむや」とて、

嵯峨「春きては我が袖かけしさくら花いまは木高き枝(三)を見るかな

近うさふらひ給ふ源中納言、

涼かねてより雲かよりけるさくら花うべこそ末の木高かりけれ

宮内卿、年七十なる、忠保「あはれ昔を思ひ出で侍れば、あの岩のものと(四)松の木は、

かの山に侍りしを、子日におはしまして引き植ゑ侍りしぞかし」と奏し給ふ。七(四)





八尺ばかりして、上に平みたる松を見やりて、宮内卿兼躬、

ひき植ゑし子の日の松も老いにけり千世のするにもあひ見つるかな

此の歌を、嵯峨院、いみじう哀がり給ひて、一院に、嵯峨「この返には、民部卿を

あまたの人望み申すなるを、この朝臣を、必ずなさせ給へ」と奏せさせ給ひつ。

朱雀「これのみこそ、古人の留まりたるはあれ。いと哀なり」と申し給ふ。嵯峨「い

みじうおもしろき所なりや。時々物して、然るべからむ折に、左大辨に文作らせ

て、聞かむ」など宣はすれば人々、「けにをかしう侍らむ」と啓す。

歸らせ給ひなむとす。朱雀院、大宮の御方に御對面せさせ給ふ。内侍のかみ、大

將、仲忠、いと忝き御幸を、いかど仕うまつるべからむ。唐土の集の中に、小册

子に、所々畫かき給ひて、歌よみて、三卷ありしを、一卷を朱雀院に奉らむ。

嵯峨院には如何」と宣へば、役隆女「高麗笛を好ませ給ふめるに、唐土の帝の御返賜

ひけるに賜はせたる、高麗笛を奉らむ。上達部は、例の作法の御装あり。若

(語釋)  
(三)「右大辨に」なるべし  
左大辨は季英

(四)「内侍のかみに大將」  
なるべし

(五)「役隆渡唐中の作を」  
つめたるもの

仲忠、兩院以下に贈物  
を奉る。環幸。

(考異)  
(一)朝臣を一朝臣をば

(二)奏せさせし申させ

〔語釋〕

(一)金にて口のへり取りたる

(二)今夜の返禮には

〔考異〕

(三)給へり給へりといふ

(四)宣はす一宣ふ

くおはします宮たちには、なべての様にはあらず、いかでをかしき様ならむ物こそよからめ」と聞え給へば、仲思然用意して侍り」とて、皆さまふくしまるらせ給ふ。からの色紙の畫は、一卷といへども、四十枚ばかりなり。柴檀の箱の黄金の口置きたるに入れたり。御覽じて、朱雀「こよにこそ、今宵の物には、不死薬にてもがな、と思へ。さても、これはいと見まほしく思ふものかな」と宣はす。嵯峨院の御笛の袋は、色よりはじめて、いと清らにうるはしき錦の袋にて、璃瑠の細き函に入れたる、透きて見えたり。人々興じ給ふ。上も好ませ給ふ物にて、いと御氣色よし。式部卿の宮三所の大員には、女のよそひ、衣篋に入れたり。さての外は、例のことなり。御子たちには、銀の小鷹を作りて、黄金の透餽袋に入れて、皆ながら鈴つけて奉り給ふ。珍らかななまめかしうし給へり。嵯峨院、「飽かぬ物の音を、中々になむ覺ゆる。いま一度だに、いかで必ずとなむ思ふ。それは、來年の櫻の花の折をなむ、ものし給はむにや」と宣はす。朱雀院近う寄せ

〔考異〕  
 (一) 御返も「も」ナシ

(二) 大殿は「し」ナシ

給ひて、朱雀いと飽かずのみ思ひきこゆるを、いかでか又、かやうにては聞ゆべからむ。犬宮の、いと美しう物し給へる喜は、聞えむ方なきに、なほ限なき御志もこもりたる身をこそまかせ奉らむと思へ」と、まめやかなる事ども、有りがたうおほえ給ふ様なれば、あはれにまめくしう宜ふを、御いらへ 今めかしからず、心恥かしき程に聞え給ふ。右の大殿は、とくも出でさせ給ひなむと、心安からずおほえ給ふ。嵯峨院、内侍のかみには、蒔繪の小辛櫃一かけに、女によそひ、又、女の装束三十くだり、皆裳、唐衣具したり。女房の中につかはす。朱雀院、衣篋一よろひに、唐綾、織物の夏冬のさうぞく、又女房の中に、女の装束二十くだり、わらは四人、下仕四人、織物のかざみ、繚の上のはかま具したり。左右の樂人、みな二人の御方々より祿賜ふ。

事みな果てて、歸り給ひぬ。御方々、飽かすいみじかりつるものかな、常にかよる物の音を聞く、この人のかたち有様を、如何ならむとゆかしく、あかぬ心地し

(稱稱)

(一)親をも子をもし歎

(二)宣はぬなしとなむ  
宣はぬなし女大誓の有様  
季英の辨の女にきん教へ  
給ふことなども多くある  
べけれどさのみは頃はし  
うてさしあきぬ又事のつ  
いでに聞ゆべしとぞ  
宣はぬなし次の巻に女大誓  
の有様大法會のことはあ  
めりき季英の辨のむすめ  
にきん教へ給ふことなど  
優れり一つにては多かめ  
れば中よりわけたるなめ  
りと本にこそ待るめれ

給ひてかへり給ひぬ。大將の御心ばへもめづらかに、愈世になき様にて、親も子をももてなしかしづき給ふこととおほし宣はぬなしとなむ。

宇津保物語終